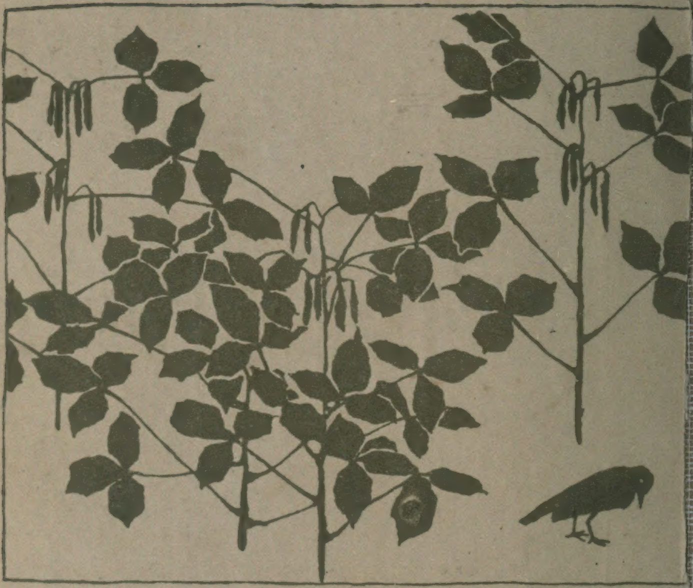
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03033 8651

PL
790
T3
1912
v.2



明治四十四年四月二十四日初版印刷發行
明治四十四年九月十五日再版印刷
明治四十四年九月十八日再版發行

太平記下卷

定價金八拾五錢

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　野村宗十郎

印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

大賣捌所　東京市神田區裏神保町一番地　三省堂書店

同　大阪市東區南本町四丁目　三宅莊藏書店

連りし（氏光） 五〇二ノ四
田樂の（落首） 一九三ノ三
兎に角に（落首） 四〇〇ノ一
取ばうし（公義） 二七九ノ一一
ながらへて（直義） 二一四ノ一一
無人の（落首） 一六八ノ一三
何程の（落首） 四七二ノ一一
難波潟（時賴） 四八二ノ一二
檜の葉の（落首） 五六五ノ一三
畠山（落首） 四七三ノ一
初春の（志賀寺の上人） 五四七ノ一三
人や勝つ（物狂）・ 六一〇ノ一
深き海（落首） 四〇〇ノ二
八雲立（素戔嗚尊） 一三三ノ一一
宮方の（落首） 四七三ノ三
吉野山（反古） 二六八ノ六
靈山の（婆羅門僧正） 一一三ノ一三
○脇屋左衞門佐義治
高德に迎へらる 一一四ノ七
信濃に落つ 一一五ノ一二
吉野の勅使、擧兵 三一九ノ九
小手差の敗 三二八ノ一四
鎌倉の勝 三三一ノ七
國府津山奥に籠る 三三八ノ一四
○脇屋義助
綸旨 一三ノ三
河合庄に打出、黑丸
落城 一四ノ八
敗北 四一ノ一二
吉野參向、恩賞 四二ノ三
四國下向 四九ノ八
病死 五二ノ一
○和田和泉守
皇居守護 一一ノ一〇
參內、奏上 四三五ノ三
赤坂城に籠る 四三九ノ一二
夜討 四五七ノ七
都攻め、引退 四六五ノ六
神崎の勝 五一四ノ一一
都攻め 五三二ノ一二
箕浦を攻む 五八三ノ一
湊川に押寄す 五八六ノ五
○和田五郎
都攻め 三一一ノ二
八幡の奮戰 三四一ノ九
病死 三四五ノ一四
○和田新兵衞高家—四條
畷の奮戰 二五〇ノ二
○和田新兵衞正朝—最後 一六〇ノ一二
○和田新發意源秀
瓜生野の奮戰 一四二ノ一
四條畷の奮戰 一五〇ノ二
最後 一六〇ノ三
○渡邊源吾綱—鬼切 三七七ノ四

太平記下卷索引 終

○臨邛の道士 五五八ノ七
○藺相如 一七四ノ八
○龍山和尚―尊氏葬儀 四〇七ノ七
○龍泉寺の戰 四五三―四五五
桔梗一揆―細川、赤松―日吉、
內海
○龍門山の戰
第一囘 四四一―四四三
義深―鹽谷―遊佐―寄手敗走―
鹽谷討死―禰津小次郎
第二囘 四四四―四四六
芳賀父子―四條隆俊―湯川庄司
變心―越智降伏―龍門落城
○梁武帝―達磨の答 一一二ノ一一
○呂洞賓
黃粱の夢 一三八ノ一
萬將軍 六二四ノ一〇
○呂馬童 二四九ノ九
○呂文煥 五八九ノ一

ル

○瑠璃太子 四九一ノ一一

レ

○連城の玉 一七五ノ七
○廉頗將軍 一七七ノ四

ロ

○老皇帝 五八七ノ七
○勞度差―舍利弗に服す 九五ノ二
○六角判官舍弟六郎左衞
門―戰死 一二七ノ七

ワ

○和歌、落首
梓弓(直冬) 二一二ノ七
いしかりし(落首) 七八ノ一二
同 四七二ノ一三
御敵の(落首) 四七二ノ一〇
思ふ事(物狂) 一二七ノ一二
折得ても(古歌) 四九ノ六
返すさへ(公義) 二三ノ七
返らじと(正行) 一四八ノ六
歸るべき(義詮) 四〇八ノ一
限あれば(反古) 二六八ノ七
香久山の(古歌) 一三一ノ一一
かぞいろは(古歌) 一三一ノ二
伽毗羅會に(行基) 一一三ノ一一
唐橋や(落首) 四〇〇ノ三
君が代の(飜案) 三一〇ノ二
釘附に(落首) 一九三ノ一
草も木も(牛の涎) 一〇〇ノ一二
極樂の(褒子) 五四八ノ一
開匂ふ(後光嚴御製) 六四五ノ一〇
さなきだに(新古今) 二四ノ一
五月雨に(賴政) 一八ノ三
高野山(公義) 二七九ノ一四
高野山(光嚴院) 六三二ノ六
直冬は(落首) 五六五ノ一一
馮かひ(後村上帝) 一六三ノ六
たらちれの(神歌) 三九九ノ五
誰待て(光嚴院) 六二九ノ一〇
つかへつゝ(眞基) 六四五ノ二

討の不成功―和田の死、楠の躊躇

ユ

○湯淺入道定佛―義助に馬具等獻上　五〇ノ一一
○湯淺本宮太郎左衛門―和田新發意を討つ、死　一六〇ノ四
○勇―仁義の勇者、血氣の勇者　二八七ノ三
○結城親朝―降伏　一ノ四
○結城中務大輔―義深を助く　五七四ノ六
○遊和軒朴翁―直冬への宣旨を難ず　三六五ノ一一
○湯川庄司
　降伏　三四六ノ七
　變心　四四五ノ九
　阿瀬川入道に破らる　四七二ノ三
○遊佐勘解由左衛門―龍門の敗　四四一ノ一〇
○遊佐入道性阿―遁亡、死　五七四ノ一二
○夢（變異、神佛、夢想の條を見よ）
○由良越前守光氏―黒丸を攻む　一四ノ四
○由良新左衛門入道信阿
　新田へ勅使　三二〇ノ一
　最後　四二五ノ一四
○由良兵庫助―最後　四二五ノ一四

ヨ

○楊貴妃　四八八ノ一二、五五〇ノ七
○楊國忠　五五二ノ二
○幼帝　五八七ノ七
○陽祿門院―崩御　三五三ノ六
○横川慈慧僧正―仲算と論議　九八ノ六
○吉江小四郎―師泰を討つ　二八四ノ五
○吉江中務―津山に討たる　三〇二ノ七
○吉田中納言宗房卿
　變異に驚かず　三〇九ノ六
　義長降伏の奏聞　五〇二ノ八
○吉野宮（大塔若宮）
　赤松則祐に大將と仰がる　二九一ノ九
　御經歷　四四八ノ八
　銀嵩の御謀叛　四四九ノ一二
○吉田肥前房嚴覺―神崎橋の敗走　五一五ノ二
○吉水法印宗信―建言　一〇ノ五
○賴尙（太宰少貳）―直冬を聟とす　二二二ノ二
○賴光―鬼切　二七七ノ二

リ

○陸賈　二四六ノ八
○梨軍支　四九四ノ二
○驪山の神陵　二三四ノ三
○李將軍　五七〇ノ七

賞與　二四ノ四
小清水の奮戰　二七〇ノ二
和睦說に異議　二七八ノ七
出家　二七九ノ七
宇都宮を勸む　三〇〇ノ二
那和庄の戰　三〇一ノ一二
○矢口渡—義與の最後及
怨靈　四二四ノ七
○夜光の玉　一七三ノ五
○耶輸陀羅女　五四六ノ六
○安田彈正—太刀を守木　一四三ノ一〇
○矢野下野守
降伏　三四六ノ七
戰死　四九九ノ一四
○矢野遠江守—光明寺に
出陣　二六五ノ四
○山口七郎左衞門—鼓崎
城の奮戰　二二三ノ一四
○山口新左衞門—最後　二八四ノ一四
○山口次郎—最後　二八四ノ一〇
○山城守宗村—最後　二八ノ一一
○日本武尊—御東征　一三三ノ一四
○山名伊豆守時氏
高貞追擊　二六ノ一一
杉の庄に著、布告　三二ノ六
朝忠を攻む　一一四ノ一〇
住吉の敗、負傷　一四〇ノ一一
都攻め　三五六ノ一
伯耆下向　三六四ノ一一
直冬を大將とす　三六五ノ三
神南の戰　三八〇ノ七
因幡美作の間に分勢　四七三ノ一三
出陣　五一〇ノ三
伯耆に歸る　五三六ノ一二
美作に出陣　五六二ノ一二
因幡へ引返す　五八六ノ一一
北朝に降る　五九九ノ二
○山名右衞門佐師氏
高貞追擊、奮戰　三〇ノ一〇
杉の庄に著、布告　三二ノ六
八幡の戰　三四三ノ一三
道譽の無禮、歸國　三五四ノ九
都攻め　三五七ノ三
伯耆下向　三六四ノ一一
神南の戰　三八〇ノ八
敗走　三八八ノ三
美作へ發向　五一〇ノ三
北朝に降る　五九九ノ二
○山名右衞門佐師義
遊軍　五一一ノ五
備前備中へ出陣　五六三ノ一
○山內判官
平石城を落す　四五六ノ一
仁木三郎を攻む　四九八ノ四
○山名三河守—戰死　一四二ノ一四
○山法師（比叡山、衆徒の
條を見よ）
○山本判官東四郎、西四
郎—義助に馬具獻上　五〇ノ一一
○八幡の戰　三三九—三四六
義詮—具忠、顯能—赤松律師—
和田、楠—惡五郎、和田の一騎
打—法性寺左兵衞督—神火—夜

吒祇尼天の法、直義
　歸依　一七九ノ二
直義に物語、讒奏　一八〇ノ一二
追電　二一一ノ二
○妙法院座主
道譽の暴行　三ノ二
綸旨　一三ノ五
○三吉一族
江河の奮進　二二三ノ九
夜討の勇士　二二四ノ四
○未來記—雲景　一九五ノ二
○三輪—都攻め　三一一ノ二

ム

○武藏五郎師夏
生立　一六七ノ一四
將軍攻めの擬勢　二〇八ノ一一
師泰を迎へ上洛　二六二ノ六
夢想　二七三ノ六
生擒、最後　二八五ノ一一
○武藏將監—生立、自殺　三六〇ノ一二

○夢窓國師
賴遠の依賴　七八ノ四
建言、天龍寺開基　八四ノ一一
直義に妙吉侍者進獻　一七九ノ三
○宗像大宮司
香椎出陣　五一二ノ八
宗像城に栖籠る　五七二ノ一〇
○村雲の僧　一九七ノ一一
○村田一族—戰死　一二五ノ一四

モ

○蒙恬　一八四ノ四
○目連尊者　四九二ノ一一
○桃井播磨守直常
高貞追擊　二六ノ一二
都攻め、入京　二五二ノ二
敗北　二五五ノ六
入京　二五九ノ一二
直義に都落を勸む　二九二ノ一
上野に向ふ　二九九ノ七
敗北　三〇二ノ五

義宗に參加　三四九ノ五
山名へ急使　二七三ノ七
上洛　三七四ノ六
京の戰　三九五ノ三
加賀出征、井口城へ
　退く　五六七ノ六
義將に亡ぼさる　六一七ノ三
○森小太郎—江河の先陣　二二三ノ五
○森次郎左衛門—戰死　五八一ノ一二

ヤ

○八尾城　四四〇ノ一
○家城源十郎師政—最後
　の酒盃　二七六ノ一
○野木備前次郎—戰死　五八〇ノ六
○八木光勝
上杉、畠山を預る　二一六ノ七
上杉、畠山を欺く　二一七ノ一
○藥師寺次郎左衛門公義
　（入道元可）
戀詠代詠　二三ノ二

藤井寺の敗　一二五ノ五
天王寺に出陣　一四〇ノ一二
西朱雀に敗北　三一一ノ五
上洛　三四一ノ三
八幡の戰　三四二ノ一
○本庄平太、平三―戰死　四四九ノ五
○堀口掃部助貞祐―秀綱
を討つ　三六二ノ一〇
○堀口兵衛大輔氏政
黒丸を攻む　一四ノ六
和泉を落つ　四七一ノ九
○堀次郎―京合戰の旗差　三九七ノ一〇

マ

○摩騰法師―奇特　九七ノ二
○摩羯魚　四九三ノ六
○摩竭陀國　四九二ノ三
○眞壁孫四郎―淸氏と鬪
ふ　五八一ノ二
○松浦黨（上松浦、下松
浦）飯守山の敗　五一二ノ九
○松王丸―菊池攻の大將　五七一ノ一〇
○松岡城―將軍以下の窮
態　二七四ノ六
○松田左近將監―小淸水
の戰　二七二ノ一二
○松田次郎左衛門―戰死　一五四ノ六
○松室貞松房仲算已講―
慈慧と論議　九八ノ六
○馬淵新左衛門―戰死　三八二ノ三
○萬將軍　六二一ノ六、六二四ノ一一

ミ

○三井寺―南禪寺と確執　六四八ノ二
○三浦介
新田に同心　三二〇ノ九
落つ　三二五ノ五
鎌倉の勝　三三二ノ三
○三浦八郎左衛門―師直
を討つ　二八三ノ一三
○三角入道―謀反　二二二ノ七
○道口七郎―陶山と戰ふ　二六三ノ一三
○道行き文―上杉、畠山
流罪　二一五ノ七
○三戸七郎
宇都宮の大將　三〇〇ノ三
自殺　三〇一ノ二
○湊城―畑時能の守備　一三〇ノ一二
○南次郎左衛門尉―戰死　一五四ノ四
○南瀨口六郎―最後　四二六ノ一
○南遠江守―鎌倉の敗　三三三ノ九
○峯僧正春雅―怨靈　一二一ノ六
○箕浦四郎左衛門―戰死　三八二ノ三
○箕浦次郎左衛門―敗北　五八三ノ一一
○壬生地藏―高遠を救ふ、
奇特　一一五ノ一三
○宮下野守兼信―上杉を
討つ　一六四ノ四
○宮下野次郎氏信―直冬
を攻む　五六五ノ六
○宮下野入道道山―直冬
の使者を追ふ　五六三ノ一三
○妙吉侍者

天皇守護　三四七ノ五
○坊城大納言經顯卿—山門訴狀の僉議　八九ノ八
○北條時政—鬼切　三七五ノ八
○北條泰時—善政　四七八ノ一二
○彭水の淵　二四二ノ五
○蓬萊島　一八二ノ一〇
○炮烙の刑　二九五ノ四
○星野行明—西郷を破る　四九七ノ一二
○細川阿波將監清氏（相摸守）
四條畷の敗　一五二ノ一一
都攻め　二五四ノ八
八幡の戦　三四二ノ一
洛川の奮闘　三五八ノ九
天皇を負ひ奉る　三六三ノ九
京の戦　三九一ノ九
龍泉寺の先駈　四五四ノ一〇
歸洛　四六二ノ七
仁木義長討伐の議　四六四ノ七
天王寺に籠る　四六五ノ一〇
佐々木道譽と不和　五一七ノ四
祈願　五二〇ノ七
都落ち　五二三ノ一〇
天王寺に落ち、南朝に降る　五二七ノ四
都攻の議　五三一ノ一
都攻　五三二ノ一一
任大將、阿波に下る　五三九ノ六
頼之に欺かる　五七七ノ四
奮戦、最後　五七九ノ一二
○細川右馬頭頼之（又頼旨に作る）
神南の戦　三八二ノ一三
備中の落城　五一一ノ一一
詭計清氏を亡ぼす　五七七ノ四
上洛、執事職を司る　六五一ノ一二
○細川掃部助
西尾城に向ふ　五七九ノ三
和泉へ落つ　五八二ノ一一
○細川刑部大輔頼春
鞆、尾の道の戦　五二ノ六
世田城を攻む　五七ノ二
上杉、畠山を預る　二一六ノ七
讃岐へ下る　二九一ノ六
最後　三一一ノ八
○細川左馬助頼和（又右馬助に作る）
都落ち　五一七ノ五
天王寺に落つ　五二七ノ五
都攻め　五三二ノ一二
西長尾城に向ふ　五七九ノ三
和泉に落つ　五八二ノ二
○細川式部大輔繁氏
神南の戦　三二八ノ一三
最後　四〇九ノ六
○細川大夫將監家氏—決死の覺悟　五二三ノ三
○細川八郎—戦死　三一一ノ七
○細川兵部少輔氏春
清氏の訓言　五二四ノ六
都攻め　五三三ノ一
○細川陸奥守顯氏

○無德和尙―尊氏葬儀　四〇七ノ八
○文成　一八二ノ八

へ

○平一揆―葛山と不和　五四八ノ七
○平田和尙―尊氏葬儀　四〇七ノ七
○變異、神佛、夢想
鬼形、天狗　七ノ一
白羽の矢　四一ノ三
正成の怨靈　六一ノ九
大般若の功德　七一ノ六
車輪の如き光物　七三ノ三
八幡寶殿の振動　七四ノ八
舍利弗と勞度差との奇特　九五ノ二
摩騰法師の奇特　九七ノ二
老翁　九八ノ九
水牛　九九ノ二
春日大明神　九九ノ一一
壬生地藏　二五ノ一三
斑犬の怪　一一九ノ五
仁和寺の不思議　一二〇ノ一二
海底の寶劍　一二七ノ一
靈夢　一三六ノ一
將軍塚鳴動　一八九ノ三
電光の戰　一九〇ノ一
天狗山伏　一九三ノ五
雲景の未來記　一九五ノ一
金鼠百萬　二六一ノ八
童の物狂　二六六ノ一〇
朝範の夢想　二六七ノ二
無文の白旗　二六七ノ一二
武藏、河津の夢想　二七三ノ六
天狗の勢汰　二九一ノ一
鴨の糺の神殿鳴動　二九七ノ一一
八幡の託宣　三九九ノ一
崇德院の怨靈　四〇九ノ八
義興の怨靈　四二七ノ一〇
住吉の楠倒る　四四六ノ七
神子物狂　四四七ノ三
住吉明神の託宣　四四七ノ一三
上北面の夢想　四六〇ノ九
大神宮の託宣　五〇四ノ一二
天變地異　五〇五ノ一一
巨大なる太鼓　五〇六ノ一一
天王寺の龍　五〇七ノ五
天王寺金堂建立奇特　五〇八ノ二
白髭の橋、竹生の石道　五六二ノ二
老皇帝の夢想　五八七ノ九
春日神木の變　六〇九ノ七
元寇時の神變　六二三ノ二
○逸見入道―笛吹峠の戰　三三六ノ一
○卞和―玉の由來　一七一ノ一

ホ

○伯耆太郎左衞門長生―
內侍所の御寶守護　三四八ノ二
○法勝寺―失火、緣起　六ノ六
○法性寺右衞門督康長―
神南の戰　三八〇ノ一二
○法性寺左兵衞督
八幡の戰、夜討　三四四ノ一

ヒ

○比叡山、衆徒
　道譽の暴擧を怒る、
　　嗷訴　三ノ八
　山門の訴訟を貢へる
　　人々　五ノ一〇
　僉議、訴狀　八六ノ八
　山門忠諫の沿革　九〇ノ八
　嗷訴　一〇三ノ一〇
　興福寺へ牒狀　一〇三ノ一四
　院宣　一〇六ノ五
　南都へ牒送　六四八ノ五
　南都の衆徒と戰ふ　六四九ノ四
○東池田―降伏　四九七ノ六
○匹田能登守―戰死　三六〇ノ五
○彦部七郎―最後　二八四ノ一一
○毗沙門の德　二六一ノ二
○費將軍　二四八ノ四
○肥前刑部大輔―菊池を
　遮る　四一一ノ七
○日野左中辨忠光朝臣―
　尊氏贈位の勅使　四〇七ノ一三
○日野左中辨時光―義詮
　へ將軍宣旨の勅使　四二一ノ八
○日野僧正賴意―北野通
　夜物語　四七四ノ七
○日野大納言資明卿
　山門訴狀の僉議　九〇ノ六
　寶劔進獻　一二九ノ三
○平石城
　守備　四三九ノ一四
　落城　四五六ノ二
○平野社―衆員の祈願　一三五ノ一一
○蛭子　一三〇ノ一三
○廣戸掃部助―降參　五一〇ノ五

フ

○武乙　二九三ノ一一
○吹屋清式部丞―將軍都
　落の伴　四六九ノ五
○不空三藏　二六一ノ五
○福間三郎
　奮戰　三八三ノ一三
　山名右衞門佐守護　三八八ノ九
○武家、公家
　公家の衰頽　二ノ四
　武士と公卿　七九ノ五
　公卿の衰頽　四〇二ノ一
　武士の驕奢　四〇四ノ七
○武淑妃　五五〇ノ三
○扶蘇　一八〇ノ一三
○藤井寺合戰
　正行―顯氏―村田の六騎―京軍
　敗北　一二五―一二六
○藤田小次郎―梶原忠を
　討つ　二七二ノ一
○藤原少納言有範―直義
　に建議　二九三ノ一〇
○佛敎
　各宗派、高僧の奇特　八九―一〇三
　毗沙門の德　二六一ノ二
　因果應報の話　四九一ノ六

直義へ使者 三〇四ノ二
○畠山尾張守義深
龍門の敗 四四一ノ六
伊豆に楯籠る 五二八ノ九
降伏 五七三ノ六
結城に助けらる 五七四ノ六
○畠山左京大夫清國―師泰に呼ばる 二〇四ノ一〇
○畠山式部大輔
遁亡 五七四ノ一
死 五七五ノ一四
○畠山大藏少輔直宗
高家を讒す 一七〇ノ一二
同 一八〇ノ七
師直誅討の計 二〇三ノ八
流罪 二一五ノ二
最後 二一八ノ八
○畠山治部大輔―菊池來攻 四一一ノ一
○畠山入道道誓
竹澤を語らふ 四一八ノ一三
義興の首實檢 四二六ノ五
怪夢 四二九ノ二
基氏に建議、上洛 四三三ノ二
南方出征 四三八ノ八
軍卒の狼藉 四四〇ノ一一
歸洛 四六二ノ七
仁木義長討伐の議 四六三ノ四
天王寺に籠る 四六五ノ九
關東下向 四七三ノ四
伊豆に楯籠る 五二八ノ九
勢振はず 五四九ノ三
降伏 五七三ノ四
遁亡 五七四ノ一
最後 五七五ノ九
○畠山民部少輔―三俣落城 四一一ノ一二
○畑六郎左衞門時能
湊城の防衞 一三ノ一三
黑丸を攻む 一四ノ一
生立、人物 三五ノ八
鷹巣城の防衞 三八ノ九
伊地山の奮戰 三九ノ八
最後 四一ノ二
○八幡六郎―高貞の次男を修行者に預く 二八ノ五
○八幡六郎、八郎―氏清子息の元服 五一九ノ二
○波津崎(尾張)―義助逗留 四二ノ二
○八相山の戰 二九七ノ一〇
○鼻田彌次郎―四條畷の戰 一五七ノ一三
○樊噲 二三八ノ四
○范增 二三七ノ六、五四一ノ六
○原三郎左衞門義實―小清水に敵情視察 二七一ノ三
○原四郎太郎、四郎次郎―戰死 一四二ノ一四
○原八郎左衞門―戰死 二六四ノ二
○婆羅門僧正―行基の招請 一一三ノ八

小手差の敗　三二八ノ一四
鎌倉の戰　三三一ノ七
國府津山奥に籠る　三三八ノ一四
武藏に迎へらる　四一八ノ六
竹澤の詭計　四一九ノ四
少將殿　四二一ノ一
矢口渡の最後　四二四ノ七
○新田大明神　四二九ノ八
○新田武藏守義宗
南都の勅使、擧兵　三一九ノ九
尊氏を追ふ　三二八ノ四
笛吹峠に落つ　三三一ノ五
來歸の諸將　三三四ノ一
笛吹峠の敗　三三六ノ八
西上　三四九ノ四
○二宮信濃守—都落ち　六一五ノ一〇
○二宮兵庫助—桃井と名
乘り戰死　三九二ノ五
○如意輪堂—正行の遺詠　一四八ノ五

ヌ

○沼田小太郎—戰死　三六一ノ七

ネ

○寧王　四八八ノ九、五五一ノ二
○根尾城（美濃）—義助の
敗　四一ノ一二
○根津小次郎（又禰津に
作る）
笛吹峠の詭計　三三六ノ一一
龍門山の敗走　四四三ノ九

ハ

○沛公　二三二—二四九
○馬鬼　五五四ノ一四
○芳賀伊賀守公頼（又高
貞に作る）
父の教訓、龍門の奮
戰　四四四ノ九
苦林野の苦戰　六〇二ノ三
○芳賀駿河守—苦林野の
戰死　六〇三ノ一一
○芳賀八郎—生擒、放免　六〇五ノ七
○芳賀兵衛入道禪可
加賀壽丸取籠　一ノ五
子息教訓　四四四ノ八
天王寺に籠る　四六五ノ一一
上杉を恨み反す　六〇一ノ八
○羽切遠江守—薩埵の防
戰　三〇二ノ一三
○白顏　五八八ノ一四
○白起　一八四ノ三
○白馬寺—由來　九八ノ三
○波斯匿王　四九一ノ八
○長谷與一—戰死　二六四ノ二
○畠山阿波將監國清
直義入道に屬す　二五一ノ四
小山に出陣　二六九ノ一三
直義に意見、尊氏に
降參　二九八ノ四
薩埵出陣　二九九ノ三

讃岐に流さる　七七ノ一三
○苦林野の戰　六〇一―六〇七
足利左馬頭―芳賀伊賀守、駿河
守―大高重成―岡本富高―芳賀
八郎
○苦桃兵部大輔―京の戰　三九三ノ一一
○錦小路殿(足利直義を見よ)
○西左衛門四郎―武藏五
郎生擒　二八五ノ一一
○西臺(高貞の室)
侍從の評　一九ノ五
高貞に嫁す　二一ノ一
師直の戀　二一ノ六
最後　二七ノ九
○二條關白左大臣殿
直義降伏につき論議　二三二ノ二
都攻め　五三二ノ一一
○二條關白殿―山門訴狀
の僉議　一〇一ノ一一
○仁木右馬權助義長(右京大夫)
都攻め　二五四ノ八
石龕寺に留る　二六〇ノ四
伊勢へ下る　二九一ノ六
尊氏に參加　二九七ノ七
薩埵に戰ふ　三〇三ノ九
直義へ使者　三〇四ノ三
小手差の善戰　三二九ノ五
鎌倉の勝　三三一ノ七
京の戰　三九五ノ二
南方出征　四三九ノ五
敗軍を笑ふ　四四四ノ二
歸洛　四六二ノ七
防禦の策、都落　四六六ノ七
長野城に楯籠る　五〇〇ノ九
南朝に降伏　五〇二ノ七
平素の惡行　五〇三ノ六
土岐に破らる　五三六ノ一〇
北朝に降る　六〇〇ノ一
○仁木左京大夫頼章
四條畷の敗　一五二ノ一三
都攻め　二五四ノ八
石龕寺に留る　二六〇ノ四
有馬へ下る　二九一ノ五
薩埵に出陣　二九九ノ三
直義へ使者　三〇四ノ二
小手差の勝　三二九ノ四
丹波の守護　三七三ノ九
京の戰　三九七ノ一四
○仁木三郎
大將と仰がる　四九八ノ二
降參　五〇〇ノ六
清氏征討　五二六ノ二
攻上る　五三七ノ七
○仁木彈正少弼―防衞、都
落ち　四六七ノ五
○仁木中務少輔頼夏
防衞、都落ち　四六七ノ四
決死の覺悟　五一七ノ五
仁木三郎に破らる　五三六ノ一〇
○仁木兵部大輔義尹―
和久郷に陣す　五六六ノ五
○新田左兵衞佐義興
南都の勅使、擧兵　三一九ノ九

鳥羽より推寄す　三一〇ノ一四
○中院中將具忠
勅使　三一三ノ一〇
八幡の戰　三四〇ノ八
○長山遠江守—赤松氏範
と一騎打　三五九ノ四
○那須五郎—戰死　三九六ノ二
○南禪寺—三井寺と確執　六四八ノ二
○南朝、北朝
南朝の衰運　一ノ二
北朝の武家、公家　二ノ二
後醍醐帝崩御　九ノ五
諸國の義兵　一〇ノ一一
後村上帝卽位　一一ノ一二
義助參向、恩賞　四二ノ三
四國の官軍　五一ノ一
武士と公家　七九ノ五
武家の奢侈　八四ノ六
崇光帝卽位　一一九ノ一
正行の參內　一四六ノ一一
師直來攻、主上御退
出、炎上　一六二ノ一
直義降伏　二三〇ノ一二
義詮和睦の議　三〇五ノ九
北朝の公卿南朝に來
歸　三〇六ノ八
北朝より三種神器進
獻　三一三ノ一二
持明院殿賀名生に幽
せらる　三一五ノ五
後光嚴院卽位　三五二ノ六
持明院御所炎上　三五三ノ八
直冬へ宣旨　三六五ノ一〇
持明院殿還御　四〇〇ノ一〇
京都荒廢の光景　四〇一ノ一二
後村上帝天野御座　四三五ノ三
後村上帝觀心寺臨幸　四三七ノ一
北朝の大軍來攻　四三七ノ一〇
北朝軍の內訌　四六六ノ一
南軍蜂起　四七一ノ五
北朝改元、火災　五〇一ノ二
義長南朝に降る　五〇二ノ七
淸氏降伏、南軍蜂起　五二八ノ二
南軍攻上、北軍都落　五三二ノ一一
北軍來攻、南軍都落　五三六ノ六
南朝大將任選の誤　五四〇ノ二
諸國の官軍蜂起　五六二ノ一二
北朝改元　五八六ノ八
當時の人情　五九七ノ一
光嚴院南朝御訪問　六三三ノ六
○南都の衆徒（興福寺、東
大寺を見よ）
○南部六郎—戰死　三九四ノ五
○南部一族—薩埵の防戰　三〇二ノ一三
○滑河—靑砥藤綱の話　四八五ノ七
○那和庄の戰　三〇一ノ八

ニ

○二階堂下野二郎
新田に同心　三二〇ノ九
落つ　三二五ノ五
○二階堂判官行春
持明院に會し失態　七五ノ一一

○土岐惡五郎―奮戰最後　三四二ノ二
○土岐右馬頭氏光―仁木義長に忠　五〇一ノ八
○土岐桔梗一揆
龍泉寺攻め　四五四ノ二
將軍勢に參加　五三七ノ四
○土岐刑部少輔頼康（大膳大夫善忠）
美濃へ下る　二九一ノ八
尊氏に參加　二九七ノ七
八幡の戰　三四二ノ二
京の都　三九五ノ三
仁木義長討伐の議　四六四ノ一〇
天王寺に籠る　四六五ノ一〇
義長を攻む　五〇〇ノ七
○土岐宮內少輔―小河庄を落す　四九七ノ七
○土岐周濟房
安倍野の敗　一四一ノ四
戰死　一五五ノ一
○土岐七郎―戰死　三六〇ノ三
○土岐彈正少弼頼遠
北國に向ふ　一六ノ四
義助を破る　四一ノ一二
持明院に對し狼籍　七五ノ一一
反意、所刑　七八ノ一
○所大夫房快舜
畑六郎に仕ふ　三六ノ六
最後　四一ノ一
○後基、資朝―怨靈　四六〇ノ一一
○吐蕃　五五二ノ七
○土肥掃部助―道誓を遮る　五二九ノ一一
○土肥三郎左衞門
頼春來攻　五二ノ八
落城　五四ノ六
最後　四二六ノ一
○頓宮四郎左衞門―變心　五二六ノ一四
○鞆、尾の道の戰　五二一―五六
海戰―金谷修理大夫の作戰―細川頼春の計―殘る十七騎

ナ

○長尾三郎左衞門―鹿目を討つ　二八五ノ四
○長尾新左衞門（又左衞門尉に作る）
鷹巢城に戰ふ　三八ノ一二
上野に向ふ　二九九ノ七
敗北　三〇二ノ五
信濃に遁る　三〇三ノ一一
○長尾彈正―笛吹峠の詭計　三三六ノ一一
○長尾彦四郎―越後將監を討つ　二八四ノ八
○長尾孫六、平三
大島を破る　三〇〇ノ七
戰死　三〇二ノ四
○長崎彦九郎―和田新兵衞を射る　一六一ノ五
○中院右衞門督顯能
天王寺へ來歸　三一〇ノ四

吉野朝廷御訪問　六三三ノ六
崩御　六三五ノ一〇
御葬儀　六三五ノ一一
○陳平　二四五ノ五
○忠雲僧正—後醍醐帝の終焉に侍す　八ノ三
○忠圓僧正—怨靈　一二一ノ八
○趙王—秦王との會盟　一七三ノ一〇
○趙高　一八三ノ一二
○趙璧　一七三ノ七
○張亘　二三五ノ九

ツ

○土屋平三—陶山と戰ふ　二六三ノ一一
○都筑入道—壬生宿攻め　一一五ノ八
○鼓崎城—落城　二二六ノ二
○津守國夏—後村上帝臨幸　三〇九ノ二
○津守國久—勸文進奏　四四六ノ六
○津山彈正左衛門—吉江中務を討つ　三〇二ノ八
○鶴澤源藏人—鷲巢城に戰ふ　三八ノ一一

テ

○田樂—盛況、混亂　一九〇ノ四
○天狗（怪異、神佛を見よ）
○帝師（元の）　五八八ノ四
○天王寺
師泰の横暴　一六九ノ一四
金堂造營　五〇八ノ二
○天神七代　一三〇ノ一
○天台宗—血脈　一〇一ノ二
○天文、星辰
犯星、客星　一八九ノ一
太白、辰星、歲星　一八九ノ九
慧星、客星　五六一ノ一
天變飛行　六四六ノ一一
○天龍寺
開山、規模　八五ノ九
將軍參詣の盛儀　一〇六ノ九
上皇參詣の儀式　一〇九ノ八
失火　三五四ノ五
新造營失火　五四六ノ一二

ト

○洞院左衛門佐實世
執奏　一三ノ二
義助の恩賞を嘲る　四二ノ八
直義降伏につき論議　二三一ノ一一
○洞院太政大臣公賢—大嘗會の內辨　二一九ノ七
○潼關　五五四ノ二
○刀劍
景淸が海に落しし刀　六四ノ一〇
壇浦海底の寶劍　一二六ノ一二
懷劍　二〇六ノ一
鬼丸、鬼切　三七五ノ一
○遠江次郞—最後　二八四ノ一〇
○東寺の合戰　三九七ノ一三
○當陽君　二三四ノ一
○東陵和尙—尊氏葬儀　四〇七ノ八
○富樫城—高經來る　一五ノ一二

○鷹巣城
畑、一井の守禦 三五ノ三
上木敗戰 三八ノ五
○鷹角一揆―執事兄弟を
遮る 二八三ノ三
○高橋九郎左衛門―江河
の先陣 二二三ノ五
○高橋四郎左衛門―最後 三六三ノ三
○高橋中務英光
大旗一揆の旗頭 一四九ノ三
小清水の戰 二七〇ノ六
○高山又次郎―山口新左
衛門を討つ 二八四ノ一四
○竹澤左京亮
道誓の依賴 四一九ノ四
義興に少將進獻 四二一ノ一
矢口の詭計 四二四ノ七
恩賞 四二七ノ六
○武田伊豆守
四條畷に出陣 一四九ノ四
奮戰 一五一ノ四
○大宰越前守―生擒 四一五ノ一四
○大宰新少貳忠資―戰死 四一五ノ三
○太宰少貳
謀叛 四一二ノ二
太宰府引退 四一七ノ九
香椎の敗 五一二ノ八
岡城に栖籠る 五七二ノ一〇
○多舌魚 四九三ノ六
○多治目備中守―松山城
に入る 五六三ノ五
○妲妃 二九四ノ九
○伊達三位有雅―宗房の
議を難ず 三〇九ノ七
○彈正左衛門義冬―小清
水の戰 二七二ノ一〇
○湛譽(熊野新宮別當)―
義助に馬具等獻上 五〇ノ一一
○達磨―無功德の答 一一二ノ一一

チ

○智教上人―怨靈 一二一ノ八
○千種少將顯經―唐櫃越
より推寄す 三一一ノ一
○竹林院中納言公重卿―
持明院守護 七六ノ八
○千葉介
四條畷の敗 一五三ノ一
薩埵の敗 三〇三ノ一一
笛吹峠の戰 三三六ノ二
○治部大輔義將―宥免、
補任 六一七ノ二
○持明院上皇(光嚴帝)
八幡へ願書 七三ノ一〇
伏見殿御幸、顯遠の
狼藉 七五ノ二
天龍寺へ御幸 一〇九ノ八
慧源(直義)へ院宣 二二九ノ一
南都臨幸 三一四ノ一〇
還幸 四〇〇ノ一〇
御出家 四〇一ノ一
御行脚 六二九ノ一
高野御登山 六三一ノ八

○陶山又五郎—戰死　二六三ノ九
○陶山又次郎高直—戰死　二六三ノ八
○諏訪五郎—最後　二八一ノ八

セ

○精衞　四五二ノ一〇
○征西將軍宮—香椎の陣を攻む　五一三ノ一一
○政治—善政、惡政　四七五ノ一三
○淸辨—護法と談義　一〇二ノ三
○石季倫—綠珠、金谷の花　二三ノ九
○關左近將監—最後　三四二ノ九
○赤泉侯　二四九ノ六
○關地良圓—四條畷の戰　一五九ノ六
○世田城—落城　五七ノ四
○刹利種　四九二ノ四
○禪宗
　禪の宗旨、禪僧驕奢　九一ノ四
　系統　一〇一ノ四
○扇陀女　五四五ノ一一
○施藥院師嗣成（仲成。）
　—直義北方の妊娠豫言　一二三ノ二
○世良田右馬助—最後　四二五ノ一三

ソ

○藏王權現緣起　一六四ノ一三
○曹娥—孝行譚　四五一ノ九
○崇侯虎　二九五ノ一〇
○崇光天皇（後伏見院御孫）
　卽位　一一九ノ一
　大嘗會　二一九ノ四
　南都臨幸　三一四ノ一〇
　還幸　四〇〇ノ一〇
○曹無傷　二三五ノ五
○巢父　三七〇ノ三
○僧侶間の確執
　山門の訴狀、天台と禪宗　八六ノ八
　南禪寺と三井寺　六四八ノ一
　南都と北嶺　六四九ノ三
○蘇角　二三三ノ四
○曾我左衞門—義詮の急を救ふ　三一三ノ一
○孫氏—吳王最愛の美人を斬る　四三ノ四
○楚武王、文王、成王—卞和の玉　一七一ノ一三
○孫心　五四一ノ一四
○尊道法親王—大熾盛光法執行　五〇九ノ六

タ

○太公　二四二ノ九
○太公望　四四ノ五、二九六ノ八
○大荒峯　五五二ノ一〇
○第七の宮（後村上天皇を見よ）
○太史の官　四八九ノ六
○大戊—桑穀の兆　三〇九ノ九
○高倉殿（足利直義を見よ）
○多賀將監—秋山新藏人を討つ　二九八ノ二

○舍利弗　九四ノ一三、四九四ノ一四
○周殷　二四七ノ三
○周濟房（賴遠の弟）―赦免　七八ノ七
○周大王　四八七ノ一二
○周武王
　太公望の建言　四四ノ五
　周公旦の祈願　七四ノ一〇
○周文王　二九五ノ九
○順覺―光嚴院行脚の御伴　六二九ノ七
○肅宗　五五六ノ一四
○須達長者―精舍建立　九三ノ一〇
○象（舜の弟）　三七〇ノ九
○承胤親王―任天台座主　三五一ノ六
○章邯　一八四ノ四、二三三ノ四
○聖護院譽法親王―尊星王法執行　五〇九ノ七
○照車の玉　一七三ノ四
○少將殿
　義興に仕ふ　四二一ノ一
　義興へ消息　四二二ノ七
　最後　四二三ノ一
○笙の岩屋の日藏上人―地獄に延喜帝に謁す　一六三ノ一三
　同　四七六ノ九
○城越前守
　詭計松浦を破る　五一三ノ一
　小貳を破る　五七二ノ四
○小貳新左衛門武藤―討死　四一七ノ五
○小貳新左衛門尉―戰死　五七二ノ四
○小貳筑後二郎―戰死　五七二ノ四
○淨飯王　四九一ノ九
○書寫坂本―尊氏の陣　二六五ノ三
○徐福　一八二ノ八
○白江源次―戰死　五一六ノ三
○白峯の戰　五七六―五八二
　清氏の勢―賴之の詭計―新開遠江守―左馬助、掃部助―陶山、伊賀―眞壁―清氏最後―左馬助、掃部助和泉落

ス

○瑞光庵―出火　四ノ一
○瑞祥（變異、神佛を見よ）
○須賀壹岐守―將軍の使者　二〇九ノ一〇
○杉原周防入道―南部の方へ落つ　四七一ノ一〇
○杉原又四郎―直冬を討つ　二一一ノ七
○素戔嗚尊　一三一ノ五
○洲澤城―師冬最後　二八一ノ五
○須々木三郎左衛門父子―戰死　三八三ノ六
○須々木四郎―四條畷の戰　一五九ノ七
○鈴木孫七郎行長―戰死　五八一ノ一二
○住吉の戰　一四〇―一四四
　正行―時氏、顯氏―和田源秀、阿間了願―太刀を守木―京軍敗北
○崇德院―怨靈　四〇九ノ八

○三條中納言雅賢卿—戰死　三四七ノ一
○三條殿（足利直義を見よ）
○三寶院覺濟僧正—尾張入道へ使す　六一五ノ八
○山門、山門の衆徒（比叡山、衆徒の條を見よ）
○佐和善四郎—守禦、戰死　二二二ノ一〇

シ

○志一房（志一上人）
妙吉侍者の修法　一七九ノ二
清氏の祈願　五一九ノ七
○子嬰　一八五ノ三、二三三ノ一二
○鹽谷伊勢守
龍門山の奮戰　四四一ノ九
最後　四四三ノ二
○志賀寺の上人　五四六ノ六
◎獅子國—獅子王物語　三六六ノ一
○子思明　五五三ノ一四
○侍從
美人物語　一八ノ一四
高貞の戀の媒　二一ノ一三
隱退　二五ノ九
○志純（兒島高德の法名）
○四條少將—南方に歸る　三六四ノ一一
○四條大納言隆蔭—執奏　三一四ノ一〇
○四條中納言隆資
執奏　一三ノ二
實世と論議　四二ノ一三
正行參內の執奏　一四六ノ一一
飯盛山に向ふ　一四九ノ一二
敵來襲の奏上　一六二ノ四
戰死　三四七ノ一
○四條中納言隆俊
神南の戰　三八〇ノ一二
龍門の敗、阿瀨河城引退　四四五ノ八
都攻め　五三二ノ一一
○四條繩手合戰　一四八—一六一
師直—正行一族—大旗、小旗の一揆—四條中納言隆資—上山六郎左衞門—正行以下最後
○志知一族—義助歡待　五〇ノ一四
○實算法印—御占、恩賞　三五二ノ四
○信濃五郎直賴—最後の覺悟　二七六ノ二
◎信濃宮—信濃進發　三四九ノ九
○篠塚伊賀守
決戰　五八ノ一
今張浦より船出　五九ノ一
○眞都—平家彈奏　一七ノ二
○秦王—趙王との會盟　一七三ノ一〇
○新開遠江守—清氏を討つ　五七八ノ七
○神功皇后—新羅征伐　六二六ノ六
○身子—六波羅密の行　五四三ノ一二
○新待賢門院—隱れ給ふ　四〇八ノ五
○秦始皇帝　一八〇ノ一二
○神佛の奇特（變異、神佛を見よ）
○秦穆公　四五ノ一〇、一五六ノ六

○佐々木源三判官秀綱
暴擧　四ノ三
流罪　五ノ六
戰死　五ノ一四
○佐々木薩摩守信胤―義助を迎ふ　五一ノ二
○佐々木佐渡判官入道道譽
暴擧、流罪　三ノ一
伊駒山出陣　一四九ノ五
策戰　一五一ノ一四
都攻め　二五四ノ九
近江へ下る　二九一ノ七
尊氏に參加　二九七ノ六
山名師氏を冷遇　三五四ノ一〇
神南の戰　三八一ノ八
驕奢　四〇四ノ一二
勳功　四三二ノ二
仁木義長討伐の議　四六四ノ一三
攝津の守護職を賜はる　五一四ノ五
細川清氏と不和　五一七ノ六
都落ちの風流　五三五ノ六
尾張入道を怨む　六一一ノ九
大原野の花會　六一二ノ三
多田庄を沒收せらる　六一三ノ一四
尾張入道を讒す　六一四ノ一
○佐々木三郎判官氏賴
北國に向ふ　一六ノ四
戰死　三六三ノ一
○佐々木四郎左衞門―安部野へ出陣　一四一ノ五
○佐々木次郎左衞門―戰死　五一四ノ一一
○佐々木太郎判官秀詮
宣旨請取　四二一ノ九
戰死　五一四ノ一
○佐々木治部少輔高秀
臆して戰はず　五三四ノ八
將軍勢に參加　五三七ノ三
○佐々木六角判官入道崇永
京の都　三九七ノ三
平石城を落す　四五六ノ一
仁木義長討伐の議　四六四ノ一二
天王寺に籠る　四六五ノ一〇
仁木三郎を討つ　四九八ノ六
義長を攻む　五〇〇ノ七
上洛　五三七ノ五
道朝討手　六一四ノ七
○佐竹―笛吹峠の戰　三三六ノ二
○薩埵山の戰　二九八―三〇四
尊氏・直義―寄手五十萬―大胡山上の敗―宇都宮の後攻―兒玉黨の敗北―寄手の敗走―直義降服
○三眞國―鬼丸　三七七ノ一
○三種神器
由來　一三〇ノ一
北朝の神器　三一三ノ一二
內侍所の靈顯　三四八ノ一
○三條源大納言通冬卿―山門訴狀の僉議　九三ノ六
○三條中納言實春―持明院御伴　三一五ノ一〇

―強弓、戰死　三八一ノ一三
○後藤筑後守貞重―生擒　三六〇ノ　六
○小林掃部助―彦部七郎
を討つ　二八四ノ一一
○小林右京亮
佐々木と戰ふ　三五七ノ一四
決戰の覺悟、引退　五六六ノ一四
○小林左京亮
高貞追擊　二七ノ　七
苦戰　三一ノ一二
○小林又次郎―山口入道
を討つ　二八四ノ一〇
○小林民部丞
高貞追擊　二七ノ　七
神南の戰　三八三ノ　八
丹波に出づ　五六五ノ一四
○護法―清辨と談義　一〇二ノ　三
○小俣宮內少輔―新田に
同心　三二〇ノ　九
○小松原刑部左衞門―最
後　一四三ノ　二
○古見源左衞門―師泰に
恥しめらる　一六九ノ　四
○後村上天皇
卽位　一一ノ一二
正行に勅語　一四七ノ　九
南都を遁れ給ふ　一六二ノ　四
東條、住吉、天王寺
行幸　三〇八ノ一二
八幡御退出　三四六ノ　九
天野御所、和田、楠
の奏上　四三七ノ　一
觀心寺へ臨幸　四三七ノ　一
諸神祈願　四四八ノ　四
光嚴院御來訪　六三三ノ　六

サ

○崔乾祐　五五三ノ一四
○西鄕彈正左衞門尉
畠山を遮る　四七三ノ　九
伊勢に落つ　四九七ノ一一
○最勝園寺貞時―行脚物
語　四八三ノ　三
○最明寺時賴禪門―行
脚物語　四八一ノ　八
○齋藤五郎左衞門入道
師直誅討の議　二〇三ノ　八
師直に密告　二〇四ノ　五
○佐々宇六郎左衞門―梶
原孫六を討つ　二八四ノ一四
○佐々木飽浦三郎左衞門
小豆島に舉兵　四六ノ　四
舉兵の來由、お妻と
の戀　四六ノ　七
○佐々木近江守秀綱
山門警固　一〇九ノ　四
尊氏に參加　二九七ノ　六
最後　三六三ノ一三
勳功　四三二ノ　七
○佐々木五郎右衞門尉―
楠、小林勢に破らる　三五七ノ一〇
○佐々木黑田判官―京の
戰　三九三ノ一三

降伏、遁走の議　二七八ノ六
出家、降伏　二八二ノ六
上洛、最後　二八二ノ九
○高野山
光景　五〇ノ一
光嚴院行脚臨幸　六三一ノ八
○項伯　二三五ノ八
○興福寺、東大寺
山門より牒狀　一〇三ノ一四
同　六四八ノ五
山門の衆徒と戰ふ　六四九ノ四
○光明寺の戰　二六五―二六九
石堂、愛曾、矢野―赤松父子―童の物狂―赤松引退―無文の白旗―範資の使者―尊氏師直引退
○鴻門の會　二三六ノ一三
○閎天　二九五ノ一二
○高力士（高將軍）　四八八ノ一四
同　五五一ノ三
○黃粱の夢　一三八ノ一
○吳王闔閭―孫氏の計　四三ノ四

○香勾新左衞門高遠―壬生地藏の奇特　一一五ノ一三
○胡亥　一八〇ノ一三
○久我（コガ）内大臣　四八三ノ三
○後光嚴天皇（茨宮）
卽位　三五二ノ六
美濃の皐居　三六三ノ一四
武佐寺に遁れ給ふ　三七四ノ四
義詮へ勅使　四六三ノ二
再び武佐寺に遁れ給ふ　五三五ノ一
義詮の使者、上洛　五三八ノ二
長講堂行幸　六三九ノ一
中殿御會　六四一ノ二
最勝講　六五〇ノ七
○吾護殿―菅三位を殺す　一六九ノ一
○小柴新左衞門―豐前五郞を討つ　二八四ノ七
○小島次郞―將軍都落の伴　四六九ノ五
○兒島高德（三宅三郞、入道志純）　一一四ノ五
旗擧成らず　一一五ノ一二
信濃に落つ　三四八ノ八
東國へ使す
○小清水の戰　二六九―二七四
畠山、上杉、石堂―藥師寺公義―孫六、忠―武藏、河津の夢想
○瞽叟　三七〇ノ九
○後醍醐天皇
御不豫、崩御　八ノ一
諡號　一二ノ一二
怨靈　四六〇ノ一〇
○兒玉五郞左衞門―鷺巢城に戰ふ　三八ノ一二
○兒玉黨―薩埵を攻む　三〇二ノ一二
○小手差原の戰　三二五―三三一
新田、足利の部署―花一揆、兒玉黨―足利敗走―仁木父子善戰―義興、義治敗走―義宗笛吹峠に落つ
○後藤三郞左衞門尉基明

○江河の戰　二三二ノ九
○光嚴院（持明院上皇を見よ）
○皇室、帝王
　即位の式　一一ノ一二
　神器と皇位　二〇〇ノ一四
○孔將軍　二四八ノ四
○高祖　一八四ノ三、二三三ノ九
○項莊　二三七ノ九
○香象（華嚴の祖師）―悟
　道　一〇二ノ一〇
○厚東駿河守―大内介を
　恨む　五九八ノ九
○神南の戰　三八〇―三八九
　義詮出陣―直冬軍の部署―義詮
　軍の部署―後藤の强弓―江見、
　箕浦、馬淵―秋間、生稻―須々木
　父子―山名奮進―福間三郎―河
　原兵庫助―赤松朝範―佐々木、
　赤松―山名引退―内海十郎―河
　村彈正
○高越後守師泰
　淀に出陣　一四六ノ一
　境浦に出陣　一四八ノ一一
　石川河原に出陣　一六二ノ一
　驕慢、横暴　一六八ノ二
　上洛　二〇四ノ九
　將軍攻の擬勢　二〇八ノ一三
　石見へ出征　二三二ノ八
　石見より引返す　二六二ノ二
　湊川へ向ふ　二六九ノ一一
　松岡城の窮態　二七五ノ九
　出家、降伏　二八二ノ六
　上洛、最後　二八二ノ九
○高上野介師治（又師重に作る）
　北國に向ふ　一六ノ三
　鷲巢城を攻む　三五ノ六
○高土佐守
　御妻との戀　四七ノ三
　菊亭殿に推寄す　四八ノ一六
○高播磨守師冬
　四條畷の敗　一五八ノ九
　最後　二八〇ノ四
○高備前守―最後　二八四ノ八
○高豐前五郎―最後　二八四ノ七
○高武藏守師直
　病氣、酒宴　一六ノ一三
　侍從の物語　一八ノ一四
　高貞の妻を戀ふ　二一ノ五
　讒言　二五ノ一一
　八幡に出陣　一四六ノ四
　四條畷の戰　一四八ノ一二
　南都を攻む　一六二ノ二
　驕奢　一六六ノ一一
　直義邸に參向　二〇三ノ一二
　直義攻伐の議　二〇五ノ七
　參加の人々　二〇七ノ四
　將軍攻の擬勢　二〇八ノ一一
　直冬を討たしむ　二一一ノ六
　尊氏に建議、進發　二二七ノ八
　都攻め　二五四ノ四
　泣尾に出陣　二六五ノ八
　湊川に向ふ　二六九ノ一一
　松岡城の窮態　二七五ノ九

五郎―佐々木崇永―直冬八幡に落つ
○刑部大輔頼康
義助を破る　四二ノ一
討手の御教書　七八ノ三
○清水寺―炎上　一八九ノ五
○許由　三六九ノ二
○吉良三郎滿貞―美濃に到る　三四九ノ六
○吉良治部大輔―敗戦　四九七ノ一〇

ク

○虞舜　三七〇ノ九
○楠正行
皇居守護　一一ノ九
藤井寺に戦ふ　一二六ノ八
住吉に戦ふ　一四〇ノ一二
敵兵救濟　一四五ノ三
參內　一四六ノ一一
如意輪堂の遺詠　一四八ノ五
四條繩手に戦ふ　一五〇ノ一
最後　一五九ノ一一
○楠正時
四條畷の奮戦　一五〇ノ二
最後　一五九ノ一〇
○楠正儀
師泰と戦ふ　一六六ノ一
都攻め　三一一ノ二
八幡の戦　三四一ノ九
躊躇　三四六ノ一
參內奏聞　四三五ノ三
赤坂に籠る　四三九ノ一二
金剛山に引退　四五八ノ一四
都攻め、引退　四六五ノ六
神崎の勝　五一四ノ一一
都攻めに反對す　五三一ノ八
都攻め　五三二ノ一二
道譽の風流に感ず　五三五ノ一四
箕浦を攻む　五八三ノ七
湊川へ押寄す　五八六ノ五
○瞿曇　四九六ノ六
○黒丸城―落城　一三ノ八

ケ

○滎陽の對陣　二四二ノ一〇
○元―建國の大戦　五八七ノ五
○元軍來襲　六二一ノ三
○玄慧法印
直冬推薦　一八六ノ一一
遷化　二一四ノ八
○元獻皇后　五五〇ノ二
○兼好―師直の艶書　二三ノ一二
○源三位頼政―鵺、菖蒲　一七ノ四
○犬獅子―畑六郎に仕ふ　三六ノ七
○玄宗　四八八ノ九、五四九ノ一四
○元朝より使者來朝　六一九ノ一一
○建仁寺―開山塔、塔頭
燒失　三ノ一二
○嚴武　五五六ノ八

コ

○小池新兵衛―戦死　二六四ノ三
○項羽　一八四ノ三、二三二ノ九

其舟に直冬便乗　二一一ノ一一
直冬在住　二二一ノ七
○河津左衛門氏明
大旗一揆の旗頭　一四九ノ三
小清水の戰　二七〇ノ六
夢想　二七三ノ六
最後　二八五ノ八
○河邊石掬丸—四條畷の戰　一五九ノ六
○河村彈正—戰死　三八八ノ八
○河村山城守—防戰　一四三ノ九
○河原軍—阿保、秋山　二五八ノ五
○河原林彈正左衛門—戰死　五五八ノ一
○河原兵庫助重行—戰死　三八四ノ一一

キ

○紀伊常陸前司—香椎出陣　五一二ノ八
○祇園精舍—由來　九三ノ一〇
○菊池彦二郎—負傷　五七二ノ二
○菊池肥前守武光(又肥後守に作る)
一色を破る　四〇九ノ二
畠山を討つ　四一一ノ二
阿蘇を破る　四一二ノ一
小貳と奮戰　四一四ノ一
香椎の陣を攻む　五一三ノ一一
小貳、大伴を攻む　五七二ノ七
大内介を破る　五九八ノ一一
○儀式節會、修法
年中行事　八一ノ四
大嘗會　二一九ノ四
最勝講　五〇九ノ九
春日神木歸座の式　六一七ノ一〇
中殿の御會　六四〇ノ二
○紀信　二四〇ノ四
○祇陀太子—遊園、祇園精舍　九三ノ一二
○北野天神—緣起　一六三ノ一三
○北畠右衛門督顯能
京都の成敗　三一三ノ一〇
持明院へ參向　三一四ノ六
八幡の戰　三四〇ノ一一
仁木義長を攻む　六〇〇ノ五
○北畠大納言親房
萬機を計ふ　一三ノ一
直義降伏につき論議　二三二ノ九
准后の宣旨　三〇七ノ一二
京都の成敗　三一三ノ一〇
○義帝　五四一ノ一四
○靳強　二四〇ノ四
○公時—八幡へ勅使　七四ノ七
○木村源三—最後　三三ノ四
○木村兵庫允泰則—冒險して落つ　五八五ノ四
○堯　三六九ノ七
○行基菩薩—婆羅門僧を請ず　一一二ノ一四
○京極の御息所　五四六ノ一一
○京の合戰　三九一—三九八
尊氏—仁木賴章—細川清氏—二宮兵庫助—朝倉下野守—南部六郎—赤松氏範—桔梗一揆—那須

○夏侯嬰　二四〇ノ四
○娥媓、女英　三七〇ノ一四
○梶井二品法親王
　田樂棧敷の負傷　一九二ノ一三
　召捕はる　三一六ノ四
　遁れ給ふ　三五三ノ五
　近江に落つ　三六二ノ五
　薨御　四〇八ノ七
○賈似道、賈平相　五八九ノ一
○歌舒翰　五五四ノ七
○梶原三郎—義助を追ふ　五一ノ二
○梶原彈正忠—戰死　二七一ノ八
○梶原孫七—最後　二八四ノ一四
○梶原孫六
　小清水の奮戰　二七一ノ八
　最後　二八四ノ一三
○春日神木
　入洛　六〇九ノ二
　歸座　六一七ノ一〇
○葛山備中守—平一揆と
　不和　五四八ノ八
○金谷修理大夫經氏—鞆、
　尾の道の戰　五二ノ一〇
○兼員（神祇大副）
　三種神器由來の講說　一二九ノ九
　平野社の祈願　一三五ノ一一
○鎌倉の戰
　義興、義治、石堂、三浦—小俣
　次郞—南遠江守の敗走　三三一—三三三
○鑑翁和尙—尊氏葬儀　四〇七ノ八
○菅宰相在登卿—師泰の
　橫暴、死　一六八ノ三
○神崎橋の戰
　第一回　五一五—五一七
　吉田肥前房—和田、楠—秀詮
　兄弟戰死—瓜生父子戰死—楠
　の慈悲
　第二回　五八三—五八六
　箕浦—和田、楠—芥河右馬允
　—木村兵庫允、鹽冶六郞左衞
　門
○漢詩、偈
　少年力學志須張（揚龜
　山）　一三九ノ七
　感君一日恩（文慧）　二一四ノ一三
　昨夜春園風雨暴（別
　源）　二九〇ノ四
　日本狂奴亂浙東（王
　乙）　六二八ノ一〇
○韓信　二四七ノ一
○觀心寺
　後村上帝臨幸　四三七ノ一
　荒廢の光景　四五九ノ二
○勸修寺大納言經顯
　寶劍進奏論議　一三七ノ三
　勅使　二一三ノ六
　內辨につき論議　二一九ノ八
○官職—准后宣旨の例　三〇七ノ一二
○鹿目平次左衞門—最後　二八五ノ三
○河合孫五郞種經—降服　一四ノ一一
○河越彈正少弼—上洛の
　盛裝　四三四ノ一一
○河尻肥後守幸俊

○大友刑部大輔氏時
　高崎城に籠る　四一一ノ五
　香椎の敗　五一二ノ八
○大原五郎大夫安綱―鬼切　三七九ノ二
○大森彦七
　勳功　六一ノ二
　正成等の怨靈　六一ノ九
○王離　二三三ノ四
○小笠原一族―義助歡待　五〇ノ一四
○岡本信濃守富高―最後　六〇五ノ一四
○小河中務丞―降伏、所刑　四九七ノ六
○荻野彦六朝忠
　高德に與す、降服　一一四ノ八
　敗北　三六〇ノ一三
○御妻
　高土佐守との戀　四六ノ一〇
　老婆の替玉　四七ノ一一
○長九郎左衞門―阿保に與す　五一一ノ八
○山田左衞門五郎―遠江次郎を討つ　二八四ノ一〇
○越智―降伏　四四五ノ一一
○越智伊賀守―直義守護　二二九ノ九
○鬼丸、鬼切―由來　三七五ノ一
○大平出雲守―高貞追擊　二六ノ一一
○小俣小次郎―鎌倉の勝　三三二ノ一二
○園城寺―衆徒蜂起　六四八ノ一
○女―美人評　一九ノ一
○思出河―儀人の身投　四〇二ノ一四
○小山判官
　古宇津に出陣　三〇三ノ七
　笛吹峠の戰　三三六ノ二
○尾張左衞門佐氏賴
　京の戰　三九三ノ一一
　清氏討伐　五二六ノ一
　遁世　五四三ノ四
○尾張左衞門入道心勝―丹波に出陣　五六六ノ八
○尾張大夫入道道朝―子息氏賴を讒す　五四二ノ一二
　春日の訴訟　六〇八ノ三
　宿所失火　六一〇ノ九
　赤松、佐々木等の恨　六一一ノ七
　將軍に哀訴、都落　六一四ノ七
　病死　六一七ノ一

カ、クワ

○垓下の城―四面楚歌の聲　二四七ノ四
○回紇　五五六ノ七
○加賀壽丸（宇都宮入道の子）―取籠めらる　一ノ五
○柿原孫四郎―戰死　五八〇ノ六
○覺一檢校―平家彈奏　一七ノ二
○鹿草出羽守―國政亂る　五六七ノ七
○鹿草兵庫助―畑六郎と戰ふ　四〇ノ六
○陰山（播磨）―高貞女房の最後　二七ノ一〇
○勘解由左衞門義治―小清水の戰　二七二ノ一〇

エ、ヱ

○慧源（足利直義の法名）
○愛曾伊勢守—光明寺に出陣 二六五ノ四
○越後守師秀—敗北 五六三ノ七
○越後將監—最後 二八四ノ八
○慧鎭上人—義詮の使者 三一〇ノ五
○江戸修理亮—最後 五七五ノ六
○江戸遠江守
　義興に取入る 四二三ノ一三
　矢口の詭計 四二四ノ七
　恩賞 四二七ノ六
　義興の怨靈、最後 四二七ノ一〇
○海老名信濃守—將軍都落ちの伴 四六九ノ四
○海老名新左衞門—奮戰 三八二ノ五
○江見勘解由左衞門尉—戰死 三八二ノ三
○圓海上人—天王寺金堂造營 五〇八ノ二
○延喜帝—地獄の苛責 一六三ノ一三
　同 四七六ノ九
○圓成（下野阿闍梨）
　海底の寶劍 一二七ノ一
　任僧都 一三六ノ一四
○役優婆塞—藏王權現緣起 一六四ノ一三
○鹽冶高貞舍弟四郎左衞門—師直に密告 二六ノ三
○鹽冶判官高貞
　師直の宿意 一六ノ六
　隱謀、播磨路に落つ 二五ノ一二
　最後 三二ノ一〇
○鹽冶六郎—奮戰 三一ノ六
○鹽冶六郎左衞門—尼崎へ落つ 五八五ノ一三
○延曆寺（比叡山、衆徒の條を見よ）

オ、ヲ

○大內介—北朝に降る 五九八ノ五
○大草三郎左衞門—戰死 一五〇ノ九
○大藏少輔重藤—師泰に恥しめらる 一六九ノ四
○烏江 二四八ノ一〇
○大島左衞門佐義高—西鄕を破る 四九七ノ一二
○大島周防守—最後 四二五ノ一三
○大島遠江守—丹波へ出陣 五六六ノ九
○大高伊豫守
　師直誅討の計 二〇三ノ八
　義詮に參加 三一三ノ六
○大高左馬助重成—苦林野の戰 六〇四ノ一四
○大館左馬助氏明
　反服 五一ノ三
　戰死 五七ノ九
○大塚掃部助—戰死 一六〇ノ九
○大塔宮忠雲僧正—楠折れたるにつき意見 四四六ノ一〇
○大塔宮兵部卿親王—怨靈 一二一ノ一二

丹波に出陣　五六六ノ九
○今川上總守
薩埵の防戰　三〇二ノ一三
平石城を落す　四五六ノ一
○今川駿河守―都攻め　二五四ノ九
○殷紂王　二九四ノ六
○岩松治部大輔―苦林野
の戰　六〇六ノ四
○岩龜寺―義詮滯留　二六〇ノ五

ウ

○上木平九郎家光（又上木
九郎に作る）
高經に建言　一四ノ一四
鷹巣攻の敗　三八ノ一
○上杉伊豆守重能
高家を讒す　一七〇ノ一二
同　一八〇ノ七
師直誅討の計　二〇三ノ八
流罪　二一五ノ二
最後　二一八ノ七
○上杉左馬佐―畠山の陣
に加る　二六九ノ一四
○上杉彈正少弼
師泰を追ひ、陶山を
討つ　二六二ノ八
敗北　二六四ノ九
○上杉民部大輔憲顯
東國の反　二八〇ノ五
由井蒲原に向ふ　二九九ノ八
信濃に遁る　三〇三ノ一一
笛吹峠の戰　三三六ノ三
赦免　六〇一ノ三
○上山六郎左衛門―師直
の身代り、戰死　一五五ノ六
○笛吹峠の戰　三三四―三三八
新田に來歸の諸將―足利に來歸
の諸將―足利軍來攻―長尾、根
津―上杉、新田落つ
○氏經（左京大夫、探題）
九州探題として下向　五六九ノ一〇
菊池に破られ、高崎
城へ引退　五七二ノ九
○宇都宮
薩埵に向ふ　三〇〇ノ八
那和庄の大勝　三〇一ノ八
笛吹峠の戰　三三六ノ二
芳賀の反につき開陳　六〇七ノ一〇
○宇都宮遠江入道、同三
河入道―四條畷の敗　一五三ノ一
○宇都宮三河入道―上洛　五三七ノ六
○宇都宮大和前司―菊池
を遮る　四一一ノ六
○内海十郎範秀―說計　三八七ノ八
○雲曉僧都―義詮に說教　二六〇ノ一〇
○雲景―未來記　一九五ノ一
○卜部宿禰兼前―軒廊の
御占　一一九ノ三
○卜部宿禰兼豐―異議　一二〇ノ一
○瓜生次郎左衛門父子―
戰死　五一六ノ一〇
○瓜生野の戰　一四一ノ八

伏　五一〇ノ六
○粟生田小太郎—戰死　一二六ノ一〇

イ、ヰ

○飯尾修理進入道—左兵衞督の使者　二〇四ノ一三
○飯盛山—隆資出陣　一四九ノ一三
○伊賀掃部助高光—清氏を討つ　五八一ノ四
○石堂右馬頭賴房（刑部卿）
右兵衞督に侍し落ち行く　二二八ノ四
光明寺に出陣　二六五ノ四
畠山の陣に加はる　二六九ノ一三
薩埵出陣　二九九ノ九
父の叛意を憤る　三二四ノ七
仁木を將として旗擧げ　四九八ノ二
清氏降伏の取なし　五二七ノ六
都攻め　五三二ノ一一
湊川へ押寄す　五八六ノ四
○石堂四郎入道
直義に都落を勸む　二九二ノ一
薩埵出陣　二九九ノ九
新田に同心　三二〇ノ五
鎌倉の勝　三三二ノ二
美濃に到る　三四九ノ六
○石津助五郎行泰—神崎橋の戰　五八五ノ一〇
○伊勢入道—清氏の願書　五二〇ノ三
○一井兵部少輔氏政—鷹巢城防衞　三五ノ三
○市河五郎—最後　四二六ノ一
○一宮彈正左衞門有種
主上を追ふ　三四七ノ三
奮戰　三八二ノ四
○伊地山—畑六郎と高經との戰　三九ノ八
○伊陟　三〇九ノ九
○一角仙人　五四四ノ一二
○一色左京大夫直氏—菊池に破らる　四〇九ノ一
○一色修理大夫範光—菊池に破らる　四〇九ノ一
○生稻四郎左衞門一族—戰死　三八三ノ五
○稻生平次—畠山に密告　五七三ノ一一
○犬
犬獅子　三六ノ七
周王の犬　三六ノ一二
斑犬の怪　一一九ノ五
○犬飼六郎—戰死　一四三ノ一
○居野七郎—戰死　一五〇ノ九
○井彈正
義興に意見　四二二ノ一〇
最後　四二五ノ八
○猪俣彈正左衞門—梶原彈正忠を討つ　二七二ノ一
○井野彌四郎—高備前守を討つ　二八四ノ八
○今川伊豫守
退敗　五三四ノ一一
上洛　五三七ノ五

○足利義詮（左馬頭、宰相中將、將軍）
鎌倉より上洛　二一二ノ一〇
執政　二二一ノ四
尊氏へ使者　二五一ノ七
都落　二五三ノ四
將軍に合し都攻め　二五四ノ一
井原岩籠寺に滯留　二六〇ノ四
上洛　二八九ノ四
尊氏に建議　二九三ノ二
都の守護　二九八ノ一
南都へ和睦の議　三〇五ノ九
天子へ使者　三一〇ノ六
江州へ落つ　三一二ノ七
八幡攻め　三四〇ノ三
洛川の敗　三五六ノ九
近江に落つ　三六二ノ一
播磨へ下る　三六五ノ三
神南に出陣　三八〇ノ三
尊氏追悼の詠　四〇七ノ一三
任征夷將軍　四二一ノ七
南方出征　四三七ノ一〇
歸洛　四六二ノ六
義長を慰む　四六六ノ九
都落ち　四六八ノ七
歸洛　四七一ノ二
今熊野に引籠、歸邸　五二二ノ五
近江武佐寺に落つ　五三四ノ一四
入京　五三七ノ一四
道朝をなだむ　六一四ノ一四
逝去　六五〇ノ一一
○葦名判官
新田に同心　三二〇ノ九
落つ　三二五ノ五
○阿瀬川入道定佛—湯川
庄司を破る　四七二ノ四
○阿蘇大宮司—菊池に叛す　四一二ノ一
○阿度部磯貝　六二六ノ一〇
○賀名生（アナフ）
假御所　一六六ノ三
公卿殿上人來歸　三〇六ノ八
持明院幽居　三一五ノ一二
○阿難尊者　四九五ノ六
○安倍野の戰　一四一—一四五
土岐、明智、佐々木の敗走—正行の慈悲
○安保肥前守忠實
和田新兵衞を討つ　一六〇ノ一四
河原の戰　二五六ノ一三
敗北　二六〇ノ一二
○阿保肥前入道信禪—赤松に敵す　五一一ノ七
○天照大神　一三一ノ五
○阿間了願—奮戰　一四二ノ四
○安西—金鼠百萬　二六一ノ三
○安間一族—義助歡待　五〇ノ一四
○安祿山　五五二ノ五
○菖蒲（女房）　一七ノ六
○阿羅漢果　四九四ノ八
○有資（四條大納言子息）—四國國司　五一ノ七
○有元民部大輔入道—降

師直の建議、進發 二二七ノ八
師泰へ飛脚 二五一ノ七
都攻め 二五四ノ四
都落ち 二五九ノ一〇
引尾に出陣 二六五ノ八
湊川へ向ふ 二六九ノ一一
最後の覺悟 二七五ノ四
上洛 二八二ノ九
義詮の意見 二九三ノ二
直義追討の宣旨 二九七ノ四
薩埵山の大勝 二九八ノ九
武藏に出陣 三二二ノ四
小手差の大敗 三二八ノ三
來歸の諸將 三三四ノ九
笛吹峠の勝 三三五ノ八
上洛 三六五ノ二
江州武佐寺に落つ 三七四ノ四
東坂本に著く 三八〇ノ二
東山に出陣 三九一ノ一
逝去 四〇六ノ一一
贈位 四〇七ノ一三

○足利直冬(宮内大輔、右兵衞佐)
備前下向 一八六ノ八
生立 一八六ノ九
上洛せんとして成らず 二〇六ノ五
肥後に遁る 二一一ノ六
賴尙の聟となる、優勢 二二一ノ七
山名に大將と仰がる、宣旨 三六五ノ五
入京 三七四ノ六
神南の戰 三八〇ノ三
京の戰 三九五ノ九
八幡に引退 三九八ノ八
八幡の託宣 三九八ノ一二
宮下野入道へ使者 五六三ノ一三

○足利直義(左兵衞督)
病氣 七三ノ五
賴遠、行春の成敗 七七ノ八
山門訴狀の裁斷 一〇三ノ二
天龍寺へ參詣 一〇六ノ九
靈夢 一三六ノ一
妙吉侍者の讒訴 一八〇ノ一二
師直誅討の計 二〇三ノ八
參加の人々 二〇六ノ七
將軍邸に到る 二〇八ノ七
尊氏を諫む 二一〇ノ八
隱遁、出家 二一三ノ九
落ち行く 二二八ノ四
院宣 二二九ノ一二
南朝へ降伏 二三〇ノ一二
南朝の勅免 二五〇ノ四
八幡に出陣 二五二ノ一
尊氏と和睦、入洛 二八九ノ三
權勢、子息卒去 二八九ノ七
篠峯越に落つ 二九二ノ一二
八相山に出陣 二九七ノ一〇
鎌倉下向 二九八ノ八
薩埵山に向ふ 二九九ノ八
降伏 三〇四ノ四
死去 三〇四ノ八
贈位 四〇六ノ八

播磨へ下る　五三六ノ一三
○赤松肥前權守朝範
夢想　二六七ノ二
奮戰、蘇生　三八五ノ三
○赤松彌次郎師範
播磨へ下る　二九一ノ三
高倉山に陣す　五一一ノ三
○赤松律師則祐
師直邸に參向　二〇五ノ六
光明寺攻め　二六六ノ一
白旗城に歸る　二六七ノ七
大塔の若宮を戴く　二九一ノ九
京軍に屬す　三四一ノ四
神南の戰　三八一ノ八
南方出征　四三九ノ四
所々の城攻　四七四ノ四
高倉山に陣す　五一一ノ三
兵庫に上る　五三七ノ九
領地沒收せらる　六一一ノ七
○明清（前大判事）―勘狀　一一九ノ一二
○秋庭三郎―多治目を松山城に入る　五六三ノ五
○秋間兵庫助兄弟―戰死　三八三ノ五
○秋山新藏人光政
河原戰　二五六ノ五
討死　二九八ノ二
○秋山彌次郎―戰死　一五〇ノ九
○芥河右馬允―箕浦と共に落つ　五八五ノ二
○惡八郎
畑六郎に仕ふ　三六ノ六
鷹巢城の奮戰　三九ノ一
○飽浦薩摩權守信胤―海路を塞ぐ　五七八ノ四
○明智兵庫助―安倍野の敗　一四一ノ四
○朝倉―敗北　五二六ノ四
○朝倉下野守―京の戰　三九三ノ一三
○阿佐美三郎左衞門―梶原孫七の首を取る　二八五ノ二
○足利尾張守高經（越前修理大夫）
黑丸の敗　一三ノ八
鷹巢城を攻む　三五ノ六
伊地山の奮戰　三九ノ九
山名へ急使　三七三ノ七
上洛　三七四ノ六
叛意の原因　三七四ノ一一
京の戰　三九六ノ一
○足利左馬頭基氏
鎌倉落ち　三三二ノ六
畠山道誓の建議　四三三ノ二
道誓を追ふ　五二九ノ三
畠山を討たしむ　五四八ノ六
畠山に降伏を促す　五七三ノ四
芳賀征討　六〇一ノ一四
逝去　六四七ノ五
○足利尊氏
山門訴狀の裁斷　一〇三ノ二
天龍寺へ參詣　一〇六ノ九
直義へ使者　二〇八ノ五
師直へ使者　二〇九ノ一〇
直冬方蜂起の註進　二二六ノ一一

太平記下卷索引

（見出しはすべて發音に従ひ五十音順に排列す）

ア

○饗庭命鶴丸
和睦の議 二七七ノ六
小手差の敗 三二七ノ九
○粟飯原下總守淸胤
師直誅討の議 二〇三ノ八
師直に密告 二〇四ノ二
○粟飯原下野守—戰死 三六〇ノ五
○粟飯原彦五郎—奮戰 三八二ノ五
○青木次郎—和田新兵衛を射る 一六一ノ五
○青砥左衛門—逸話 四八四ノ六
○赤坂城
和田、楠楯籠る 四三九ノ一三
落城 四五九ノ一
○縣下野守
白旗一揆の旗頭 一四九ノ二
敗北 一五一ノ二
○縣二郎—神崎の戰 五一六ノ八
○赤星掃部助武貫—戰死 四一五ノ一三
○赤松信濃五郎範直
播磨へ下る 二九一ノ七
多田部城に籠る 五八六ノ三
○赤松信濃守範資
藤井寺に戰ふ 一二六ノ八
將軍へ使者 二六九ノ一
最後の覺悟 二七五ノ一三
○赤松彈正少弼氏範
師直邸に參向 二〇五ノ六
長山遠江守と一騎打 三五八ノ一三
京の戰 三九五ノ三
謀叛 四四九ノ一一
高倉山に陣す 五一一ノ三
船路天王寺に向ふ 五三七ノ九
○赤松筑前守範貞
藤井寺に戰ふ 一二六ノ八
住吉に戰ふ 一四一ノ三
播磨へ逃下る 二九一ノ七
○赤松筑前入道世貞
南方出征 四三九ノ四
所々の城攻 四七三ノ四
高倉山に陣す 五一一ノ三
兵庫に上る 五三七ノ八
○赤松入道圓心—師直邸に參向、擧兵 二〇五ノ七
○赤松判官光範
南方出征 四三八ノ一一
天王寺に籠る 四六五ノ一一
高倉山に陣す 五一一ノ三
攝津守護職被免 五一四ノ三
○赤松彦五郎範實
龍泉寺の先駈 四五四ノ一〇
都攻めの相圖 五三三ノ二

外相内德―外見と內實の行

少し先代貞永貞應の舊規に相似たりと聞えける間、則天下の管領職に令レ居、御幼稚の若君を可レ奉二輔佐一と、群議同趣に定りしかば、右馬頭賴之を武藏守に補任して、執事職を司る。外相内德げにも人の云に不レ違しかば、氏族も是を重じ、外樣も彼命を不レ背して、中夏無爲の代に成て、目出たかりし事共也。

太平記下卷　終

途轍―方法

共、彼大聖釋尊、雙林の必滅に、耆婆が靈藥も其驗無りしは、寔に浮世の無常を、預示し置れし事也。何の藥か定業の病をば癒すべき。是明けき有待轉變の理なれば、同十二月七日子刻に、御年三十八にて、忽に薨逝し給にけり。天下久く武將の掌に入て、戴レ恩慕レ徳者幾千萬と云事を不レ知。歎き悲けれ共、其甲斐更に無りけり。さて非レ可レ有とて、泣々葬禮の儀式を取營て、衣笠山の麓、等持院に奉レ遷。同十二日午刻に荼毘の規則を調て、佛事の次第嚴重也。鎖龕は、東福寺長老信義堂、起龕は、建仁寺澤龍湫、奠湯は萬壽寺桂巖、奠茶は眞如寺清闇西堂、念誦は天龍寺春屋、下火は、南禪寺定山和尚にてぞおはしける。文々に悲涙の玉詞を瑩き、句々に眞理の法義を被レ宣しかば、尊儀速に出二三界苦輪一、直到二四徳樂邦一給らんと、哀なりし事共也。去程に今年は如何なる年なれば、京都と鎌倉と相同く、柳營の連枝忽に同根空く枯給ぬらん。誰か武將に備り、四海の亂をも可レ治と、危き中に愁有て、世上今はさてとぞ見たりける。

○細川右馬頭自二西國一上洛事

爰に細川右馬頭頼之、其比西國の成敗を司て、敵を亡し人をなつけ、諸事沙汰の途轍、

玄圃、芝山—共に帝闕をいふ

より込入て、縱横無礙に切て廻しかば、南都の大衆は大勢也といへども、怺兼て、北の門より一條大路へ、白雲の風に雲珠卷が如にぞ靉出たりける。されば南庭の白砂の上には、手蓋侍從を始として、宗徒の衆徒八人まで、尸を雙て斬伏らる。山門方にも手負數多有けり。半死半生の者共を、戸板楯なんどに載て、舁連たる有樣、前代未聞の事共也。淺ましい哉、紫宸北闕の雲の上、玄圃茨山の月の前には、霜劍の光冷して、干戈の場と成しかば、御溝の水も紅を流し、著座の公卿大臣も束帶悉く朱の色に染成て、あきれ給計也。さしも是程の騷動なりしか共、主上は是にも騷がせ給ふ御事もなく、手負死人どもを取捨させ、血を濯淸させ、席を改させられて、最勝講をば無仔細被遂行けるとかや。是則嚴重の御願、天下の大會たるに、斯る不思議出來ぬれば、就公私不吉の前相哉と、人皆物を待心地ぞせられける。

○將軍薨逝事

斯る處に、同九月下旬の比より、征夷將軍義詮身心例ならずして、寢食不快しかば、和氣丹波の兩流は不及申、醫療に其名を被知程の者共を召て、樣々の治術に及しか

る。興福寺より十人、東大寺より二人、延暦寺より八人也。園城寺は今度の訴訟に、是非の左右に不レ及間、不レ可レ従二公請一由、所存中に依て、四箇の一寺は被レ除畢。證義は前大僧正懐雅、山門の慈能僧正をぞ被レ召ける。講演論場の砌には、學海池水を涌し、慧劍を令レ闘事なるに、南都北嶺の衆徒等、於二南庭一不慮に喧嘩を引出して、散々の合戦にぞ及ける。紫宸殿の東、薬殿の前には南都の大衆、西の長階の前には山門の衆徒列立したりけるが、南都の衆徒は、面々に脇差の太刀なんど用意の事なれば、拔連て切て懸る。山門の大衆は、太刀長刀も不レ持ければ、爭か可レ叶、一歩も不二践止一紫宸殿の大床の上へ被二捲上一、足手にも不レ係けるに、光圓坊良覺、一心坊越後註記覺存、行泉坊宗運、明靜房學運、月輪房同宿圓光房、十乗房を始として、宗徒の大衆、腰刀計にて取て返し、勇誇たる南都の衆徒の中へ面も不レ振切て入る。中にも一心房越後註記は、南都若大衆の持たる四尺八寸の太刀を引奪て、我一人の大事と切て廻けるに、奈良法師被二切立一、村雲立て見えける處に、手蓋侍従房唯一人蹈留て、一足も不レ退喚叫で切合たり。追廻し追靡け、時移る程闘けるに、山門の衆徒、始は小勢にて而も無用意也ける間、叶べくも不レ見けるが、山徒の召仕し中方の者共、太刀長刀の鋒を調へ、四脚の門

關務の禪僧―關所に詰番して通行人より料金を取立つる役僧

人工行者―人夫と修行者との意

鳥使云々―飛脚の往來するをいふ

同六月十八日園城寺の衆徒蜂起して、公武に致二列訴一事あり。其謂を何事ぞと尋ぬれば、南禪寺爲レ造營、此比建たる於二新關一、三井寺歸院の兒を、關務の禪僧是を殺害す。是希代の珍事とて、寺門の衆徒鬱憤を散ぜんと、大勢を率し、不日に推寄て、當務の僧共人工行者に至迄打殺すのみならず、猶も憤を不レ休、南禪寺を令二破却一、達磨宗の蹤跡を削て、爲レ令レ達二宿訴一、忽に嗷訴にぞ及ける。即山門南都へ牒送して、四箇の大寺の安否を可レ定由、已に往日の堅約也、何の餘議にか可レ及。一同に觸訴て、事令二遲々一、神輿、神木、神座の本尊、共に可レ有二入洛一訇ければ、すはや天下の重事出來ぬるはと、有レ才人は潜に是を危けり。されども事大儀なれば、山門も南都も急には不二思立一。結句山門には、東西兩塔に樣々の異議有て、三塔の事書、鳥使翅を費許也。然ば無二左右一可レ事行一共不レ覺、公方の御沙汰は、裁許無二其期一しかば、園城寺は款狀徒に被レ抛て、忿の中に日數をぞ送ける。

○最勝講之時及二鬪諍一事

去程に同八月十八日、最勝講可レ被レ行とて、南都北嶺に課て、所作の人數をぞ被レ召け

早諸卿ー以下廿二字原本之を脫す異本之を補ふ

因レ茲將軍御參內の事可レ有二斟酌一由、再三被レ經二奏聞一しかども、是寺已に勅願寺たる上は、最天聽を驚す所なれども、如レ此の據二災殃一臨レ期宸宴を被レ止事無二先規一。早諸卿參勤せしむべき者なり。武家何の斟酌か有るべきと被二仰下一しかば、此問答に時遷て、御參內も夜深過る程になり、御遊も翌日に及けるとかや。淺ましかりし事共也。

○左馬頭基氏逝去事

斯ては天下も如何と危める處に、今年の春の比より、鎌倉左馬頭基氏、聊不例の事有と聞えしかば、貞治六年四月二十六日、生年二十八歲にて忽に逝去し給けり。連枝の鍾愛は多けれども、此別に至ては爭か可レ不レ悲。翅や是は唯二人、二翼兩輪の如くに、華夷の鎭撫と成給しかば、さらぬ別の悲さもさる事ながら、關東の柱石摧ぬれば、柳營の力衰ぬと、愁歎特に不レ淺。就レ之京都大に怖愼て、祈禱なども可レ有と沙汰ありけり。

○南禪寺與二三井寺一確執事

にかけたる雨落の樋也

招提―寺の事をいふ

笙は前右衛門督利時、拍子は綾小路三位成方、琴は公全朝臣、附歌者宗泰朝臣也。呂には此殿、鳥の破、席田、鳥の急、律には、萬歳樂、伊勢海、三臺の急也けり。玉笙の聲の中には、鳳鳥も來儀し、和琴の調の間には、鬼神も感動するかとぞ覺えし。此宸宴に有御所作事邂逅也。建保には御琵琶にて有ける也。其後は稀なる御事なるを、今此御宇に詩歌兩度の宸宴に、毎度の御所作難有事とぞ聞えし。斯る大會は、聊の故障もある事なるに、一事の違亂煩なく、無爲に被遂行ぬれば、萬邦礒城島の政道に歸し、四海難波津の古風を仰で、人皆柿本の遺愛を戀るのみならず、世擧て柳營の數寄を感嘆し、翌日午刻許に人々被退出しかば、目出なんど云ふ許なし。さても中殿の御會と云事は、吾朝不相應宸宴たるに依て、毎度天下に重事起ると人皆申慣せる上、近臣悉眉を顰て、諫言を上たりしかども、一切無御承引、終に被遂行けり。さるに合せて、同三月二十八日丑刻に、夥敷天變西より東を差て飛行と見えしが、翌日二十九日申刻に、天龍寺新造の大厦土木の巧未終、失火忽に燃出て、一時の灰燼と成にけり。殊更に此寺は公家武家尊崇異于他して、五山第二の招提なれば、聊爾にも攘災集福の懇祈を專にする大伽藍なるに、時節にそあれ、不思議の表示哉と、貴賤唇をぞ飜ける。

日已に内樋云々―夜明けて朝日の光のさし込みたる也、内樋は内殿

奉謁龍顔、忝佐萬機之政。親奏鳳詔、聊記一日之遊。其辭曰、

つかへつゝ齢は老ぬ行末の、千年も花になほや契らん。

此次に右大臣正二位臣藤原朝臣實俊、内大臣正二位臣藤原朝臣師良、正二位行陸奥出羽按察使藤原朝臣實繼、此次は征夷大將軍正二位臣源朝臣義詮、正二位行權中納言臣藤原朝臣時光、正二位行權中納言藤原朝臣爲秀、權中納言從三位兼行左衛門督臣藤原朝臣忠光、此次參議從三位兼行侍從兼備中權守臣藤原朝臣行忠、從三位兼右兵衛督臣藤原朝臣爲遠、藏人内舍人六位上行式部大丞臣藤原朝臣懷國等に至迄、披講事終て、講師皆退給ければ、講誦の人々、猶可伺候由、依天氣關白讀師の圓座に著給しかば、別勅にて權中納言時光卿を被召、御製の講師として、

開匂ふ雲居の花の本つ枝に、百代の春を尚や契覽。

講誦十遍許に及しかば、日已に内樋に耀く程也。されば物の色合さだかに、花の薫も懷しく、霞立けはひも最艶なるに、面々の詠歌の聲も、雲居に通へる心地して、身に入許ぞ聞えける。御製の披講終て、各本座に退けば、伶人にあらざる人々も座を退く。其後驪御遊始り、笛は三條大納言實知卿、和琴は左宰相中將實綱、篳篥は前兵部卿兼親、

料也
冷泉院中納言—院の字は蓋し衍也

卿如レ此の行跡たりし其例とぞ申合ける。富小路前宰相中將、冷泉院中納言、藤中納言、鎌倉大納言、内大臣、右大臣、關白なんどの懷紙、各膝行皆思々也。關白は依二建保之例一雖レ爲二序者一、任二位次一置レ之。又直衣蹈くゝみて膝行あり。故大閤元德の中殿の御會に被レ參しに、此作法侍けるとかや。右大臣依レ爲二讀師一、直に御前の圓座に著し給て、講師仲光を召す。又序を爲レ講、由二別勅一時光卿を被レ召、右大辨爲重を召て、懷紙を令レ重。序より次第に是を讀上たり。

春日侍二中殿一同詠二花多春友一
應レ製和歌一首竝序
關白從一位臣藤原朝臣良基上

夫天之仁者春也、地之和者花也。則二天地悠久之道一、而施二於不仁之仁一、玩二煙霞明媚之景一而布二大和之和一。黃鶯呼レ友、遷二萬年之枝一、粉蝶作レ舞、戲二百里之囿一。鑠乎聖德、時哉宸宴、爰騰二歌詠於五雲之間一、忽興二治世之風一。奏二簫韶於九天之上一、再聞二太古之調一。況又玉笙之操、高引二紫鸞之聲一焉。奎章之巧、新賡二素鵞之詞一矣。盛禮之世、未二必弄二雅樂一兼レ之者此時也。好文之主、未二必携二和語一兼レ之者我君也。一場偉觀千載之徵猷者耶。小臣久

打の御袴ー打ちたる絹にて作れる袴也

懐紙ー檀紙などの切らざるものにて歌を書く

木尾張守高信、安東信濃守高泰、曾我美濃守氏助、小島掃部助詮重、朝倉小次郎詮繁、同又四郎高繁、彦部新左衛門尉秀光、藤民部五郎左衛門盛時、八代新藏人師國、佐脇右京亮明秀、藁科新左衛門尉家治、中島彌次郎家信、後藤伊勢守、久下筑前守、荻野出羽守、横地山城守、波多野出雲守、濱名左京亮、長次郎、是等の人々思々の直垂にて、飼たる馬に厚總懸て、折花盡美、將軍堂上の後、帶刀の役人は、皆中門の外に敷皮を布て列居す。先依別勅御前の召あり。關白殿御前に被參。其後刻限に至て、人々殿上に著座あり。右大臣、内大臣、按察使實繼、藤中納言時光、冷泉中納言爲秀、別當忠光、侍從宰相行忠、小倉前宰相實名、二條宰相中將爲忠、富小路前宰相中將實遠なんどぞ被參ける。關白殿奉行職事仲光を召て、事の具否を尋らる。軈被伺出御。御衣は黄直衣打の御袴也。關白殿著座有て後、頭左中辨嗣房朝臣を召て、公卿可著座由を仰す。嗣房出殿上、諸卿を召す。右大臣内大臣以下次第に著座有しかば、將軍は殿上にて著座し給はで、直に御前に進著せらる。爾後嗣房朝臣、仲光、懐國、五位殿上人伊顯なんど、面面の役に隨て、燈臺圓座懐紙等を置く。爲敦、爲有、爲邦朝臣、爲重、行輔なんど迄著座ありしかども、右兵衛督爲遠は、御前には不著、殿上の邊に徘徊す。是は建保に定家

修理亮地香の直垂—原本地香の三字を脱す、異本に據りて補ふ

黄蔙—草の名、黄色の染料とす

佩て、左に歩む。右は齋藤三郎左衛門尉清永、地香の直垂に、二筋違の中に、銀箔にて瞿麥を押たる黄腰に、鯎の太刀を佩たり。次に大内修理亮、地香の直垂に、金箔にて大菱を押、打鯎に金作の太刀を佩く。右は海老名七郎左衛門尉詮季、地黑に茶染の直垂に、金箔にて大笳籠を押て、黄なる腰に白太刀佩たり。次に本間左衛門太郎義景、地白紫の片身がはりの直垂に、金銀の箔にて、十六目結を押、紅の腰に白太刀を佩く。右に山城四郎左衛門尉師政、地白に金泥にて洲流を書たる直垂に、白太刀佩て相隨ふ。次に粟飯原彈正左衛門尉詮胤、地黄蔙に銀泥にて水を書、金泥にて鷄冠木を書たる直垂、大帷は香なるに黄腰に、白太刀を佩たり。山々敷ぞ見たりける。此次に征夷大將軍正二位大納言源朝臣義詮卿、薄色の立紋の織物の指貫に紅の打衣を出し、常の直垂也。左の傍に山名民部少輔氏淸、濃紫の指貫に欵公色の狩衣著して、帶劍の役に隨へり。右は攝津掃部頭能直、薄色の指貫白靑織物の狩衣著て、沓の役に候す。佐々木備前左郎左衛門尉高久、二重狩衣にて、御調度の役に候す。本鄕左近大夫將監詮泰は、香の狩衣にて、笠の役に隨ふ。今川伊豫守貞世は侍所にて、爽に甲たる隨兵百騎許召具して、轅門の警固に相隨ふ。此外土岐伊豫守直氏、山城中務少輔行元、赤松大夫判官光範、佐々

嘉躅―嘉例

直盧―攝關の休息所

鰄―刀の鞘を蝶鮫の皮にて包めるをいふ

撰なんど被申行上、近比は建武の宸宴、贈左府の嘉躅非無由緒被仰出しかば、不及仔細領掌被申けり。因茲藏人左少辨仲光を奉行にて、三月二十九日を被定、勅喚の人々に賦題。花多春友と云題を、任建保例兼日に關白被出けるとかや。既に其日に成しかば、母屋の廂の御簾を捲て、階の西の間より三間北にして、一間に各菅の圓座を布て、公卿の座とす。長治元年には雖爲二行今度は關白殿の加樣に座を被設。御帳の東西には、三尺の几帳を被立、晝の御座の上には、御劍御硯箱を被置たり。大臣の座の末參議の座の前には、各高燈臺を被立たり。關白直盧より御參あれば、内大臣已下相隨ひ給ふ。任保安例今日已に直衣始の事あり。前驅布衣隨身褐衣如常なれば、差たる見事は無りけり。丑刻許に將軍已に參内あり。其行粧、見物の貴賤皆目を驚かせり。公家家禮の人々には、爲秀、行忠、實綱卿、爲邦朝臣なんど、庭上に下て禮あり。左衛門陣の四脚に、將軍卽參入あり。先帶刀十人、左右に相番て曳列。左は佐々木佐渡四郎左衛門尉時秀、地白の直垂に、金銀の箔にて、四目結を押たる紅の腰に、鰄の金作の太刀を佩く。右は小串次郎左衛門尉詮行、地緇の直垂に、銀箔にて二雁を押、白太刀を佩く。次に伊勢七郎左衛門貞行、地白の直垂に、金箔にて村蝶を押て、白太刀を

池月久澄―金勝院本に久明に作る、可なるが如し

嘉承―原本嘉永に作る誤也

知召けるにや。神代の風俗也。何れの君か是を捨給ん。聖代の敎誡也。誰人か不ㇾ翫ㇾ之。抑中殿の宸宴と申侍るは、後冷泉院天喜四年三月畫工の櫻花を叡覽有て土御門大納言師房卿に勅して、新成ニ櫻花一と云題を令ㇾ獻、清涼殿に召ニ羣臣一、御製を被ㇾ加、同く絲竹の宴會あり。自ㇾ爾以來、白河院應德元年三月、左大辨匡房に勅して、花契ニ多春一と云題を令ㇾ獻、於ニ中殿一被ㇾ講ㇾ之。又堀河院御代永長元年三月、權大納言匡房卿に仰て、花契ニ千年一と云題を令ㇾ獻、宴遊を被ㇾ伸。又崇德院御宇天承元年十月、權中納言師賴に勅して、松樹緣久と云題を令ㇾ獻、宸宴有き。其後建保六年八月、順德院光明峯寺の關白に勅して、池月久澄と云題を令ㇾ獻、被ㇾ講き。次に後醍醐院御宇元德二年二月、權中納言爲定卿に勅して、花契ニ萬春一と云題にて、中殿の御會を被ㇾ行。此外承保二年四月、長治二年三月、嘉承二年三月、建武二年正月、清涼殿にして和歌の宸宴雖ㇾ在ㇾ之、非ニ一二度一、中殿の御會、先規には不ニ加侍一にや。加樣の先蹤、皆聖代の洪化なり。何ぞ不快の例といはんや。然るに今年の春は、九城の裏の花香く、八島の外に風治れる時至れり。早く尋ニ建保芳躅一、題竝序の事、關白可ㇾ被ㇾ獻之由、強て有ニ勅定一しかば、中殿の御會の事、內々已に定りにけり。征夷將軍も、此道に數寄給ふ事なれば、勅

中殿の御會—清涼殿に於て歌會を催し酒宴するをいふ

治れる世の音云々—禮記十一に出づ

○中殿御會事

貞治六年三月十八日長講堂へ行幸あり。是は後白河法皇の御遠忌追賁之御爲に、三日まで御逗留有て、法華御讀經あり。安居院良憲法印、竹內僧正慈照、導師にぞ被參ける。難有法會なれば、聽聞の緇素不隨喜云者なし。總じて此君御治天の間、萬機絕興廢御座す叡慮也しかば、諸事の御遊に於て、不盡云事不御座。故に中殿の御會は、累世の規摸也。然るを此御世に未無其沙汰。仍連々思召立しかば、關白殿其外の近臣に內々被仰合、中殿宸宴は大儀なる上、每度天下の凶事にて、先規不快の由、面々一同に被申ければ、重て有勅定けるは、聖人有謂、詩三百、一言以蔽之、曰思無邪と。去ば治れる世の音は安して樂む。亂たる世の音は、恨で忿るといへり。日本歌も可如此。政を正して、邪正を敎へ、王道の興廢を知は此道也。されば昔の代々の帝も、春の花の朝、秋の月の夜、事に附つゝ、歌を合て奉らん人の惠、賢愚なるをも

に據て改む

追賁―追善

八相成道の遠き縁を結ぶ。是又善性善子の珊提嵐國に仕へし孝にも過ぎ、淨藏淨眼の妙莊嚴王を化せし功にも越たれば、十方の諸佛も明に此追賁を隨喜し給ひ、六趣の群類も定て其餘薰にこそ闕るらめと、被ㇾ思知ㇾ御作善也。

虞祔の御祭―釋名に、既葬還祭ニ於殯宮ニ曰レ虞、又曰祭曰レ祔云々、葬後の附祭をいふ也

八苦―生老病死の四苦に、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五盛陰苦を加へて八苦といふ

第七回―原本三回に作る毛利家本

奉る。哀仙院芝山の晏駕ならましかば、百官涙を滴て、葬車の御迹に隨ひ、一人悲を呑で、虞祔の御祭をこそ營せ給ふべきに、浩る御事とだに知人もなき山中の御葬禮なれば、唯徒に鳥啼て挽歌の響をそへ、松咽で哀慟の聲を助る計也。夢なる哉、往昔の七夕には、長生殿にして、二星一夜の契を惜て、六宮の美人兩階の伶倫、臺下に曲を奏して、乞巧奠をこそ備へさせられしに、悲哉、當年の今日は、幽邃の地にして、三界八苦の別に逢て、萬乘の先王一山の貫頂、山中に棺を荷て、御葬送を營せ給ふ。唯千秋亭の月、有待の雲に隱れ、萬年樹の花無常の風に隨ふが如し。されば遶レ砌山川も、是を悲て雨となり、雲となる歟と怪まる。無レ心草木も是を悼て、葉落花萎めるかと疑はる。感レ恩慕レ徳舊臣多といへども、豫勅を遺されしに依て、參集る人も稀なりしかば、纔に籠僧三四人の勤にて、御中陰の菩提にぞ資し奉ける。御國忌の日ごとに、種々の御作善、積功累徳せらる。殊更に第七回に當ける時は、纎體の天子今上皇帝、御手自一字三禮の紺紙金泥の法華經をあそばされて、五日八講十種供養あり。伶倫正始の樂は、大樹緊那羅琴の音に通じ、導師稱揚の言は、富樓那尊者の辯舌を展たり。結願の日に當て、薪を採て雪を荷ふ夕郎は、千載給仕の昔の跡を重くし、水を汲て月を運ぶ雲客は、

中使―禁中よりの使

御簾を被レ褰、月卿雲客は庭上の外まで送進せて、皆涙にぞ立ぬれ給ける。道すがらの山館野亭を御覽ぜらるゝにも、先年羑里の囚に逢せ給て、一日片時も難レ過と、御心を傷しめ給し松門茅屋あり。戰圖に入山中ならずは、斯る處にぞ住なましと、今は昔の憂栖を御慕有けるぞ悲き。諸國御抖擻の後、光巖院へ御歸有て、暫御座有けるが、中使頻に到て、松風の夢を破り、舊臣常に參て、蘿月の寂を妨ける程に、此も今は住憂と思召、丹波國山國と云所へ迹を銷て移せ給ける。山菓落レ庭、朝三食飽二秋風一、柴火宿レ爐、夜薄衣防二寒氣一。吟肩骨痩擔レ泉慵時、石鼎湘レ雪、三椀茶飲二清風一。仄歩山嶮折レ蕨倦時、岩窗嚼レ梅、一聯句甘二閑味一給ふ。身の安を得る處卽心安し。出有二江湖一、入有二山川一と、一乾坤の外に逍遙して、破蒲團の上に光陰を送らせ給けるが、翌年の夏比より、俄に御不豫の事有て、遂に七月七日に隱させ給けり。

○法皇御葬禮事

此時の新院光明院殿も、山門貫首梶井宮も、共に皆禪僧に成せ給て、伏見殿に御座有ければ、急ぎ彼遷化の山陰へ御下り有て、御茶毗の事共、取營せ給て、後の山に葬し

聰明文思ー堯典に昔在帝堯聰明文思光㆓宅天下㆒とあり
三隅の高察ー論語述而篇に出づ、一方をいへば他の三方の事を察知すること
兩年を過るー觀應三年より延文二年迄にて實は六年也

羨敷こそ候へと、尋申させ給ければ、法皇御涙に咽て、暫は御詞をも不ㇾ被ㇾ出。良有て、聰明文思の四德を集て叡旨に係候へば、一言未ㇾ擧先に、三隅の高察も候はん歟。予元來萬劫煩惱の身を以て、一種虛空の塵にあるを、本意とは存ぜざりしか共、前業の嬰る所に、舊緣を離兼て、可ㇾ住荒增の山は心に乍ㇾ有、遠く待れぬ老の來る道をば留る關も無て、年月を送し程に、天下の亂一日も休む時無りしかば、元弘の始には、江州の番馬まで落下り、五百餘人の兵共が自害せし中に交て、腥羶の血に心を醉しめ、正平の季には、當山の幽閉に逢て、兩年を過るまで秋刑の罪に膽を嘗き。是程されば世は憂物にて有ける歟と、初て驚許に覺候しかば、重祚の位に望をも不ㇾ懸、萬機の政に心をも不ㇾ留しか共、一方の戰士我を強て本主とせしかば、可㆓遁出㆒隙無て、哀いつか山深き栖に雲を友とし松を隣として、心安く生涯を可ㇾ盡と、心に懸て念じ思し處に、天地命を革て、讓位の儀出來しかば、蟄懷一時に啓て、此姿に成てこそ候へと、御涙の中に語盡させ給へば、一人諸卿諸共に、御袖をしぼる計也。今はとて御歸あらんとするに、寮の御馬を進せられたれ共、堅く御辭退有て召れず。いつしか疲させ給ぬれども、猶如ㇾ雪なる御足に、荒々としたる鞋を召れて立出させ給へば、主上は武者所まで出御成て、

不輕菩薩—法華經不輕品に詳し、罵詈打擲するものまでも禮拜せしよりかく異名を附したりといふ

寛平—宇多帝を指す

間常隨給仕申候て、佛神三寶の御とがめをも免れ候はんとぞ申ける。よしや不輕菩薩の路を行給しに、罵詈誹謗する人をも不咎、打擲蹂躙する者をも、却て敬禮し給き。況や我已に貌を窶して、人其昔を不知、一時の誤何か苦かるべき。出家は誠に因縁不思議なれ共、隨順せん事は努々叶まじき由を被仰けれども、此者強て片時も離れ進せざりしかば、曉閼伽の水汲に被遣たる其間に、順覺を召具して、潛に高野をぞ御出有ける。御下向は大和路に懸らせ給しかば、道の便も好とて、南方の主上の御座ある吉野殿へ入せ給ふ。此三四年の先までは、兩統南北に分れ、此に戰ひ、彼に寇せしかば、吳越の會稽に謀しが如く、漢楚の覇上に軍せしにも過たりしに、今は散聖道人と成せ給て、玉體を麻衣草鞋にやつし、鑾輿を跣行の徒渉に易て、遙々と此山中迄分入せ給たれば、傳奏未事の由を不奏先に、直衣の袖をぬらし、主上未御相看なき先に、御淚をぞ流させ給ける。是に一日一夜御逗留有て、樣々の御物語有しに、主上、さても唯今の光儀、覺ての後の夢、夢の中の迷かとこそ覺て候へ。縱仙院の故宮を棄て、釋氏の眞門に入せ給ふとも、寬平の昔にも准へ、花山の舊き跡をこそ追れ候べきに、尊體を浮萍の水上に寄て、叡心を枯木の禪餘に被附候ぬる事、如何なる御發心にて候けるぞや。御

いふ

上乘—密教をいふ

赤肉中臺—衆生の赤肉中に覺性のあるをいふ

安居—修行の爲に一夏九旬の間閑室にありて繩床に坐するをいふ

向なる悪人にては無りけるよと、今爰に思召知せ給ふ。落花爲レ雪空無レ重、深樹謬レ昏日未レ傾。其日頓て奥の院へ御參詣有て、大師御入定の室の戸を開かせ給へば、嶺松含レ風顯二瑜伽上乘之理一、山花籠レ雲祕二赤肉中臺之相一。前佛の化緣は過ぬれ共、五時の說今耳に有かと覺ゆ。慈尊の出世は遙なれ共、三會の粧已に眼に如レ遮。三日まで奥の院に御通夜有て、曉立出させ給に、一首の御製あり。

　高野山迷の夢も覺るやと、其曉を待ぬ夜ぞなき。

安居の間は、御心閑に此山中にこそ御座あらめと思召て、諸堂御巡禮ある處に、唯今出家したる者と覺くて、濃墨染にしをれたる桑門二人御前に畏て、其事となく唯さめざめとぞ泣居たりける。何者なるらんと怪く思召て、つくづくと御覽じければ、紀伊川を御渡有し時、橋の上より法皇を押落し進せたりし者共にてぞ有ける。不思議や何事に今遁世をしけるぞや。是程無レ心放逸の者も、世を捨る心の有けるかと思召て過させ給へば、此遁世者御後に隨て、順覺に泣々申けるは、紀伊川を御渡候し時、懸る無二止事一御事とも知奉り候はで、玉體にあしく觸奉し事、餘に淺ましく存候て、此貌に罷成て候。佛種は從レ緣起る儀も候なれば、今より薪を拾ひ、水を汲態にて候とも、三年が

—殊更に威容を示すをいふ

芳躅を踏む—先例に傚ふといふに同じ

六大—地水火風空識を

り眼する者にてぞある覽と覺たる武士七八人、後より來りけるが、法皇の橋の上に立せ給たるを見て、此なる僧の臆病氣なる、見度もなさよ。是程急ぐ道の一つ橋を、渡らばと く渡れかし。さなくば後に渡れかしとて、押のけ進せける程に、法皇橋の上より被二押落一させ給て、水に沈ませ給にけり。順覺あら淺ましやとて、衣乍ㇾ著飛入て、引起し進せければ、御膝は岩のかどに當て血になり、御衣は水に漬てしぼり不ㇾ得。泣々傍なる辻堂へ入れ進せて、御衣を脱替させ進せけり。古も浩る事やあるべきと、君臣共に捨る世を、さすがに思召出ければ、涙の懸る御袖は、ぬれてほすべき隙もなし。行末細き針道を經て、御登山有ければ、山又山水又水、登臨何日盡さんと、身力疲て被二思召一にも、先年大覺寺法皇の、此寺へ御幸成しに、供奉の卿相雲客諸共に、一町に三度の禮拜をして、首を地に著け、誠を致されける事も、難ㇾ有かりける御願哉。予が在位の時も、世靜なり共、などか其芳躅を不ㇾ蹈と、思召准らる。さて御山にも御著有しかば、大塔の扉を開せて、兩界の曼荼羅を御拜見あれば、胎藏界七百餘尊、金剛界五百餘尊をば、入道太政大臣清盛公手ら書たる尊容也。さしも積惡の淨海、如何なる宿善に被ㇾ催、懸る大善根を致けん。六大無礙の月晴る時有て、四曼相卽の花可ㇾ發春を待けり。さては是も唯一

肘後の府—手首に懸けし官府の文書

作り眼する

も、捨ぬ世ならば、何故か浩る風景をも可見と被仰けるも物悲し。是より高野山を御覽ぜんと思召て、住吉の遠里小野へ出させ給たれば、燒痕回緑春容早、松影脊紅日脚西なり。海天野景歩に隨て新なる風流に、御足たゆむ共不被思召。昔は銷金輕羅の茵ならでは、假にも蹈せ給はざりし玉趾を、深泥濕土の黯に汚れさせ給ひ、御供の僧は、仕て懸し肘後の府に替れる一鉢を脇にかけ、今夜境浦までも歩ませ給へば、鹽の干潟にむれ立て、玉藻を拾ひ、礒菜取る海人共の、各つげの小櫛を差て、葦間に隱れ顯れたる樣を被御覽にも、御貢備し民の營、是程に身を苦めけるをしらで、等閑にすさびける事よと、今更淺ましく思召知せ給ふ。回首望東、雲に聯なり霞に消て、高く峙てる山あり。道に休める樵に山の名を問はせ給へば、是こそ音に聞え候金剛山城とて、日本國の武士共の、幾千萬と云數をも不知、討れ候し所にて候へとぞ申ける。是を聞召て、穴淺ましや、此合戰と云も、我一方の皇統にて、天下を爭しかば、其亡卒の惡趣に墮して、多劫が間苦を受けん事も、我罪障にこそ成ぬらめと、先非を悔させ御座す。經日紀伊川を渡らせ給ける時、橋柱朽て見るも危き柴橋あり。御足冷く御肝消て、渡かねさせ給たれば、橋の半に立迷ておはするを、誰とは不知、如何樣此邊に、臂を張り作

姑射山—仙人の住處なるよりやがて仙洞の所在地をいふ

汾水陽—汾水の北に昔堯の都あり此も亦上皇の御所をいふ也汾水は今の普州平陽縣にあり

○光嚴院禪定法皇行脚御事

光嚴院禪定法皇は、正平七年の比、南山賀名生の奥より楚の囚を被ㇾ許させ給て、都へ還御成たりし後、世の中をいとゞ憂き物に思召知せ給しかば、姑射山の雲を辭し、汾水陽の花を捨て、猶御身を輕く持たばやと思召けり。御荒増の末通て。方袍圓頂の出塵の徒と成せ給しかば、伏見里の奥光嚴院と聞えし幽閑の地にぞ住せ給ける。是も猶都近き所なれば、舊臣の參仕へんとするも厭はしく、浮世の事の御耳に觸るも冷く思召ければ、來無ㇾ所ㇾ止去無ㇾ住、柱杖頭邊活路通ずと、中峯和尚の被ㇾ作送行偈、誠に由ありと御心に染て、人工行者の一人をも不ㇾ被二召具一、唯順覺と申ける僧を一人御供にて、山林抖擻の爲に立出させ給ふ。先西國の方を御覽ぜんと思召て、攝津國難波浦を過させ給ふに、御津の濱松霞渡て、曙の氣色物哀なれば、遙に被二御覽一て、

誰待てみつの濱松霞らん、我が日の本の春ならぬ世に。

と、打涙ぐませ給ふ。山遠き浦の夕日の浪に沈まんとするまで興ぜさせ給て、猶過うしと思召たるに、望無ㇾ窮水接二天色一、看不ㇾ盡山映二夕暉一と云對句の時節に相叶たる

數萬人の夷共、一人も不レ殘浪に溺て亡にけり。是を見て三韓の夷の王、自罪を謝して降參し給しかば、神功皇后御弓の末弭にて、高麗の王は我が日本の犬也と、石壁に書附て歸らせ給ふ。是より高麗我朝に從て、多年其貢を獻る。古は呉服部と云綾織、王仁と云才人、我朝に來けるも、此貢に備り、大紋の高麗縁も其篋とぞ承る。其德天に叶ひ其化遠に及し上古の代にだにも、異國を被レ從事は、天神地祇の力を以てこそ、容易征伐せられしに、今無惡不造の賊徒等、元朝高麗を奪犯、牒使を立させ、其課を送らしむる事、前代未聞の不思議なり。角ては中々吾朝却て異國に奪はるゝ事もや有んずらんと、怪しき程の事共也。されば福州の吾元輔王乙が吾朝へ贈たる詩にも、此意を暢たり。

日本狂奴亂二浙東一、將軍聽レ變氣如レ虹。沙頭列レ陣烽烟暗、
夜半鏖レ兵海水紅。篳篥按レ歌吹二落月一、髑髏盛レ酒飲二清風一。
何時截二盡南山竹一、細寫二當年殺賊功一。

此詩の言に附て思ふに、日本一州に近年竹の皆枯失るも、若加樣の前表にてやあらんと、無二覺束一行末也。

五月—日本紀には十月に作る
高良明神—武內宿禰

りしかば、礒良感に堪兼て、神遊の庭にぞ參たる。其貌を御覽ずるに、細螺石花貝藻に栖蟲、手足五體に取附て、更に人の形にては無りけり。神達怪み御覽じて、何故斯る貌には成けるぞと、御尋有ければ、礒良答て曰く、我滄海の鱗に交て、是を利せん爲に、久く海底に佇侍ぬる間、此貌に成て候也。浩る形にて無二止事一御神前に參らんずる恥しさに、今までは參り兼て候つるを、曳々融々たる律雅の御聲に、恥をも忘れ、身をも不顧して、參たりとぞ答申ける。軈是を御使にて、龍宮城に寶とする干珠滿珠を被レ借召。龍神卽應二神勅一二の珠を奉る。神功皇后一卷の祕書を智謀とし、兩顆の明珠を武備として、新羅へ向はんとし給ふに、胎內に宿り給ふ八幡大菩薩、已に五月に成せ給しかば、母后の御腹大に成て、御鎧を召るゝに、御膚あきたり。此爲に高良明神の計として、鎧の脇立をば、仕出しける也。諏訪住吉大明神を副將軍裨將軍として、自餘の大小の神祇、樓船三千餘艘を漕雙べ、高麗國へ寄給ふ。是を聞て高麗の夷ども、兵船一萬餘艘に取乘て、海上に出向ふ。戰半にして雌雄未レ決時、皇后先干珠を海中に拋給しかば、潮俄に退て、海中陸地に成にけり。三韓の兵ども、天我に利を與たりと悅て、皆船より下、徒立に成てぞ戰ける。此時に又皇后滿珠を取て拋給しかば、潮十方より漲り來て、

渭水の土橋ー漢書列傳に下邳圯上とあり圯は土橋をいふ下邳を渭水とはいはず誤也

雍發と書けるは、雍州の石門に貼よと敎けるか、又癰疽の出たらんに貼よと示けるか。其二の間を知難し。功は高して、命は短し。何をか捨何をか取ん。若休事を不ㇾ得して、其一を捨ば、命は在ㇾ天、我は必功を取ん。抑大元三百萬騎の蒙古共一時に亡し事、全く吾國の武勇に非ず、唯三千七百五十餘社の大小神祇、宗廟の冥助に依るに非ずや。

○神功皇后攻二新羅一給事

昔仲哀天皇聖文神武の德を以て、高麗の三韓を攻させ給けるが、戰利無して歸らせ給たりしを、神功皇后、是智謀武備の足ぬ所也とて、唐朝へ師の束脩の爲に沙金三萬兩を被ㇾ遣、履道翁が一卷の祕書を傳らる。是は黃石公が第五日の鷄鳴に、渭水の土橋の上にて、張良に授し書なり。さて事已に定て後、軍評定の爲に、皇后諸の天神地祇を請じ給ふに、日本一州の大小の神祇冥道、皆勅請に從て、常陸の鹿島に來給ふ。雖ㇾ然、海底に跡を垂給ふ阿度部磯良一人不ㇾ應ㇾ召。是如何樣故あらんとて、諸の神達庭燎を燒き、榊の枝に白和幣青和幣を取懸て、風俗催馬樂、梅枝、櫻人、石河、葦垣、此殿、夏引、貫河、飛鳥井、眞金吹、差櫛、淺水橋、呂律を調べ、本末を返て、數遍歌はせ給た

に、又呂洞賓忽然として來て申けるは、汝日本の軍に打負たる罪に依て、天子忿て、親類骨肉、皆三族の罪に行はれぬ。汝帝都に歸らば、必共に可レ被レ刑。早く是より劍閣を經て、蜀國へ行去れ。蜀王以レ汝大將として、雍州を攻ばやと羨念ふ事切なり。至らば必大功を建べしと云て別たるが、我汝が餞別の爲に、囊中を探るに、此一物の外は無レ他とて、膏藥を一貼與ける。其銘に至雍發とぞ書附たりける。萬將軍呂洞賓の言に任て、蜀へ行たるに、蜀王是を悦給ふ事無レ限。軈萬將軍に上將の位を授け、雍州をぞ攻させける。萬將軍兵を率し旅を屯して、雍州に至るに、敵山嶮の高く峙たるに、石の門を閉てぞ待たりける。誠に一夫忿て臨レ關、萬夫も不レ可レ傍と見えたり。此時に萬將軍、呂洞賓が我に與し膏藥の銘に、至雍發と書たりしは、此雍州の石門に貼よと敎けるにこそと心得て、密に人をして、一貼有ける膏藥を、石門の柱にぞ貼させたりける。貼ると齊く、石門の柱も戸も如二雪霜一とけて、山崩れ道平になりければ、雍州の敵數萬騎、可レ防便を失て、皆蜀王にぞ降ける。此功併萬將軍が德也とて、軈公侯の位に登せられける。居る事三十日有て、萬將軍背に癰瘡出たりけるが、日を不レ經して、忽に死にけり。雍州の雍の字は、癰瘡の癰の字と、韵聲通ぜり。呂洞賓が膏藥の銘に、至

一村立出て、天地を耀し、山川を照す。其光の中より、夜叉羅刹の如くなる靑色の鬼神顯れ出て、土嚢の結目をとく。大風其口より出て、沙漠を揚げ、大木を吹拔く。測知ぬ、九州の異狄等、此日即可レ滅と云事を。事若誠有て、奇瑞變に應ぜば、年來申請る處の宮號、以二叡感儀一可レ被二宣下一とぞ奏し申ける。去程に、大元の萬將軍七萬餘艘のもやひをとき、八月十七日の辰刻に、門司赤間が關を經て、長門周防へ押渡る。兵已に渡中をさしゝ時、さしも風止み雲閑なりつる天氣俄に變て、黑雲一村艮の方より立覆ふとぞ見えし。風烈く吹て、逆浪天に漲り、雷鳴霆て、電光地に激烈す。大山も忽に崩れ、高天も地に落るかと夥し。異賊七萬餘艘の兵船ども、或は荒磯の岩に當て、微塵に打砕かれ、或は逆卷浪に打返されて、一人も不レ殘失にけり。斯りけれども萬將軍一人は、大風にも放たれず、浪にも不レ沈、窈冥たる空中に飛揚てぞ立たりける。爰に呂洞賓と云仙人、西天の方より飛來て、萬將軍に示しけるは、日本一州の天神地祇、三千七百餘社來て、此惡風を起し、逆浪を漲しむ。人力の可レ及處に非ず。汝早く一箇の破船に乘て、本國へ可レ歸とぞ申ける。萬將軍此言を信じて、一箇の破船有けるに乘て、唯一人大洋萬里の波を凌て、無レ程明州の津にぞ著にける。船より上り、帝都へ參らんとする處

櫟社―大樹の下に假初の祠又は鳥居のみ立てるなどをいふ

稻荷山の名婦―名婦は狐の異名也

は、重て可レ戰樣も無りしかば、筑紫九國の者共、一人も不レ殘四國中國へぞ落たりける。日本一州の貴賤上下、如何せんと周章騷ぐ事不レ斜。諸社の行幸御幸、諸寺の大法祕法、宸襟を傾て肝膽を碎かる。都て六十餘州大小の神祇、靈驗の佛閣に勅使を被レ下、奉幣を不レ被レ捧云所なし。如レ此御祈禱已に七日に滿じける日、諏訪湖の上より、五色の雲西に靆き、大蛇の形に見たり。八幡御寶殿の扉啓けて、馬の馳ちる音、轡の鳴音、虛空に充滿たり。日吉の社二十一社の錦帳の鏡動き、神寶刄とがれて、御沓皆西に向へり。住吉四所の神馬、鞍の下に汗流れ、小守勝手の鐵の楯己と立て、敵の方につき雙たり。凡上中下二十二社の震動奇瑞は不レ及レ申、神名帳に載る所の三千七百五十餘社、乃至山家村里の小社櫟社道祖の小神迄も、御戸の開ぬは無りけり。其外春日野の神鹿、熊野山の靈烏、氣比宮の白鷺、稻荷山の名婦、比叡山の猿、社々の仕者、悉虛空を西へ飛去ると、人毎の夢に見えたりければ、さり共此神々の助にて、異賊を退け給はぬ事はあらじと思ふ計を憑にて、幣帛を捧ぬ人もなし。浩る處に、弘安四年七月七日、皇大神宮の禰宜荒木田尙良、豐受大神宮の禰宜度會貞尙等十二人、起請の連書を捧て、上奏しけるは、二宮の末社風の社の寶殿の鳴動する事良久し。六日の曉天に及で、神殿より赤雲

十三日は十月五日とあるべき也
大元七萬云云―本文以下文永弘安の兩役を混同して實を失ひたる記事多し

出せるかと被怪。日本の陣の構は、博多の濱端十三里に石の堤を高く築て、前は敵の爲に切立たるが如く、後は爲御方平々として、懸引自在也。其陰に塀を塗り、陣屋を作て、數萬の兵竝居たれば、敵に勢の多少をば見透されじと思ふ處に、敵の船の舳前に、桔槹の如くなる柱を、數十丈高く立て、横なる木の端に、座を構て、人を登せたれば、日本の陣内目の下に直下されて、秋毫の先をも數つべし。又面の四五丈廣き板を、筏の如くに疊鏁て、水上に敷雙たれば、波の上に平なる路數多作出されて、恰三條の廣路、十二の街衢の如也。此路より敵軍數萬の兵馬を懸出し、死をも不顧戰ふに、御方の軍勢の鋒たゆみて、多くは退屈してぞ覺ける。鼓を打て兵刄既に交る時、鐵炮とて鞠の勢なる鐵丸の逬る事、下坂車輪の如く、霹靂する事、閃々たる電光の如くなるを、一度に二三千抛出したるに、日本の兵多く燒殺され、關櫓に火燃附て、可打消隙も無りけり。上松浦下松浦の者ども、此軍を見て、尋常の如くにしては叶はじと思ければ、外の浦より廻て、僅に千餘人の勢にて、夜討にぞしたりける。志の程は猛けれども、九牛の一毛、大倉の一粒にも當らぬ程の小勢にて寄たれば、敵を討事は二三萬人なりしかども、終には皆被生捕、身を縲紲の下に苦めて、掌を連索の舷に貫れたり。斯りし後

三餘の暇—夜分と雨天と冬期とをいふ

文永十一年—原本二年に作る南都本に據りて改む、八月

著ける。

○自大元攻日本事

倩三餘の暇に寄て、千古の記する處を看るに、異國より吾朝を攻し事、開闢以來已に七箇度に及べり。殊更文永弘安兩度の戰は、大元國老皇帝支那四百州を討取て勢天地を凌ぐ時なりしかば、小國の力にて難退治かりしかども、輒大元の兵を亡して、吾國無爲なりし事は、唯是尊神靈神の冥助に依し者也。其征伐の法を聞けば、先大元の大將萬將軍、日本王畿五箇國を、四方三千七百里に勘て、其地に兵を無透間立雙て、是を數るに、三百七十萬騎に當れり。此勢を大船七萬餘艘に乘て、津々浦々より推出す。此企兼てより吾朝に聞えしかば、其用意を致せとて、四國九州の兵は、筑紫の博多に馳集り、山陽山陰の勢は、帝都に馳參る。東山道北陸道の兵は、越前敦賀津をぞ固ける。去程に文永十一年八月十三日、大元七萬餘艘の兵船、同時に博多津に押寄たり。大舶艑艫を雙て、もやひを入て歩の板を渡て、陣々に油幕を引き、干戈を立雙たれば、五島より東、博多浦に至まで、海上の四囲三百餘里、俄に陸地に成て、蜃氣爰に乾闥婆城を吐

智覺普明國師—春屋の諡號也、原本智字を脱せり

治五年九月二十三日出雲に著岸す。道驛を重て、無程京都に著しかば、洛中へは不被入して、天龍寺にぞ被置ける。此時の長老春屋和尚智覺普明國師牒狀を進奏せらる。其詞云、

皇帝聲旨、寰征東行中書省、照得日本與本省所轄高麗地境、水路相接。凡遇貴國飄風人物、往々依理護送。不期自至正十年庚寅、有賊船數多、出自貴國地面、前來本省合浦等處、燒毀官廨、騷擾百姓、甚至殺害。經及一十餘年、海舶不通、邊界居民、不能寧處。蓋是島嶼居民、不懼官法、專務貪婪、潛地出海劫奪。尚慮貴國之廣、豈能周知。若使發兵勤捕、恐非交隣之道。除已移文日本國照驗、頗爲行下概管地面海島、嚴加禁治、毋使如前出境作耗。本省府今差本職等一同馳驛、恭詣國王前啓稟。仍守取日本國囘文還省。閤下仰照驗、依上施行、須議劄附者。一實起右劄附差去。萬戸金乙貴、千戸金龍等准之。

とぞ書たりける。賊船の異國を犯奪事は、皆四國九州の海賊共がする所なれば、帝都より嚴刑を加るに據なしとて、返牒をば不被送。唯來獻の報酬とて、鞍馬十匹、鎧一領、白太刀三振、御綾十段、綵絹百段、扇子三百本、國々の奉送使を副て、高麗へぞ送り被

博陸具瞻―博陸は攝政關白、具瞻は詩の小雅に赫々師尹民具爾瞻とありて衆庶倶に仰ぎ見ること

至正二十三年日本正平十八年、北朝貞治二年

將爲有、右少將兼時、行妝を整へ、威儀を正くして、閑に列をなし給へば、供奉の大衆二萬人、各貝を吹連て、前後三十餘町に支たり。盛哉朝廷無事の化、遠く天兒屋根の昔に立返り、博陸具瞻の德、再高彥靈尊の勅を新にし給へり。誠に利物の垂迹、順逆の緣に和光し不レ給、今斯る神幸を拜し奉べしやと、岐に滿る見物衆の、神德を貴ばぬは無りけり。

○高麗人來朝事

四十餘年が間本朝大に亂て、外國暫も不レ靜。此動亂に事を寄て、山路には山賊有て、旅客緣林の陰を不二過得一、海上には海賊多して、舟人白浪の難を去兼たり。欲心强盛の溢物共、以レ類集しかば、浦々島々多く盜賊に被二押取一て、驛路に驛屋の長もなく、關屋に關守人を替たり。結句此賊徒數千艘の舟をそろへて、元朝高麗の津々泊々に押寄て、明州福州の財寶を奪取、官舍寺院を燒拂ける間、元朝三韓の吏民是を防兼て、浦近き國國數十箇國皆栖人もなく荒にけり。依レ之高麗國の王より、元朝皇帝の勅宣を受て、牒使十七人吾國に來朝す。此使異國の至正二十三年八月十三日に、高麗を立て、日本國貞

曹を司る辨官、曹は勸學院也

司左大臣殿、九條殿、一條殿、大中納言、大理以下次第に參り給ふ。關白殿御著座あれば、數輩の僧綱以下御座の前にして其禮を致す。是時の長者の驗也。出御の程に成ぬれば、數萬人立雙たる大衆の中より、一人進出て有僉議。音聲雲に響き、言語玉を連たり。僉議終れば、幄屋に亂聲を奏す。翕如たる聲の中に、布留の神寶を出し奉るに、關白殿以下卿相雲客席を避て、皆跪き給ふ。其次に本社の御榊、四所の御正體、光明赫奕としてゆすり出させ給へば、數千の神官共、覆面をして各捧げ奉る。兩列の伶倫道々還城樂を奏して、正始の聲を調べ、神人警蹕の聲を揚て非常を禁む。赤衣仕丁白杖を持て御前に立、黃衣神人神寶を頂戴して次々に從ふ。其外の神司束帶を著して列を引、白衣神人數千人の國民等步列る。時の關白良基公は柳の下重に絲鞋を召て、當も耀く許に步み出させ給へば、前驅四人左右に隨ひ、殿上人二人御裾をもつ。隨身十人有といへども態御先をばおはず。神幸に恐を成し奉る故也。其次には鷹司左大臣、今出河大納言、花山院大納言、九條大納言、一條大納言、坊城中納言、四條中納言、西園寺中納言、四條宰相、洞院宰相中將、殿上人には、左中將忠頼、右中將季村、新中將親忠、左中辨嗣房、新中將基信、藏人右中辨宣房、權右中辨資康、藏人左中辨仲光、右少辨宗顯、左少

で、日夜朝暮に攻けれども、此城可レ被レ落とも不レ見けり。斯る處に翌年七月に道朝俄に病に被レ侵逝去しければ、子息治部大輔義將樣々に歎申されけるに依て、同九日に宥免安堵の御教書を被レ成、京都へ被二召返一、無二幾程一越中の討手を承て、桃井播磨守直常を退治したりしかば、軈越中の守護職に被レ補。是より北國は無爲に成にけり。此濫觴抑道朝が僻事は何ぞや。唯依二諸人讒言一失レ身給し者也。されば楚の屈原が汨羅澤に吟て、衆人皆醉り我獨醒たりと世を憤しを、漁父笑て、衆人皆醉らば、何ぞ其糟を食て、其醨を啜ざると歌て、滄浪の舟に棹しも、げにさる事も有けりと、被二思知一世と成にけり。

○神木御歸座事

大夫入道道朝都を落て後、越前國河口庄南都に被二返附一しかば、神訴忽に落居して、八月十二日神木御歸座あり。刻限卯時と被レ定たるに、其曉より雨闇く風暴かりしかば、天の忿猶何事にか殘らんと怪かりしに、其期に臨て、雨晴風定て、天氣殊に麗かりしかば、是さへ人の意を感ぜしめたり。先南曹辨嗣房參て諸事を奉行す。午刻許に鷹

所を置奉る
｜憚り奉る

は三百餘騎の勢を率し、長坂を經て越前へぞ被落ける。先陣今は一里許も落延ぬらんと覺る程に成て、二宮は跡を追て落行く。諸大名の勢ども、疲に乘て打止めんと追懸たり。二宮長坂峠に控て、少も漂へる機を不見、馬に道草かひて、哈たる聲ざしにて申けるは、都にて軍をせざりつるは、敵を恐るゝにはあらず、唯將軍に所を置奉る故也。今は都をも離れぬ。夜も明ぬ。敵も御方も唯今まで知り知られたる人々也。爰にては我人の剛臆の程を呈さでは、何れの時をか可期。馬の腹帶の延ぬ先に、早是へ御入候へ。我等が首を御引出物に進するか、御首どもを餞に賜るか、其二の間に、自他の運否を定め候ばやと、高聲に呼て、馬の上にて鎧の上帶縮直して、東頭に控たり。其勇氣誠に節に中、死を輕ずる義有て、前に可恐敵なしと見えければ、數萬騎の追手ども、よしや今は是までぞとて、長坂の麓より引返しぬ。道朝二宮を待附て、越前へと著し、軈て我身は杣山城に籠り、子息治部大輔義將を栗屋城に籠て、北國を打從へんと被議ける間、將軍さらば討手を下せとて、畠山尾張守義深、山名中務大輔、佐々木治部大輔高秀、土岐左馬助、佐々木判官入道崇永、舍弟山内判官入道崇譽、赤松大夫判官、同兵庫助範顯、能登、加賀、若狹、越前、美濃、近江の國勢相ともに、七千餘騎同年の十月より二の城を圍

服したる體にて、差たる御言なし。良久く默然として、涙を一目に浮べ給ふ。暫有て道朝已に退出せんとせられける時、將軍席を近附給て、條々の趣げにもさる事にて候へども、今の世の中我心にも任たる事にても無ければ、暫越前の方へ下向有て、諸人の申處をも被レ宥候へかしと宣へば、道朝畏て承りぬとて軈被二退出一ぬ。去程に崇永兼て用意したる事なれば、稠く鎧たる兵八百餘騎を率して、將軍の御屋形へ馳參り、四門を警固仕る。是より京中ひしめき渡て、將軍へと馳參る武者もあり、管領へと馳る人もあり。柳營家臣の兩陣のあはひ僅に半町許あれば、何れを敵、何れを御方共不二見分一。道朝始は一箭射て、腹を切らんと企けるが、將軍より三寶院覺濟僧正を御使にて、度度被二宥仰一ける間、さらばとて北國下向の議に定りぬ。乍レ去おめ〳〵と都を出て下る體ならば惡かりなん。敵どもに被二追懸一事もこそあれとて、八月八日の夜半許に、二宮信濃守五百餘騎、高倉西の門より、將軍家に押寄る體を見せて、鬨をぞ揚たりける。是を聞て將軍家へ馳參たる大勢ども、內へ入んとするもあり、外へ出んとするもあり。何と云事もなくせき合ふ程に、鎧の袖冑を奪れ、太刀長刀を取られ、馬物具を失ふ者數を不レ知。未レ戰先に禍蕭墻の中より出たりとぞ見えたりける。此ひしめきの紛に、道朝

魯叟云々—論語衞靈公篇に詳し

貞治四年—上文に貞治五年三月四日云々とあれば須く五年とあるべき也、異本に其年を載せざるは寧ろ可也

政所料所にぞ成たりける。依之道譽が鬱憤不安、如何にもして此管領を失ばやと思て、諸大名を語ふに、六角入道は當家の惣領なれば、無仔細。赤松は聟也、なじかは可及異議。此外の大名共も、大略は道譽に不諂云者無りければ、事に觸て此管領天下の世務に叶まじき由を、將軍家へぞ讒し申ける。魯叟有言曰、衆惡之必察焉。衆好之必察焉。或は其衆阿黨比周して、好ずる事あり、或は其人特立不詳にして、惡るゝ事あり、毀譽ともに不察あるべからず。諸人の讒言遂に眞僞を不糺しかば、道朝無咎して忽に可討に定けり。此事内々佐々木六角判官入道崇永に被仰て、江州の勢をぞ被召ける。道朝此由を傳聞て、貞治四年八月四日晩景に、將軍の御前に參じて被申けるは、蒙御不審由内々告知する人の候つれども、於身不忠不義の事候はねば、申人の謬にてぞ候らんと、愚意を遣候つるに、昨日江州の勢共、合戰の用意にて罷上り候ける由承及候へば、風聞の説早實にて候けりと、信を取て候。抑道朝以無才庸愚身、大任重器の職を汚し候ぬれば、讒言も多く候覽と覺候。然るを讒者の御糺明までも無て、御不審を可蒙にて候はば、國々の勢を被召までも候まじ。侍一人に被仰附て、忠諫の下に死を賜て、衰老の後に尸を曝さん事、何の仔細か候べきと、恨の面に涙を拭て被申ければ、將軍も理に

潤、六椀通ニ仙靈ニとあり

十日一水の精神—名人の畫工は五日に一石十日に一水を畫くとぞ、此は名畫の精神といふ程の義也

三尸—柳文十八に、罵ニ尸蟲ニ文あり、有道人言、人皆有ニ尸蟲ニ三ニ處腹中ニ云々

四海五湖の風景、立に得たり。一歩三嘆して、遙に躋れば、本堂の庭に、十圍の花木四本あり。此下に一丈餘の鍮石の花瓶を鑄懸て、一雙の華に作成し、其交に兩圍の香爐を兩机を並て、一斤の名香を一度に炷上たれば、香風四方に散じて、人皆浮香世界の中に在が如し。其陰に幔を引、曲彔を立雙て、百味の珍膳を調へ、百服の本非を飲て、懸物如レ山積上たり。猿樂優士一たび廻て、鸞の翅を飜し、白拍子倡樂濃に春鶯の舌を暢れば、座中の人々大口小袖を解て抛與ふ。興闌に醉に和して、歸路に月無れば、松明天を耀す。鈿車軸轟き、細馬鑣を鳴して、馳散り喚叫たる有樣、唯三尸百鬼夜深て衢を過るに不レ異。華開花落る事二十日、一城の人皆狂せるが如しと、牡丹妖艶の色を風せしも、げにさこそは有つらめと、思知るゝ許也。此遊洛中の口遊と成て、管領の方へ聞えければ、是は唯我中沙汰する將軍家の花下の會を、かはゆ氣なる遊哉と欺ける者也と、安からぬ事にぞ被レ思ける。乍レ去是は心中の憤にて、公儀に可レ出レ咎にもあらず。哀道譽何事にても就ニ公事ニ犯レ法事あれかし。辛く沙汰を致さんと、心を附て被レ待ける處に、二十分一の武家役を、道譽兩年まで不ニ沙汰ニ間、管領すはや究竟の罪科出來ぬと悅て、道譽が近年賜たりける攝州の守護職を改め、同國の舊領多田庄を沒收して、

懸て―機會あれかしと注意して居ること

碧蘿―緑の蔓草

雁齒―雁の行列、人馬の牙齒の形の如く出入突兀たる狀をいふ

一椀の中に云々―盧同が茶歌に、一椀唯吻

ける。斯る處に、柳營庭前の花、紅紫の色を交て、其興無類ければ、道朝種々の酒肴を用意して、貞治五年三月四日を點し、將軍の御所にて、花下の遊宴あるべしと被催、殊更道譽にぞ相觸ける。道譽兼ては可參由領狀したりけるが、態と引違て、京中の道々の物の上手ども、一人も不殘皆引具して、大原野の花の本に宴を設け席を粧て、世に無類遊をぞしたりける。已に其日に成しかば、輕裘肥馬の家を伴ひ、大原や小鹽山にぞ赴ける。麓に車を駐て、手に把碧蘿攀るに、曲徑幽處に通じ、禪房花木深し。寺門に當て、灣溪のせゝらぎを渉れば、路羊腸を遶て、橋雁齒の危をなせり。此に高欄を金欄にて裹て、ぎばうしに金箔を押し、橋板に太唐の氈、吳郡の綾、蜀紅の錦、色々に布展たれば、落花上に積て、朝陽不到溪陰處、留得横橋一板雪相似たり。蹈に足冷く、歩むに履香し。遙に風磴を登れば、竹筧に甘泉を分て、石鼎に茶の湯を立置たり。松籟聲を讓て、芳甘春濃なれば、一椀の中に天仙をも得つべし。紫藤の屈曲せる枝毎に、高く平江帶を掛て、螭頭の香爐に、鷄舌の沈木を薫じたれば、春風香暖にして、不覺旃檀林に入かと怪まる。眸を千里に供じ、首を四山に廻せば、煙霞重疊として、山川雜り峙たれば、筆を不假丹青、十日一水の精神云に聚り、足を不移寸歩、

新恩の地—新に恩賞として拜領したる地

大營—重大なる工事

便宜を目に

○諸大名讒二道朝一事附道譽大原野花會事

抑此管領職と申は、將軍家にも宗徒の一族也ければ、誰かは其職を猜む人も可レ有。又關東の盛なりし世をも見給たりし人なれば、禮儀法度もさすがに今の人の樣にはあるまじければ、是誠に武家の世をも治めんずる人よと覺けるに、諸人の心に違ふ事のみありて、終に身を被レ失けるも、唯春日大明神の冥慮也と覺たり。諸人の心に違ける事は、一には近年日本國の地頭御家人の所領に、五十分一の武家役を每年被レ懸けるを、此管領の時に二十分一になさる。是天下の先例に非ずと、憤を含む所也。次に將軍三條坊門萬里小路に御所を立られける時、一殿一閣を大名一人づつに課て被レ造。赤松律師則祐も其人數たりけるが、作事遲して、期日纔に過ぐれば、法を犯す咎有とて、新恩の地大庄一所沒收せらる。是又赤松が恨を含む隨一也。次には佐々木佐渡判官入道道譽、五條橋を可レ渡奉行を承て、京中の棟別を乍レ取、事大營なれば、少し延引しけるを勵さんとて、道朝他の力をも不レ假、民の煩をも不レ成、嚴密に五條橋を數日の間にぞ渡ける。是又道譽面目を失ふ事なれば、是程の返禮をば致さんずる也とて、便宜を目に懸てぞ相待

ののりうつれる人

大樹—將軍

人や勝つ神や負ると誓まて、三笠の山のあらん限は。

と、數萬人の聞所にて、高らかに三遍詠じて、物附は則醒にけり。見るも慴しく、聞に身の毛も竪つ神託どもなれば、是に驚て、神訴を忽に裁許有ぬと覺えけれども、一向耳の外に處して、三年まで閣れければ、朱の玉垣徒に引人もなき御注連縄、其名も長く朽はてゝ、霜の白幣かけまくも、賢き神の榊葉も、落てや塵に交らんと、今更神慮の程被レ量、行末如何と空おそろし。今程國々の守護、所々の大名共、獨として寺社本所領を押て、不二領知一云者なし。然ども叶はぬ訴訟に退屈して、乍レ歎徒に默止ぬれば、國々の政に僻事多けれども、其人無レ咎に似たり。然るに此人一人斯る大社の訴訟に取合て、神訴を得て、呪咀を負けるも、唯其身の不祥とぞ見えたりける處に、同十月三日道朝が宿所七條東洞院より、俄に失火出來て、財寶一も不レ殘、內厩の馬どもまでも多く燒失ぬ。是こそ春日明神の御祟よと、云沙汰せぬ人も無りけり。されども道朝やがて三條高倉に屋形を立て、大樹に咫尺し給へば、門前に鞍置馬の立止隙もなく、庭上に酒肴を弄列ねぬ時もなし。夫さらぬだにも、富貴の家をば鬼瞰レ之云り。如何に況や神訴を負へる人也。是とても行末如何有んずらんと、才ある人は怪めり。

ど此には出家の潔齋の食事をいふ

物つき—神

觸訴ふ。然共、公家の勅裁は成ども人不レ用、武家の奉書は憚て渡す人なし。依レ之嗷議の若輩、氏人の國民等、春日の神木を奉レ飾、大夫入道道朝が宿所の前に奉二振捨一。其日軈勅使參迎して、神木をば長講堂へぞ奉レ入ける。天子自玉扆を下させ給て、常の御膳を降され、攝家皆高門を掩て、日の御供を奉り給ふ。今澆末の風に向て、大本の遠を見るに、政道は廢て無に似たりといへども、神慮は明にして如レ在。哀とく裁許あれかしと、人々申合けれども、時の權威を憚て、是をと申沙汰する人も無りけり。禰宜が鈴振袖の上に、託宣の涙せきあへず、社人の夙夜する枕の上に、夢想の告止時なし。同五月十七日何の山より出たりとも知らず、大鹿二頭京中に走出たりけるが、家の棟築地の覆の上を走渡て、長講堂の南の門前にて四聲鳴て、何の山へ歸るとも見えずして失にけり。是をこそ不思議の事と云沙汰しける處に、同二十一日月額の跡有て、目も鼻も無て、髮長々と生たる、なましき入道の首一つ、七條東洞院を北へ轉ありくと見えて、搔消す樣に失にけり。又同二十八日長講堂の大庭に、獨樂廻して遊ける童の内に、年の程十許なるが、俄に物に狂て、一二三丈飛上々々、跳る事三日三夜也。參詣の人怪て、如何なる神の託せ給たるぞと問に、物つき口うち噤て、其返事をばせで、

半濟―二分すること

要脚―錢の異名、此には費用といふ程の義

餐霞の飢―餐霞は仙人の食をいへ

て、諸人に被二嘲哢一乎。無二思慮一禪可が合戰故に、鎌倉殿の威勢彌重く成しかば、大名一揆の𠵅議共、是より些止にけり。

○神木入洛事 附 洛中變異事

尾張修理大夫入道道朝は、將軍御兄弟合戰の時、慧源禪門の方に屬して打負しかば、鬱胸を不レ散、暫は宮方に身を寄けるが、若將軍義詮朝臣より、樣々幣禮を盡して、頻に招請し給ける間、又御方に成て、三男治部大輔義將を面に立て、執事の職に居、武家の成敗をぞ意に任られける。去程に越前國は、多年の守護にて、一國の寺社本所領を半濟して、家人共にぞ分行ける。其中に南都の所領河口莊をば、一圓に家中の料所にぞ成たりける。此所は毎年維摩會の要脚たるのみに非ず、一寺の學徒是を以て、朝三の資を得て、僅に餐霞の飢を止、夜窻の燈を挑て、聚螢の光に易ふ。而るを近年は彼依二押領一諸事の要脚悉闕如しぬれば、維摩の會場には、柳條亂て垂手の舞を列ね、講問の床の前には、鶯舌代て緩聲の歌を唱ふ。是一寺滅亡の基、又は四海擾亂の端たるべし。早く當莊押領の儀を止て、大會再興の禮に令レ復給べしと、公家に奏聞し、武家に

八十萬騎—北條家南都本には十萬、天正本には六十萬に作る

ければ、軍散じて後に、人を附て被レ歸けるとかや。優にやさしとぞ申ける。去程に芳賀が八百餘騎の兵、昨日は二日路を一夜に打しかば、馬皆疲れぬ。今日は又入替る勢も無て、終日戰ひくらしければ、兵息を不二繼敢一。所存今は是までとや思けん、日已に夕陽に成ければ、被二討殘一たる兵僅に三百餘騎を助て、宇都宮へぞ歸ける。是を見て、今まで戰を外に見て、勝方に附んと伺つる白旗一揆、弊に乘り疲を攻て、何までも追攻て打止んと、高名顔に追たりける。是のみならず、芳賀が勢打負て引と聞えしかば、後れ馳に御陣へ參ける兵共、橋を引路を塞で、落さじとしける程に、道にても百餘騎被レ討けり。辛き命を助て、故鄕に歸ける者も、大略皆髪を切遁世して、無きが如くに成にけり。軍散じければ、軈宇都宮を退治せらるべしとて、左馬頭八十萬騎の勢にて、先小山が館へ打越給ふ。斯る處に宇都宮急ぎ參じて申けるは、禪可が此間の擧動、全く我同意したる事候はず。主從向背の自科依レ難レ遁、其身已に逐電仕ぬる上は、御勢を被レ向までも候まじと申ければ、左馬頭も深き慮やおはしけん、翌日軈鎌倉へ打歸給にけり。されば君無二諫臣一則君失二其國一矣、父無二諫子一則父亡二其家一矣と云り。禪可縱老僻て、斯る悪行を企つ共、子ども若義を知て制し止る事あらば、豈若干の一族共を討せ

岩松治部大輔―直國

武者に逢て、組で勝負はせじと、軍はしにくかりし。今は見知たり。先に白絲の鎧著て、下立たりつる若武者は、慥に鎌倉殿と見澄たり。鎧の毛をしるしにして、組討に討奉らんずる事、何よりも可レ安とて、敵に心安く紛れんと、笠符を取て投捨、時衆に最期の十念を受て、思切たる機をぞ顯しける。左馬頭の御方に、岩松治部大輔は、よく慮有て、軍の變を計る人なりければ、大將左馬頭殿の鎧の毛を、敵何樣見知ぬらんと推量して、御大事に替らんと思はれければ、我今まで著給へる紺絲の鎧に、鎌倉殿の白絲の鎧を俄に著替奉てぞ控たる。暫有て兩陣又亂合て、入替入替戰ける。岡本信濃守、白絲の鎧著たる岩松を、左馬頭殿ぞと目に懸て、組で討んと相近附く。岩松は又元來左馬頭の命に代らんと鎧を著替し上は、なじかは命を可レ惜。二人共に閑々と馬を歩ませ寄て、あはひ已に草鹿のあづち長に成ける時、岩松が郎等金井新左衞門、岩松が馬の前に馳塞て、岡本と引組馬よりどうと落けるが、互に中にて刺違て、共に命を止てけり。岩松は左馬頭の命に代らんと鎧を著かへ、金井は岩松の命に代て討死す。主從共に義を守て節を重んずる忠貞、難レ有かるべき人々也。其外命を輕じ義を重んじて、爰にて勝負を決せんと、相互にぞ戰ける。さて芳賀八郎は被二生捕一たりけれども、幼稚の上垂髮なり

和泉―和泉小次郎親衡がこと

臀俣―原本内股に作る異本に據りて改む

連蒻の鞦―總をいくつも連れつけたる鞦をいふ、連著鞦とも書く

立て、穴夥しの唯今の御舉動候や。昔の和泉朝比奈も、是まではよも候はじと、覿面に奉ㇾ褒、早此馬に召れ候へと申せば、左馬頭悦で馬の臀俣にゆらりと飛乘て、鞍坪に直り樣に、平家の侍後藤兵衛が主の馬に乘て逃たりしには、遙に替たる振舞哉と、唯今こそ誠に大高の名は相應したれと、互にぞ褒返されける。其後左馬助は、放馬の有けるを取て打乘、所々に村立たる御方の勢を相招き、又敵の中へ懸入て、時移るまでぞ戰ける。互に人馬を休て、兩方へ颯と引分たれば、又鎌倉殿の御陣は、芳賀が陣となり、芳賀が陣は、二度鎌倉殿の御陣となる。芳賀伊賀守御方の勢を見廻して、八郎がみえぬは、討れたるやらんと、親の身なれば、心元なげに申けるを、馬の前なる中間、放馬の數百匹走散たる中に、毛色鞍具足を委く見て候へば、黒月毛なる馬に、連蒻の鞦懸たるは、慥に八郎殿召れたりつる御馬にて候。早討れさせ給ぬとこそ覺え候へと申ければ、さて其馬に血や附たると問ふに、いや馬の頭に、矢一筋立て見え候へ共、鞍に血は候はずとぞ答ける。是を聞てさしも勇める伊賀守、涙を一目に浮て、さては此者幼稚なれば被ㇾ生捕けり。軍暫も隙あらば、八郎如何樣切られぬと覺ゆ。いざ今一軍せんと云ければ、岡本信濃守富高聞も敢ず、莞爾とうち笑て、仔細候はじ。敵の大將を見知ぬ程こそ、葉

し、喚てぞ懸入ける。鎌倉殿方にも、軍兵七十餘人討れたるのみならず、木戸兵庫助兩方引分つる時、近附敵に引組て、落重る敵に被ㇾ討ければ、是を聞給て、鎌倉殿御眼血をときたる如くに成て宣けるは、此合戰に必死なば諸共に死し、生ば同く生んと、深く契し事なれば、命を惜べきに非ずとて、如二編木子一叩きなしたる太刀の齒本を、小刀にて削り直し、打振て懸足を出し給へば、左右の兵共三千餘騎、大將の先に馳拔て、一度に颯と懸合ひ、追廻懸違へ、喚叫で戰ふ聲、さしもに廣き武藏野に餘る許ぞ聞えける。大將左馬頭餘に手繁く懸立々々戰ける程に、乘給へる馬の三頭平頸三太刀斬れて、犬居にどうと伏たりける。是を大將と見知たる敵多かりければ、懸寄々々冑を打落さんと、後より廻る者あり、飛下々々徒立に成、太刀を打背けて組討にせんと、左右より懸る敵もあり。されども左馬頭元來力人に勝れ、心飽まで早して、膚撓まず目逃がず、黄石公が傳へし處、李道翁が授し道、機に臍て心とせし太刀ぎきなれば、或は冑の鉢を眞二に打破り、引太刀に廻る敵を切居、或は鎧のどう中を不ㇾ懸打切て、餘る太刀にては、左に懸る敵を拂はる。其及に胸を冷して、敵敢て不二近附一、東西開け前後晴て、彌大將馬に放れぬと、見知ぬ敵も無りけり。大高左馬助重成遙に是を見て、急ぎ馳寄り、弓手に下

参然たる—叢り立つたる
機を撓め云云—氣を挫かれず

眞前にこそ進だれ。舍弟駿河守是を見て、軍門に君の命なし。戰場に兄の禮なし。今日の軍の先懸は、我ならでは覺ぬ者をと、嗚呼がましげに廣言吐て、兄より先につと懸拔て懸入上は、相從ふ兵共八百餘騎、誰かは是に可ㇾ劣我先に戰んと、魚鱗に成てぞ懸ける。左馬頭基氏參然たる敵の勇鋭を見ながら、機を撓め給はず、相懸に馬を閑々と歩ませ、事もなげに進れたり。敵鬨の聲三度作て、些擬議したる處に、天も落ち地も裂るかと覺る許に唯一聲鬨を作て、左右に颯と分る。芳賀が八百餘騎を東西より引裹て、弓手に相附け、馬手に背て、切ては落され、捲つ捲れつ、半時許戰て、兩陣互に地を易、南北に分て、其跡を顧れば、原野血に染て、草はさながら緣をかへ、人馬汗を流て、堀かねの池も血となる。左馬頭は芳賀が元の陣に取上り、芳賀は左馬頭の始の陣に打上て、共に其兵を見るに、討れたる者百餘人、被ㇾ創者數を不ㇾ知。さても宗徒の者共の中に、誰か討れたると尋る處に、駿河守殿こそ鎌倉殿に切落され給ふと見つるが、召れて候し御馬の放て候つる。如何樣討れさせ給てや候らんと申ければ、兄の伊賀守流るゝ涙を汗と共に推拭て云けるは、唯二人如ㇾ影隨て、死なば共にと思つる弟を目の前にて被ㇾ討、其死骸何に有共不ㇾ見、さてあると云事や可ㇾ有とて、切散されたる母衣結繼て、鎧ゆり直

左輔右弼―左備右備をいふ

所存あらば逐て可レ致ニ訴訟一處に、合戰の企奇怪の至也。所詮可レ加ニ退治一とて、自大勢を率して、宇都宮へぞ被レ寄ける。禪可此事を聞て、さらば鎌倉殿と先戰んとて、我身は宇都宮に有ながら、嫡子伊賀守高貞次男駿河守に、八百餘騎を差副て、武藏國へぞ遣ける。此勢坂東路八十里を一夜に打て、六月十七日辰刻に、苦林野にぞ著にける。小塚の上に打上て、鎌倉殿の御陣を見渡せば、東には白旗一揆の勢五千餘騎、甲冑の光を耀して、明殘る夜の星の如くに陣を張る。西には平一揆の勢三千餘騎、戟矛勢冷して、陰森たる冬枯の林を見に不レ異。中の手は左馬頭殿と覺て、二引兩の旗一旒、朝日に映じて飛揚せる其陰に、左輔右弼密く、騎射馳突の兵共三千餘騎にて控たり。上より見越ば、數百里に列て、坂東八箇國の勢共、唯今馳參ると覺て、如ニ雲霞一見えたり。烏雲の陣堅して、逞卒機鋭なれば、如何なる孫呉が術を得たり共、千騎に足ぬ小勢にて、懸合べしとは不レ覺。芳賀伊賀守馬に打乘て、母衣を引繕て申けるは、平一揆、白旗一揆は、兼て通ずる仔細有しかば、軍の勝負に附て、或は敵ともなり、或は御方とも成べし。跡にさがりて唯今馳參る勢は、縱何百萬騎有と云共、物の用に不レ可レ立。家の安否身の浮沈、唯一軍の中に定べしと、高聲に呼て、前後に人なく、東西に敵有とも思はぬ氣色にて、

樵蘇を不樂 ―薪を樵り草取ることを樂まず卽ち其業に安んぜざるをいふ

如レ斯近年は、敵に成たりつる人々は皆降參して、貞治改元の後より、洛中西國靜也といへども、東國に又不慮の同士軍出來して、里民樵蘇を不レ樂。其事の起を尋れば、此三四年が先に、將軍兄弟の御中惡く成給て、合戰に及し刻、上杉民部大輔故高倉禪門の方にて、始は上野國板鼻の合戰に、宇都宮に打負て、後には薩埵山の軍に御方の負をしたりしが、兎角して信濃國へ逃下り、宮方になりて、猶此所存を遂ばやと、時を待てぞ居たるける。上杉斯る不義を致けれども、鎌倉左馬頭基氏、幼少より上杉に懷きそだてられたりし舊好難レ捨思はれければ、以二別儀一先越後國の守護職を與て、上杉をぞ被二呼出一ける。此時芳賀兵衞入道禪可は、越後國の守護にて有けるが、降參不忠の上杉に、被二思替一奉て、忠賞恩補の國を可レ被二召放一樣やあるとて、上杉と芳賀と、越後國にて及二合戰一事數月也。禪可遂に打負しかば、當國を上杉に被レ奪のみならず、一族若黨其數を不レ知、落樣に皆討れにけり。禪可是を忿て、哀不思議も有て、世中亂よかし。上杉と一合戰して、此恨を散ぜんと憤けり。斯る處に、上杉已に左馬頭の執事に成て、鎌倉へ越ると聞えければ、禪可道に馳向て戰んとて、上野の板鼻に陣を取てぞ待たりける。然共、上杉上野國へも不レ入先に、左馬頭宣けるは、何ぞ任二我意一加樣の狼藉を可レ致。

○仁木京兆降參事

仁木左京大夫義長は、差たる不義は無りしかども、行跡餘に思ふ樣也とて、諸人に依レ被レ惡、心ならず御敵になり、伊勢國に逃下て、長野城に楯籠たりしを、初は佐々木六角判官入道崇永、土岐大膳大夫入道善忠兩人討手を承り、是を攻けるが、佐々木は他事に被レ召て、上洛しぬ。土岐一人國に留て、攻戰けれども、義長敢て城を不レ被レ落。此時又當國の國司北畠源中納言顯信卿、雲出川より西を管領して、兵を出し隙を伺て戰ひ挑し間、一國三に分て、片時も軍の絕る日もなし。角て五六年經て後、義長日來の咎を悔て、降參すべき由を被レ申ければ、此人元來忠功異二于他一、今又降參せば、伊賀伊勢兩國も靜るべしとて、義長を京都へ返し入られけり。是は勢已に衰たる後の降參なりしかば、領知の國もなく、相從し兵も身に不レ添、李陵が如レ在レ胡にして、舊交の友さへ來らねば、見る人遠き庭上の花、春獨春の色なり。鞍馬稀なる門前の柳、秋獨秋の風なり。

○芳賀兵衞入道軍事

れ。世上毀譽非ニ善惡一人間用捨在ニ貧福一とは、今の時をや申べき。

○山名京兆被レ參ニ御方一事

山名左京大夫時氏、子息右衞門佐師氏は、近年御敵に成て、南方と引合て、兩度まで都を傾しかば、將軍の御爲には、上なき御敵なりしかども、内々屬レ緣、兩度の不義全く將軍の御世を危め奉らんとには非ず、唯道譽が餘に本意無りし振舞を、思知せん爲計にて候ひき。其罪科を御宥免有て、此間領知の國々をだにも被ニ恩補一候はゞ、御方に參て忠を致すべき由をぞ申たりける。げにも此人御方に成ならば、國々の宮方力を落すのみならず、西國も又可ニ無爲一とて、近年押て被ニ領知一つる因幡伯耆の外、丹波丹後美作五箇國の守護職を被ニ充行一ければ、元來多年舊功の人々、皆手を空して、時氏父子の榮花、時ならぬ春を得たり。是を猜て述懷する者共、多く所領を持んと思はゞ、唯御敵にこそ成べかりけれと、口を嚬れども甲斐なし。人物競ニ紛花一麗駒逐ニ鈿車一此時松輿レ柏不レ及ニ道傍花一と、詩人の賦せし風諭の詞、げにもと思知れたり。

垂棘の玉―明月の玉とも夜光の玉ともいひて異義多し
管夷吾云々―論語憲問篇に出づ

は誠に似たる事は似たれども、是なる事は是ならず。彼百里奚は虞公の垂棘の玉、屈產の乘の賄に耽て、路を晉に開しかば、諫けれども叶まじき程を知て、秦の穆公に仕へき。管夷吾は召忽と共に不レ死、子路非レ仁譏しかば、豈如下匹夫匹婦自縊二溝壑一無上レ知乎と、文宣王是を塞ぎ給へり。されば古賢の世を治めん爲に二君に仕しと、今の人の欲を先として降人に成とは、雲泥萬里の隔、其中に有と云つべし。爰に大内介は、多年宮方にて、周防長門兩國を打平げて、無二恐方一居たりけるが、如何思けん、貞治三年の春の比より、俄に心變じて、此間押て領知する處の兩國を賜らば、御方に可レ參由を、將軍羽林の方へ申たりければ、西國靜謐の基たるべしとて、軈所望の國を被二恩補一。依レ之今迄貳心無りける厚東駿河守、長門國の守護職を被二召放一、含レ恨ければ、則長門國を落て筑紫へ押渡り、菊池と一に成て、却て大内介を攻んとす。大内介遮て三千餘騎を率して、豐後國に押寄せ、菊池と戰けるが、第二度の軍に負て、菊池が勢に圍れければ、降を乞て命を助り、己が國へ歸て後、京都へぞ上ける。在京の間數萬貫の錢貨、新渡の唐物等、美を盡して、奉行、頭人、評定衆、傾城、田樂、猿樂、遁世者まで、是を引與ける間、此人に增る御用人有まじと、未見えたる事もなき先に、譽ぬ人こそ無りけ

四凶—尚書に、流二共工于幽州一放二驩兜于崇山一竄二三苗于三危一殛二鯀于羽山一とあるをいふ

太平記　卷第三十九

○大内介降參事

聖人世に出て義を敎へ道を正す時だにも、上智は少く下愚は多ければ、人の心都て不二一致一。肆に堯の代に四凶の族あり、魯國に少正卯あり。況や時今澆季也、國又卑賤也。因ㇾ何仁義を知人有べきなれ共、近年我朝の人の有樣程、うたてしき事をば不ㇾ承。先弓矢取とならば、死を善道に守り、名を義路に不ㇾ失こそ可ㇾ被ㇾ思、僅に欲心を含ぬれば、御方に成るに早く、聊も有ㇾ恨、敵になるも易し。されば今誰をか始終の御方と可二憑思一。變じ易き心は鴻毛より輕く、不ㇾ撓志は麟角よりも稀也。人數ならぬ小者共の中に、適一度も翻らぬ人一兩人有といへども、其も若祿を與へ利を含て呼出す方あらば、一日も足を不ㇾ可ㇾ留。唯五十步に止る者、百步に走るを如ㇾ笑、見所の高懸とかやの風情して、加樣の事を申共、書傳の片端を聞たる人は、古を引、さても百里奚は虞の君を棄て、秦の穆公に不ㇾ仕、管夷吾は桓公に降て、公子糺と不ㇾ死しは、如何にとぞ思給らん。それ

の諸侯道塞て不レ通ける間、三人の將軍空く帝師が謀に被レ落て、所々にて討れにけり。是より楊子江の陣には、敵を防ぐ兵一人も無ければ、大元五百萬騎の兵共、推て都へ攻上るに、敢て遮るべき勢なければ、宋朝の幼帝宮室を盡し宗廟を捨て、遂に南蠻國へ落給ふ。大元の老皇帝驪都に入替り給しかば、天下の諸侯皆從附奉て、大宋國四百州忽に大元の世に成にけり。さしもいみじかりし大宋國、一時に傾し事も、天運圖に當る時とは云ながら、唯帝師が謀によれる者也。今細川相摸守、無雙の大力世に超たる勇士なりと聞えしか共、細川右馬頭が尺寸の謀に被レ落、一日の間に亡ぬる事、偏に宋朝の幼帝、帝師が謀に相似たり。人而無二遠慮一必有二近憂一とは、如レ此事をや申べき。

骨を醢に―骨を鹽漬にする

不落―罪に落ちざること、白狀せざるをいふ

の責に逢共、暫は勿二落事一。倒懸身を苦め、炮烙骨を碎時に至て、我は伯顔將軍賈丞相等が使として、謀叛與力の兵共に、事の仔細を相觸ん爲に、帝都に赴たる由を白狀して、其驗是也とて、件の身の中に隱ける書を、可二取出一とぞ敎ける。彼老翁已に三千兩の金に身を賣し上は、命を非レ可レ惜、帝師が敎の儘に、謀叛催促の狀を數十通、身の肉を割て中に收め、帝都の宮門へぞ赴ける。忽に身を車裂にせられ、骨を醢にせらるべきをも不レ顧、千金に身を替て、五刑に赴く人の親の子を思道こそ哀なれ。老翁則帝都に上て、態と怪げなる體に身を窶し、宮門を廻て、案内を見る由に振舞ける間、守護の武士是を捕て、上つ下つ責問に、暫は敢て不レ落。嗷問度重て、骨碎け筋斷ぬと見えける時に、我は是伯顔將軍呂文煥等が謀叛催促の使也と白狀して、股の肉の中より、宮中洛外の諸侯の方へ、約をなし賞を與たる數通の狀をぞ取出たりける。典獄の官驚て、此由を奏聞しければ、先使者の老翁を誅せられて、軈て伯顔將軍賈丞相呂文煥等が父子兄弟三族の刑に行れて、或は無罪諸侯死を兵刃の下に賜り、或は功有し舊臣尸を獄門の前に曝せり。此事速に楊子江の陣へ聞えしかば、伯顔將軍賈丞相呂文煥等、頭を延て無罪由を陳じ申さん爲に、大元の戰を打捨て、都へ歸上けるが、國々

低れて思案するをいふ

りて、千戸萬戸の侯にほこれりと聞る上將軍伯顔丞相呂文煥等が事を、都にいかゞ云沙汰するとぞ伺聞せける。使者上て、家々に彳み、事の體人の云沙汰する趣能々伺聞て、大元に歸り、帝師に對て語けるは、伯顔丞相呂文煥等大元の軍に打勝て、武功身に餘れり。天下の士是を重ずる事、上天の威に超たり。若此勢を以て、世を傾んと思はゞ、唯指掌よりも易かるべし。古安祿山が兵を引て帝都を侵し奪しも、斯る折節にてこそあれと、恐れ思はぬ人も候はずとぞ語ける。帝師使者の語るを聞て、今はかうと思ければ、三千兩の金に身を賣たりつる老翁を呼て、彼が股の肉を切裂て、呂文煥伯顔將軍賈丞相三人が手跡を學で、反逆籌策の文を書、彼が骨の間に收て、疵を癒してぞ持せける。其文に書けるは、我等已に大元の軍に打勝て、士卒の附從事數を不レ知。天已に時を與たり。不レ取却て禍有べし。然らば早士を引約を成て、帝都に赴かんと欲す。若亡國の暗君を捨て、有道の義臣に與せんとならば、戈を倒にする謀を可レ致と書て、宮中の警固に殘し留られたる國々の兵の方へぞ遣ける。敵を謀る手だて如レ此認て、帝師重て老翁に向て申けるは、汝まづ帝都に上り、怪げなる體にて宮中を伺見べし。去程ならば、宮門を守る兵共、汝を捕て嗷問すべし。縱水火

千戸萬戸の侯―大小の諸侯
相如―司馬相如のこと
劉仲―漢の高祖の兄也
眉を揚げ云―一度眉をあげて喜び一度面を

我嘗兵の凶器なる事を不レ知、若かりし時好で兵書を學びき。智は性の嗜む處に出る者なれば、呉氏孫氏が祕する處の道、尉繚李衛が難しとする處の術、一を擧て占へば、則三を反して悟りき。然れば乍レ坐三尺の雄劒を提て、立處に四海の亂を理めん事、我に非ずば誰ぞやと、心を千戸萬戸の侯に懸て思しに、我壯なりし程は、世治り國靜なりし間、武に於て用られず、今天下方に亂れて、劒士尤功を立る時には、我已に老衰して、其選に不レ當、久く此江南の市の上に旅宿して、僅に三人の男子を儲たり。相如が破壁風寒して、夜の衣短く、劉仲が乾鍋薪盡て、朝の飡空し。唯老驥の千里を思ふ心未屈せざれ共、飢鷹の一呼を待身と成ぬ。故に此劒を賣て、三子の飢を扶んと欲する也と、委く身上の羸を佗て、涙を流てぞ立たりける。帝師重て問て云、父老の言を聞に、三人の子供飢て、公が百年の命已に迫れり。我三千兩の金を持たり。願は是を以て父老の身を買ん。父老何ぞ兎ても無二幾程一老後の身を賣て、行末遙なる子孫の富貴を不レ欲やと問に、老翁眉を揚け面を低て、誠に公の言の如く、我に三千兩の金を被レ與、我豈三子の飢を助て、無二幾程一命を不レ捨やとぞ悅ける。さらばとて帝師則老翁の身を三千兩の金に買ひ、大元へ歸て後、先使者を宋國の帝都へ遣して、今度楊子江の合戰に功あ

機巧は大眞に非ず—巧に上手なるは眞正に得たるものにあらず

煙に目くれて、膽迷て何を其方共不レ覺、唯猛火の中に走倒て、大元の兵三百萬人は皆燒死にけり。大元王は、多日の粉骨徒に一時の籌策に被レ破、大軍未帝都の戰を不レ致前に、三百萬人まで亡ければ、此事今は叶まじかりけりと氣を屈して、黙止されける處に、西蕃の帝師大元王に謁して申けるは、大器は遲くなるといへり。大元國の天下、豈大器に非ずや。又機巧は大眞に非ず。成る事は微々にして、破る事は大也。今宋國の節度使等が武略の體を聞に、死を善道に守り、命を義路に輕んずるに非ず、唯尺寸の謀を以て、大功の成ん事を意とする者也。宋國の臣獨智あつて、元朝の人皆愚ならんや。我今謀を廻さば、勝事を一戰の前に得つべし。君益志を天下の草創に懸給へ。臣須く以レ智謀、大宋國の四百州を一日の中に可レ傾と申ければ、大元王大に悦で、公が謀を以て、我若大宋國を得ば、必公を上天の下一人の上に貴で、代々帝王の師と可レ仰とぞ被レ約ける。帝師則形をかへ身を窶して、大宋國へ越、江南の市に行て、哀身貧して子多く持たる人もがなと伺見る處に、年六十有餘なる翁の、一の劍を賣て、肉饅頭を買あり。帝師問て曰、劍をうりて、牛を買ふは、治れる世の備なり。牛を賣て、劍を買ふは、亂たる時の事也。父老今劍を賣て饅頭を買ふ。其用何事ぞや。老翁答て曰、

羽衛─禁中守護の兵

に推せられじと、楯鋒鎧冑を取捨て、堀溝に馬を乘棄て、我先にと逃走る。是を誑るとも不レ知ける羽衛斥候の兵、徒に命を輕じて討死するも多かりけり。日已に暮ければ、宋國の兵城へ引籠る眞似をして、後なる深山へ隱れぬ。大元の兵は、敵の疲たる弊に乘て、則是を討んと、城の際までぞ攻たりける。旗を進め戈をさしまねぎて、城を遙に向上たれば、櫓の上塀の陰に、兵袖を連ねて竝居たりとは見えながら、鬨の聲も幽に、射出す矢楯をだにも不レ徹。大元の將軍是を見て、人形の木偶人共に、誠の人が少々相交て、ふせぐ眞似するとは思も不レ寄。敵は今朝の軍に遠引して、氣疲勢盡はてけるぞ。時を暫も不レ可レ捨。攻よや兵共と、諫め訇て攻鼓を打て楯を進ければ、城中に少々殘置れたる兵共、暫有て火の燃出る樣に、家々に火を懸て、ぬけ穴より逃去けり。木偶人誠の兵ならねば、敵攻入共防ぐ者なし。大元三百萬騎の兵共、勇み進で二つともなき木戸より、城の中へ込入り、或は僞て棄置たる財寶を爭て奪合ひ、或はたばかつて立置たる木人に向て、劍を拉ぎ、戈を靡す處に、三萬餘家作雙たる城中の家々より、同時に火燃出て、煙滿レ城炎四方に盛なり。大元の兵共塀を上越て、火を遁れんとすれば、可二取附一便もなく橋もなし。攻入つる木戸より出んとするに、

呂文煥を裨將軍として三十萬騎、大金の賈似道賈平相兄弟を副將軍として、六十萬騎を差下さる。三軍の兵三百萬騎、江南に打臨み、夜を日に繼で、楊子江を前に直下て、三箇所に陣をぞ取たりける。中にも伯顏丞相一陣に進て、楊子江の南に控たりけるが、大元の兵共の浮橋をかけ陣を張たる體を見て、謀を廻して不戰、勝事を難得と思ければ、今の陣より六十里、後に高く岨き山を城に拵て、四方の塀を、如何に打破る共無左右破られぬ様に、高く塗せて、内に數千軒の家を透間もなく作並べ、櫓の上矢間の陰に、人形を數千萬立置て、或は戈をさしまねぎ刄を交へ、或は太鼓を打弓を引て、戰を致さんとする様に、風を以てしつらひ水を以てあやつりて、岩を切たる細道に、唯木戸一開て、内に實の兵を二百餘人留置き、敵城へ寄せば、暫戰ふ眞似をして、ふせぎ兼たる體を見せよ。敵勝に乘て城中へ攻入らば、敵を皆内へおびき入て後、同時に數千の家々に火を懸て、己が身計隱して、掘たる土の穴より遁出て、敵を皆可燒殺とぞ謀ける。去程に三百餘箇所の浮橋を、已に渡しすましてければ、大元の兵三百萬騎爭ひ前で橋を渡る。伯顏丞相兼て謀たる事なれば、矢軍些する眞似して、暫も不支引て行。大元の兵勝に乘て、逃るを追事甚急也。宋國の兵猶も偽て、引體を敵

懸針―羊字の竪の棒の下に突き出でたる部分をいふ

て、弓をふせ戈を棄て、天下の勝負は唯此獅子と羊との戰に可レ在と伺見る處に、羊獅子の忿れる形に懼て、忽に地に倒る。時に羊二の角と、一の尾骨をつき折て、天にのぼりぬとぞ見給ける。老皇帝夢醒て後、心更に悅ばず、大に不吉なる夢なりと思ひ給ければ、夙に起て西蕃の帝師に此夢を語り給ふ。帝師是を聞て、心の中に夢を占て謂、羊と云文字は、八點に王を書て、懸針を餘せり。八點は角なり、懸針は尾なり。羊二の角と、一の尾を失はゞ、王と云字になるべし。是老皇帝大元宋國高麗の國を并せ保て天下に主たるべき瑞相也。又宋朝の幼帝獅子に成て、鬪ひ忿ると見えけるも、自滅の相也。獅子の身中に毒蟲ありて、必其身を食殺す。如何樣幼帝の官軍の中に、貳心ある者出來て、戈を倒にする事あるべしと占ふ。夢の理明に、兩方の吉凶を心に勘ければ、是大なる吉夢也。時を不レ易兵を召れて、宋國を可レ被レ攻とぞ、帝師勸め申されける。老皇帝は元來帝師が才智を信じて、萬事を是が申儘に用ひ給ければ、重て吉凶の故を尋問に不レ及、大元七百州の兵三百萬騎の勢を催して、楊子江の北の畔に打臨み、河の面三百餘箇所に浮橋を渡し、同時に兵を渡さんとぞ支度せられける。大宋國の幼帝此事を聞給て、さらば討手を差下せとて、伯顏丞相を上將軍として百萬騎、襄陽の守

昔孔子云々—論語述而篇に出づ

暴虎馮河云々—孔安國曰、暴虎徒搏馮河徒渉と、所謂蠻勇をいふ也

十六代—實は十七代也

○大元軍事

昔孔子謂二顔淵一曰、用之則行、舍之則藏、唯我與レ爾有レ是夫と、ほめ給けるを、傍にて聞ける子路大に忿て曰、子行二三軍一則誰與と申ければ、孔子重て子路を諫て曰、暴虎馮河死而無レ悔者吾不レ與也、必也臨レ事而懼、好レ謀而成者也とぞ宣ける。されば古も今も、敵を滅し國を奪ふ事唯猛く勇るのみに非ず、兼ては謀を廻し、智慮を先とするにあり。今大宋國の四百州一時に亡て、蒙古に奪はれたる事も、西蕃の帝師が謀を廻せしによれり。其草創のよれる所を尋ぬれば、宋朝世を治て已に十六代、其亡し時の帝をば、幼帝とぞ申ける。此時大元の國主老皇帝、其比は未吐蕃の諸侯にてありけるが、哀如何にもして本朝四百州、雲南萬里、高麗三韓に至まで、不レ殘是を打取ばやと思ふ心骨髓に入て止時なし。或時彼老皇帝此事を天に仰ぎ、少し目睡給ける夢に、宋朝の幼帝と、大元の老皇帝と、楊子江を隔て陣を張て相對する事日久し。時に楊子江俄に水旱て陸地となる。兩陣の兵已に相近て、戰はんとする處に、幼帝は其身化して勇猛忿迅の獅子となり、老皇帝は形俄に變じて白色柔和の羊となる。兩方の兵是を見

馬のありけるに打乘て、かちに成たる鹽冶を、馬の上より手を引て、尼崎へ落て行く。敵跡に附ても追ざりければ、道場の内に一夜隱居て、翌の夜京へぞ上ける。和田楠等唯一軍に攝州の敵を追落して、勝に乘といへ共、赤松判官信濃彦五郎兄弟、猶兵庫の北なる多田部城に籠て、兵庫湊河を管領すと聞えければ、九月十六日、石堂右馬頭、和田楠三千餘騎にて、兵庫湊川へ押寄、一宇も不殘燒拂ふ。此時赤松判官兄弟は、多田部山路二箇所の城に籠て、敵懸らば爰にて利をせんと待懸けるが、楠いかゞ思けん、軈兵庫より引返ければ、赤松出合に不及、野伏少々城より出して、遠矢射懸たる計にて、墓々敷軍は無りけり。都には同九月晦日改元有て、貞治と號す。是は南方の蜂起さてもや靜ると、諸卿申合れし故也。げにも改元の驗にや、京都より武家の執事尾張大夫入道、大勢を討手に下すと聞えければ、和田楠又尼崎西宮の陣を引て、河内國へ歸りぬ。是を聞て山名伊豆守時氏が勢の、丹波の和久に居たりしも、因幡國へぞ引返ける。今年天下已に同時に亂て、宮方眉を開きぬと見えけるが、無程國々靜りけるも、天運の未至らぬ處とは云ながら、先は細川相摸守が、楚忽の軍して、無云甲斐討死をせし故也。

すげなう―愛想なく、無情に

も箕浦懸破ては通り、取て返ては戰けるに、一番に河原林彈正左衞門は討れぬ。是を見て芥河右馬允すげなう引分て落て行んとしけるを、日比の口には似ぬ者哉と、箕浦に言を被懸、一所に打寄て相伴ふ。箕浦是を案内者にて、數箇所の敵の中を遁出、都を差てぞ上ける。下の手に控たる者共は、落方を失て、惘然として居たるを、木村兵庫允泰則、兵共の掟、面々存知の前なれども、戰難儀なる時、死なんとすれば生、生んとすれば死る者にて候ぞ。唯幾度も敵のなき方へ引かで、敵の大勢控たらん所へ懸入て戰はんに、討れば元來の儀、討れずば懸拔て、西を指て落て行んに、敵もさすが命を捨てはさのみ長追をばし候はんや。云處げにもと思はゞ、泰則に續けや人々と云儘に、淨光寺前に百騎許控たる敵の方へ、馬を引返して歩せ行く。敵是を見て、是は何樣降人に出る者かと、少猶豫して控たる處に、歩立なる石津助五郎行泰に矢二筋三筋射させて、敵の馬の足些しどろになれば、三騎の者どもをつと喚て懸入るに、百騎許控たる敵颯と分れ靡て、敢て是に當らんとせず。唯射手を進て射させける程に、箕浦彌次郎討れぬ。同四郎左衞門深手を負て、田中に伏たり。鹽冶六郎左衞門、木村兵庫も、馬の平頸草脇二所射させて、深田のあぜに下立たり。すはや討れぬと見えけるが、木村兵庫放

平場の懸合—平野の合戰

は元來燒落たり。株瀨は水深し。和田楠が兵共、縱やたけに思ふ共、可レ渡とは見えざりけり。八月十六日の夜半許に、和田楠元の陣に尙控たる體を見せん爲に、殊更篝を多く燒續させて、是より二十餘町上なる三國の渡より打渡て、小屋野、富松、河原林へ勢を差廻して、敵を河へ追はめんと取籠たり。京勢は是を夢にも知ねば、徒に河向に敵未控たりと、躬繕して居たる處に、小屋野富松に當て、所々に火燃出て、煙の下に旗の手數多見えたり。是までも尙敵河を越たりとは思も不レ寄、燒亡は御方の軍勢どもの手過にてぞ有らんと油斷して、明行儘に後を遙に見渡たれば、十餘箇所に村雲立て控たる勢の旗どもは皆菊水の紋也。さては敵早河を渡てけり。平場の懸合は叶まじ。城へ引籠て戰へとて、淨光寺の要害へ引返さんとすれば、敵はや入替たりと覺て、勝鬨を作る聲、淨光寺の内に聞たり。是を見て、中白一揆の勢三百餘騎は、國人なれば案内を知て、何の間にか落失けん、一騎も不二殘留一。唯守護の家人僅五十餘騎、思切たる體に見えて、一箇所に控て居たりける。兩所に控たる勢一所に打寄んとしけるが、敵の大勢に、早中を隔られて不レ叶ければ、箕浦次郎左衞門東を差て落行に、兩方深田なる細堤を、敵立切て是を打留んと、行前を遮り道を要て、取籠る事度々に及べり。されど

○和田楠與二箕浦次郎左衛門一軍事

南方の敵軍和田楠も、相摸守に兼て相圖を定て、同時に合戰を始めんと議したりけるが、七月二十四日相摸守討れて、四國中國は大略細川右馬頭頼之に靡從ひぬと聞えければ、日來の支度相違して、氣を損じ色を失てぞ居たりける。さもあれ加様にて徒に日を送らば、敵は彌勝に乘て、諸國の御方降人になる者ありぬと覺れば、一軍して國々の宮方に氣を直させんとて、和田楠其勢八百餘騎を率し、野伏六千餘人神崎の橋爪へ打莅む。此比攝津國の守護をば、佐々木佐渡判官入道道譽が持たりければ、其身は京都に有ながら、箕浦次郎左衛門に勢百四五十騎附て、國の守護代にぞ置たりける。催促の國人取合て、其勢僅に五百餘騎、神崎の橋二三間燒落て、敵河を渡さば、河中にて皆射落さんと、鏃を汰て待懸たり。和田楠態と敵をたばからん爲に、神崎の橋爪と株瀨と二箇所に打向て控たれば、此を渡させじと、箕浦彌次郎、同四郎左衛門、鹽冶六郎左衛門、多賀將監、後藤木村兵庫允泰則以下五十餘騎は、株瀨へ馳向ふ。守護代箕浦次郎左衛門、伊丹大和の守、河原林彈正左衛門、芥河右馬允、中白一揆三百餘騎は、神崎の橋爪へ打臨む。橋桁

元年とあるべき也

幽揚―幽に飜ろの意

左中將義貞の足羽の繩手にて討れたりし二人の體に不ㇾ異。西長尾城へ向られたりつる左馬助、二十四日の夜明て後、新開が引歸たるを見て、是は如何樣相摸殿、御陣の勢を外へ分させて、差違へて城へ寄んとたばかりけるぞ。軍今は定て始ぬらん。馳返て戰へとて、諸鐙に策をそへて、千里を一足にと馳返り給へば、新開道に待受て、難所に引懸て、平野に開合せ、入替々々戰たり。互に討つ討れつ、東西に地を易へ、南北に逢つ別つ二時許戰て、新開遂に懸負ければ、左馬助掃部助兄弟勝鬨三聲揚させて、氣色ばうたる體にて、白峯城へ返給ふ。斯る處に笠符かなぐり捨て、袖胄に矢少々射附られたる落武者共二三十騎道に行逢たり。跡に追著て、軍の樣何と有けるぞと問給へば、皆泣聲にて、早相摸殿は討れさせ給て候也とぞ答ける。こは如何にとて、城を遙に向上たれば、敵早入替ぬと覺て、不ㇾ見し旗の紋共、關櫓の上に幽揚す。重て戰はんとするに無ㇾ力、楯籠らんとするに城なければ、左馬助掃部助落行勢を引具して、淡路國へぞ被ㇾ落ける。其國に志有し兵共、此事を聞て、何しか皆心替しければ、淡路にも尙たまり得ず、小舟一艘に取乘て、和泉國へぞ落られける。是のみならず西長尾城も被ㇾ攻ぬ前に落しかば、四國は時の間に靜りて、細川右馬頭にぞ靡從ける。

る。相摸守は近附て、敵の馬を奪はんと、手負たる體にて馬手に下立、太刀を倒に突て立れたりけるを、眞壁孫四郎馳寄、一太刀打て當倒んとする處に、相摸守走寄て、眞壁を馬より引落し、ねぢ頸にやする、人飛礫にや打と、思案したる樣にて、中に差上てぞ立れたる。伊賀掃部助高光は、懸合する敵二騎切て落し、鎧に餘る血を笠符にて押拭ひ、何にか相摸殿のおはすらんと、東西に目を賦る處に、眞壁孫四郎を中に乍提、其馬に乘んとする敵あり。穴夥し凡夫とは不見、是は如何樣相摸殿にてぞおはすらん。是こそ願ふ所の幸よと思ければ、伊賀掃部助畠を直違に馬を眞闇に馳懸て、むずと組で引かつぐ。相摸守眞壁をば、右の手にかい摑で投棄、掃部助を射向の袖の下に押て、頸を搔んと、上帶延て後に廻れる腰の刀を引廻されける處に、掃部助心早き者なりければ、組と均く拔たりける刀にて、相摸守の鎧の草摺はねあげ、上樣に三刀さす。刺れて弱れば刎返して、押て首をぞ取たりける。さしもの猛將勇士なりしか共、運盡て討るゝを、知人更に無りしかば、續て助る兵もなし。森次郎左衛門と、鈴木孫七郎行長と討死しける外は、一所にて討死する御方もなし。其身は深田の泥の土にまみれて、首は敵の鋒にあり。唯元暦の古、木曾義仲が粟津原にて討れ、暦應二年の秋の初、新田

片側破の猪武者―一方のみを見て進む野猪の如き武者

深泥死骸に云々―死屍の地上に充満する意

從ふ兵三十餘騎も、或はほゝあてをして未レ冑をも不レ著、或は籠手を差して未レ鎧を不レ著、眞前に裏連たる敵千餘騎が中へ破て入る。哀剛の者やとは乍レ見、片側破の猪武者、をこがましくぞ見たりける。げにも相摸守敵を物とも思はれざりけるも理哉。寄手千餘騎の兵共、相摸守一騎に懸分られて、魚鱗にも不レ進、鶴翼にも不レ圍得、此の塚の上彼の岡に打上て、馬人共に辟易せり。相摸守は鞍の前輪に引附て、ねぢ頸にせられける野木備前次郎柿原孫四郎二人が首を、太刀の鋒に貫て差擧、唐土天竺鬼海大元の事は、國遠ければ未レ知、吾朝秋津島の中に生て、淸氏に勝る手柄の者有とは、誰もやはいふ。敵も他人に非ず、蓬く軍して笑はるなと恥しめて、唯一騎猶大勢の中へ懸入給ふ。飽まで馬強なる打物の逹者が、逃る敵を追立々々切て落せば、其鋒に廻る者、或は馬と共に尻居に打居られ、或は冑の鉢を胸板まで被二破附一、深泥死骸に地を易たり。爰に備中國住人陶山三郎と、備前國住人伊賀掃部助と、一騎田の中なる細道を、しづしづと引けるを、相摸守追附て切んと、諸鐙を合て、攻られける處に、陶山が中間そばなる溝におり立て、相摸守の乘給へる鬼鹿毛と云馬の、草脇をぞ突たりける。此馬さしもの駿足なりけれ共、時の運にや曳けん、一足も更に動かず、すくみて地にぞ立たりけ

向陣―敵に對して陣を構ふること

騎を相副、路次の在家に火を懸て、西長尾へ向られける。如レ案相摸守是を見て、敵は西長尾城を攻落して、後へ廻らんと巧けるぞ。中院殿に合力せでは叶まじとて、舎弟左馬助、いとこの掃部助を兩大將として、千餘騎の勢を西長尾城へ差向らる。新開元來城を攻んずる爲ならねば、態と日を暮さんと、足輕少々差向て、城の麓なる在家所々燒拂て、向陣をぞ取たりける。城は尙大勢なれば、哀新開が寄て攻よかし。手負少々射出して後、一度にばつと懸出て、一人も不レ殘討留んとぞ勇ける。夜已に深ければ、新開向陣に篝を多く燒殘して、山を超る直道の有けるより引返して、相摸守の城の前白峯の麓へ押寄る。兼て定たる相圖なれば、同二十四日の辰刻に、細川右馬頭五百餘騎にて搦手へ廻り、二手に分れて鬨の聲をぞ擧たりける。此城元來鳥も難レ翔程に拵たれば、寄手縦如何なる大勢なり共、十日二十日が中には、容易可二攻落一城ならず。其上新開西長尾より引歸しぬと見えば、左馬助掃部助軈馳歸て、寄手を追拂はん事、却て城方の利に成べかりけるを、相摸守はいつも己が武勇の人に超たるを憑て、軍立餘に大早なる人なりければ、寄手の旗の手を見ると均く、二の木戸を開かせ、小具足をだにも堅めず、袷の小袖引たをりて、鎧計を取て肩に抛懸て、馬上にて上帶縮て、唯一騎懸出給へば、相

んとならばの意

其後は音信も無りけり。相摸守の陣は白峯の麓、右馬頭の城は歌津なれば、其あはひ僅に二里也。寄やする待てや戰ふと、互に時を伺て、數日を送ける程に、右馬頭の勢大略遠國の者共なれば、兵粮につまりて窮困す。角ては右馬頭は讃岐國には怺じと見ける程に、結句備前の飽浦薩摩權守信胤宮方に成て、海上に押浮、小笠原美濃守相摸守に同心して、渡海の路を差塞ける間、右馬頭の兵は日々に減じて落行き、相摸守の勢は、國國に聞えて夥し。唯魏の將司馬仲達が、蜀の討手に向て、戰はで勝事を得たりけん、其謀に相似たり。七月二十三日の朝、右馬頭帷帳の中より出て、新開遠江守眞行を近附て宣けるは、當國兩陣の體を見るに、敵軍は日々にまさり、御方は漸々に減ず。角て猶數日を送らば、合戰難儀に及ぬと覺る。依レ之事をはかるに、宮方の大將に、中院源少將と云人、西長尾と云所に城を構ておはすなる。此勢を差向て可レ攻勢を見せば、相摸守定て勢を差分て、城へ入べし。其時御方の勢城を攻んずる體にて、向城を取て、夜に入らば篝を多く燒捨て、こと道より馳歸り、軈相摸守が城へ押寄せ、賴之搦手に廻て、先小勢を出し、敵を欺く程ならば、相摸守縱一騎なり共懸出て、不レ戰云事有べからず。是一擧に大敵を亡す謀なるべしとて、新開遠江守に四國中國の兵五百餘

故左大臣—尊氏のこと

御本意を云云—天下を反覆して御本意を達せ

著ける間、清氏の勢は無レ程五千餘騎に成にけり。其比右馬頭頼之は山陽道の蜂起を鎭んとて、備中國に居たりけるが、此事を聞て、備中備前兩國の勢千餘騎を率し、讃岐國へ押渡る。此時若相摸守敵の船よりあがらんずる處へ馳向て戰はゞ、一戰も利あるまじかりしを、右馬頭飽まで心に智謀有て、機變時と共に消息する人也ければ、兼て母儀の禪尼を以て相摸守の許へ言遣けるは、將軍群少の讒佞を不レ被レ正、貴方無レ科刑罰に向はせ給し時、陳謝に言無して、寇讎に恨有し事、頼之尤其理に服し候き。乍レ去故左大臣殿も、仁木、細川の兩家を股肱として、大樹累葉の九功を光榮すべしとこそ被ニ仰置一候しに、一家の好を放て敵に降り、多年の忠を捨、戰を被レ致候はん事、亡魂の恨苔の下まで深く、不義の譏世の末までも不レ可レ朽。頼之苟も此理を存ずる故に、全く貴方と合戰を可レ致志を不レ廻。往者不レ尤と申事候へば、御憤今は是までにてこそ候へ。枉て御方へ御參候へ。御分國已下、悉日來に不レ替可ニ申沙汰一にて候。若又其も御意に叶はで、御本意を天下の反覆に達せんと被ニ思召一候はゞ、頼之無レ力四國を捨て、備中へ可ニ罷返一候と、言を和げ禮を厚して、頻に和睦の儀を請れけるを、相摸守心淺く信じて、問答に日數を經ける間に、右馬頭中國の勢を待調へ、城郭を堅く拵て、

愚昧する事なれど此には單に食物を與ふる事とせり

成けるこそ哀なれ。人間榮耀風前塵と白居易が作り、富貴草頭露と杜甫が作りしも理哉。此人々去々年の春は、三十萬騎が大將として、南方へ發向したりしかば、德風遠く扇て、靡かぬ草木も無りしに、いつしか三年を不レ過、乍レ生恥を曝して、敵陣の境に吟ひぬる事、更に直事とは不レ覺。此人に被二出拔一討れし新田左兵衛佐義興怨靈と成て、吉野の御廟へ參たりけるが、畠山をば義興が手に懸て、乍レ生軍門に恥を曝さすべしと奏し申ける由、先立て人の夢に見て、天下に披露有しも誤にては無りけりと、今こそ思知れたれ。

○細川相摸守討死事 附 西長尾軍事

讃岐には、細川相摸守淸氏と細川右馬頭賴之と、數月戰けるが、淸氏遂に討れて、四國無二事故一靜りにけり。其軍の樣を傳聞に、相摸守四國を打平げて、今一度都を傾て、將軍を亡し奉らんと企て、境浦より船に乘て、讃岐へ渡ると聞えしかば、相摸守が從兄弟の兵部大輔淡路國の勢を率して、三百餘騎にて馳著。其弟掃部助、讃岐國の勢を相催て、五百餘騎にて馳加る。小笠原宮內大輔阿波國の勢を率して、三百餘騎にて馳

出づ、共に人民安堵の狀をいふ

朝三暮四—列子に見え元來は人を

れ共、遂に隱べき事ならねば、畠山兄弟落たりと沙汰する程こそ有けれ、軈て討手を被レ向と聞えければ、遊佐入道は禪僧の衣を著て、唯一人京を志てぞ落行ける。兎角して湯本まで落たりけるが、行合人に口脇なる創を隱さん爲に、袖にて口覆して過けるを、見る人中々あやしめて、帽子を脫せ袖を引のけける間、口脇の創無レ隱顯れて、可レ遁樣無りければ、宿屋の中門に走上て、自吭搔放ち、返す刀に腹切て、袈裟引被て死にけり。江戶修理亮は、龍口にて生捕れて斬れぬ。其外此に隱れ、彼に落行ける郎從共、六十餘人、或は被二搜出一て斬れ、或は被二追懸一腹を切る。目も當られぬ有樣也。畠山入道兄弟無二甲斐一命助て、七條の道場へ夜半許に落著たりけるを、聖二三日勞り奉て、道の案內者少々相副て、行路の資など樣々に用意して、南方へぞ被レ送ける。道誓暫宇知郡の在家に立寄て、楠が方へ降參の綸旨を申てたび候へと、宣ひ遣されたりけれども、楠さしも許容の分無りければ、宇知郡にも不レ隱得、都へ可二立歸一方もなし。南都山城脇邊に、とある禪院律院或は山賤の柴の庵、賤土が伏屋のさびしきに、袂の露を片敷て、夜を重ぬべき宿もなく、道路に袖をひろげぬ計にて、朝三暮四の資に心有人もがなと、身を苦めたる有樣、聞に耳冷く、見に目も充られず。幾程もなく、兄弟共に無レ墓

鰐の淵を去り云々―鰐云々は韓文三十六に出で、蝗云々は後漢書に

體に見えて候。今夜急ぎ何へも落させ給べしとぞ告たりける。道誓聞も不ㇾ敢、舎弟式部大輔に屹と目加せしけるが、假初に出る由にて、中間一人に太刀持せ、兄弟二人徒歩にて、其夜先藤澤の道場までぞ落たりける。上人甲斐々々敷馬二匹、時衆二人相副て、夜晝の境もなく、馬に鞭を進て上洛しけるをば、知人更に無りけり。舎弟尾張守義深は、箱根の御陣に有けるが、翌の夜或時衆の斯る事と告けるに驚て、さては我も何へか落なましと案ずれ共、東西南北皆道塞て、可ㇾ落方も無りければ、結城中務大輔が陣屋に來て、平に可ㇾ憑由をぞ宣ける。是を隠さんずる事は至極の難儀なれ共、弓矢取身の習、人に被ㇾ憑て叶はじと云事や可ㇾ有と思ければ、長唐櫃の底に穴をあけて氣を出し、其櫃の中に伏せて、數十合舁連ねたる鎧唐櫃の跡にたて、態と鎌倉殿の御馬廻に供奉して、尾張守をば夜に紛て、藤澤の道場へぞ送ける。命程可ㇾ惜者はなかりけり。此人遂には御免有て、越前の守護に被ㇾ補、國の成敗穏にて、土民を安せしかば、鰐の淵を去、蝗の境を出る許也。遊佐入道性阿は、主の被ㇾ落妝を聽知たりけれ共、暫人におひしらひて、主を何へも落延させん爲に、少も騒たる氣色を不ㇾ見、碁、雙六、十服茶など飲て、さりげなき體にて、笑戯て居たりければ、郎從共も外樣の人も可㆓思寄㆒様無りけ

守護職還補―以前に還して守護職に補すること

也。

○畠山兄弟修禪寺城楯籠事 附 遊佐入道事

筑紫には宮方蜂起すといへども、東國は無程靜りぬ。去年より畠山入道道誓、舍弟尾張守義深、伊豆の修禪寺に楯籠て、東八箇國の勢と戰けるが、兵粮盡て落方も無りければ、皆城中にて討死せんとす。左馬頭殿より使者を以て、先非を悔て、子孫を思はゞ、頭を延て可降參由被仰けるを、誠ぞと信じて、道誓は禪僧になり、舍弟尾張守は伊豆國の守護職還補の御教書を給て、九月十日降參したりけるが、道誓は伊豆府に居て、先舍弟尾張守を、鎌倉左馬頭の御座する箱根の陣へぞ參せける。舊好ある人は、萬死を出て二度見參に入事の嬉しさよなど云て一獻を勸め、此程無情あたりつる傍輩は、いつしか媚を諛て、言を卑くし、禮を厚して、頻に追從をしける間、門前に鞍置馬の立止隙もなく、座上に酒肴を置連ねぬ時も無りけり。角て四五日經て後、九月十八日の夜、稻生平次、潛に來て道誓に囁きけるは、降參御免の事は、元來被出拔事に候へば、明日討手を可被向にて候なる。實も聞に合て、豐島因幡守俄に陣を取易て、路を差塞ぐ

十七日に、菊池彦二郎五千餘騎を二手に作り、長者原へ押寄て戰けるに、岩野、鹿子木將監、下田帶刀已下、宗徒の勇士三百餘騎討れて、其日の大將菊池彦二郎三所まで創を被ければ、宮方の軍勢已に二十餘町引退く。すはや打負ぬと見えける處に、城越前守五百餘騎入替て戰けるに、小貳筑後二郎、同新左衞門尉、二人共に一所にて討れぬ。其外松浦、宗像大宮司が一族若黨、四百餘人討れにければ、探題、小貳、大友、二度目の軍に打負て、皆散々に成にけり。菊池已に手合の軍に打勝しかば、探題の勇威も恐るに不足と蔑て、菊池肥後守武光新手の兵三千餘騎を率して、舍弟彦二郎が勢に馳加て、豐後府へ發向す。是までも猶、探題、小貳、大友、松浦、宗像が勢は、七千餘騎有けるが、菊池に氣を呑れて、懸合の合戰叶まじとや思けん、探題と大友とは、豐後の高崎城に引籠り、大宰小貳は、岡城に楯籠り、大宮司は、宗像城に籠て、嶮岨を命に憑ければ、菊池豐後府に陣を取り、三方の敵を物共せず、三の城の中を押隔て、今年は已に三年まで、遠攻にこそしたりけれ。抑小貳大友は、大勢にて城に籠り、菊池は小勢にて是を圍む。菊池が兵必しも皆剛なるべからず、小貳大友が勢必しも皆臆病なるべきに非ず。唯士卒の剛臆は、大將の心による故に、九國は加樣に成にける

豐後府―今の大分町、古此に國府を置きしよりいふ

を一時に得しかば、李將軍と云れて、武功天下に聞えたり。智ある大將は、加樣にこそあるに、大敵の國に臨む人の、兵をば次にして、先女を先立給ふ事、不レ被二心得一と難じ申けるが、果して無二幾程一、高崎城にも不レ怺、淺ましき體にて上洛し給しが、面目なくや被レ思けん、尼崎にて出家して、諸國流浪の世捨人と成にけり。

○菊池大友軍事

左京大夫、已に大友が館に著ぬと聞えければ、菊池肥後守武光、敵に勢の附ぬ先に打散せとて、菊池彥次郞、城越前守、宇都宮、岩野、鹿子木民部大輔、下田帶刀以下、勝れたる兵五千餘騎を差副て、探題左京大夫を攻ん爲に、九月二十三日豐後國へ發向す。探題左京大夫是を聞て、抑我九州靜謐の爲に被レ下たる者が、敵の城へ不レ寄して、却て敵に被レ寄たりと京都に聞えんずる事、先武略の不レ足に相似たり。されば敵を城にて相待までもあるまじ。路次に馳向て戰へとて、探題の子息松王丸の、未幼稚にて今年十一歲に成けるを大將にて、太宰小貳舍弟筑後二郞、同新左衞門尉、宗像大宮司、松浦一黨都合其勢七千餘騎にて、筑前國長者原と云所に馳向て、路を遮てぞ待懸たる。同二

李將軍―漢の李廣のこと

の小舟共に至まで、傾城を十人二十人載ぬ船は無りけり。礒に立雙で是を見物しける者どもの中に、些こざかしげなる遁世者の有けるが、傍の人々に向て申けるは、筑紫九箇國の大敵を亡さんとて、討手の大將を承る程の人の、是程物を知らでは、何としてか大功を成すべき。夫大敵に向て陣を張り戰を決せんとする時、兵氣と云事あり。此兵氣敵の上に覆て立時は、戰必勝事を得。若陣中に女多く交てある時は、陰氣陽氣を消す故に、兵氣曾て不立上、兵氣立ざれば、縱大勢なりといへども勝事を不得といへり。されば昔覇陵の李將軍と云ける大將、敵國に赴て、陣を張り旅を調て、單于と戰を決せんとしけるに、敵僅に三萬餘騎、御方は是に十倍せり。兵氣定て敵の上に覆らんと思て、李將軍先高山の上に打上り、兩方の陣を見るに、御方の陣にあがらんとする兵氣、陰の氣に壓れて、立んとすれ共不立得。李將軍倩是を案ずるに、何樣是は我方の陣に女交て隱居たればこそ、加樣には有らめと推して、陣中をさがすに、果して陣中に女隱れて三千餘人交り居たり。さればこそ是故に兵氣は不上けりとて、悉此女を捕て、或は水に沈め、或は追失て、後又高き山に打上て、御方の陣を見るに、兵氣盛に立て、敵の上に覆へり。其後兵を進て、鬪を決するに、敵四方に逃散て、勝事

服山とも書く、越中婦負郡に在り

倒るゝ處に云々―俗にころんでも唯は起きぬといふと同じく、利欲に耽ることをいふ

く思ふ處に、降人に出て、心ならず高名しつる兵共三百餘騎、生捕を先に追立させ、鋒に首を貫て馳來り、如二鬼神一申つる桃井が勢をこそ、我等僅の三百餘騎にて夜討に寄て、若干の御敵どもを打取て候へとて、假名實名事新しく、ことぐしげに名乘申せば、大將鹿草出羽守を始として、國々の軍勢に至迄、哀大剛の者共哉。此人々なくば、爭か我等が會稽の恥をば雪がましと、感ぜぬ人も無りけり。後に生捕の敵どもが、委く語るを聞てこそ、さては降人に出たる不覺の人どもが、倒るゝ處に土を爴む風情をしたりけるよとて、却て惡み笑れける。

○九州探題下向事 附李將軍陣中禁レ女事

筑紫には、小貳大友以下の將軍方の勢ども、菊池に追すゑられて、已に又九州宮方の一統に成ぬと見えければ、探題を下て、小貳大友に力を合では叶まじとて、尾張大夫入道の子息左京大夫氏經を、九州の探題に成てぞ被レ下ける。左京大夫先兵庫に下て、四國中國の勢を催しけれども、附從ふ勢も無りければ、さりとては道より非レ可二引返一とて、僅に二百四五十騎の勢にて、已に纜を解けるに、左京大夫の屋船を始として、士卒

とて、此陣より二里許隔たる井口城へ、誰にも角とも不レ知して、唯一人ぞ行たりける。此時しも能登加賀の者共、三百餘騎打連て、降人に出たりける。執事に屬して、大將の見參に入んと申、間、同道して大將の陣へ參じ、事の由を申さんとしけるに、大將の陣に人一人もなし。近習の人に尋ぬれ共、何へか御入候ぬらん。未宵より大將は見えさせ給はぬ也とぞ答ける。陣を竝たる外樣の兵共是を聞て、さては桃井殿被レ落にけりと騷で、我も何へか落行ましと、物具を著もあり捨もあり、馬に乘もあり乘ぬもあり、ひたひしめきにひしめく間、燒捨たる火陣屋に燃著て、燎原の焰盛なり。是を見て、降人に出たりつる三百餘騎の者共、さらばいざ落行敵どもを打取て、我が高名にせんとて、箙を敲き鬨を作て、追懸々々擊けるに、返合て戰んとする人なければ、此に被二追立一、彼に被二斬伏一、討るゝ者二百餘人、生虜百人に餘れり。桃井は未井口城へも不二行著一、道にて陣に火の懸たるを見て、是は何樣返忠の者有て、敵夜討に寄たりけりと心得て、立歸る處に、逃る兵ども行合て、息をもつきあへず、唯引せ給へ、今は叶まじきにて候ぞと申合ける間、力不レ及桃井も、共に井口城へ逃籠る。晝の合戰に打負て、御服峯に逃上たる加賀越前の勢ども、桃井が陣の燒るを見て、何とある事やらんと怪

だ戦はざる先に逃ぐるをいふ

氣色ばうて ―氣色ばみての音便、意氣揚々たるをいふ

合戰をせずは、生て再び本國へ歸らじと、申切て出たりしかば、少も非ㇾ可ㇾ騒、一所にて討死せんと、氣を勵し心を一にする兵共、神水を飲て、已に篠村を立と聞しかば、何にても廣みへ懸合て、組打に討んと議しける間、篠村の大勢是を聞て、却て寄られやせんずらんと、二日路を隔たる敵に恐て、一足も先へも不ㇾ進、木戸を構へ逆茂木を引て、用心密くては居たりけれども、小林兵糧につまりて、又伯耆へ引退ければ、御敵をば早追落て候とて、氣色ばうてぞ歸洛しける。越中には、桃井播磨守直常、信濃國より打越て、舊好の兵共を相語ふに、當國の守護尾張大夫入道の代官鹿草出羽守が、國の成敗みだりなるに依て、國人擧て是を背けるにや、野尻、井口、長澤、倉滿の者共、直常に馳附ける程に、其勢千餘騎に成にけり。桃井軈勢に乘て、國中を押すに、手にさはる者なければ、加賀國へ發向して、富樫を攻んとて打出ける。能登、加賀、越前の兵共是を聞て、敵に先をせられじと相集て、三千餘騎越中國へ打越て、三箇所に陣を取る。桃井はいつも敵の陣未取おほせぬ所に、懸散を以て利とする者なりければ、逆寄に押寄て攻戰ふに、越前の勢一陣先破て、能登越中の兩陣も不ㇾ全、十方に散てぞ落行ける。日暮れば、桃井本の陣へ打歸て、物具脱て休けるが、夜半許に些可二評定一事あり

聞落―敵の勢強き風聞をきいて未

を經て、播磨へ打越んとて出たりけるが、但馬國の守護仁木彈正少弼、安良十郎左衞門、將軍方にて楯籠たる城、未落ざりける間、長九郎左衞門尉、安保入道信禪已下の宮方ども、我國を閣て他國へ越る事を不レ得。さらば小林が勢計にても、播磨へ打越んと企る處に、赤松掃部助直頼大山に城を構て、但馬の通路を差塞ぎける程に、小林難所を被レ支、丹波へぞ打越ける。丹波には、當國の守護仁木兵部大輔義尹、兼て在國して待懸たる事なれば、軈合戰有ぬとこそ覺けるに、楚忽に軍しては、中々惡かりぬとや被レ思けん、和久鄕に陣を取て、互に敵の懸るをぞ相待ける。丹波は京近き國なれば、暫も非レ可レ閣、急ぎ大勢を下して、義尹に力を合せよとて、若狹の守護尾張左衞門佐入道心勝、遠江守護今川伊豫守、三河守護大島遠江守三人に、三箇國の勢を相副て、三千餘騎京都より差下さる。其勢已に丹波の篠村に著しかば、當國の兵共、心を兩方に懸て、何方へか附ましと思案しける者共、今は將軍方ぞ強からんずらんと見定て、我先にと馳附ける程に、篠村の勢は日々に勝て、無レ程五千餘騎に成にけり。山名が勢は、纔に七百餘騎、國遠して兵糧乏く、馬人疲て、城の構密しからず。角ては如何怺べき、聞落にぞせんずらんと覺ける處に、小林右京亮、伯耆國を出しより、今度天下を動す程の

隨レ風聚散、人多迷レ路云々とあり、所謂沙漠の事也

御分―貴殿

しとな覺しそ。御分誠に僧ならば、斯る不思議の事をば、よもし給はじ。唯此城の案内見ん爲に、夜討の手引しつべき人が、貌を禪僧に作立られてぞ、是へはおはしたるならん。やゝ若黨共、此僧連て城の有樣能々見せて後、木戸より外へ追出し奉れとて、後の障子を荒らかに引立て、内へ入れば、使者の僧今や失はるゝと、肝心も身にそはで、這々逃てぞ歸ける。此使歸らば、佐殿定て寄せ給はんずらん。先ずる時は人を制するに利ありとて、逆寄に寄て追散せとて、子息下野次郎氏信に、五百餘騎を差副、佐殿の陣を取て御座宮内へ押寄せ、懸立々々攻けるに、佐殿の大勢共、立足もなく打負て、散散に皆成にければ、富田も是に力を落して、己が本國へぞ歸にける。直冬朝臣、宮入道と合戰をする事其數を不レ知。然共直冬一度も未打勝給たる事なければ、無二云甲斐一と思ふ者やしたりけん。落書の歌を札に書て、道の岐にぞ立たりける。

　直冬はいかなる神の罰にてか、宮にはさのみ怖てにぐらん。

侍大將と聞えし森備中守も、佐殿より前に逃たりと披露有ければ、高札の奧に、

　楢の葉のゆるぎの森にゐる鷺は、深山下風に音をや鳴らん。

但馬國へは、山名左衞門佐・舍弟治部大輔・小林民部丞を侍大將にて、二千餘騎大山

點心—定りたる食事と食事との間に食ふ物、菓子などをいふ

流沙—佛祖統紀三十三に、東入大流沙。其沙

到來して、諸國の武士大略御方に志を通ずる處に、其方より曾て承る旨なき間、遮て使者を以て申也。天下に人多といへども、別して憑思奉る志深し。今若御方に參じて、忠を被致候はゞ、闕所分已下の事に於ては、每事所望に可從とぞ宣ひ遣れける。宮入道道山、先城へ使者の僧を呼入て、點心を調、禮儀を厚して對面あれば、使者の僧、今はかうと嬉しく思ふ處に、彼禪門道山、僧に向て申けるは、天下に一人も宮方と云人なく成て、佐殿も無憑方成せ給たらん時、さりとては憑ぞと承らば、若憑れ進する事もや候はんずらん。今時近國の者共、多く佐殿に參て、勢附せ給ふ間、當國に陣を召れて、參れと承らんに於ては、えこそ參り候まじけれ。惡し其儀ならば、討て參せよとて、御勢を向られば、尸は縱御陣の前に曝さるとも、魂は猶將軍の御方に留て、怨を泉下に報ぜん事を計ひ候べし。抑加樣の使などには、御內外樣を不云、可然武士をこそ立らるゝ事にて候に、僧體にて使節に立せ給ふ條、難心得こそ覺て候へ。文珠の佛の御使にて維摩の室に入り、玄奘の大般若を渡さんとて流沙の難を凌しには樣替て、是は無慚無愧無道心の御擧動にて候へば、僧聖とは申まじ。御首を軈路頭に懸度候へども、今度計は以別儀ゆるし申也。向後斯る使をして、生て歸べ

打越て、國々へ勢を差分つ。先一方へは時氏子息左衛門佐師義を大將にて、二千餘騎、備前、備中、兩國へ發向す。一勢は備前仁堀に陣を取て、敵を待に、其國の守護、松田、河村、福林寺、浦上七郎兵衛行景等、皆無勢なれば、出合ては叶はじとや思けん、又讃岐より細川右馬頭頼之、近日兒島へ押渡ると聞ゆるをや相待けん、皆城に楯籠て、未二曾戰一。一勢は多治目備中守楢崎を侍大將にて、千餘騎備中の新見へ打出たるに、秋庭三郎多年拵すまして、水も兵糧も卓散なる松山城へ、多治目楢崎を引入しかば、當國の守護越後守師秀可レ戰様無して、備前の徳倉城へ引退く刻、郎從赤木父子二人落止て、思程戰て、遂に討死してけり。依レ之、敵勝に乘て、國中へ亂入て、勢を差向々々攻出すに、一議をも可レ云様無れば、國人一人も從ひ不レ附云者なし。唯陶山備前守計ぞ、南海の端に添て、僅なる城を拵て、將軍方とては殘ける。備後へは、富田判官秀貞が子息彈正少弼直貞八百餘騎、出雲より直に國中へ打出たるに、江田、廣澤、三吉の一族馳著ける間、無レ程二千餘騎に成にけり。富田其勢を合て、宮下野入道が城を攻んとする處に、石見國より、足利左兵衛佐直冬五百騎許にて、富田に力を合せんと、備後の宮内へ被レ出たりけるが、禪僧を一人、宮下野入道の許へ使に立て被レ仰けるは、天下の事時刻

二河白道―選擇集に愛欲を水河に瞋恚を火河に譬へ一念發起して淨土を願ふことを白道に譬へていへることあり其語を假りて云へる也

ねぐらを失ひ、魚は泥に吻のみならず、人民共の飢死する事、所々に數を不知。此時近江の湖も、三丈六尺乾たりけるに、樣々の不思議あり。白髭明神の前にて、澳に二人して抱許なる檜木の柱を、おほひ一丈八尺づつ立雙べて、二町餘に渡せる橋見えたり。古人の語り傳たる事もなし、古き記錄にも不載。是は何樣龍宮城の道にてぞ有らんと云沙汰して、見る人日々に群集せり。又竹生島より箕浦まで、水の上三里、如瑪瑙なる切石を、廣さ二丈許に平に疊連ねて、二河白道も角やと覺たる道一通り顯出たり。是も如何樣龍神の通路にてぞ有らんとて、蹈では渡る人なし。唯傍の浦に船を浮て、見る人如市也。此湖七度まで桑原に變ぜしを我見たりと、白髭明神、大宮權現に向て被仰けると云古の物語あれば、左樣の桑原にやならんずらんと、見る人奇み思へり。天地の變は既に如此、人事の變又さてこそあらんずらめと思ふ處に、國々より早馬を打て、宮方蜂起したりと、告る事曾て休時なし。

○諸國宮方蜂起事 附備前軍事

山陽道には、同年六月三日に、山名伊豆守時氏五千餘騎にて、伯耆より美作の院庄へ

豊浦大臣―蘇我蝦夷のこと

太平記　巻三十八

○彗星客星事附湖水乾事

康安二年二月に、都には彗星客星同時に出たりとて、天文博士共内裏へ召れて、吉凶を占ひ申けり。客星は用明天皇の御宇に、守屋佛法を亡さんとせし時、始て見えたりけるより、今に至まで十四箇度、其内二度は祥瑞にて、十二度は大凶也。彗星は、皇極天皇の御宇に、豊浦大臣の子、蘇我入鹿が亂を起て、中臣大兄皇子竝中臣鎌子と合戰をしたりし時、始て此星出たりしより、今に至迄八十六箇度、一度も未災難ならずと云事なし。尤天下の御愼にて候べしと、博士一同に勘申ければ、諸臣皆色を失て、されればよ此亂世の上には、げにも世界國土が金輪際の底へ落入か、不然は異國の蒙古寄來て、日本國を打取かにてこそあらめ。さる事有まじき世共不覺と、面々申合れけり。誠に天地人の三災同時に出來ぬと覺て、去年の七月より、日々に二三度の地震も未休、又今年の六月より、同十一月の始まで旱魃して、五穀も不實、草木も枯萎しかば、鳥は

比翼鳥一番離れず飛ぶ鳥をいふ

承て驗とせん。不然ば臣忽に新垣平が詐を負て、身鈇鉞の罪に當る事を恐ると申ければ、玉妃重て宣く、我七月七日長生殿、夜半無人、上の傍に侍りし時、牽牛織女の絶ぬ契を羨て、在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝と誓き。是は君王と我とのみ知れり。是を以て驗とすべしとて、泣々玉臺を登り給へば、音樂雲に隔り、團扇天に隠て、夕陽の影の裏に、漸々として消去ぬ。方士鈿の半と、言の信とを受て、宮闕に歸參し、具に此を奏するに、玄宗思に堪兼て、伏沈せ給けるが、其年の夏未央宮の前殿にして、遂に崩御なりにけり。一念五百生、繫念無量劫といへり。況や知ぬ世までの御契淺からざりしかば、死此生彼、天上人間禽獸魚蟲に生を替て、愛著の迷を離れ給はじと、罪深き御契なり。抑天寶の末の世の亂、唯安祿山楊國忠が天威を假て、功に誇り、人を猜し故なり。今關東の軍、道誓が隱謀より事起て、傾廢古に相似たり。天驕を惡み缺盈。讒脫るゝ處なければ、道誓の運命も、憑みがたしとぞ見えたりける。

雲海沈々—以下長恨歌の傳の語也

鳳舄—立派なる履

展轉の御思—毛詩に悠哉々々展轉反側とあり、寢返りうつて思ひなやむをいふ

くより誰を尋る人ぞと問に　方士手を歛て、是は漢家の天子の御使に、方士と申者にて候が、楊貴妃の是に御座あると承て、尋參て候と答申ければ、雙鬟の童女、楊貴妃は未おほとのごもりて候。此由を申て歸侍らんとて、玉の扉を押たてゝ内へ入ぬ。方士門の傍に立て、今や出ると是を待に、雲海沈々として洞天に日晩ぬ。瓊戸重て閉て、悄然として無聲。良有て雙鬟の童女出て、方士を内へいざなひ入る。方士手を揖して、金闕の玉の庇に跪く。時に玉妃夢さめて、枕を推のけて起き給ふ。雲鬟刷はずして、羅騎にだも堪ざる體、譬て言に比類なし。左右の侍兒七八人、皆金蓮を冠にし、鳳舄を著して相隨ふ。五雲飄々として、玉妃堂より出給ふ。雲頭艷々として、曉月の海を出るに不異。方士涙を抑て、君王展轉の御思を語るに、玉妃つくぐ〵と聞給て、含情凝睇謝君王、一別音容兩渺茫、昭陽殿裡恩愛絶、蓬萊宮中日月長となん恨給て、中々御言葉もなければ、玉容寂寞涙欄干たり。唯梨花一枝春帶雨如し。將方士歸去なんとするに及て、玉妃の御信を賜候へ。尋奉る驗に獻ぜんと申ければ、玉妃手づから玉の釵を半擘て、方士にたぶ。方士釵を賜て、是は尋常世にある物也。何ぞ是を以て驗とするに足らんや。願は玉妃君王に侍し時、人の曾不知事あらば、其を

云—長恨歌中の句也、樓臺池苑の句亦同じ
太掖芙蓉—太掖池の蓮花
未央柳—未央宮の柳

情、譬て云はん方もなし。日を經て長安に還幸成て、楊貴妃の昔の住給し驪山の華清宮の荒たる跡を御覽ずるに、樓臺池苑皆依レ舊、太掖芙蓉未央柳、芙蓉如レ面柳如レ眉、君王對レ此爭無レ涙、春風桃李花開日、秋露梧桐葉落時、西宮南苑多ニ秋草一、落葉滿レ階紅不レ掃、行宮見レ月傷レ心色、夜雨聽レ猿斷レ腸聲、夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未レ成レ眠、遲々鐘鼓初長夜、耿々星河欲レ曙天、鴛鴦瓦冷霜花重、翡翠衾寒誰與共。物ごとに堪ぬ御悲のみ深く成行ければ、今は四海の安危をも叡慮に懸られず、御位をさへ肅宗皇帝に奉レ讓、玄宗はたゞいつとなく、御涙にしほれて、仙院の故宮にぞ御座ける。爰に臨卭の道士楊通幽玄宗の宮に參て、臣は神仙の道を得たり。遙に君王展轉の御思を知れり。楊貴妃のおはする所を尋て歸參らんと申ければ、玄宗無レ限叡感有て、則高官を授て大祿を與へ給ふ。方士則天に登り地に入て、上は碧落を極め、下は黄泉の底まで尋求るに、楊貴妃更におはしまさず。遙に飛去て、天海萬里の波濤を凌ぐに、あはひ七萬里を隔て蓬萊方丈瀛州の三の島あり。一の龜是を戴けり。中に五城峙て、十二の樓閣あり。其宮門に金字の額あり。立寄て是を見れば、玉妃太眞院とぞ書たりける。楊貴妃さては此中に御座けりと、うれしく思て、門をあらゝかに敲ければ、内より雙鬟の童女出て、いづ

蜀江水綠云

天子と仰奉て、四海に宣旨を下し、諸國の兵を催て、八十萬騎先長安へぞ寄たりける。安祿山、崔乾祐、子思明を大將にて、是も八十萬騎長安に馳向ふ。兩陣相挑未戰處に、祖廟の神靈百萬騎の兵に化し、黄なる旗を差て、歌舒翰が勢に加り、崔乾祐と戰ける間、安祿山が兵共は破れ立て、一時に皆亡にけり。朝敵忽に被誅て、洛陽則靜りければ、肅宗位を辭して、又玄宗を位に卽奉らん爲に、官軍皆蜀へ御迎にぞ參ける。玄宗はかく天下の程なく靜りぬるに附ても、唯楊貴妃の世におはせぬ事のみ思召て、再び天子の位を踐せ給はん事も、御本意ならねども、馬嵬の昔の跡をも御覽ぜばやと思召す御心に急がれて、軈て還幸の儀則を促されける。馬嵬の道の邊に鳳輦を留られて、是ぞ去年の秋、楊貴妃の武士に被殺て、はかなく成し跡よとて御覽ずれば、長堤の柳の風にしなへるも、枕に懸りしねみだれ髮の、朝の面影御淚に浮び、地塘の草の露にしをれたるも、落て地に亂けん玉の鈿、角やと思召知られて、いとゞ御心を惱まされ、うかれて迷ふ其魄の跡までも、猶なつかしければ、唯日暮夜明れ共、此にて思消ばやと思召けれ共、翠花搖々として東に歸れば、爰をさへ亦別ぬる事よと、御淚更に塞あへず。遙に跡を顧させ給ふに、蜀江水綠蜀山靑、聖主朝々暮々

回紇―地名にて人名にあらず或は回紇の王といふ意か

きよせて、先朕を失て後彼を殺せと歎かせ給ければ、さしも忿れる武士共も、皆戈を捨て地に倒る。其中に邪見放逸なる戎の有けるが、角ては不レ可レ叶とて、玉體に取附せ給たる楊貴妃の御手を引放て、轅の下へ引落し奉り、軈て馬の蹄にぞ懸たりける。玉の鈿地に亂て、行人道を過やらず、雪の膚泥にまみれて、見人袖をほしかねたり。玄宗は無レ力して御貌をも擡させ給はず、伏沈ませ給しかば、今はのきはの御有様を、まのあたり御覧ぜざりしこそ、中々絶ぬ玉の緒の、長き恨とは成にけれ。其後に二陣の兵ふせぎ矢射て、前陣の龍駕を早ければ、程なく蜀へ落著せ給けり。則回紇十萬騎の勢を率して馳參る。嚴武、歌舒翰又國々の兵を催立て、五十萬騎蜀の行在へぞ參ける。安祿山が勢は、始楊國忠を討んとする由を聞てこそ、我も〱と馳集しが、今の如きは唯天下を奪んとする者なりけりとて、兵多く落失ける間、安祿山が榮花たゞ春一時の夢とぞ見えたりける。加樣に都の敵は日々に減じ、蜀の官軍は國々より參けれ共、玄宗皇帝は楊貴妃の事に思沈ませ給て、萬機の政にも御心を不レ被レ懸、唯死しても生れ合べくは、いきて命も何かせんと思召外は他事もなし。嚴武、歌舒翰、回紇等、角ては叶まじと思ければ、玄宗皇帝の第二の御子粛宗の、鳳翔縣と云所に隱ておはしけるを、

の西に在り

過させ給ける時、供奉仕る官軍六萬餘騎、道を遮て君を通し進せず。是は何事ぞと御尋ありければ、兵皆戈をふせ地に跪て、此亂俄に出來て天子宮闕を去せ給ふ事、偏に楊國忠が驕を極め、罪なき人を斬たりし故也。然れば楊國忠を官軍の中へ賜て首を刎、天下の人の心を息め候べし。不然は縱安祿山が鋒には死すとも、天子の龍駕をば通し進すまじとぞ申ける。跡より敵は追懸たり。惜むとも不可叶と思召ければ、早く楊國忠に死罪をたぶべしとぞ被仰ける。官軍大に喜て、楊國忠を馬より引落し、戈の先に指貫き、一同にどつとぞ笑ける。是を御覽じける楊貴妃の御心の內こそ悲けれ。角ても官軍猶あきたらざる氣色ありて、龍駕を通し進せざりければ、此上の憤何事ぞと尋らるゝに、兵皆后妃の德たがはゞ、四海の靜る期あるべからず。褒姒周世を亂り、西施吳國を傾し事、旒纊耳を不塞、君何ぞ思召知らざらん。早く楊貴妃に死を賜らずば、臣等忠言の爲に胸を裂て、蒼天に血を淋ぐべしとぞ申ける。玄宗是を聞召て、逝まじき程を思召ければ、兎角の御言にも不及、御胸もふさがりて、御心消て鳳輦の中に倒れ伏させ給ふ。霞の袖を覆へ共、荒き風には散る花の、かくるゝ方も無るべきに、楊貴妃さてもや遁るゝと、君の御衣の下へ御身を側て隱させ給へば、天子自御貌を胸にか

簞食壺漿—孟子に、簞食壺漿以迎王師と見ゆ、飯酒を出すをいふ

馬嵬—咸陽

路次の民屋をも不煩、城郭をも不攻。安祿山朝敵に成て長安へ攻上とは、夢にも人思よらず、簞食瓠漿を持て、士卒の疲をぞ勞ける。此勢既に都より七十里を隔たる潼關と云山に打あがりて、初て旗の手をおろし、鬨の聲をぞ揚たりける。玄宗皇帝は折節驪山宮に行幸成て、楊貴妃に霓裳羽衣の舞をまはせて、大梵高臺の樂も是には過じと思召ける處に、潼關に馬煙夥しく立て、漁陽より急を告る鞞鼓の、雷の如に打つゞけたり。探使度々馳歸て、安祿山が徒、崔乾祐、子思明等百萬騎にて寄たりと騷ぎければ、事の體を見て參れとて、歌舒翰に三十萬騎を相副て、咸陽の南へ被差向。安祿山既に潼關の山に打上て、歌舒翰麓に馳向たれば、かさよりまつくだりに懸落されて、官軍十萬餘騎河水に溺て死にけり。歌舒翰僅に打なされて、一日猶長安に支て居たりけるが、使を馳て、幾度戰ふとも、勝事を難得。急ぎ龍駕を被廻て、蜀山へ落させ給ふべき由を申たりければ、さしも面白かりつる霓裳羽衣の舞も、未終に、玄宗皇帝と楊貴妃と、同く五雲の車に被召て、都を落給へば、楊國忠を始として、諸王千官悉徒跣なる有樣にて、泣々六軍の跡に相從。歌舒翰長安の軍にも打負て、鳳翔縣へ落ければ、安祿山が兵、君を追懸進て、旗の手五十町許の跡に連たり。龍駕既に馬嵬の坡を

れ。大將は元來臆病なり。士卒の心を一にせざれば、一戰も不レ戰、楊國忠が五十萬騎我先にと河を渡て、五日路まで逃たりければ、大荒の四方七千餘里、吐蕃に從ひ靡きにけり。敵はさのみ追はざりしか共、楊國忠此にも猶たまり得ずして、都を差て引けるが、今度大將を申請て、發向したる甲斐もなく、一軍せで歸らん事、上聞其憚有ければ、御方の勢の中に、馬にも不レ乘、物具もせで疲たる兵を、一萬人首を刎て、各鋒に貫き、是皆吐蕃の徒の首なりと號して、都へぞ歸ける。罪無して首を刎られたる兵共の親子兄弟幾千萬、悲を含て聲を吞み、家々に哭すといへども、楊國忠が漏聞んずる事を恐て、奏し申人なければ、御方の兵一萬人は、敵の首となして、獄門の木に懸られ、大荒の地千里は、打平げたる所と號して、楊國忠にぞ被レ行ける。上亂下不レ背と云事なければ、擧レ世唯楊國忠を滅さんずる事をぞ謀ける。安祿山此比大荒の境に吐蕃を防んとて居たりけるが、時至りぬと悅て、諸侯に約をなし、士卒に禮を深して、楊國忠を討べしと宣旨を賜たりと披露して、兵を催に、大荒にて楊國忠に討れたりし一萬人の兵共の親類兄弟大に悅て、我先にと馳集ける程に、安祿山が兵は、程なく七十萬騎に成にけり。則崔乾祐を右將軍とし、子思明を左將軍として都へ上るに、

見せうと｜せうとは兄人なれば兄せうとは重語也

士未食云々｜六韜の中に出づ

かとあやしまるゝ程也。牛車の宣旨を被て、宮中を出入せしかば、光彩の榮耀門戶に滿て、服用は皆大長公主に均く、富貴甚天子王侯にも超たり。此楊貴妃の兄せうとに楊國忠と云者あり。元來家賤して、畎畝の中に長となりしかば、才もなく、藝もなく、文にも非ず、武にも非ざりしかども、后の兄なりしかば、軈て大臣になされける。此時に安祿山と云ける舊臣、權威爵祿共に、楊國忠に被越て、不安思けれども、すべき樣なければ力不及。斯る處に、天子色を重じて、政を亂り、小人高位に登て、國の弊を不知を見て、吐蕃の國々皆王命を背と聞えしかば、誰をか討手に向べきと議せられけるに、楊國忠武威を恣にせん爲に、大將の印を被授ば、罷向て輒く是を可鎭由を望申ける間、是に上將軍の宣旨をぞ被下ける。楊國忠則五十萬騎の勢を率して、大荒峯に陣を取る。夫大將となる人は、士卒の志を一にせん爲に、士未食將不湌、士宿野將不張蓋、得一豆之飯、與士喫、淋一樽之酒、與兵飲とこそ申に、此楊國忠明れば旨酒に漬て、兵の飢たるを不知、暮れば美女に纏れて、人の謗をも不聞入、唯長時の樂にのみ誇り、軍の事をば、忘ても不云けることそ淺ましけれ。去程に兵疲れ將懈りて、進む勢無りければ、吐蕃の戎狄共、二十萬騎の勢を引て、逆寄にこそ寄たりけ

天々—毛詩桃夭篇云、桃之夭々灼灼其華、註に夭々其少壯也とあり

舎脂夫人—帝釋天王の妃

南内—南苑の内

しかば、夭々たる桃花の、曉の露を含で、墻より餘る一枝の、霞に匂へるが如也。或人是を媒して玄宗皇帝の連枝の宮、寧王の御方へ進せけるを、玄宗天威に誇て、濫に高將軍を差遣して、道より奪取て、後宮へぞ册入奉ける。玄宗の叡感、寧王の御思、花開枝の、一方は折てしぼめるに相似たり。されば月來前殿早、春入後宮遲と、詩人も是を題せり。尋常の寒梅樹、折て軍持に上れば、一段の淸香、人の心を感ぜしむ。民屋蕭颯たる垂楊柳、移て宮苑にいれば、千尺の翠條、別に春風長かるべし。さらでだに妙に勝たる容色の上に、金翠を莊り薫香を散せしかば、唯歡喜園の花の陰に、舎脂夫人の粧をなして、春に和せるに不異。一度君主に面をまみえしより、袖の中の珊瑚の玉、掌の上の芙蓉の花と、見る目もあやに御心迷しかば、暫も其側を離れ給はず、晝は終日に輦を共にして、南内の花に醉を勸め、夜は通宵席を同して、西宮の月に宴をなし給ふ。玄宗餘の理なさに、世人の面に紅紛を施し、身に羅綺を帶たるは、皆假なる嬋娟にて、眞の美質に非ず、同は楊貴妃の顯したる膚を見ばやと思召て、驪山宮の溫泉に瑠璃の沙を敷、玉の甃を滑にして、貴妃の御衣をぬぎ給へる貌を御覽ずるに、白く妙なる御はだへに、蘭膏の御湯を引せければ、藍田日暖玉低涙、庾嶺雪融梅吐香

宋玉—屈原の弟子也

つしませ給はざりしかば、あだなる色をのみ御心にしめて、五雲の車に召れ、左右の侍兒人に手を引れ、殿上を幸して、後宮三十六宮を廻り、三千人の后を御覽ずるに、元獻皇后武淑妃二人に勝る容色も無りけり。君無レ限此二人の妃に思召し移て、春の花秋の月、いづれを捨べしとも思召さゞりしに、色ある者は必衰へ、光ある者は終に消ぬる憂世の習なれば、此二人の后無二幾程一共に御隱ありけり。玄宗餘に御歎有て、玉體も不レ穩しかば、大臣皆相謀て、いづくにか前の皇后淑妃に增て、君の御心をも慰め進すべき美人のあると、至らぬ隈もなくぞ尋ける。爰に弘農の楊玄琰が女に、楊貴妃と云美人あり。是は其母晝寢して、楊の陰にねたりけるに、枝より餘る下露、婢子に落懸りて胎内に宿しかば、更々人間の類にては不レ可レ有、唯天人の化して、此土に來物なるべし。紅顏翠黛は、元來天の生せる質なれば、何ぞ必しも瓊粉金膏の假なる色を事とせん。漢李夫人を寫せし畫工も、是を畫かば、遂に筆の不レ及事を怪み、巫山の神女を賦せし宋玉も、是を讃せば、自言の方に卑き事を恥なん。其語るを聞ても迷ぬべし。況や其色を見ん人をや。加樣にわりなく覺えし顏色なれば、時の王侯貴人、公卿大夫、媒妁を求め、婚禮を厚して、夫婦たらん事を望しか共、父母かつて不レ許、祕して深窓に有

九霄―大空

ば、矢の一つをもはか〴〵しく不射出、寄手三萬騎、徒に鎌倉を指て引退く。兒女の嘲理なり。左馬頭不安思ければ、新田田中を大將として、軈て武藏、相摸、伊豆、駿河、上野、下野、上總、下總八箇國の勢二十萬餘騎をぞ被向ける。畠山は此十餘年左馬頭を妹聟に取て、榮耀門戸に餘るのみならず、執事の職に居して、天下を掌に握しかば、東八箇國の者共の、命に替らんと昵び近附けるを、我身の仁德と心得て、何となく共、我旗を擧たらんに、勢四五千騎も馳加らぬ事はあらじと憑しに、案に相違して、餘所の勢一騎も不附、結句一方の大將にもと憑し狩野介も降參しぬ、又其外相傳譜代の家人、厚恩異他郎從共も、日にそへ落失て、今は戰ふべしとも覺えざりければ、大勢の重て向ふ由を聞て、二の城に火を懸て、修禪寺城へ引籠る。夢なる哉、昨日は海をはかりし大鵬の九霄の雲に搏が如く、今日は轍に伏涸魚の三升の水を求るに不異。我身かかるべしと知たらば、新田左兵衛佐を枉て討まじかりける物をと、後悔せりといへり。早く報けるを、兼て不知こそ愚なれ。抑畠山入道去々年東國の勢を催立て、南方へ發向したりし事の企を聞けば、唯唐楊國忠安祿山が、天威を假て、後に世を奪はんと謀しに似たり。昔唐玄宗位に卽給し始、四海無事なりしかば、樂に誇り驕をつ

極樂の玉の臺の蓮葉に、われをいざなへゆらぐ玉の緒。

とあそばされて、聖の心をぞ慰め給ける。かゝる道心堅固の聖人、久修練行の尊宿だにも、遂がたき發心修行の道なるに、家富若き人の、浮世の紲を離て、永く隱遁の身と成にける左衞門佐入道の心の程こそ難レ有けれ。

○畠山入道道誓謀叛事 附 楊國忠事

畠山入道道誓、舍弟尾張守義深、同式部大輔、兄弟三人は、其勢五百餘騎にて、伊豆國に逃下り、三津、金山、修禪寺の三の城を構て、楯籠たりと聞えければ、鎌倉の左馬頭基氏、先づ平一揆の勢三萬餘騎を被二差向一。其勢已に伊豆府に著て、近邊の庄園に兵粮を懸、人夫を驅立ける程に、葛山備中守と、平一揆と所領の事に就て、鬪諍を引出し忽に軍をせんとぞひしめきける。畠山が手の者に、遊佐、神保、杉原、此を聞て、あはれ弊に乘る處やと思ければ、五百餘騎を三手に分て、三月二十七日の夜半に、伊豆府へ道寄にぞ寄たりける。葛山は、平一揆の者共、畠山と成合て、夜討に寄たりと騷ぎ、平一揆は、葛山と引合て、畠山御方を討んとする物なりと心得て、ともに心を置合けれ

三萬餘騎—原本三百餘騎に作る、異本竝に下文に據て改む

成合—協同

引合—打合せて

京極の御息所—宇多帝の妃藤原褒子

のみ立副て、稱名の聲の中には、たへかねたる大息のみぞつかれける。さても若慰むやと、暮山の雲を詠れば、いとゞ心もうき迷ひ、閑窻の月に嘯けば、忘ぬ思猶深し。今生の妄念遂に不離ば、後生の障と成ぬべければ、我思の深き色を、御息所に一端申て、心安く臨終をもせばやと思て、上人狐裘に鳩の杖をつき、泣々京極の御息所の御所へ參て、鞠のつぼの懸の本に、一日一夜ぞ立たりける。餘の人は、皆いかなる修行者、乞食人やらんと、怪む事もなかりけるに、御息所御簾の内より遙に御覽ぜられて、是は如何樣志賀の花見の歸るさに、目を見合せたりし聖にてやおはすらん。我故に迷はゞ、後世の罪誰が身の上にか可留。よそながら露許の言の葉に情をかけば、慰む心もこそあれと思召て、上人是へと被召ければ、わな〳〵とふるひて、中門の御簾の前に跪て、申出たる事もなく、さめ〴〵とぞ泣給ける。御息所は僞ならぬ氣色の程、哀にも又恐しくも思召ければ、雪の如なる御手を、御簾の内より少し指出させ給たるに、上人御手に取附て、

初春の初ねの今日の玉箒、手に取からにゆらぐ玉の緒。

と詠ければ、軈御息所取あへず、

—編目を十筋に編みたる菅の薦

東作—耕作也

佛の因位—佛果を得べき修行中に在りといふ意

水想觀—淨土三部經の中の觀經にいふ十六相觀の一なる八功德水想觀也

仙人も岩木にあらざれば、あやなく后に思しみて、ことの葉ごとに置く露の、あだなる物とは不レ疑。夫仙道は露盤の氣を嘗ても、婬欲に染ぬれば、仙の法皆盡て其驗なし。されば此仙人も、一度后に落されけるより、鯢桓審も破れて通力もなく、金骨返て本の肉身と成しかば、仙人忽に病衰して、軈て空く成にけり。其後后は宮中に立歸り、龍神は天に飛去て、風雨時に隨しかば、農民東作を事とせり。其一角仙人は、佛の因位なり。其婬女は、耶輸陁羅女これなり。又我朝には、志賀寺の上人とて、行學薫修の聖才おはしけり。速に彼三界の火宅を出て、永く九品の淨刹に生れんと願しかば、富貴の人を見ても、夢中の快樂と笑ひ、容色の妙なるに逢ても、迷の前の著相を哀む。雲を隣の柴の庵、且ばかりと住程に、手づから栽し庭の松も、秋風高く成にけり。或時上人草庵の中を立出て、手に一尋の杖を支へ、眉に八字の霜を垂れつゝ、湖水波閑なるに向て、水想觀を成て、心を澄して唯一人立給たる處に、京極の御息所、志賀の花園の春の氣色を御覽じて、御歸ありけるが、御車の物見をあけられたるに、此上人御目を見合せ進せて、不レ覺心迷て、魂うかれにけり。遙に御車の跡を見送て立たれ共、我思はや遣方も無りければ、柴の庵に立歸て、本尊に向奉りたれ共、觀念の床の上には、忘想の化

十二の觀—十二因緣觀をいふ

十符の菅薦

立て、龍王があればこそ、雨をも降らせ。雨があればこそ、我はすべりて倒たれ。不如此龍王共を捕て、禁籠せんにはと思て、内外八海の間に、あらゆる所の大龍小龍共を捕て、岩の中にぞ押籠ける。是より國土に雨を降すべき龍神なければ、春三月より夏の末に至まで、天下大に旱魃して、山田の早苗さながらに、取らで其儘枯にけり。君遙に民の愁を聞召して、いかにしてか此一角仙人の通力を失て、龍神を岩の中より可出と問給ふに、或智臣申けるは、彼仙人縱霞を食ひ氣を飲て、長生不老の道を得たり共、十二の觀に於て、未足所あればこそ、道にすべりて嗔る心は有つらめ。心未枯木死灰の如ならずば、色に耽り、香に染む愛念、などか無らんや。然らば三千の宮女の中に、容色殊に勝たらんを、一人彼草庵の中へ被遣て、草の枕を竝べ、苔の筵を友として、夜もすがら蘿洞の夢に契を結ばれば、などか彼通力を失はで候べきとぞ申ける。諸臣皆此議に同じければ、即三千第一の后、扇陀女と申けるに、五百人の美人を副て、一角仙人の草庵の内へぞ被送ける。后はさしもいみじき玉の臺を出て、見るに悲げなる草庵に立入給へば、苔もるしづく袖の露、かわく間もなき御涙なれども、勅なれば辭するに言なくして、十符の菅薦しき忍び、小鹿の角のつかの間に、千年を兼て契給ふ。

聲聞―聲聞乘の人とて佛の聲教を聞きて悟通せるものをいふ

六波羅密―檀波羅密、尸羅波羅密、羼提波羅密、毘梨那波羅密、禪定波羅密、般若波羅密をいふ

羅密をば成就しぬ。檀波羅密を修するに至て、隣國より一人の婆羅門來て、財寶を乞に、倉の内の財身の上の衣、殘る所なく是を與ふ。次に眷屬及居室を乞に皆與へつ。次に身の毛を乞に、一筋も不殘拔て施けり。婆羅門猶是に不飽足、同は汝が眼を穿て、我に與へよとぞ乞ける。身子兩眼を穿て盲目の身と成て、暗夜に迷が如ならん事、いかゞ在べきと悲ながら無力、此行の空くならん事を痛て、自二眼を拔て、婆羅門にぞ與ける。婆羅門二の眼を手に取て、肉眼は被拔て後、穢き物成けり。我何の用にか可立とて、則地に抛て、蹂躙てぞ捨たりける。此時に身子人の五體の内には、眼にすぎたる物なし。是程用にもなき眼を乞取て、結句地に抛つる事の無念さよと、一念瞋恚の心を發しゝより、菩提の行を退しかば、さしも功を積たりし六波羅密の行、一時に破て、破戒の聲聞とぞ成にける。又昔天竺の波羅奈國に一人の仙人あり。小便をしける時、鹿のつるみけるを見て、婬欲の心ありければ、不覺して漏精したりける。其かゝれる草の葉を、妻鹿食て子を生ず。形は人にして、額に一の角ありければ、見る人是を一角仙人とぞ申ける。修行功積て、神通殊にあらたなり。或時山路に降て、松のしづく、苔の露、石岩滑なりけるに、此仙人谷へ下るとて、すべりて地にぞ倒ける。仙人腹を

て―世に顯はれさせての意

身子―舍利弗のこと十大弟子の第一の智者也

見んとも思はざりければ、左衞門佐執事職に可レ被レ居由を聞て、樣々の非を擧、種々の咎を立て、此者曾其器用に非ざる由をぞ、宰相中將殿へ申されける。中將殿も人の中に附易き人にて御座ければ、げにも見レ子不レ如レ父、さらば當腹の三男を面に立て、幼稚の程は、父の大夫入道に世務を執行さすべしと宣けり。左衞門佐是を聞て、父をや恨にけん、世をうしとや思けん、潛に出家して、いづちともなく迷出にけり。附隨ふ郎從共二百七十人、同時に皆髻を切て、思々にぞ失にける。此人誠に父の所存をも不レ破、我身の得道をも願て、出家遁世しぬる事、類少き發心なり。但此比の人の有樣は、昨日は髻切て、實に貴げに見ゆるも、今日は頭を裹て、無慚無愧に振舞事のみ多ければ、此遁世も又行末通らぬ事にてやあらんずらんと思しに、遂に道心さむる事なくして、はて給けるこそ難レ有けれ。

○身子聲聞一角仙人志賀寺上人事

凡煩惱の根元を切り、迷者の絆を離るゝ事は、上古にも末代にも、能難レ有事にて侍るにや。昔天竺に身子と申ける聲聞、佛果を證ぜん爲に、六波羅密を行じけるに、已に五波

世にあらせ

羽も高祖も均く命を愼み隨けり。其後より漢楚の軍は利あつて、秦の兵所々にて打負しかば、秦の世終に亡にけり。是を以て思に、故新田義貞義助兄弟は、先帝の股肱の臣として、武功天下に無レ雙。其子息二人義宗義治とて、越前國にあり。ともに武勇の道、父に不レ劣、才智又世に不レ恥。此人々を召て、龍顏に咫尺せしめ、武將に委任せられば、誰か其家を輕じ、誰か舊功を續ざらん。此等を閣て、降參不義の人を以て、大將とせらるれば、吉野の主上、天下を被レ召事千に一も不レ可レ有。縱一旦軍に打勝せ給事有とも、世は又人の物とぞ覺たる。

○尾張左衛門佐遁世事

都には細川相摸守敵になりし後は、執事と云者なくして、毎事叶はざりける間、誰をか其職に可レ置と評定ありけるが、此比時を得たる佐々木佐渡判官入道道譽が聟たるに依て、傍の人々、皆追從にや申けん、尾張大夫入道の子息左衛門佐殿に增たる人あらじと申ければ、宰相中將殿も、心中に異議無して、執事職を內々此人に定め給にけり。父の大夫入道は、元來當腹の三男治部大輔義將を寵愛して、先腹の兄二人を世にあらせて

三戸の小國—三體詩に楚曾三戸少二人煙一とあり

さんとせられしも不レ叶。今又細川相摸守清氏を大將として、代々の主君宰相中將殿を亡さんとし給ふも不レ叶。是唯其理に不レ當大將を立て、或は父兄の道を違へ、或は主從の義を背く故に、天の譴あるに非ずや。されば古も世を取んとする人は、專大將を選けるにや。昔秦始皇の世を奪んとて、陳勝と云ける者、自大將の印を帶て、大澤より出たりしが、無レ程秦右將軍白起が爲に被レ討ぬ。其後又項梁と云者、自大將の印を帶て、楚國より出たりけるも、秦左將軍章邯に被レ討にけり。爰に項羽高祖等、色を失て、さては誰をか大將として、秦を可レ攻と謀けるに、范增とて年七十三に成ける老臣、座中に進出て申けるは、天地の間に、興るも亡るも、其理に不レ依と云事なし。されば楚は三戸の小國なれども、秦を亡さんずる人は、必楚王の子孫にあるべし。其故は秦始皇六國を亡して、天下を幷呑せし時、楚懷王遂に秦を背事なし。始皇帝故なく是を殺して、其地を奪へり。是罪は秦に有て、善は楚に殘るべし。故に秦を討たんとならば、如何にもして、楚懷王の子孫を一人取立て、諸卒皆命に隨べしとぞ計申ける。項羽高祖諸共に、此議げにもと被レ思ければ、いづくにか楚懷王の子孫ありと尋求けるに、懷王の孫に孫心と申ける人、久く民間に降て羊を養けるを尋出て、義帝と號し奉て、項

渡られける。

○可レ立二大將一事 附漢楚立二義帝一事

夫大將を立るに道あり。大將其人に非ざれば、戰に勝事を得がたし。天下已に定て後、文を以て世を治る時は、智慧を先とし、仁義を本とする故に、今まで敵なりし人をも許容して、政道を行はせ、大官を授る事あり。所謂魏徴は楚君の舊臣なりしかども、唐太宗是を用給ふ。管仲は子糾が寵人たりしかども、齊桓公是を賞せられき。天下未レ定時、武を以て世を取らんずるには功ある人を賞し、咎ある人を罰する間、縱威勢ある者なりとも、降人を以て大將とはせず。傳聞、秦左將軍章邯は、四十萬騎の兵を卒して、楚に降參したりしかども、項羽是を以て大將の印を不レ與、項伯は、鴻門の會に、心を入て高祖を助たりしかども、漢に下て後、是に諸侯の國を不レ授。加樣の先蹤を、南方祗候の諸卿、誰か存知し給はざるに、先高倉左兵衛督入道慧源に、大將の號を授て、兄の尊氏卿を討せんとし給しかども叶はず。次に右兵衛佐直冬に、大將の號をゆるされて、父の將軍を討せんとし給しも不レ叶。又仁木右京大夫義長に、大將を授て、世を覆

五柳先生—陶淵明のこと
七松居士—晩唐の鄭薫のこと
覇陵の舊將軍—漢の李廣のこと

妃遊宴の砌、先皇臨幸の地なれば、樓閣玉を鏤て、客殿雲に聳たり。丹青を盡せる妙音堂、瑠璃を展たる法水院、年々に皆荒はてゝ、見しにもあらず成ぬれば、雨を疑ふ岩下の松風、絲を亂せる門前の柳、五柳先生が舊跡、七松居士が幽栖も、角やと覺て物さびたり。爰にて今年の春を送らせ給に、兎角して諸寮の修理、如レ形出來れば、四月十九日に本の里内裡へ還幸なる。供奉の月卿雲客は、指たる行粧なかりしかども、辻々の警固隨兵の武士ども、皆傍を耀してぞ見えたりける。細川相摸守清氏は、近年武家の執事として、兵の隨附たる事幾千萬と云數を不レ知。其身又弓箭を取て、無雙の勇士なりと聞えしかば、是が宮方へ降參しぬる事、偏に帝德の天に叶へる瑞相、天下の草創は必此人の武德より事定るべしと、吉野の主上を始進せて、諸卿皆悅び思召ければ、則大將の任をぞ授られける。其任案に相違して、去年の冬、南方の官軍相ともに、宰相中將殿を追落して、暫洛中に勢を振し時も、此人に馳附勢もなし。幾程なくて官軍又都を落されて、清氏河内國に居たれ共、其舊好を慕て尋來る人も稀なり。唯禿筆に譬へられし覇陵の舊將軍に不レ異。清氏は爲ん方なさに、若四國へ渡たらば、日來相從し兵どもの、馳附事もや有らんとて、正月十四日に、小船十七艘に取乘て、阿波國へぞ

里内裡—離宮

暮月—二月に作るべき也

○持明院新帝自二江州一還幸事　附相州渡二四國一事

帝都の主上は、未近江の武佐寺に御座有て、京都の合戰いかゞ有らんと、御心苦敷思召ける處に、康安元年十二月二十七日に、宰相中將殿早馬を立て、洛中の凶徒等、事故なく追落し候ぬ、急ぎ還幸なるべき由を申されたりければ、君を始め進せて、供奉の月卿、雲客、奴婢僕從に至まで、悦あへる事尋常ならず。其翌の朝、龍駕を促されて、先比叡山の東坂本へ行幸成て、此にて御越年あり。佐々波よする志賀浦、荒て久しき跡なれど、昔ながらの花園は、今年を春と待顏なり。是も都とは思ながら、馴ぬ旅寢の物うさに、諸卿みな今一日もと還幸を勸め申されけれども、去年十二月八日、都を落させ給し刻に、さらでだに諸寮司闕たりし里内裡、垣も格子も破失、御簾も無りければ、暫御修理を加てこそ還幸ならめとて、翌年の春の暮月に至まで、猶坂本にぞ御座ありける。近日は聊の事も公家の御計としては難叶ければ、内裡修理の事、武家へ仰られたりけれども、領掌は申されながら、いつ道行べしとも見えざりければ、いつまでか外都の御住居も有べきとて、三月十三日に西園寺の舊宅へ還幸なる。是は后

越後―原本越前に作る異本に據りて改む越前は南朝方に非ざる也

磨へ下りぬと聞えければ、國々の將軍方、機をえずと云者なし。さらば軈京へ攻上れとて、越前修理大夫入道道朝の子息、左衞門佐以下、三千餘騎にて近江の武佐寺へ馳參る。佐々木治部少輔高秀、小原備中守は、白晝に京を打通て、道譽に馳加る。道譽其勢を幷て、七百餘騎野路篠原にて奉ㇾ待。土岐桔梗一揆は、伊勢の仁木が向城より引分て、五百餘騎鈴鹿山を打越て、篠原宿にて追附奉る。此外佐々木六角判官入道崇永、今川伊豫守、宇都宮三河入道が勢、都合一萬餘騎、十二月二十四日に、武佐寺を立て、同二十六日先陣勢多に著にけり。丹波路より仁木三郎、山陰道の兵七百餘騎を率して攻上る。播磨路よりは、赤松筑前入道世貞、帥律師則祐、一千餘騎にて兵庫に著く。殘る五百餘騎をば、彈正少弼氏範に附て、船にのせ、境天王寺へ押寄て、南方の主上を取奉り、楠が跡を遮らんと、二手に成てぞ上ける。宮方の官軍、始は京都にてこそ、兎も角もならめと申けるが、四方の敵雲霞の如く也と告たりければ、是程に能しよせたる天下を、一時に失ふべきにあらず、先南方へ引て、四國西國へ大將を分遣し、越後、信濃、山名、仁木に牒合て、又こそ都を落さめとて、同二十六日の晩景程に、南方の宮方、宇治を經て、天王寺住吉へ落ければ、同二十九日將軍京へ入給けり。

古博奕―老猾なる博奕うちといふ意にて嘲罵せる語也

其儀を止しかば、泉水の木一本をも不レ損、客殿の疊の一帖をも不レ失、剰遠侍の酒肴以前のよりも結構し、眠藏には、秘藏の鎧に、白幅輪の太刀一振置て、郎等一人止置て、道譽に交替して、又都をぞ落たりける。道譽が今度の振舞、なさけ深く風情有と、感ぜぬ人も無りけり。例の古博奕に出しぬかれて、幾程なくて、楠太刀と鎧を取られたりと、笑ふ族も多りけり。

○南方官軍落レ都事

宮方には、今度京の敵を追落す程ならば、元弘の如く、天下の武士皆こぼれ落て、附從ひ進せんずらんと被レ思けるに、案に相違して、始て參る武士こそなからめ。筑紫の菊池、伊豫の土居、得能、周防の大内介、越中の桃井、新田武藏守、同左衞門佐、其外の一族共、國々に多しといへども、或は道を塞がれ、或は勢未叶ざれば、一人も不レ上洛、結句伊勢の仁木右京大夫は、土岐が向城へよせて、打負て城へ引籠る。仁木中務少輔は、丹波にて仁木三郎に打負て、都へ引返し、山名伊豆守は、暫兵の疲を休めんとて、美作を引て伯耆へかへり、赤松彦五郎範實は、養父則祐樣々に誘ひ宥けるに依て、又播

君は船云々―政貞觀要云、仲尼曰君猶レ舟也臣猶レ水也水所三以載二レ舟亦所三以覆二レ舟とあり

貞觀政要―十卷あり唐の太宗の言行を錄す

眠藏―寢所

道を經て、勢多を通り、近江の武佐寺へ落給ふ。君は船臣は水、水能浮レ船、水又覆レ船也。臣能保レ君、臣又傾レ君といへり。去々年の春は、清氏武家の執事として、相公を扶持し奉り、今年の冬は、清氏忽に敵と成て、相公を傾け奉る。魏徴が太宗を諫ける貞觀政要の文、げにもと思ひ知れたり。同日の晩景に、南方の官軍都に打入て、將軍の御屋形を燒拂ふ。思の外に洛中にて合戰なかりければ、落る勢も入勢も、共に狼藉をせず、京白川は中々に此間よりも閑なり。爰に佐渡判官入道道譽都を落ける時、我宿所へは、定てさもとある大將を入替んずらんとて、尋常に取したゝめて、六間の會所には、大紋の疊を敷雙べ、本尊、脇繪、花瓶、香爐、鑵子、盆に至まで、一樣に皆置調て、書院には、羲之が草書の偈、韓愈が文集、眠藏には、沈の枕に緞子の宿直物を取副て置く。十二間の遠侍には、鳥、兎、雉、白鳥、三竿に懸雙べ、三石入許なる大筒に酒を湛へ、遁世者二人留置て、誰にても此宿所へ來らん人に、一獻を進めよと、巨細を申置にけり。楠一番に打入たりけるに、遁世者二人出向て、定て此弊屋へ御入ぞ候はんずらん。一獻を進め申せと、道譽禪門申置れて候と、色代してぞ出迎ける。道譽は相摸守の當敵なれば、此宿所をば定て毀燒べしと憤られけれども、楠此情を感じて、

軍までも有まじき者にて候。洛中の合戰に成候はゞ、大和、河內、和泉、紀伊國の官軍は、皆徒立に成て、一面に楯をつきしとみ、楯の陰に鎗長刀の打物の衆を五六百人づつ調て敵かゝらば、馬の草脇太腹ついては跳落させ、一足も前へは進とも、一歩も後へ引く氣色なくば、敵重て懸入る者候べからず、其時石堂刑部卿、赤松彦五郎、淸氏一手に成て、敵の中を懸破り、義詮朝臣を目に懸候程ならば、何までか落し候べき。天下の落居一時が中に定り候べき物をと申されければ、此議誠に可レ然とて、官軍中島を打越て、都を差て攻上る。げにも相摸守の云つるに少も不レ違、忍常寺の麓を打通るに、佐々木治部少輔は時の侍所也。甥二人まで當國にて、楠に打れぬ。爰にて先日の恥をも洗んとて、手痛き軍をせんずらんと、思儲けて通けるに、高秀相摸守に機を吞れて、臆してや有けん、矢の一をも不ニ射懸一、をめをめとこそ通けれ。さては山崎にてぞ一軍あらんずらんと思ふ處に、今川伊豫守も、叶じとや思けん、一戰も戰はで、鳥羽の秋山へ引退く。此を見て、此彼に陣を取たる勢共、未敵の近附ざるに、落支度をのみぞし居たりける。かくては合戰はかぐ〳〵しからじ。先づ京を落てこそ、東國北國の勢をもまためとて、持明院の主上をば警固し奉り、同八日の曉に、宰相中將殿、苦集滅

時の侍所—當時の侍所の別當といふ意

日、住吉天王寺に勢調をすれば、細川兵部少輔氏春、淡路の勢を率して、兵船八十餘艘にて、境濱へつく。赤松彦五郎範實攝津國兵庫より打立て、すぐに山崎へ攻べしと相圖を差す。是を聞て、京中の貴賤、財寶を鞍馬高雄へ持運び、蔀遣戸を放取、京白川の騒動不ㇾ斜。宰相中將殿は、二日より東寺に陣取て、著到を附られけるに、御内外樣の勢四千餘騎と註せり。さては敵の勢よりも御方は猶多かりけり。外都に向て可ㇾ防とて、時の侍所なればとて、佐々木治部少輔高秀を、攝津國へ差下さる。當國は親父道譽が管領の國なれば、國中の勢を相催して、五百餘騎忍常寺に陣を取て、敵を目の下に待懸たり。今川伊豫守に、三河、遠江の勢を附て、七百餘騎山崎へ差向らる。吉良治部大輔、宇都宮三河三郎、黒田判官を大渡へ向らる。自餘の兵千餘騎、淀、鳥羽、伏見、竹田へ控させ、羽林の兵六千餘騎をば東寺の内にぞ籠られける。同七日南方の大將河を越て、軍評定の有けるに、細川相摸守進出て申されける樣は、京都の勢の分際をも、兵の氣色をも皆見透したる事にて候へば、此合戰に於ては、枉て淸氏が申旨に任られ候へ。先淸氏後陣に控て、山崎へ打通り候はんに、忍常寺に候なる佐々木治部少輔何千騎候と云共、よも一矢も射懸候はじ。山崎を今川伊豫守が堅て候なる。是又一

官軍洛中に足を留る事を不レ得候。雖レ然、一旦京都を落さん事は、清氏が力を借までも候まじ。正儀一人が勢を以ても、たやすかるべきにて候へども、又敵に取て返されて攻られ候はん時、何の國か官軍の助と成候べき。若退く事を恥て、洛中にて戰候はば、四國西國の御敵、兵船を浮て跡を襲ひ、美濃、尾張、越前、加賀の朝敵ども、宇治、勢多より押寄て戰を決せば、又天下を朝敵に奪れん事、掌の内に有ぬと覺候。但愚案短才の身、公儀を褊し申べきにて候はねば、兎も角も綸言に從ひ候べしとぞ申ける。主上を始め進せて、竹園、椒房、諸司、諸衛に至まで、住馴し都の戀しさに、後の難儀をば不レ顧、一夜の程なり共、雲井の花に旅ねしてこそ、後は其夜の夢を忍ばめと宣ければ、諸卿の僉議一同して、明年よりは三年北塞なり、節分以前に洛中の朝敵を攻落して、臨幸を成奉るべき由議定りて、兵共をぞ被レ召ける。

褊し申べき—蔑如すべき

○新將軍京落事

公家の大將には、二條殿、四條中納言隆俊卿、武將には、石堂刑部卿賴房、細川相摸守清氏、舍弟左馬助、和田、楠、湯淺、山本、恩地、牲川、其勢二千餘騎にて、十二月三

土岐佐々木
―土岐善忠
佐々木崇永

○清氏正儀寄レ京事

相摸守は、石堂刑部卿を奏者にて、清氏不肖の身にて候へ共、御方に參ずる故に依て、四國、東國、山陰、東山、大略義兵を擧候なる。京都は元來はかぐ〳〵しき兵一人も候はぬ上、細川右馬頭頼之、赤松律師則祐は、當時山名伊豆守と陣を取向うて、相戰ふ最中にて候へば、皆我國を立離れ候まじ。土岐佐々木等は、又仁木右京大夫義長と戰て、兩陣相支て、上洛仕る事候まじ。可レ防兵もなく、助の勢も有まじき時分にて候へば、急ぎ和田、楠以下の官軍に、合力を致候へと仰下され候へ。清氏眞前を仕て、京都を一日が中に攻落して、臨幸を正月以前に成進せ候べしとぞ申ける。主上げにもと思召ければ、軈楠を召て、清氏が申所、いかゞ有べきと仰らる。正儀暫思案して申けるは、故尊氏卿正月十六日の合戰に打負て、筑紫へ落て候しより以來、朝敵都を落る事已に五箇度に及候。然れども、天下の士卒猶皇天を戴く者少く候間、

原宿を落て、伊豆の修禪寺に楯籠る。其後畠山が舍弟尾張守義深信濃へ越て、諏訪の祝部と引合て、敵に成と聞えしかば、東國西國東山道、一度に何樣起り合ぬと、洛中の貴賤騷合へり。

大に鼻をつかせ—手強くやりこむるをいふ
下尅上—下として上を凌ぐこと

鼻をつかせ追込ける間、訴人徒に群集して、愁を不レ懐云者なし。暫は訴訟を經て廻けるが、餘に事興盛しければ、宗從の者共千餘人、神水を吞で、所詮畠山入道を執權に被二召仕一、每事御成敗に隨まじき由を、左馬頭へぞ訴申ける。下として上を退る嗷訴、下尅上の至哉と、心中には憤思はれけれども、此者どもに背れなば、東國は一日も無爲なるまじと覺て、軈畠山が許へ使を立て、去々年上洛の時、南方退治の事は次に成て、專仁木右京大夫を討んと被レ謀候し事、隱謀の其一にて非や。其後關東に下向して、差たる無二罪科一諸人の所帶を沒收せられ候ける事、唯世を亂て、基氏を天下の人に背かせんとの企にてぞ候覽。叛逆旁露顯の上は、一日も門下に跡を不レ可レ被レ留、退出及二遲々一、速に討手をさし遣すべしとぞ被二云送一ける。畠山は其比鎌倉に有けるが、此上は陳じ申とも叶まじとて、兄弟五人竝郎從已下引具して、三百餘騎伊豆國を指て落て行。此勢小田原宿に著たりける夜、土肥掃部助御敵に成て落る者に、矢一射懸ずと云事や可レ有とて、主從唯八騎にて、小田原の宿へ押寄せ、風上より火を懸け、煙の下より切て入る。畠山が方に、遊佐、神保、齋藤、杉原、出向て散々に追拂ふ。是程小勢なりける者をとて、時の興にぞ笑合ける。さて其後は、後陣に防矢少々射させて、其夜小田

歸ける。唯秦の章邯趙高が讒を恐れ、楚の項羽に降し時、面をたれ涙を流て、言には不レ出ども、讒者の世を亂る恨を含し氣色に不レ異。去程に仁木中務少輔は、京より伊勢へ落て、相摸守に相從ふと聞え、兵部少輔氏春は、京より淡路へ落て、國中の勢を相附て、相摸守に力を合せ、兵船を調へて、境濱へ著べしと披露あり。攝津國源氏松山は、香下城を拵て、南方に牒じ合、播磨路を差塞で、人を不レ通と聞えければ、一方ならぬ蜂起に、京都以外に周章して、すはや世の亂出來ぬと、危ぬ人も無りけり。宰相中將殿は、畿内の蜂起を聞て、近國は縱起る共、坂東靜なれば、東八箇國の勢を召上て退治せんに、何程の事か可レ有とて、強に騒ぐ氣色も無りける處に、康安元年十一月十三日、關東より飛脚到來して、畠山入道道誓、舍弟尾張守、御敵に成て、伊豆國に楯籠り候間、東國の路塞て、宮軍催に不レ應とぞ申ける。其濫觴何事ぞと尋ぬれば、去々年の冬、畠山入道南方退治の大將として、上洛せし時、東八箇國の大名小名、數を盡してぞ上ける。此軍勢長途に疲れ、數月の在陣にくたびれて、馬物具を賣位に成しかば、怺兼て、畠山に暇をも不レ乞、拔々に大略本國へ下ける。遙に程經て、畠山關東に下向して、彼等が一所懸命の所領共を沒收して、歎け共耳にも不二聞入一、適披露する奉行あれば、大に

石堂刑部卿
─賴房

城へ引入ける間、相摸守に相從兵ども、可戰力盡はてゝ、右往左往に落て行。朽たる繩を以て、六馬をば繫て留るとも、唯難憑此比の武士の心也。清氏さしもの勇士なりしかども、角ては叶はじとや思はれけん、舍弟左馬助と、唯二騎打連て、篠峯越に忍で都へ紛入る。一夜の程も洛中には難隱と思はれければ、兄弟別々に成て、相摸守は東坂本へ打越、一日馬の足を休て、天王寺へ落ければ、左馬助は夜半に京中を打通り、大渡を經て、兼ての相圖を不違、天王寺へぞ落著ける。相摸守軈て石堂刑部卿の許へ使者を立、清氏已に依讒者訴、無罪死罪を行れんと候つる間、身の置所なき餘に、天恩を戴て、軍門に降參仕て候。舊好其故も候へば、一向貴方を憑申にて候。兎も角も可然樣に、御計候へとぞ言遣されける。石堂刑部卿急ぎ使者に對面して、先兎角の返事に不及、こはそも夢か現かとて、良久く涙を袖に抑らる。軈て參內して、事の仔細を奏聞せられけるに、左右の大臣相議して云、敵軍首を延て、帝德に降る。天恩何ぞ是を惠れざらん。早く軍門に愼仕て、征伐の忠を專にすべしと、恩免の綸旨を下されしかば、石堂限なく悅て、則細川に對面し給ふ。互に言無して、涙に咽び給ふ。暫有て、世の轉變今に始ぬ事にて候へ共、不慮の參會こそ、多年の本意にて候へと計、色代してぞ被

先打―先鋒

越前の府―南條郡今の武生町

れける。去程に尾張左衞門佐氏賴討手の大將を承て、北陸道の勢三千餘騎を率して、越前より椿峠へ向ふ。仁木三郎搦手の大將を承て、山陰道の勢二千餘騎を率して、丹波より逆谷へ向と聞えければ、相摸守大に笑て、穴哀の者どもや。此等を敵に受ては、力者二三人に杉材棒突せて差向たらんに、不足あるまじ。先敦賀に朝倉某が先打にて陣を取たるを打散せとて、中間を八人差遣さる。八人の中間共、敦賀津へ紛入、濱面の在家十餘箇所に火を懸て、鬨をぞ揚たりける。朝倉が兵三百餘騎、鬨の聲に驚て、すはや相摸守の寄たるは、定て大勢にてぞ有らん。引て後陣の勢に加れとて、矢の一をも不レ射、朝倉敦賀を引ければ、相伴兵三百餘騎馬物具を取捨て、越前の府へぞ逃たりける。さればこそ思つる事よと、人每に云弄ぶと沙汰せしかば、尾張左衞門佐大に忿て、軈て大勢を率して、十月二十九日椿峠へ打向ふ。相摸守是を聞て、今度は一人も敵と云者を生て遣まじければ、自身向はでは叶まじとて、城には頓宮四郎左衞門尉を殘置き、舍弟右馬助相共に、五百餘騎にて追手の敵に馳向ふ。敵陣難所なれば、待てや戰ふ懸りやすると思案して、未レ戰決レ處に、重恩他に異なれば、是ぞ貳心有まじき者と憑れける頓宮四郎左衞門俄に心變して、擧レ旗城戸を打て、寄手の勢を後より

被官—附屬の官、部下の役人

ん事、恥の上の不覺たるべきにて候へば、何までも伴ひ奉て、安否を見はて進せん事こそ、本意にて候へと、再三被ㇾ申けれ共、相摸守、さては彌我に隱謀有けりと、世の人の思はんずる處が悲く候へば、枉て是より歸られ候て、眞實の志あらば、後日に又音信も候へと、强て被ㇾ申ければ、二人の人々、此上の事は兎も角も仰にこそ隨ひ候はめと て、泣々千本より打別れて、本の宿所へぞ歸にける。京中には、合戰あらば、在家は一宇も不ㇾ殘と、上下萬人周章騷ぎけるが、相摸守無㆓事故㆒都を落にければ、二十四日、將軍軈今熊野より、本の館へ歸給ふ。何しか相州被官の者共、宿所を替、身を隱たる有樣、昨日の樂、今日の夢と哀也。有爲轉變の世の習、今に始ぬ事なれ共、不思議なりし事どもなり。

○頓宮心替事附畠山道誓事

若狹國は、相摸守近年管領の國にて、頓宮四郎左衞門兼て在國したりければ、小濱に究竟の城を構て、兵粮數萬石積置たり。相摸守此に落附て、城の構勢の程を見に、懸合の合戰をするとも、又城に籠て戰共、一年二年の內には、輒く落されじ物をとぞ思は

千顆萬顆の玉―數多き玉、顆は玉の粒の義也

一入再入―一度染二度染の意に見ゆれど實は幾度も染めたるをいふ

五百騎戰慄き居たるを、清氏物の數とや可思。君臣の道、死すれども上に逆はざる義を思ふ故に、一まども落てや陳じ申と存て、無云甲斐體を人に見えつる悲さよ。身不肖なれば、無罪討れ進らす共、世の爲に可惜命に非ず。唯讒人事を亂て、將軍の天下を失はせ給はんずるを、草の陰にても見聞かん事こそ悲しけれとて、兩眼に涙を浮べ給へば、相從ふ兵共、皆鎧の袖をぞぬらしける。千本を打過て、長坂へ懸る處にて、舍弟兵部大輔と從兄弟の兵部少輔二人を近附て、御邊達兄弟骨肉の義依不淺、我安否を見はてんと、是まで附纏ひ給ふ志、千顆萬顆の玉よりも重く、一入再入の紅よりも猶深し。雖然、清氏は依佞人讒不慮の刑に沈む上は力なし。御邊達兩人は、讒を負たる身にても非ず、又將軍の御不審を蒙たる事もなき者が、何と云沙汰もなく、我と共に都を落て、路徑に尸を暴さん事、後難なきに非ず。早く此より將軍へ歸參して、清氏が所存をも申開き、父祖の跡をも失はぬ樣に計ひ給へ。是我を助る謀、又身を立る道なるべしと、涙を流て宣へば、兩人の人々、抑ふる涙に咽で、暫は返事にも不及。良暫有て、心憂事をも承候者哉。縱是より罷歸て候共、讒人君の傍に有て、憑影なき世に立紛れ候はゞ、何迄身をか保候べき。將軍には心を置進せ、傍の人には指を差れ候は

左馬助頼和―原本頼利に作る、毛利家本及系圖に據りて改む

落場―逃るべき場處

は、兎角の沙汰に不レ可レ及とて、使僧に對面もなく、一言の返事にも及給はねば、色を失て退出す。淸氏此上は陳じ申に言なし。今は定て討手をぞ向らるらん。一矢射て腹切らんとて、舍弟左馬助頼和、大夫將監家氏、兵部大輔將氏、猶子仁木中務少輔、從兄弟の兵部少輔氏春、六人中門にて武具ひし〳〵と堅め、旗竿取出し、馬の腹帶を堅めさすれば、重恩新參の郎從共、此彼より馳參て、七百餘騎に成にけり。今熊野には始五百餘騎參じて、哀我討手を承て向ばやと擬勢しける者共、相摸守七百餘騎にて控たりと聞えしかば、興醒顏に成て、此の坊中、彼の在家に引入り、荒く物をも不レ云、唯何方に落場ありと、山の方をぞ守りける。相摸守は今や討手を賜ると、冑の緒を縮、二日まで待けれ共、向ふ敵無りければ、洛中にて兵を集め、戰を致さんと用意したるも、且は狼藉也、陣を去り都を落てこそ、猶陳じ申さめとて、二十三日の早旦に、若狹を差て落て行。仁木中務少輔、細川大夫將監二人は、京に落留りぬ。相從ふ勢次第に減じぬと見えけるに、邊土洛外の郎等共、少々路に追附て、將軍の御勢は、僅に五百騎に不レ足とこそ承候に、などや此大勢にて都をば落させ給候やらんと申せば、相摸守馬を控て、元來將軍に向奉て、合戰をすべき身にてだにあらば、臆病第一の取集勢、四

夜に入て―原本庭に入てに作る、異本に據りて改む

今熊野―京都の泉涌寺附近をいふ

道譽俄に病と稱して、爲二湯治一湯山へ下りぬ。其後四五日有て、相摸守普請の爲とて、天龍寺へ參けるが、不レ例夜に入て物具したる兵共、三百餘騎召具したり。將軍是を聞給て、さては道譽に評定せし事、はや清氏に聞えてげり。さらんに於ては、却て如何樣被レ寄ぬと覺るぞ。京中の戰は、小勢にて叶まじ。要害に籠て可レ防とて、九月二十一日の夜半許に、今熊野に引籠り、一の橋引落して、所々垣楯搔き、車引雙て、逆茂木轅門を堅て、待懸給へば、今川上總守、宇都宮參河入道以下、我も〱と馳參る。俄の事なれば、何事のひしめきと、聞定たる事はなけれども、武士東西に馳違ひ、貴賤四方に逃吟ふ。相摸守は天龍寺にて京中のひしめきを聞て、何條今時洛中に何事の騷可レ有。告る者の誤にてぞあらんとて、騷ぐ氣色も無りけるが、我身の上と聞定てければ、三百餘騎にて、天龍寺より打歸り、弟の僧璵侍者を今熊野へ進せて、洛中の騷動、何事とも存知仕候はで、急ぎ馳參て候へば、清氏が身の上にて候ける。罪科何事にて候やらん。若無實の讒に依て、死罪を行れ候はゞ、政道の亂、御敵の嘲、不レ可レ過レ之、暫御糺明の後に、罪科の實否を可レ被レ定にて候はゞ、首を延て軍門に參候べしとぞ申入たりけれども、清氏が多日の隱謀、事已に露顯の上

の裏に捺印し又は花押を書くをいふ

良久して、手跡は誰共知ねども、判形共に於ては疑なければ、宰相中將殿の見參にこそ入んずらめと思けるが、是を披露申なば、相摸守殿忽に身を可ㇾ被ㇾ失、其上斯る事には、謀作謀計なんども有ぞかし。卒爾にはいかゞ申入べきと斟酌して、深く箱の底にぞ斂ける。斯る處に、羽林將軍俄に邪氣の事有て、有驗の高僧加持し奉れども不ㇾ鎭、頭の痛日を追て增る由聞えしかば、道譽急ぎ參て、先日伊勢入道の進じ候し清氏が願書をば、御覽ぜられ候けるやらんと問奉るに、未披露せずと宣ふ。さては御勞其故と覺候とて、急ぎ伊勢入道を呼寄、件の願書を召出て、羽林將軍に見せ奉る。其後幾程無して、邪氣立去て、違例本復し給ければ、道譽が申處僞らで、清氏が咒咀疑無りけりと、將軍是を信じ給ふ。其後又心附て、八幡に清氏願書を籠ぬ事有べからずとて、內內社務を召て問れければ、去願書は封じて、神馬と送られて候が、頓て神殿にこめて候と申ければ、其取出て奉るべし。聊不審ありと仰有ければ、聽取出し持參しけり。是を披見し給ふにも、大樹の命を奪ひ、我世を取んとの發願也。彌疑所なし。凡志一上人を上せられけるも、畠山我奇特の人と思ひ、同心に京關東を取んとて、其祈禱の爲に、畠山吹擧にて上せられけり。其後よりは、兎やして清氏を討まし、角やせましと、道

裏判—書面

此願書は閑に披見候て、返進べし。明日是へ御渡候へとて、後の小門より出違ければ、志一上人重て云入るゝに言なくして、宿所へぞ歸り給ける。道譽、其翌日此願書を、伊勢入道が許へ持て行て、是見給へ。相摸守が隱謀の企有て、志一上人に附て、將軍を咒咀し奉りけるぞや。自筆自判の願書、分明に候上は、所レ疑にて候はず。急ぎ是を持參して、潛に將軍に見せ進せられ候へとて、爪彈をして、懐よりぞ取出ける。伊勢入道不思議の事哉と思て、披て是を見るに、三箇條の所願を被レ載たり。

敬白　吒祇尼天寶前

一清氏管二領四海一子孫永可レ誇二榮花一事。

一宰相中將義詮朝臣、忽受二病患一可レ被二死去一事。

一左馬頭基氏失二武威一背二人望一可レ被レ降二我軍門一事。

右此三箇條之所願、一々令二成就一者、永爲二此尊之檀度一可レ專二眞俗之繁昌一、仍祈願狀如レ件。

康安元年九月三日　相摸守清氏

と書て、裏判にこそせられけれ。伊勢入道此願書を讀畢て、眉を顰て、大息をつく事

藪に眴し―俗に藪にらみといふ如く見ても見ぬふりをして隙を窺ひ居ること

らんとや思れけん、又我子の烏帽子親に可レ取人なしとや思けん、九と七とに成にける二人の子を、八幡にて元服せさせ、大菩薩の烏帽子子に成て、兄をば八幡六郎、弟をば八幡八郎とぞ名附ける。此事聽て天下の口遊と成ければ、將軍是を聞給て、是は唯當家の累祖、伊豫守賴義、三人の子を、八幡太郎、賀茂次郎、新羅三郎と名附しに異ならず、心中にいか樣天下を奪はんと思ふ企ある者也と、所存に違てぞ思はれける。佐渡判官入道道譽是を聞て、すはや憎しと思ふ相摸守が過失は、一出來にけるはと獨笑して、藪に眴し居たる處に、外法成就の志一上人鎌倉より上て、判官入道の許へおはしたり。樣樣の物語して、さても都は却て旅にて、萬さこそ便なき御事にてこそ候らめ。誰か檀那に成奉て、祈なんどの事をも申入候と問ければ、未甲斐々々敷知音檀那等も候はで、いつしか在京難レ叶心地して候つるに、細川相摸守殿よりこそ、此一兩日が先に、一大事の所願候。頓に成就ある樣に、祈てたび候へとて、願書を一通封じて、供具の料足一萬匹副て、被レ送て候しかと語り給ければ、道譽何事の所願にてか候らんと、懇切に被二所望一。慭に語りは出しつ、さのみ惜まん事も難レ叶ければ、無レ力此願書をぞ取寄て、披見せさせける。道譽此願書を内へ持て入て、唯今些急ぐ事候間、外へ罷出候。

本非の茶―本邦の茶の本は栂尾なれば本の栂尾ならぬ宇治の茶などをいふなるべし

を申賜る後、頓宮細川が手に屬して忠有しかば、細川是を贔屓して、安堵の御教書を申與ふ。然共則祐は道譽が聟也ければ、國を抑へられ、上裁を支られて、頓宮所領に還住せず。是清氏が鬱憤の其一也。次に攝津國守護職をば、道譽無ㇾ謂申賜て、嫡孫近江判官秀詮に持せたりけるを、相摸守本主赤松大夫判官光範に安堵せさせんと、時々異見を獻ずる事所ㇾ憚なし。依ㇾ之道譽が鬱憤其二なり。次に今度七夕の夜は、新將軍相摸守が館へおはして、七百番の歌合をして可ㇾ遊なりと兼て被ㇾ仰ければ、相摸守誠に興じ思て、樣々の珍膳を認、歌讀共數十人を誘引して、已に案内を申ける處に、道譽又我宿所に七所を粧て、七番菜を調へ、七百種の掛物を積み、七十服の本非の茶を可ㇾ飲由を申て、宰相中將殿を招請し奉ける間、歌合はよしや後日にてもありなん、七所の飾は珍き遊なるべしとて、兼日の約束を引違、道譽が方へおはしければ、相摸守が用意徒に成て、數寄の人も空く歸にけり。是又清氏が鬱憤の其二也。加樣の事共、互に憤深く成にければ、兩人の確執止む事を不ㇾ得、上にはさりげなき體なれども、下には惡心を挾めり。されば始終は如何と被ㇾ思遣たり。此相摸守は、氣分飽まで侈て、行跡尋常ならざりけれ共、偏に佛神を敬ふ心深かりければ、神に歸服して、子孫の冥加を祈

左馬助—原本左馬助右馬助右馬頭に作り前後一ならず系圖に據りて一樣に改む

は野伏共に生捕れて、被面縛たる敵をも不斬、或は河より被引上、無甲斐命生たる敵をも不禁置、赤裸なる者には小袖を著せ、手負たる者には藥を與て、京へぞ返遣しける。身の恥は悲しかりけれ共、悅ばぬ者は無りけり。

○清氏叛逆事附相摸守子息元服事

此等をこそ、すはや大地震の驗に、國々の亂出來ぬるはと驚き聞處に、京都に希代の事有て、將軍の執事細川相摸守清氏、其弟左馬助、猶子仁木中務少輔、三人共に都を落て、武家の怨敵と成にけり。事の根元を尋ぬれば、佐々木佐渡判官入道道譽と、細川相摸守清氏と、內々怨を含事有しに依て、遂に君臣豺狼の心を結ぶとぞ聞えし。先加賀國の守護職は、富樫介、建武の始より今に至まで、一度も變ずる事無して、而も忠戰異他、成敗依不暗、恩補列祖に復せしを、富樫介死去せし刻、其子未幼稚也とて、道譽尾張左衞門佐を聟に取て、當國の守護職を申與んとす。細川相摸守是を聞て、さる事や可有とて、富樫介が子を取立て、則守護安堵の御教書をぞ申成ける。依之道譽が鬱憤其一也。次に備前の福岡庄は、頓宮四郎左衞門尉が所領也。然るを頓宮が軍忠中絕の刻、赤松律師是

擬勢―表面ばかり強き勢のあること

深田へ立渡て、鏃を支へ散々に射る。南方は深田にて馬の足も不レ立、跡より返て廣みにて戰へと、先陣の勢に制せられて、後陣より返さんとする處に、和田、楠、橋本、福塚、五百餘騎拔連て追懸たり。中津河の橋爪にて、白江源次六騎蹈止て討死しける。是ぞ案内者なれば、足立の善惡をも辨へて、一軍もせんずると、佐々木が兼てより憑ける國人の、中白一揆五百餘騎、一戰も不レ戰、物具太刀刀を取捨て、河中へ皆飛漬る。始はさしも擬勢しつる吉田肥前、眞先に橋を渡て逃けるが、續く敵を不レ渡とやしたりけん、橋板一間引落てければ、跡に渡る御方の兵三百餘騎は、皆水に溺てぞ流ける。佐々木判官兄弟は、橋の邊まで落延たりけるが、縣二郎が、橋の落て候ぞ。とても叶ぬ所也。返て討死せさせ給へ。御供申さんと云けるに、恥しめられて、兄弟二騎引返て、矢庭に討れてけり。瓜生次郎左衛門父子兄弟三人も、判官の討死するを見て、一所に打寄らんとしけるが、馬の平頸射られて刎落されければ、田の畔の上に、三人立雙で、敵懸らば打違て死なんとしけるが、遠矢に皆射すくめられて、一所にて皆討れにけり。半時許の軍に、死する京勢二百七十三人、此内敵に討れて死する兵、僅に五六人には不レ過。其外二百五十餘人は、皆河に流てぞ失にける。楠父祖の仁惠をつぎ、有レ情者なりければ、或

衛門、兼て在國したりければ、千餘騎にて馳向ひ、神崎橋を阻て防戰はんと議しけるを、守護代吉田肥前房嚴覺、何條さる事や候べき。近年赤松大夫判官當國の守護にて乍」有、動れば和田楠等に境内を犯奪れんとする事、未練の至也とて、申賜らせ給ける守護職にて候に、敵の國を退治するまでこそ無らめ、當國に打越たる敵を、一人も生て返たらんは、赤松に被」笑のみに非ず、京都の聞えも不」可」然。嚴覺命を輕ずる程ならば、一族他門の兵共、誰か見放つ者候べき。恩賞ほしくばつゞけや人々と、廣言吐て、嚴覺眞前に神崎橋を打渡れば、後陣の勢一千餘騎も、續て河を越たりける。爰にて敵の分際を問ふに、楠は未河を不」越、和田が勢計僅に五百騎にも不」足見えて候と、牛飼童部共の語ければ、吉田肥前房から〳〵と笑て、哀淺ましや、敵の種をば此にて盡さすべし。同くは楠をも河を越させて打殺せとて、最閑に馬を飼て、のさ〳〵としてぞ居たりける。和田楠是を見澄して、河より西へ下部を四五人遣して、南方の敵は西より被」寄候ぞ。神崎の橋爪を支させ給へとぞ呼らせける。佐々木判官是を聞て、敵さては差違て跡より寄けり。取て返て戰へとて、兩方深田なる道一つを、一面に打竝で、本の橋詰へと、馬を西頭に成して、歩ませ行處に、楠が足輕の野伏三百人、兩方の

千に、天正本一萬に作る

毎事―原本毎年に作る異本に據りて改む

上裁―將軍の裁斷

可レ歸とは不レ見けり。

○秀詮兄弟討死事

又同年の九月二十八日、攝津國に不慮の事出來て、京勢若干討れにけり。事の起を尋ぬれば、當國の守護職をば、故赤松信濃守範資、無二の忠戰に依て將軍より賜たりしを、範資死去の後、嫡子大夫判官光範相續して是を拜領す。然るを去年宰相中將義詮朝臣、五畿七道の勢を卒して、南方を被レ攻時、光範が軍用の沙汰、毎事不足なりと、將軍近習の輩共つぶやきけるを、佐々木佐渡判官入道道譽能次とや思けん、南方の軍散じて後、光範差たる咎もなきに、攝津國の守護職を可レ被二召放一由を申て、則我恩賞にぞ申賜ける。光範は今度の軍用と云、合戰と云、忠烈人に超たりと思ければ、定て拔群の恩賞をぞ賜らんずらんと思ける處に、夫こそ無らめ、結句二代の忠功を被レ處レ無、多年管領の守護職を被二改替一ければ、含レ憤殘レ恨といへども、上裁なれば不レ及レ力、謹で訴訟をし居たりける。和田楠是を聞て、よき時分也と思ければ、五百餘騎を卒して、渡邊橋を打渡り、天神森に陣を取る。佐渡判官入道道譽が嫡孫、近江判官秀詮、舍弟次郎左

城越前守は謀ある者也ければ、山伏禪僧遁世者なんどを忍々に松浦が陣へ遣して、其軍の人々の中に、たれがしは御方へ内通の事あり、何がしは後矢射て降參すべき由を申候ぞ。野心の者共に心を置で、犬死し給ふななんど、樣々にぞ申遣れける。是を聞て、去事や可レ有と乍レ思、今時の人の心、又あるまじき事にてもなしと、互に心置合て、危まぬ人も無りけり。其後少程經て、八月六日の曉、城越前守千餘騎にて飯守山に押寄、楯の板を敲て、鬨をどつと作る。松浦黨元來大勢也、城よかりければ、此敵に可レ被レ落樣は無りけるを、城中に敵の内通の者多しと、敵の謀て告たりしを、誠と心得て、御方に討るな、目を賦れと云程こそ有けれ、我先にと落ける間、寄手勝に乘て、追懸々々是を討、夜明たりせば一人も助るべしとは不レ見けり。乍レ敵手痛からんずると思つる松浦黨をば、城越前守が謀にて、輒攻落しぬ。小貳大友を打散さん事は、指レ掌よりも可レ輒とて、菊池、宮の御勢と一手に成て五千餘騎、明る七日午刻に、香椎の陣へ押寄る。松浦黨、昨日搦手の軍に打負ぬと聞しより、哀引ばやと思ふ小貳大友が勢共なれば、何かは一たまりもたまるべき。鞭に鐙を合て、我先にと落て行。道も不二去得一脱捨たる物具弓矢に目を懸ずば、一日路餘追れつる大手一萬餘騎は、半も生て本國へ

二萬餘騎―
毛利家本六

對揚—對比の意

が國々の私戰を捨かねて、大將に不ㇾ屬。備前、備中、備後三箇國の勢は、皆野心を含める者共なれば、非ㇾ可ㇾ憑とて、大將唐河に陣を取、徒に月日をぞ被ㇾ送ける。去程に倉懸城には、人多して兵粮少かりければ、戰ふ度に軍利有といへども、後攻の憑もなく、食盡矢種盡ければ、無ㇾ力十一月四日、遂に城を落にけり。是より山名山陰道四箇國を併て、勢彌近國に振のみに非ず、諸國の聞え夥しかりければ、世中如何あらんと、危く思はぬ人も無りけり。又筑紫には、去ぬる七月初に、征西將軍宮、新田の一族二千餘騎、菊池肥後守武光三千餘騎、博多に打て出て、香椎に陣を取と聞えしかば、勢の附ぬさきに逐落せとて、大伴刑部大輔七千餘騎、太宰小貳五千餘騎、宗像大宮司八百餘騎、紀井常陸前司三百餘騎、都合二萬五千餘騎の勢、一手に成て大手へ向ふ。上松浦下松浦の一黨兩勢の兵三千餘騎は、飯守山に打上て、敵の後へぞ廻ける。寄手は目に餘る程の大勢にて、而も敵を取卷たり。宮方は對揚までもなき小勢にて、而も平場に陣を取たりけれ共、菊池が氣分、元來大敵を拉ぐ心根なりければ、敢て事ともせざりけり。兩陣の間僅に二十餘町を阻たれば、數日互に馬の腹帶を堅め、鎧の高紐を弛さで、懸てや攻る、待てや戰ふと、隙を窺ひ氣をためらひて、徒に兩月をぞ送ける。菊池が家の子

騎づつの勢を籠たりける。山名が執事小林民部丞重長、二千餘騎にて星祭嶽へ打上り、城を目の下に直下して、透間もあらば打懸らんと、馬の腹帯を堅て控たり。赤松筑前入道世貞、舎弟律師則祐、其弟彈正少弼氏範、大夫判官光範、宮内少輔師範、掃部助直頼、筑前五郎顯範、作用、上月、眞島、杉原の一族相集て、二千餘騎、高倉山の麓に陣を取て、敵倉懸城を攻ば、弊に乘て後攻をせんと企つと聞えければ、山名右衛門佐師義、勝たる兵八百餘騎を率して、敵の近附ん所へ懸合んと、浮勢に成て控たり。赤松は右衛門佐小勢也と聞て、先此敵を打散さんと打立ける處に、阿保肥前入道信禪俄に敵に成て、但馬國へ馳越、長九郎左衛門と引合て、播磨へ打て入んと企ける間、赤松さらば「東方に城郭を構へ、路々に警固の兵を置とて、法華山に城を構へ、大山越の道を切塞で、五箇所へ勢をぞ差向ける。依之進んで山名に戰んとするも勢少く、退て但馬へ向はんとするも不叶、進退歩を失て、前後の敵に迷惑す。さらば中國の大將細川右馬頭頼旨、讃岐國守護を相論じて、四國におはするに觸送て、其勢を呼越し、備前、備中、備後、當國四箇國の勢を以て、倉懸城の後攻をせよとて、事の仔細を牒送するに、右馬頭大に驚て、九月十日備前へ押渡て、後陣の勢を待けるに、相從ふ四箇國の兵共、己

杉原—諸異本に柏原に作る、可なるが如し
浮勢—遊軍也

富樓那—富樓那彌多羅尼子をいひ釋尊の十大弟子の一也

に座を替て、學海に玉を拾へる證義論談を決擇して、詞の林に花開く富樓那の辯舌、文珠の智慧も、角やと覺る許也。

○山名伊豆守落美作城事附菊池軍事

斯る處に、十月十二日に、山名伊豆守時氏、嫡子右衞門佐師義、次男中務大輔、出雲、伯耆、因幡、三箇國の勢三千餘騎を率して、美作へ發向す。當國の守護赤松筑前入道世貞、播州に在て未戰前に、廣戸掃部助、名木能仙二箇處の城、飯田の一族等が籠たる篠向城、菅家の一族が大見丈城、有元民部大輔入道が菩提寺城、小原孫次郎入道が小原城、大野の一族が籠たる大野城、六箇所の城は、一矢をも不射降參す。林野妙見二の城は、二十日餘怺たりけるが、山名に兎角すかされて、遂には是も敵になる。今は倉懸城一殘て、佐用美濃守貞久、有元和泉守佐久、僅に三百餘騎にて楯籠たりけるを、山名伊豆守時氏、子息中務大輔、三千餘騎にて押寄、城の四方の山々峯々、二十三箇所に陣を取て、鹿垣を二重三重に結廻し、逆茂木しげく引懸て、矢懸り近くぞ攻たりける。播磨と美作との境には、竹山、千草、吉野、石堂が峯、四箇所の城を構て、赤松律師則祐百

> 二十八部衆
> |孔雀經に、復有二二十八藥叉大將一能於二十方世界一覆二護一切衆生一爲除二衰惱患厄之事一云々と見ゆる是也

の番匠十人にも過たり。さればこそ直人にては無りけれと、彌怪く覺して、日暮て歸るを見送り給へば、何へ行共不見かき消す樣に失にけり。其數二十八人有つるは、何樣千手觀音の御眷屬、二十八部衆にてぞ御座すらんと、皆人信仰の手を合す。されば造營日新にして、奇麗金銀を鏤たり。靈佛の威光、上人の陰德、函蓋共に相應じて、奇特なりし事共也。都には東寺の金堂、一尺二寸南へのきて、高祖弘法大師南天へ飛去せ給ぬと、寺僧の夢に見えければ、洛中の御愼たるべしとて、青蓮院の尊道法親王に被仰、伴僧二十口八月十三日より內裏に伺候して、大熾盛光法を行はる。聖護院覺譽法親王は、二間に御參有て、九月八日より一七日、尊星王法をぞ修せられける。是のみならず、近年絕て無りつる最勝講を行はる。初日は問者叡山の尋源、東大寺の深慧、講師には、興福寺の盛深、同寺の範忠、第二日の問者は、東大寺の經辨、同良懷、講師は興福寺の實遍、山門の慈俊、第三日の問者は、興福寺の圓守、山門の圓俊、講師は三井寺の經深、興福寺の覺成、第四日の問者は、興福寺の孝憲、同寺の覺家、講師は叡山の良憲、三井寺の房深、結日の問者は、東大寺の義實、興福寺教快、講師は山門の良壽、興福寺の實緣、證義は大乘院の前大僧正孝覺、尊勝院の慈能僧正にてぞ御座ける。講問朝夕

難道行—進捗し難き也
かぶき—冠木にて笠木ともいふ

る堂舍はなく、紀州の山々程裂たる地もなければ、是外の表示には非じと、御愼有て、樣々の御祈共を始らる。則般若寺圓海上人勅を承て、天王寺の金堂を作られけるに、希代の奇特共多かりけり。先大厦高堂の構なれば、安藝、周防、紀伊國の杣山より、大木を取んずる事、一二年の間には難道行覺けるに、二人して抱廻す程なる檜木の柱、六七丈なるかぶき三百本、何より來る共不知、難波浦に流寄て、鹽の干潟にぞ留ける。暫は主ある材木にてぞ有らんと、尋くる人を待けれ共、求くる人も無りければ、さては天龍八部の人力を助給ふにてぞ有らんとて、虹の梁鳳の甍、品々に是をぞ用ける。又柱立已に訖、棟木を揚んとしけるに、轆轤の綱に、信濃皮むき千束入べしと、番匠氣色を出せり。輒可尋出物ならねば、上人信濃國へ下て、便宜の人に勸進せんと企給ける處に、難波堀江の汀に、死蛇の如なる物流寄たり。何やらんと近附見れば、信濃皮むきにて打たる大綱、太さ二尺、長さ三十丈なるが、十六筋まで、水泡に連てぞ寄たりける。上人不斜悅で、軈てくるまきの綱に用らる。是第一の奇特也とて、所用の後は、此綱を寶藏にぞ納め給ける。又三百餘人有ける番匠の中に、肉食を止、酒を飮ぬ番匠あまたあり。上人怪く思給て、是がする業を見給ふに、一人のする業、餘

四天—帝釋天の外臣たる持國、増長、廣目、多聞の四天王をいふ

山崩て谷に答へ、潮涌て天に漲りければ、數百人の浦人共、唯今大地の底へ引入らるゝ心地して、肝魂も身に不ㇾ副、倒るゝ共なく、走共なく、四角八方へぞ逃散ける。其後よりは彌近附人無りければ、天にや上りけん、又海中へや入けん。潮は如ㇾ元滿て、大鼓は不ㇾ見成にけり。又八月二十四日の大地震に、雨荒く降り、風烈く吹て、虛空暫搔くれて見えけるが、難波浦の澳より、大龍二浮出て、天王寺の金堂の中へ入ると見えけるが、雲の中に鏑矢鳴響て、戈の光四方にひらめきて、大龍と四天と戰ふ體にぞ見えたりける。二の龍去る時、又大地夥く動て、金堂微塵に碎にけり。されども四天は少も損ぜさせ給はず。是は何樣聖德太子御安置の佛舍利、此堂に御座せば、龍王是を取奉らんとするを、佛法護持の四天王、惜ませ給けるかと覺たり。洛中邊土には、傾ぬ塔の九輪もなく、熊野參詣の道には、地の裂ぬ所も無りけり。舊記の載る所、開闢以來、斯る不思議なければ、此上に又何樣なる世の亂や出來らんずらんと、懼恐ぬ人は更になし。

○天王寺造營事附京都御祈禱事

南方には、此大地震に、諸國七道の大伽藍共の破たる體を聞に、天王寺の金堂程崩れた

拏はせ一幸合せにて八龍の形を描きたるをいふなるべし

幾千萬と云數を不ㇾ知。都て山川、江河、林野、村落、此災に不ㇾ遭云所なし。中にも阿波の雪湊と云浦には、俄に大山の如なる潮漲來て、在家一千七百餘宇、悉引潮に連て、海底に沈しかば、家々に所ㇾ有の僧俗、男女、牛馬、雞犬、一も不ㇾ殘底の藻屑と成にけり。是をこそ希代の不思議と見る處に、同六月二十二日、俄に天掻曇雪降て、氷寒の甚き事、冬至の前後の如し。酒を飲て身を暖め、火を燒爐を圍む人は、自寒を防ぐ便もあり、山路の樵夫、野徑の旅人、牧馬林鹿悉氷に被ㇾ閉雪に伏て、凍死る者數を不ㇾ知。七月二十四日には、攝津國難波浦の澳數百町、半時許乾あがりて、無量の魚ども沙の上に吻ける程に、傍の浦の海人共、網を卷釣を捨て、我劣じと拾ける處に、又俄に如二大山一なる潮滿來て、漫々たる海に成にければ、數百人の海人共、一人も生て歸るは無りけり。又阿波鳴戸俄に潮去て陸と成る。高く峙たる岩の上に、胴のまはり二十尋許なる大鼓の、銀のびやうを打て、面には巴をかき、臺には八龍を拏はせたるが顯出たり。暫は見人是を懼て不二近附一、三四日を經て後、近き傍の浦人共、數百人集て見るに、胴は石にて、面をば水牛の皮にてぞ張たりける。尋常の撥にて打たば鳴じとて、大なる鐘木を拵て、大鐘を撞樣につきたりける。此大鼓天に響き地を動して、三時許ぞ鳴たりける。

五部の大乘經—大方廣佛華嚴經、大集經日藏分月藏分、大品般若經、妙法華經、大涅槃經をいふ

有をも不レ嫌、利物の所には、愚なるをも不レ捨。抑義長が惡行を、汝等天に訴て、呪咀する事こそ心得ね。彼が三生の前に、義長法師と云し時、五部の大乘經を書て、此國に納たりき。其善根今生に應て、當國を知行する事を得たり。加樣の宿善ならずは、彼豈一日も安穩なる事を得んや。嗚呼あたら善根や。若無上菩提の心に赴て、此經を書たらましかば、速に離二生死一至二佛果菩提一なまし。唯名聞利養の爲に、修せし處の善根なれば、今身は武名の家に生て、諸國を管領し、眷屬多くたなびくといへども、惡行心に染て、亂をこのみ人を惱す。哀なる哉、過去の善根此世に應て、今生の惡業又未來に酬はん事をと、かきくどきて泣けるが、暫寢入たる體にて、物附は則覺にけり。加樣の事を以て思ふ時は、義長も故ある人とこそ覺え候へと申ければ、初譏つる者共、其は不レ知、於二惡行一は、天下第一の曲者ぞと、終夜語て、明れば朝よりぞ退てける。

○大地震竝夏雪事

同年の六月十八日の巳刻より同十月に至まで、大地夥しく動て、日々夜々に止時なし。山は崩て谷を埋み、海は傾て陸地に成しかば、神社佛閣倒破れ、牛馬人民の死傷する事、

仙輿國王―諸經要集云亦有レ如二仙譽國王一、殺二五百婆羅門一生二地獄中一、發二生信心一生二甘露國一とあり

班足太子云云―仁王經に出づ

本高跡下―本地垂跡をいふ

利物―利益衆生の略也

此人惡き事はさる事なれ共、又直人とは不レ覺。鎌倉にては鶴岡の八幡宮にて、兒を切殺して、神殿に血を淋ぎ、八幡にては駒方の神人を殺害して、若干の神訴を負ふ。尋常の人にて、是程の惡行をしたらんに、暫も安穩なる事や候べき。仙輿國王の五百人を殺し、班足太子一千の王を害せしも、皆權者の所變とこそ承れ。是も唯人を超過して申に非ず、人の語り傳へし事の、耳に留て候間、申にて候なり。近年此人伊勢國を管領して在國したりしに、前々更に公家武家手を不レ指神領三郡に打入て、太神宮の御領を押領す。依レ之祭主神官等京都に上て、公家に奏聞し、武家に觸訴ふ。開闢以來未レ斯る不思議やあるとて、嚴密の綸旨御教書を被レ成しかども、義長曾不レ承引、剰我を訴訟しつるが惡きとて、五十鈴川をせいて魚を捕、神路山に入て鷹を仕ふ、惡行日來に重疊せり。よしやさらば神罰に任て、亡んを待とて、五百餘人の神官等、榊の枝に木綿を懸、樣々の奉幣を捧て、唯義長を七箇日の内に蹴殺させ給へと、異口同音にぞ呪咀しける。七日に當ける日、十歲許なる童部一人、俄に物に狂て、我に太神宮乘居させ給へりとて、託宣しけるは、我本覺眞如の都を出て、和光同塵の跡を垂しより以來、本高跡下の秋の月、不レ照云處もなく、化屬結緣の春の花、不レ薰と云袖もなし。去ば方便の門には、罪

に毒害せられにき。其後又宰相中將義詮朝臣、御方に可レ參由を申て、君臣御合體の由なりしも、何か天下を君の御成敗に任たりし。堅約忽に破て、義詮江州を差して落たりしは、其僞の果す所に非ずや。又右兵衞直冬、石堂刑部卿賴房、山名伊豆守時氏等が、御方の由なるも、都て實共不レ覺。推量するに、唯勅命を藉て、私の本意を達せば、君をば御位に卽進するとも、天下をば我儘にすべき者をと、心中に挾む者也。今又仁木右京大夫義長、大敵に圍れたるが難レ堪さに、御方に參べき由を申を、諸卿許容し給ふこそ心得ね。彼が平生の行跡、惡として不レ造云事なし。聊も心に逆ふ時は、無レ咎人を殺て、誤れりとも不レ思、氣に合時は、無レ忠賞を與て、忽に是を取返す。先多年の芳恩を忘て、義詮朝臣を背く程の者なれば、君の御爲に深く忠義を可レ存や。四箇國の管領を尙あきたらず思し程の心なれば、此方の五箇國三箇國の恩賞を、不足なしと可レ思や。若又彼が如二所存一恩賞を被レ行、日本六十六箇國に、一所も殘處不レ可レ有。多年舊功の官軍共、何れの所にか身を可レ置。倩是を思に、非二忠臣一非二智臣一、佛神に被レ捨進せ、人望に背て、自滅せんとする惡人を、御方に被レ成たらば、豈聖運の助ならんや。唯虎を養て自患を招く風情なるべき者をと申ければ、又傍に仁木を引者かと覺しくて申けるは、

四箇國―原本七箇國に作る、毛利家天正本四に作り本書三十五卷亦四箇國とあるに隨つて之を改む

思て、潛に人を遣し、城のさのみ弱り候はぬ前に、急ぎ御降參候へ。將軍の御意も無二仔細一候へば、御本領なども相違有まじきにて候と申遣たりければ、右馬頭使に向て、兎角の返事をばせで、其文を引返て、一首の歌を書てぞ返ける。

連りし枝の木の葉の散々に、さそふ嵐の音さへぞうき。

外山今峯此返事を見て、此程に思切たる人なれば、語ふ共甲斐あるまじ。げにも連枝の兄弟散々に成て後、憂世を秋の霜の下に朽なん名こそ悲けれと、涙ぐみけるぞ哀なる。日に隨て勢の落行氣色を見て、我力にては遂に可レ叶共不レ思けるにや、義長潛に吉野殿へ使者を進せて、御方に可レ參由をぞ申入たりける。傳奏吉田中納言宗房卿、參內して事の由を被二奏聞一けるに、諸卿異議多しといへども、義長御方に參なば、伊賀伊勢兩國官軍に屬するのみならず、伊勢國司顯能卿の城も、心安く成ぬべしとて、則勅免の綸旨をぞ被レ成ける。是を承て、武者所に候ける者共が、囁き申けるは、近年源家の氏族の中に、御方に參ずる人々を見るに、何れも以レ詐君を欺申さずと云者なし。先錦小路慧源禪門は、相傳譜代の家人師直師泰等が害を遁ん爲に、御方に參しか共、當方の力を假て、會稽の恥を雪たりし後、一日も更に天恩を重しとせず、其讎身に留て、遂

三年が間―義長が長野城に籠りしは實は二年也

土岐氏光―頼遠の子にて仁木義長の養子也

○仁木京兆參二南方一事附太神宮御託宣事

都には去年の天災、旱魃、飢饉、疫癘、都鄙の間に發て、尸骸路徑に充滿せし事、徒事にあらず。何樣改元有べしとて、延文六年三月晦日に康安に改られける。其夜四條富小路より火出て、四方八十六町まで燒失す。改元の始に、洛中加樣に燒ぬる事、先不吉の表示也。此年號不レ可レ然と被レ申人多かりけれども、武家既に宣下を承て、國々へ施行しぬるを、いつしか又改元あらん條、無二其例一とて、終に此年號をぞ被レ用ける。去程に、仁木右京大夫義長は、三年が間大敵に取卷れて、伊勢の長野城に籠たれば、知行の地もなく、兵粮乏くなるに附て、憑切たる一族郎從、漸々に落失て、僅に三百餘騎に成にけり。土岐右馬頭氏光、外山、今峯、兄弟三人、始は仁木に屬して、城に籠たりけるが、弟の外山、今峯は、忽に飜て寄手に加り、兄の右馬頭は、猶城に留て、仁木が方にぞ居たりける。連枝の間なれば、外山、今峯如何にもして、右馬頭を助ばやと

玉笥―枕詞也

左衞門、同彈正忠、佐脇三河守、高島次郎左衞門、淺香、萩原、河合、服部、宗徒の者共五十餘人、一所にて皆討れにけり。軍散じければ、同十一月一日、彼首共を取て、都に上せしかば、六條河原にぞ被レ懸ける。是を見ける大名、小名、僧俗、貴賤、哀哉、昨日までも詞をかはし肩を雙て、見馴し朋友なれば、涙を拭て首を見、悲の思散滿たり。斯りしかば、仁木義長も、三千餘騎と聞えし兵、皆落失て、五百餘騎にぞ成にける。結句憑たる連枝仁木三郎は、今度軍に打負て、其儘降參して出たりける。加樣に義長微々に成しかば、軈攻よとて、佐々木大夫判官入道、土岐大膳大夫入道、兩人討手を承て、七千餘騎にて伊勢國へ發向す。義長さしもの勇士なりしか共、兵滅じ氣疲れしかば、懸合て一度も軍をせず、長野城に楯籠る。要害よければ、寄手敢て不二近得一。土岐佐々木は又大勢なれば、平場に陣を取れども、義長打出て散すに不レ及。兩陣五六里を隔て、玉笥ニ見浦の二年は、徒にのみぞ過しける。

す如き非常なる勢をいふ

尫弱の勢がさ—弱々しき軍勢の様子

氣をもくれず—息をもつがせずの意

道、其氣勇健なる者なりければ、此軍天下の勝負を計るのみに非ず、今日打負なば、弓矢の名を可レ失とて、僅の勢を數多に成ては叶まじとて、目賀田、楢崎、儀俄、平井、赤一揆を旗頭にて、河端に傍て控たり。青地、馬淵、伊庭入道、黄一揆を大將として、左手の河原に陣を取。佐々木大夫判官入道は、吉田、黑田、二部、鈴村、大原、馬杉を始として、宗徒の兵を馬廻に控させて、敵の眞中を破んと控たり。尫弱の勢がさを見て、大勢の敵などか勇まであるべき。三手の小勢を見るに、中なる四目結の大旗は、大將佐々木と見るぞ。打取て勳功に預れやと呼て、長野が蠅拂一揆、一陣に進て懸出たり。元來佐々木は、機變懸引を心に得て、死を一時に定たる氣分なれば、何かは些も可二擬議一、大勢の眞中に懸入て、十文字巴の字に懸散し、鶴翼魚鱗に連て、東西南北に馬の足を不レ惱、敵の勢を懸靡て、後に小野の有けるに、西頭に馬を立直し、人馬の息を繼せければ、朱に成たる放馬、其數を不レ知、蹄の下に切て落したる敵共、算を散してぞ伏たりける。是を見て殘の兵氣を失て、さしも深き内貴田井を天滿山へと志し、左になだれて引ける間、機に乘たる佐々木が若黨共、氣をもくれず追懸たり。引立たる者共が、難所に追懸られて、なじかは可レ能。矢野下野守、工藤判官、宇野部、後藤彈正、波多野七郎

野行明等と引合ひ、國へ入ける路次の軍に打負て、西郷伊勢へ落行ければ、吉良治部大輔は御方に成て、都へぞ出たりける。是のみならず石堂刑部卿頼房、仁木三郎を大將として、伊賀伊勢の兵を起し、二千餘騎にて近江國に打越、葛木山に陣を取、佐々木大夫判官入道崇永、舎弟山内判官、國中の勢を集て、飯守岡に陣を張、數日を經ける處に、九月二十八日の早旦に、仁木三郎兵をかたらうて申けるは、當國に打越て、數日合戰に不及して、徒に里民を煩す事非本意上、伊勢の京兆も定て未練にぞ思給ふらん。今日吉日なれば、敵を一當當て可散。但佐々木治部少輔高秀が手の者を分て守るなる市原城を攻落し、敵を一人も跡に不殘、心安く合戰を可致とて打立ければ、石堂刑部卿も、伊賀の名張が一族、當國の大原、上野の者共附從ける間、手勢三百餘騎、是も同く打立て、旗を靡け兵を進ければ、此勢を見て、佐々木大夫判官入道、すはや敵こそ陣を去て色めきたれ、打立や者共とて、兵を集ける。譜代恩顧の若黨三百餘騎の外は、相從ふ勢も無りけり。敵は是が天下の要なるべしとて、仁木京兆の憑たる桐一揆を始として、宗徒の勇士五百餘騎に、伊賀の服部河合の一揆馳加て、回天の勢を振ふ。其樣を見に、五百騎に足ぬ佐々木が勢、可叶とは見えざりけり。され共佐々木大夫判官入

京兆—左右京職の唐名

回天の勢—天日の既に落つるを回

て思ふにも、臣君を無し、子父を殺すも、今生一世の惡に非ず。武士は衣食に飽滿て、公家は餓死に及事も、皆過去因果にてこそ候らめと、典釋の所述明に語ければ、三人共にから〳〵と笑けるが、漏箭頻に移て、晨朝にも成ければ、夜も已に朱の瑞籬を立出て、己が樣々に歸けり。以是案ずるに、懸る亂の世中も、又靜なる事もやと、憑を殘す計にて、賴意は歸給にけり。

漏箭—漏刻の箭也、漏刻は水時計にて水中に箭を立て其矢箭には時を刻む、水漏れば浮び出づ其刻の數にて時を計る也

○尾張小河東池田事

去程に小河中務丞と、土岐東池田と引合て、仁木と同心し、尾張小河庄に城を構て楯籠たりけるを、土岐宮内少輔三千餘騎にて押寄せ、城を七重八重に取卷て、二十日餘攻けるが、俄に拵たる城なれば、兵粮忽に盡て、小河も東池田も、共に降人に出たりけるを、土岐日來所領を論ずる事有し宿意に依て、小河中務をば則首を刎て京都へ上せ、東池田をば一族たるに依て、尾張の幡豆崎の城へぞ送ける。吉良治部大輔も、仁木が語ひを得て、參河國の守護代西鄉兵庫助と一つに成て、矢矧の東に陣を張り、海道を差塞ぎ、畠山入道が下向を支たりけるが、大島左衞門佐義高當國の守護を賜て、星

地の最下底をいふ

四衆―比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷をいふ

舍利弗伸二神力手一、御鉢を取上げ、飯を食せんとし給ふに、梨軍支が口餓に噤て、齒を開く事を不レ得。兎角する程に、時已に過ければ、此日も食はで餓にけり。此に梨軍支比丘大に慚愧して、四衆の前にして、今は是ならでは可レ食物なしとて、砂をかみ水を飲て、即涅槃に入けるこそ哀なれ。諸の比丘怪て、梨軍支が前生の所業を佛に問奉る。于レ時世尊諸の比丘に告て曰、汝等聞け。乃往過去に、波羅奈國に一人の長者有て、名をば瞿彌といふ。供佛施僧の志日々に不レ止。瞿彌已に死して後、其妻相續て、三寶に施する事同じ。長者が子是を忿て、其母を一室の内に置き、門戶を堅く閉て、出入を不レ許。母涕泣する事七日、飢て死なんとするに臨て、母子に向て食を乞に、子忿れる眼を以て、母を睨て曰、寶を施行にし給はゞ、何ぞ砂を食ひ、水を飲で飢を不レ止と云て、遂に食物を不レ與。食絕て七日に當る時、母は遂に食に飢て死ぬ。其後子は貧窮困苦の身と成て、死して無間地獄に墮ぬ。多劫の受レ苦事終て、今人中に生る。此事梨軍支比丘是也。沙門と成、即得二阿羅漢果一事は、父の長者が、三寶を敬し故也。其身食に飢て、砂を食て死せし事は、母を飢かし殺したりし依二其因果一也と、釋尊正に梨軍支が過去の所業を說給しかば、阿難、目連、舍利弗等、作レ禮而去給ふ。加樣の佛說を以

檀那の請を可レ受とて、伽耶城に入て、檀那の請を受給ふ。二人の沙門已に鉢を舉て、飯を請けんとし給ける處に、檀那の夫婦、俄に喧嘩をし出て、ともに打合ける間、心ならず、飯を打こぼして、舍利弗梨軍支ともに餓てぞ歸り給ける。其翌日又舍利弗、長者の請を得て行給けるが、梨軍支比丘を伴ひ連給ふ。長者五百の阿羅漢に飯を引けるが、如何して見はづしたりけん、梨軍支一人には不レ引けり。梨軍支鉢を捧て高聲に告けれども、人終に不二聞附一ければ、其日も飢て歸にける。阿難尊者此事を憐て、今日我佛に隨奉て請を受るに、汝を伴て、飯に可レ令レ飽と約し給ふ。阿難既に佛に隨て出給ふ時に、梨軍支に約束し給つる事を忘て、連給ざりければ、今日さへ鉢を空くして、徒然としてぞ暮しける。第五日に、阿難又昨日梨軍支を忘たりし事を淺ましく思召て、是に與へん爲に、或家に行て飯を乞て歸給ふ。道に荒狗數十疋走追ける間、阿難鉢を地に棄て、這々歸給しかば、其日も梨軍支餓にけり。第六日に、目連尊者梨軍支が爲に食を乞て歸給に、金翅鳥空中より飛下て、其鉢を取て大海に浮ければ、其日も梨軍支餓にけり。第七日に、舍利弗又食を乞て、梨軍支が爲に持て行給に、門戸皆堅く鎖して不レ開。舍利弗以二神力一其門戸を開て內へ入給へば、俄に地裂て、御鉢金輪際へ落にけり。

婆羅門―天竺四種族中の一貴族也
酥蜜―酥は牛羊の乳酪蜜は蜂の蜜也

り、漁父は釋氏の刹利種となり、多舌魚は今返忠の大臣となりて、摩竭陀國を滅ける。又舍衞國に、一人の婆羅門あり。其妻一人の男を産り。名をば梨軍支とぞ號しける。貌醜く舌強くして、母の乳をのまする事を不得、僅に酥蜜と云物を指に塗、舐せてぞ命を活たりける。梨軍支年長じて、家貧く食に飢たり。爰に諸の佛弟子達、城に入て食を乞給ふが、悉鉢に滿て歸給を見て、さらば我も沙門と成て、食に飽ばやと思ければ、佛の御前に詣でて、出家の志ある由を申に、佛其志を隨喜し給て、善來比丘於我法中快修梵行得盡苦際と宣へば、鬚髮自落て、沙門の形に成にけり。角て精勤修習せしかば、軈阿羅漢果をぞ得たりける。さても尚貧窮なる事は不替、長時に鉢を空くしければ、佛弟子達是を憐て、梨軍支比丘に宣けるは、寶塔の中に入て坐せよ。參詣の人の奉んずる佛供を請て食んに、不足あらじとぞ教られける。梨軍支悅て、塔の中に入て眠居たる其間に、參詣の人佛供を奉たれ共、更に是を不知。時に舍利弗五百人の弟子を引て、他邦より來て、佛塔の中を見給ふに、參詣の人の奉る佛供あり。是を拂集て、乞丐人に與へ給ふ。其後梨軍支眠覺て、食せんとするに物なし。足摺をしてぞ悲ける。舍利弗是を見給て、汝強に勿愁事、我今日汝を具して城に入り、

摩羯魚—鯨鯢なりといふ

是を隠弊せんに、などか不レ助やと思召て、鐵鉢の中に此五百人を隠入て、忉利天にぞ被レ置ける、摩竭陀國の軍はてゝ、瑠璃王の兵共皆本國に歸ければ、今は仔細非じとて、目連神力の御手を暢て、忉利天に置れたる鉢を仰けて御覽ずるに、以二神通一被レ隠五百人の刹利種、一人も不レ殘死けり。目連悲て、其故を佛に問ひ奉る。佛答て宣く、是皆過去の因果也。爭か助る事を得ん。其故は、往昔に天下三年旱して、無熱池の水乾けり。此池に摩羯魚とて、尾首五十丈の魚あり。又多舌魚とて、如レ人言ふ魚あり。此に數萬人の漁父共集て、水をかへ盡し、池を旱て魚を捕んとするに、魚更になし。漁父共求るに無レ力、空く歸んとしける處に、多舌魚岩穴の中より這出て、漁父共に向て申けるは、摩羯魚は此池の艮の角に、大なる岩穴を掘て、水を湛へ、無量の小魚共を伴ひて隠居たり。早く其岩を引除て、隠居たる摩羯魚を可レ殺。加樣に告知せたる報謝に、汝等我命を助よと、委く是を語て、多舌魚は岩穴の中へぞ入にける。漁父共大に悦て、件の岩を掘起して見に、摩竭魚を始として、五丈六丈ある大魚共、其數を不レ知集居たり。少水に吻く魚共なれば、何にか可二逃去一なれば、不レ殘漁父に被レ殺、多舌魚計を生たりけり。されば此漁父と魚と諸共に生を替て後、摩羯魚は瑠璃太子の兵共と成

刹利種—天竺にて王の種族をいふ也

ば、我年長せば、必釋氏を滅して、此恥を可レ濯と、深く惡念をぞ被レ起ける。さて二十餘年を經て後、瑠璃太子長となり、淨飯王は崩御成しかば、瑠璃太子三百萬騎の勢を率して、摩竭陀國の城へ寄給ふ。摩竭陀國は大國たりといへども、俄の事なれば、兵未國々より馳參らで、王宮已に被レ攻落べく見えける處に、釋氏の刹利種に、强弓共數百人有て、十町二十町を射越ける間、寄手曾不レ近附得、山に上り河を隔て、徒に日をぞ送ける。斯る處に釋氏の中より、時の大臣なりける人一人、寄手の方へ返忠をぞ申けるは、釋氏の刹利種は、五戒を持たる故に、曾人を殺す事をせず、縱弓强して遠矢を射るとも、人に射あつる事は不レ可レ有、唯寄よとぞ敎ける。寄手大に悅て、今は楯をも不レ突、鎧をも不レ著、鬨の聲を作かけて寄けるに、げにも釋氏共の射る矢、更に人に不レ中、鋒を使ひ劒を拔ても、人を斬事無りければ、摩竭陀國の王宮忽に被レ攻落、釋氏の刹利種、悉一日が中に滅んとす。此時佛弟子目連尊者、釋氏の無レ殘所レ討れなんとするを悲て、釋尊の御所に參て、釋氏已に瑠璃王の爲に被レ亡て、僅に五百人殘れり。世尊何ぞ以二大神通力一、五百人の刹利種を不二助給一やと被レ申ければ、釋尊、止々、因果の所レ感、佛力にも叵レ轉とぞ宣ける。目連尊者尙も不レ堪レ悲、縱定業也共、以二通力一

學匠―學問を以て人の師たるに足るもの

菩提子の念珠―菩提樹の實にて作れる念珠也

天下の人を安からしめんと思召し、臣も無レ私君の非を諫申人あらば、是程に拂棄つる武家の世を、宮方に拾て不レ取や。か程に安き世を不二取得一、三十餘年まで、南山の谷の底に、埋木の花咲く春を知ぬ樣にて御座を以て、宮方の政道をば思ひ遣せ給へと、爪彈をしてぞ語ける。兩人の物語、げにもと聞居て耳を澄す處に、又是は內典の學匠にてぞある覽と見えつる法師、熟々と聞て、帽子を押除、菩提子の念珠爪繰て申けるは、倩天下の亂を案ずるに、公家の御咎共、武家の僻事とも難レ申。唯因果の所レ感とこそ存候へ。其故は佛に無二妄語一と申せば、仰で誰か信を取らで候べき。佛說の所レ述を見るに、增一阿含經に、昔天竺に波斯匿王と申ける小國の王、淨飯王の聟に成んと請ふ。淨飯王御心には嫌はしく乍二思召一、辭するに詞や無りけん、召仕はれける夫人の中に、貌形無二殊類一勝たるを選で、是を第三の姬宮と名附給て、波斯匿王の后にぞ被レ成ける。軈此后の御腹に、一人の皇子出來させ給ふ。是を瑠璃太子とぞ申ける。七歲に成せ給ける年、淨飯王の城へ坐して遊ばれけるが、淨飯王の同床にぞ坐し給たりける。釋氏の諸王大臣是を見て、瑠璃太子は、是實の御孫には非、何故にか大王と同位に坐し給べきとて、則玉の床の上より追下し奉る。瑠璃太子少き心にも、不レ安事に思召けれ

三族の刑―父の族母の族兄弟の族までも罪する刑

と思召て、密に又官庫を開せ、記録を御覽ずるに、天寶十年三月に、弘農楊玄琰女爲寧王之夫人。天子聞容色之媚、漫遣高將軍奪容後宮。時太史官記之留史書云々。竊達天覽之日、天子忿之、被誅史官訖とぞ、記たりける。玄宗彌逆鱗有て、又此史官を召出して、則車裂にぞせられける。斯ては太史の官に成者非じと覺たる處に、又魯國より儒者一人來て、史官を望ける間、軈て左太史に被成。是が註す處を又召出て御覽ずるに、天寶年末、泰階平安而四海無事也。政行漸懈、遊歡益甚。君王重色、奪寧王之夫人。史官記之、或被誅、或被車裂。臣苟爲正其非、以死居史職。後來史官縱賜死、續以萬死、爲史官者、不可不記之とぞ記たりける。己が命を輕ずるのみに非ず、後の史官に至まで、縱萬人死する共、不記有べからずと、三族の刑をも不恐、註留し左太史が忠心の程こそ難有けれ。玄宗此時自の非を知召、臣の忠義を叡感有て、其後よりは史官を不被誅、却て大祿をぞ賜ける。人として死不痛云事なければ、三人の史官、全く誅を非不悲、若恐天威不註君非、叡慮無所憚、惡き御擧動尚有ぬと思し間、死罪に被行をも不顧、是を註留ける太史官の心の中、想像こそ難有けれ。國有諫臣、其國必安、家有諫子、其家必正。されば如斯、君も誠に

銀漢—天の川
長時に—間斷なしに

ける。寧王無レ限無二本意一事に思召けれ共、御弟ながら、時の天子として振舞せ給事なれば、不レ及レ力。寧王も同内裏の内に御座有ければ、御遊などのある度毎に、玉の几帳の外、金鷄障の隙より、楊貴妃の容を御覽ずるに、一度笑める眸には、金谷千樹の花薫を恥て、四方の嵐に誘引れ、夙に見たる容貌は、銀漢萬里の月粧を妬て、五更の霧に可レ沈。雲居遙に鳴雷の、中を裂ずば、何故か外には人を水の泡の、哀とは思消べきと、寧王思に堪兼て、伏沈み歎かせ給ける御心の中こそ哀なれ。天子の御傍には、太史の官とて、八人の臣下、長時に伺候して、君の御擧動を、就二善惡一註し留め、官庫に藏る習也。此記錄をば天子も不レ被二御覽一、かたへの人にも不レ見、唯史書に書置て、前王の是非を後王の誡に備る者也。玄宗皇帝今寧王の夫人を奪取給へる事、何樣史書に被レ註ぬと思召ければ、密に官庫を開せて、太史の官が註す所を御覽ずるに、果して此事を有の儘に註附たり。玄宗大に逆鱗あつて、此記錄を引破て被レ捨、史官をば召出して、則首をば被レ刎ける。其より後太史の官闕て、此職に居る人無りければ、天子非を犯させ給へども、敢て憚る方も不二御座一。爰に魯國に一人の才人あり。宮闕に參て、太史の官を望ける間、則左太史に成て、天子の傍に愼隨ふ。玄宗又此左太史も楊貴妃の事をや記し置たるらん

上は、大王戎に向て和を請ふ事御座すべからずと申けるを、大王、いや〳〵我國を惜く思ふは、人民を養はんが爲計也。我若彼と戰はゞ、若干の人民を殺すべし。其を爲レ養地を惜て、可レ養民を失ん事、何の益か有べき。又不レ知隣國の戎共、若我より政道よくば、是民の悦たるべし。何ぞ強に以レ我主とせんやとて、大王豳の地を戎に與へ、岐山の麓へ逃去て、悠然として居給ける。豳の地の人民、斯る難レ有賢人を失て、豈禮義をも不レ知、仁義もなき戎に從ふべしやとて、子弟老若引連て、同く岐山の麓に來て、大王に附從しかば、戎は己と皆亡はてゝ、大王の子孫遂に天下の主と成給ふ。周文王武王是也。又忠臣の君を諫め、世を扶けんとする行跡を聞に、皆今の朝廷の臣に不レ似。唐玄宗は兄弟二人坐しけり。兄の宮をは寧王と申し、御弟をば玄宗とぞ申ける。玄宗位に卽せ給て、好色の御心深りければ、天下に勅を下て、容色如レ華なる美人を求給しに、後宮三千人の顏色我も〳〵と金翠を餝しかども、天子再と御眸を不レ被レ廻。爰に弘農の楊玄琰が娘に、楊貴妃と云美人あり。養れて在ニ深窓一人未レ知レ之、天の生せる麗質なれば、更に人間の類とは不レ見けり。或人是を媒して、寧王の宮に進せけるを、玄宗聞召て、高力士と云將軍を差遣し、道より是を奪取て、後宮へぞ冊入奉

見られずの云々—延喜式の本文を頑固に守り居る律義者の見苦しさよといふ意

重二重一—五十歩百歩といふに同じく同じ事といふ意なるが如し

爲レ體皆是を肝要とす。我こそ悪からめ。些禮義をも振舞、極信をも立る人をば、あら見られずの延喜式や、あら氣詰の色代やとて、目を引、仰に倒笑ひ、輕謾す。是は唯一の直なる猿が、九の鼻缺猿に笑れて、逃去けるに不レ異。又佛神領に天役課役を懸て、神慮冥慮に背かん事を不レ痛、又寺道場に懸二要脚一、僧物施料を貪る事を業とす。是併上方御存知なしといへども、責一人に歸する謂もあるか。斯ては抑世の治ると云事の候べきか。せめては宮方にこそ、君も久く艱苦を嘗て、民の愁を知召候。臣下もさすが智慧ある人多く候なれば、世を可レ被レ治器用も御渡候覽と、心にくゝ存候へと申せば、鬢帽子したる雲客、打ほゝ笑て、何をか心にくゝ思召候覽。宮方の政道も、唯是と重二重一にて候者を。某も今年の春まで南方に伺候して候しが、天下を覆さん事も、守文の道も叶まじき程を、至極見透して、さらば道廣く成て、遁世をも仕らばやと存じて、京へ罷出て候際、宮方の心にくき所は、露許も候はず。先以レ古思候に、昔周大王と申ける人、豳と云所に御座けるを、隣國の戎共起て討んとしける間、大王牛馬珠玉等の賓を贈て禮を成けれ共尚不レ止、早く國を去て不レ出、以二大勢一可レ攻由をぞ申ける。萬民百姓是を忿て、其儀ならば、よしや我等身命を捨て防ぎ戰んずる

平氏相州｜北條氏代々相摸守なりし故に云ふ

難じて笑つる傍の人々、舌を掉てぞ感じける。加樣に無﹂私處神慮にや通じけん、或時相摸守鶴岡の八幡宮に通夜し給ける曉、夢に衣冠正しくしたる老翁一人枕に立て、政道を直くして、世を久く保たんと思はゞ、心私なく理に不﹂暗青砥左衞門を賞翫すべしと、慥に被﹂示と覺て、夢忽に覺てけり。相摸守夙に歸て、近國の大庄八箇所、自筆に補任を書て、青砥左衞門にぞ賜たりける。青砥左衞門補任を啓き見て、大に驚て、是は今何事に三萬貫に及ぶ大庄賜り候やらんと問奉ければ、夢想に依て先且充行也と答給ふ。青砥左衞門顏を掉て、さては一所をもえこそ賜り候まじけれ。且は御意の通も歎入て存候。物の定相なき喩にも、如夢幻泡影如露亦如電とこそ金剛經にも說れて候へ、若某が首を刎よと云夢を被﹂御覽﹂候はゞ、無﹂咎共如﹂夢被﹂行候はんずる歟。報國の忠薄して、超涯の賞を蒙らん事、是に過たる國賊や候べきとて、則補任をぞ還し進せける。自餘の奉行共か加樣の事を聞て、己を恥し間、是までの賢才は無りしか共、聊も背﹂理耽﹂賄賂﹂事をせず。是以平氏相州八代まで、天下を保し者也。夫政道の爲に怨なる者は、無禮、不忠、邪欲、功誇、大酒、遊宴、拔折雜、傾城、雙六博奕、剛緣、內奏、さては不直の奉行也。治りし世には是を以て誡とせしに、今の代の

地下の公文―平人の文書を掌る所の役人

して、所帶に安堵したりけるが、其恩を報ぜんとや思けん、錢を三百貫俵に裹て、後の山より、潛に青砥左衞門が坪の內へぞ入たりける。青砥左衞門是を見て大に忿り、沙汰の理非を申つるは、相摸殿を奉レ思故也。全く地下の公文を引に非ず。若引出物を取べくは、上の御惡名を申留ぬれば、相摸殿よりこそ、悅をばし給ふべけれ。沙汰に勝たる公文が、引出物をすべき樣なしとて、一錢をも遂に不レ用、遙に遠き田舍まで、持送せてぞ返ける。又或時此青砥左衞門夜に入て出仕しけるに、いつも燧袋に入て持たる錢を、十文取はづして、滑河へぞ落し入たりけるを、少事の物なれば、よしさてもあれかしとてこそ行過べかりしが、以外に周章て、其邊の町屋へ人を走らかし、錢五十文を以て、續松を十把買て、則是を燃して、遂に十文の錢をぞ求得たりける。後日に是を聞て、十文の錢を求めんとて、五十にて續松を買て燃したるは、小利大損哉と笑ければ、青砥左衞門眉を顰て、さればこそ御邊達は愚にて、世の費をも不レ知、民を惠む心なき人なれ。錢十文は唯今不レ求ば、滑河の底に沈て、永く失ぬべし。某が續松を買せつる五十の錢は、商人の家に留て、永不レ可レ失。我損は商人の利也。彼と我と何の差別かある。彼此六十文の錢一をも不レ失、豈天下の利に非ずやと、爪彈をして申ければ、

報光寺最勝園寺―時宗及貞時

引附―引附衆の事にて政所に出仕して日記を記し例證等を書留むる役

徳宗領―北條家の家督たるものゝ所領

像だに憂物を、深山路に行暮ては、苔の筵に露を敷き、遠き野原を分佗ては、草の枕に霜を結ぶ。喚渡口船立、失山頭路歸、煙蓑雨笠、破草鞋の底、都て故郷を思ふ愁ならずと云事なし。豈天下の主として、身富貴に居する人、好で諸國を可修行哉。唯身安く樂に誇ては、世難治事を知る故に、三年の間唯一人、山川を抖擻し給ける心の程こそ難有けれと、感ぜぬ人も無りけり。又報光寺最勝園寺二代の相州に仕て、引附の人數に列ける青砥左衞門と云者あり。數十箇所の所領を知行して、財寶豐なりけれ共、衣裳には細布の直垂、布の大口、飯の菜には燒たる鹽、干たる魚一つより外はせざりけり。出仕の時は、木鞘卷の刀を差し、木太刀を持せけるが、叙爵の後は、此太刀に弦袋をぞ附たりける。加樣に我身の爲には、聊も過差なる事をせずして、公方の事には千金萬玉をも不惜、又飢たる乞食、疲たる訴訟人などを見ては、分に隨ひ品に依て、米錢絹布の類を與ければ、佛菩薩の悲願に均き慈悲にてぞ有ける。或時徳宗領に沙汰出來て、地下の公文と、相摸守と訴陣に番事あり。理非懸隔して、公文が申處道理なりけれども、奉行頭人評定衆、皆徳宗領に憚て、公文を負けるを、青砥左衞門唯一人、權門にも不恐、理の當る處を具に申立て、遂に相摸守をぞ負ける。公文不慮に得利

棲堺—貴顯紳士の住處

昔びれて—昔ぶつて

委く註し附られしかば、善人には賞を與へ、惡者には罰を加られける事、不レ可ニ勝計一。されば國には守護國司、所には地頭領家、有レ威不レ驕、隱ても僻事をせず、世歸ニ淳素一、民の家々豐也。後の最勝園寺貞時も、追ニ先蹤一又修行し給しに、其比久我内大臣、仙洞の叡慮に違ひ給て、領家悉被ニ沒收一給しかば、城南の茅宮に、閑寂を耕てぞ隱居し給ける。貞時抖擻の次に、彼故宮の有樣を見給て、如何なる人の棲堺にてかあるらんと、事問給處に、諸大夫と覺しき人立出て、しかじかとぞ答ける。貞時具に聞て、御罪科指たる事にても候はず、其上大家の一跡、此時斷亡せん事無ニ勿體一候。など關東樣へは御歎候はぬやらんと、此修行者申ければ、諸大夫、さ候へばこそ、此御所の御樣昔びれて、加樣の事申せば、云事や可レ有。我身の無レ咎由に、關東へ歎かば、仙洞の御誤を擧るに似たり。縱一家此時亡ぶ共、爭か臣として君の非をば可ニ擧奏一。無レ力時刻到來、歎かぬ所ぞと被レ仰候間、御家門の滅亡、此時にて候と語ければ、修行者感淚を抑て立歸にけり。誰と云事を不レ知、關東歸居の後、最前に此事を有の儘に被レ申しかば、仙洞大に有ニ御耻一、久我舊領悉早速に被ニ還附一けり。さてこそ此修行者をば貞時と被レ知けれ。一日二日の程なれど、旅に過たる哀はなし。況乎煙霞萬里の道の末、想

物領—此處は嫡子の義に非ず惣文配者の事也

角云佗て留りぬ。旅寢の床に秋深て、浦風寒く成儘に、折燒葦の通夜、臥佗てこそ明しけれ。朝に成ぬれば、主の尼公手づから飯匙取音して、椎の葉折敷たる上に、餉盛て持出來たり。甲斐々々敷は見えながら、斯る業なんどに馴たる人共見えねば、不審く覺て、などや御内に被召仕人は候はぬやらんと問給へば、尼公泣々、さ候へばこそ、我は親の讓を得て、此所の一分の領主にて候しが、夫にも後れ、子にも別て、便なき身と成はて候し後、惣領某と申者、關東奉公の權威を以て、重代相傳の所帶を押取て候へども、京鎌倉に參て可訴訟申代官も候はねば、此二十餘年貧窮孤獨の身と成て、麻の衣の淺ましく、垣面の柴のしば／＼も、ながらふべき心地侍らねば、袖のみ濡る露の身の、消ぬ程とて世を渡る。朝食の煙の心細さ、唯推量り給へと、委く是を語て、涙にのみぞ咽ける。抖擻の聖熟々と是を聞て、餘に哀に覺て、笈の中より小硯取出し、卓の上に立たりける位牌の裏に、一首の歌をぞ被書ける。

　難波潟鹽干に遠き月影の、又元の江にすまざらめやは。

禪門諸國抖擻畢て、鎌倉に歸給ふと均く、此位牌を召出し、押領せし地頭が所帶を沒收して、尼公が本領の上に添てぞ是を賜たりける。此外到る所ごとに、人の善惡を尋聞て、

品物といふこと也

物共も、古物を用ひ、衣裳も新きをば不ㇾ著、烏帽子をだに古きをつくろはせて著し給ふ。夜は燈なく、晝は一食を止、酒宴遊覧の儀なくして、此費を補給けり。仍一度食するに、士來れば不ㇾ終に急ぎ是にあひ、一たび梳にも、訴來れば先是をきく。一寢一休是を不ㇾ安して、人の愁を懷て待んことを恐る。進では萬人を撫ん事を計り、退ては一身に失あらん事を恥。然るに太守逝去の後、背ニ父母ニ失ニ兄弟ニとする訴論出來て、人倫の孝行日に添て衰へ、年に隨てぞ廢たる。一人正けれぱ、萬人夫に隨事分明也。然る間猶も遠國の守護、國司、地頭、御家人、如何なる無道猛惡の者有てか、人の所領を押領し、人民百姓を惱すらん。自諸國を巡て、是を不ㇾ聞ば叶まじとて、最明寺時頼禪門、密に貌を窶して、六十餘州を修行し給に、或時攝津國難波浦に行到ぬ。鹽汲海士の業共を見給に、身を安しては一日も叶まじき理を彌感じて、既に日暮ければ、荒たる家の垣門まばらに軒傾て、時雨も月もさこそ漏らめと見えたるに立寄て、宿を借給けるに、内より年老たる尼公一人出て宿を可ㇾ奉ㇾ借事は易けれ共、藻鹽草ならでは敷物もなく、礒菜より外は可ㇾ進物も侍らねば、中々宿を借奉ても甲斐なしと侘けるを、さりとては日もはや暮はてぬ。又可ㇾ問里も遠ければ、枉て一夜を明し侍んと、兎

讓をばし給はざるらんと推量して、弟の朝時重時以下に、宗徒の所領を與て、泰時は三四番目の末子の分限程少く取られけれ共、今までは聊不足なる事なし。如此萬小欲に振舞故にや 天下隨日治り、諸國逐年豐也き。此太守の前に、訴訟の人來れば、つくゞと兩人の顔を守て云く、泰時天下の政を司て、人の心に無奸曲事を存ず。然れば廉直の中に無論。一方は定て奸曲なるべし。何の日兩方證文を持て來べし。奸謀の人に於ては、忽に罪科に可申行。奸智の者一人國にあれば、萬人の禍と成。天下の敵何事か如之。疾々可歸給とて被立けり。此體を見るに、僻事あらば、軈いかなる目にも可被遭とて、各歸て後、兩方談合して、或は和談し、或は僻事の方は私に負て論所を去渡ける。凡無欲なる人をば賞し、欲深き者をば恥しめ給しかば、人の物を掠取んとする者は無りけり。されば寛喜元年に、天下飢饉の時借書を調へ、判形を加て、富祐の者の米を借に、泰時法を被置けるは、來年世立直らは、本物計を借主に可返納。利分は我添て返すべしと被定て、面々の狀を被取置けり。所領をも持たる人には、約束の本物を還させ、自我方添利分、慥に返し遣されけり。貧者には皆免して、我領内の米にてぞ、主には慥に被返ける。左樣の年は、家中に每事行儉約、一切の質

借主―貸主也

質物―單に

其身直にして云々―貞觀政要に出づ

源を能く知て、可㆓治給㆒。亂世の根源は、唯欲を爲㆑本。欲心變じて一切萬般の禍と成ると宣へば、泰時云、我雖㆑存㆓此旨㆒人々無欲に成ん事難しと宣へば、上人云、太守一人無欲にならん事を思給はゞ、其に恥て萬人自然に欲心薄く成べし。人の欲心深く訴來らば、我欲の直らぬ故ぞと、我を恥しめ可㆑給。古人云、其身直にして影不㆑曲。其政正して國亂るゝ事なしと云々。又云、君子居㆓其室㆒、出㆓其言㆒善、則千里之外皆應㆑之。善と云は無欲也。傳聞周文王の時、一國の民畔を讓るも、文王一人の德諸國に及故、萬人皆やさしき心に成し也。畔を讓ると云は、我田の境をば人の方へは讓與れども、假にも人の地をして掠取事はなかりけり。今程の人の心には違たり、かりにも人の物をば掠取共、我物を人に遣事不㆑可㆑有。其比他國より爲㆓訴訟㆒此周國を通るとて、此有樣を道畔にて見て、我欲の深事を恥て、路より歸けり。されば此文王我國を治るのみならず、他國まで德を施すも、唯此一人の無欲に依てなり。剰へ此德滿て、天下を一統して取、百年の齡を保き。太守一人小欲に成給はゞ、天下皆かゝるべしと宣ければ、泰時深く信じて、父義時朝臣の頓死して、讓狀の無りし時、倩義時の心を思に、我よりも弟をば鍾愛せられしかば、父の心には、彼者にぞ取せ度思給て、

武藏前司入道―泰時

大田文―全國の田地の目錄也

明慧上人―名は高辨、平重國の子也、元亨釋書に詳しく出づ

を立て、大極殿にして佛名懺悔法を可レ修と被レ仰たりける時、獄卒叉鋒に指貫き、焔の底へ投入る。上人泣々歸給時、金剛藏王の宣く、汝に六道を見する事、延喜帝の有樣を爲レ令レ知也とぞ被レ仰ける。彼帝は隨分愍レ民治レ世給しだに、地獄に墮給ふ。増て其程の政道もなき世なれば、さこそ地獄へ墮る人の多かるらめと覺たり。又承久より已降、武家代々天下を治し事は、評定の末席に列て、承レ置し事なれば、少々耳に留る事も侍るやらん。夫天下久く武家の世と成しかば、尺地も其有に非と云事なく、一家も其民に非と云所無りしか共、武威を專にせざるに依て、地頭敢て領家を不レ侮、守護曾て檢斷の外に不レ綺。斯りしか共、尙成敗を正くせん爲に、貞應に武藏前司入道、日本國の大田文を作て、庄郷を分て、貞永に五十一箇條の式目を定て、裁許に不レ滯。されば上敢て不レ破レ法、下叉不レ犯レ禁、世治り民直なりしか共、我朝は神國の權柄武士の手に入、王道仁政の裁斷、夷狄の眸に懸しを社歎きしか。されども上代には世を治んと思ふ志深かりけるにや、泰時朝臣在京の時、明慧上人に相看して、法談の次に仰られけるは、如何してか天下を治め、人民を安じ候べきと被レ申ければ、上人宣く、良醫能く脈を取て、其病の根源を知て、藥を與へ灸を加れば、病自ら愈る樣に、國を亂る

業果法然の理―因果自然の理といふに同じ

ば、忝も延喜帝にてぞ御座ける。不思議やと思て、立寄て事の樣を問へば、獄卒答て曰、一人は是延喜帝、殘は臣下也とて、鋒に刺貫て、焔の中へ投入奉ける有樣、業果法然の理とは云ながら、餘に心憂ぞ覺ける。良暫有て、上人、さりとては、延喜帝に少の御暇を奉ㇾ宥、今一度拜二龍顏一本國へ歸らんと、泣々宣ければ、一人の獄卒是を聞て、いたはしげもなく、鐵の鋒に貫て、焔の中より差出し、十丈許差上て、熱鐵の地の上へ打つけ奉る。燒炭の如なる御貌、散々に打碎れて、其御形共見え給はず。鬼共又走寄て、以ㇾ足一所にけあつむる樣にして、活々と云ければ、帝の御姿顯れ給ふ。上人畏て唯涙に咽給ふ。帝の宣く、汝我を敬事なかれ。冥途には罪業無を以て主とす。然れば貴賤上下を論ずる事なし。我は五種の罪に依て、此地獄に墮たり。一には父寬平法皇の御命を背き奉り、久く庭上に見下し奉りし咎。二には依二讒言一無咎才人を流罪したりし報。三には自の怨敵と號して、他の衆生を損害せし咎。四には月中の齋日に、本尊を不ㇾ開咎。五には日本の王法をいみじき事に思て、人間に著心の深かりし咎。此五を爲二根本一自餘の罪業無量也。故に受ㇾ苦事無盡也。願は上人爲ㇾ我善根を修してたび給へと宣ふ。可ㇾ修由應諾申す。然らば諸國七道に、一萬本の卒都婆

湯武は云々—湯武は誤にて唯湯王とあるべく桃林は桑林とあるべし事は綱鑑紀要に詳し
太宗は云々—此は貞觀政要農務篇に出づ

は以民爲體、民は以食爲命。夫穀盡ぬれば民窮し、民窮しぬれば年貢を備る事なし。疲馬の鞭を如不恐、王化をも不恐、利潤を先として、常に非法を行ふ。民の誤る處は吏の科也。吏の不善は、國王に歸す。君良臣を不選、貪利輩を用れば、暴惡を恣にして、百姓を虐れば、民の憂天に昇て災變をなす。災變起れば國土亂る。是上不愼下侮る故也。國土若亂れば、君何ぞ安からん。百姓荼毒して、四海逆浪をなす。されば湯武は火に投身、桃林の社に祭り、太宗は呑蝗、命を閭閻の間に任す。己を責て天意に叶、撫民地聲を顧給へと也。則知ぬ王者憂樂は衆と同かりけりと云事を、白樂天も書置侍りき。されば延喜帝は寒夜に御衣をぬがれ、民の苦を憐み給しだに、正く地獄に落給けるを、笙岩屋の日藏上人は見給けるとこそ承れ。彼上人承平四年八月一日午時頓死して、十三日ぞ御座ける。其程夢にも非ず、幻にも非ず、金剛藏王の善功力便にて、三界流轉の間、六道四生の栖を見給けるに、等活地獄の別處、鐵崛地獄とてあり。火焰うづまき、黑雲空に掩へり。鐵の嘴ある鳥飛來て、罪人の眼をつゝきぬく。又鐵の牙ある犬吠來て、罪人の腦を吸啜ふ。獄卒眼を怒して、聲を震事雷の如し。狼虎罪人の肉を裂、利劍足の蹈所なし。其中に燒炭の如なる罪人四人在。叫喚する聲を聞

戰國の七雄―魏韓趙楚燕齊並に秦の七國をいふ

定衆なみに列て、武家の世の治りたりし事、昔をもさぞ忍覧と覺て、坂東聲なるが、年の程六十許なる遁世者也。一人は今朝廷に仕へながら、家貧く豐ならで、出仕なんどをもせず、徒なる儘に、何となく學窻の雪に向て、外典の書に心をぞ慰む覽と覺て、體縟に色靑醒たる雲客也。一人は何がしの律師僧都なんど云はれて、門跡邊に伺候し、顯密の法燈を挑げんと、稽古の樞を閉ぢ、玉泉の流に心を澄すらんと覺たるが、細く疲たる法師也。初に天滿天神の文字を、句毎の首に置て、連歌をしけるが、後には異國本朝の物語に成て、現にもと覺る事共多かり。先儒業の人かと見つる雲客、さても史書の所レ載、世の治亂を勘るに、戰國の七雄も、終に秦の政に被レ幷。漢楚七十餘度の戰も、八箇年の後、世漢に定れり。我朝にも、貞任宗任が合戰、先九年後三年の軍、源平の爭三箇年、此外も久して一兩年を不レ過。抑元弘より以來、天下大に亂て三十餘年、一日も未靜なる事を不レ得。今より後も、いつ可レ鎭期共不レ覺。是はそも何故とか御料簡候といへば、坂東聲なる遁世者、數珠高らかに繰鳴し、無レ所レ憚申けるは、世の治らぬこそ道理にて候へ。異國本朝の事は、御存知の前にて候へば、中々申に不レ及候へども、昔は民苦を問使とて、勅使を國々へ下されて、民の苦を問給ふ。其故は、君

> 脣竭て齒寒―左傳五卷に見ゆ、隣國亡ぶる時は己の國も危きに喩ふ
>
> 魯酒薄して云々―楚宣王の故事にて莊子に詳し

も被レ寄ぬと推量して、城を構へ鏃を磨て、可レ防用意をせられけるが、都に不慮の軍出來て、仁木右京大夫宮方になり、和田楠又打出たりと聞えければ、伊豆守聽て機に乘て、其勢三千餘騎を率し、二手に分て、因幡美作兩國の間に、勢を分てぞ置たりける。赤松筑前入道世貞、同律師則祐が、所々の城を攻るに、草木、揉尾、景石、塔尾、新宮、神樂尾城共、一怺もせず、或は敵に成て、却て御方を攻め、或は行方を不レ知落失ぬ。脣竭て齒寒、魯酒薄して邯鄲圍るとは、加樣の事をや申べき。

○北野通夜物語事 附青砥左衞門事

其比日野僧正頼意、偸に吉野の山中を出て、聊宿願の事有ければ、靈驗の新なる事を憑奉り、北野の聖廟に通夜し侍しに、秋も半過て、杉の梢の風の音も冷く成ぬれば、晨朝の月の松より西に傾き、閑庭の霜に映ぜる影、常よりも神寂て、物哀なるに、卷殘せる御經を手に持ながら、燈を挑げ、壁に寄傍て、折に觸たる古き歌なぞ詠じつゝ、嘯居たる處に、是も秋の哀に被レ催て、月に心のあこがれたる人よと覺くて、南殿の高欄に寄懸て、三人並居たる人あり。如何なる人やらんと見れば、一人は古へ關東の頭人評

と源氏の仁木とを兼ぬ

鴨頭—柚子の皮など吸物の香味とせる物、字義は水に浮ぶに擬していへる也、鴨の音はもとアフ

ん。

畠山狐の皮の腰當に、ばけの程こそあらはれにけれ。

又湯河庄司が宿の前に、作者芋瀬庄司と書て、

宮方の鴨頭になりし湯川は、都に入りて何の香もせず。

今度の亂は、併畠山入道の所行也と、落書にもし、歌にも詠、湯屋風呂の女童部までも、もてあつかひければ、畠山面目なくや思けん、暫虛病して居たりけるが、如レ斯にては、天下の禍何樣我身一人に係りぬと思ければ、將軍に暇をも申さで、八月四日の夜、密に京都を逃出て、關東を差てぞ下ける。參河國は、仁木右京大夫多年管領の國也ければ、守護代西鄕彈正左衞門尉、五百餘騎にて、矢矧に出張して、道を差塞ぎける間不二通得一、路次に日數をぞ送ける。如レ斯何までか中途に浮れて可レ有、中山道を經てや下る、京へや引返すと、案じ煩ける處に、小川中務仁木に同心して、尾張國にて旗を揚る間、關東下向の勢、畠山を始として、白旗一揆、平一揆、佐竹、宇都宮に至まで、前後の敵に被二取籠一、前へも不レ通、後へも不二歸得一、忙然としてぞ居たりける。山名伊豆守は、東國勢既に南方を退治して、都へ歸ぬと聞えしかば、始は何樣此次に我方へ

鷸蚌云々―戰國策に見えたる故事に據る

味噌になす―味噌をつけると同意

源氏の日記―源氏物語

方の落行をも不レ知、與力同心の兵集て三百餘人、紀伊國春日山城に楯籠り、二引兩の旗を一旒打立て居たりけるを、恩地、牲河、三千七百餘騎の勢にて押寄、城の四方を取卷て、一人も不レ餘討にけり。熊野には湯河庄司、將軍方に成て、鹿瀨蕪坂の後に陣を取り、阿瀨河入道定佛が城を攻んとしけるを、阿瀨河入道、山本判官、田邊別當、二千餘騎にて押寄せ、四角八方へ追散し、三百三十三人が首を取て、田邊宿にぞ懸たりける。鷸蚌相挾則烏乘二其弊一とは、加樣の時をや申べき。都には、仁木右京大夫落たりと、悅ばぬ人も無りけれ共、畿內遠國の御敵は、是に時を得て、蜂起すと聞えければ、すはや世は又大亂と成ぬるはと、私語かぬ人も無りけり。其比如何なる者の業にや、五條の橋詰に、高札を立て、二首の歌を書附たり。

　御敵の種を蒔おく畠山、打かへすべき世とはしらずや。

　何程の豆をまきてか畠山、日本國をば味噌になすらん。

又是は仁木を引人の業かと覺て、一首の歌を、六角堂の門の扉に書附たり。

　いしかりし源氏の日記失て、伊勢物語せぬ人もなし。

畠山入道、其比常に狐の皮の腰當をして、人に對面しけるを、惡しと見る人や讀たりけ

落す。我身は近江路へ懸る由をして、粟田口より引違へ、木津河に添、伊賀路を經て、伊勢國へぞ落たりける。義長勢盡て、都を落ぬと聞えしかば、中將殿も軈て都へ歸入給ひ、寄手共も、今度の軍は定て手痛からんずらんと、あぐんで思けるが、案に相違して一軍もなければ、皆悦勇で、やがて京にぞ入にける。

○南方蜂起事　附畠山關東下向事

去程に京都に同士軍有て、天王寺の寄手引返すと聞えしかば、大和、河內、和泉、紀伊國の宮方時を得て、山々峯々に篝を燒、津々浦々に船を集む。是を見て京都より被レ置たる城々の兵共、寄合寄除き私語きけるは、前に日本國の勢共が集て攻し時だにも、終に退治し兼て有し和田楠也。まして我等が城に籠て、被ニ取卷一なば、一人も歸者不レ可レ有とて、先和泉の守護にて置れし細川兵部大輔、未敵の懸らぬ前に落しかば、紀伊國の城衆湯淺の一黨も、船に取乘て兵庫を差て落行。河內國の守護代、杉原周防入道は、譽田城を落て、水速城に楯籠り、爰に暫支て、京都の左右を待んとしけるが、楠大勢を以て息も不レ繼攻ける間、一日一夜戰て、南都の方へぞ落にける。根來の衆は加樣に御

上—義詮

貫—毛沓也

へらぬ體—へらず口などのへらずと同じく負惜みの樣子をいふ

達、此は如何なる御事ぞやと、周章騷で、穴不思議や、上には是には御座も候はざりけるぞやと申ければ、義長大に忿て、女房達近習の者共の、知ぬ事は有まじきぞ。四方の門をさし、人を出すなと騷動す。中務少輔は、餘に腹を立て、貫はきながら、召合の内へ走入て、屛風障子を蹈破り、日本一の云甲斐なしを憑けるこそ口惜けれ。唯今も軍に打勝ならば、又此人我等が方へ手を摺てこそ出給はんずらめと、樣々の惡口を吐散して、己が宿所へぞ歸ける。宰相中將殿の、仁木が方に御座つる程こそ、此人の難捨さに、國々の勢外樣の人々も、數多義長が手には屬從つれ、仁木を討せん爲に、中將殿落給たりと聞えければ、我も我もと百騎二百騎、打連〳〵寄手の方へ馳著ける程に、今朝まで七千餘騎と註したりし義長が勢、僅に三百餘騎に成にけり。義長は暫はへらぬ體に打笑て、よし〳〵云甲斐なからん奴原は、足纏になるに、落たるこそよけれと云けるが、是ぞ實に身に替り命に替らんずる者と憑み思たる重恩の郎從も、皆落失ぬと聞えければ、早言もなく興醒、忙然としたる氣色也。去程に夜も漸深行は、鵈目寺戸の邊に續松二三萬燃し連て、次第に寄手の近附勢見えければ、義長斯ては不叶とや思けん、舍弟彈正少弼をば、長坂を經て丹後へ落し、猶子中務少輔をば、唐櫃越を經て丹波へ

紅梅ー經は紫、緯は紅にて織りたるもの

柳裏ー表白く裏青也

常の御方ー常の御座所

て候。何へも忍ばせ進せ候べしとぞ申たりける。將軍げにもと思給ければ、風氣の事有とて、帳臺の内へ入り、夜衣引被き臥給へば、仁木中務少輔も、遠侍へ出にけり。暫有て、佐々木判官入道、百騎許にて馳來り、仁木に對面して、軍評定及二數刻一。去程に夜も痛く深ぬ。可二見咎申一人もなく成にければ、中將殿は女房の體に出立て、紅梅の小袖に、柳裏の絹打被て、海老名信濃守、吹屋清式部丞、小島次郎計を召具して、北の小門より出給へば、築地の陰に、用意の御馬に手綱打懸て引立たり。小島次郎そと寄り、搔抱き奉て、馬に打乘せ進せて、中間二人に口引せ、裝束裹持せて、四五町が程は閑々と馬を歩ませ、京中を過れば、鞭に鐙を合て、花苑、鳴瀧、雙岡、廣澤池を過て、時の間に西山の谷堂へ落給ふ。是を夢にも不レ知ける仁木右京大夫が、運の程こそ淺ましけれ。中將殿今は何へも落著せ給ぬと思ふ程に成ければ、判官入道己が宿所へとぞ歸ける。其後義長常の御方へ參て、夜明候はゞ、敵定て寄つと覺え候に、今は御旗をも被レ出候へとて參て候。軍勢共に御對面も候へかし。餘に久く御宿籠り候者哉。御風氣は何と御座候やらんと申ければ、女房達一二人御寢所に參て、此由を申さんとするに、夜衣を小袖の上に引懸て被レ置たる計にて、下に臥たる人はなし。女房

鵙目寺戸—鵙目は物集と書き乙訓郡今向日町に屬す、寺戸は物集の南にあり
もてあつかひ—取扱ふに苦むこと
無是非—無理に

騎、先山崎に打集て、二手に分つ。一方には細川相摸守を大將とし、三千餘騎、鵙目寺戸を打過て、西の七條口より寄んとす。畠山入道、土岐、佐々木を大將にて、五千餘騎久我繩手を經て、東寺口より可レ寄とぞ定ける。今年南方既に靜謐して、御敵今は近國に有共聞えねば、京中の貴賤、すは早世中心安く成ぬと悅合へる處に、又此事出來にければ、こは如何すべきと周章騷ぎ、妻子をもてあつかひ、財寶を隱し運ぶ事、道をも通り得ぬ程也。折を得て、疲勞の軍勢、猛惡の下部共、辻々に打散て、無二是非一奪取り、剝むくりければ、喚叫ぶ聲、物音も聞えず、京中唯上を下へぞ返ける。是までも猶中將殿は、仁木に被二取籠一御座けるを、佐々木判官入道、忍やかに小門より參て、如何なる事にて御座候ぞ。國々の大名、一人も不レ殘、一味同心して、失はんと謀り候。義長を、御一所して拘させ給候はゞ、可レ叶候歟。彼が擧動、佛神にも被レ放、人望にも背はてたる者にて候とは被二御覽一候はざりけるか。乍レ去君の御寵臣を、時宜をも不レ伺、左右なく討んと擬し、忽に京中に打て入、彼等が所存も、一往御怖畏なきに非ず。されば先御忍候べし。道譽唯今仁木に對面して、軍評定仕候はんずる其間に、可レ然近習の者一人被レ召具、女房の體に出立せ給て、北の小門より御出候へ。御馬を用意仕

馬の懸場―馬の馳驅する場所

已に二手に成て攻上ると告けれ共、敢て物ともせず。さもあれ當手の軍勢何程か有覽、著到を著て見よとて、國々を分て、著到を附たるに、手勢三千六百餘騎、外樣の軍勢四千餘騎とぞ註しける。義長著到を披見して、あはれ勢や、此勢七千餘騎は、天王寺の勢十萬騎にも增るべし。然ば手分をして敵を待たんとて、猶子中務少輔賴夏に二千餘騎を著て、四條大宮に控させ、舍弟彈正少弼に一千餘騎を附て、東寺の邊に陣を張らせ、我身は勝たる兵共相具して、宿所の四方四五町の程の在家を燒拂ひ、馬の懸場を廣く成て、未帷幕の中に並居たり。其勢事柄、げにも寄手縱如何なる大勢なり共、此勢に二度三度は何樣懸散されんとぞ見えたりける。宰相中將殿、若讒人の申旨に附て、細川畠山に御內通の事有なば、外樣の兵何樣貳心を仕つべく覺れば、中將殿を取籠奉て、近習の者共を、あたり近く不可寄とて、中務少輔を召具し、夜に入ば、義長二百餘騎にて、中將殿の御屋形へ參じ、四方の門を警固して、曾て御內外樣の人を不近附、每事已が所存の儘に申行ければ、天王寺下向の軍勢共は、忽に朝敵の名蒙て、追罰の綸旨、御敎書を成し、義長は武家執事の職に居て、天下の權を司る。唯五更に油乾て、燈正に欲消時、增光不異。去程に七月十六日に、天王寺の勢七千餘

天知地知我知―後漢の楊震の四知をいふ也

寺へぞ向ける。後に事の樣を案ずれば、是全く南方の蜂起を鎭ん爲にては無りけり。唯右京大夫義長を亡さんが爲に、勢を集ける企也。何とは不ㇾ知、京より又大勢下ければ、和田楠、渡邊にも不ㇾ支、譽田城をも不ㇾ攻、又金剛山の奥へ引籠る。京勢本より敵退治の爲ならねば、楠引け共續いても不ㇾ攻、勝にも不ㇾ乘、皆天王寺に集居、頭を差合せ頷て、仁木右京大夫を可ㇾ討謀をぞ運ける。唯二人して云事だにも、天知地知我知といへり。況や是程の大勢集て、云私語く事なれば、なじかは可ㇾ有ㇾ隱、此事髴て京都へ聞てけり。義長大に忿て、こは如何に某が討るべからん、咎は抑何事ぞ、是唯道誓清氏等が、此次に謀叛を起さん爲にぞ、左樣の事をば企らん。此事を急ぎ將軍に申さでは叶まじとて、中務少輔計を召具して、急ぎ宰相中將殿へ參て、道誓清氏こそ、義長を可ㇾ討とて、天王寺より二手に成て、打て上り候なれ。是は何樣天下を覆んと存ずる者共と覺候。御油斷あるまじきにて候と申ければ、さる事や可ㇾ有。云者の誤にぞ有らん。千萬に一つも、さる事あらば、義詮を亡さんとする企なるべし。我與二御邊一一所に成て戰はゞ、誰か下剋上の者共に可ㇾ與と宣へば、義長誠に悅で、己が宿所へぞ歸ける。義長分國よりの兵共、未一人も下さで置たりければ、天王寺の大勢

一揆同心―一味同心に同じ

狼藉なりと目にかけける時分なり、今川、細川、土岐、佐々木、皆義長を悪しと思ふ人共なりければ、何れも不レ及ニ異議一、唯次に討て、世を鎮るより外の事は候はじと、面々にぞ被レ同ける。然ば軈て合戦の評定可レ有とて、人々の下人共を遠く除たる處に、推參の遁世者、田樂童なんど、數多出來ける程に、諸人皆眴して、其日は酒宴にて止にけり。

○京勢重南方發向事 附仁木沒落事

斯る處に和田楠等、金剛山竝に國見より出て、渡邊橋を切て落し、轡田城を攻んとする由、和泉河内より京都へ早馬を打て、急ぎ勢を可レ被レ下と告たりければ、先日數月の大功、一時に空く成ぬと、宰相中將義詮朝臣周章し給けれ共、誰を下れと下知する共不レ可レ有ニ下者一、諸人の心を推量し給て、大息突て御座けるに、聞と等く畠山入道道誓、細川相摸守清氏、土岐大膳大夫入道善忠、佐々木六角判官入道崇永、今川上總介、舍弟伊豫守、武田彈正少弼、河越彈正、赤松大夫判官光範、宇都宮芳賀兵衞入道禪可以下、此間一揆同心の大名三十餘人、其勢都合七千餘騎、公方の催促をも不ニ相待一、我先にと天王

大國—大寶令以來、國を大國上國中國下國の四等に分てり、されど此は唯境の廣き國の意なり

所の大庄を領知す。外には不レ敬ニ佛神一朝夕狩漁爲レ業、内には將軍の仰を輕じて、每事不レ拘ニ成敗一。然ば今度南方退治の時も、敵の勝に乘る時は悅び、御方の利を得るを聞ては悲む。是は抑勇士の本意とや可レ申、忠臣の擧動とや可レ申。將軍尼崎に御陣を被レ取二百餘日に及しに、義長西宮に乍レ居、一度も不ニ出仕一、一獻を進する事も無りしかば、何に抑斯る不忠不思議の者に大國を管領せさせ、大庄を塞せては、世の治ると云事や候べき。唯此次に仁木を被ニ退治一、宰相中將殿の世務を被ニ助申一候はゞ、故將軍も草の陰にては嬉くこそ被ニ思召一候はんずらめ。旁は如何被ニ思召一候と問ければ、細川相摸守は、今度南方の合戰の時、仁木右京大夫、三河の星野行明等が、守護の手に屬せずして、相摸守の手に附たる事を忿て、彼等が跡を闕所に成て、家人共に充行はれたりしを所存に違て思はれける人也。土岐大膳大夫入道善忠は、故土岐賴遠が子左馬助を、仁木が養子にして、動れば善忠が所領を取て、左馬助に申與んとするを、鬱憤する折節也。佐々木六角判官入道崇永は、多年御敵なりし高山を討て、其跡を賜たるを、仁木建武の合戰に恩賞に申賜たりし所也とて、押て知行せんとするを、遺恨に思ふ人なり。佐渡判官入道は、我身に取て、仁木に差たる宿意はなけれ共、餘に傍若無人なる振舞を

主上—後光嚴天皇

宗徒は—旨とする所はの意

太平記　巻第三十五

○新將軍歸洛事　附擬レ討二仁木義長一事

南方の敵軍、無二事故一退治しぬとて、將軍義詮朝臣歸洛し給ければ、京中の貴賤悦合へる事不レ斜。主上も無レ限叡感有て、早速の大功、殊以て神妙の由、勅使を下されて仰らる。則今度御祈禱の精誠を被レ致つる諸寺の僧綱、諸社の神官に、勸賞の沙汰有べしと、被二仰出一けれども、闕國も所領もなければ、僅に任官の功をぞ被レ出ける。其比畠山入道道誓が宿所に、細川相摸守、土岐大膳大夫入道、佐々木佐渡判官入道以下、日々寄合て、此間の辛苦を忘んとて、酒宴茶會などして、夜晝遊けるが、互に無二隔心一程を見て、後に畠山入道、密に其衆中に私語けるは、今は何をか可二隱申一。道誓今度東國より罷上り候つる事、南方の御敵退治の爲とは乍レ申、宗徒は仁木右京大夫義長が、過分の擧動を鎭んが爲にて候き。旁も定てさぞ被二思召一候覽。彼が心操曾て一家をも可レ治者とは不レ見。然を今非二其器用一、四箇國の守護職を賜り、指たる忠無して、數百箇

らば年號の替らぬ先に、疾々退治せよと被仰て、御廟の中へ入せ給ぬと見進せて、夢は急に覺にけり。上北面此示現に驚て、吉野より又觀心寺へ歸參り、人々に内々語ければ、唯あらまほしき事ぞ。思寢の夢に見えつらんとて、信ずる人も無りけり。げにも其驗にてや有けん、敵寄せば尙山深く主上をも落し進せんと、逃方を求て、戰はんとはせざりけり。觀心寺の皇居へは、敵曾不寄來、剩さしてし出たる事もなきに、南方の退治、今は是までぞとて、同五月二十八日、寄手の總大將宰相中將義詮朝臣、尼崎より歸洛し給しかば、畠山、仁木、細川、土岐、佐々木、宇都宮以下、都て五畿七道の兵二十萬騎、我先にと上洛して、各國へぞ下ける。さてこそ上北面が見たりしと云夢も、げにやと思合せられて、如何樣にも、仁木、細川、畠山も、滅ぶる事やあらんずらんと、夢を疑し人々も、却て是をぞ憑ける。

寂阿—原本愚鑑に作る、愚鑑は大友貞宗入道の法名也、異本に據りて改む

龍の口—鎌倉に在り

下におひ違たり。其後圓丘の石の扉を排く音しければ、遙に向上たるに、先帝袞龍の御衣を召れ、寶劔を拔て右の御手にひつさげ、玉扆の上に坐し給ふ。此御容も、昔の龍顏には替て、忿れる御眸逆に裂、御鬚左右へ分れて、唯夜叉羅刹の如也。誠に苦し氣なる御息をつかせ給ふ度毎に、御口より焔はつと燃出て、黒煙天に立上る。暫有て、主上俊基資朝を御前近く召れて、さても君を惱し、世を亂る逆臣共をば、誰にか仰附て可レ罰と勅問あれば、俊基資朝、此事は已に摩醯修羅王の前にて議定有て、討手を被レ定て候。さて如何に定たるぞ。先今兩方の皇居を襲はんと仕候五畿七道の朝敵共をば、正成に申附て候へば、一兩日の間には追返し候はんずらん。仁木右京大夫義長をば、菊池入道寂阿に申附て候へば、伊勢國にてぞ亡び候はんずらん。細川相摸守清氏をば、土居得能に申附て候へば、四國に渡て後、亡候べし。東國の大將にて罷上て候畠山入道、舍弟尾張守をば、殊更瞋恚強盛の大魔王、新田左兵衞佐義興が申請候て、可レ罰由申候つれば、容易かるべきにて候。道誓が郎從共をば、所々にて首を刎させ候はんずる也。中に江戸下野守、同遠江守二人は、殊更に惡い奴にて候へば、龍の口に引居て、我手に懸て切候べしとこそ申候つれと奏し申ければ、主上誠に御心よげに打笑せ給て、さ

圓丘―禮記に、祀二天圓丘一祀二地方丘一とあり。此は山陵の事也

思有て聞く時は、心なき啼鳥も、哀を催す歟と覺え、岩漏水の流までも、悲を添る音なれば、通夜圓丘の前に畏て、つく〴〵と憂世の中の成行く樣を、案じつゞくるに、抑今の世如何なる世なれば、有レ威無レ道者は必亡ぶと云置し先賢の言にも背き、又百王を守らんと誓ひ給し神約も皆誠ならず。又いかなる賤き者までも、死ては靈となり、鬼と成て、彼を是し此を非する理明也。況や君已に十善の戒力に依て、四海の尊位に居し給し御事なれば、玉骨は縱郊原の土と朽させ給ふとも、神靈は定て天地に留て、其苗裔をも守り、逆臣の威をも亡さんずらんとこそ存ずるに、臣君を犯せ共、天罰もなし、子父を殺せども、神の怒をも未レ見。こはいかに成行世の中ぞやと、泣々天に訴て、五體を地に投げ禮をなす。餘に氣くたびれて、頭を低て少目睡たる夢の中に、御廟の震動する事良久し。暫有て圓丘の中より、誠にけだかき御聲にて、人やある〳〵と召れければ、東西の山の峯より、俊基資朝是に候とて參たり。此人々は、君の御謀叛申勸たりし者共也とて、去る元德三年五月二十九日に、資朝は佐渡國にて斬れ、俊基は其後鎌倉の葛原が岡にて、工藤二郎左衞門尉に斬れし人々也。貌を見れば、正く昔見たりし體にては有ながら、面には朱を差たるが如く、眼の光耀て、左右の牙銀針を立たる樣に、上

も諸共に、其夜の夜半許に、赤坂城に火を懸て、金剛山の奥へ入にけり。

○吉野御廟神靈事 附 諸國軍勢還二京都一事

南方の皇居は、金剛山の奥觀心寺と云深山なれば、左右なく敵の可レ近所ならね共、斥候の御警固に憑思召れたる龍泉赤坂も攻落されぬ。昨日一昨日まで御方せし兵共、今日は多く御敵と成ぬと聞えしかば、山人杣人案内者として、如何樣何の山までも、敵攻入ぬと申沙汰しければ、主上を始進せて、女院、皇后、月卿、雲客、こは如何すべきと、懼恐れさせ給ふ事無レ限。爰に二條禪定殿下の候人にて有ける上北面、御方の官軍加樣に利を失ひ城を落さるゝ體を見て、敵のさのみ近附ぬ先に、妻子共をも京の方へ送り遣し、我身も今は髻切て、如何なる山林にも世を遁ればやと思て、先吉野邊まで出たりけるが、さるにても多年の奉公を捨はてて、主君に離れ、此境を立去る事の悲さに、せめて今一度、先帝の御廟へ參り、出家の暇をも申さんと思て、唯一人御廟へ參たるに、近來は洒掃する人無りけりと覺て、荊棘道を塞、葎茂て舊苦扉を閉たり。何の間にかくは荒ぬらんと、此彼を見奉るに、金爐香絶草殘二一叢之煙一、玉殿無レ燈螢照二五更之夜一、

上北面―北面の上臈と北面の五位以上のものをいふ

約束の聲―上に約束の名乘とあるに同じ

叫で半時許切合たるに、結城が兵七百餘人、餘に戰屈して已に引色に見えける處に、細川相摸守五百餘騎にて敵の後へ廻り、清氏後攻をするぞ。引な〳〵と呼けるに力を得て、鹿窪十郎、富澤兵庫助、茂呂勘解由左衛門尉三人踏止踏止戰けるに、和田が兵數十人討れ、若干創を被て、叶はじとや思けん。一方の垣楯蹴破て、一度にはつと引たりけり。爰に結城が若黨に、物部次郎郡司とて、世に勝たる兵四人あり。兼てより敵若夜討に入たらば、我等四人は、敵の引返さんずるに紛て赤坂城へ入、和田楠に打違て死るか、不ㇾ然ば城に火を懸て燒落すかと、約束したりけるが、少も不ㇾ違、引て歸る敵に紛て、四人共に赤坂城へぞ入たりける。夫夜討強盜をして歸る時、立勝り居勝りと云事あり。是は約束の聲を出して、諸人同時に颯と立颯と居、角て敵の紛れ居たるを、えり出さん爲の謀也。和田が兵赤坂城に歸て後、四方より續松を出し、件の立勝り居勝りをしけるに、紛入る四人の兵共、敢て加樣の事に馴ぬ者共なりければ、無ㇾ紛えり出されて、大勢の中に取籠られ、四人共に討死して、名を留けるこそ哀なれ。天下一の剛の者とは、是をぞ誠に云べきと、褒ぬ人こそ無りけれ。和田が夜討にも、敵陣一所も不ㇾ退、彌氣に乘て見えければ、此城にて敵を支へん事は叶はじとて、和田も楠

敵あらけて —敵まばらになりての意

約束の名乘 —所謂合言葉にて今の暗號也

見て、後に戰はんと申けるを、和田はいつも戰を先として、謀を待ぬ者なりければ、都て此議に不レ同。軍の習、負るは常の事也。唯可レ戰所を不レ戰して、身を愼を以て恥とす。さても天下を敵に受たる南方の者共が、遂に野伏軍計しつる事のをかしさよと、日本國の武士共に笑れん事こそ口惜けれ。何樣一夜討して、太刀の柄の微塵に碎る程、切合んずるに、敵あらけて引退なば、軈て勝に乘て討べし。引ずんば又力なく、其時こそ金剛山の奧までも引籠て、戰はんずれとて、夜討に馴たる兵三百人勝て、問はゞ武しと答へよと、約束の名乘を定つゝ、夜深る程をぞ待たりける。五月八日の夜なれば、月は宵より入にけり。時刻よく成ぬとて、三百人の兵共、一陣に進で見えける結城が向城へ忍寄て、木戸口にして鬨を作る。其聲に驚て、外の陣には騷げ共、結城が陣は少も不レ騷、鳴を靜て待懸たり。射手は元來櫓にあれば、矢間を引て差攻々々、散々に射る。打物の衆は垣楯逆茂木を阻て、上れば切て落し、越れば突落し、此を先途と防けれ共、和田和泉守正武、眞前に懸て切て入る。日來の言を不レ忘して、續けや人々と、喚て垣楯切て引破り、一枚楯引側て、城の中へ飛入ければ、相從ふ兵三百人、續て城へぞ込入ける。冑の鉢を傾け、鎧の袖をゆり合せ〳〵切合て、天地を動かし、火を散す。互に喚

楯の算―楯の裏につけたる木

今川上總守、佐々木六角判官入道崇永、舍弟山内判官、龍山の軍に不レ合つる事、安からぬ者哉と思はれければ、態と他の勢を不レ交して、五百餘騎、同日の晩景に、平石城へ押寄る。一矢射違ふる程こそあれ。切岸高ければ、先なる人の楯の算を蹈へ、冑の鉢を足だまりにして、城戸逆茂木を切破り、討るゝをも不レ云、手を負をも不レ顧、我先にと込入ける間、敵不レ怺して、其日の夜半許に、金剛山を指て落にけり。二箇所の城、容易落されしかば、寄手は勝に乘て、龍の水を得たるが如くになり、和田楠は氣を失て、魚の泥に吻くが如し。如レ斯ならば、赤坂城も幾程か怺ふべき。暫時に攻落して後、主上を生虜進せ、三種の神器を取奉て、都へ返入れ進すべしと、諸人指レ掌思をなす。すはや天下靜りて、武家一統の世に成ぬと、思はぬ人は無りけり。龍山平石二箇所の城落しかば、八尾城も不レ怺、今は僅に赤坂城計こそ殘けれ。此城さまでの要害共不レ見、唯和田楠が館の當を、敵に無二左右一蹴散されじと、俄に構たる城なれば、暫もやは支るとて、陣々の寄手一所に集て、二十萬騎五月三日の早旦に、赤坂城へ押寄せ、城の西北三十餘町が間に、一勢々々引分て、先向城をぞ構ける。楠は元來思慮深きに似て、急に敵に當る機少し。此大敵に戰はん事難レ叶。唯金剛山へ引隱て、敵の勢のすく處を

正忠、木所彦五郎、高見彦四郎、三騎續いたり。其跡を見れば、相摸守の郎從六七十騎、がけ堀共云はず、我先にと馳來る。其旗差、高岸に馬の鼻を突せて上かねたるを見て、相摸守自走下て、其旗をおつ取て、切岸の前に突立て、先懸は淸氏に有と、高聲に名乘ければ、赤松彦五郎城の中へ入、先懸は範實にて候。後の證據に立て給り候へと、聲々に名乘て、塀の上をぞ越たりける。是を見て桔梗一揆の衆に、日吉藤田兵庫助、内海修理亮光範、城戸を引破て込入る。城の中の兵共、暫く支て戰けるが、敵の大勢に御方の無勢を顧て、叶はじとや思けん。心閑に防矢射て、赤坂を差て落行ける。暫あれば、陣々に集り居たる大勢共、すはや桔梗一揆が、龍泉へ寄て攻けるは。但し輒はよも攻落さじ。楯の板しめせ。射手を先立よと、最騷ず打立て、其勢既に十萬餘騎、龍泉の麓へ打向たれば、城は早已に攻落されて、櫓垣楯に火を懸けり。數萬の軍勢頭を搔て、安からぬ者哉。是程まで敵小勢なるべしとは知らで、土岐細川に高名をさせつる事の心地あしさよと、牙をかまぬ者は無りけり。

牙をかまぬ者云々—歯をくひしばつて残念がらぬ者はなかりきと也

○平石城軍事附和田夜討事

壘虛篇ー望二其壘上一多二飛鳥一而不レ驚、上無二氛氣一必知三敵詐而爲二偶人一也とありて聊本文と相違す

をば、如何なる鬼神共いへ、可レ攻落二者に非ずと、口々に云恐て、攻んと云人は一人もなし。唯徒に旗計を見上て、百五十餘日過にけり。或時土岐桔梗一揆の中に、些なま才覺ありける老武者、龍山城をつくぐくと守り居たりけるが、其衆中に語て云く、太公が兵書の壘虛篇に、望二其壘上一、飛鳥不レ驚、必知三敵詐而爲二偶人一也と云へり。我此三四日相近附て、龍泉城を見るに、天に飛ぶ鳶林に歸る烏、曾て驚く事なし。如何樣是は大勢の籠たる體を見せて、旗計を此彼に立置たりと覺ゆるぞ。いざや人々他の勢を不レ交此一揆許向て、龍泉を攻落し、天下の稱歎に備んと云ければ、桔梗一揆の衆五百餘騎、皆可レ然とぞ同じける。さらば軈て打立とて、閏四月廿九日の曉、桔梗一揆五百餘騎、忍やかに津々山より下て、まだ篠目の明はてぬ霧の紛に、龍泉の一の木戸口に推寄、同音に鬨をどつと作る。細川相摸守清氏と、赤松彦五郎範實とは、津々山の役所を雙べて居たりけるが、龍泉の鬨の聲を聞て、あはや人に前を懸られぬるは。但城へ切て入んずる事は、又一重の大事ぞ。夫をこそ誠の先懸とは云べけれ。馬に鞍置け、旗差急げと云程こそ有けれ。相摸守と彦五郎と、鎧取て肩に投懸、道々高紐堅て、龍泉の西の一の城戸、高櫓の下へ懸上たり。爰にて馬を蹈放し、後を屹と見たれば、赤松が手の者に、田宮彈

尾閭云々ー莊子秋水篇に出づ、尾閭は海水を泄す所也

七旱ー殷湯の時の七年の旱をいへるが如し

挾、毎日三度草の葉、木の枝をくはへて、海中に沈て飛歸る。尾閭洩せ共不レ乾、七旱ほせ共會て一滴も不レ減大海なれば、如何なる神通を以ても爭か埋はつべき。され共父が怨を報ぜん爲に、此鳥一枝一葉を含で、海中に是を沈る事哀なりける志也。されば此精衞を題するに、人笑二其功少一、我憐二其志多一と、詩人も是を賛たり。君不レ見乎精衞は卑き鳥也。親の怨を報じて、大海を埋ん事を謀る、曹娥は幼き女なれ共、父の爲に悲で毒蛇を害する事を得たり。人として鳥獸にだも不レ及、男子にして女子にも如ず、何をか異也とせんやと、此宮の御謀叛を、欺き申さぬ人はなし。

○龍泉寺軍事

龍泉城には、和田楠等相謀て、初は大和河内の兵千餘人を籠置たりけるが、寄手敢て是をば攻ん共せざりける間、角ては徒に勢を置ても何かせん、打散してこそ野軍にせめとて、龍泉の勢をば皆呼下て、さしもなき野伏共、百人許見せ勢に殘置き、此の木の梢彼の弓藏のはづれに、旗計を結附、尚も大勢の籠たる體を見せたりける。津々山の寄手是を見て、あなおびたゞし。四方手を立たる如くなる山に、此大勢の籠たらんずる

たると、河に傍て下て見れ共、浮出たる事もなし。若や岩のはざまに流懸たると、岸に上り見れ共、散浮ぶ木葉ならでは、せかれて留る物もなし。日を暮し夜を明し、空くおくれて一人は可ㇾ歸心地も無りければ、七日七夜まで、川の上にひれ伏、天に叫び地に哭して、我父を失つる毒蛇を罸してたび候へ。縦空き形なり共、父を今一度我に見せしめ給へと、梵天帝釋堅牢地神に、肝膽を碎てぞ祈ける。夫叶はぬ物ならば、同水底に沈まんと、もだえあこがる。志誠に蒼天にや答けん、洪河の水忽に血に成て流けるが、毒蛇遂に河伯の水神に罸せられて、曹娥が父を乍ㇾ呑、其身寸々に被㆓切割㆒て、波の上にぞ浮出たりける。曹娥此處に空き骨を收て、泣々古郷へ歸にけり。彼處の人是を憐て、此に墳を築き石を刻て、碑の文を書て立たりける。其銘石今に殘て、行客涙を落し、騒人詩を題す、哀なりし孝行也。又發鳩山に精衛と申人、他國に行て歸るとて、難風に船を覆されて、海中に沈て無ㇾ墓成にけり。其子未幼くて、古郷に獨有けるが、父が海に沈める事を聞て、其江の邊に行て、夜晝泣悲けるが、尚も思に堪かね、遂に蒼海の底に身を投て死にけり。其魂魄一の鳥と成て、波の上に飛渡り、精衛々々と呼聲、涙を不ㇾ催云事なし。怨念盡る事なければ、此鳥自ら大海を埋て、平地になさんと思ふ心を

先皇梁薗―後醍醐天皇及護良親王梁薗は竹園と意同じ

一人の貧者云々―此本文は排韻に見えたる曹娥の事より案出せりと見ゆれど稍相違せり

なり、天下大に亂て、今に二十七年、公家被官の人、悉道路に袖をひろげ、武家奉公の族は、皆國郡に臂を張る事は何故ぞや。唯尊氏卿、兵部卿親王を殺し奉し故也。天以て許し給はゞ、天下の將軍として、六十六箇國、などか此宮に歸伏し奉らざらん。然ば舊主先皇も、草の陰にても喜悅の眉を開せ給はゞ、忠孝の御志を、天神地祇もなどか感應の御眸を添させ給はざらん。然ば御子孫繁昌して、天下の武將たるべきに、思慮なき御謀叛起されて、先皇梁薗の御尸に血をそゝぎ給へば、嚴親幽靈も、いかにうたてしく覺すらんと、草の陰さこそは露も亂らめ。昔漢朝に一人の貧者あり。朝氣の煙絶て、柴の庵のしば〳〵も、事問通はす人もなければ、筧の竹の浮節に堪で、可住心地も無て明し暮しけるが、或時曹娥と云ける一人の娘携へて、他國へぞ落行ける。洪河と云河を渡らんとするに、折節水增りて、橋もなく船もなし。行前遠して可留里も遥に過ぬれば、何までか角ても可有。さらば自此娘を負てこそ渡らめと思て、先河の淵瀬を知ん爲に、娘をば岸の上に置て、唯一人河の瀬を蹈み行ける時に、毒蛇俄に浮出て、曹娥が父を嚙へて、碧潭の底へぞ入にける。曹娥是を見て、手を揚て、地に倒て、如何せんと侘て、悲めども可助人もなし。一日二日は尚も無墓心にて、若や流の末に浮出

大宋の伯顏ー宋の將軍に非ず元の重臣の誤也

密に御使を以て、事の由を義詮朝臣の方へ被ㇾ牒て、四月二十五日宮の御勢二百餘騎、野伏三千人を召具して、賀名生の奥に銀嵩と云山に打上り、御旗を被ㇾ揚、先の皇居賀名生の黒木の內裡を始として、其邊の山中に隱居たる月卿雲客の宿所々々を、一々に燒拂はる。暫が程は眞實を知たる人少なければ、是は如何樣大宋の伯顏將軍が城を燒て、敵をたばかりし謀歟、不ㇾ然ば楚の項羽が自ら廬舍を燒て、再び本の陣へ歸じと誓し道歟と、樣々に推量を運して、此宮尙も御敵に成せ給たりと、知る人聊も無りけり。去程に探使度々馳廻て、宮の御謀叛事已に急也と奏聞しければ、軈て其翌の日、二條前關白殿を大將軍として、和泉、大和、宇多、宇智郡の勢千餘騎を向らる。是を見て、さらば御謀叛の宮に可ㇾ奉ㇾ屬樣なしとて、吉野十八鄉の者共、皆散々に落失ける程に、宮の御勢僅に五十餘騎に成てけり。され共赤松彈正少弼氏範は、今更弱を見て捨るは、弓矢の道にあらず、無ㇾ力處也、討死するより外の事有まじとて、主從二十六騎は、四方に馳向て散々に戰ける程に、寄手無㆓左右㆒近附得ず、三日三夜相戰て、氏範數箇所の創を被てければ、今は叶はじとて、宮は南都の方へ落させ給へば、氏範は降人に成て、又本國播州へ立返る。不思議なりし御謀叛也。抑故尊氏卿朝敵と成て、先帝外都にて崩御

じて、又武家に參ぜしかば、宮心ならず京へ上らせ給て、囚人の如にして御座有しを、但馬國の者共盜出し奉て、高山寺城へ入れ奉る。本庄平太、平三、御手に屬して、但馬丹波の兩國を打從るに、不靡云者更になし。軈て播磨國を退治せんとて、山陽道へ御越有しに、則祐三千餘騎にて、甲山の麓に馳向て相戰ふ。軍未決、宮の一騎當千と憑み思召たりける本庄平太、平三、共に數箇所の創を被て、兄弟同時に討れにければ、軍忽に破て、宮は河内國へ落させ給にけり。其後も大將にし奉らんとて、國々より此宮を申けれ共、自然の事もあらば、此宮をこそ大將にもし奉らんずれとて、何へも下し進せられず、武略の爲に惜まれて、吉野の奧にぞ坐ける。今紀伊國の合戰に、四條中納言打負て、阿瀨河へ落給ぬ。和田楠も津々山の敵陣に被攻て、機疲ぬと見えければ、今はいつをか可期。可然兵共を被相副候へ。自出向て合戰を致候はんと、宮頻に被仰ける間、げにもとて、此三四年兄弟不和の事有て、吉野へ被參たりける赤松彈正少弼氏範に、吉野十八鄉の兵を差副て、宮の御方へぞ進せられける。宮此勢を附從へさせ給て後、如何なる物狂はしき御心や著けん、さらば此時分に、吉野の新帝を亡し奉て、武家の爲に忠を致して、吉野十八鄉を、一圓に管領せばやと思召けるこそ不思議なれ。

銀嵩—大和の金峰山のこと
故兵部卿親王—護良親王

軍、我は爲二副將軍一山王は鎭に飽二一乘法味一故に勢力勝レ我云々。彼を以て此を思ふに、叡慮德に赴き、四海の民を安穩ならしめんと思召す大願を被レ發、以二法味一神力を被レ添候はゞ、朝敵は還て御力になり、禍は轉じて幸に歸せん事疑ふ處に非ずと被レ申ければ、群臣悉此旨に從ひ、君も無レ限叡信を凝させ給て、軈て住吉四所の明神、日吉七社權現を勸請し奉て、座さまさずの御修法を、百日の間行はせらる。主上每朝に御行水を召れて、玉體を投レ地除災與樂の御祈、誠に身の毛も彌立許也。天地も是に感應し、神明佛陀も、などか擁護の御手を垂れ給はざらんと、憑敷ぞ見えたりける。

○銀嵩軍事附曹娥精衞事

此比吉野の將軍宮と申は、故兵部卿親王の御子、御母は北畠准后の御妹にてぞ御座ける。御幼稚の時より、文武二道何れも達して見えさせ給しかば、此宮ぞ誠に四海の逆浪をも鎭められて、舊主先帝の御追念をも休め進せらるべき御器量にて御座とて、吉野の新帝登極の後、則被二宣下一征夷將軍に成し進せらる。去ぬる正平七年に、赤松律師則祐暫事を謀て、宮方に參ぜし時、此宮を大將に申下し進せたりしが、則祐忽に變

各自受法樂云々―諸佛菩薩天神皆法を以て樂とす故に三寶に對して誦經誦呪すれば各法樂を受くといふ意

聖眞子―山王七社の一也

止觀院―今の中堂

葉も不レ枯けり。又我朝には、應和の年の末に、比叡山の三宮林の數千本の松、一夜に枯凋て、霜を淩ぐ緑の色黃葉に成にけり。三千の衆徒大に驚て、十善寺に參て、各自受法樂の法施を奉り、前相何事ぞと祈誓を凝さしめたりけるに、一人の神子俄に物に狂出て、我に七社權現乘居させ給へりとて託しけるは、我内には圓宗の教法を守て、化緣を三千の衆徒に結び、外には國家の安全を致して、利益を六十餘州に垂る。雖レ然今衆徒の擧動、一として不レ叶ニ神慮一、兵仗を横へて法衣を汚し、甲冑を帶して社頭を往來す。嗚呼自レ今後、三諦卽是の春の華、誰が袂にか薫はまし、四曼不離の秋の月、何れの扉をか可レ照。此上は我當山の麓に、跡を垂ても何かせん。唯速に寂光の本土へこそ歸らめ。唯耳に留る事とては、常行三昧の念佛の音、尙も心に飽ぬは、一乘讀讃の論議の聲と、泣泣託宣しけるが、額より汗を流て、物附は則醒にけり。大衆是に驚て、聖眞子の御前にして、常行三昧の佛名を唱へ、止觀院の外陣にして、一乘讀讃の竪義を執行ふ。依レ之神慮も忽に休まりけるにや、月に叫ぶ峽猿の聲も、曉の枕を不レ濡、戴レ霜林松の色本の緣に成にけり。其後住吉大明神の、四海の凶賊を鎭め給し御託宣に曰く、天慶に誅ニ凶徒一昔は、我爲ニ大將軍一、山王は爲ニ副將軍一。承平に鎭ニ逆黨一時、山王は爲ニ大將

表事—前兆

後漢の光武—靈帝とあるべき也

田邊別當、山木判官、半時も不レ支、龍門の陣を落されて、阿瀬河城へぞ籠ける。芳賀二度目の軍に、先度の恥をぞ洗ける。今は是まで也。一功なす上はとて、紀州の討手、伊賀守、無恙津々山の陣へ歸ければ、父の禪可悅喜して、公私の大崇是に過るは非じとぞ申ける。四條中納言隆俊卿龍門山の軍に打負て、阿瀬河へ落ぬと聞えければ、吉野の主上を始進せて、龍顏に咫尺し奉る月卿雲客、色を失ひ膽を消し給ふ。斯る處に又住吉の神主津守國久密に勘文を以て申けるは、今月十二日の午刻に、當社の神殿鳴動する事良久し。其後庭前なる楠、不二風吹一中より折て、神殿に倒れ懸る。され共枝繁く地に支て、中に横はる間、社壇は無レ恙とぞ奏し申ける。諸卿此密奏を聞て、神殿の鳴動は、凶を示し給ふ條無レ疑。楠今官軍の棟梁たり。楠倒れば誰か君を擁護し奉るべき。事皆以て不吉の表事也と、私語き合れけるを、大塔忠雲僧正不二聞敢一被レ申けるは、好事不レ如レ無と申事候へば、まして此事吉事なるべしとは難レ申。但神凶を告給ふは、天未レ捨者也。其故は後漢の光武の昔、庭前なる槐木の、高さ二十丈に餘たるが、不二風吹一根より拔て、倒にぞ立たりける。諸臣相見て、皆恐怖しけるを、光武天の告を悅て、貧き民に財を省き、餘れるを以て不レ足を助給ければ、此槐木一夜に又如レ本成て、一

七條の袈裟—天正本に九條に作る

ぬ二の舞にて、敵に力を附るのみならず、殊に仁木右京大夫に笑れん事、我一人が恥と存ずべし。されば此軍に敵を追落さずば、生て二度我に面を不レ可レ向。是は圓覺寺の長老より持ち奉りし御袈裟也。是を母衣に懸て、後世の悪業を助れとて、懐より七條の袈裟を取出て、泣々公頼に與ふ。公頼庭訓を受て、仔細に不レ及と領掌して、兩へ別けるが、今生の對面若是や限なるべきと、名殘惜げに顧て、互に涙をぞ浮ける。恩愛の道深ければ、如何なる鳥獣さへも、子を思ふ心淺からず。況乎於二人倫一乎。況乎於二一子一乎。され共弓矢の道なれば、禪可最愛の子に向て、唯討死せよと勸ける心の中こそ哀なれ。去程に四條中納言隆俊は、重て大勢懸る由聞えしかば、尚本の陣にてや戰ふ、平場に進でや懸合にすると、評定有けるに、湯川庄司心變して、後に旗を擧げ、熊野路より寄する共披露し、船をそろへて田邊よりあがるとも聞えければ、此陣角ては如何可レ有と、案じ煩ておはしけるを見て、大手の一の木戸を堅たりける越智、降人に成て、芳賀伊賀守が方へ出たりける。さらでだに猛き清黨、兼て父に義を被レ勸、今又越智に力を被レ著、なじかは少も滞るべき。龍門の麓へ打寄けると均く、楯をも不レ突、矢の一つをも不レ射、拔連れて攻上ける程に、さしもの兵と聞えし恩地、牲河、貴志、湯淺、

畠山式部大輔—義熙也

○二度紀伊國軍事附住吉楠折事

紀伊國の軍に、寄手若干討れて、今は和佐山の陣には御方怺へ難しと云たりければ、津津山の勢も、尼崎の大將も、興を醒し色を失ふ。され共仁木右京大夫義長一人は、あらをかしやさてこそよ。哀同くは津々山、天王寺、住吉の勢共も、皆被追散、裸に成て逃よかし。興ある見物せんとて、ゑつぼに入てぞ笑ける。是をば御方とや云べき、敵とや申べき、難心得所存也。紀伊路の向陣を追落されなば、津々山とても不可怺。さらば敵の懸らぬ前に、新手を副て、尾張守に力を附よとて、同四月十一日畠山式部大輔、今川伊豫守、細川左近將監、土岐宮内少輔、小原備中守、佐々木山内判官、芳賀伊賀守、土岐桔梗一揆、佐々木黄旗一揆、都合其勢七千餘騎重て紀伊路へぞ向られける。中にも芳賀兵衛入道禪可は、我身は天王寺に留られて、嫡子伊賀守公頼を紀伊路へ向られけるが、二三里が程打送て、涙を流て申けるは、東國に名ある武士多しといへ共、弓矢の道に於て、指をさゝれぬは、唯我等が一黨也。御方の大勢先度の合戰に打負て、敵に機を著ぬれば、今度の合戰は、彌手痛からんと知べし。若し合戰仕違て引返しなば、唯少も違は

こみければ―矢を射込みたる也

金百兩―煉金秤目百兩の事也

も不レ顧、馬物具を脱捨て、さしも嶮き篠原を、すべる共なく轉ぶ共なく、三十餘町を逃たりける。鹽谷は餘に深く長追して、馬に箭三筋立、鎗にて二處つかれければ、馬の足立兼て、嶮岨なる處より、眞逆樣に轉ければ、鹽谷も五丈許、岩崎より下に投られければ、落付よりして目くれ、東西に迷、起上らんとしける處を、蹈留まる敵餘に多に依て、物具の迦内冑を散々にこみければ、つゞく御方はなし、鹽谷終に討れにけり。半時許の合戰に、生虜六十七人、討るゝ者二百七十三人とぞ聞えし。其外捨たる馬物具、弓矢、太刀、刀、幾千萬と云數を不レ知。其中に遊佐勘解由左衞門が、今度上洛之時、天下の人に目を驚かさせんとて、金百兩を以て作たる三尺八寸の太刀もあり。又日本第一の太刀と聞えたる、禰津小次郎が六尺三寸の丸鞘の太刀も捨たりけり。されば大力も高名も不覺も時の運による者也。此禰津小次郎は、自讃に常に申けるは、坂東八箇國に弓矢を取人、懸合の時、禰津と知らで懸合せ、太刀打違んは不レ知、是禰津よと知たらん者、我に太刀打んと思人は、恐くは不レ覺と申程の、大力の剛の者なれ共、差たる事もせで、力のある甲斐には、人より先に逃たりけり。

龍領に重て ―龍の領の如く段々に積み重る也

てぞ見えたりける。彼龍門山と申は、岩龍領に重て、路羊腸を遶れり。峯は松柏深ければ、嵐も関の聲を添へ、下には小篠茂て、露に馬蹄を立かねたり。され共麓までは下合ふ敵なければ、勇む心を力にて、坂中まで懸上り、一段平なる所に馬を休て、息を継んと、弓杖にすがり、太刀を逆に突處に、輕々としたる一枚楯に、靫引附たる野伏共千餘人、東西の尾崎へ立渡り、如雨降散々に射る。三萬餘騎の兵共が、僅なる谷底へ沓の子を打たる樣に控たる中へ、差下て射こむ矢なれば、人にはづるゝは馬に當り、馬にはづるゝは人に當る。一矢に二人は射らるれ共、はづるゝは更になし。進で懸散さんとすれば、岩石前に差覆て、懸上るべき便もなし。開いて敵に合んとすれば、南北の谷深く絶て、棧ならでは道もなし。いかゞせんと背をくゞめて、引やする引でやあると見る處に、黄瓦毛なる馬の太く逞きに、紺絲の鎧の、まだ巳刻なるを著たる武者、濃紅の母衣懸て、四尺許に見えたる長刀の、眞中挙て、馬の平頸に引側め、鹽谷伊勢守と名乗て、眞前に進めば、野上、山東、貴志、山本、恩地、牲河、志宇津、禿の兵共二千餘騎、大山も崩れ、鳴雷の落るが如く、喚叫で懸たりける。敵を遥のかさに受て、引心地附たる兵共なれば、なじかは一足も支ふべき、手負を助けんともせず、親子の討るゝを

鹽谷伊勢守―異本に或は伊賀守に或は中務に作る、本書亦前に中務に作る

を下て、鑵子に鑄たりし事こそ、希代の罪業哉と聞しに、是は猶其に百倍せり。淺ましといふも疎也。爲不善于顯明之中者、人得誅之、爲不善乎幽暗之中者、鬼得討之といへり。師泰已に是を以て亡き。前車の轍未遠。畠山今是を取て不誡、後車の危き事在近。今度の軍如何樣にも捗々しからじと、私語く人も多かりけり。

○紀州龍門山軍事

四條中納言隆俊は、紀伊國の勢三千餘騎を率して、紀伊國最初峯に陣を取ておはする由聞えければ、同四月三日、畠山入道道誓が舍弟尾張守義深を大將にて、白旗一揆、平一揆、諏訪祝部、千葉の一族、杉原が一類、彼此都合三萬餘騎最初峯へ差向らる。此勢則敵陣に相對したる和佐山に打上て、三日まで不進、先己が陣を堅して、後に寄んとする勢に見えて、塀塗り櫓を搔ける間、是をたばからん爲に、宮方の侍大將鹽谷伊勢守、其兵を引具して、最初峯を引退て、龍門山にぞ籠ける。畠山が執事遊佐勘解由左衞門是を見て、すはや敵は引けるぞ。何までも追懸て、打取れ者共とて馳向ふ。楯をも不用意、手分の沙汰もなく、勝に乘る處は、げにもさる事なれ共、事の體餘に周章

戸帳―帳臺の入口に垂れたる帷也

崎山、佐和、秋山以下の兵は、八尾城を取り繕て、八百餘騎にて楯籠る。此外大和、河内、宇多宇智郡の兵千餘人をば、龍泉峯に塀を塗、櫓を掻せて、見せ勢になしてぞ置たりける。去程に寄手は同二月十三日、後陣の勢三萬餘騎を住吉天王寺に入替させて、後を心安く蹈へさせ、先陣の勢二十萬騎は、金剛山の乾に當たる津々山に打上て陣を取。敵御方其あはひ僅に五十餘町を隔たり。互に時を待て未戰ざる處に、丹下・俣野、譽田、酒匂、水速、湯淺太郎、貴志の一族五百餘騎、弓を弛し冑を脱で降人に成て出たりければ、津々山の人々皆勇訇て、さればこそ敵早弱にけり。和田楠幾程か可ㇾ揉と思はぬ人も無りけり。され共未騎馬の兵懸合て、勝負をする程の事はなし。唯兩陣互に野伏を出合て、矢軍する事隙なし。元來敵は物馴て、御方は案内を知ねば、毎度合戰に寄手の手負討るゝ事數を不ㇾ知。角ては唯和田楠が、兼て謀る案の内に落されたる事よと云ながら、止事を不ㇾ得ける。去程に始のほどこそ、禁制をも用けれ。兵次第に疲ければ、神社佛閣に亂入て、戸帳を下し、神寳を奪合、狼藉手に餘て、不ㇾ拘制止。獅子駒犬を打破て薪とし、佛像經卷を賣て、魚鳥を買ふ。前代未聞の惡行也。先年高越後守師泰が石川河原に陣を取て、楠を攻て居たりし時、無惡不道の兵共が、塔の九輪

かぶ木―上に渡したる横木……

轅門―張安曰、軍行以レ車爲レ陣轅相向爲レ門故曰二轅門一、軍門と同じ

らんと、人皆思て控たりけれ共、如何なる深き謀か有けん、敢て河を支ん共せざりけり。去間大手搦手三十萬騎、同日に河より南へ打越、天王寺、安部野、住吉の遠里小野に陣を取る。され共猶大將宰相中將殿は、河を越不レ給、尼崎に轅門を堅しておはすれば、赤松筑前入道世貞、同帥律師則祐は、大渡に打散て、斥候の備を全し、仁木右京大夫義長は、三千餘騎を一所に集め、西宮に陣を取て、先陣若戰負ば、新手に成て入替、天下の大功を、我一人の高名に稱美せられんとぞ議せられける。南方の兵の軍立、始は坂東の大勢の程を聞て、城に籠て戰はば、取卷れて、遂に不レ被二攻落一云事有べからず、唯深山幽谷に走散て、敵に在所を知れず、前に有かとせば、後へ拔、馬に乘かとせば、野伏に成て、在々所々にて戰はんに、敵頻に懸らば、難所に引懸て返合せ、引て歸らば跡に附て追懸け、野軍に敵を疲かして、雌雄を勞兵の弊に決すべしと議したりけるが、東國勢の體、思ふにも不レ似、無二左右一敵陣へ懸入ん共せず、爰に日を經彼に時をぞ送ける。さらば此方も陣を前に取り、城を後に構て、合戰を致せとて、和田楠は、俄に赤坂城を拵て、三百餘騎にて楯籠る。福塚、川邊、佐良階、當木、岩郡、橋本判官以下の兵は、平石城を構て、五百餘騎にて楯籠る。眞木野、酒邊、古折、野原、宇野、

佐々木判官信詮―毛利家天正本に治部少輔高秀に作る、可也、信詮は下に出でたる山内判官也

もやひ―舟と舟とを繫ぎ合するをいふ

大夫、今川上總介、子息左馬助、舍弟伊豫守、他家には、土岐大膳大夫入道善忠、舍弟美濃入道、同出羽入道、同宮内少輔、同小宇津美濃守、同高山伊賀守、同小里兵庫助、同猿子右京亮、厚東駿河守、同蜂屋近江守、同左馬助義行、同今峯駿河守、同舟木兵庫助、同明智下野入道、同戸山遠江守、同修理亮頼行、同出羽守頼世、同刑部少輔頼近同飛驒伊豆入道、佐々木判官信詮、佐々木六角判官入道崇永、舍弟山内判官、河野一族赤松筑前入道世貞、舍弟帥律師則祐、甥大夫判官光範、舍弟信濃五郎直頼、同彦五郎範實、諏訪信濃守、禰津小次郎、長尾彈正左衞門、朝倉彈正、此等を始として、都合其勢七萬餘騎、大島、渡邊、尼崎、鳴尾、西宮に居餘て、堂宮までも充滿たり。畠山大夫入道道誓は搦手の大將として、東八箇國の勢二十萬騎引率して、翌日の辰刻に都を立て、八幡の山下、眞木、葛葉に陣を取。是は大手の勢渡邊橋を懸ん時、敵若川に支て戰はば、左良階伊駒の道を經て、敵を中に籠んと也。大手の寄手赤松判官光範は、攝津國の守護にて、敵陣半は我領知を籠たれば、人より先に渡邊の邊に、五百餘騎にて打寄たり。河舟百餘艘取寄て、河の面二町餘に引竝べ、柱をゆり立、もやひを入て、上にかぶ木を敷竝べたれば、人馬打竝て渡れ共、曾て不レ危、和田楠爰に馳向て、手痛く一合戰せんず

護持僧—その人の守護と加持とを勤むる僧

諸苦所因云云—法華經第二卷に見えたる語也

進て、近侍の月卿雲客に至まで皆憑しき事にぞ思召ける。さらば軈て觀心寺へ皇居を移し進すべしとて、臨幸なるに、無用ならん人々を、そゞろに召具させ給べからずと申ける間、げにもとて、傳奏の上卿兩三人、奉行の職事一兩輩、護持僧二人、衛府官四五人計を召具せられ、此外は何地へも暫落忍て、御敵退參の時を可ㇾ待と被㆓仰出㆒ければ、攝政關白、太政大臣、左右大將、大中納言、七辨、八史、五位、六位、後宮の美婦人、靑上達部、內侍、更衣、上臈女房、出世坊官に至まで、或は高野、粉川、天河、吉野、十津河の方に落行て、淺ましげなる山賤共に、憂身を寄る人もあり。或は志賀の古京、奈良の都、京白河に立歸り、敵陣の中に紛れ居て、魂を消す人もあり。諸苦所因貪欲爲本と、如來の金言、今更に思知こそ哀なれ。

○新將軍南方進發事附軍勢狼藉事

去程に足利新征夷大將軍義詮朝臣、延文四年十二月二十三日都を立て、南方の大手へ向給ふ。相隨ふ人々には、先一族細川相摸守淸氏、舍弟左近大夫將監、同兵部大輔、同掃部助、同兵部少輔、尾張左衛門佐、仁木右京大夫、舍弟彈正少弼、同右馬助、一色左京

―原本明年よりはに作る、異本に據りて改む
冬至以前―原本冬至以後に作る、異本に據りて改む

以來、細川帶刀、同陸奥守顯氏、山名伊豆守時氏、高武藏守師直、同越後守師泰、今の畠山入道道誓に至まで、已に六箇度此處へ寄て、猛勢を振ひ、戰を挑しに、敵の軍遂に不レ利、或は尸を河南の路に曝し、或は名を敗北の陣に失ひ候き。是當山形勝の地、要害の便を得たる故にて候。次には人の和に附て思案を廻し候に、今度畠山が上洛は、唯勢を公義に借て、忠賞を私に貪んと志にて候なる。仁木細川の一族共も、彼が權威を猜み、土岐佐々木が一類も、其忠賞を嫉まぬ事や候べき。是又人の心の和せぬ處にて候はずや。天地人の三德、三乍ら違ひ候はゞ、縱敵百萬の勢を幷て候共、恐に足ぬ所にて候。但今の皇居は、餘にあさまなる處にて候へば、金剛山の奥、觀心寺と申候處へ、御座を移し進せ候て、正儀正武等は、和泉河内の勢を相伴ひ、千劍破金剛山に引籠り、龍山石川の邊に懸出々々、日々夜々に相戰ひ、湯淺、山本、恩地、贄河、野上、山本の兵共は、紀伊國守護代、鹽冶中務に附て、龍門山最初峯に陣を張せ、紀伊川禿邊に野伏を出て、開合せ、攻合せ、息をも繼せず令レ戰、極て短氣なる坂東勢共、などか退屈せで候べき、退屈して引返す者ならば、勝に乘て追懸け、敵を千里の外に追散し、御運を一時に可レ開、是庶幾する處の合戰也と、事もなげにぞ申ける。主上を始

孟嘗君云々―春申君の故事也、史記春申君の傳に詳し

吉野新帝―後村上帝

天の時云々―孟子に、天時不レ如二地利一、地利不レ如二人和一とあるに據る

今年よりは

もあり。唯孟嘗君が三千の客悉珠履をはいて、春申君が富を欺しも、斯やと覺て目も眩也。

○和田楠軍評定事附諸卿分散事

此比吉野の新帝は、河內天野と云處を皇居にて御座有ければ、楠左馬頭正儀和田和泉守正武二人、天野殿に參じて奏聞しけるは、畠山入道道誓東八箇國の勢を率して、二十萬騎已に京都に著て候なる。山陽道は播磨を限り、山陰道は丹波を境ひ、東海、東山、南海、北陸道の兵、數を盡して上洛仕り候なれば、敵の勢は定て雲霞の如くにぞ候覽。但於二合戰一は、決定御方の勝とこそ料簡仕て候へ。其故は、軍に三の謀候べし。所謂天の時、地の利、人の和にて候。此內一も違ふ時は、勢ありと云共、勝事を不レ得とこそ見えて候へ。先天の時に附て勘候へば、今年よりは大將軍西に在て、東よりは三年塞たり。畠山冬至以前東國を立て、罷上て候。是已に天の時に違ひ候はずや。次に地の利に附て案じ候に、御方の陣、後は深山に連て、敵案內を不レ知、前に大河流て、僅なる橋一つを路とせり。さ候へば、元弘の千劒破の軍は中々不レ及申。其後建武の亂より

レ仁一日克レ已復レ禮天下歸レ仁焉云々と見ゆ.

弟畠山尾張守、其弟式部大輔、外樣には、武田刑部大輔、舍弟信濃守、逸見美濃入道、舍弟刑部少輔、同掃部助、武田左京亮、佐竹刑部大輔、河越彈正少弼、豐島因幡入道、土屋修理亮、白鹽入道、土屋備前入道、長井治部少輔入道、結城入道、難波掃部助、小田讃岐守、小山一族十三人、宇都宮芳賀兵衞入道禪可、子息伊賀守、高根澤備中守、同一族十一人、是等を宗徒の大名として、坂東の八平氏、武藏の七黨、紀清兩黨、伊豆、駿河、三河、遠江の勢馳加て、都合二十萬七千餘騎と聞えしかば、前後七十餘里に支て、櫛の齒を引が如し。路次に二十日餘の逗留有て、京著は十一月二十八日の午刻と聞えしかば、攝政關白月卿雲客を始として、公家武家の貴賤上下、四宮河原より粟田口まで、棧敷を打續け、車を立雙て、見物の衆二行に群をなす。げにも聞しに不レ違、天下久く武家の一統と成て、富貴に誇る武士共が、爰を晴と出立たれば、馬物具衣裳太刀刀、金銀をのべ綾羅を不レ飾云事なし。中にも河越彈正少弼は、餘に風情を好で、引馬三十匹白鞍置て引せけるが、濃紫、薄紅、萌黃、水色、豹文、色々に馬の毛を染て、皆舍人八人に引せたり。其外の大名共、一勢一勢引分て、或は同毛の鎧著て、五百騎千騎打もあり。或は四尺五尺の白太刀に、虎皮の尻鞘引籠め、一樣に一振帶副て、百騎二百騎打

故左大臣殿—尊氏

己を克め云云—論語顏淵篇に、克レ己復レ禮爲

思の外に世の中靜なるに附ても、兩雄は必爭ふと云習なれば、鎌倉の左馬頭殿と、宰相中將殿との御中、何樣不和なる事出來ぬと、人皆危み思へり。是を聞て、畠山大夫入道道誓、左馬頭殿に向て申されけるは、故左大臣殿の御薨逝の後、天下の人皆連枝の御中に、始終如何樣御不快の御事候ぬと怪み思て候なる。昔漢高祖崩御成て後、呂氏と劉氏と、互に心を置合て、世中又亂れんとしけるを、高祖の舊臣周勃樊噲等兵を集め勢を幷て、世を治たりとこそ承及候へ。道誓誠に不肖の身にて候へ共、且大將の號を可レ有ニ御免一にて候はゞ、東國の勢を引率して、京都へ罷上て、南方へ發向し、和田楠を攻落し、天下を一時に定て、宰相中將殿の御疑をも散じ候はばやと被レ申ければ、左馬頭、此議誠に可レ然。早く東八箇國の勢を催て、南方の敵陣へ可ニ發向一とぞ宣ける。畠山入道は、元來上に公儀を借て、下に私の權威を貪らんと思へる心ありければ、先大名共の許に行向ひ、未レ非功忠賞の厚からん事を約し、未レ親ざるに交の久からん事を語ひ、一日も己を克め禮に復する時は、天下の人民歸レ仁習なれば、東八箇國の大名小名一人も不レ殘、皆催促にぞ從ける。此上は暫も不レ可レ有ニ猶豫一とて、延文四年十月八日、畠山入道道誓、武藏の入間河を立て上洛するに、相從ふ人々には、先舍

に木の花の開くを待つの意

源三判官秀綱―道譽の嫡男也

に增たる忠の者あらじと、臂を振ふ輩多き中に、秀詮宣旨を請取奉り、面目身に餘る。其故を聞けば、祖父佐渡判官入道道譽、去ぬる元弘の始、相摸入道が振舞惡逆無道にして、武運已に傾べき時到ぬとや見たりけん、平家を討て代を知給へと、頻に將軍を勸め申しゝが、果して六波羅尊氏卿の爲に亡にき。然共四海尙亂て二十餘年、世間に名を高くせし武士共、宮方に參ては、又將軍方に降り、高倉禪門に屬するかと見れば、右兵衞佐直冬に與力し、身を一偏に決せず。道譽將軍方にして、親類大略討死す。中にも秀詮が父、源三判官秀綱、去ぬる文和二年六月に、山名伊豆守が謀叛に依て、主上帝都を去せ御座して、越路の雲に迷せ給ふ。爰に新田掃部助、山名が謀叛に節を得て、堅田浦にて君を襲奉し時、秀綱返合せ、命を輕ず。其間に主上延させ御座す事、偏に秀綱が武功に依て也。其忠他に異也とて、秀詮を選出されけるにこそ。是は建久の古、鎌倉右兵衞佐賴朝朝臣、武將に備り給し時、鶴岡八幡宮にて、三浦荒二郎宣旨を受取奉りし例とぞ見えし。

○畠山道誓上洛事

あらまほしき天—晴々しくありたき天

樹を移て云云—移植して未だ十分根つかざる

太平記　卷第三十四

○宰相中將殿賜二將軍宣旨一事

鎌倉贈左大臣尊氏公薨じ給し刻、世の危き事深淵に臨で薄氷を蹈が如くにして、天下今に反覆しぬと見ける處に、是ぞ誠に武家の棟梁共成ぬべき器用と見えし新田兵衛佐義興は、武藏國にて討れぬ。去年まで筑紫九國を打從たりし、菊池肥後守武光も、小貳大友が飜て敵に成し後は、勢少く成ぬと聞えしかば、宮方の人々は、月を望むには曉の雲に逢へるが如く、あらまほしき天に悲あつて、意に叶はぬ世のうさを歎ければ、將軍方の武士共は、樹を移て春の花を看が如く、危き中にも待事多して、今は何事か可レ有と、悦ばぬ人も無りけり。去程に延文三年十二月十八日、宰相中將義詮朝臣、二十九歳にて征夷將軍に成給ふ。日野左中辨時光を勅使にて、宣旨を下されければ、佐々木太郎判官秀詮を以て、宣旨を請取奉る。天下の武功に於ては、申に不レ及といへども、相續して二代忽に將軍の位に備り給ふ、目出かりし世の樣也。抑此比將軍家に於て、我

常磐堅磐の祭禮―永久不變の祭事

なれば力なし。努々人は加様の思の外なる事を好み、振舞ふ事有べからず。又其翌の夜の夢に、畠山大夫入道殿の見給けるは、黒雲の上に太鼓を打て鬨を作る聲しける間、何者の寄來るやらんと怪くて、音する方を遙に見遣たるに、新田左兵衛佐義興長二丈許なる鬼に成て、牛頭馬頭阿放羅刹共十餘人前後に隨へ、火車を引て、左馬頭殿のおはする陣中へ入と覺て、胸打騷で夢覺ぬ。禪門夙に起て、斯る不思議の夢をこそ見て候へと語り給ける言の未終ざるに、俄に雷火落懸り、入間河の在家三百餘宇、堂舍佛閣數十箇所、一時に灰燼と成にけり。是のみならず義興討れし矢口渡に、夜々光物出來て、往來の人を惱ける間、近隣の野人村老集て、義興の亡靈を一社の神に崇めつゝ、新田大明神とて、常磐堅磐の祭禮、今に不レ絕とぞ承る。不思議なりし事共なり。

かひがね―肩胛骨をいふ

されて、水手梶取一人も不レ殘、皆水底に沈けり。天の忿非ニ直事一、是は如何樣義興の怨靈也と、江戸遠江守懼をのゝきて、河端より引返、餘の處をこそ渡さめとて、此より二十餘町ある上の瀨へ、馬を早て打ける程に、電行前に閃て、雷大に鳴霆めく。在家は遠し、日は暮ぬ。唯今雷神に蹴殺されぬと思ければ、御助候へ兵衞佐と、手を合せ虛空を拜して逃たりけるが、とある山の麓なる辻堂を目に懸て、あれまでと馬をあをりける處に、黑雲一村江戸が頭の上に落さがりて、雷電耳の邊に鳴閃きける間、餘の怖さに、後を屹と顧たれば、新田左兵衞佐義興、火威の鎧に龍頭の五枚冑の緒を縮て、白栗毛なる馬の、額に角の生たるに乘、あひの鞭をしとゝ打て、江戸を弓手の物になし、鐙の鼻に落さがりて、わたり七寸許なる雁俣を以て、かひがねより乳の下へかけず、ふつと射とほさるゝと思て、江戸馬より倒に落たりけるが、やがて血を吐、悶絕躃地しけるを、輿に乘て江戸が門へ昇著たれば、七日が間足手をあがき、水に溺たる眞似をして、あら難堪や是助けよと、叫死に死にけり。有爲無常の世の習、明日を知ぬ命の中に、僅の欲に耽り、情なき事共を巧み出し振舞し事、月を阻ず因果歷然、乍に身に著ぬる事、是又未來永劫の業障也。世家に生て、箕裘を繼、弓箭を取は、世俗の法

唯二三人―諸異本には此二三年に作れり

左兵衛佐義興とぞ召れける。器量人に勝れ、謀巧に、心飽まで早かりしかば、正平七年の武藏野の合戰、鎌倉の軍にも大敵を破り、萬卒に當る事、古今未ㇾ聞處多し。其後身を側め、唯二三人武藏上野の間に隱れ行給し時、宇都宮の清黨が、三百餘騎にて取籠たりしも不ㇾ討得。其振舞恰も天を翔、地を潛る術ありと、怪き程の勇者なりしかば、鎌倉の左馬頭殿も、京都の宰相中將殿も、安き心地をはせざりつるに、運命窮て、短才庸愚の者共にたばかられ、水に溺て討れ給ふ。斯りし程に、江戶竹澤が忠功拔群也とて、則數箇所の恩賞をぞ被ㇾ行ける。あはれ弓矢の面目哉と、是を羨む人もあり、又濆き男の振舞哉と、爪彈をする人もあり。竹澤をば、猶も謀叛與黨の者共を委細に尋らるべしとて、御陣に被ㇾ留置、江戶二人には暇たびて、恩賞の地へぞ下されける。江戶遠江守喜悅の眉を開て、則拜領の地へぞ下向しける。十月二十三日の暮程に、矢口渡に下居て、渡の舟を待居たるに、兵衛佐殿を渡し奉し時、江戶が語ひを得て、のみを拔て舟を沈たりし渡守が、江戶が恩賞賜て下ると聞て、種々の酒肴を用意して、迎の舟をぞ漕出ける。此舟已に河中を過ける時、俄に天掻曇て、雷鳴水嵐烈く吹漲て、白波舟を漂はす。渡守周章騷で、漕戾さんと櫓を押て舟を直けるが、逆卷浪に打返

水練を入れて—水練の達者なるものを入れて

す。土肥三郎左衛門、南瀬口六郎、市河五郎三人は、各袴の腰引ちぎりて裸に成、太刀を口にくはへ、河中へ飛入けるが、水の底を潛て、向の岸へかけあがり、敵三百騎の中へ走入り、半時許切合けるが、敵五人打取り十三人に手負せて、同枕に討れにけり。其後水練を入て、兵衛佐殿并に自害討死の首十三求出し、酒に浸て、江戸遠江守、同下野守、竹澤右京亮五百餘騎にて、左馬頭殿の御座す武藏の入間河の陣へ馳參る。畠山入道不レ斜悦で、小俣少輔次郎、松田、河村を呼出して、此を被レ見に、無二仔細一兵衛佐殿にて御座し候けりとて、此三四年が先に、數日相馴奉し事共申出て、皆涙をぞ流ける。見る人悦の中に哀を添て、共に袖をぞぬらしける。此義興と申は、故新田左中將義貞の妾の腹に出來たりしかば、兄越後守義顯が討れし後も、親父猶是を嫡子には不レ立、三男武藏守義宗を、六歳の時より昇殿せさせて、時めきしかば、義興は有にも非ず、孤にて上野國に居たりしを、奥州國司顯家卿、陸奥國より鎌倉へ攻上る時、義貞に志ある武藏上野の兵共、此義興を大將に取立て、三萬餘騎にて、奥州國司に力を合せ、鎌倉を攻落して吉野へ參じたりしかば、先帝叡覽有て、誠に武勇の器用たり。尤義貞が家をも可レ興者也とて、童名徳壽丸と申しを、御前にて元服させられて、新田

岸の額なる云々―朗詠集に、観レ身岸額離レ根草、論レ命江頭不レ繋舟とあり、岸額は岸角也

黒白二つの月云々―命を草の根とし日月を黒白の鼠として世のはかなきを喩へたる也

かうづか―髪束の音便也

哀なる。倩是を譬れば、無常の虎に追れて、煩悩の大河を渡れば、三毒の大蛇浮出て、是を呑んと舌を伸べ、其残害を遁んと、岸の額なる草の根に、命を係て取附たれば、黒白二つの月の鼠が、其草の根をかぶるなる、無常の喩に不レ異。此矢口渡と申は、面四町に餘て、浪嶮く底深し。渡守已に櫓を押て河の半を渡る時、取はづしたる由にて、櫓かいを河に落し入れ、二つののみを同時に抜て、二人の水手、同じ様に河にかばくと飛入て、うぶに入てぞ逃去ける。是を見て、向の岸より兵四五百騎懸出て、鬨をどつと作れば、跡より鬨を合て、愚なる人々哉。たばかるとは知ぬか。あれを見よと欺て、箙を扣てぞ笑ける。去程に水船に涌入て、腰中許に成ける時、井彈正兵衞佐殿を抱奉て、中に差揚たれば、佐殿安からぬ者哉。日本一の不道人共に、たばかられつる事よ。七生まで汝等が爲に恨を可レ報者をと大に忿て、腰の刀を抜き、左の脇より右のあばら骨まで、掻廻々々二刀まで切給ふ。井彈正腸を引切て、河中へかばと投入れ、己が喉笛二所さし切て、自らかうづかを摑み、己が首を後へ折り附る音、二町許ぞ聞えける。世良田右馬助と大島周防守とは、二人刀を柄口まで突違て、引組で河へ飛入る。由良兵庫助、同新左衞門は舟の艫舳に立あがり、刀を逆手に取直して、互に己が首を掻落

のみを差し—栓をすること
混物具—全軍殘らず物具を著けたること

引率して、鎌倉殿の御陣に馳向ひ、畠山殿に向て、一矢射んずるにて候。但可然大將を仰奉らでは、勢の附く事有まじきにて候へば、佐殿を大將に憑奉らんずるにて候。先忍て鎌倉へ御越候へ。鎌倉中に當家の一族いかなりとも二三千騎可有候。其勢を附て、相摸國を打從へ、東八箇國を推て、天下を覆す謀を運し候はんと、誠に容易げにぞ申たりける。さしも志深き竹澤が執申なれば、非所疑と憑れて、則武藏、上野、常陸、下總の間に、内々與力しつる兵どもに、事の由を相觸て、十月十日の曉に、兵衛佐殿は忍て先鎌倉へとぞ被急ける。江戸竹澤は兼て支度したる事なれば、矢口渡の船の底を、二所ゑり貫て、のみを差し、渡の向には、宵より江戸遠江守、同下野守、混物具にて、三百餘騎木の陰岩の下に隱て、餘る所あらば、討止めんと用意したり。跡には竹澤右京亮、究竟の射手百五十人勝て、取て歸されば、遠矢に射殺さんと巧たり。大勢にて御通り候はゞ、人の見尤め奉る事もこそ候へとて、兵衛佐の郎從共をば、兼て皆拔々に鎌倉へ遣たり。世良田右馬助、井彈正忠、大島周防守、土肥三郎左衛門、市河五郎、由良兵庫助、同新左衛門尉、南瀬口六郎、僅に十三人を打連て、更に他人をば不雜、のみを差たる船にこみ乘て、矢口渡に押出す。是を三途の大河とは、思寄ぬぞ

秋の霜―刀のこと

少將の局を門へ呼出奉て、刺殺して堀の中にぞ沈ける。痛乎、都をば打續たる世の亂に、荒のみまさる宮の中に、年經て住し人々も、秋の木葉の散々に、おのが樣々に成しかば、憑む影なく成はてて、身の萍の寄べとは、此竹澤をこそ憑給ひしに、何故と思分たる方もなく、見てだに消ぬべき秋の霜の下に伏て、深き淵に沈られ給ける今はの際の有樣を、思遣だに哀にて、外の袖さへしをれにけり。其後より竹澤我力にては尙討得じと思ければ、畠山殿の方へ使を立て、兵衞佐殿の隱れ居られて候所をば、委細に存知仕て候へ共、小勢にては打漏しぬと覺え候。急ぎ一族にて候江戶遠江守と下野守とを被下候へ。彼等に能々評定して、討奉候はんとぞ申ける。畠山大夫入道大に悅で、軈て江戶遠江守と、其甥下野守を被下けるが、討手を下す由、兵衞佐傳聞かば、在所を替て隱る事も有とて、江戶伯父甥が所領、稻毛庄十二鄕を闕所になして、則給人をぞ被附ける。江戶伯父甥大に僞り忿て、軈て稻毛庄へ馳下り、給人を追出、城郭を構へ、一族以下の兵五百餘騎招集て、唯畠山殿に向ひ、一矢射て討死せんとぞ訇ける。程經て後、江戶遠江守、竹澤右京亮を緣に取て、兵衞佐に申けるは、畠山殿無故懸命の地を沒收せられ、伯父甥共に牢浪の身と罷なる間、力不及一族共を

夢說―夢の吉凶を判じ說く者

こそ淺ましけれ。九月十三夜は、暮天雲晴て、月も名におふ夜を顯はしぬと見えければ、今夜明月の會に事を寄て、佐殿を我館へ入奉り、酒宴の砌にて討奉らんと議して、無二の一族若黨三百餘人催し集め、我館の傍にぞ籠置ける。日暮ければ、竹澤急ぎ佐殿に參て、今夜は明月の夜にて候へば、乍レ恐私の茅屋へ御入候て、草深き庭の月をも御覽候へかし。御內の人々をも慰め申候はん爲に、白拍子共少々召寄て候と申ければ、有レ興遊ありぬと、面々に皆悅で、軈て馬に鞍置せ、郎從共召集て、已に打出んとし給ける處に、少將の御局よりとて、佐殿へ御消息あり。披て見給へば、過し夜に御事を惡き樣なる夢に見進て候つるを、夢說に問て候へば、重き御愼にて候。七日が間は、門の內を不レ可レ有二御出一と申候也。御心得候べしとぞ、被レ申たりける。佐殿是を見給て、執事井彈正を近附て、如何可レ有と問給へば、井彈正、凶を聞て愼ますと云事や候べき、唯今夜の御遊をば、可レ被レ止とこそ存候へとぞ申ける。佐殿げにもと思給ければ、俄に風氣の心地有とて、竹澤をぞ被レ歸ける。竹澤は今夜の企案に相違して、不レ安思けるが、抑佐殿の少將の御局の文を御覽じて止り給つるは、如何樣我企を內々推して被レ告申たる者也。此女性を生て置ては叶まじとて、翌の夜潛に

ひたゝけたる式—心みだれたる體といふ意

其方様の草の云々—敵方に關係ある末々のものまでの意

玉妃—楊貴妃

の御所より、少將殿と申ける上﨟女房の、年十六七許なる容色無レ類心様優にやさしく坐けるを、兎角申下て、先己が養君にし奉り、御裝束女房達に至まで、様々にし立て、潛に兵衛佐殿の方へぞ出たりける。義興元來好色の心深かりければ、無レ類思通して、一夜の程の隔も、千年を經る心地に覺ければ、常に隱家を替んともし給はず、少ひたゝけたる式にて、其方様の草のゆかりまでも、可ニ心置一事とは露許も思給はず。誠に褒姒一たび笑で、幽王傾レ國、玉妃傍に媚て、玄宗失レ世給しも、角やと被ニ思知一たり。されば太公望が、好レ利者、與ニ財珍一迷レ之、好レ色者、與ニ美女一惑レ之と、敵を謀る道を教しを、不レ知けるこそ愚なれ。角て竹澤奉公の志切なる由を申けるに、兵衛佐早心打解て、見參し給ふ。軈て鞍置たる馬三匹、唯今威し立たる鎧三領、召替の爲とて引進す。是のみならず、越後より附纏奉て、此彼に隱居たる兵共に、皆一獻を進め、馬物具衣裳太刀刀に至まで、用々に隨て、不レ漏是を引ける間、兵衛佐殿も竹澤を異ニ于他思をなされ、傍輩共も皆是に過たる御要人不レ可レ有と、悅ばぬ者は無りけり。加様に朝夕宮仕の勞を積み、晝夜無二の志を顯て、半年許に成にければ、佐殿今は何事に附ても、心を置給はず、謀反の計略、與力の人數、一事も不レ殘、心底を盡て被レ知ける

身一つは過ぬ歟、身一つの生活は出來ぬか

道の法をや。一人の科を誡るは、萬人を爲レ助也。此時緩々の沙汰致さば、向後の狼藉不レ可レ斷とて、則竹澤が所帶を沒收して、其身を被二追出一けり。竹澤一言の陳謝にも不レ及、穴ことごとし、左馬頭殿に仕はれぬ侍は、身一つは過ぬ歟と、飽まで廣言吐散して、己が所領へぞ歸にける。角て數日有て、竹澤潛に新田兵衛佐殿へ人を奉て申けるは、親にて候し入道、故新田殿の御手に屬し、元弘の鎌倉合戰に、忠を抽で候き。某又先年武藏野の御合戰の時、御方に參て忠戰致し候し條、定て思召忘候はじ。其後は世の轉變度々に及で、御座所をも更に存知仕らで候つる間、無レ力暫の命を助て、御代を待候はん爲に、畠山禪門に屬して候つるが、心中の趣氣色に顯れ候けるに依て、指たる罪科とも覺えぬ事に、一所懸命の地を沒收せらる。結句可レ討なんどの沙汰に及び候し間、則武藏の御陣を逃出て、當時は深山幽谷に隱れ居たる體にて候。某が此間の不義をだに、御免あるべきにて候はゞ、御内奉公の身と罷成候て、自然の御大事には、御命に代り進せ候べしと、念比にぞ申入たりける。兵衛佐是を聞給て、暫は申所誠しからずとて、見參をもし給はずして、密議なんどを被レ爲レ知事も無りければ、竹澤尙も心中の僞らざる處を顯て、近附奉らんため、京都へ人を上せ、ある宮

御制法候はんずる事ー御制禁となりて居る事

レ知、又五百騎三百騎の勢を以て、道に待て夜討に寄て討んとすれば、義興更に事共せず蹴散しては道を通り、打破ては圍を出、千變萬化惣て人の業に非ずと申ける間、今はすべき様なしとて、手に餘てぞ覺えける。さても此事如何すべきと、畠山入道道誓、晝夜案じ居たりけるが、或夜潛に竹澤右京亮を近附て、御邊は先年武藏野の合戰の時、彼の義興の手に屬して忠ありしかば、義興も定て其舊好を忘れじとぞ思はるらん。されば此人を僞て討んずる事は、御邊に過たる人不レ可レ有。如何なる謀をも運して、義興を討て左馬頭殿の見參に入給へ。恩賞は宜レ依レ請とぞ語れける。竹澤は元來欲心熾盛にして、人の嘲をも不レ顧、古の好をも不レ思、無レ情者也ければ、曾て一議をも申さず。さ候はゞ、兵衛佐殿の疑を散じて、相近附候はん爲に、某態と御制法候はんずる事を背て、御勘氣を蒙り、御内を罷出たる體にて、本國へ罷下て後、此人に取寄り候べしと、能々相謀て、己が宿所へぞ歸ける。兼て謀つる事なれば、竹澤翌日より宿々の傾城共を數十人呼寄て、遊戲れ舞歌ふ。是のみならず、相伴ふ傍輩共二三十人招集て、博奕を晝夜十餘日までぞしたりける。或人是を畠山に告知せたりければ、畠山大に僞り忿て、制法を破る罪科非レ一、凡破二道理一法はあれども、法を破る道理なし。況や有

張本の輩―新田に内通したる頭領の人々

去程に尊氏卿逝去あつて後、筑紫は加樣に亂れぬといへ共、東國は未靜也。爰に故新田左中將義貞の子息左兵衛佐義興、其弟武藏少將義宗、故脇屋刑部卿義助の子息右衛門佐義治三人、此三四年が間、越後國に城郭を構へ、半國許を打從て居たりけるを、武藏上野の者共の中より、無二心由の連署の起請を書て、兩三人の御中に、一人東國へ御越候へ。大將にし奉て、義兵を揚げ候はんとぞ申たりける。義宗義治二人は、思慮深き人也ければ、此比の人の心、無左右難憑とて、不被許容。義興は大早にして、忠功人に先立たん事を、いつも心に懸て思はれければ、是非の遠慮を廻さるゝまでもなく、僅に郎從百餘人を行つれたる旅人の樣に見せて、竊に武藏國へぞ越られける。元來張本の輩は申に不及、古新田義貞に忠功有し族、今畠山入道道誓に恨を含む兵、竊に音信を通じ、頻に媚を入て、催促に可隨由を申者多かりければ、義興今は身を寄る所多く成て、上野武藏兩國の間に、其勢漸萠せり。天に耳無といへども、是を聞に人を以てする事なれば、互に隱密しけれ共、兄は弟に語り、子は親に知せける間、此事無程鎌倉の管領足利左馬頭基氏朝臣、畠山入道道誓に聞えてけり。畠山大夫入道是を聞しより、敢て寢食を安くせず、在所を尋聞て、大勢を差遣せば、國内通計して、行方を不

三人張の精兵—三人張の強弓を引く程の精兵

されて、眞前に懸入る。敵此を見知たりければ、射て落さんと、鏃をそろへて如二雨降一射けれ共、菊池が著たる鎧は、此合戰の爲に、三人張の精兵に、草摺を一枚宛射させて、通らぬさねを一枚まぜに拵て威たれば、如何なる強弓が射けれ共、裏かく矢一も無りけり。馬は射られて倒れ共、乘手は創を被らねば、乘替ては懸入々々、十七度迄懸けるに、菊池冑を落されて、小鬢を二太刀切れたり。すはや討れぬと見えけるが、小貳新左衛門武藤と押雙て組で落、小貳が首を取て、鋒に貫き、冑を取て打著て、敵の馬に乘替、敵の中へ破て入、今日の卯刻より酉の下まで、一息をも不レ繼相戰けるに、新小貳を始として、一族二十二人、憑切たる郎從四百餘人、其外の軍勢三千二百二十六人まで討れにければ、小貳今は叶はじとや思けん。太宰府へ引退て、寶萬嶽に引上る。菊池も勝軍はしたれども、討死したる人を數れば、千八百餘人と註したりける。續て敵にも不レ懸、且手負を助てこそ、又合戰を致さめとて、肥後國へ引返す。其後は敵も御方も皆己が領知の國に楯籠て、中々軍も無りけり。

○新田左兵衛佐義興自害事

饗庭右衛門―上文に左衛門に作る

宮、合田筑前入道、熊谷豐後守、三栗屋十郎、太宰修理亮、松田丹後守、同出雲守、熊谷民部大輔以下、宗徒の兵三百餘人討死しければ、將軍方には、饗庭右衛門藏人、同左衛門大夫、山井三郎、相馬小太郎、木綿左近將監、西河兵庫助、草壁六郎以下、憑切たる兵共七百餘人討れにけり。三番には、宮の御勢、新田一族、菊池肥後守一手に成て、三千餘騎、敵の中を破て、蜘手十文字に懸散んと、喚いて蒐る。小貳、松浦、草壁、山賀、島津、澁谷の兵二萬餘騎、左右へ颯と分れて散々に射る。宮方の勢射立られて引ける時、宮は三所まで深手を負せ給ければ、日野左少辨、坊城三位、洞院權大納言、花山院四位少將、北山三位中將、北畠源中納言、春日大納言、土御門右少辨、高辻三位、葉室左衛門督に至まで、宮を落し進せんと、蹈留て討れ給ふ。是を見て新田の一族三十三人、其勢千餘騎横合に懸て、兩方の手崎を追まくり、眞中へ會釋もなく懸入て、引組で落、打違て死、命を限に戰けるに、世良田大膳大夫、田中彈正大弼、岩松相摸守、桃井右京亮、堀口三郎、江田丹後守、山名播磨守、敵に組れて討れにけり。菊池肥後守武光、子息肥後二郎は、宮の御手を負せ給のみならず、月卿雲客新田一族達、若干討るるを見て、何の爲に可レ惜命ぞや。日來の契約不レ違我に伴ふ兵共、不レ殘討死せよと勵

父の起請を云々―父の起請に背きし罪を子の負ひたるにやの意

ろ事もなく、此に寄合彼に懸合て、喚叫て追つ返つ同士打をする事數刻也しかば、小貳憑切たる兵三百餘人、同士打にこそ討れけれ。敵陣騷亂て、夜已に明ければ、一番に菊池次郎、件の起請の旗を進て、千餘騎にてかけ入。小貳が嫡子太宰新少貳忠資、五千餘騎にて戰けるが、父が起請や子に負けん、忠資忽に打負て、引返々々戰けるが、敵に組れて討れにけり。是を見て朝井但馬將監胤信、筑後新左衛門、窪能登守、肥前刑部大輔、百餘騎にて取て返し、近附く敵に引組々々、刺違て死ければ、菊池孫次郎武明、同越後守、賀屋兵部大輔、見參岡三河守、庄美作守、宇都宮刑部丞、國分次郎以下、宗徒の兵八十三人、一所にて皆討れにけり。小貳が一陣の勢は、大將の新小貳討れて引退ければ、菊池が前陣の兵、汗馬を伏て控たり。二番に菊池が甥、肥前次郎武信、赤星掃部助武貫、千餘騎にて進めば、小貳が次男太宰越後守頼泰、竝に太宰出雲守二萬餘騎にて相向ふ。初は百騎宛出合て戰けるが、後には敵御方二萬二千餘騎、颯と入亂、此に分れ彼に合、半時許戰けるが、組で落れば下重り、切て落せば首をとる。戰未決前に、少貳方には赤星掃部助武貫を討て悅び、寄手は引返す。菊池が方には、太宰越前守を虜て、勝鬨を上てぞ悅ける。此時宮方に、結城右馬頭、加藤大夫判

熊野の牛王—熊野牛王寶印と六字と神使といはるゝ烏七十五羽とを捺したる誓紙をいふ

に、菊池は先己が手勢五千餘騎にて、筑後河を打渡り、小貳が陣へ押寄す。小貳如何思けんレ不戰、三十餘町引退き、大原に陣を取る。菊池つゞいて攻んとしけるが、あはひに深き沼有て、細道一つ有けるを、三所掘切て、細き橋を渡たりければ、可レ渡樣も無りけり。兩陣僅に隔て、旗の文鮮に見ゆる程になれば、菊池態と小貳を爲レ令レ恥、金銀にて月日を打て著たる旗の蟬本に、一紙の起請文をぞ押たりける。此は去年太宰小貳、古浦城にて已に一色宮内大輔に討れんとせしを、菊池肥後守大勢を以て後攻をして、小貳を助たりしかば、小貳悦に不レ堪、今より後子孫七代に至まで、菊池の人々に向て、弓を引矢を放事不レ可レ有と、熊野の牛王の裏に、血をしぼりて書たりし起請なれば、今無レ情心變したる處のうたてしさを、且は天に訴、且は爲レ令レ知レ人也けり。八月十六日の夜半許に、菊池先夜討に馴たる兵を三百人勝て、山を越水を渡て、搦手へ廻す。宗徒の兵七千餘騎をば三手に分て、筑後河の端に副て、河音に紛て、嶮岨へ廻て押寄す。大手の寄手、今は近附んと覺ける程に、搦手の兵三百人敵の陣へ入て、三處に鬨の聲を揚げ、十方に走散て、敵の陣々へ矢を射懸て、後へ廻てぞ控たる。分内狹き所に六萬餘騎の兵、沓の子を打たる樣に、役所を作雙たれば、鬨の聲に驚き、何を敵と見分た

田筑前前司、三原秋月の一族、島津上總入道、澁谷播磨守、本間十郎、土屋三郎、松田彈正少弼、河尻肥後入道、詫間三郎、鹿木子三郎、此等を宗徒の侍として、都合其勢六萬餘騎、杜渡を前に當て、味坂庄に陣を取る。宮方には、先帝第六の皇子、征西將軍宮、洞院權大納言、竹林院三位中將、春日中納言、花山院四位少將、土御門少將、坊城三位、葉室左衞門督、日野左少辨、高辻三位、九條大外記、子息主水正、新田一族には、岩松相摸守、世良田大膳大夫、田中彈正大弼、桃井左京亮、江田丹波守、山名因幡守、堀口三郎、里見十郎、侍大將には、菊池肥後守武光、子息肥後次郎、甥肥前次郎武信、同孫三郎武明、赤星掃部助武貫、城越前守、賀屋兵部大輔、見參岡三河守、庄美作守、國分二郎、故伯耆守長年が次男名和伯耆權守長秋、三男修理亮、宇都宮刑部丞、千葉刑部大輔、白石三河入道、鹿島刑部大輔、大村彈正少弼、太宰權少貳、宇都宮壹岐守、大野式部大輔、派讃岐守、溝口丹波守、牛糞越前權守、波多野三郎、河野邊次郎、稻佐治部大輔、谷山右馬助、澁谷三河守、同修理亮、島津上總四郎、齋所兵庫助、高山民部大輔、伊藤攝津守、絹脇播磨守、土持十郎、合田筑前守、此等を宗徒の兵として、其勢都合八千餘騎、高良山、柳坂、水繩山、三箇所に陣をぞ取たりける。同七月十九日

我命を希有にして—我命の助かりしを不思議の事にしての意

小貳、阿蘇大宮司、宮方を背く氣色無りければ、彼等に牒じ合て、菊池五千餘騎を率して、大友を退治せん爲に豐後國へ馳向ふ。此時太宰小貳俄に心替して、太宰府にして旗を擧ければ、阿蘇大宮司是に與して、菊池が跡を塞がんと、小國と云處に九箇所の城を構て、菊池を一人も討漏さじとぞ企ける。菊池兵糧運送の路を止られて、豐後へ寄る事も不レ叶、又太宰府へ向はんずる事も難儀也ければ、先我肥後國へ引返てこそ、其用意をも致さめとて、菊池へ引返しけるが、阿蘇大宮司が構たる、九箇所の城を一々に攻落して通るに、阿蘇大宮司憑切たる手者共、三百餘人討れければ、敵の通路を止むるまでは不レ寄レ思、我身の命を希有にしてこそ落行けれ。去程に七月に、征西將軍宮を大將として、新田の一族、菊池の一類、太宰府へ寄と聞えしかば、小貳は陣を取て敵を待んとて、大將太宰筑後守頼尚、子息筑後新小貳忠資、甥太宰筑後守頼泰、朝井但馬將監胤信、筑後新左衞門頼信、窪能登太郎泰助、肥後刑部大輔泰親、太宰出雲守頼光、山井三郎惟則、饗庭左衞門藏人重高、同左衞門大夫行盛、相馬小太郎、木綿左近將監、西河兵庫助、草壁六郎、牛糞刑部大輔、松浦黨には、佐志將監、田平左衞門藏人、千葉右京大夫、草野筑後守、子息肥後守、高木肥前守、綾部修理亮、藤木三郎、幡田次郎、高

十一月十七日―延文三年也

二十餘年―原本二十四年に作る、異本に據りて改む

聞えければ、力を失て機を呈さず。斯る處に畠山治部大輔が、未宮方には從はで、楯籠たる六笠城を攻んとて、菊池肥後守武光四千餘騎にて、十一月十七日肥後國を立て、日向國へぞ向ける。道四日路が間、山を越川を渡て、行前は嶮岨に跡は難所にてぞ有ける。小貳、大友、菊池が催促に應じて、豐後國中に打出て、勢汰をしけるが、是こそよき時分なれと思ければ、菊池を日向國へ遣り過して後、大友刑部大輔氏時、旗を擧て豐後の高崎城に取上る。宇都宮大和前司は、河を前にして豐前の路を塞ぎ、肥前刑部大輔は山を後に當て、筑後の道をぞ塞ける。菊池已に前後の大敵に取籠られて、何へか可引。唯籠の中の鳥網代の魚の如しと、憐まぬ人も無りけり。菊池此二十餘年が間、筑紫九國の者共が軍立手柄の程を、敵に受、御方になして、能知透したりければ、後には敵旗を上、路を塞たりと聞えけれ共、更に事ともせず、十一月十日より矢合して、畠山治部大輔が子息民部少輔が籠たる三俣城を晝夜十七日が中に攻落て、敵を討こと三百人に及べり。畠山父子憑切たる三俣城を落されて、叶はじとや思けん、攻の城にもたまらず、引て深山の奥へ逃籠ければ、菊池今は是までぞとて肥後國へ引返すに、跡を塞ぎし大敵共、更に戰ふ事なければ、箭の一をも不射己が館へぞ歸ける。是までは未太宰

りけり。病附て七日に當ける卯刻に、黄なる旗一旒差て、混冑の兵千騎許、三方より同時に鬨の聲を揚て押寄たり。誰とは不ㇾ知敵寄たりと心得て、此間馳集たる兵共五百餘人、大庭に走出て散々に射る。箭種盡ぬれば、打物に成て追つ返つ半時許ぞ戰たる。搦手より寄ける敵かと覺て、紅の母衣掛たる兵十餘騎、大將細川伊豫守が首と、家人行吉掃部助が首とを取て、鋒に貫き、惡しと思ふ者をば皆打取たるぞ。是看よや兵共とて、二の首を差上たれば、大手の敵七百餘騎、勝鬨を三聲どつと作て、歸るを見れば、此寄手天に上り雲に乘じて、白峯の方へぞ飛去ける。變化の兵歸去れば、是を防つる者共、討れぬと見えつる人も不ㇾ死、手負と見えつるも恙なし。こはいかなる不思議ぞと、互に語り互に問て、暫あれば伊豫守も行吉も、同時に無ㇾ墓成にけり。誠に濁惡の末世と乍ㇾ云、不思議なる事共なり。

○菊池合戰事

小貳、大友は、菊池に九國を打從られて、其成敗に從ふ事不ㇾ安思ければ、細川伊豫守の下向を待て、旗を擧んと企けるが、伊豫守、崇德院御靈に罰せられて、犬死しぬと

無沙汰に閣かば—手をつくろ事なく打捨てゝ置かばの意なり

〇崇徳院御事

今年の春、筑紫の探題にて、將軍より被置たりける一色左京大夫直氏、舎弟修理大夫範光は、菊池肥前守武光に打負て、京都へ被上ければ、小貳、大友、島津、松浦、阿蘇、草野に至まで、皆宮方に從ひ靡き、筑紫九國の内には、唯畠山治部大輔が、日向の六笠城に籠たる計ぞ、將軍方とては殘ける。是を無沙汰にて閣かば、今將軍の逝去に力を得て、菊池如何樣都へ攻上りぬと覺る、是天下の一大事也。急で討手の大將を下さでは叶まじとて、故細川陸奥守顯氏の子息、式部大夫繁氏を伊豫守になして、九國の大將にぞ下されける。此人先讃岐國へ下り、兵船をそろへ軍勢を集る程に、延文四年六月二日俄に病附て、物狂に成たりけるが、自ら口走て、我崇徳院の御領を落して、軍勢の兵粮料所に充行しに依て、重病を受たり。天の譴八萬四千の毛孔に入て、五臓六腑に餘る間、冷じき風に向へ共、盛なる炎の如く、ひやゝかなる水を飲共、沸返る湯の如し。あらあつや難堪や。是助てくれよと悲み叫て、悶絶躃地しければ、醫師陰陽師の看病の者共、近附んとするに、當四五間の中は、猛火の盛に燃たる樣に熱して、更に近附人も無

新千載集―延文四年藤原爲定の奏せる勅撰歌集

歸るべき道しなければ位山、上るに附てぬるゝ袖かな。

と被詠けるを、勅使も哀なる事に聞て、有の儘に奏聞しければ、君無限叡感有て、新千載集を被撰けるに、委細の事書を載られて、哀傷の部にぞ被入ける。勅賞の至、誠に忝かりし事共なり。

○新待賢門院 附 梶井宮御隱事

同四月十八日、吉野の新待賢門の女院隱させ給ぬ。一方の國母にて御座ければ、一人を始め進せて、百官皆椒房の月に涙を落し、掖庭の露に思を摧く折節、如何に有ける事ぞやとて、涙を拭ける處に、又同年五月二日梶井二品親王御隱有ければ、山門の悲歎竹苑の御嘆更に類なし。此等は皆天下の重き歎なりしかば、知も知ぬも推泣て、世の中如何あらんずらんと打ひそめき、洛中山上南方打續たる哀傷、蘭省露深く、柳營煙暗して、台嶺の雲の色悲んで、今年は如何なる歲なれば、高き歎の花散て、陰の草葉に懸るらんと、僧俗男女共に押泣て袖をぞ絞ける。

一方剤の中に主とする薬を君とし他の薬を臣とし佐とし使とする意

下火ー火葬の際に火をかけること

有験の高僧集て、鬼見太山府君、星供、冥道供、薬師の十二神將法、愛染明王、一字文珠、不動慈救延命の法、種々の懇祈を致せ共、病日に隨て重くなり、時を添て憑少く見え給しかば、御所中の男女氣を呑み、近習の從者涙を抑て、日夜寢食を忘たり。斯りし程に、身體次第に衰へて、同二十九日寅刻、春秋五十四歳にて、遂に逝去し給けり。さらぬ別の悲さは、さる事ながら、國家の柱石摧けぬれば、天下今も如何とて、歎き悲む事無レ限。さて可レ有非ずとて、中一日有て、衣笠山の麓、等持院に葬し奉る。鎖龕は天龍寺の龍山和尚、起龕は南禪寺の平田和尚、奠茶は建仁寺の無徳和尚、奠湯は東福寺の鑑翁和尚、下火は等持院の東陵和尚にてぞおはしける。哀なる哉、武將に備て二十五年、向ふ處は必從ふといへ共、無常の敵の來るをば、防ぐに其兵なし。悲哉、天下を治て六十餘州、命に隨ふ者多しといへども、有爲の境を辭するには、伴て行く人もなし。身は忽に化して、暮天數片の煙と立上り、骨は空く留て、卵塔一掬の塵と成にけり。別の涙搔暮て、是さへとまらぬ月日哉。五旬無レ程過ければ、日野左中辨忠光朝臣を勅使にて、從一位左大臣の宮を贈らる。宰相中將義詮朝臣、宣旨を啓て三度拜せられけるが、涙を押て、

一立―一度の立合

論人―訴訟人

公人―官人

君臣佐使―

此茶事過て、又博奕をして遊けるに、一立に五貫十貫立ければ、一夜の勝負に五六十貫負る人のみ有て、百貫とも勝人はなし。此も田樂、猿樂、傾城、白拍子に賦り捨ける故也。抑此人々長者の果報有て、地より物が涌ける歟、天より財が降けるか。非レ降非レ涌、唯寺社本所の所領を押取り、土民百姓の資財を責取り、論人訴人の賄賂を取集たる物共也。古の公人たりし人は、賄賂をも不レ取、勝負をもせず、囲棊雙六をだに酷禁ぜしに、萬事の沙汰を閣て、訴人來れば、酒宴茶の會なんど云て、不レ及二對面一、人の歎をも不レ知、嘲をも不レ顧、長時に遊狂けるは、前代未聞の僻事なり。斯りし程に、延文三年二月十二日、故左兵衛督直義入道慧源、さしも爪牙耳目の武臣たりしかば、従二位の贈爵を、苔の下なる遺骸にぞ賜ける。法體死去の後、如レ此宣下無二其例一とぞ、人皆申合れける。

○將軍御逝去事

同年四月二十日、尊氏卿背に癰瘡出て、心地不レ例御座ければ、本道外科の醫師、數を盡して參集り、倉公華佗が術を盡し、君臣佐使の藥を施し奉れ共、更無レ驗。陰陽頭

十番の齋羹
點心—十番は數の多きをいひ齋羹は精進物の汁、點心は間食に供する菓子類をいふ
五味—酸苦甘辛鹹
沈のほた—沈香の木片

活計を盡すに、異國本朝の重寶を集め、百座の粧をして、皆曲彔の上に豹虎の皮を布き、思々の緞子金襴を裁著て、四主頭の座に列をなして並居たれば、唯百福莊嚴の床の上に、千佛の光を雙て坐し給るに不ㇾ異。異國の諸侯は遊宴をなす時、食膳方丈とて、座の圍四方一丈に珍物を備ふなれば、其に不ㇾ可ㇾ劣とて、面五尺の折敷に、十番の齋羹、點心百種、五味の魚鳥、甘酸苦辛の菓子共、色々様々居雙たり。飯後に旨酒三獻過て、茶の懸物に百物、百の外に又前引の置物をしけるに、初度の頭人は、奥染物各百宛、六十三人が前に積む。第二度の頭人は、色々の小袖十重宛置。三番の頭人は、沈のほた百兩宛、麝香の臍三宛副て置。四番の頭人は、沙金百兩宛金絲花の盆に入て置。五番の頭人は、唯今爲立たる鎧一縮に、鮫懸たる白太刀、柄鞘皆金にて打くゝみたる刀に、虎の皮の火打袋をさげ、一様に是を引く。以後の頭人二十餘人、我人に勝れんと、様をかへ數を盡して、如ㇾ山積重ぬ。されば其費幾千萬と云事を不ㇾ知。是をもせめて取て歸らば、互に以ㇾ此彼に替たる物共とすべし。ともにつれたる遁世者、見物の爲に集る田樂、猿樂、傾城、白拍子なんどに皆取くれて、手を空して歸しかば、窮民孤獨の飢を資るにも非ず、又供佛施僧の檀施にも非ず、唯金を泥に捨て、玉を淵に沈めたるに相同じ。

八珍―八種の珍味卽ち淳熬淳母炮豚炮牂擣珍漬熬肝膋をいふ

なんどは有て、其人はなし。こは如何に成ぬる事ぞやと、周章騒ぎて、彼方此方求ありく程に、渡より少し下なる井堰に、奇き物のあるを立寄て見たれば、母と二人の子と、手に手を取組て流懸たり。取上て、泣悲め共、身も冷はてて色も早替はててければ、女房と二人の子を抱拘へて、又本の淵に飛入、共に空く成にけり。今に至まで、心なき野人村老、緣も知ぬ行客旅人までも、此川を通る時、哀なる事に聞傳て、淚を流さぬ人はなし。誠に悲しかりける有樣哉と、思遣れて哀なり。

○公家武家榮枯易レ地事

公家の人は加樣に窮困して、溝壑に塡、道路に迷けれ共、武家の族は富貴日來に百倍して、身には錦繡を纏ひ、食には八珍を盡せり。前代相摸守の天下を成敗せし時、諸國の守護、大犯三箇條の檢斷の外は、綺ふ事無りしに、今は大小の事共に、唯守護の計にて、一國の成敗我意に任すれば、地頭御家人を郎從の如くに召仕ひ、寺社本所の所領を兵粮料所とて、押て管領す。其權威唯古の六波羅、九州の探題の如し。又都には佐々木佐渡判官入道道譽を始として、在京の大名、衆を結で茶の會を始め、日々に寄合、

なまばうたる人—怪しき人

しかば、身も餘にくたびれ、足も不レ立成ぬとて、母少き者皆川のはたに倒れ伏て居たりければ、夫餘に見かねて、とある家のさりぬべき人の所と見えたる内へ行て、中門の前に彳て、つかれ乞をぞしたりける。暫有て内より侍中間十餘人走出て、用心の最中、なまばうたる人のつかれ乞するは、夜討強盗の案内見る者歟。不然ば宮方の廻文持て廻る人にてぞあるらん。禁置て栲問せよとて、手取足取打縛り、上つ下つ二時許ぞ責たりける。女房少き者、斯る事とは不ニ思寄一、川の端に疲れ臥て、今や〳〵と待居たりける處に、道を通る人行やすらひて、穴哀や、京家の人かと覺しき人の、年四十許なりつるが、疲れ乞しつるを怪き者かとて、あれなる家に捕へて上つ下つ責つるが、今は責殺てぞあるらんと申けるを聞て、此女房少き者、今は誰に手を牽れ誰を憑てか、暫の命をも助るべき。後れて死なば、冥途の旅に獨迷はんも可レ憂。暫待て作はせ給へと、聲々に泣悲て、母と二人の少き者、互に手に手を取組、思出河の深淵に身を投けるこそ哀なれ。兵部少輔は、いかに責問けれ共、此者元來咎なければ、落ざりける間、さらば許せとて許されぬ。是にもこりず、妻子の飢たるが悲さに、又とある在家へ行て、菓なんどを乞集て、さきの川端へ行て見るに、母少き者共が著たる小草鞋杖

離々たる—垂るゝ貌
朝氣の煙—朝食を炊ぐ煙
首陽に死する人—餓死する人の意、伯夷叔齊の故事に據る也

上諸司百官の宿所々々、多く燒亡て、今は纔に十が二三殘たりしを、又今度の東寺合戰の時、地を拂て、京白川に武士の屋形の外は、在家の一字もつゞかず。離々たる原上の草、累々たる白骨、叢に纏れて、有し都の跡共不レ見成にければ、蓮府槐門の貴族、なま上達部、上﨟女房達に至まで、或は大井桂川の波の底の水屑となる人もあり、或は遠國に落下て、田夫野人の賤きに身を寄せ、或は片田舍に立忍て、桑門竹扉に住わび給へば、夜の衣薄して曉の霜冷く、朝氣の煙絕て後、首陽に死する人多し。中にも哀に聞えしは、或る御所の上北面に、兵部少輔なにがしとかや云ける者、日來は富榮て、樂身に餘けるが、此亂の後財寶は皆取散され、從類眷屬は何地共なく落失て、唯七歲になる女子、九つになる男子と、年比相馴し女房と、三人許ぞ身に添ける。都の內には身を可レ置露路のゆかりも無て、道路に袖をひろげん事もさすがなれば、思かねて女房は娘の手を引、夫は子の手を引て、泣々丹波の方へぞ落行ける。誰を憑としもなく、何へ可ニ落著一共覺ねば、四五町行ては野原の露に袖を片敷て泣明し、一足步では木の下草にひれ臥て泣暮す。唯夢路をたどる心地して、十日許に丹波國井原の岩屋の前に流たる思出河と云所に行至りぬ。都を出しより、道に落たる栗柿なんどを拾て、纔に命を繼

ぬらす月さへ疎く成にけり。本院は去觀應三年八月八日、河内の行宮にして御出家あり。御年四十一。法名勝光智とぞ申ける。御歸洛の後、本院新院兩御所ともに、夢窻國師の御弟子に成せ給て、本院は嵯峨の奧小倉の麓に、幽なる御庵を結ばれ、新院は伏見の大光明寺にぞ御座有ける。何れも物さびしく、人目枯たる御栖居、申も中々疎なり。彼悉達太子は、淨飯王の宮を出て、檀特山に分入、善施太子は鳩留國の翁に身を與へて、檀施の行を修し給ふ。是は皆十千の國を并せたる、十六の大國を保給し王位なれ共、捨るとなれば、其位一塵よりも猶輕し。況や我國は粟散邊地の境也。縱天下を一統にして無爲の大化に樂ませ給ふ共、彼の大國の王位に比すれば、千億にして其一にも難ㇾ及。加樣の理を思召知せ給て、憂を便に捨はてさせ給ぬる世なれば、御身も輕きのみならず、御心も又閑にして、半間の雲一榻の月、禪餘の御友と成にければ、中々御心安くぞ渡らせ給ける。

○飢人投ㇾ身事

角て事の樣を見聞に、天下此二十餘年の兵亂に、禁裏仙洞竹苑椒房を始として、公卿殿

十千の國—原本十善の國に作る、王經に閻浮提有㆓十六大國五百中國十千小國㆒云々とあり

半間の雲云云—雲に家の一間を借し月に榻を分ち與ふる意

鬼味噌—羊質虎皮の意にて俗によわみそといふこと

茨宮—後光嚴帝

兎に角に取立にける石堂も、九重よりして又落にけり。

深き海高き山名と頼むなよ、昔もさりし人とこそきけ。

唐橋や鹽の小路の燒しこそ、桃井殿は鬼味噌をすれ。

○三上皇自二吉野一御出事

足利右兵衛佐直冬、尾張修理大夫高經、山名伊豆守時氏、桃井播磨守直常以下の官軍、今度諸國より攻上て、東寺神南度々の合戰に打負しかば、皆己が國々へ逃下て、猶此素懐を達せん事を謀る。依レ之、洛中は今靜謐の體にて、髪を被り衽を左にする人はなけれども、遠國は猶しづまらで、戈を荷ひ粮を裹こと隙なし。爰に持明院の本院新院主上春宮は、皆去々年の春、南方へ囚れさせ給て、賀名生の奥に、被二押籠一御座しかば、とても都には茨宮已に御位に卽せ給ぬる上は、山中の御栖居、餘に御痛はしければとて、延文二年の二月に、皆賀名生の山中より出し奉て、都へ還幸なし奉る。上皇は故院の住荒させ給し伏見殿に移らせ給て御座あれば、參仕る月卿雲客の一人もなし。庭には草生滋りて、梧桐の黄葉を踏分たる道もなく、軒には苔深くむして、見人からに袖

蘋蘩—神への供物をいふ

きねが袖—きねは巫女のこと

託宣の神子—神の仰を告ぐる巫女

し、託宣の言に附て軍の吉凶を知べしとて、樣々の奉幣を奉り、蘋蘩を勸て、則神の告をぞ待れける。社人の打つ鼓の聲、きねが袖ふる鈴の音、深け行月に神さびて、聞人信心を傾たり。託宣の神子、啓白の句、言巧に玉を連ねて、樣々の事共を申けるが、

　たらちねの親を守の神なれば、此手向をば受る物かは。

と、一首の神歌を、くり返し〱二三反詠じて、其後御神はあがらせ給にけり。諸大將是を聞て、さては此兵衛佐殿を大將にて、將軍と戰はん事は向後も叶まじかりけりとて、東山北陸道の勢は、駒に策をうち、己が國々へ馳下り、山陰西海の兵は、船に帆を揚て落て行。誠に征罰の法、合戰の體は、士卒に有といへ共、雌雄は大將に依る者也。されば、周武王は木主を作て、殷の世を傾け、漢高祖は義帝を尊て、秦の國を滅せし事、舊記の所載、誰か之を不知。直冬是何人ぞや。子として父を攻んに、天豈許す事あらんや。始遊和軒朴翁が、天竺震旦の例を引て、今度の軍に宮方勝事を難得と、眉を顰て申しを、げにも理なりけりとは、今社思ひ知れたれ。東寺落て翌の日、東寺の門にたつ。

飽庭—北條家本南都本饗庭に、西源院本秋庭肥後守に作る

大夫賴章は、一度も桂川より東へ打越ず、唯嵐山より遙に直下して、御方の勝げに見ゆる時は、延上て悅び、負るかと覺しき時は、色を變じて落支度の外は他事なし。同陣に有ける備中の守護飽庭計ぞ餘に見兼て、己が手勢計を引分て、度々の合戰をばしたりける。され共大厦は非二一木支一、山陰道をば賴章の勢に塞れ、山陽道は義詮朝臣に圍れ、東山北陸道の兩道は將軍の大勢に塞れて、僅に河内路より外はあきたる方無りければ、兵糧運送の道も絕ぬ。重て攻上るべき援の兵共もなし。合戰は今まで牛角なれ共、將軍の勢日々に隨て重る。斯ては始終叶はじとて、三月十三日の夜に入て、右衞門佐直冬朝臣、國々の大將相共に、東寺淀鳥羽の陣を引て、八幡住吉天王寺境浦へぞ落られける。

○八幡御託宣事

爰にて落集たる勢を見れば、五萬騎に餘れり。此上に伊賀、伊勢、和泉、紀伊國の勢共、猶馳集るべしと聞えしかば、暫此勢を散さで、今一合戰可レ有歟と、諸大將の異見區也けるを、直冬朝臣、許否凡慮の及ぶ處に非ず、八幡の御寳前にして、御神樂を奏

立足もなく
一足の立場もなく

今御方の大勢共、立足もなくまくり立られて、敵皆勇進める眞中へ、會釋もなく懸入て、兄弟三人一族郎從三十六騎、一足も不レ引討死しける。那須が討死に、東寺の敵機に乘らば、合戰又難儀に成ぬと危く覺えける處に、佐々木六角判官入道崇永と、相摸守清氏と、兩勢一手に成て、七條大宮へ懸拔け、敵を西にうけ東に顧て、入替 入替 半時許ぞ 戰たる。東寺の敵も、此を先途と思けるにや、戒光寺の前に、垣楯搔て打出々々、火を散して戰けるに、相摸守薄手數多所に負て、すはや討れぬと見えければ、崇永彌進て是を討せじとぞ戰たる。斯處に土岐桔梗一揆五百餘騎にて、新手に替らんと進けるを見て、敵も新手をや憑けん、垣楯の陰をはつと捨、半町許ぞ引たりける。敵に息を繼せば、又立直す事もこそあれとて、佐々木と土岐と、垣楯の內へ入て、敵の陣に入替らんとしけるが、廻る程も猶遲くや覺えけん、佐々木が旗差堀次郎、竿ながら旗を內へ投入て、己が身は軈て垣楯を上り越てぞ入たりける。其後相摸守と桔梗一揆と左右より廻て、垣楯の中へ入、南に楯を突雙て、三千餘騎を一所に集め、向城の如くにて蹈へたれば、東寺に籠る敵軍の勢氣を屈し、勢を呑れて、城戶より外へ出ざりけり。京中の合戰は如レ此數日に及で、雌雄日々に替り、安否今にありと見えけれ共、時の管領仁木左京

て七千餘騎、七條西洞院へ推寄せ、一手は但馬丹後の敵と戰ひ、一手は尾張修理大夫高經と戰ふ。此陣の寄手、動すれば被㆓懸立㆒體に見えければ、將軍より使者を立られて、那須五郎を可㆓罷向㆒と被㆑仰ける。那須は此合戰に打出ける始、古郷の老母の許へ人を下して、今度の合戰に若討死仕らば、親に先立つ身と成て、草の陰苔の下までも、御歎あらんを見奉らんずる事こそ、想像も悲く存候へと、申遣たりければ、老母泣泣委細に返事を書て、申送けるは、古より今に至まで、武士の家に生るゝ人、名を惜て命を不㆑惜、皆是妻子に名殘を慕ひ、父母に別を悲むといへ共、家を思ひ嘲を恥る故に、惜かるべき命を捨る者也。始身體髮膚を我に受て、殘傷ざりしかば、其孝已に顯れぬ。今又身を立、道を行て、名を後の世に揚るは、是孝の終たるべし。されば今度合戰に、相構て身命を輕じて、先祖の名を不㆑可㆑失。是は元暦の古、曾祖那須與一資高八島の合戰の時、扇を射て名を揚たりし時の母衣也とて、薄紅の母衣を、錦の袋に入てぞ送たりける。さらでだに、戰場に莅ていつも命を輕ずる那須五郎が、老母に義を勸られて、彌氣を勵しける處に、將軍より別して使を立られ、此陣の戰難儀に及ぶ。向て敵を拂へと、無㆓餘儀㆒も被㆑仰ければ、那須曾て一議も不㆑申畏て領狀す。唯

身體髮膚云云―孝經に身體髮膚受㆓之父母㆒不㆓敢毀傷㆒孝之始也、立㆑身行㆑道揚㆓名於後世㆒以顯㆓父母㆒孝之終也と見ゆ

後の革裾にて引敷の板をいふ也

寄て、遂に南部を討てければ、金乘南部が首を取て、鋒に貫て馳返る。此にて軍は止て、敵御方相引に、京白川へぞ歸にける。又同日の晩景に、仁木右京大夫義長、土岐大膳大夫頼康、其勢三千餘騎にて、七條河原へ押寄せ、桃井播磨守直常、赤松彈正少弼氏範、原、蜂屋が勢、二千餘騎と寄合て、河原三町を東西へ追つ返つ、煙塵を捲て、戰事二十餘度に及べり。中にも桃井播磨守が兵共、半過て創を被ければ、新手を替て相助けん爲に、東寺へ引返ける程に、土岐の桔梗一揆百餘騎に被二攻立一返合る者は切て落され、城へ引籠る者は城戸逆茂木にせかれ不二入得一。城中騒ぎ周章て、すはや唯今此城被二攻落一ぬとぞ見えたりける。赤松彈正少弼氏範は、郎等小牧五郎左衞門が痛手を負て引兼たるを助んと、馬上より手を引立て歩ませけるを、大將直冬朝臣、高櫓の上より遙に見給て、返して御方を助けよと、扇を揚て二三度まで招れける間、氏範小牧五郎左衞門をかい摑で、城戸の内へ投入、五尺七寸の太刀の鍔本取延て、唯一騎返合返合、馳竝馳竝切けるに、或は冑の鉢を立破に胷板まで破附られ、或は胴中を瓜切に斬て落されける程に、さしも勇める桔梗一揆、叶はじとや思けん、七條河原へ引退て、其日の軍は止にけり。三月十三日、仁木、細川、土岐、佐々木、佐竹、武田、小笠原相集

少も不騒、馬を東頭に立直して、閑に敵を待懸たり。細川黒田が大勢是を見て、あなづりにくしとや思けん。あはひ半町許に成て、馬を一足に颯とかけ居て、同音に鬨をどつと作る。朝倉少も不擬議、大勢の中へ懸入て、馬煙を立て切合ふ。左衛門佐是を見て、朝倉討すなつゞけとて、三百餘騎にて取て返し、六條東洞院の東へ、烏丸を西へ、追つ返つ七八度までぞ揉合たる。細川度毎に被追立體に見えけるに、南部六郎とて、世に勝たる兵有けるが、唯一騎踏止ては戰ひ、返合ては切て落し、八方をまくりて戰けるに、左衛門佐の兵共、箆白に成てぞ見えたりける。左衛門佐の兵の中に、三村首藤左衛門、後藤掃部助、西塔金乘坊とて、手番たる勇士五騎あり。互に屹と合眼して、南部に組んと相近附く。南部尻目に見て、から〳〵と打笑ひ、物々しの人々哉。いで胴切て太刀の金の程見せんとて、五尺六寸の太刀を、以て開て、片手打にしとと打。金乘房無透間つと懸寄て、むずと組。南部元來大力なれば、金乘を取て中に差上たれ共、人飛礫に打まではさすが不叶、太刀の寸延たれば、手本近してざけ切にもせられず、唯押殺さんとや思けん、築地の腹に推當てえいや〳〵と推けるに、己が乘たる馬、尻居に動と倒れければ、馬は南部が引敷の下に在ながら、二人引組で伏たり。四騎の兵馳

手番たる―打揃ひたるの意

引敷―鎧の

無間の業―無間地獄に墮つる業報

や多年になりぬれば、面變しけるにやと不審して、昨日降人に出たりける八田左衞門太郎と云ける者を被召、是をば誰が首とか見知たると問れければ、八田此首を一目見て、淚をはら〳〵と流し、是は越中國住人に、二宮兵庫助と申者の首にて候。去月に越前の敦賀に著て候し時、此二宮、氣比大明神の御前にて、今度京都の合戰に、仁木、細川の人々と見る程ならば、我桃井と名乘て、組で勝負を仕るべし。是若僞申さば、今生にては永く弓矢の名を失ひ、後生にては無間の業を受べしと、一紙の起請を書て、寶殿の柱に押て候しが、果して討死仕けるにこそと申ければ、其母衣を取寄て見給ふに、げにも越中國住人二宮兵庫助曝尸於戰場留名於末代とぞ書たりける。昔の實盛は鬢鬚を染て敵にあひ、今の二宮は名字を替て命をすつ。時代隔たるといへ共、其志相同じ。あはれ剛の者哉と、惜まぬ人こそ無りけれ。二月十五日の朝は、東山の勢共上京へ打入て、兵粮を取由聞えければ、蹴散かさんとて、苦桃兵部大輔、尾張左衞門佐、五百餘騎にて東寺を打出、一條二條の間を二手に成て打廻る。是を見て細川相摸守清氏、佐々木黑田判官、七百餘騎にて東山よりおり下る。尾張左衞門佐が後陣に、朝倉下野守が五十騎許にて通けるを、追攻て討んと、六條河原より京中へ懸入る。朝倉

綿嚙—鎧の肩の革にて作りたる處

て、黒瓦毛なる馬に厚總懸て乘たる武者、年の程四十許に見えたるが、唯一騎馬を閑々と歩ませ寄て、今日の合戰に進む時は、士卒に先立て進み、引時は士卒に殿れて引れ候つるは、如何樣細川相摸守殿にてぞ坐すらん。聲を聞ても我を誰とは知給はんずれ共、日已に夕陽に成ぬれば、分明に見分くる人もなくて、あはぬ敵にや逢んずらんと存ずる間、事新く名乘申也。是は今度北陸道を打從て罷上て候桃井播磨守直常にて候ぞ。あはれ相摸殿に參會て、日來承及し力の程をも見奉り、直常が太刀の金をも御覽候へかしと、高聲に名乘懸て、馬を北頭に立てぞ控たる。相摸守は元來敵に少も言を懸られて、たまらぬ氣の人なりければ、桃井と名乘たるを聞て、少も不レ擬議、是も唯一騎馬を引返て、歩ませ寄る。あひ近に成ければ、互にあはれ敵や。天下の勝負唯我と彼とが死生に可レ有。馬を懸合せ、組で勝負をせんと、鎧の綿嚙を摑んで引著たるに、言には不レ似、桃井が力弱く覺えければ、冑を引切て抛げ捨て、鞍の前輪に押當て、首掻切てぞ差擧たる。軈て相摸守の郎從十四五騎來たるに、此首と母衣とを持せて、將軍の御前へ參り、清氏こそ桃井播磨守を討て候へとて、軍の樣を申されければ、蠟燭を明に燃し、是を見給ふに、年の程はさもやと覺え乍ら、さすがそれとは不レ見。田舍に住で、早

太平記　巻第三十三

○京軍事

昨日神南の合戰に、山名打負て、本陣へ引返ぬと聞えしかば、將軍比叡山をおり下て、三萬餘騎の勢を率し、東山に陣をとる。仁木左京太夫頼章は、丹後丹波の勢三千餘騎を從て、嵐山に取上る。京より南、淀、鳥羽、赤井、八幡に至までは、宮方の陣となり、東山、西山、山崎、西岡は、皆將軍方の陣となる。其中に有とあらゆる神社佛閣は、役所の垣楯の爲に毀たれ、山林竹木は、薪櫓の料に剪盡さる。京中をば敵横合に懸る時、見透す樣になせとて、東山より寄て、日々夜々に燒拂ふ。白河をば敵を雨露に侵させて、人馬に氣を盡させよとて、東寺より寄て燒拂ふ。僅に殘る竹苑椒庭、里内裏、三台九棘の宿所々々、皆門戸を閉て人も無れば、野干の栖と成はて、荆棘扉を掩へり。去程に二月八日、細川相摸守清氏千餘騎にて、四條大宮へ押寄せ、北陸道の敵八百餘騎に懸台て、追つ返つ終日戰ひ暮して、左右へ颯と引退く處に、紺絲の鎧に紫の母衣懸

三台九棘—三公九卿と同じく、公卿をいふ

帛を散じて云々—絹布を人々に與へて死骸を取收めしめたる也

し。其後軍は休にけり。右衛門佐は淀へ打歸て、此軍に討れつる者共の、名字を一々に書註して、因幡の岩常谷の道場へ送り、亡卒の後世菩提をぞ弔はせられける。中にも河村彈正忠は、我命に代て討れつる者なればとて、懸たる首を敵に乞受て、空しき顏を一目見て、涙を流てくどかれけるは、我此亂を起して、天下を覆さんとせし始より、御邊が我を以て如ㇾ父憑み、我は御邊を子の如くに思き。されば戰場に臨む度毎に、御邊いきば我もいき、御邊討死せば、我も死なんとこそ契しに、人は依ㇾ義爲ㇾ我死し、我は命を助られて、人の跡に生殘たる恥かしさよ。苔の下草の陰にても、さこそ無二云甲斐一思給ふらめ。末の露と先立、本の滴と後るゝ共、再會は必九品淨土の臺に有べしと、泣々鬢を搔撫て、聖一人請じ寄て、今まで祕藏して被ㇾ乘たる白瓦毛の馬に白鞍置て葬馬に引せ、白太刀一振聖に與て、討死しつる河村が後生菩提を弔れける、情の程こそ有難けれ。昔唐の太宗戰に臨で、戰士を重くせしに、血を含み創を吮のみに非ず、亡卒の遺骸をば、帛を散じて收しも、斯やと覺て哀なり。

七寸ー承鞚とも書く、手綱の端を承くる轡の孔の稱

さんと思儲し事なれば、伊田、波多野、多賀谷、淺沼、藤山、土屋、福依、石原、久世、竹中、足立、河村、首藤、大庭、福塚、佐野、火作、宇多、河澤、敷美以下、宗徒の侍八十四人、其一族郎從二百六十三人、返合返合四五町が中にて討れにけり。右衞門佐は、小林民部丞が跡に蹈止て、防矢射けるを、討せじと七騎にて又取て返し、大勢の中へ懸入て、面も不レ振、戰はれける程に、左の眼を小耳の根へ射附られて、目くれ肝消ければ、太刀を倒に突て、些心地を取直さんとせられける處に、敵の雨の降如く射る矢、馬の太腹、草脇に五筋まで立ければ、小膝を折て動と伏す。馬より下立て、鎧の草摺たゝみ上て、腰の刀を拔て、自害をせんとし給けるを、河村彈正馳寄て、已が馬に搔乘せ、福間三郎が戰疲て、とある岩の上に休て居たりけるを招て、右衞門佐の馬の口を引せ、河村は徒立に成て、追て懸る敵に、走懸々々切死にこそ死にけれ。右衞門佐は乘替の馬に乘て、些人心は附たれ共、流るゝ血目に入て、東西更に不レ見ければ、馬廻に誰かある。此馬の口を敵の方へ引向よ。馳入、河村彈正が死骸の上にて、討死せんと勇けるを、福間三郎此方が敵の方にて候とて、馬の口を下り頭に引向け、自馬手の七寸に附て、小砂まじりの小篠原を、三町許馳落て、御方の勢にぞ加ける。爰までは追てかゝる敵もな

かさに敵を請たる―高所より落すが如く敵を請けたる也

追すがうて―追ひすがりての音便

大野彈正忠氏永、聲々につゞくぞ引なと、御方の兵に力を附て、喚てぞ懸たりける。かさに敵を請たる徒立の勢なれば、新手の馬武者に中を懸破られて、足をもためず、兩方の谷へ雪下て引を見て、初一陣二陣にて打散されつる四國中國の兵、此彼より馳來て、忽に千餘騎に成にけり。山名右衞門佐跡なる勢を麾て、猶懸入んと四方を見廻す處に、南方の官軍共、跡に千餘騎にて控たりけるが、何と云儀もなく、崩落て引ける間、矢種盡き氣疲たる山名が勢、心は猛く思へ共不叶、心ならず御方に引立られて、山崎を指て引退く。敵却て勝に乘しかば、嶺々谷々より、五百騎三百騎道を要へ、前を遮て、蜘手十文字に懸立る。中にも内海十郎範秀は、逃る敵に追すがうて、冑の鉢鎧の總角、切附々々行けるが、鐔本より太刀をば打折ぬ。馬は疲れぬ。徒立に成てぞ立たりける。弓手の方を屹と見たれば、さも爽に鎧うたる武者一騎、三引兩の笠符著て馳通けるを、哀敵やと打見て、馬の三頭にゆらりと飛乘り、敵と二人馬にぞ乘たりける。敵是を御方ぞと心得て、誰にておはするぞ。手負ならば、我が腰に強く抱著給へ。助奉らんと云ければ、悦入て候と云もはてず、刀を拔て前なる敵の首を掻落し、軈て其馬に打乘て、落行敵を追て行く。山名右衞門佐が兵共、始因幡を立しより、今度は必都にて尸を曝

りて、何へか一足も引候べき。唯我等が討死仕て候はんずるを御覽ぜられて後、御自害候へと、大將を置き奉て、彌勇てぞ見えたりける。大將の陣無勢に成て、而も四日結の旗一旒有と見えければ、山名大に悅て申けるは、抑我此亂を起す事、天下を傾け、將軍を滅し奉らんと思ふに非ず、唯道譽が我に無禮なりし振舞を憎しと思計也。此に四目結の旗は、道譽にてぞ有らん。是天の與たる處の幸也。自餘の敵に目な懸そ。あの首取て我に見せよと、齒嚙をして進まれければ、六千餘騎の兵共、我先にと勇み進んで、大將の陣へ打て懸る。敵の近事二町許に成にければ、赤松律師則祐帷幕を颯と打擧て、天下の勝負此軍に非ずや。何の爲にか命を可惜。名將の御前にて紛もなく討死して、後記に留めよやと下知しければ、承候とて、平塚次郎、內藤與次、近藤大藏丞、今村宗五郎、湯淺新兵衞尉、曾禰四郎左衞門七人、大將の御前をばら〳〵と拔て懸る。敵に射手は一人もなし。向ふ敵を御方の射手に射すくめさせて、七人の者共、鎧の射向の袖汰合せ、跳懸々々鐔本に火を散し、鋒に血を淋いで、切て廻けるに、山名が先懸の兵四人、目の前に討れて、三十人深手を負ければ、跡につゞける三百餘人、進兼てぞ見えたりける。是を見て、平井新左衞門景範、櫛橋三郎左衞門尉、櫻田左衞門俊秀、

犬居―犬の蹲る如く尻もちをつくこと

を顯さば、冥途黃泉の道の岐に行合て、其尊靈さこそ悅給はんずらめと、泪を流して申けるが、云つる言少も不ㇾ違、數萬人の敵の中へ、唯一騎懸入て、終に討死しけるこそ哀なれ。赤松肥前權守朝範は、此陣を一番に破られぬる事、身一人の恥と思ければ、袖に著たる笠符を引隱て、敵の中へ交て、よき敵にあはゞ、打違へて死なんと伺見ける處に、山名右衞門佐が、引敵を追立て、敵を少も足ためさせずして、唯何までも追攻々々討て、前へ通れと兵を下知して、弓手の方を通けるを、朝範屹と打見て、哀敵やと云儘に、走懸て、追樣に右衞門佐が冑を破よ碎よとしたゝかにちやうと打。打れてきつと振返れば、山名が若黨三人中に隔て、肥前守が冑を重ね打に打て打落す。落たる冑を取て著んとて、差うつぶく處に、小鬢のはづれ、小耳の上、三太刀まで被ㇾ切ければ、流るゝ血に目昏て、朝範犬居に動と伏せば、敵押てとゞめを刺てぞ捨たりける。され共此人死業や不ㇾ來けん、敵首をも不ㇾ取。軍散じて後、草の陰より生出て助けるこそ不思議なれ。一陣二陣忽に攻破られて、山名彈勝に乘ければ、峯々に控たる國々の集勢ども、未ㇾ戰先に、捨鞭を打て落行ける程に、大將羽林公の陣の邊には、僅に勢百騎許ぞ殘ける。是までも猶佐々木判官入道道譽、赤松律師則祐二人少も氣を不ㇾ屈、敷皮の上に居直

刀のかされ厚く幅廣なるをいふ
蛤齒―刀に未だ刃をあはせざるをいふ

目の鎧に、三鍬形打たる冑を猪頸に著なし、小跳して片手打の拂切に切て上けるに、太刀の齒にあたる敵は、胴中諸膝かけて切て落され、太刀の峯にあたる兵は、或は中にづんど打上られ、或は尻居にどうと打倒されて、血を吐てこそ死にけれ。兩陣已に破し後、兵皆亂て、惣大將の御勢と一所にならんと、崩れ落て引ける間、伊田、波多野の者共、餘すな洩すなと喚叫で追懸たり。石巖苔滑にして、荊棘道を塞たれば、引者も不延得、返す兵敢て不討云事なし。赤松彌次郎、舍弟五郎、同彦五郎、三人引留りて、此を返さで引程ならば、誰かは一人可生殘。命惜くば返せや殿原、返せや一揆の人々と恥しめて、罵けれ共、蹈留る者無りければ、小國播磨守、伊勢左衛門太郎、匹壇藤六、魚角大夫房、佐々木彈正忠、同能登權守、新谷入道、薦田彈正左衛門、河勾彌七、瓶尻兵庫助、粟生田左衛門次郎、返合々々所々にて討れにけり。河原兵庫助重行は、今度の軍に打負ば、必討死せんと、兼てより思儲けるにや、敵の已に押寄んと、方々より打寄るを見て申けるは、今日の合戰は、我身一人の喜哉。元暦の古、平家一谷に籠しを攻し時、一の城戸生田森の前にて、某が先祖河原太郎、河原次郎、二人城の木戸を乗越て、討死したりしも二月也。國も不替、月日も不違、重行同く討死して、彌先祖の高名

切れて、敵の上べき便なしと思ける處に、山名伊豆守を先として、小林民部丞、小幡、淺沼、和田、楠、和泉、河内、但馬、丹後、因幡の兵共、三千餘騎にて、さしも岨き山路を盤折にぞ上たりける。此陣には、未鹿垣の一重も結ざれば、兩方鬨の聲を幷せて、矢一筋射違る程こそ有けれ。軈て打物に成て亂合ふ。先一番に進で戰ける四國勢の中に、秋間兵庫助兄弟三人、生稻四郎左衞門一族十二人、一足も引かで討れにけり。是を見て、坂東、坂西、藤家、橘家の者共、少し飽んで見えけるを、備前國住人須々木三郎左衞門父子兄弟六人入替て戰けるが、つゞく御方なければ、是も一所にて討れにけり。是より一陣二陣共に色めき、兵しどろに見えけるを、小林民部丞得たり賢しと、勝に乘て短兵急に拉んと、揉に揉て攻ける間、四國中國の三千餘騎山より北へまくり落されて、遙に深き谷底へ、人雪頽をつかせて落重なれば、敵に逢て討死する者は少しといへ共、己が太刀長刀に貫れて死する兵數を不レ知。是を見て、山名右衞門佐彌氣に乘て眞前に進む上は、相隨ふ兵共誰かは少も擬議すべき、我先に敵に合んと爭ひ前まずと云者なし。中にも山名が郎等因幡國住人に、福間三郎とて、世に名を知れたる大力の有けるが、七尺三寸の太刀だびら廣に作たるを、鐔本三尺許おいて、蛤齒に搔合せ、伏繩

白うてぞ見えたりける—白うは白みの音便にて勢の衰へて敗色になりたるをいふ

共進兼て、少し白うてぞ見えたりける。是を利にして、佐々木が黄旗一揆の中より、大鍬形に一樣の母衣懸たる武者三人、已が結たる鹿垣切て押破り、日本一の大剛の者、近江國住人江見勘解由左衞門尉、箕浦四郎左衞門、馬淵新左衞門、眞前懸て討死仕るぞ。死殘る人あらば、語て子孫に名を傳へよと、聲々に名乘呼はりて、斬死にこそ死にけれ。後藤三郎左衞門尉基明、一宮彈正左衞門有種、粟飯原彦五郎、海老名新左衞門四人高聲に名乘て、川を渡し城へ切て入。合戰こそ先懸は一人に定まれ。加樣の廣みの軍には、敵と一番に打違たるを以て先懸とは申すぞ。御方に一人も死殘る人あらば、證據に立てたび候へと呼はりて、寄手數萬の中へ唯四人切て入る。右衞門佐大音聲を揚て、前陣戰勞れて見ゆるぞ。後陣入替て、かの敵討と下知すれば、伊田、波多野の早雄の若武者共、廿餘人馬より飛下々々、勇々で拔連て渡合ふ。後には數萬の敵、御方つゞくぞ引なと力を合て、喚叫ぶ。前には五十餘人の者共、颯と入亂れて切合ふ。太刀の鐔音鎧突、山彦に響き、暫も休時なければ、山嶽崩て川谷を埋むかとこそ聞えけれ。此時後藤三郎左衞門已下、面に立程の兵五十餘人討れにけり。二陣の南尾をば、細川右馬頭、同式部大輔大將にて、四國中國の兵共が二千餘騎にて固たりけるが、此は殊更地僻り谷深く

二の尾―第二の峯

尾崎―峯の端の突出でたる所

野の軍兵三千餘騎、八幡の山下に陣を取る。山名右衛門佐師氏、始の程は待て戰はんとて議したりけるが、神南の敵さまでの大勢ならずと見すかして、日來の議を飜して、八幡に控たる南方の勢と一つに成て、先神南宿に打寄り、楯の板をしめし、馬の腹帶を堅て、二の尾よりあげたりけり。此陣始より三所に分れて、西の尾崎をば、赤松律師則祐、子息彌次郎師範、五郎直頼、彦五郎範實、肥前權守朝範、竝に佐々木佐渡判官入道道譽が手者、黃旗一揆、彼是合て二千餘騎にて固たり。南の尾崎をば、細川右馬頭頼之、同式部大輔、西國中國の勢相共に二千餘騎固たり。北に當たる峯には、大將義詮朝臣の陣なれば、道譽則祐以下老武者、頭人、評定衆、奉行人、其勢三千餘騎、油幕の内に布皮を敷竝べ、袖を連て竝居たり。嶮き山の習として、餘所はみえて麓は不見。何れの陣へか、敵は先懸らんと、遠目仕て守り居たる所に、山名右衛門佐を始として、出雲伯耆の勢二千餘騎、西の尾崎へ唯一息に懸上て、一度に鬨をどつと作る。分内狹き兩方の峯に、馬人身を側むる程に打寄たれば、互に射違るこみ矢のはづるゝは一つもなし。爰に播磨國住人後藤三郎左衛門尉基明と云ける强弓の手垂、一段高き岩の上に走り上て、三人張に十四束三伏、飽まで引て放けるに、楯も物具もたまらねば、山名が兵

桃井播磨守―直常以下原本原蜂屋赤松彈正少弼を載す、毛利本天正本にも無く下文にも抵觸するを以て之を刪る

を起し、虎の山に靠て風を生ずるが如し。東西の牒使相圖の日を定ければ、將軍は三萬餘騎の勢にて、二月四日東坂本に著給ふ。義詮朝臣は七千餘騎にて、同日の早旦に、山崎の西神南の北なる峯に陣を取給ふ。右兵衞佐直冬も、始は大津松本の邊に馳向て、合戰を致さんと議せられけるが、山門三井寺の衆徒、皆將軍に志を通ずる由聞えければ、唯洛中にして、東西に敵を受て、見繕て合戰をすべしとて、一手は右兵衞佐直冬を大將にて、尾張修理大夫高經、子息兵部少輔、桃井播磨守直常、其勢都合六千餘騎、東寺を攻の城に構て、七條より下九條まで、家々小路々々に充滿たり。一手は山名伊豆守時氏、子息右門衞佐師氏を大將にて、伊田、波多野、石原、足立、河村、久世、土屋、福依、野田、藤澤、淺沼、大庭、福間、宇多川、海老名和泉守、吉岡安藝守、小幡出羽守、楯又太郎、加地三郎、後藤壹岐四郎、倭久修理亮、長門山城守、土師右京亮、毛利因幡守、佐治但馬守、鹽見源太以下、其勢合て五千餘騎、前に深田をあて、左に河を境て、淀、鳥羽、赤井、大渡に引分々々陣を取る。河より南には、四條中納言隆俊、法性寺右衞門督康長を大將として、吉良、石堂、原、蜂屋、赤松彈正少弼、和田、楠、眞木、佐和、秋山、酒邊、宇野、崎山、佐美、陶器、岩郡、河野邊、福塚、橋本を始として、吉

多田滿仲―頼光の父也、頼光が鬼切を滿仲に傳ふるとするは非也

レ元生出にけり。其後此太刀、多田滿仲が手に渡て、信濃國戸藏山にて又鬼を切たる事あり。依レ之其名を鬼切と云なり。此太刀は、伯耆國會見郡に、大原五郎大夫安綱と云鍛冶、一心清淨の誠を致し、きたひ出したる劍なり。時の武將田村將軍に是を奉る。此は鈴鹿御前田村將軍と、鈴鹿山にて劍合の劍是なり。其後田村麿伊勢大神宮へ參詣の時、大神宮より夢の告を以て、御所望有て、御殿へ被レ納。其後攝津守頼光、大神宮參詣の時夢想あり。汝に此劍を與る。是を以て子孫代々の家嫡に傳へ、天下の守たるべしと示給たる太刀なり。されば源家に執せらるゝも理なり。

○神南合戰事

去程に、將軍は持明院の主上を守護し奉て、近江國四十九院に落止り、宰相中將義詮朝臣は西國より上洛せんずる敵を支へん爲に、播磨の鵤に兼て在庄し給たりと聞えしかば、土岐、佐々木、仁木右京大夫義長、三千餘騎にて、四十九院へ馳參る。四國西國の兵、二萬餘騎鵤へ馳參る。畠山尾張守も、東八箇國の勢を率して、今日明日の程に參著仕るべしと、飛脚及二度々一申されければ、將軍父子の御勢、唯龍の天に翔て雲

夜番の武士をして用心の爲に蟇目を射さすること

ぞ射させける。齋すること已に七日に滿じける夜、河内國高安里より、賴光の母儀おはして、門をぞ敲せける。齋の最中なれ共、正しき老母の對面の爲とて、遥々と來り給たれば、力なく門を開て、内へいざなひ入奉て、終夜の酒宴にぞ及ける。賴光醉に和して、此事を語り出されたるに、老母持たる盃を前に閣き、穴おそろしや、我傍の人も、此妖物に取れて、子は親に先立、婦は夫に別たる者多く候ぞや。さても如何なる者にて候ぞ。哀其手を見ばやと被所望ければ、賴光易き程の事にて候とて、櫃の中より件の手を取出して、老母の前にぞ閣ける。母是を取て、暫見る由しけるが、我右の手の臂より切られたるを差出して、是は我手にて候けると云て差合、忽に長二丈許なる牛鬼と成て、酌に立たりける綱を、左の手に乍提、賴光に走懸ける。賴光件の太刀を拔て、牛鬼の頭をかけず斬て落す。其頭中に飛揚り、太刀の鋒を五寸食切て口に乍含、半時許跳上々々、吠怒けるが、遂には地に落て死にけり。其軀は尚破風より飛出て、遥の天に上けり。今に至まで、渡邊黨の家作に、破風をせざるは此故也。其比修驗淸淨の横川の僧都覺蓮を請じ奉て、壇上に此太刀を立、注連を引、七日加持し給ければ、鋒五寸折たりける劔に、天井より倶利伽羅下懸て、鋒を口にふくみければ、忽に如

六畜―馬牛羊犬豕雞

宿直蟇目―

宮城郡の府に、三眞國と云鍛冶、三年精進潔齋して、七重に注連を引、きたうたる劍なり。又鬼切と申は、元は清和源氏の先祖攝津守賴光の太刀にてぞ有ける。其昔大和國宇多郡に大森あり。此陰に夜々妖者有て、往來の人を取食ひ、牛馬六畜を摑裂く。賴光是を聞て、郎等に渡邊源吾綱と云ける者に、彼の妖者討て參れとて、祕藏の太刀をぞたびたりける。綱則宇多郡に行き、甲冑を帶して、夜々件の森の陰にぞ待たりける。此妖者綱が勢にや恐たりけん、敢て眼に遮る事なし。さらば形を替て謀らんと思て、髮を解亂して掩ひ、鬘をかけ、鐵漿黑に大眉を作り、薄衣を打かづきて、女の如くに出立て、朧月夜の明ぼのに、森の下をぞ通ける。俄に空掻曇て、森の上に物の立翔る樣に見えけるが、虛空より綱が髮を摑で、中に提てぞ騰たりける。綱、賴光の許より賜たる太刀を拔て、虛空を拂斬にぞ切たりける。雲の上に啞と云聲して、血の颯と顏に懸けるが、毛の黑く生たる手の指三有て、爪の鉤たるを、二の腕よりかけず切てぞ落ける。綱此手を取て、賴光に奉る。賴光是を祕して、朱の唐櫃に收て置れける後、夜々おそろしき夢を見給ける間、占夢の博士に夢を問給ければ、七日が間の重き御愼とぞ占ひ申ける。依レ之堅く門戸を閉て、七重に注連を引、四門に十二人の番衆を居て、每夜宿直蟇目を

面影ある心地—見覺ある心地

に起て、老翁の夢に示しつる如く、或侍に水を浴せて、此太刀の銹を拭はせ、未鞘にはさゝで、臥たる傍の柱にぞ立掛たりける。冬の事なれば、暖氣を内に籠んとて、火鉢を近く取寄たるに、居たる臺を見れば、銀を以て長一尺許なる小鬼を鑄て、眼には水晶を入、齒には金をぞ沈たる。時政是を見るに、此間夜な〳〵夢に來て、我を惱しつる鬼形の者は、さも是に似たりつる者哉と、面影ある心地して守居たる處に、拔て立たりつる太刀、俄に倒れ懸て、此火鉢の臺なる小鬼の頭を、かけず切てぞ落したる。誠に此鬼や化して人を惱しけん、時政忽に心地直りて、其後より鬼形の者夢にも曾て見えざりけり。さてこそ此太刀を鬼丸と名附て、高時の代に至まで、身を不放守と成て、平氏の嫡家に傳りける。相摸入道、鎌倉の東勝寺にて自害に及ける時、此太刀を相摸入道の次男少名龜壽に、家の重寶なればとて取せて、信濃國へ祝部を憑て落行。建武二年八月に、鎌倉の合戰に打負て、諏訪三河守を始として、宗徒の大名四十餘人大御堂の内に走入、顏の皮をはぎ、自害したりし中に、此太刀有ければ、定て相摸次郎時行も、此中に腹切てぞ有らんと、人皆哀に思合へり。其時此太刀を取て、新田殿に奉る。義貞不斜悦で、是ぞ聞ゆる平氏の家に傳たる鬼丸と云重寶也と、祕藏して持れける劒也。是は奥州

故高倉禪門
―足利直義

て、源平累代の重寶に、鬼丸鬼切と云二振の太刀を取給たりしを、將軍使者を以て、是は末々の源氏なんど可レ持物に非ず、急ぎ是を被レ渡候へ。當家の重寶として、嫡流相傳すべしと度々被レ仰けるを、高經堅く惜て、此二振の太刀をば、長崎の道場に預置て候しを、彼道場炎上の時燒て候とて、同じ寸の太刀を二振取替て、燒損じてぞ出されける。此事有の儘に京都へ聞えければ、將軍大に忿て、朝敵の大將を討たりつる忠功拔群也といへ共、さまでの恩賞をも不レ被レ行、觸レ事面目なき事共多かりける間、高經是を憤て、故高倉禪門の謀叛の時も是に與し、今直冬の上洛にも力を合て、攻上り給たりとぞ聞えける。抑此鬼丸と申す太刀は、北條四郎時政天下を執て、四海を鎭めし後、長一尺許なる小鬼、夜々時政が跡枕に來て、夢共なく現共なく、侵さんとする事度々也。修驗の行者加持すれ共不レ休、陰陽寮封ずれ共不二立去一。剩へ是故に時政病を受て、身心苦む事隙なし。或夜の夢に、此太刀一人の老翁に變じて告て云く、我常に汝を擁護する故に、彼妖怪の者を退けんとすれば、汚れたる人の手を以て、劒を探たりしに依て、銹身より出て、拔んとすれ共不レ叶。早く彼妖怪の者を退けんとならば、清淨ならん人をして、我身の銹を拭ふべしと委く教て、老翁は又元の太刀に成ぬとぞ見たりける。時政夙

天下の口遊—世人の口に上つて嘲哢の種となること

多年の蟄懷—多年胸中にむすぼれたる思

懸して、城の麓をのさ〱と通ければ、敵の嘲のみならず、天下の口遊とぞ成にける。都に在とある程の兵をば、義詮朝臣に附て播磨へ被ㇾ下、遠國の勢は未ㇾ上らず。將軍僅なる小勢にて、京中の合戰は中々惡かりぬと、思慮深かりければ、直冬已に大江山を超ると聞えしかば、正月十二日の暮程に、將軍主上を取奉て、江州の武佐寺へ落給ふ。抑此君御位に即せ給て後、未三年を不ㇾ過、二度都を落させ給ひ、百官皆他郷の雲に吟ひ給ふ、淺ましかりし世中なり。去程に同十三日直冬都に入給へば、越中の桃井、越前の修理大夫、三千餘騎にて上洛す。直冬朝臣、此七八箇年、依㆓繼母讒㆒那邊這邊漂泊し給つるが、多年の蟄懷一時に開けて、今天下の武士に仰れ給へば、唯年に再び花さく木の、其根かるゝは未ㇾ知、春風三月一城の人皆狂するに不ㇾ異。抑山名伊豆守は、若狹の所領の事に附て、宰相中將殿に恨あり、桃井播磨守は、故高倉禪門に屬して、望を不ㇾ達憤あれば、此兩人の敵に成給ぬる事は、少し其謂有べし。尾張修理大夫高經は、忠戰自餘の一門に超しに依て、將軍も抽賞異㆓于他㆒にして、世其仁を重くせしかば、何事に恨有べし共覺ぬに、俄に今敵に成て、將軍の世を傾んとし給ふ事、何の遺恨ぞと、事の起を尋ぬれば、先年越前の足羽の合戰の時、此高經朝敵の大將新田左中將義貞を討

げにもと、被思知世に成にけり。

○直冬上洛事附鬼丸鬼切事

南方に再往の評定有て、足利右兵衛佐直冬を大將として、京都を可攻由綸旨を被成ければ、山名伊豆守時氏、子息右衛門佐師氏、五千餘騎の勢を率して、文和三年十二月十三日、伯耆國を立給ふ。山陰道悉從附て兵七千騎に及びしかば、但馬國より杉原越に播磨へ打て出、先宰相中將義詮の鵤宿におはするをや打散す、又直に丹波へ懸て、仁木左京大夫頼章が佐野城に楯籠て、我等を支へんとするをや打落すと、評定しける處へ、越中の桃井播磨守直常、越前の修理大夫高經の許より飛脚同時に到來して、唯急ぎ京都へ攻上られ候へ。北國の勢を引て、同時に可攻上由を牒ぜられける間、さらば夜を日に繼で上らんとて、山名父子七千六百餘騎、前後十里に支て、丹波國を打通るに、仁木左京大夫頼章當國の守護として、敵を支ん爲に在國したる上、今は將軍の執事として、勢人に超たれば、丹波國にて、定て火を散す程の合戰五度も十度もあらんずらんと覺えけるに、敵の勇鋭を見て、戰ては中々叶はじとや思けん、遂に矢の一つをも不射

鬱陶しつ—哀に思ひて心むすぼれたり

孔子—孔安國を指す

より舜に賜はりし財共を、面々に分領しけるに、牛羊倉廩をば父母に與へ、二女と琴一張とをば象我物にすべしと相計ふ。象則琴を彈じて、二女を愛せん爲に、舜の宮に行たれば、舜敢て不レ死、二女は瑟を調べ、舜は琴を彈じて、優然としてぞ居たりける。象大に愕て曰く、我舜を已に殺しつと思て、鬱陶しつと云て、誠に忸怩たる氣色なれば、舜琴を閣て、其弟たる言を聞くがうれしさに、汝さぞ悲く思つらんとて、そゞろに涙をぞ流ける。斯し後も舜彌孝有て、父母に事る道も不レ懈、弟を愛する心も不レ淺ければ、忠孝の德天下に顯れて、帝堯遂に帝位を讓り給にけり。舜天子の位を踐で世を治め給ふ事、天に叶ひ地に隨しかば、五日の風枝を不レ鳴、十日の雨壤を破事なし。國富み民豐にして、四海其恩を仰ぎ、萬歲其德を頌せり。されば孔子も求二於忠臣一必於二孝子之門一といへり。爲レ父不孝ならん人、豈爲レ君忠あらんや。天竺震旦の舊き跡を尋るに、親のために道なければ、忠あれども罪せらる。獅子國の例是也。爲レ父孝あれば、賤しけれ共被レ賞。虞舜の德是也。然るに右兵衛佐直冬は、父を亡さん爲に君の命を假んとす。君是を御許容有て、大將の號を被レ許事、旁以非レ道。山名伊豆守若此人を取立て大將とせば、天下の大功を致さん事不レ可レ有と、昨木隱士朴翁が眉を顰て申けるが、果して

絺衣—細葛布の衣

堯の御子九人を舜の臣となして、其左右にぞ愼み隨せられける。堯の二女、己れが高きを以て夫に驕らざれば、舜の母に嫜する事甚不レ違。九男同く舜に臣として事ること、禮敬更に不レ懈。帝堯彌悦て、舜に又倉廩牛羊絺衣琴一張を賜ふ。舜如レ斯聲譽上に達し、父母に孝有しか共、繼母我子の象を世に立ばやと、猜む心深く有しかば、瞽叟と象と三人相謀て、舜を殺さんとする事度々なり。舜是をしれ共、父をも不レ恨、母をも弟をも不レ嗔、孝悌の心彌愼て、唯父母の意に違へる事をのみ、天に仰でぞ悲ける。或時瞽叟舜を廩の上に登せて屋を葺せけるに、母下より火を放て、舜を燒殺さんとす。舜始より推したりしかば、兼て持たる二の唐笠を張て、其柄に取附て飛下にけり。瞽叟不レ安思ければ、又象と相謀て舜に井をぞ掘せける。是は井已に深く成たらん時、上より土を下して、舜を乍レ生埋ん爲也。堅牢地神も孝行の子を哀にや覺しけん、井の底より上ける土の中に、半は金ぞ交たりける。瞽叟弟の象と共に欲心に萬事を忘ければ、土を揚ける度毎に、是を爭ふ事限なし。其間に舜傍に匿穴をぞ掘たりける。井已に深く成ぬる時、瞽叟と象と共に土を下し、大石を落して舜を埋ければ、舜潛に兼て掘し匿穴より遁出て、己が家へぞ歸ける。舜如レ斯して生たりとは、弟の象夢にも不レ知、帝堯

頑嚚―道理に暗きこと

を譲べき由を被仰けるに、許由遂に勅答を不申。剰松風渓水の清き音を聞て、爽なる耳の、富貴榮花の賤しき事を聞て、汚れたる心地しければ、穎川の水に耳を洗ける程に、同じ山中に身を捨、隱居したりける巣父と云賢人、牛を引て、此川にて水を飼んとしけるが、許由が耳を洗ふを見て、何事に今耳をば洗ぞと問ければ、許由、帝堯の我に天下を譲らんと被仰つるを聞て、耳汚たる心地して候間、洗ふ也とぞ答ける。巣父首を振て、さればこそ、此水例よりも濁て見えつるを、何故やらんと無覺束思たれば、此事にて有けり。左樣に汚たる耳を洗たる水の流をば、牛にも飲ふべき樣なしとて、徒に牛を引てぞ歸ける。帝堯、さては誰にか世を可授とて、到らぬ隈もなく尋求給ふに、冀州に虞舜と云賤き人あり。其父瞽叟は盲て、母は頑嚚也。弟の象は驕戻。虞舜は孝行の心深して、父母を養はん爲に、歴山に行て耕すに、其地の人畔を譲り、雷澤に下て漁るに、其浦の人居を譲る。河濱に陶するに、器皆苦窳あらず。虞舜の行て居る處に、二年あれば邑をなし、三年あれば都をなす。萬人其徳を慕て、來集し故也。舜年二十にして、孝行天下に聞えしかば、帝堯是に天下を譲らんと覺す心あり。先内外に附て、其行を御覽ぜんと覺して、娥皇女英と申ける姫宮を二人、舜に妻はせ給ふ。又

心猶深く、子は人倫の身なれ共、親を思ふ道無りければ、飽まで引て放つ矢に、獅子喉を射抜れて、地に伏て忽に死けり。子、獅子の首を取て、天子に是を奉る。一人萬民悦合へる事限なし。已に宣旨を下して、其賞を定られし上は、仔細に不及、獅子の子に一國を下し給ふべかりしを、重て公卿僉議有て、勅宣に隨ふ處は雖有忠、父を殺す罪不輕。但忠賞の事は、法を被定しかば、綸言今更變じ難しとて、恩賞に被擬ける一國の正税官物、百年が間を勘て、天下の鰥寡孤獨の施行に引れぬ。以彼思之、縦一旦利を得たり共、終には諸天の御咎あるべし。又漢朝の古、帝堯と申けるいみじき聖徳の帝御座しけり。天子の位にいます事七十年、御年已に老ぬ。誰にか天下を可譲と御尋有ければ、大臣皆諛て、幸に皇太子にて御渡候へば、丹朱にこそ御讓り候はめと申けるを、帝堯、天下は是一人の天下に非ず、何を以てか、太子なればとて、天下を授るに、政足ざらん者に位を讓て、四海の民を苦しましむべきとて、丹朱に世を授給はず。さても何にか賢人ありと、隱遁の者までも尋求め給ける處に、箕山と云所に、許由と申ける賢人、世を捨光を韜て、唯苔深く松やせたる岩の上に、一瓢を懸て、瀝々たる風の音に、人間迷情の夢を覺してぞ居たりける。帝堯是を聞召て、即勅使を立られ、御位

からざるにて奪人に喩ふ

近き邊に來て、夜々地を搖して吠瞋り、天に飛揚して啼叫ける間、大臣公卿刹利居士、皆宮中に逃籠る。時に公卿僉議有て、此獅子を退治して進せたらんずる者には、大國を一州下さるべしと法を出して、道々に札を書てぞ被立ける。彼獅子の子此札を見て、さらば我父の獅子を殺して、一國を賜らんと思ければ、百人しても引はたらかすまじかりける鐵の弓鐵の矢を拵へ、鏃に毒を塗て、父の獅子をぞ相待ける。獅子今は王宮へ飛入て、國王大臣を喰殺さんとて、禁門の前を過けるが、我子の毒矢をはげて立向たるを見て、涙を流し、地に伏て申けるは、我年久く相馴し后と、二人ともなき汝を失て、戀悲く思ふ故に、若干の人を失ひ多くの國土を亡しつ。然るに事の樣を尋きけば、后は王宮におはすなれば、今生にて再び相見ん事有がたし。せめて汝をだに一目見たらば、縱我命を失ふ共悲む處にあらずと思き。道々に被立たる札を見れば、我命を以て一國の抽賞に被報たり。然れども我を一箭にも射殺さんずる者は、天下に汝より外は有べからず。命を惜むも子の爲也。汝一國の主と成て、榮花を子孫に及さば、我命全く不可惜。早く其弓を引、其矢を放て、我を射殺し、報國の賞に預れとて、黄なる涙を流しつゝ、爰を射よとて、自口をあきてぞ伏たりける。獅子は畜類なれ共、子を思ふ

大山を挾で云々—孟子梁惠王篇に、挾二泰山一以越二北海一とあり

眼裏の荊棘云々—眼裏は掌上に對していふ、掌上の花は愛翫措かざる意にて新人に喩へ、眼裏の荊棘は近づくべ

るのみに非ず、筋力人に超て、如何なる大山を挾で、北海を飛越る共、可二容易一とぞ見たりける。或時此子母の后に向て申けるは、適人界の生を受ながら、后は畜類の妻と成せ給ひ、我は子と成て候事、過去の宿業とは申ながら、心憂事にて候はずや、可レ然隙を求て、后此山を逃出させ給へ。我負奉て獅子國の王宮へ逃籠り、母を后妃の位に昇奉り、我も朝列の臣と仕て、畜類の果を離れ候はんと勸申ければ、母の后無二限喜で、獅子の他山へ行たりける隙に、后此子に負れて、獅子國の王宮へぞ參り給ける。帝不二斜喜び思召て、君恩類無りければ、後宮綺羅の三千、爲レ君薫二衣裳一、君聞二蘭麝一、爲レ不二馨香一、爲レ君事二容色一、君看二金翠一、爲レ無二顏色一。新き人來て、舊き人棄られぬ。眼裏の荊棘、掌上の花の如し。去程に獅子外の山より歸り來て、后を尋求るに、后も坐さず、我子もなし。こは如何なる事ぞと驚き周章て、ばけたる貌元の容に成て、山を崩し木を掘倒し、求れ共不レ得。さては人の栖む里にぞ御座らんとて、獅子國へ走出て、奮迅の力を出して吠忿るに、如何なる鐵の城なり共、破れぬべくぞ聞えける。野人村老慴倒れ、死する者幾千萬と云數を不レ知。又不二近附一所も、家を捨財寶を捨逃去ける間、獅子國十萬里の中には、人一人も無りけり。され共此獅子王位にや恐けん、都の中へは未レ入、唯王宮

獅子國―此故事は西域記第十一巻に見ゆ
輕軒―輕くてよく走る車

として京都を被レ攻事、一旦雖レ似レ有レ謀事成就すべからず。其故は昔天竺に獅子國と云國あり。此國の帝、他國より后を迎へ給けるに、輕軒香車數百乘、侍衛官兵十萬人、前後四五十里に支て、道をぞ送り進せける。日暮て或深山を通ける處に、勇猛奮迅の獅子共二三百疋走出、追つめ追つめ人を食ける間、輕軒軸折て、馳れ共不レ遁、官軍矢射盡て防共不レ叶、大臣公卿武士僕從、上下三萬人、一人も不レ殘喰殺されにけり。其中に、王たる獅子彼后を口にくはへて、深山幽谷の巖の中に置奉て、此獅子容顏美麗なる男の形に變じければ、后此妻と成給て、思はぬ山の岩の陰に、年月をぞ送らせ給ける。始の程は后かゝる荒き獸の中に交りぬれば、我さへ畜類の身と成ぬる事の心憂さ、何に命のながらへて、一日片時も過べしと覺えず、消ぬを露の身の憂さに、思召沈せ給けるが、苔深き巖は變じて玉樓金殿となり、虎狼野干は化て卿相雲客となり、獅子は化して萬乘の君と成て、玉扆の座に粧を堆くして、袞龍の御衣に薫香を散せしかば、后早憂かりし御思も消果て、連理の枝の上に、心の花のうつろはん色を悲み、偕老の枕の下に、夜の隔つる程をだに、かこたれぬべく思召す。角て三年を過させ給ける程に、后たゞならず成給て、男子を生給へり。懇の懐の中に長て、歳十五に成ければ、貌形の世に勝た

○直冬與二吉野殿一合體事附天竺震旦物語事

翌年の春、新田左兵衛佐義興、脇屋左衛門佐義治、共に相摸の河村城を落て、何に有共不レ聞しかば、東國心安く成て、將軍尊氏卿上洛し給へば、京都又大勢に成にけり。さらば軈て山名を可レ被レ攻とて、宰相中將義詮朝臣を、先播磨國へ下さる。山名伊豆守是を聞て、此度は可レ然大將を一人取り立て合戰をせずば、我に勢の著事は有まじと被レ思ける間、足利右兵衛佐直冬の筑紫九國の者共に被二背出一、安藝周防の間に漂泊し給けるを招請じ奉り、惣大將とぞ仰ける。但是も將軍に敵すれば、子として父を譴る咎あり。天子に對すれば、臣として君を蔑し奉る恐あり。さらば吉野殿へ奏聞を經て、勅免を蒙り、宣旨に任て都を傾け、將軍を攻奉らんに、天の忿人の譏も有まじとて、直冬潛に使を吉野殿へ進せて、尊氏卿義詮朝臣以下の逆徒を可二退治一由の綸旨を下賜て、宸襟を休め奉るべしとぞ申されける。傳奏洞院右大將頻に被二執申一ければ、再往の御沙汰迄もなく、直冬が任レ奉二申請一、即綸旨をぞ被レ成ける。是を聞て遊和軒朴翁難じ申けるは、天下の治亂興滅皆天の理に不レ依と云事なし。されば直冬朝臣を以て大將

趙盾云々ー趙盾は晉の靈公の侍者にて靈公を諫め殺されんとして片輪車に乗りて逃れたる故事、左傳宣公傳に見ゆ

邊の在家に宿を取て、皇居の警固し奉けり。

○山名伊豆守時氏京落事

去程に山名右衛門佐師氏は、都の敵を輒く攻落して、心中の憤一時に解散しぬる心地して、喜悦の眉を開く事理也。勢著かば軈て濃州へ發向して、宰相中將殿を攻奉らんと議せられけれ共、降參する敵もなし、催促に應ずる兵も稀也。剰洛中には、吉野殿より四條少將を成敗の體にて置れたりける間、毎事山名が計にも非ず、又知行の所領も近邊に無りければ、出雲伯耆より上り集たりし勢共も、在京に勞て、漸々に落行ける程に、日を經て無勢に成にけり。角ては如何せん、却て敵に寄られなば、我も都を落されぬと、内々仰天せられける處に、義詮朝臣、東山、東海、北陸道の勢を率して、宇治勢多より攻上るとも聞え、又赤松律師則祐が、中國より勢を率して、上洛すとも聞えければ、四方の敵の近附かぬ先に、早く引退けとて、數日の大功徒に、天下に時を不レ得しかば、四條少將は官軍を率して南方に歸り、山名は父子諸共に道を追拂て、伯耆國へぞ下ける。

―遠慮申上げて

子推云々―韓詩外傳云、晉重耳亡也重耳無レ糧餒不レ能レ行介子推割ニ股肉一以食レ之

人東西より引裏で、足輕の射手山に添ひ澤を阻て、散々に射ける間、佐々木三郎左衛門、箕浦次郎左衛門、寺田八郎左衛門、今村五郎、一所にて皆討れにけり。秀綱は憑切たる一族若黨共が、跡に蹈止て討死しけるを見て、心憂き事にや思ひけん、高尾四郎左衛門入道と、二騎馬の鼻を引返して、敵の中へ懸入て、共に歩立の敵に馬の諸膝ながれて、落る處にて討れにければ、遙に落延たる若黨共三十七人、返合返合所々にて討れにけり。其夜は鹽津に瑤輿を舁留奉て、供奉ノ人々をも些休め奉らんとせられけるを、鹽津海津の地下人共、軍勢此に一夜も逗留せば、事に觸て煩あるべしと思ける間、此の道辻、彼の岡山に取上て、鐘を鳴し鬨を作ける程に、暫の御逗留も叶はで、主上又瑤輿に召れたれ共、舁進すべき駕輿丁も皆逃失て一人もなければ、細川相摸守清氏馬より飛で下り、徒立になり、鎧の上に主上を負進せて、鹽津山をぞ越られける。子推が股の肉を切り、趙盾が車の片輪を扶しも、此忠には過じとぞ見えし。月卿雲客、或は長汀の月に策をあげ、或は曲浦の浪に棹さし給へば、巴猿一叫停ニ船於明月峽之邊一、胡馬忽嘶失ニ路於黃沙磧之裏一と、古人の書し征路篇も、今こそ被ニ思知一たれ。是より東は路次の煩も無りしかば、美濃の垂井宿の長者が家を皇居にして、義詮朝臣以下の官軍、皆四

寄たりと沙汰しける間、坂本を皇居になされん事可レ惡とて、同六月十三日義詮朝臣龍駕を守護し奉て、東近江へ落給ふ。行幸の供奉には、二條前關白左大臣、三條大納言實繼、西園寺大納言實俊、裏築地大納言忠秀、松殿大納言忠嗣、大炊御門中納言家信、四條中納言隆持、菊亭中納言公直、花山院中納言兼定、左大辨俊冬、右大辨經方、左中辨時光、勘解由次官行知、梶井二品親王に至らせ給ふまで、出世坊官一人も不レ殘被二召具一、龍駕の次に御輿を早めらる。武士には足利宰相中將義詮を大將にて、細川相摸守清氏、尾張民部少輔、舍弟左京權大夫、同左近將監、今川駿河守賴貞、同兵部大輔助時、同左近藏人、土岐大膳大夫賴康、熊谷備中守直鎭、佐々木、山内五郎左衛門信詮、是等を宗徒の人々として、都合其勢三千餘騎、和仁堅田の濱道に、駒を早めてぞ被レ落ける。爰に故堀口美濃守貞滿の子息掃部助貞祐が、此四五年堅田に隱て居たりけるが、其邊の溢者共を語て、五百餘人眞野浦に出合て、落行敵を打止んとす。眞先には主上を擁護し奉て、梶井二品親王御門徒の大衆、濟々と召具して落させ給へば、門主に所を置奉て、弓を不レ引矢を不レ放。此間坂本の警固にて居たりける佐々木近江守秀綱、三百餘騎にて跡の後陣に通けるを、是は山門の故敵、時の侍所なれば、是を討留よとて、堀口が兵五百餘

濟々と―威儀の盛なる貌

所を置奉て

居たりける。京都の大敵にだに、輙く打勝て、勇々たる山名が兵共なれば、なじかは少しも可猶豫、十一日の曙に吉峯へ押寄、矢一つも射させず、拔連て切て上る。阿保荻野が兵共、餘につよく被攻て、一支も支へず、谷底へ懸落されければ、久下五郎を始として、討るゝ者四十餘人、創を被る者數を不知。希有にして逃延たる者共も、弓矢太刀長刀を取捨て、赤裸にて落て行。見苦しかりし有樣也。武藏將監は二町許落延たりけるが、阿保と荻野と、遙に顧て、今は叶ぬ所にて候。御自害候へと勸ける間、馬上にて腹搔切り、倒に落て死にけり。此首を取らんとて、敵一所に打寄て、ひしめきけるを、沼田小太郎、唯一騎返合て戰けるが、敵は大勢也、御方はつゞかず、叶ふまじとや思けん、同腹搔切て、武藏將監が死骸を枕にしてぞ伏たりける。此間に、阿保と荻野は落延て、無甲斐命を助りけり。

○主上義詮沒落事附佐々木秀綱討死事

義詮朝臣は、兼て佐々木近江守秀綱を警固に備ふれば、東坂本の事心安かるべし。爰にて國々の勢をも催さんと被議けるが、吉野殿より大慈院の法印を、大將の爲に山門へ呼

つる事の無念さよ。よし〳〵敵は何れも同事、一人も亡すに不ㇾ如とて、奪取たる鉞にて、逃る敵を追攻々々切けるに、冑の鉢を眞向まで、破附られずと云者なし。流るゝ血には斧の柄も朽る許に成にけり。美濃勢には土岐七郎を始として、桔梗一揆の衆九十七騎まで討れぬ。近江勢には、伊庭八郎、蒲生將監、川曲三郎、蜂屋將監、多賀中務、平井孫八郎、儀俄五郎知秀以下、三十八騎討れぬ。此外粟飯原下野守、匹田能登守も討死しつ。後藤筑後守貞重も生虜れぬ。打殘されたる者とても、或は創を被り、或は矢種射盡して、重て可ㇾ戰共覺ざりければ、大將義詮朝臣も、日暮て東坂本へ落給ふ。是までも猶細川相摸守清氏は、元の陣を不二引退一、人馬に息を繼て、我に同ずる御方あらば、今一度快く挑戰て雌雄を爰に決せんとて、西坂本へ控て其夜は終に落給はず。夜明ければ、宰相中將殿より使者を立て、重て合戰の評定あるべし。先東坂本へ被二打越一候へと被ㇾ仰ければ、此上は清氏一人留ても無二甲斐一とて、翌日早旦に東坂本へ被ㇾ參ける。此時故武藏守師直が思者の腹に出來たりとて、武藏將監と云者、片田舍に隱て居たりけるを、阿保肥前守忠實、荻野尾張守朝忠等、俄に取立て大將になし、丹波、丹後、但馬三箇國の勢、三千餘騎を集て、宰相中將殿に力を合せん爲に、西山の吉峯に陣を取てぞ

―他人と一所に入り雜りてする合戰

洗革―緋を洗ひて色薄らぎたる如く淡紅に染めたる革也

褄取―袖草摺の兩端を別色の絲四條竝べて覆輪したる樣に色取る也

なき敵共をば、何百人切てもよしなし。哀よからんずる敵に逢ばやと願て、北白河を今路へ向て歩ませ行處に、洗革の鎧の褄取たるに、龍頭の冑の緒を縮、五尺許なる太刀二振帶て、歯の徑八寸許なる大鉞を振かたげて、近附敵あらば、唯一撃に撃ひしがんと、尻目に敵を睨で、閑に落行く武者あり。赤松遙に是を見て、是は聞ゆる長山遠江守ごさんなれ。其れならば組で討ばやと思ければ、諸鐙合て、跡に追著、洗革の鎧は、長山殿と見るは僻目か。蓬くも敵に後を見せらるゝ者哉と、言を懸て恥しめければ、長山屹とふり返て、から〳〵と打笑ひ、問ふは誰とよ。赤松彈正少弼氏範よ。さてはよい敵。但汝を唯一撃に失はんずるこそかはゆけれ。念佛申て西に向へとて、件の鉞を以て開き、冑の鉢を破よ碎けよと、思樣に打ける處を、氏範太刀を平めて打背け、鉞の柄を左の小脇に挾て、片手にてえいやとぞ引たりける。引れて二匹の馬あひ近に成ければ、互に太刀にては不レ切、鉞を奪はん、奪れじと引合ける程に、蛭卷したる樫木の柄を中よりづんど引切て、手本は長山が手に殘り、鉞の方は赤松が左の脇にぞ留りける。長山今までは、我に增る大力非じと思けるに、赤松に勢力を碎かれて、叶はじとや思けん、馬を早めて落延ぬ。氏範大に牙を嚼て、無レ詮力業故に、組で討べかりつる長山を、打漏し

四明峯―比叡山をいふ
打こみの軍

ん、神樂岡へ引上る。宮方手合の軍に打勝て、氣を揚げ勇に乘て、東の方を見たれば、土岐の桔梗一揆、水色の旗を差上、大鍬形を夕陽に輝し、魚鱗に連りて、六七百騎が程控たり。小林是を見て人馬に息をも繼せず、軈て懸合せんとしけるを、山名右衞門佐扇を揚て招止め、新手の兵千餘騎を引勝て相近附。土岐も山名も、しづ〳〵と馬を歩ませて、一矢射違る程こそあれ。互に諸鐙を合て懸入り、敵御方二千餘騎、一度に颯と入亂て、弓手に逢ひ馬手に背き、半時許切合たるに、馬煙虛空に廻て、飇微塵を吹立たるに不異。太刀の鍔音鬨の聲、大山を崩し大地を動して、すはや宮方打勝ぬと見えしかば、鞍の上空しき放馬、四五百匹河より西へ走出て、山名が兵の鋒に、首を貫かぬは無りけり。細川相摸守清氏、是程御方の打負たるを見ながら、些も氣を不屈、倘勇進でぞ見えたりける。吉良、石堂、原、蜂屋、宇都宮民部少輔、海東、和田、楠、皆新手なれば、細川と懸り合て、鴨川を西へ追渡し、眞如堂の前を東へ追立て、時移るまでぞ戰たる。千騎が一騎に成までも、引じとこそ戰けれ共、將軍の陣あらけ靡て、後の御方あひ遠に成ければ、細川遂に打負て、四明嶺へ引上る。赤松彈正少弼氏範は、いつも打こみの軍を好まぬ者也ければ、手勢計五六十騎引分て、返す敵あれば追立追立切て落す。名も

つきしどみ—隙なく楯を突き竝ぶること

月九日卯刻に、南方の官軍、吉良、石堂、和田、楠、原、蜂屋、赤松彈正少弼氏範三千餘騎、八條九條の在家に火を懸て、相圖の煙を上たれば、山陰道の寄手山名伊豆守時氏、子息右衞門佐師氏、伊田、波多野、五千餘騎、梅津、桂、嵯峨、仁和寺、西七條に火を懸て、先京中へぞ寄たりける。洛中には向ふ敵なければ、南方西國の兵共、一所に打寄て、四條河原に轡を雙て控たり。此より遙に敵の陣を見遣れば、鹿谷神樂岡の南北に、家家の旗二三百旒翻て、四つ目結の旗一旒、眞前に進で、眞如堂の前に下合たり。敵陣皆山に寄て、木陰に控たり。勢の多少も不見分。和田、楠、法勝寺の西の門を打通て、河原に控たりけるが、敵をおびき出して、勢の程を見んとて、射手の兵五百人馬より下し、持楯疊楯、つきしどみつきしどみ、閑に田の畦を歩せて、次第々々に相近附。爰に佐々木惣領氏頼、其の比遁世にて、西山邊に隱居たりける間、舍弟五郎右衞門尉世務に代て、國の權柄を執しが、近江國の地頭御家人、此手に屬して五百餘騎有けるが、楠が勢に招れて、胡籙を敲き、鬨の聲を揚げ喚て懸る。楠が勢陽に開き陰に圍て、散々に射る。射れ共佐々木が勢ひるまず、錣を傾けて袖をかざし、懸入けるを見て、山名が執事小林右京亮、七百餘騎にて横合にあふ。佐々木勢餘に手痛く懸られて、叶はじとや思け

相圖を指し一期を約束すること

中々なる軍して一なまなかなる戦をなしての意

洛川一加茂川をいふ

されて、同時に京都を可レ被レ攻と被二仰出一ければ、時氏大に悦で、五月七日伯耆國を立て、但馬丹後の勢を引具して、三千餘騎丹波路を經て攻上る。兼て相圖を指ければ、南方より惣大將四條大納言隆俊、法性寺左兵衛督康長、和田、楠、原、蜂屋、赤松彈正少弼氏範、湯淺、貴志、藤波を始として、和泉、河内、大和、紀伊國の兵共三千餘騎勝り出しければ、南は淀、鳥羽、赤井、大渡、西は梅津、桂の里、谷堂、峯堂、嵐山までも、陣に取らぬ所なければ、燒つゞけたる篝火の影、幾千萬と云數を不レ知。此時將軍未上洛し給はで、鎌倉におはせしかば、京都餘に無勢にて、大敵可レ戰樣も無りけり。中々なる軍して敵に氣を附ては叶まじとて、土岐、佐々木の者共、頻に江州へ引退て、勢多にて敵を相待んと申けるを、宰相中將義詮朝臣、敵大勢なればとて、一軍もせでいかゞ聞逃をばすべきとて、主上をば先山門の東坂本へ行幸なし進せて、仁木、細川、土岐、佐佐木三千餘騎を一處に集め、鹿谷を後に當て、敵を洛川の西に相待る。此陣の樣、前に川有て、後に大山峙たれば、引場の思はなけれ共、韓信が兵書を褊して、背水陣を張しに違へり。殊更土岐佐々木の兵、近江と美濃とを後に置て戰はんに、引て暫氣を休めばやと、思はぬ事や有べきと、未レ戰前に敵に心をぞはかられける。去程に文和二年六

大樹―將軍

小目代―目代は守護の代官として其國を治むるもの、小とあるは身分の卑きをいふか

唯徒にぞ歸しける。度重なれば、右衛門佐大に腹立して、周公旦は文王の子武王の弟たりしか共、髪を洗ふ時訴人來れば、髪を握て遇、飯を食する時賓客來れば、哺を吐て對面し給けり。才乏しといへ共、我大樹の一門に列なる身たり。禮儀を存ぜば、沓を倒にしても庭に出迎ひ、袴の腰を結び〳〵も、急てこそ對面すべきに、此入道加樣に無禮に振舞こそ返々も遺恨なれ。所詮叶はぬ訴訟をすればこそ、諂ふまじき人をも諛へ。今夜の中に都を立て伯耆へ下り、軈て謀叛を起して天下を覆し、無禮なりつる者共に、思知せんずる物をと、獨言して我宿所へ歸ると均く、郎等共に角共いはず、唯一騎文和元年八月二十六日の夜半に、伯耆を指て落て行ければ、相從し兵共聞傳て、七百餘騎迹を追てぞ下ける。伯耆國に著れければ、師氏先づ親父左京大夫時氏の許に行て、京都の沙汰の次第、面目を失つる間、將軍に暇をも申さず、罷下候と語ければ、親父も大に忿て、頓て宮方の御旗を揚げ、先づ道譽が小目代にて、吉田肥前が出雲國に有けるを逐出し、事の仔細を相觸るに、富田判官を始として、伊田、波多野、矢部、小幡に至まで皆同意しければ、出雲、伯耆、隱岐、因幡四箇國即時に打從へてげり。さらば軈て南方へ牒送せよとて、吉野殿へ奏聞を經るに、山陰道より攻上らば、南方よりも官軍を出

臣能宣の父也

貝鐘の聲―誦經の聲又佛を讃歎する引聲をもいふ

て、鹽竈の浦を摸せし河原院、中書王の古を慕て立し花園や、融の大臣の跡を慕ふ千種宰相の新亭、雲客以下の家々は未數るに不レ遑、禁裏、仙洞、竹苑、椒房、三台九卿の曲阜以下、都て三百二十餘箇所、此時に當て燒にけり。佛閣靈驗の地には、法城寺、法勝寺、長樂寺、清水寺、六僧房、雙林寺、講堂、慶愛寺、北靈山、西福寺、宇治寶藏、淨住寺、六波羅の地藏堂、紫野の寺、東福寺、雪村の塔頭大龍庵、夢窗國師の建られし天龍寺に至まで、禪院、律院、御祈禱所、三十餘箇所の佛閣も、皆此時に燒にけり。さればば東山西郊、京白河在家もつゞかず、寺院も稀なれば、盗賊巷に滿て、往來の道も不レ安、貝鐘の聲も幽にして、無明の睡も覺め難し。

○山名右衛門佐爲レ敵事附武藏將監自害事

山名右衛門佐師氏は、今度八幡の軍に功有て、抽賞我に增る人非じと被レ思ける間、先年拜領して未當知行無りける若狹國の齋所今積を、如レ本可ニ充給一由、佐々木佐渡判官入道道譽に屬して申達せん爲に、日々に彼の宿所へ行給けれ共、今日は連歌の御會席にて候、唯今は茶の會の最中にて候とて、一度も對面に不レ及、數刻立せ、暮まで待せて、

南山—吉野山

國母—天皇の御母をいふ

頼基—大中

十九代、三種の神器おはしまさで、御位を繼せ給ふ事は、未其例を不ㇾ聞と、有職を立る人々の欺申さぬは無りけり。帝都今靜りて、御在位安泰なるに附ても、先皇、兩院、梶井宮、南山の奥に御座あれば、さこそ御心を惱さるらめと、主上御心苦き事に思召れければ、如何にもして南山より盗出し奉らんと、方便を被ㇾ廻けれ共、主上兩上皇は、南山の警固の兵密くて、可ㇾ有二御出一樣も無りけり。遙に程經て梶井宮計をぞ、兎角して盗出し進せける。同年の十月二十八日に、國母陽祿門院隱させ給ければ、天下諒闇の儀にて、洛中に物の音をもならさゞる事三月、禁裏椒庭殊更に物哀なる折節也。同二年二月四日、俄に、失火出來て、院御所持明院殿燒にけり。回祿は天災にて尋常有事なれ共、近年打續き京中の堂社宮殿、殘少く燒失ぬる事、直事とも不ㇾ覺、唯法滅の因緣、王城の衰微とぞ見えたりける。元弘建武の亂より以來、回祿に逢ぬる所々を數れば、先內裏、馬場殿、准后の御所、式部卿親王の常磐井殿、兵部卿宮の二條の御所、宣光門女院の御舊宅、城南離宮の鳥羽殿、荒て久しき伏見殿、十樂院、梨本、青蓮院、妙法院の白河殿、大覺寺殿の御舊跡、洞院左府の亭宅、大炊御門內府の亭、吉田內府の北白河、近衞殿の小坂殿、爲世卿の和歌所、三條大納言の栖馴し毘沙門堂、頼基が天の橋立跡舊

料理に滯て―とりはからひに差支ありての意

織部祭―大嘗祭卽ちオホンベノ祭の轉音に充字したる也

仰て、南方へ取奉らんとせられけるが、兎角料理に滯て、保光京都に捨置奉けるを尋出進せて、御位には卽進せける也。此宮をば、去年御繼母宣光門女院の御計として、妙法院の門跡へ御入室有べしとて、已に御出家あらんとし給ひけるを、御外祖母廣義門院より、內々北斗堂の實算法印に御占を問せ給たりければ、王位に卽せ可レ給御果報御座す由を勘申たりける間、誠しからずとは乍レ思召、御出家の議を止られて、日野右大辨時光に預置進せられける。其翌の年觀應三年八月二十七日に、俄に踐祚有しかば、兆前の勘文更に一事も不レ違、實算法印、忽に若干の叡感抽賞に預けり。

○無二劍璽一御卽位無レ例事附院御所炎上事

同九月廿七日に改元有て文和と號す。其年の十月に河原の御禊有て、翌の月大嘗會を被二遂行一三種の神器おはしまさで、御卽位の事は、如何有べからんと、諸卿異議多かりけれ共、武家强て申沙汰しける上は、唯兎も角も其議に隨ふべしとて、織部祭をば致されけるとぞ承る。夫人代百王の始は、鸕鷀草葺不合尊の第四王子、神日本磐余彥尊、大和國畝傍橿原宮にいまして、朝政をきこしめしたりしより以來、我君の御宇已に九

貫首―比叡山の座主

○茨宮御位事

今度吉野殿と將軍と、御合體の議破て合戰に及し刻、持明院の本院、新院、主上、春宮、梶井二品親王まで、皆南方の敵に囚れさせ給て、或は賀名生の奧、或は金剛山の麓に御座あれば、都には御在位の君も御座さず、山門には時の貫首も渡せ給はず。此平安城と比叡山と、同時に始りて、已に六百餘歲、一日も未斯る事をば不承及。是ぞ末法の世に成ぬる驗よと、淺ましかりし事共也。されども角ては如何あるべきとて、天台座主には、梶井二品親王の御弟子、承胤親王を成奉る。此宮は前門主の御振舞に樣替て、遊宴奇物をも愛せさせ給はず、行業不退にして、唯吾山の興隆をのみ御心に懸られたりければ、靡き奉らぬ衆徒も無りけり。さて御位には、誰をか卽け進すべきと、尋求奉る處に、本院第二の御子、三條の内大臣公秀の御女、三位殿の御局、後には陽祿門院と申しゝ御腹に生れさせ給たりしが、今年十五に成せ給ふを、日野春宮權大進保光に

とすれば違ふ—動もすれば所期に相違する

ながら、とすれば違ふ宮方の運の程こそ計られたり。

信濃宮―原本信濃下宮に作る、誤也

とて、東國靜謐の計略を可レ運由約諾す。義興義治は尙東國に止て將軍と戰ひ、新田武藏守義宗、桃井播磨守直常、上杉民部大輔、吉良三郎滿貞、石堂入道、東山東海北陸道の勢を率し、二手に成て上洛し、八幡の後攻を致して、朝敵を千里の外に可レ退と、諸將の相圖を定て、勅使を先立てぞ上ける。去程に新田武藏守義宗は、四月二十七日、越後の津張より立て、七千餘騎越中の放生津に著けば、桃井播磨守直常、三千餘騎にて馳參る。都合其勢一萬餘騎、九月十一日前陣已に能登國へ發向す。吉良三郎、石堂も、四月二十七日に駿河國を立て、路次の軍勢を驅催し、六千餘騎を率して、五月十一日に、先陣已に美濃の垂井赤坂に著しかば、八幡に力を勠せんと、遠篝をぞ燒たりける。是のみならず、信濃宮も、神家、滋野、友野、上杉、仁科、禰津以下の軍勢を召具して、同日に信濃を立せ給ふ。伊豫には土居、得能、兵船七百餘艘に取乘て海上より攻上る。東山北陸四國九州の官軍共、皆我國々を立しかば、路次の遠近に依て、縱五日三日の遲速は有とも、後攻の勢こそ近づきたれと、云立程ならば、八幡の寄手は皆退散すべかりしを、今四五日不二待附一して、主上は八幡を落させ給しかば、國々の官軍も力を落しはて、皆己が本國へぞ引返ける。是も唯天運の時不レ到、神慮より事起る故とは云

にければ、主上は玉體無レ恙して、東條へ落させ給にけり。內侍所の櫃をば、初給て持たりける人が、田の中に捨たりけるを、伯耆太郎左衛門長生、著たる鎧を脫捨て、自荷擔したりける。跡より追敵共、蒔捨る樣に射ける矢なれば、御櫃の蓋に當る音、板屋を過る村雨の如し。され共身には一筋も不レ立ければ、長生兎角かゝぐり附て、賀名生の御所へぞ參ける。多くの矢共御櫃に當つれば、內侍所も矢や立せ給たるらんと、淺ましくて御櫃を見進せたれば、矢の跡は十三まで有けるが、纔に薄き檜木板を射徹す矢の一筋も無りけるこそ不思議なれ。今度僞て京都を攻られん爲に、先住吉天王寺へ行幸成たりし時、兒島三郎入道志純も召れて參たりけるを、是が一大事なれば、急ぎ東國北國に下て、新田義貞が甥子共に、義兵を興させ、小山宇都宮以下、便宜の大名を語ひて、天下の大功を卽時に致す樣に、智謀を運せと仰出されければ、志純夜を日に繼で、關東へ下たれば、東國の合戰早事散じて、新田義興義治は、河村城に楯籠り、武藏守義宗は越後國にぞ居たりける。勅使東國北國に行向て、君已に大敵に圍れさせ給て、援の兵力勞ぬ。若神龍化して釣者の爲に捕はれさせ給なば、天下誰が爲にか爭はんと、依二義重一可レ輕レ命習を申ければ、小山五郎、宇都宮少將入道も勅定に隨ふ也

中黑―新田の旗符也

人討れさせ給ひぬ。四條大納言隆資、圓明院大納言、三條中納言雅賢卿も討れ給ひぬ。主上は軍勢に紛れさせ給はん爲に、山本判官が進せたりける黃絲の鎧をめして、栗毛なる馬にめされたるを、一宮彈正左衞門有種追懸進せて、可然大將とこそ見進せ候。蓬くも敵に被追立、一度も返させ給はぬ者哉と、呼り懸て、弓杖三枚許近附たりけるを、法性寺左兵衞督屹と顧て、惡い奴原が云樣哉。いで己に手柄の程を見せんとて、馬より飛で下り、四尺八寸の太刀を以て、冑の鉢を破よ碎けよとぞ打れたる。さしもしたゝかなる一宮、尻居にどうと打居られて、目くれ膽消にければ、暫心を靜めんと、目を塞ぎて居たる間に、主上遙に落延させ給にけり。古津川の端を西に傍て、御馬を早めらるゝ處に、備前の松田、備後の宮入道が兵共、二三百騎にて取籠奉る。十方より如雨降射る矢なれば、遁れ給ふべし共不見けるが、天地神明の御加護も有けるにや、御鎧の袖、草摺に二筋當ける矢も、曾て裏をかゝざりける。法性寺左兵衞督、是までも尙離れ進せず、唯一騎供奉したりけるが、跡より敵懸れば引返して追散し、敵前を遮れば懸破て主上を落し進せける處に、何より來るとも不知、御方の兵百騎許、皆中黑の笠符著て、御馬の前後に候けるが、近附敵を右往左往に追散して、かき消樣に失

心少延たる者―ぐづぐづして果斷なき者

死にけり。楠は父にも不レ似、兄にも替て、心少延たる者也ければ、今日よ明日よと云計にて、主上の大敵に圍まれて御座あるを、如何はせんとも心に不レ懸けることそうたてけれ。堯の子堯の如くならず、舜の弟舜に不レ似とは乍レ云、此楠は正成の子也、正行が弟也。何の程にか親にも替り、兄にも是まで劣るらんと、謗らぬ人も無りけり。

○南帝八幡御退失事

三月十五日より軍始て、已に五十餘日に及べば、城中には早兵粮を盡し、援の兵を待方もなし。角ては如何可レ有と云噯程こそあれ。軈て人々の氣色替て、唯落支度の外はする態もなし。去程に是ぞ宗徒の御用にも立ぬべき伊勢の矢野下野守、熊野湯川庄司、東西の陣に幕を捨て、兩勢三百餘騎降人に成て出にけり。城の案内敵に知れなば、落る共落得じ。さらば今夜主上を落し進せよとて、五月十一日の夜半許に、主上をば賢の御馬に乗進せて、前後の兵共打圍み、大和路へ向て落させ給へば、數萬の御敵前を要り跡に附て、討留進せんとす。依レ義輕レ命官軍共、返し合せて防ぎ、打破ては落し進するに、創を被て腹を切り、蹈留て討死する者三百人に及べり。其中に宮一

二三更の程—十時十二時の頃なるをいふ

萬餘騎、則洞峠へ打上て、土岐、佐々木、山名、赤松、松田、飽庭、宮入道、一勢一勢數十箇所に陣を取、鹿垣結て、八幡山を五重六重にぞ取巻ける。細川陸奧守、同相摸守は眞木葛葉を打廻て、八幡の西の尾崎、如法經塚の上に陣を取て、敵と堀一重を隔てぞ攻たりける。五月四日官軍七千餘騎が中より、夜討に馴たる兵八百人を勝て、法性寺左兵衛督に附らる。左兵衛督晝程より此勢を吾陣へ集て、笠符を一様に著させ、誰ぞと問ば進と名のるべしと約束して、夜已に二三更の程也ければ、宿院の後を廻て、如法經塚へ押寄、八百人の兵共、同音に鬨をどつと作る。細川が兵三千餘人、暗さは闇し分内はなし、馬放れ人騒で、太刀をも不レ拔得一、弓をも不レ彎得一ければ、手負討るゝ者數を不レ知。遥なる谷底へ人なだれをつかせて、追落されければ、馬物具を捨たる事幾千萬共難レ知。一陣破ぬれば、殘黨全からじと見る處に、土岐、佐々木、山名、赤松が陣は、些も動かず、鹿垣密く結て、用心堅く見えたれば、夜討に可レ打様もなく、可二打散一便も無りけり。角ては何までか可レ怺、和田、楠を河内國へ返て、後攻をせさせよとて、彼等兩人を、忍て城より出して、河内國へぞ遣されける。八幡には、此後攻を憑て、今や今やと待給ける處に、是を我大事と思入て引立ける和田五郎俄に病出して、無二幾程一

袖の菱縫吹返―袖の端に菱の形を縫ひたる所を菱縫といひ、冑の左右に後方に返りたる所あるを吹返といふ

幡へ推寄て一軍せんとて淀より向はれけるが、法性寺左兵衛督、爰に陣を取て、淀の橋三間引落て、西の橋爪に垣楯掻て相待ける間、橋を渡る事は叶はず。さらば筏を作り渡せとて、淀の在家を壊て筏を組たれば、五月の霖に水増て押流されぬ。數日有て後、淀の大明神の前に淺瀬有と聞出して、二千餘騎を一手になし、流を截て打渡すに、法性寺左兵衛督唯一騎、馬のかけあがりに控て、敵三騎切て落し、のりたる太刀を押直して、閑々と引て返れば、山名が兵三千餘騎、大將とこそ見奉るに、穢くも敵に後をば見せられ候者哉とて追懸たり。返すに難き事かとて、左兵衛督取て返してはつと追散し、返し合ては切て落し、淀の橋爪より御山まで、十七度迄こそ返されけれ。され共馬をも切れず、我身も痛手を負ざれば、袖の菱縫吹返に立處の矢少々折懸て、御山の陣へぞ歸られける。山名右衛門佐、財園院に陣をとれば、左兵衛督、猶守堂口に支て防がんとす。四月二十五日、四方の寄手同時に牒じ合て攻戰ふ。顯能卿の兵、伊賀伊勢の勢三千餘騎にて、園殿口に支て戰ふ。和田、楠、湯淺、山本、和泉河内の軍勢は、佐羅科に支て戰ふ。軍未半なるに、高橋の在家より神火燃出て、魔風十方に吹懸ける程に、官軍烟に咽で、防がんとするに叶はねば、皆八幡の御山へ引上る。四方の寄手二

袖も草摺もなし

つぼ板―脇楯を覆ふ板

そ、助けんずるとて、つぼ板に射立られたる矢をば、脇楯ながら引切て投棄、かゝる敵を五六人切伏、關將監を左の小脇に挾み、右手にて件の太刀を打振打振、近附く敵を打拂て、三町許ぞ落たりける。跡に續いて何までもと追懸ける和田五郎も討遁しぬ、不レ安思ける處に、惡五郎が運や盡にけん、夕立に掘たる片岸の有けるを、ゆらりと越けるに、岸の額のかた土くわと崩れて、藥研のやうなる所へ、惡五郎落ければ、走寄て長刀の柄を取延、二人の敵をば討てげり。入亂たる軍の最中なれば、首を取までもなし。惡五郎が引切て捨たりつる、脇楯計を取て、討たる證據に備へ、身に射立られたる矢ども少々折懸て、主上の御前へ參り、合戰の體を奏し申せば、初申つる言には少しも不レ違、大敵の一將を討取て、數箇所の創を被ながら、無レ恙して歸參る條、前代未聞の高名也と、叡感更に不レ淺。惡五郎討れて、官軍利を得たりといへ共、寄手日に餘る程の大勢なれば、始終此の陣には難レ怺とて、楠次郎左衛門夜に入て、八幡へ引返せば、翌日朝敵驅て入替て、荒坂山に陣を取る。然ども官軍も不レ懸、寄手も不二攻上一、八幡を遠攻にして、四五日經る處に、山名右衛門佐師氏、出雲、因幡、伯耆三箇國の勢を率して上洛す。路次の遠きに依て、荒坂山の合戰にはづれぬる事、無念に思はれける間、直に八

引側め―我身に引き附けて持つ

からどう―からどうは鐵胴にて、鐵の鎧の胴ばかり作りたるもの、

伊國勢三千餘騎皆荒坂山へ打向て、爰を支んと控たれば、細川相摸守清氏、同陸奥守顯氏、土岐大膳大夫、舍弟惡五郎、六千餘騎にて押寄たり。山路嶮しく峯高く峙たれば、麓より皆馬を蹈放々々、かづき連てぞ上たりける。斯る軍に元來馴たる大和河内の者共なれば、岩の陰岸の上に走り渡て散々に射る間、面に立つ土岐と細川が兵共、射しらまされて不進得。土岐惡五郎は其比天下に名を知れたる大力の早わざ、打物取て達者也ければ、卯の花威の鎧に鍬形打て、水色の笠符吹流させ、五尺六寸の大太刀拔て引側め、射向の袖を振かざいて、遥に遠き山路を、唯一息に上らんと、猪の懸る様に、莞爾と笑ひ上けるを、和田五郎あはれ敵やと打見て、突たる楯をがばと投棄て、三尺五寸の小長刀莖短に取て渡合ふ。爰に相摸守が郎從に關左近將監と云ける兵、土岐が脇よりつと走拔て、和田五郎に打て蒐る。和田が中間是を見て、小松の陰より走出て、近々と攻寄て、十二束三伏暫堅て放つ矢、關將監が、からどうをくさめどはしに射拔れて、小膝をついてぞ伏たりける。惡五郎走寄て、引起さんとしける處を、又和田が中間、二の矢を番て、惡五郎が脇楯のつぼの板くつ巻せめてぞ射こうだる。關將監是を見て、今は可助人なしと思けるにや、腰の刀を拔て、腹を切んとしけるを、惡五郎暫自害なせ

宮を一人―護良親王の御子陸良親王をいふ

命を際の合戰―死ぬか生きるかの合戰

害なるに、赤井橋を引て、畿内の官軍七千餘騎にて楯籠たり。三方は大河隔て橋もなく舟もなし。宇治路を後へ廻らば、前後皆敵陣にはさまりて、進退心安かるまじ、如何すべきと評定有て、東寺には猶國々の勢を待れける處に、細川陸奥守四國の勢を率して、三千餘騎にて上洛せらる。又赤松律師則祐は、吉野殿より宮を一人申下し進せて、今までは宮方を仕る由にて有けるが、是もいかゞ思案したりけん、宮方に背きて京都へ馳來りければ、宰相中將殿は、龍の水を得、虎の山に靠るが如くに成て、勢京畿を掩へり。同三月二十四日、宰相中將殿三萬餘騎の勢を率し、宇治路を廻て、木津河を打渡り、洞峠に陣を取んとす。是は河内東條の通路を塞て、敵を兵粮に迫ん爲也。八幡より北へは、和田五郎、楠次郎左衛門とを向られけるが、楠は今年二十三、和田は十六、何れも皆若武者なれば、思慮なき合戰をや致さんずらんと、諸卿悉危み思はれけるに、和田五郎參内して申けるは、親類兄弟度々の合戰に、身を捨て討死仕候畢。今日の合戰は、又公私の一大事と存ずる事にて候上は、命を際の合戰仕て、敵の大將を一人討取候はずば、生て再び御前へ歸り參る事候まじと、申切て罷出ければ、列座の諸卿國々の兵、あはれ代々の勇士也と、感ぜぬ人は無りけり。去程に和田、楠、紀

地―左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武、一も闕くる所なき地

に天台山を立て、百王萬代の寶祚を修し置れし勝地なれば、後五百歳末來永々に至まで、荒廢非じとこそ覺つるに、こはそも如何に成ぬる世の中ぞやと、歎かぬ人も無りけり。宰相中將殿は、近江の四十九院にはるぐ〳〵とおはしけれ共、土岐佐々木が外は、相從ふ勢も無りしが、東國の合戰に、將軍勝ち給ぬと聞えて後より、勢の附奉る事如ㇾ雲霞。さらば軈て京都へ寄せよとて、三月十一日四十九院を立て、三萬餘騎先伊祇代三大寺にして手を分つ。或は漫々たる湖上に、山田矢早瀬の渡舟に棹さす人もあり。或は渺々たる沙頭に、堅田高島を經て、駒に鞭うつ勢もあり。旌旗水煙に翻て、龍蛇忽に天にあがり、甲冑夕陽に輝て星斗則地に列なる。中院宰相中將具忠卿千餘騎にて、此勢を防ん爲に、大津邊に控られたりけるが、敵の大勢なる體を見て、戰ふ事不ㇾ叶とや思はれけん、敵の未不ㇾ近前に、八幡へ引返さる。同十五日宰相中將京都に發向して、東山に陣をめさるれば、宮方の大將北畠右衛門督顯能都を去て、淀赤井に陣を取る。同十七日に、宰相中將殿下京に御移有て、東寺に御陣を召るれば、顯能卿淀川を引て、八幡の山下に陣をとる。未ㇾ戰前に、宮方の大將陣を去事三箇度なれば、行末とてもさぞ有んずらんと、憑少くぞ見たりける。さは有ながら、八幡は究竟の要

九禁―九門
野干―狐
四神相應の

は、六千餘騎にて、尙鎌倉におはしけるが、將軍已に笛吹峠の合戰に打勝て、八箇國の勢を率して、鎌倉へ寄給ふ由聞えければ、義興も義治も、唯此にて討死せんと宣けるを、松田河村の者共、某等が所領の內、相摸河の河上に究竟の深山候へば、唯それへ先引籠らせ給て、京都の御左右をも聞召し、越後信濃の大將達へも、被牒合候て、天下の機を得、諸國の兵を集てこそ、重て合戰も候はめと、よりより强て申ければ、義興義治諸ともに、三月四日鎌倉を引て、石堂、小俣、二階堂、葦名判官、三浦介、松田・河村、酒勾以下六千餘騎の勢を率して、國府津山の奥にぞ籠ける。

○八幡合戰事附官軍夜討事

都には、去月二十日の合戰に打負て、足利宰相中將殿は、近江國へ落させ給ひ、持明院の本院、新院、主上、春宮は皆捕はれさせ給て、賀名生に遷幸成ぬ。吉野の主上は、猶世を危て八幡に御座あり。月卿雲客は、西山、東山、吉峯、鞍馬の奥などに逃隱ておはすれば、帝城の九禁、いつしか虎賁猛將の備もなく、朝儀大禮の沙汰も無て、野干の棲と成にけり。桓武の聖代、此四神相應の地を選で、東山に將軍塚を築れ、艮の方

銀漢高く云云—天の河の高く澄み渡りたる夏夜に衆星の光りかゞやく如く盛なりの意

退て、陣々に篝を燒たるに、將軍の御陣を見渡せば、四方五六里に及で、銀漢高くすめる夜に、星を列るが如くなり。笛吹峠を顧れば、月に消行螢火の山陰に殘るに不レ異。義宗是を見給て、終日の合戰に兵若干討れぬといへ共、是程まで陣の透べしとは覺ぬに、篝の數の餘にさびしく見るは、如何樣勢の落行と覺るぞ。道々に關を居よとて、栽田山と信濃路に、稠く關を居られたり。夫士卒將を疑ふ時は、戰不レ利と云事あり。前には大敵勝に乘て、後は御方の國々なれば、今夜一定越後信濃へ引返さんずらんと、我を疑はぬ軍勢不レ可レ有。舟を沈め糧を捨て、二度歸らじと云心を示すは、良將の謀なり。皆馬の鞍をおろし、鎧を脱で引まじき氣色、人に見せよとて、大將鎧を脫給へば、士卒悉鞍をおろして馬を休む。宵の程は皆心を取靜め居たりけるが、夜半許に續松おびたゞしく見えて、將軍へ大勢のつゞく勢見えければ、明日の戰も叶はじとや思はれけん、上杉民部大輔篝計を燒棄て、信濃へ落にければ、新田武藏守其曉越後へ落られけり。斯りし後は、唯今まで新田上杉に附從つる武藏上野の兵共も、未何方へも不レ著して一合戰の勝負を伺ひ見つる上總下總の者共も、我先にと將軍へ馳參ける程に、其勢無レ程百倍して、八十萬騎に成にけり、新田左兵衞佐義興、脇屋左衞門佐義治

氣色ばうて―氣色ばみてにて意氣の昂りたるさまをいふ

草鹿の的山―草鹿は騎射の一種にて草にて鹿の形を作りて的とするもの、的山は的を置く爲に作りたる假山

騎將軍の陣へ馳入る。數萬の軍勢道に横て、誰が手の人ぞと問ければ、是は將軍の御内の者にて候が、新田の一族に、宗徒の人々を組討に討て候間、首實檢の爲に將軍の御前へ參候也。開て通され候へと高らかに呼て、氣色ばうて打通れば、目出たう候と感ずる人のみ有て、思とがむる人もなし。將軍は何に御座候やらんと問へば、或人あれに控させ給て候也と指差て敎ふ。馬上よりのびあがり見ければ、相隔る事草鹿の的山許に成にけり。あはれ幸や、たゞ一太刀に切て落さんずる者をと、二人屹と目くばせして、中々馬を閑々と歩ませける處に、猶も將軍の御運や強かりけん、見知人有て、そこに紛て近附武者は、長尾彈正と根津小次郎とにて候は。近附てたばかるなと呼ければ、將軍に近附奉らせじと、武藏相摸の兵共、三百餘騎中を隔て、左右より颯と馳寄る。根津と長尾と支度相違しぬと思ければ、鋒に貫きたる首を抛て、亂髮を振上大勢の中を破て通る。彼等二人が鋒に廻る敵、一人として冑の鉢を胸板まで、眞二に破著けられ、腰のつがひを切て落されぬは無りけり。され共敵は大勢也。是等は唯二騎なり。十方より矢衾を作て散々に射ける間、叶はじとや思けん。あはれ運強き足利殿やと、高らかに欺て、閑々と本陣へぞ歸ける。夜に入ければ、兩陣共に引

虎賁狼卒—強く逞しき武士

ふ。是も新手の越後勢、同三千餘騎にて相懸に懸て、半時許戰ふに、逸見入道以下宗徒の甲斐源氏百餘騎討れて引退く。二番に千葉介、宇都宮、小山、佐竹が勢相集て七千餘騎、上杉民部大輔が陣へ押寄て、入亂入亂戰ふに、信濃勢二百餘騎討れければ、寄手も三百餘騎討れて、相引に左右へ颯と引く。引けば兩陣入替て追つ返つ、其日の午刻より酉刻の終まで、少も休む隙なく、終日戰ひ暮してけり。夫れ小勢を以て大敵に戰ふに、鳥雲の陣にしくはなし。鳥雲の陣と申は、先後に山をあて、左右に水を境て、敵を平野に見下し、我勢の程を敵に不見して、虎賁狼卒替る〲射手を進て戰ふ者也。此陣幸に鳥雲に當れり。待て戰はゞ利あるべかりしを、武藏守若武者なれば、毎度廣みに懸出て、大勢に取卷れける間、百度戰ひ千度懸破るといへ共、敵目に餘る程の大勢なれば、新田上杉遂に打負て、笛吹峠へぞ引上ける。上杉民部大輔が兵に、長尾彈正、根津小次郎とて、大力の剛者あり。今日の合戰に打負ぬる事、身一つの恥辱也と思ければ、紛て敵の陣へ馳入、將軍を討奉らんと相謀て、二人乍ら俄に二引兩の笠符を著替へ、人に見知れじと、長尾は亂髮を顏へ颯と振懸け、根津は刀を以て己が額を突切て血を面に流かけ、切て落たりつる敵の首鋒に貫き、とつ附に取著て、唯二

に作る、孰か是なるを知らず

小三郎、二宮近江守、同河内守、同但馬守、同能登守、曾我上野守、海老名四郎左衞門、本間、澁谷、曾我三河守、同周防守、同但馬守、同石見守、石濱上野守、武田陸奥守、子息安藝守、同薩摩守、同彈正少弼、小笠原、坂西、一條三郎、板垣三郎左衞門、逸見美濃守、白洲上野守、天野三河守、同和泉守、狩野介、長峯勘解由左衞門、都合其勢八萬餘騎、將軍の御陣へ馳參る。鎌倉には、義興義治七千餘騎にて、著到を附ると聞え、武藏には新田義宗上杉民部大輔、二萬餘騎にて控たりと聞ゆ。何へ可向と評定有けるが、先勢の勞せぬ前に、大敵に打勝なば、鎌倉の小勢は不戰共可退散と衆議一途に定て、將軍同二月二十五日、石濱を立て、武藏府に著給へば、甲斐源氏、武田陸奥守、同刑部大輔、子息修理亮、武田上野守、同甲斐前司、同安藝守、同彈正少弼、舍弟薩摩守、小笠原近江守、同三河守、舍弟越後守、一條四郎、板垣四郎、逸見入道、同美濃守、舍弟下野守、南部常陸守、下山十郎左衞門、都合二千餘騎にて馳參る。同二十八日將軍笛吹峠へ押寄て、敵の陣を見給へば、小松生茂て、前に小川流たる山の南を陣に取て、峯には錦の御旗を打立、麓には白旗、中黑、棕櫚葉、梶の葉の紋書たる旗共、其數滿々たり。先一番に新手案内者なればとて、甲斐源氏三千餘騎にて押寄たり。新田武藏守と戰

將軍の御運に云々―尊氏の運命强かりしに自然運延しての意

上野親王―宗良親王信濃宮又上野宮とも稱す

古尾谷兵部大輔―上文に民部大輔

○笛吹峠軍事

新田武藏守は、將軍の御運に退緩して、石濱の合戰に本意を不ㇾ達しかば、武藏國を前になし、越後信濃を後に當て、笛吹峠に陣を取てぞおはしける。是を聞て打よる人々には、大江田式部大輔、上杉民部大輔、子息兵庫助、中條入道、子息佐渡守、田中修理亮、堀口近江守、羽川越中守、荻野遠江守、酒勾左衞門四郎、屋澤八郎、風間信濃入道、舍弟村岡三郎、堀兵庫助、蒲屋美濃守、長尾右衞門、舍弟彈正忠、仁科兵庫助、高梨越前守、大田瀧口、干屋左衞門大夫、矢倉三郎、藤崎四郎、瓶尻十郎、五十嵐文四、同文五、高橋大五郎、同大三郎、友野十郎、滋野八郎、禰津小二郎、舍弟修理亮、神家一族三十三人、滋野一族三十一人、都合其勢二萬餘騎、先朝第二宮上野親王を大將にて、笛吹峠へ打出る。將軍小手差原の合戰に無ㇾ事故、石濱におはする由聞えければ、馳參ける人々には、千葉介、小山判官、小田少將、宇都宮伊豫守、常陸大丞、佐竹右馬助、同刑部大輔、白川權少輔、結城判官、長沼判官、河越彈正少弼、高坂刑部大輔、江戸、豐島、古尾谷兵部大輔、見田常陸守、土肥兵衞入道、土屋備前前司、同修理亮、同出雲守、下條

づんど切れて一ぼつりと切られてといふ意

彼の小路より、どつと喚ては懸入り、颯と懸破ては裏へ抜、谷々小路々々に入亂てぞ戰たる。兵衛佐義興は、濱面の在家のはづれにて、敵三騎切て落し、大勢の中をつと懸抜ける處にて、小手の手覆を切ながさるゝ太刀にて、手綱のまがりを、づんど切れて、弓手の片手綱土にさがり、馬の足に踏れけるを、太刀をば左の脇に挾み、鐙の鼻に落さがり、左右の手綱を取合て結れけるを、敵三騎能隙哉と馳寄て、冑の鉢と總角著とを三打四打したゝかに切けれ共、義興些も不騷、閑に手綱を結で、鞍坪に直り給へば、三騎の敵はつと馬を懸のけて、あはれ大剛の武者やと、高聲に二聲三聲感じて、御方の勢にぞ馳著たる。塔辻の合戰難儀也と見えければ、脇屋左衛門佐と、小俣少輔二郎と一手に成て、二百餘騎喚て懸られけるに、南遠江守被懸立て、旗を卷て引退くを見て、谷々に戰ける兵共、十方へ落散ける間、一所に打寄事不叶して、百騎二百騎思々に落て行。され共三浦石堂が兵共、餘に戰くたびれて、さしも敵を不追ければ、南遠江守は今日の合戰に被打洩、左馬頭を具足し奉て、石濱を指て被落けり。新田左兵衛佐、脇屋左衛門佐、二月十三日の鎌倉の軍に打勝てこそ、會稽の恥を雪るのみに非ず、兩大將と仰がれて、暫八箇國の成敗に被居けり。

てぞ有らん。さては鎌倉までも不行著して、關戸にてぞ戸をば可曝にて有けりと、面々に思定て、一處に馬を懸寄せ、是は誰殿の勢にて御渡候ぞと問れければ、是は石堂入道、三浦介、新田殿へ御參候也とぞ答ける。義興義治手を拍て、こはいかにと悦給ふ事無限。唯魯陽が朽骨二度連て、韓遘と戰を致せし時、日を三舍に返しゝ悦も、是には過じとぞ覺ける。軈て此勢と打連て、神奈川に著て、鎌倉の様を問給へば、鎌倉には、將軍の御子息左馬頭基氏を警固し奉て、南遠江守安房上總の勢三千餘騎にて、けはひ坂、巨福呂坂を切塞で、用心密く見え候しが、昨日の朝敵三浦に有と聞て、打散さんとて向はれ候しか共、虚言にて有けりとて、唯今鎌倉へ打歸らせ給て候よとぞ語ける。さては唯今の合戰ごさんなれ。爰にて軍の用意をせよとて、兵粮を仕ひ馬に糠かはせて、三千餘騎二手に分て、鶴岡へ旗指少々差遣て、大御堂の上より眞下にぞ押寄たる。鎌倉勢は唯今三浦より打歸て、未馬の鞍をもおろさず、鎧の上帶をも解ぬ程なれば、若宮小路へ打出て、唯一處に控たり。小俣小次郎をば、今日の軍奉行と、今朝より被定たりければ、手勢七十餘騎ひつ勝て、敵の群立て控たる中へ、つと懸入、火を散て切亂す。三浦、葦名、二階堂の兵共、案内は知たり、人馬は未疲、此谷

笛吹峠—碓氷嶺に同じ

涙にも不著云々—寄邊なきさまを船の漂へるに譬へたる也

に打負て、東の方へ落させ給候つる也とぞ答ける。さて爰に見えたる篝は、敵歟御方かと問給へば、此邊に御方は一騎も候まじ。是は仁木殿兄弟の勢か、白旗一揆の者共が燒たる篝にてぞ候らん。小勢にて此邊に御座候はん事は、如何と覺え候へば、夜に紛て急ぎ笛吹峠の方へ打越させ給候て、越後信濃の勢を待調へられ候て、重て御合戰候かしと申ければ、武藏守暫思案して、げにも此儀然べしとて、笛吹峠は何ぞと、問々夜中に落給ふ。

○鎌倉合戰事

新田佐兵衛佐脇屋左衛門佐二人は、纔に二百餘騎に被打成、武藏守に離れぬ、御方の勢共は、何地へか引ぬらん、浪にも不レ著礒にも離たる心地して、皆馬より下居て休まれけるが、此勢にては上野へも歸り得まじ。落て可レ行方もなし。可討死命なれば、鎌倉へ打入て、足利左馬頭に逢て、命を失はばやとのたまへば、諸人皆此議に同じて、一向討死せんと志し、思々の母衣懸て、鎌倉へとぞ赴れける。夜半過程に、關戸を過給けるに、勢の程五六千騎も有らんと覺て、西を指て下る勢に行合給て、是は搦手に廻る勢に

些も不轟ー些も騒がざる也

守些も不轟。眞中を破らるな。敵に氣を盡させよと下知して、彌馬を立寄、透間もなく、控たれば、面にある兵計互に討れて、颯と引けれ共、追ても更に不懸、裏へ廻て戰へども、面は些も不騒。東へ廻れ共西は閑なり。北へ廻れ共南は合て不轟。懸寄すれば打違、組で落れば落重る。千度百度懸れ共、强陣勢堅くして、大將退く事無れば、義興義治氣疲れて、東を指て落て行。二十餘町落延て、誰々討れたると計るに、三百餘騎有つる兵共、百餘騎討れて、二百餘騎ぞ殘ける。義興冑の錣袖の三の板切落されて、小手の餘、臑當のはづれに、薄手三所負れたり。義治は太刀かけ草摺の横縫、皆突切れて、威毛計續たるに、鍬形兩方被切折、星も少々削られたり。太刀は鐔本打折ぬ。中間に持せたる長刀を持れたりけるが、峰はさゝらの子の如く被切て、刄は鋸の樣にぞ折たりける。馬は三所まで被切たりけるが、下て乘替にのり給へば、倒れて軈て死にけり。兩大將如此自戰て、創を被る上は、其已下の兵共、痛手を負、切創の二三箇所負ぬ者は希也。新田武藏守將軍をば討漏しぬ。今日は日已に暮ぬれば、勢を集て明日石濱へ寄せんとて、小手差原へ打歸る。兵衛佐殿何にか控へ給ぬると、行合ふ兵共に問給へば。兵衛佐殿と、脇屋殿とは、一所に控て御渡り候つるが、仁木殿

色代―會釋に同じ

手立を成敗して―戰略を定めて

白旗一揆が二三萬騎北に分て引けるを、是ぞ將軍にておはすらん。何くまでも追攻て討んとて、五十餘町迄追懸て行處に、降參の者共が馬より下り、各對面して色代しける程に、是に會釋せんと、所々にて馬を控へ會釋し給ける間、軍勢は皆北を追て、東西へ隔りぬ、義興と義治と、僅に三百餘騎に成てぞおはしける。仁木左京大夫頼章、舍弟越後守義長は、元來加樣の所を伺て、未一戰もせず、馬を休て、葦原の中に隱て居られたりけるが、是を見て、末々の源氏國々のつき勢をば、何千騎討ても何かせん。あはれ幸や、天の與へたる所哉と悅で、其勢三千餘騎、唯一手に成て押寄たり。敵大勢なれば、定て鶴翼に開て取籠んずらんと推量して、義興、義治魚鱗に連て、轡をならべて、敵の中を破んと見繕ふ處に、仁木越後守義長、是を屹と見て、敵の馬の立樣軍立、尋常の葉武者に非ず、小勢なればとて、侮て中を破らるな。一所に馬を打寄て、敵懸る共懸合すな。前後に常に目を賦て、大將と覺しき敵あらば、組で落て首をとれ。葉武者かゝらば射落せ。敵に力を盡させて、御方少も不レ漂、無勢に多勢不レ勝やと、委細に手立を成敗して、一所に勢をぞ圍たる。案に不レ違義興義治、目の前に控て欺く敵に怺兼て、三百餘騎を一手に成し、敵の眞中を懸破て、蜘手十文字に懸立んと喚て懸けれ共、仁木越後

軍立無甲斐―陣の備ひ甲斐なくの意

引も策を擧げ云々―引退く者も追ふ者も馬の速度を早むるをいふ

酉のさがり―酉の下り即ち今の午後六時過也

れ、是は其軍立無甲斐、將軍の後に控ておはする陣の中へ、こぼれ落て引間、新手は是に被蹴立不進得、敵は氣に乘て勝鬨を作懸々々、攻附て追懸る。角ては叶まじ、些引退て、一度に返せと云程こそ有けれ、將軍の十萬餘騎ひた引に引立て、曾て後を不顧。新田武藏守義宗、旗より先に進で、天下の爲には朝敵也。我爲には親の敵也。唯今尊氏が首を取て、軍門に不曝、何の時をか可期とて、自餘の敵共の南北へ分て引をば、少も目に懸ず、唯二引兩の大旗の引くに附て、何までもと追蒐給ふ。引も策を擧け追も逸足を出せば、小手差原より石濱まで、坂東道已に四十六里を片時が間にぞ追附たる。將軍石濱を打渡給ける時は、已に腹を切らんとて、鎧の上帶切て投捨て、高紐を放さんとし給けるを、近習の侍共二十餘騎返合て、追蒐る敵の河中まで渡懸たると、引組引組討死しける其間に、將軍急を遁て、向の岸へかけ上り給ふ。落行敵は三萬餘騎、追懸る敵は五百餘騎、河の向の岸高して、屏風を立たる如くなるに、數萬騎の敵返合せて、此を先途と支たり。日已に酉のさがりに成て、河の淵瀬も不見分、新田武藏守義宗續いて渡すに不及、跡より續く御方はなし。安からぬ者哉と、牙を嚼て本陣へと引返さる。又將軍の御運のつよき所也。新田兵衛佐と脇屋左衛門佐とは、一所に成て、

三十三天―四天忉利兜率等の諸天をいふ

金輪際―世界を載せたる須彌山の根をいふ

合す。上は三十三天までも響き、下は金輪際迄も聞ゆらんと夥し。先一番に新田左兵衛佐が二萬餘騎と、平一揆が三萬餘騎と懸合て、追つ返つ合つ分れつ、半時許相戰て、左右へ颯と引退たれば、兩方に討るゝ兵八百餘人、創を被る者は未計るに不遑。二番に脇屋左衛門佐が二萬餘騎と、白旗一揆が二萬七千餘騎と、東西より相懸に懸て、一所に颯と入亂れ、火を散して戰ふに、汗馬の馳違ふ音、太刀の鐔音、天に光り地に響く。或は引組で首を取もあり被取もあり、或は弓手妻手に相附て、切て落すもあり被落もあり。血は馬蹄に被蹴懸、紅葉に洒ぐ雨の如く、尸は野徑に横て、尺寸の地も不餘。追靡け懸立られ、七八度が程戰て、東西へ颯と別れたれば、敵御方に討るゝ者、又五百人に及べり。三番に饗庭命鶴生年十八歳、容貌當代無雙の兒なるが、今日花一揆の大將なれば、殊更花を折て出立、花一揆六千餘騎が眞前に懸出たり。新田武藏守是を見て、花一揆を散さん爲に兒玉黨を向べし、團扇の旗は風を含める物也とて、兒玉黨七千餘騎を差向らる、花一揆皆若武者なれば、思慮もなく敵に懸て、一戰戰ふとぞ見えし。兒玉黨七千餘騎に被揉立、一返も返さず、はつと引。自餘の一揆は、かゝる時は一手に成て懸り、引時は左右へ颯と別て、新手を入替さすればこそ、後陣は騷がで懸違た

小手の袋―鎧の具、兩の腕を被ふ所謂臂鎧也

四幅袴―布四幅を以て縫ひたる袴にて前後各二幅づつ也古は中間小者などの著けたる袴

小旗、下濃の旗、鍬形一揆、母衣一揆、是も五箇所に陣を張り、射手をば左右に進ませて、懸手は後に控たり。敵小手差原にありと聞えければ、將軍十萬餘騎を五手に分て、中道よりぞ寄られける。先陣は平一揆三萬餘騎、小手の袋、四幅袴、笠符に至まで、一色に皆赤かりければ、殊更耀てぞ見えたりける。二陣には、白旗一揆二萬餘騎、白葦毛、白瓦毛、白佐日、鴾毛なる馬に乘て、練貫の笠符に、白旗を差たりけるが、敵にも白旗有と聞て、俄に短くぞ切たりける。三陣には花一揆、命鶴丸を大將として、六千餘騎、萠黄、火威、紫絲、卯の花の妻取たる鎧に、薄紅の笠符をつけ、梅花一枝折て、冑の眞向に差たれば、四方の嵐吹度に、鎧の袖や匂ふらん。四陣は御所一揆とて、三萬餘騎、二引兩の旗の下に、將軍を守護し奉て、御内の長者、國大名、閑に馬を控たり。五陣に仁木左京大夫頼章、舍弟越後守義長、三男修理亮義氏、其勢三千餘騎、笠符をも不レ附旗をも不レ差、遙の外に引のけて、馬より下てぞ居たりける。是は兩方大勢の合戰なれば、十度廿度懸合懸合戰はんに、敵も御方も氣を屈し、力疲れぬ事不レ可レ有、其時新手に代て、敵の大將の控たらんずる所を見澄して、夜討にせんが爲也けり。去程に新田足利兩家の軍勢二十萬騎、小手差原に打臨で、敵三聲鬨を作れば、御方も三度鬨の聲を

いざさせ給へ—いざ支度し給へ、いざは誘ふ意

一揆—此には一群のいくさ人といふ程の義

を損じて、此事將軍に告申さでは叶まじきとて、歸候つるは、如何此者が氣色、よも告申さぬ事は候はじ。如何樣聽て討手を向られんと覺候。いざさせ給へ。今夜我等が勢を引分て、關戸より武藏野へ廻て、新田の人々と一になり、明日の合戰を致候はんと宣ければ、多日の謀忽に顯れて、却て身の禍に成ぬと恐怖して、三浦、葦名、二階堂手勢三千餘騎を引分、寄手の勢に加らんと、關戸を廻て落行。是ぞはや將軍の御運盡ざる所なる。

○武藏野合戰事

三浦が相圖相違したるをば、新田武藏守夢にも不レ知、時刻よく成ぬと急ぎ、明れば閏二月二十日の辰刻に、武藏野の小手差原へ打臨給ふ。一方の大將には、新田武藏守義宗五萬餘騎、白旗、中黑、頭黑、團扇の旗は、兒玉黨、坂東八平氏、赤印一揆を五手に引分て、五所に陣をぞ取たりける。一方には新田左兵衞佐義興を大將にて、其勢都合二萬餘騎、かたばみ、鷹の羽、一文字、十五夜月弓一揆、引ては一人も歸じと、是も五手に一揆して、四方六里に控たり。一方には脇屋左衞門佐義治を大將にて、二萬餘騎、大旗、

相構てー必ずといふ程の義

藏くも、若望み達せば、後榮を子孫に殘さんと存ずる故也。されば此事を告知せて、心得させばやと存ずるは、如何候べきと問給ければ、三浦、げにも是程の事を告進せられざらんは、可レ有二後悔一覺候。急ぎ知せ進せ給へと申ける間、石堂禪門子息右馬頭を呼で、我薩埵山の合戰に打負て、今降人の如くなれば、仁木、細川等に押すゑられて、人數ならぬ有樣、御邊も定て遺恨にぞ思らん。明日の合戰に、三浦介、葦名判官二階堂の人々と引合て、合戰の最中將軍を討奉り、家運を一戰の間に開かんと思也。相構て其旨を心得て、我旗の趣に可レ被レ從と云ければ、右馬頭大に氣色を損じて、弓矢の道貳心あるを以て恥とす。人の事は不レ知、於レ某は將軍に深く憑れ進せたる身にて候へば、後矢射て名を後代に失はんとは、えこそ申まじけれ。兄弟父子の合戰、古より今に至まで、無き事にて候はず。何樣三浦介、葦名判官隱謀の事を將軍に告申さずば、大なる不忠なるべし。父子の恩義已に絕候ぬる上は、今生の見參は、是を限と思召候へと、顏を赤め腹を立て、將軍の御陣へぞ被レ參ける。父の禪門大に興を醒して、急ぎ三浦が許に行て、父の子を思ふ如く、子は父を思はぬ者にて候けり。此事右馬頭に不レ知、敵の中に殘て討れもやせんずらんと思ふ悲さに、告知せて候へば、以外の氣色

輔、子息右近將監等也。元より隱謀有しかば、石堂入道、三浦介、小俣宮内少輔、葦名判官、二階堂下野次郎、其勢三千餘騎は、他の勢を不交、將軍の御馬の前後に透間もなくぞ打たりける。久米河に一日逗留し給へば、河越彈正少弼、同上野守、同唐戸十郎左衛門、江戸遠江守、同下野守、同修理亮、高坂兵部大輔、同下野守、同下總守、同掃部助、豐島彈正左衛門、同兵庫助、土屋備前守、同修理亮、同出雲守、同肥後守、土肥次郎兵衛入道、子息掃部助、舍弟甲斐守、同三郎左衛門、二宮但馬守、同伊豆守、同近江守、同河內守、曾我周防守、同三河守、同上野守、子息兵庫助、澁谷木工左衛門、同石見守、海老名四郎左衛門、子息信濃守、舍弟修理亮、小早川刑部大輔、同勘解由左衛門、豐田因幡守、狩野介、那須遠江守、本間四郎左衛門、鹿島越前守、島田備前守、淨法寺右近大夫、白鹽下總守、高山越前守、小林右馬助、瓦葺出雲守、見田常陸守、古尾谷民部大輔、長峯石見守都合其勢八萬餘騎、將軍の御陣へ馳參る。已に明日矢合と定められたりける夜、石堂四郎入道、三浦介を呼のけて宣けるは、合戰已に明日と定められたり。此間相謀つる事を、子息にて候右馬頭に、曾て知せ候はぬ間、此者一定一人殘止て、將軍に討れ進せんと覺え候。一家の中を引分て、義卒に與し老年の頭に冑を

開せ給てー退かれの意

萬騎には劣候はじとぞ答ける。仁木細川の人々是を聞て、さてはゆゝしき大事ごさんなれ。鎌倉中の勢、千騎にまさらじと覺る也。國々の軍勢は縦參る共、今の用には難レ立。千騎に足らぬ御勢を以て、敵の二十萬騎を防ん事は可レ叶共覺候はず。唯先安房、上總へ開せ給て、御勢を附て御合戰こそ候はめと被レ申けるを、將軍つくゞゝと聞給て、軍の習落て後利ある事千に一の事也。勢を催さん爲に、安房上總へ落なば、武藏、相摸、上野、下野の者共は、縦尊氏に志有共、敵に隔られて、御方に成事あるべからず。又尊氏鎌倉を落たりと聞かば、諸國に敵に成者多かるべし。今度に於ては、縦小勢なりとも、鎌倉を打出て、敵を道に待て、戰を決せんには如じとて、十六日の早旦に、將軍僅に五百餘騎の勢を率し、敵の行合んずる所までと、武藏國へ下り給ふ。鎌倉より追著奉る人々には、畠山上野介、子息伊豆守、畠山左京大夫、舍弟尾張守、舍弟大夫將監、其次式部大輔、仁木左京大夫、舍弟越後守、三男修理亮、岩松式部大輔、大島讃岐守、石堂左馬頭、今川五郎入道、同式部大輔、田中三郎、大高伊豫守、同土佐修理亮、太平安藝守、同出羽守、宇津木平三、宍戸安藝守、山城判官、曾我兵庫助、梶原彈正忠、二階堂丹後守、同三郎左衛門、饗庭命鶴、和田筑前守、長非大膳大夫、同備前守、同治部少

馬廻—將軍の馬側

ぎ給はんずらん。我等五六人が勢何と無共、三千騎はあらんずらん。將軍戰場に打出給はんずる時、態と馬廻に控て、合戰已に半ばならんずる最中、將軍を眞中に取籠奉り、一人も不ㇾ殘打取て、後に御陣へは參候べしと、新田の人々の方へ相圖を堅く定て、石堂入道、三浦介、小俣、葦名は、はたらかで鎌倉にこそ居たりけれ。諸方の相圖事定りければ、新田武藏守義宗、左兵衛佐義治、閏二月八日、先手勢八百餘騎にて、西上野に打出らる。是を聞て國々より馳參ける當家他門の人々、先一族には、江田、大館、堀口、篠塚、羽川、岩松、田中、青龍寺、小幡、大井田、一井、世良田、籠澤、外樣には、宇都宮三河三郎、天野民部大輔政貞、三浦近江守、南木十郎、西木七郎、酒匂左衛門、小畑左衛門、中金、松田、河村、大森、葛山、勝代、蓮沼、小礒、大礒、酒間、山下、鎌倉、玉繩、梶原、四宮、三宮、南西、高田、中村、兒玉黨には、淺羽、四方田、庄、櫻井、若兒玉、丹黨には、安保信濃守、子息修理亮、舍弟六郎左衛門、加治豐後守、同丹内左衛門、勅使河原丹七郎、西黨、東黨、熊谷、太田、平山、私市、村山、横山、猪俣黨都合其勢十萬餘騎、所々に火を懸て武藏國へ打越る。依ㇾ之武藏上野より早馬を打て、鎌倉へ急を告る事、櫛の齒を引が如し。さて敵の勢は何程有ぞと問へば、使者ども皆二十

内状―内密の書状

へ、吉野殿未住吉に御座有し時、由良新左衞門入道信阿を勅使にて、南方と義詮と御合體の事は、暫時の智謀也と聞ゆる處也。乃節に迷ひ時を過すべからず、早義兵を起て將軍を追討し、宸襟を休め奉るべしとぞ被仰下ける。信阿急ぎ東國に下て、三人の人々に逢て、事の仔細を相觸ける間、さらば軈て勢を相催せとて、廻文を以て東八箇國を觸廻るに、同心の一族八百人に及べり。中にも石堂四郎入道は、近年高倉殿に屬して、薩埵山の合戰に打負て、無甲斐命計を被助、鎌倉に有けるが、大將に憑たる高倉禪門は毒害せられぬ、我とは事を不起得、哀謀反を起す人のあれかし、與力せんと思ける處に、新田左兵衞佐、同少將の許より、内狀を通じて、事の由を知せたりければ、流に棹と悅て、軈て同心してけり。又三浦介・葦名判官、二階堂下野二郎、小俣宮内少輔も、高倉殿方にて、薩埵山の合戰に打負しかば、降人に成て命をば繼たれども、人の見る處世の聞く處、口惜き者哉、哀謀叛を起さばやと思ける處に、新田武藏守、同左衞門佐の方より、憑み思ふよしを申たりければ、願ふ處の幸哉と悅て、則與力して、此人々密に扇が谷に寄合て評定しけるは、新田の人々旗を擧て、上野國に起り、武藏國へ打越ると聞えば、將軍は定て鎌倉にてはよも待給はじ、關戸入間河の邊に出合てぞ防

吉野殿―後村上天皇

闘諍堅固云云―佛涅槃の翌日より五百年を解脱堅固、次の五百年を禪定堅固、次の五百年を多聞堅固、次の五百年を闘諍堅固といふ

太平記　卷第三十一

○新田起二義兵一事

吉野殿武家に御合體有つる程こそ、都鄙暫靜也つれ。御合體忽に破て、合戰に及し後、畿内洛中は僅に王化に隨ふといへ共、四夷八蠻は猶武威に屬する者多かりけり。依レ之諸國七道の兵、彼を討ち是を從へんと、互に威を立る間、合戰の止時もなし。已に闘諍堅固に成ぬれば、是ならずとも靜なるまじき理也。元弘建武の後より、天下久く亂て、一日も未レ治。心あるも心なきも、如何なる山の奥もがなと、身の隱家を求ぬ方もなけれど、何も同じ憂世なれば、嚴子陵が釣臺も脚を伸るに水冷く、鄭太尉が幽栖も薪を擔ふに山嶮し。如何なる一業所感にか、斯る亂世に生れ逢て、或は餓鬼道の苦を乍レ生受、或は修羅道の奴と不レ死前に成ぬらんと、歎かぬ人は無りけり。此時故新田左中將義貞の次男左兵衛佐義興、三男少將義宗、從父兄弟左衞門佐義治三人、武藏、上野、信濃、越後の間に、在所を定めず身を匿て、時を得ば義兵を起さんと企て居たりける處

頓てもさらば靜まれかしと、還て御祈念も深かりけり。

衆籟―風の起りて岩穴枯木にあたる響をいふ

貫頂―貫首の義、衆僧の頭領

頽ける庵室の、軒を受たる杉の板屋、目もあはぬ夜の寥しさを、事問雨の音までも、御袖を濕す便なり。衆籟曉寒して、月庭前の松に懸り、羣猿暮に叫で、風洞庭の雲を送る。外にて聞し住憂さは、數にもあらぬ深山哉と、主上上皇いつとなく被仰出度每に、御涙の乾く隙もなし。梶井二品親王は、此時天台座主にて坐けるが、同く被召捕させ給て、金剛山の麓にぞ坐ける。此宮は本院の御弟、慈覺大師の嫡流にて、三度天台座主に成せ給しかば、門跡の富貴無雙、御門徒の群集如雲、獅子田樂を被召、日夜に舞歌はせ、茶飲連歌師を集て、朝夕遊び興ぜさせ給しかば、世の譏山門の訟は止時無りしか共、御心の中の樂は、類非じと見えたりしに、今引替たる配所の如くなる御栖居、山深く里遠して、鳥の聲だにも幽かなるに、御力者一人より外は、被召仕人もなし。隙あらはなる柴の庵に、袖を片敷苦筵、露は枕に結べども、都に歸る夢はなしと、御心を傷しめ給ふに就ても、佛種は從緣起る事なれば、よしや世中角ても遂にはてなば、三千の貫頂の名を捨て、一向桑門の客と成んと思召けるこそ哀なれ。天下若皇統に定て、世も閑ならば、御遁世の御有增も未通ぬべし。若又武家強て南方の官軍打負けば、失ひ奉る事も何樣有ぬべしと、思召つゞくる時にこそ、さしも浮世を此儘にて、

云々―隱居することゝ、椿嶺は男山をいふ

花山の跡―花山院の御出家ありし事跡

馬道―家と家との間の通ひ廊下

も寄り、遠く花山の跡をも追ばやとこそ思召つれ共、其も叶はぬ折節の憂さ、豈叡察なからんや。今天運膺レ圖、萬人望を達する時至れり。乾臨曲て恩免を蒙らば、速に釋門の徒と成て、邊鄙に幽居を卜んと思ふ。此一事具に可レ有二奏達一と、被二仰出一けれ共、顯能・再往の勅答に不レ及、已に綸命を蒙る上は、押ては如何か奏聞を經候べきとて、御車を二輛差寄せ、餘に時刻移候と急げば、本院、新院、主上、春宮御同車有て、南の門より出御なる。さらでだに霞める花の木の間の月、是や限の御涙に、常よりも尙朧也。女院皇后は御簾の內、几帳の陰に伏沈ませ給へば、此の馬道、彼の局には、聲もつゝまず泣悲む。御車を曉の月に輾て、東洞院を下りに過ければ、故鄕の梢漸幽にして、東嶺に響く鐘の聲、明行雲に横はる。東寺までは、月卿雲客數多被二供奉一たりけれ共、叶ふまじき由を顯能被レ申ければ、三條中將實春、典藥頭篤直計を召具せられて、見馴ぬ兵に被二打圍一、鳥羽まで御幸成たれば、夜は早若々と明はてぬ。此に御車を駐て、怪げなる網代輿に召替させ進せ、日を經て吉野の奥賀名生と云所へ御幸成し奉る。此邊の民共が、吾君とて仰奉る吉野の帝の皇居だにも、黑木の柱竹椽、圍ふ垣ほのしばしだにも、栖ぬべくもなき宿也。況や敵の爲に被レ囚、配所の如くなる御栖居なれば、年經て

三度大嘗會—三度は二度の誤也

椿嶺の陰に

神器を吉野の主上へ渡し奉る。是は先帝山門より武家へ御出有し時、ありもあらぬ物を取替て、持明院殿へ被」渡たりし物なればとて、璽の御箱をば被」棄、寶劒と内侍所とをば、近習の雲客に被」下て、衞府の太刀、裝束の鏡にぞ被」成ける。げにも誠の三種の神器にてはなけれ共、已に三度大嘗會に會て、毎日の御神拜、淸暑堂の御神樂、二十餘年に成ぬれば、神靈もなどか無かるべきに、餘に無」恐凡俗の器物に被」成ける事、如何あるべからんと、申す族も多かりけり。同二十七日北畠右衞門督顯能、兵五百餘騎を率して、持明院殿へ參り、先其邊の辻々門々を固させければ、すはや武士共が參て、院内を失ひ進せんとするはとて、女院皇后御心を迷はして、伏沈ませ給。内侍上童上臈女房などは、向後も不」知逃ふためいて、此彼に立吟ふ。され共顯能卿穩に西の小門より參て、四條大納言隆蔭卿を以て、世の靜り候はん程は、皇居を南山に移し進すべしとの勅定にて候と被」奏ければ、兩院主上東宮あきれさせ給へる計にて、兎角の御言にも不」及、唯御淚にのみしをれさせ給て、羅縠の御袂絞る許に成にけり。良暫有て、新院御淚を抑て被」仰けるは、天下亂に向ふ後、僅に帝位を雖」踐、叡慮より起たる事に非れば、一事も世の政を御心に不」任。北辰光消て、中夏道闇時なれば、共に椿嶺の陰に

爰に相摸國住人に、曾我左衛門と云ける者、水練の達者也ければ、向の岸に游ぎ著て、小舟の有けるを一艘領して、自櫓を推て漕寄する。則大將を始として、宗徒の人々二十餘人一艘に込乘て、先向の岸に著給ふ。其後又小舟三艘求出して、百五十騎の兵共、皆渡してけり。是までも猶敵の追て懸る事無ければ、棄たる馬も物具も、次第々々に渡し終て、舟蹈返し突流して、今こそ活たる命なれと、手を拍て咄とぞ被レ笑ける。大將軍無二事故一近江の四十九院に坐する由聞えければ、土岐大高伊豫守、東坂本へ落たりけるが、舟に乘て馳參る。佐々木の一黨は不レ及レ申、美濃、尾張、伊勢、遠江の勢共、我も我もと馳參る程に、宰相中將又大勢を附て、山陽山陰に牒じ合せ、都を攻んと議し給ふ。

○持明院殿吉野遷幸事附梶井宮事

去程に、敵は都を落たれ共、吉野の帝は洛中へ臨幸も不レ成、唯北畠入道准后顯能卿父子計京都に坐して、諸事の成敗を司り給て、其外の月卿雲客は、皆主上の御座に附て、八幡にぞ伺候し給ける。同二十三日中院中將具忠を勅使にて、都の内裡に御座す三種の

五百に作る異本及び上文に據て改む

外都の土ー都外の土の義

腰刀ー短刀

阻、又取て返さんとする處に、讃岐守が乘たる馬、敵の打太刀に驚て、弓杖三枚許ぞ飛だりける。飛時鞍に被レ餘眞倒にどうと落つ。落ると均く、敵三騎落合て、起しも不レ立斬けるを、讃岐守乍レ寢二人の敵の諸膝薙で切居ゑ、起揚らんとする處を、和田が中間走懸て、鑓の柄を取延て、喉吭を突て突倒す。倒るゝ處に落合て、首をば和田に被レ取にけり。

○相公江州落事

細川讃岐守は被レ討ぬ。陸奥守は何地共不レ知落行ぬ。今は重て可レ戰兵無りければ、宰相中將義詮朝臣僅に百四五十騎にて、近江を差て落給ふ。下賀高山の源氏共、兼て相圖を定て、勢多の橋をば燒落しぬ。舟はこなたに一艘もなし。山門へも大慈院法印を天王寺より被レ遣て、山徒皆君の御方に成ぬと聞えつれば、落行處を幸と、勢多へも定て懸るらん。唯都にて討死すべかりつる者を、蓬なく是まで落て、尸を湖水の底に沈め、名を外都の土に埋まん事、心憂かるべき恥辱哉と、後悔せぬ人も無りけり。敵の旗の見えば、腹切んとて、義詮朝臣を始として、鎧をば皆脱置て、腰刀計にて、白沙の上に竝居給ふ。

讃岐守が三百騎—原本

東寺の南羅城門の東西にして、旗の手を解、千種少將顯經、五百餘騎にて丹波路唐櫃越より押寄て、西の七條に火を揚る。和田、楠、三輪、越知、眞木、神宮寺、其勢都合五千餘騎、宵より桂川を打渡て、まだ篠目の明ぬ間に、七條大宮の南北七八町に群立て、鬨をぞ揚たりける。東寺大宮の鬨の聲、七條口の煙を見て、すはや楠寄たりと、京中の貴賤上下遽騒事不ㇾ斜。細川陸奥守顯氏は、千本に宿して居たりけるが、遙に西七條の煙を見て、先東寺へ馳寄らんと、僅に百四五十騎にて西朱雀を下りに打けるが、七條大宮に控たる楠が勢に被ニ取籠一、陸奥守の甥、細川八郎矢庭に被ㇾ討ければ、顯氏主從八騎に成て、若狹を指てぞ落行ける。細川讃岐守賴春は、時の侍所也ければ、東寺邊へ打出て、勢を集んとて、手勢三百餘騎許にて、是も大宮を下りに打けるが、六條邊にて敵の旗を見て、著到も勢汰も今はいらぬ所也。何樣まづ此なる敵を一散し散さでは、何へか可ㇾ行とて、三千餘騎控たる和田、楠が勢に相向ふ。楠が兵、兼ての巧有て、一枚楯の裏に算を繁く打て、如ㇾ階拵たりければ、在家の垣に打懸打懸、究竟の射手三百餘人、家の上に登て、目の下なる敵を直下して射ける間、面を向べき樣も無て、進兼たる處を見て、和田、楠五百餘騎、轡を雙てぞ懸たりける。讃岐守が三百餘騎、左右へ颯と被ニ懸

君が代云々—古今集に君が代の久しかるべきためしには兼てぞ植ゑし住吉の松とあるを飜案せしものと見ゆ

飜案してぞ書たりける。

　君が代の短かるべきためしには、兼てぞ折し住吉の松。

と落書にぞしたりける。住吉に十八日御逗留有て、閏二月十五日天王寺へ行幸なる。此時伊勢の國司中院右衛門督顯能、伊賀伊勢の勢三千餘騎を率して、被馳參けり。同十九日八幡へ行幸成て、田中法印が坊を皇居に被成、赤井大渡に關を居て、兵山上山下に充滿たるは、一向合戰の御用意也と、洛中の聞え不穩。依之義詮朝臣、法勝寺の慧鎭上人を使にて、臣不臣の罪を謝して、勅免を可蒙由申入るゝ處に、照臨已に下情を被恤、上下和睦の議、事定り候ぬる上は、何事の用心か候べきに、和田楠以下の官軍等、一向合戰の企ある由承及候。如何樣の仔細にて候やらんと被申たり。主上直に上人に御對面有て、天下未恐懼を懷く間、唯非常を警めん爲に、官軍を被召具といへども、君臣已に和睦の上は、更に異變の議不可有。縱讒者の説あり共、胡越の心を不存ば、太平の基たるべしと、勅答有てぞ被返ける。綸言已に如此。士女の説何ぞ用るに足んとて、義詮朝臣を始として、京都の軍勢、曾て今被出拔とは夢にも不知、油斷して居たる處に、同二十七日の辰刻に、中院右衛門督顯能、三千餘騎にて鳥羽より推寄て、

和田楠以下、眞木野、三輪、湯淺入道、山本判官、熊野の八庄司、吉野十八郷の兵七千餘騎、路次を警固仕る。皇居は當社の神主津守國夏が宿所を俄に造替て、臨幸なし奉けり。國夏上階して、從三位に被レ成。先例未なき殿上の交、時に取ての面目なり。住吉に臨幸成て、三日に當ける日、社頭に一の不思議あり。勅使神馬を獻て、奉幣を捧たりける時、風も不レ吹に、瑞籬の前なる大なる松一本中より折て、南に向て倒れにけり。勅使驚て仔細を奏聞しければ、傳奏吉田中納言宗房卿、妖は不レ勝レ徳と宣て、さまでも驚給はず。伊達三位有雅が武者所に在けるが、此事を聞て、穴淺ましや、此度の臨幸成せ給はん事は難レ有。其故は昔殷帝大戊の時世の傾んずる兆を呈して、庭に桑穀の木一夜に生て、二十餘丈に蔓れり。帝大戊懼て伊陟に問給ふ。伊陟が申く、臣聞妖は不レ勝レ徳、君の政の闕る事あるに依て、天此兆を降す者也。君早徳を修め給へと申ければ、帝則諫に從て、正レ政撫レ民招レ賢退レ佞給しかば、此桑穀の木又一夜の中に枯て、霜露の如くに消失たりき。加樣の聖徳を被レ行こそ、妖をば除く事なるに、今の御政道に於て其徳何事なれば、妖不レ勝レ徳とは、傳奏の被レ申やらん。返々も難二心得一才學哉と、眉を顰てぞ申ける。其夜如何なる嗚呼の者かしたりけん、此松を押削て、一首の古歌を

嚴君―父君

名家―朝臣に攝家清華名家といふ階級あり

に、未准后の宣旨を被レ下たる例なし。平相國淸盛入道出家の後、准后の宣旨を蒙たりしは、皇后の父たるのみに非ず、安德天皇の外祖たり、又忠盛が子とは名附ながら、正く白河院の御子なりしかば、花族も榮達も今の例には引がたし。日野護持院僧正賴意は、東寺の長者醍醐の座主に被レ補て、仁和寺諸院家を兼たり。大塔僧正忠雲は、梨本大塔の兩門跡を兼て、鎌倉の大御堂、天王寺の別當職に被レ補。此外山中伺候の人々、名家は淸花を超、庶子は嫡家を越て、官職我意に任たり。若如レ今にて天下定らば。歎人は多して、悅者は可レ少。元弘一統の政道如レ此にて亂しを、取て誡とせざりける心の程こそ愚なれ。憂かりし正平六年の歳晚て、あらたまの春立ぬれども、皇居は猶も山中なれば、白馬蹈歌の節會なんどは不レ被レ行。寅の時の四方拜、三日の月奏計有て、後七日御修法は、文觀僧正承て、帝都の眞言院にて被レ行。十五日過ければ、武家より貢馬十四、沙金三千兩奏ニ進之一。其外別進貢馬三十四、卷絹三百匹、沙金五百兩、女院皇后三公九卿、無ニ漏方一引進す。二月二十六日主上已に山中を御出有て、瑤輿を先東條へ被レ促。劍璽の役人計衣冠正して被ニ供奉一。其外の月卿、雲客、衞府、諸司の尉は、皆甲冑を帶して、前騎後乘に相隨ふ。東條に一夜御逗留有て、翌日頓て住吉へ行幸なれば、

非參議—前に參議たりしもの或は參議たらざるも二位三位の參議たるべき程の者をいふ

七辨—左右の大中少辨と權官とを合せてかくいふ

八座—左右の六衛府及び馬寮の官人をいふ

方、日野宰相敎光、中御門宰相宣明。殿上人には、日野左中辨時光、四條左中將隆家、日野右中辨保光、權右中辨親顯、日野左少辨忠光、右少辨平信兼、勘解由次官行知、右兵衛佐嗣房等也。此外先官の公卿、非參議、七辨八座、五位六位乃至山門園城の僧綱、三門跡の貫首、諸院家の僧綱、竝に禪律の長老、寺社の別當神主に至まで、我先にと馳參ける間、さしも淺ましく賤しげなりし賀名生の山中、如花隱映して、如何なる辻堂溫室風呂までも、幔幕引かぬ所も無りけり。今參候する所の諸卿の敍位轉任は、悉持明院殿より被成たる官途なればとて、各一級一階を被貶けるに、三條坊門大納言通冬卿と、御子左大納言爲定卿と計は、本の官位に被復けり。是は內々吉野殿へ被申通ける故也。京都より被參仕たる月卿雲客をば、降參人とて、官職を被貶、山中伺候の公卿殿上人をば多年の勞功ありとて、超涯不次の賞を被行ける間、窮達忽に地を易たり。故三位殿御局と申しは、今天子の母后にて御座せば、院號蒙せ給て、新待賢門院とぞ申ける。北畠入道源大納言は、准后の宣旨を蒙て、華著たる大童子を召具し、輦に駕して宮中へ出入す。其粧天下の耳目を驚せり。此人は故奧州の國司顯家卿の父、今皇后の嚴君にておはすれば、武功と云、花族と云、申に及ぬ所なれども、竹園攝家の外

間に保といふものあり

武臣七德―七德は禁暴戢兵、保大、定功、安民、和衆、豐財をいふ

來進止の地に於ては、武家一向其綺を可レ止にて候。唯承久以後新補の率法、竝に國々の守護職、地頭御家人の所帶を武家の成敗に被レ許て、君臣和睦の恩惠を被レ施候はば、武臣七德の干戈を戢て、聖主萬歲の寶祚を可レ奉レ仰と、頻に奏聞をぞ被レ經ける。依レ之諸卿僉議有て、先に直義入道和睦の由を申て、言下に變じぬ。是も亦僞中僞無二仔細一覺れ共、謀の一途たれば、先義詮が被レ任二申旨一、帝都還幸の儀を催し、而後に、義詮をば畿內近國の勢を以て退治し、尊氏をば義貞が子供に仰附て、即被二追罰一に、何の仔細か可レ有とて、御問答再往にも不レ及、御合體の事仔細非じとぞ被二仰出一ける。兩方互に僞給へる趣、誰かは可レ知なれば、此間持明院殿方に被二拜趨一ける諸卿、皆賀名生殿へ被レ參。先當職の公卿には、二條關白太政大臣良基公、近衞右大臣道嗣公、久我內大臣右大將通相公、葉室大納言長光、鷹司大納言左大將冬通、洞院大納言實夏、三條大納言公忠、三條大納言實繼、松殿大納言忠嗣、今小路大納言良冬、西園寺大納言實俊、裏築地大納言忠季、大炊御門中納言家信、四條中納言隆持、菊亭中納言公直、二條中納言師良、華山院中納言兼定、葉室中納言長顯、萬里小路中納言仲房、德大寺中納言實時、二條宰相爲明、勸解由小路左大辨宰相兼綱、堀河宰相中將家賢、三條宰相公豐、坊城右大辨宰相經

老巳卒の詩句に出づ

一紙の告文—一枚の請文

冥の照覽—佛神の照覽をいふ

國衙の鄕保—國司の廳の取扱ふ鄕と保、古は鄕と村との

酬いけるこそ不思議なれ。さても此禪門は、隨分政道をも心にかけ、仁義をも存給しが、加樣に自滅し給ふ事、如何なる罪の報ぞと案ずれば、此禪門依レ被レ申、將軍鎌倉にて僞て一紙の告文を殘されし故に、其御罰にて、御兄弟の中も惡く成給て、終に失給歟。又大塔宮を奉レ殺、將軍宮を毒害し給事、此人の御業なれば、其御憤深して、如レ此亡給ふ歟。災患本無レ種惡事を以て種とすといへり。實なる哉、武勇の家に生れ、弓矢を專にすとも、慈悲を先とし、業報を可レ恐。我が威勢のある時は、冥の照覽をも不レ憚、人の辛苦をも不レ痛、思樣に振舞ぬれば、樂盡て悲來り、我と身を責る事、哀に愚なる事共也。

○吉野殿與二相公羽林一御和睦事附住吉松折事

足利宰相中將義詮朝臣は、將軍鎌倉へ下り給し時、京都守護の爲に被レ殘坐しけるが、關東の合戰の左右は未レ聞、京都は以外に無勢也。角ては如何樣、和田楠に被レ寄て、無二云甲斐一京を被レ落ぬとおぼしければ、一旦事を謀て、暫洛中を無爲ならしめん爲に、吉野殿へ使者を立て、自レ今以後は、御治世の御事と、國衙の鄕保、竝に本家領家、年

三過門間云云―東坡の過永樂文長

しけるが、忍て何地へも一まど落てや見る、自害をやすると、案じ煩給ける處に、又和睦の議有て、將軍より樣々に御文を被遣、畠山阿波守國清、仁木左京大夫頼章、舍弟越後守義長を御迎に被進たりければ、今の命の捨難さに、後の恥をや忘れ給けん、禪門降人に成て、將軍に打連奉て、正月六日の夜に入て、鎌倉へぞ歸給ける。

○慧源禪門逝去事

斯し後は、高倉殿に附從ひ奉る侍の一人もなし。牢の如くなる屋形の、荒て久きに、警固の武士を被居、事に觸たる悲耳に滿て、心を傷めければ、今は憂世の中にながらへても、よしや命も何かはせんと思ふに、我身さへ無用物に歎給けるが、無幾程其年の觀應三年壬辰二月二十六日、忽に死去し給けり。俄に黄疸と云病に被犯、無墓成せ給けりと、外には披露ありけれ共、實には鴆毒の故に、逝去し給けりとぞさゝやきける。去々年の秋は、師直上杉を亡し、去年の春は、禪門師直を被誅、今年の春は禪門又怨敵の爲に毒を呑て、失給けるこそ哀なれ。三過門間老病死、一彈指頃去來今とも、加樣の事をや申べき。因果歴然の理は、今に不始事なれども、三年の中に日を不替、

古宇津ー今の國府津也

度にばつと切て落す。大石共に、先陣の寄手數百人、楯の板ながら打ひしがれて、矢庭に死する者數を不レ知。後陣の兵是に色めいて、少引色に見えける處へ、南部羽切拔連て懸ける間、大類彈正、富田以下を宗として、兒玉黨十七人、一所にして被レ討けり。此陣の合戰は加樣也とも、五十萬騎に餘たる陣々の寄手共、同時に皆攻上らば、薩埵山をば一時に攻落すべかりしを、何となく共今に可レ落城を、高名顏に合戰して討れたるはかなさよと、面々に笑嘲ける心の程こそ淺ましけれ。去程に同廿七日、後攻の勢三萬餘騎足柄山の敵を追散して、竹下に陣を取る。小山判官も、宇都宮に力を合て、七百餘騎同日に古宇津に著ければ、燒續けたる篝火の數、夥く見えける間、大手搦手五十萬騎の寄手共、暫も不レ忍十方へ落て行。仁木越後守義長、勝に乘て、三百餘騎にて逃る勢を追立て、伊豆府へ押寄ける間、高倉禪門一支も不レ支して、北條へぞ落行給ける。上杉民部大輔、長尾新左衛門が勢二萬餘騎は、信濃を志て落けるを、千葉介が一族共、五百騎許にて追蒐、早河尻にて打留めんとしけるが、落行大勢に被二取籠一、一人も不レ殘被レ討けり。さてこそ其道開けて、心安く上杉長尾左衛門は、無爲に信濃國へは落たりけれ。高倉禪門は、餘に氣を失て、北條にも猶たまり不レ得、伊豆の御山へ引て、大息ついて坐

騎は、皆馬より飛下り、徒立に成て、射向の袖を差翳し、太刀長刀の鋒をそろへて、閑閑と小跳して、氏家が陣へ打て懸る。飽まで廣き平野の、馬の足に懸る草木の一本もなき所にて、敵御方一萬二千餘騎、東に開け西に靡けて、追つ返つ半時許戰たるに、長尾孫六が下立たる一揆の勢五百餘人、縱橫に懸惱まされて、一人も不ㇾ殘被ㇾ討ければ、桃井も長尾左衞門も、叶はじとや思けん、十方に分れて落行けり。軍畢て四五箇月の後までも、戰場二三里が間は、草腥して血野原に淋ぎ、地堆くして、尸路徑に橫れり。是のみならず、吉江中務が武藏國の守護代にて、勢を集て居たりけるも、那和の合戰と同日に、津山彈正左衞門竝に野與の一黨に被ㇾ寄、忽に討れければ、今は武藏上野兩國の間に、敵と云者一人もなく成て、宇都宮に附勢、三萬餘騎に成にけり。宇都宮已に所々の合戰に打勝ち、後攻に廻る由、薩埵山の寄手の方へ聞えければ、諸軍勢皆一同に、あはれ後攻の近附ぬ前に、薩埵山を被㆓攻落㆒候へかしと云けれ共、傾く運にや引れけん、石堂、上杉、曾不㆓許容㆒ければ、餘に身を揉て、兒玉黨三千餘騎、極て嶮しき櫻野より、薩埵山へぞ寄たりける。此坂をば今川上總守、南部一族、羽切遠江守三百餘騎にて固たりけるが、坂中に一段高き所の有けるを切掃て、石弓を多く張たりける間、一

吉凶は云々｜漢書賈誼傳に、禍之與ㇾ福兮何異ニ糾纆一とあると同じく、吉凶の轉じ易きをいふ

ける間、兵皆勇進で、夜明れば桃井が勢には目も不ㇾ懸、打連て薩埵山へ懸らんと評定しける處に、大將に取立たる三戸七郎、俄に狂氣に成て、自害をして死にけり。是を見て門出惡しとや思けん、道にて馳著つる勢共、一騎も不ㇾ殘落失て、始宇都宮にて一味同心せし勢計に成ければ、僅に七百騎にも不ㇾ足けり。角ては如何有んと、諸人色を失けるを、藥師寺入道、暫思案して、吉凶は如ニ糾索一といへり。是は何樣宇都宮の大明神、大將を氏子に授給はん爲に、斯る事は出來る者也。暫も御逗留不ㇾ可ㇾ有と申ければ、諸人げにもと氣を直して、路も少の滞もなく、同十九日の午刻に、利根河を打渡て、那和庄に著にけり。此にて跡に立たる馬煙を、馳著く御方歟と見れば、さはあらで、桃井播磨守、長尾左衛門尉、一萬餘騎にて跡に著て押寄たり。宇都宮、さらば陣を張て戰へとて、小溝の流たるを前にあて、平々としたる野中に、紀清兩黨七百餘騎は、大手に向て、北の端に控たり。氏家太宰小貳は、二百餘騎中の手に控、藥師寺入道元可兄弟が勢五百餘騎は、搦手に對して、南の端に控、兩陣互に相待て、半時許時を移す處に、桃井が勢七千餘騎、鬨の聲を揚て、宇都宮に打て懸る。長尾左衛門が勢三千餘騎、魚鱗に連て、藥師寺に打て懸る。長尾孫六、同平三、二人が勢五百餘

世良田—上野國新田郡に在る村名

に攻落さんともせず、唯千重萬重に取巻たる計にて、未矢軍をだにもせざりけり。宇都宮は薬師寺次郎左衛門入道元可が勧に依て、兼てより将軍に志を存しければ、武蔵守師直が一族に、三戸七郎と云者、其邊に忍て居たりけるを大将に取立て、薩埵山の後攻をせんと企ける處に、上野國住人、大胡山上の一族共、人に先をせられじとや思けん。新田の大島を大将に取立て、五百餘騎薩埵山の後攻の爲とて、笠懸の原へ打出たり。長尾孫六、同平三、三百餘騎にて上野國警固の爲に、兼てより世良田に居たりけるが、是を聞と均く、笠懸の原へ打寄、敵に一矢をも射させず、抜連て懸立ける程に、大島が五百餘騎、十方に被懸散、行方も不知成にけり。宇都宮是を聞て、此人々懃なる事爲出して、敵に氣を著つる事よと、興醒て思けれ共、其に不可依と機を取直して、十二月十五日宇都宮を立て薩埵山へぞ急ける。相伴ふ勢には、氏家太宰小貮周綱、同下總守、同三河守、同備中守、同遠江守、芳賀伊賀守貞經、同肥後守、紀黨には益子出雲守、薬師寺次郎左衛門入道元可、舎弟修理進義夏、同勘解由左衛門義春、同掃部助助義、武蔵國住人猪俣兵庫入道、安保信濃守、岡部新左衛門入道、子息出羽守、都合其勢千五百騎、十六日午刻に、下野國天命宿に打出たり。此日佐野佐貫の一族等、五百餘騎にて馳加

宇津部佐ー駿河國富士川の上流に在り

へ馳屬てければ、將軍へははか〴〵しき勢も不參。角て無左右鎌倉へ寄ん事難叶。先且く要害に陣を取てこそ勢をも催めとて、十一月晦日駿河薩埵山に打上り、東北に陣を張給ふ。相隨ふ兵には、仁木左京大夫頼章、舍弟越後守義長、畠山阿波守國清兄弟四人、今川五郎入道心省、子息伊豫守、武田陸奥守、千葉介、長井兄弟、二階堂信濃入道、同山城判官、其勢僅に三千餘騎には不過けり。去程に將軍已に薩埵山に陣を取て、宇都宮が馳参るを待給ふ由聞えければ、高倉殿先宇都宮へ討手を下さでは難儀なるべしとて、桃井播磨守直常に、長尾左衞門尉、竝に北陸道七箇國の勢を附て、一萬餘騎上野國へ被差向。高倉禪門も、同日に鎌倉を立て、薩埵山へ向ひ給ふ。一方には上杉民部大輔憲顯を大手の大將として、二十萬餘騎、由井蒲原へ被向。一方には石堂入道、子息右馬頭頼房を搦手の大將として、十萬餘騎宇都部佐へ廻て押寄する。高倉禪門は、寄手の惣大將なれば、宗徒の勢十萬餘騎を隨へて、未伊豆府にぞ控られける。彼薩埵山と申は、三方は嶮岨にて谷深く切れ、一方は海にて岸高く峙てり。敵縱何萬騎あり共、難近附とは見えながら、取卷く寄手は五十萬騎、防ぐ兵三千餘騎、而も馬疲れ糧乏しければ、何までか其山に怺へ給ふべきと、哀なる樣に覺て、掌に入れたる心地しければ、强急

八相山―近江國淺井郡虎御前山の南に在り

合戰に、吉凶を被レ示怪異にてぞあるらんと、諸人推量しけるが、果して翌日の午刻に、佐々木佐渡判官入道が手の者共に、多賀將監と秋山新藏人と、楚忽の合戰し出して、秋山討れにければ、桃井大に忿て、重て可レ戰由を申けれ共、自餘の大將に異議有て、結句越前の國へ引返す。其後畠山阿波將監國淸、頻に御兄弟唯御中なほり候て、天下の政務を宰相殿に持せ進せられ候へかしと申けるを、禪門許容し不レ給ければ、國淸大に忿て、己が勢七百餘騎を引分て、將軍へぞ參ける。此外緣を尋て降人になり、五騎十騎打連打連將軍方へと參ける間、角ては越前に御座候はん事は叶はじと、桃井頻に勸申されければ、十月八日高倉禪門又越前を立て、北陸道を打通、鎌倉へぞ下り給ける。

○薩埵山合戰事

將軍は八相山の合戰に打勝て、軈て上洛し給けるを、十月十三日又直義入道可レ誅罰之由、重被レ成二宣旨一ければ、翌日軈て都を立て鎌倉へ下給ふ。一向に洛中に勢を殘さざらんも、南方の敵に隙を窺はれつべしとて、宰相中將義詮朝臣をば、都の守護にぞ被レ留ける。將軍已に駿河國に著給けれ共、遠江より東、東國北國の勢共、早悉高倉殿

權道—こゝには權謀術數を以て天下を治むる事をいふ

るを、信ぜられけるこそ愚なれ。さればとて禪門の行跡、泰伯が有德の甥、文王に讓し仁にも非ず、又周公の無道の兄、管叔を討ぜし義にも非ず、權道覇業、兩ながら缺たる人とぞ見えたりける。

○直義追罰宣旨御使事附鴨社鳴動事

同八月十八日、征夷將軍源二位大納言尊氏卿、高倉入道左兵衞督追討の宣旨を賜て、近江國に下著して、鏡宿に陣を取る。都を被立時までは、其勢纔に三百騎にも不足けるが、佐々木佐渡判官入道道譽、子息近江守秀綱は、當國勢三千餘騎を率して馳參る。仁木右馬權頭義長は、伊賀伊勢の兵四千餘騎を率して馳參る。土岐刑部少輔賴康は、美濃國の勢二千餘騎を率して馳參ける間、其勢無程一萬餘騎に及ぶ。今は如何なる大敵に戰ふ共、勢の不足とは不見けり。去程に高倉入道左兵衞督、石堂、畠山、桃井三人を大將として、各一萬餘騎の勢を差副、同九月七日近江國へ打出、八相山に陣を取る。兩陣堅く守て、其戰を不決。其日の未刻に、都には鴨の糺の神殿鳴動する事、良久して、流鏑矢二筋天を鳴響し、艮の方を指て去ぬとぞ奏聞しける。是は何樣將軍兄弟の

る。西伯故郷に歸て、我命の活たる事をば、さしも不悦給、唯炮烙の罪に逢て、無咎人民共が、毎日毎夜に十人二十人被焼殺事を、我身に當れる苦の如く哀に悲く覺しければ、洛西の地三百里を紂王の后に獻じて、炮烙の刑を被止事をぞ被請ける。后も同く欲に染む心深くおはしければ、則洛西の地に替て、炮烙の刑を止らる。剩感悦猶是にも不足けるにや、西伯に弓矢斧鉞を賜て、天下の權を執、武を收ける官を授給ければ、唯龍の水を得て、雲上に騰るに不異。其後西伯渭濱の陽に田せんとし給けるに、史編と云ける人占て申けるは、今日の獲物は、非熊非羆、天君に師を可與とぞ占ける。西伯大に悦で、潔齋し給ふ事七日、渭水の陽に出て見給ふに、太公望が半蓑の煙雨水冷して、釣を垂るゝ事人に替れるあり。是則史編が占ふ所也とて、車の右に乘せて歸給ふ。則武宣王と仰て、文王是を師とし仕ふる事不踈。遂に太公望が謀に依て、西伯徳を行しかば、其子武王の世に當て、天下の人皆殷を背て、周に歸せしかば、武王遂に天下を執て、子孫永く八百餘年を保にき。古の事を引て、今の世を見候に、唯羽林相公の淫亂、頗る殷紂王の無道に相似たり。君仁を行はせ給て、是を亡されんに何の仔細か候べきと、禪門をば文王の徳に比し、我身をば太公望に准て、折節に附て申け

史編―周の太史の名にて、卜を掌るもの也

うつりかはる事なき樂

盡す。天上の婬樂快樂も、是には及ばじとぞ見えたりける。或時后妲妃南庭の花の夕ばえを詠て、寂寞として立給ふ。紂王見に不耐して、何事か御意に叶ぬ事の侍ると問給へば、妲妃哀炮烙の法とやらんを見ばやと思ふを、心に叶はぬ事にし侍ると宣ければ、紂王、易き程の事也とて、軈て南庭に炮烙を建て、后の見物にぞ成れける。夫炮烙の法と申は、五丈の銅の柱を、二本東西に立て、上に鐵の繩を張て、下に炭火をおき、鑊湯爐壇の如くにおこして、罪人の背に石を負せ、官人戈を取て、罪人を柱の上に責上せ、鐵の繩を渡る時、罪人氣力疲て、爐壇の中に落入、灰燼と成て焦れ死ぬ、燒熱大燒熱の苦患を移せる形なれば、炮烙の法とは名けたり。后是を見給て、無類事に興じ給ければ、野人村老日毎に子を被殺親を失て、泣悲む聲無休時。此時周文王未西伯にて坐けるが、密に是を見て、人の悲世の謗、天下の亂と成ぬと歎給けるを、崇侯虎と云ける者聞て、殷紂王にぞ告たりける。紂王大に忿て、則西伯を囚へて、羑里の獄舍に押籠奉る。西伯か臣に閎夭と云ける人、沙金三千兩、大宛馬百匹、嬋娟幽艶なる女百人を汰て、紂王に奉て、西伯の囚を乞受ければ、元來色に婬し寶を好む事、後の禍をも不顧、此一を以ても、西伯を免すに足ぬべし、況哉其多きをやと、心飽まで悅て、則西伯をぞ免け

と博奕をなす。神眞の神ならず、人代つて賽を打ち、石を仕ふ博奕なれば、帝などか勝給はざらん。勝給へば、天負たりとて、木にて作れる神の形を、手足を切り頭を刎、打擲蹂躙して、獄門に是を曝けり。又革を以て人を作て、血を入て、是を高き木の梢に懸、天を射ると號して射るに、血出て地に洒ぐ事おびたゞし。加樣の惡行身に餘ければ、帝武乙河渭に獵せし時、俄に雷落懸て、御身を分々に引裂てぞ捨たりける。其後御孫の小子帝位に卽給ふ。是を殷紂王とぞ申ける。紂王長り給て後、智は諫を拒、是非の端を飾るに足れり。勇は人に過て、手づから猛獸を拉ぐに難しとせず。人臣に矜るに能を以てし、天下に高ぶるに聲を以てせしかば、人皆己が下より出たりとて、諫諍の臣をも不レ被レ置、先王の法にも不レ順、妲妃と云美人を愛して、萬事唯是が申儘に附給しかば、罪無して死を賜ふ者多く、唯積惡のみあり。鉅鹿と云郷に、まはり三十里の倉を作て、米穀を積餘し、朝歌と云所に、高さ二十丈の臺を立て、錢貨を積滿てり。又沙丘に廻一千里の苑臺を造て、酒を湛へ池とし、肉を懸て林とす。其中に若く淸らかなる男三百人、みめ貌勝れたる女三百人を裸になして、相逐て婚姻をなさしむ。酒の池には龍頭鷁首の舟を浮て、長時に醉をなし、肉の林には、北里の舞、新婚の樂を奏して、不退の樂を

褒貶の短册—歌合の短册

合體—原本合戰に作る毛利本に據りて改む

南家—淡海公の子武智丸の裔をいふ

て落行ける程に、今は公家被官の者より外、京中に人あり共更に不レ見けり。夜明ければ、宰相中將殿、將軍の御屋形へ被レ參て、今夜京中のひしめき、非ニ直事一覺て候。落行ける兵共、大勢にて候なれば、若立歸て寄る事もや候はんずらんと申されければ、將軍些も不ニ騷給一、運は天にあり、何の用心かすべきとて、褒貶の短册取出し、心閑に詠吟し、打嘯てぞ坐ける。高倉殿已に越前の敦賀津に坐して、著到を著られけるに、初は一萬三千餘騎有けるが、勢日々に加て、六萬餘騎と註せり。此時若此大勢を率して、京都へ寄たらましかば、將軍も宰相中將殿も、戰ふまでも御座まさじを、そゞろなる長僉議、道も立ぬなま才學に時移て、數日を徒に過にけり。抑是は誰が依ニ意見一、高倉殿は加樣に兄弟叔父甥の間、合體をしながら、さすが無道を誅して、世を鎭めなんとする所を計ひ給ふと尋れば、禪律の奉行にて被ニ召仕一ける南家の儒者藤原少納言有範が、より〳〵申ける議を用ひ給ける故とぞ承る。さる程に、昔殷帝武乙と申しゝ王の位に卽て、惡を好む事頻也。我天子として、一天四海を掌に握るといへども、猶日月の明暗を心に不レ任、雨風の暴く劇しき事を止得ぬこそ安からねとて、如何にもして天を亡さばやとぞ被レ巧ける。先木を以て人を作て、是を天神と名けて、帝自是

無沙汰。—不行屆の意

同七月晦日石堂入道、桃井右馬權頭直常二人、高倉殿へ參て申けるは、仁木、細川、土岐、佐々木、皆己が國々へ逃下て、謀叛を起し候なる。是も何樣將軍の御意を請候歟、宰相中將殿の御教書を以て、勢を催すかにてぞ候らん。又赤松律師が大塔若宮を申下て、宮方を仕ると聞え候も、實は寄二事於宮方一、勢を催して後、宰相中將殿へ參らんとぞ存候らん。御勢も少く御用心も無沙汰にて都に御座候はん事、如何とこそ存候へ。たゞ今夜夜の紛に、篠峯越に北國の方へ御下候て、木目荒血の中山を差塞がれ候はゞ、越前に修理大夫高經、加賀に富樫介、能登に吉見、信濃に諏訪下宮祝部、皆無貳の御方にて候へば、此國々へは如何なる敵か足をも蹈入候べき。甲斐國と越中とは、我等が已に分國として、相交る敵候はねば、旁以心安かるべきにて候。先北國へ御下候て、東國西國へ御教書を成下され候はんに、誰か應じ申さぬ者候べきと、又餘議もなく申ければ、禪門少の思案もなく、さらば聽て下るべしとて、取物も不レ取敢、御前に在合たる人々計を召具して、七月晦日の夜半許に、篠峯越に落給ふ。騷がしかりし有樣也。是を聞て、御内の者は不レ及レ申、外樣の大名、國々の守護、四十八箇所の篝三百餘人、在京人畿内近國四國九州より此間上り集たる軍勢共、我も我もと跡を追

天狗共の態にてか有けん、夜にだに入ければ、何より馳寄共知ぬ兵共、五百騎三百騎、鹿谷、北白川、阿彌陀峯、紫野邊に集て、勢ぞろへをする事度々に及ぶ。是を聞て將軍方の人は、あはや高倉殿より寄らるゝはとて肝を冷し、高倉殿方の人は、いかさま將軍より討手を向らるゝはとて用心を致す。禍利欲より起て、息ことを得ざれば、終に己が分國へ下て、本意を達せんとや思けん、仁木左京大夫賴章は、病と稱して有馬の湯へ下る、舍弟の右馬權助義長は伊勢へ下る、細川刑部大輔賴春は讃岐へ下る、佐々木佐渡判官入道道譽は近江へ下る、赤松筑前守貞範、甥の彌次郎師範、舍弟信濃五郎範直は、播磨へ逃下る、土岐刑部少輔賴康は、憚る氣色もなく白晝に都を立て、三百餘騎、只管合戰の用意して、美濃國へぞ下りける。赤松律師則祐は、初より上洛せで赤松に居たりけるが、吉野殿より故兵部卿親王の若宮を大將に申下し進せて、西國の成敗を司て、近國の勢を集て、吉野、戸津川、和田、楠と牒じ合せ、已に都へ攻上ばやなんど聞えければ、又天下三に分れて、合戰息時非じと、世の人安き心も無りけり。

○高倉殿京都退去事 附殷紂王事

條殿ともいへり、何れも直義のことなり
棠棣花―兄弟各別のやうなれど遂に一體となるに比したる也
附鳳の勢、攀龍の望―人の威を借り己の私を肆にする義

奉、上下萬人泣悲む事限なし。さても西國東國の合戰、符を合せたるが如く同時に起て、師直師泰兄弟父子の首、皆京都に上ければ、等持寺の長老旨別源、葬禮を取營て、下火の佛事をし給けるに、

昨夜春園風雨暴。和枝吹落棠棣花。

と云句の有けるを聞て、皆人感涙をぞ流ける。此廿餘年執事の被官に身を寄て、恩顧に誇る人、幾千萬ぞ。昨日まで烏帽子の折樣、衣紋のため樣をまねて、此こそ執事の内の人よとて、世に重ぜられん事を求しに、今日はいつしか引替て、貌を窶し面を側めて、すはや御敵方の者よとて、人に知れん事を恐懼す。用則鼠爲虎、不用則虎爲鼠と云置し東方朔が虎鼠の論、誠に當れる一言なり。將軍兄弟こそ、誠に纖芥の隔もなく、和睦にて所存もなく坐けれ。其門葉に在て、附鳳の勢を貪て、攀龍の望を期する族は、人の時を得たるを見ては猜み、己が威を失へるを顧ては、憤を不含云事なし。されば石堂、上杉、桃井は、樣々の讒を構て、將軍に附從ひ奉る人々を失はばやと思ひ、仁木、細川、土岐、佐々木は、種々の謀を運して、錦小路殿に又人もなげに振舞ふ者共を滅さばやとぞ巧ける。天魔波旬は斯る所を伺ふ者なれば、如何なる

太平記　巻第三十

○將軍御兄弟和睦事 附天狗勢汰事

志合則胡越も地を不ㇾ隔。況や同く父母の出ニ懷抱一浮沈を共にし、一日も不ㇾ離ニ咫尺一連枝兄弟の御中也。一旦師直師泰等が、不義を罰するまでにてこそあれ。何事にか骨肉を離るゝ心可ㇾ有とて、將軍と高倉殿と、御合體有ければ、將軍は播磨より上洛し、宰相中將義詮は、丹波の石龕より上洛し、錦小路殿は八幡より入洛し給ふ。三人軈て會合し給て、一獻の禮有けれ共、此間の確執、流石片腹いたき心地して、互の言少く、無興氣にてぞ被ㇾ歸ける。高倉殿は元來仁者の行を假て、世の譏を憚る人也ければ、いつしか軈て天下の政を執て、威を可ㇾ振其機を出されねども、世の人重んじ仰ぎ奉る事、日來に勝れて、其被官の族、事に觸て氣色は不ㇾ增云事なし。車馬門前に立列て、出ニ入側一身、賓客堂上に群集して、揖讓禮を愼めり。如ㇾ此目出度事のみある中に、高倉殿最愛の一子、今年四に成給けるが、今月二十六日、俄に失給ければ、母儀を始

志合則云々―文選三十九に、意合則胡越爲ニ昆弟一とあり又廣弘明集十三に、道合萬里懸應、勢乖則肝膽楚越とあるに據るか

錦小路殿―又高倉殿三

仁者必有勇―論語憲問篇に出づ

二千騎も討死して、後代の名を揚ざらん。仁者必有レ勇、勇者必不レ仁と、文宣王の聖言、げにもと被ニ思知一たり。

分々の敵に云々—其身相應の敵に出合ひての意

分の敵に合て死せざるべきに、一人も敵に太刀を打著たる者なくして、斬ては被落、押ては首を被掻、無代に皆討れつる事、天の譴とは知ながら、うたてかりける不覺哉。夫兵は仁義の勇者、血氣の勇者とて二つあり。血氣の勇者と申は、合戰に臨每に勇進んで、臂を張り強きを破り堅きを碎く事、如鬼忿神の如く速なり。然共此人若敵の爲に以利含め、御方の勢を失ふ日は、逋るに便あれば、或は降人に成て恥を忘れ、或は心も發らぬ世を背く。如此なるは即是血氣の勇者也。仁義の勇者と申は、必しも人と先を爭ひ、敵を見て勇むに、高聲多言にして勢を振ひ臂を張ざれ共、一度約をなして憑れぬる後は、貳心を不存、心不變して臨大節、志を奪れず、傾所に命を輕ず。如此なるは則仁義の勇者なり。今の世聖人去て久く、梟惡に染ること多ければ、仁義の勇者は少し、血氣の勇者は是多し。されば異朝には漢楚七十度の戰、日本には源平三箇年の軍に、勝負互に易しかども、誰か二度と降人に出たる人ありし。今元弘以後、君と臣との爭に、世の變ずる事、僅に兩度に不過、天下の人五度十度敵に屬し御方になり、心を變ぜぬは稀なり。故に天下の爭止時無して、合戰雌雄未決。是を以て今師直師泰が兵共の有樣を見るに、日來の名譽も高名も、皆血氣にほこる者なりけり。さらずば、などか此時に、千騎

況乎最愛の子なりしかば、塵をも足に蹈せじ、荒き風にもあてじとて、あつかひ、いつき、かしづきしに、いつの間に盡終たる果報ぞや。年未十五に不滿、荒き武士に生虜て、暮を待間の露の命、消ん事こそ哀なれ。夜に入ければ、縛たる繩をときゆるして、已に斬んとしけるが、此人の心の程をみんとて、命惜く候はゞ、今夜速に髻を切て、僧か念佛衆かに成せ給て、一期心安く暮させ給へと申ければ、先其返事をばせで、執事は何と成せ給て候とか聞え候と問ければ、西左衞門四郎、執事は早討れさせ給て候也と答ふ。さては誰が爲に暫の命をも惜み候べき。死出の山三途の大河とかやをも、共に渡らばやと存候へば、唯急ぎ首を被召候へと、死を請て敷皮の上に居直れば、斬手涙を流て、暫は目をも不持上、後に立て泣居たり。角てさて有べきにあらねば、西に向ひ念佛十遍許唱て、遂に首を打落す。小清水の合戰の後、執事方の兵共、十方に分散して、殘る人なしと云ながら、今朝松岡城を打出るまでは、まさしく六七百騎もありと見しに、此人々の討るゝを見て、何地へか逃隱れしけん。今討るゝ處十四人の外は、其中間下部に至まで、一人もなく成にけり。十四人と申も、日來皆度々の合戰に、名を揚力を逞しくしたる者共なり。縱運命盡なば、始終こそ不叶共、心を同して戰はゞ、などか分

塵取｜輕便なる一種の乘物也

十餘町前に打けるが、跡に軍有て、執事の討れぬるやと人の云けるを聞て、取て返して、打刀を拔て戰けるが、自害を半にしかけて、路の傍に伏たりけるを、阿佐美三郎左衞門、年來の知音なりけるが、人手に懸んよりはとて、泣々首を取てけり。鹿目平次左衞門は、山口が討るゝを見て、身の上とや思けん、跡なる長尾三郎左衞門に拔て懸けるを、長尾少も不レ騷、御事の身の上にては候はぬ者を、僻事し出して、命失はせ給ふなと云れて、をめ〳〵と太刀を指て、物語して行けるを、長尾中間にきつと目くばせしたれば、中間二人鹿目が馬にひつ傍て、御馬の沓切て捨候はんとて、拔たる刀を取直し、肘のかゝりを、二刀刺て、馬より取て引落し、主に首をばかゝせけり。河津左衞門は、小淸水の合戰に、痛手を負たりける間、馬には乘得ずして、塵取にかゝれて、遙の跡に來けるが、執事こそ已に討れさせ給つれと、人の云を聞て、とある辻堂の有けるに、輿舁居させ、腹掻切て死にけり。執事の子息武藏五郎をば、西左衞門四郎是を生虜て、高手小手に縛て、其日の暮をぞ相待ける。此人は二條前關白太政大臣の御妹、無二止事一御腹に生れたりしかば、容貌人に勝れ、心樣優にやさしかりき。されば將軍も御覺異二于他一、世人ときめき合へる事限なし。才あるも才なきも、其子を悲むは、人の父たる習なり。

ずといふ
千鍾の祿—左傳の註に釜十爲レ鍾、六斛四升也とあり
馬さくりの水—馬蹄にて跳ねとばす水
打刀—後世の武士の用ひし大小の大なる方の刀をいふ

少見えたるを、三浦八郎左衛門、哀敵や、所レ願の幸哉と悦て、長刀の柄を取延て、胴中を切て落さんと、右の肩先より、左の小脇まで、鋒さがりに切附られて、あつと云處を、重て二打うつ。打れて馬よりどうと落ければ、三浦馬より飛で下り、首を掻落して、長刀の鋒に貫て差上たり。越後入道は、半町許隔りて打けるが、是を見て馬を懸のけんとしけるを、跡に打ける吉江小四郎、鎗を以て胛骨より左の乳の下へ突徹す。突れて鎗に取附、懐に差たる打刀を拔んとしける處に、吉江が中間走寄、鎗の鼻を返して引落す。落れば首を掻切て、あぎとを喉へ貫、とつ附に著て馳て行。高豐前五郎をば、小柴新左衛門是を打。高備前守をば、井野彌四郎組で落て首を取る。越後將監をば、長尾彥四郎先馬の諸膝切て、落る所を二太刀うつ。打れて少弱る時、押て臥て首を斬る。遠江次郎をば、小田左衛門五郎斬て落す。山口入道をば、小林又次郎引組で刺殺す。彥部七郎をば、小林掃部助後より太刀にて切けるに、太刀影に馬驚て、深田の中へ落にけり。彥部引返て、御方はなきか、一所に馳寄て、思々に討死せよと呼けるを、小林が中間三人走寄て、馬より倒に引落し、蹈へて首を斬て主の手にこそ渡けれ。梶原孫六をば、佐々宇六郎左衛門是を討。山口新左衛門をば、高山又次郎斬て落す。梶原孫七は、

たる笠也

藕花の穴ー蓮の莖の穴

歡喜苑ー起世經云、善見大城北門之外經ニ二十由旬ニ有ニ大園林ニ名曰ニ歡喜ニ周廻一千由旬、諸の天人此中に入れば自然に歡喜の意生

と危て、少もさがらず、馬を早て打けるを、上杉畠山の兵共、兼て議したる事なれば、路の兩方に百騎二百騎五十騎三十騎、處々に控て待ける者共、すはや執事よと見てければ、將軍と執事とのあはひを、次第に隔んと、鷹角一揆七十餘騎、會釋色代もなく、馬を中へ打こみ〳〵しける程に、心ならず押隔られて、武庫川の邊を過ける時は、將軍と執事とのあはひ、河を隔山を阻て、五十町許に成にけり。哀なる哉。盛衰刹那の間に替れる事、修羅帝釋の軍に負て、藕花の穴に身を隱し、天人の五衰の日に逢て、歡喜苑にさまよふ覽も、斯やと被ニ思知ニたり。此人天下の執事にて有つる程は、如何なる大名高家も、其笑る顏を見ては、千鍾の祿、萬戸の侯を得たるが如く悅び、少も心にあはぬ氣色を見ては、薪を負て燒原を過ぎ、雷を戴て大江を渡が如く恐れき。如何に況や將軍と打竝て、馬を進め給はんずる其中へ、誰か隔て先立人有べきに、名も知ぬ田舍武士、無ニ云許ニ人の若黨共に押隔られ〳〵、馬さくりの水を蹴懸られて、衣深泥にまみれぬれば、身を知る雨の止時なく、涙や袖をぬらすらん。執事兄弟武庫川を打渡て、小堤の上を過ける時、三浦八郎左衞門が中間二人走寄て、此なる遁世者の、顏を藏すは何者ぞ。其笠ぬげとて、執事の著られたる蓮葉笠を引切て捨るに、ほうかぶりはづれて、片顏の

提鞘—剃髮者の帶するものにて形守刀の如し下鞘とも書く

蓮の葉笠—蓮葉の如く二つに折れ

尸を一戰の場の土に曝さる。其後は東國北國殘なく、高倉殿の御方に成て候。世は今はさてとこそ見えて候へと、泣々執事にぞ語られける。筑紫九國は、兵衛佐殿に從附ぬと聞ゆ。四國は細川陸奥守に屬して、旣に須磨大藏谷の邊まで寄たりと告たり。今は東國をこそ、さり共と憑たれば、師冬さへ討れにけり。さては何へか落、誰をか可レ憑とて、さしも勇し人々の氣色、皆心細ぞ見えたりける。命は能難レ棄物也けり。執事兄弟かくても若命や助かると、心も發らぬ出家して、師直入道道常、師泰入道道勝とて、裳なし衣に提鞘さげて、降人に成て出ければ、見る人每に爪彈して、出家の功德莫大なれば、後生の罪は免る共、今生の命は難レ助と、欺ぬ人は無りけり。

○師直以下被レ誅事附仁義血氣勇者事

同二十六日に、將軍已に御合體にて、上洛し給へば、執事兄弟も、同遁世者に打紛て、無常の岐に策をうつ。折節春雨しめやかに降て、數萬の敵此彼に扣たる中を打通れば、それよと人に被二見知一じと、蓮の葉笠を打傾け、袖にて顏を引隱せ共、中々紛れぬ天が下、身のせばき程こそ哀なれ。將軍に離れ奉ては、道にても如何なる事かあらんずらん

曾參云々―家語に出づ勝母の名を忌みたる也

孔子云々―陸七衡の猛虎行に見ゆ盗泉の名を惡みたる也

上杉を退治せんとて、僅に五百騎を率して、上野へ發向候し路次にて、さりとも貳心非じと憑切たる兵共心變して、左馬頭殿を奪奉る間、左馬頭殿の御後見三戸七郎は、其夜同士打せられて、半死半生に候しが、行方を不レ知成候ぬ。是より上杉には、彌勢加り、播州師冬には、附隨ふ者候はざりし間、一歩も落て此方の樣をも聞ばやとて、甲斐國へ落て、洲澤城に被レ籠候處に、諏訪下宮祝部六千餘騎にて打寄、三日三夜の合戰に、敵御方の手負討死其數を不レ知、敵皆大手へ向ふにより、城中の勢大略大手におり下て、防戰ふ隙を得て、山の案内者後へ廻て、かさより落し懸る間、八代某一足も不レ引討死仕り、城已に落んとし候時、御烏帽子子に候し諏訪五郎、初は祝部に屬して城を攻候しが、城の弱たるをみて、抑我執事の烏帽子子にて、父子の契約を致しながら、世擧て背けばとて、不義の振舞をば如何か可レ致。曾參復二車於勝母之鄕一、孔子忍二渴於盗泉之水一といへり。君子は其於二不レ爲處一、名をだにも恐る。況乎義の違ふ處に於乎とて、祝部に最後の暇乞て、城中へ入り、却て寄手を防ぐ事、身命を不レ惜。去程に城の後より破て、敵四方より込入しかば、諏訪五郎と播州とは、手に手を取違へ、腹搔切て伏給ふ。此外義を重じ、名を惜む侍共六十四人、同時に皆自害して、名を九原の上の苔に殘し、

佛種は緣より起る―法華經に佛種自ㇾ緣起是故說二一乘一とあり

高倉殿―原本鎌倉殿に作る、異本に據て改む

と詠て、暫は閑居幽隱の人とぞ成たりける。佛種は緣より起る事なれば、かやうに次を以て、浮世を思捨たるは、やさしく優なる樣なれ共、越後中太が義仲を諫かねて、自害をしたりしには、無下に劣てぞ覺たる。

○師冬自害事附諏訪五郎事

高播磨守は師直が猶子也しを、將軍の三男左馬頭殿の執事になして、鎌倉へ下しかば、上杉民部大輔と、相共に東國の管領にて、勢八箇國に振へり。西國こそ加樣に師直を背く者多く共、東國はよも仔細非じ。事の眞に難儀ならば、兵庫より船に乘て、鎌倉へ下て、師冬と一つにならんと、執事兄弟潛に被二評定一ける處に、二十五日の夜半許に、甲斐國より時衆一人來て、忍やかに、去年の十二月に、上杉民部大輔が養子に、左衞門藏人、父が代官にて上野の守護にて候しが、謀叛を起て、高倉殿方を仕る由聞えしかば、父民部大輔是を爲二誅伐一下向の由を稱して、上野に下著して、則左衞門藏人と同心して、武藏國へ打越え、坂東の八平氏、武藏の七黨を附從ふ。播州師冬是を被ㇾ聞候て、八箇國の勢を被ㇾ催に、更に一騎も不二馳寄一。斯ては叶まじ。さらば左馬頭殿を先立進せて、

嗚呼豎子云云―楚の項羽と漢の高祖との鴻門の會に范增が項羽を罵りし語也、史記の項羽本紀に出づ

も不レ可レ叶。用意の船も候はで、此彼の浦々にて渡海の順風を待て、御渡り候はんに、敵追懸て寄候はゞ、誰か矢の一つをも捗々敷射出す人候べき。御方の兵共の有様は、昨日の軍に曇なく被二見透一候者を、人に無二剛臆一氣に有二進退一と申事候間、人の心の習、敵に打懸らんとする時は、心武くなり、一足も引となれば、心臆病に成者にて候。唯御方の勢の未すかぬ前に、一向討死と思召定て、一度敵に懸て御覽候より外は、餘議あるべし共覺候はずと、言を殘さで申けれ共、執事兄弟唯朦々としたる計にて、降參出家の議に落居しければ、公義涙をはら〱と流て、嗚呼豎子不レ堪二與謀一と、范增が云けるも理哉。運盡ぬる人の有樣程、淺ましき者は無りけり。我此人と死を共にしても、何の高名かあるべき。しかじ憂世を捨て、此人々の後生を訪んにはと、俄に思定て、

取ばうし取ねば人の數ならず、捨べき物は弓矢也けり。

と、加樣に詠じつゝ、自髻押切て、墨染に身を替て、高野山へぞ上ける。三間茅屋千株松風、ことに人間の外の天地也けりと、心もすみ身も安く覺えければ、

高野山憂世の夢も覺ぬべし、その曉をまつの嵐に。

持戒持律の僧―道德堅固の僧

にも不ㇾ劣なつかしきは、多年主従の好也。禽獸も皆其心あり。況や人倫に於てをや。縦合戰に及ぶ共、無ㇾ情沙汰を致すなと、八幡より賜て候御文數通候とて、取出して見せられ候つると、命鶴委細に申ければ、將軍も執事兄弟も、さては仔細非じとて、其夜の自害は留りてけり。さても三條殿は、御兄弟の御事なれば、將軍をこそ惡しと不ㇾ思召ㇾとも、師直去年の振舞をば、尚も惡しと思召ぬ事不ㇾ可ㇾ有。けにも頭を延て參る位ならば、出家をして參るか、不ㇾ然ば將軍を赤松の城へ遣參せて、師直は四國へや落ると、評定有けるを、藥師寺次郎左衞門公義、など加樣に無ㇾ力事をば仰候ぞ。六條判官爲義が、己が咎を謝せん爲に、入道に成て出候しをば、義朝子の身としてだにも、首を刎候しぞかし。縱御出家候て、如何なる持戒持律の僧と成せ給て候共、三條殿の御意も安まり、上杉畠山の一族達も、憤を散候べしとは覺候はず。剃髮の戸墨染の衣の袖に血を淋て、憂名を後代に殘し候はん事、唯口惜かるべき事にて候はずや。將軍を赤松の城へ入進せて、師直を四國へ落さばやと承候事も、都て可ㇾ然共覺候はず。細川陸奥守も、三條殿の召に依て、大勢早三石に著て候と聞え候へば、將軍こそ攝州の軍に負て、赤松へ引せ給と聞て、打止奉らんと思はぬ事や候べき。又四國へ落させ給はん事

成るならばの意

無明の酒―妙法聖念經に勿レ飲ニ無明酒ニとあり、無明は過去の煩惱の本性を蔽ひ爲に邪見妄執を起して事理に闇きこと

にて候。腹切の最期の盃にて候へば、誰にか論じ申さまし。我先飲て思ざし申さんとて、前なる盃を少取傾る體にて、糟谷新左衞門尉保連にさし給へば、三度飲て、糟谷新左衞門尉伊朝、奥次郎左衞門尉、岡本次郎左衞門、中山助五郎、次第に飲下。無明の酒の醉の中に、近附命ぞ哀なる。

○師直師泰出家事附 藥師寺遁世事

斯る處に、東の木戸を荒らかに敲く人あり。諸人驚て誰ぞと問ば、夜部落たりと沙汰せし饗庭命鶴丸が聲にて、御合體に成て、合戰は有まじきにて候ぞ。楚忽に御自害候なとぞ呼はりける。こはそも何とある事ぞやとて、急ぎ木戸を開きたれば、命鶴將軍の御前に參て、夜部事の由をも申さで、罷出候しが、早落たりとぞ思召候つらん。御方の軍勢の氣を失、色を損じたる體を見候しに、斯ては戰ふ共難レ勝、落共延させ給はじと覺え候つる間、畠山阿波將監が陣へ罷向候て、御合體の由を申て候へば、錦小路殿も、唯暮々其事をのみこそ仰候へ。執事兄弟の不義も、唯一往思知するまでにて候へば、執心深く被ニ誅伐ニまでの儀も候まじ。親にも超てむつまじきは、同氣兄弟の愛也。子

の控へ居る一室をいふ

鳥之將死云云—論語泰伯篇に出づ

聖道に云々—天台眞言などの僧に

とて、大なる酒樽に酒を湛へ、銚子に盃取副て、家城源十郎師政酌をとる。信濃守次男信濃五郎直頼が、此年十三にて、此内に在けるを、父呼出し、鳥之將死其鳴也哀。人之將死其言也善と云り。吾一言汝が耳に留らば、庭訓を不忘、身を愼て先祖を恥しむる事なかるべし。將軍已に御自害あらんずる間、範資も御供申さんずるなり。日來の好を思はゞ、家の子若黨共も、皆吾と共に無力死に赴かんとぞ思定たるらん。但汝は未幼少なり。今共に腹を不切共、人強に指をさす事有まじ。則祐已に汝を猶子にすべき由、兼て約束有しかば、赤松へ歸て、則祐を眞の父と憑て、生涯を其安否に任するか、不然ば又僧法師にもなりて、吾後生をも訪ひ、汝が身をも助かるべしと、泣々庭訓を殘して、涙を押拭へば、座中の人々實もと同く涙を流けり。直頼熟々と父の遺訓を聞て、扇取直して申けるは、人の幼少程と申は、五や六や乃至十歲に足ぬ時にてこそ候へ。我已に善惡をさとる程に成て、適此座に在合ながら、御自害を見捨て、一人故郷へ歸ては、誰をか父と憑み、誰にか面を向べき。又禪僧に成たらば、沙彌喝食に指をさゝれ、聖道に成たらば、兒共に被笑ずと云事不可有。縱又如何なる果報有て後の榮花を開候とも、おくれ進せては、ながらふべき心地もせず。色代は時に依る事

福良渡―淡路國三原郡に在り。

掛羅―禪家の袈裟

厩侍―遠侍の如く諸士

ひ、福良渡淡路の迫門を船にて落る人もあり。或は草苅男に窶れつゝ、竹の簣を肩に懸、須磨の上野生田の奥へ、跣にて逃る人もあり。運の傾く癖なれ共、臆病神の著たる人程見苦き者はなし。夜已に深ければ、さしもせき合つる城中さび返て、更に人ありとも見えざりけり。將軍執事兄弟を召近附て宣けるは、無二云甲斐一者共が、唯一軍に負たればとて、落行事こそ不思議なれ。さりとも饗庭命鶴、高橋、海老名六郎は、よも落去じなと問給へば、それも早落て候。長井治部少輔、佐竹加賀は早落つるか。いやそれも皆落て候。さては殘る勢幾程かある。今は御内の御勢、師直が郎從、赤松信濃守が勢、彼是五百騎に過候はじと申せば、將軍、さては世中今夜を限ごさんなれ、面々に其用意有べしとて、鎧をば脫て推除、小具計になり給ふ。是を見て高武藏守師直、越後守師泰、武藏五郎師夏、越後將監師世、高豐前五郎、高備前守、遠江次郎、彦部、鹿目、河津以下高家の一族七人、宗徒の侍二十三人、十二間の客殿に二行に座を列て、各諸天に燒香し、鎧直垂の上をば取て拋除、袴計に掛羅懸て、將軍御自害あらば、御供申さんと、腰の刀に手を懸て、靜り返てぞ居たりける。厩侍には、赤松信濃守範資上座して、一族若黨三十二人、膝を屈して竝居たりけるが、いざや最後の酒盛して、自害の思ひざしせん

師泰以下の一族共、太子の御勢を小勢と見て、中に取籠て討んとするに、金剛藏王御目をいらゝげて、あれ射て落せと下知し給へば、小守、勝手、赤檮、河勝、四方に颯と走散り、同時に引て放つ矢、師直、師泰、武藏五郎、越後守將監が眉間の眞中を徹て、馬より倒に地を響して落ると見て、夢は則醒にけり。朝に此夢を語て、今日の軍如何あらんずらんと危けるが、果して軍に打負ぬ。此後とても、斯ては憑しくも不ㇾ思と、聞人心に思ぬはなし。此夢の記錄、吉野の寺僧所持して、其隱なき事也。

○松岡城周章事

小清水の軍に打負て、引退兵二萬餘騎、四方四町に足ぬ松岡城へ、我も〳〵とこみ入ける程に、沓の子を打たるが如くにて、少も働くべき樣も無りけり。斯ては叶まじ、宗徒の人々より外は、内へ不ㇾ可ㇾ入とて、人の郎從若黨たる者は、皆そとへ追出して、四方の木戸を下したれば、元來落心地の附たる者共、是に事名附て、無ㇾ憑甲斐執事の有樣哉。さては誰が爲にか討死をもすべきと、面々につぶやきて、打連々々落行。今は定て路々に敵有て、落得じと思ふ人は、或は釣する海人に紛て、破たる簑を身に纏

天地各別—天地隔絶の意

小守勝手明神—吉野の鎮守也

の者共は後より蹴除て、少し臆病に成りければ、石塔に力付然して、兵を三町許追返し

たるに、敵も勇気を失ひけん、其後よりは不進けれ共、身に付けり。薬師寺は

鏃を並べ旋らして射けれ共、後へは蹴散されば、敵の跡を付けても不見して引返しつゝ蔵

鉄騎の兵共、勇気を失ひ、落ちんずるを見て、陣頭に留たる兵の、なかに怒りて二に数ならず。

されども今日の合戦をつら〳〵案ずるに、勢の多少、兵の勝劣、天地各別なり。何事にか

某経に纔に討負たる事を思ふに付て、其間の作法不審なり、少も

不思議一人見たりける夢こそ不思議なれ。所は何共不知、渺々たる小野に、陣には師直

師泰以下、執事の一族若党数万騎打集て、轡を並べ控たり。東には錦の御旗、石塔

畠山・上杉以下の一万余騎にて相向ふ。両陣旗を合て、其戦未半時、石塔

畠山が勢散々に被懸立て退く。師直師泰勝に乗て追懸る処に、雲の上より錦の旗一流差あげ

て、勢の者に騎兵八騎見えたり。大勢に分れたる路を誰ぞと見れば、左は吉野の金剛蔵王

権現、騎に乗ぜる人の見方なる馬に被召たり。右は小守勝手明神、金の鎧に金の綱なる鎧の

て、馬の前後に従ひ給ふ。右には大まさの聖徳太子、甲冑の赤騎に乗給て従給たり。錦

の袖を翻し、弓矢を帯し、妹子大臣・跡見赤檮・秦河勝、御前を取て、真先に進む。師直

梅花一梶原家の紋也

松田小次郎と浅沢弾正左衛門と、一騎に成て取籠、討れにけり。後にあはれ何者ぞや、誰と云者ならん。名字を知ばやとて是を見るに、梅花を一枝折て、箙の上に差たり。さては元暦の昔、一谷の合戦に、二度の懸して名を揚し梶原平三景時が、其末にてぞ有らんと、名のらで名をぞ被知ける。讃岐守三郎左衛門尉は、御方の兵十騎計一所に馳寄、懸し引共少も不騒、二百五十騎の勢にて、石堂十郎が七百余騎の勢を山際までまくり附て、続く御方を待処に、一騎も続き兵なければ、又浪打際に控て居たるに、石堂高田が大勢共、只者たる敵は、讃岐守と見るぞ、一人も余すなとて取籠けり。讃岐守が二百五十騎、敵後に引隠は、一度に馬を乾と引返して戦ひ、敵先を離れば、一同にわつと喚て懸破り、打出浜の東より御影浜の松原まで、十六度まで返し合せて戦ひけるに、或は討れ或は敵に被懸隔、一所に控たる勢とては、弾正左衛門兄弟、陸中山太郎左衛門尉、已上十六騎に成にけり。只其皆馬の息を休めて、後を屹と見たるに、松原の影に討残されし武者一騎馬を白砂に駈倒して、敵七騎に被取籠たり。弾正左衛門兄弟是を見て、是は松田が近習侍と覚ゆ。目前にて討るゝ御方を不助と云事やあるべきとて、六騎打連て馳寄ば、七騎の敵は引退て、松田は命を助てけり。松田兄弟主従七騎に成て、轡持たる処に、讃岐守

一度にばつとぞ引たりける。石堂右馬頭が陣は、是より十餘町を隔てたれば、未御方の打勝たるをも不ㇾ知、打出の濱に旗の三旒見えたるは、敵か御方か見て歸れと云れければ、原三郎左衛門義實唯一騎、馳向て是を見に、三幅の小旗に、赤き手を兩方に著たり。さては敵也と見課て、馳歸けるが、徒に馬の足を疲かさじとや思けん。扇を擧て御方の勢をさし招き、濱の南に控たる勢は、敵にて候ぞ。而も追手の軍は御方打勝たりと見え候。早懸らせ給へと聲を擧てぞ呼ける。元より氣早なる石堂上杉の兵共、是を聞て、何かは少しも可ㇾ思惟、七百餘騎の兵共、馬の轡を竝て喚て懸けるに、藥師寺が跡に控たる執事兄弟の大勢共、未矢の一つをも不ㇾ被ㇾ射懸、捨鞭を打てぞ逃たりける。梶原孫六同彈正忠二人は、追手の勢の中に有て、心ならず御方に被ㇾ引立、六七町落たりけるが、後代の名をや恥たりけん、唯二騎引返して、大勢の中へ懸入る。暫が程は二人一所にて戰けるが、後には別々に成て、唯命を限とぞ戰ける。孫六は敵三騎切て落して、裏へつと懸拔たる。續く御方もなく、又見とがむる敵も無りければ、紛れて助からんと思て、笠符を取て袖の下に收め、西宮へ打通て、夜に入ければ、小船に乘て將軍の陣へぞ參ける。彈正忠は偏に敵に紛れもせず、懸入ては戰ひく〲、七八度まで馬煙を立て戰けるが、

草わき—馬の胸のあたり

萬餘騎御影濱に押寄、追手搦手二手に分らる。軍は追手より始て、戰半ならん時、搦手の濱の南より押寄て、敵を中に取籠よと被下知ける。藥師寺次郎左衛門公義は、今度の戰如何樣大勢を憑て、御方爲損じぬと思ければ、彌我大事と氣を勵しけるにや、自餘の勢に紛れじと、絹三幅を長さ五尺に縫合て、兩方に赤き手を著たる旗をぞ差たりける。一族の手勢二百餘騎、雀松原の小陰に控て、追手の軍今や始まると待處に、兼ての相圖なれば、河津左衛門氏明、高橋中務英光、大旗一揆の六千餘騎、畠山が陣へ押寄て鬨を作る。畠山が兵靜り返て、態と鬨の聲をも不合。此の藪の陰、彼の木陰に立隱て、指攻引攻散々に射けるに、面に立つ寄手數百人、馬より眞倒に射落されければ、後陣はひき足に成て不進得。河津左衛門是を見て、矢軍計にては叶まじきぞ、拔て懸れと下知して、弓をば藪へがらりと投棄て、三尺七寸の太刀を拔て、敵の群たる中へ、會釋もなく懸入んと、一段高き岸の上へ懸上ける處に、十方より鏃を汰て射ける矢に、馬の平頸草わき、弓手の小肘、右の膝口四所まで篦深に射られて、馬は小膝を折てどうと伏す。乘手は朱に成て下立たり。是を見て畠山が二百餘騎、喚て懸ければ、跡に控たる寄手の大勢共、新手を入替て戰はんともせず、手負を助けんともせず、鞭に鐙を合て、

湯山―攝津國有馬の溫泉のある山

去程に其日の暮程に、攝津國の守護、赤松信濃守範資、使者を以て申けるは、八幡より石堂中務大輔、畠山阿波守國淸、上杉藏人大夫を大將にて、七千餘騎を光明寺の後攻の爲にとて被二差下一也。前には光明寺の城堅く守て、後に荒手の大敵懸りなば、ゆゆしき御大事にて候べし。唯先其城をば閣れ候て、討手の下向を相支へ、神尾、十林寺、小淸水の邊にて御合戰候はゞ、敵の敗北非二疑處一。御方一戰に利を得ば、敵所々に軍すと云ふ共、いつまでか怺へ候べき。是唯一擧に戰を決して、萬方に勝事を計る處にて候べしと、追々早馬を打せて、一日に三度までこそ申されけれ。將軍を始奉て、師直師泰に至まで、げにも聞ゆる如くならば、敵は小勢也。御方は是に十倍せり。岨しき山の城を攻ればこそ叶はね、平場に懸合て勝負を決せんに、御方不レ勝と云事不レ可レ有。さらば此城を閣て、先向なる敵に懸れとて、二月十三日、將軍も執事兄弟も、光明寺の麓を御立有て、兵庫湊川へ馳向はる。畠山阿波守國淸は、三千餘騎にて播磨の東條に有けるが、此事を聞て、さては何にてもあれ、執事兄弟のあらんずる所へこそ向はめとて、湯山を南へ打越て、打出の北なる小山に陣をとる。光明寺に楯籠ける石堂右馬頭、上杉左馬助も、光明寺をば打捨て、皆畠山が陣へ馳加る。同十七日夜、將軍執事の勢二

梢の風に吹れて、又寄手の上に翻る。數萬の軍勢頭を地に著て、吾陣に天降らせ給へと、信心を凝す處に、飛鳥十方に飛散て、旗は忽に師直が幕の中にぞ落たりける、諸人同く見て、目出しと感じける聲、暫は靜りも得ざりけり。師直冑を脱で、左の袖に受留め、三度禮して委く是を見れば、旗にはあらで、何共なき反古を二三十枚續集て、裏に二首の歌をぞ書たりける。

吉野山峯の嵐のはげしさに、高きこずゑの花ぞちりゆく。

限あれば秋も暮ぬと、武藏野の草はみながら霜枯にけり。

師直傍の人に、此歌の吉凶何ぞと問ければ、聞人毎に穴淺ましや、高き梢の花ぞ散行とあるは、高家の人可レ亡事にやあるらん。然も吉野山峯の嵐のはげしさにとあるも、先年藏王堂を被レ燒たりし罪、一人にや歸すらん。武藏野の草はみながら霜枯にけりとあるも、名字の國なれば、旁以て不吉なる歌と、忌々しくは思けれ共、目出き歌共にてこそ候へとぞ會釋しける。

○小清水合戰事　附　瑞夢事

渇仰の首を不レ傾云事なし。寄手の赤松律師も此事を傳聞て、さては此軍捗々しからじと、氣に障て思ける處に、子息肥前權守朝範が、冑を枕にして少し目睡たる夢に、寄手一萬餘騎、同時に垣楯の際に寄て、火を懸しかば、八幡山金峯山の方より、山鳩數千飛來て翅を水に浸して、櫓垣楯に燃著火を打消とぞ見えたりける。朝範驚て此夢を則祐に語る。則祐是を聞て、さればこそ此城を攻落さん事有難と思つるが、果して神明の擁護有けり。哀事の難儀にならぬ前に、引て歸らばやと思ける處に、美作より敵起て、赤松へ寄する由聞えければ、則祐光明寺の陣を捨て、白旗城へ歸にけり。軍の習、一騎も勢の加る時には人の心勇み、一人もすく時は兵の氣たゆむ習なれば、寄手の勢次第に減ずるを見て、武藏守が兵共彌軍懈て、皆帷幕の中に休息して居たりける處に、巽の方より怪氣なる雲一群立出て、風に隨て飛揚す。百千萬の鳶烏其下に飛散て、雲居る山の風早み、散亂たる木葉の空にのみして行が如し。近附に隨て是を見ば、雲にも霞にも非ず、無文の白旗一旒、天より飛降にてぞ有ける。是は八幡大菩薩の擁護の手を加へ給ふ奇瑞也。此旗の落留らんずる方ぞ、軍には打勝んずらんとて、寄手も城中も手を叉へ、禮を成して、祈念を不レ致云人なし。此旗城の上に飛上飛下て暫翩翻しけるが、

心落に落ん—臆したる心出來て攻めざるに城を落つるをいふ

三熱の熖—貪瞋痴の三をいふ

城の中勝に不レ乘云事なし。赤松律師則祐は、七百餘騎にて泣尾へ向たりけるが、遙に城の體を見て、敵は無勢なりけるを、一攻攻て見よと下知しければ、浦上七郎兵衛行景、同五郎左衛門景嗣、吉田彈正忠盛淸、長田民部丞資眞、菅野五郎左衛門景文、さしも岨しき泣尾の坂を攻上て、垣楯の際まで著たりける。此時に自餘の道々よりも、寄手同時に攻上る程ならば、城をば一息に攻落すべかりしを、何となくとも今宵か明日か心落に落んずる城を、骨折に攻ては何かすべきとて、數萬の寄手、徒に見物して居たりければ、浦上七郎兵衛を始として、攻入寄手一人も不レ殘、垣楯の下に射伏られて、元の陣へぞ引返しける。手合の合戰に敵を退て、城中聊氣を得たりといへども、寄手は大勢也。城の構未レ拵、始終いかゞ有べからんと、石堂上杉安き心も無りける處に、伊勢の愛曾が召使ける童一人、俄に物に狂て、十丈許飛上て跳けるが、吾に伊勢大神宮乘居させ給て、此城守護の爲に、三本杉の上に御座あり。寄手縱如何なる大勢なりとも、吾角てあらん程は、城を被レ落事有べからず。惡行身を責、師直師泰等、今七日が中に滅んずるをば不レ知や。あらあつや、堪がたや。いで三熱の熖さまさんとて、閼伽井の中へ飛漬たれば、けにも閼伽井の水沸返て、わかせる湯の如し。城中の人々是を聞て、

たまりもたまらず、谷底へまくり落されて、大略皆討れにけり。兩國の軍に事故なく打勝て、越後守師泰、武藏五郎師夏、喜悅の眉を開き、觀應二年二月一日に、將軍の陣を取ておはしける書寫坂本へ馳參る。

○光明寺合戰事附師直怪異事

去程に八幡より、石堂右馬權頭を大將にて、愛曾伊勢守、矢野遠江守以下五千餘騎にて、書寫坂本へ寄んとて下向しけるが、書寫坂本へは、越後守が大勢にて著たる由を聞て、播磨の光明寺に陣を取て、尙八幡へ勢をぞ乞れける。將軍此由を聞給て、光明寺に勢を著ぬ前に、先是を打散さんとて、同二月三日將軍書寫坂本を打立て、一萬餘騎の勢を率し、光明寺の四方を取卷給ふ。石堂城を堅て光明寺に籠しかば、將軍は引尾に陣を取り、師直は泣尾に陣をとる。名詮自性の理、寄手の爲に、何れも忌々しくこそ聞えけれ。同四日より矢合して、寄手高倉の尾より攻上れば、愛曾は仁王堂の前に支て相戰ふ。城中には死生不レ知のあふれ者共、此を先途と命を捨て戰ふ。寄手は功高く祿重き大名共が、唯御方の大勢を憑む計にて、誠に吾一大事と思入たる事なければ、毎日の軍に、

名詮自性の理—唯識論の文也、名は本來自性の體を顯すことをいふ

逸物―普通には名馬などをいへど此は好都合の意也

垪和―原本芳賀に作る天正本に據て改む

が、ひつしきの板を疊上、あげさまに三刀刺たりければ、道口土屋は助て、陶山は命を止たり。陶山が一族郎等是を見て、何の爲に命を惜むべきとて、長谷與一、原八郎左衛門、小池新兵衛以下の一族若黨共、大勢の中へ破ては入、破ては入、一足も引ず、皆切死にこそ死にけれ。上杉若干の手者を打せながら、後陣の軍には勝にけり。宮下野守兼信は、始七十騎にて、中の手に有けるが、後陣の軍に御方打負ぬと聞て、何の間にか落失けん、唯六騎に成にけり。兼信四方を屹と見て、よし〳〵有にかひなき大臆病の奴原は、足纏に成に、落失たるこそ逸物なれ。敵未人馬の息を休ぬ前に、いざや懸らんと云儘に、六騎馬の鼻を雙て懸入る。是を見て、小旗一揆に河津高橋五百餘騎喚て懸りける程に、上杉が大勢跡より引立て、一度も遂に返さず、混引に引ける間、上杉深手を負のみに非ず、打るゝ兵三百餘騎、創を蒙る者數を知ず。其道三里が間には、鎧腹卷小手髄當弓矢太刀刀を捨たる事、足の蹈所も無りけり。備中の合戰には、越後守師泰念なく打勝ぬ。是より播磨までは、道のほど異なる事あらじと思ふ所に、美作國住人、垪和角田の者共、相集て七百餘騎、杉坂の道を切塞で、越後守を打留んとす。唯今備中の軍に打勝て、勢天地を凌ぐ河津高橋が兩一揆、一矢をも射させず、拔つれて懸りける程に、敵一

も是を知ず、片時も行末を急ぐ道なれば、匹馬に鞭を進て、勢山を打越ぬ。小旗一揆、河津、高橋、陶山兄弟は、遙に後陣に引殿て、未龍山の此方に支たり。先陣後陣相隔て、勢の多少も見分ねば、上杉が先懸の五百餘騎、一の後陣に打ける陶山が百餘騎の勢を目に懸て、楯の端を敲て鬨を作る。陶山元來軍の陣に臨む時、假にも人に後を見せぬ者共なれば、鬨の聲を合て、矢一筋射違る程こそあれ、大勢の中へ懸入て攻けれども、魚鱗鶴翼の陣、旌旗電戟の光、須臾に變化して、萬方に相當れば、野草紅に染て、汗馬の蹄血を蹴たて、河水派せかれて、士卒の尸忽流を絕。斯りけれども、前陣は隔て知ず、後陣にはつゞく御方もなし。唯今を限と戰ける程に、陶山又次郎高直、脇の下、內冑吹返の迦、三所突れて討れにけり。弟の又五郎是を見て、哀よからんずる敵に組で、刺違ばやと思ふ處に、火威の鎧に、紅の母衣懸たる武者一騎、相近に寄合たり。誰ぞと問ば、土屋平三と名乘。陶山莞爾と笑て、敵をば嫌まじ。よれ組んと云儘に、引組で二疋が中へどうと落る。落附處にて陶山上になりければ、土屋を取て押て、頸をかゝんとするを見て、道口七郎落合て、陶山が上に乗懸る。陶山下なる土屋をば、左の手にて押へ、上なる道口をかい摑で、ねぢ頸にせんと振返て見ける處を、道口が郎等落重て、陶山

備後—原本備前に作る異本に據て改む

ければ、相公信心を發れて、丹波國小川庄を被二寄附一、永代の寺領にぞ被レ成ける。

○越後守自二石見一引返事

越後守師泰は、此時まで三角城を退治せんとて、猶石見國に居たりけるを、師直が許より飛脚を立て、攝津國播磨の間に、合戰事已に急也。早く其國の合戰を閣て馳上らるべし。若中國の者共、かゝる時の弊に乘て、道を塞んずる事もや有んずらんと存候間、武藏五郎を兼て備後へ差遣す。中國の蜂起を鎭て、待申べしとぞ告たりける。越後守此使に驚て、石見を立て上れば、武藏五郎其相圖を違へじと、播磨を立て備後の石崎にぞ著にける。將軍は八幡比叡山の敵に襲れて、播磨の書寫坂本へ落下り、越後守は三角城を攻兼て、引退と聞えしかば、上杉彈正少弼、八幡より船路を經て、備後の鞆へあがる。是を聞て、備後、備中、安藝、周防の兵共、我劣じと馳附ける程に、其勢雲霞の如くにて、靡ぬ草木もなかりけり。去程に武藏五郎、越後守を待附て、中國には暫も逗留せず、やがて上洛すと聞えければ、上杉取物も取敢ず、跡を追て打留よとて、其勢二千餘騎、正月十三日の早旦に、草井地より打立て、跡を追てぞ寄にける。越後守は夢に

—原本應用言ば邊々に作る、異本に據て改む
有司—官人

候へども、須彌の四方を領して、鬼門の方を守護し、摧伏の形を現じて、專勝軍の利を施し給ふ事は、毗沙門の德にしくは候べからず。是我寺の本尊にて候へばとて、無㆑謂申にて候はず。古玄宗皇帝の御宇、天寶十二年に、安西と申所に軍起て、數萬の官軍戰ふ度毎に、打負ずと云事なし。今は人力の及處に非ず、如何すべきと、玄宗有司に問給ふに、皆同く答て申さく、是誠に天の擁護に不㆑係ば、鎭むる事を難㆑得。唯不空三藏を召れて、大法を行せらるべき歟と申ける間、帝則不空三藏を召て、毗沙門の法を行はせられけるに、一夜の中に鐵の牙ある金鼠百萬、安西に出來て、謀叛人の太刀刀甲冑矢の筈弓の弦に至まで、一つも不㆑殘食破り食切、剩人をさへ咀殺し候ける程に、凶徒是を防ぎかねて、首をのべて軍門に降しかば、官軍矢の一をも不㆑射して、若干の賊徒を平げ候き。又吾朝には朱雀院の御宇に、金銅の四天王を天台山に安置し奉て、將門を亡されぬ。聖德太子毗沙門の像を刻で、兜の眞甲に戴て、守屋の逆臣を誅せらる。此等の奇特世の知處人の仰ぐ處にて候へば、御不審あるべきに非ず。然るに今武將幸に多門示現の靈地に御陣を召れ候事、古の佳例に違まじきにて候へば、天下を一時に鎭られて、敵軍を千里の外に掃はれ候はん事、何の疑か候べきと、誠に憑しげに被㆑申たり

東嶺―京都の東山

輪鳥の繳云云―高く飛ぶ鳥の絲より逃れ出でといふ意

應用無邊に

を悦び、洛中には潜に悲む。吉凶は糾へる纏の如く、哀樂時を易たり。何を悦び何事を可歎共不定して、將軍は昨日都を東嶺の曉に霞と共に立隔り、今日は旅を山陰の夕の雲に引別て、西國へと赴き給けるが、名將一處に集らん事は、計略なきに似たりとて、御子息宰相中將殿に、仁木左京大夫頼章、舍弟右京大夫義長を相副て、二千餘騎丹波の井原石龕に留らる。此寺の衆徒元來無貳の志を存せしかば、軍勢の兵粮、馬の糠藁に至まで、如山積上たり。此所は岩高く峯聳て、四方皆嶮岨なれば、城郭の便も心安く覺えたる上、荻野、波々伯部、久下、長澤、一人も不殘馳參て、日夜の用心隙無りければ、他日窮困の軍勢共、唯輪鳥の繳を出て、轍魚の水を得たるが如くにて、暫心をぞ休ける。相公登山し給し日より、岩龕寺の衆徒、座さまさずに勝軍毘沙門の法をぞ行ける。七日に當たりし日、當寺の院主雲暁僧都、卷數を捧て參たり。相公則僧都に對面し給て、當寺開山の事の起、本尊靈驗を顯し給し樣など、樣々問給ける次に、さても何れの薩埵を歸敬し、如何なる祕法を修してか、天下を鎭め大敵を亡す要術に叶ひ候べきと宣ければ、雲暁僧都畏て申けるは、凡諸佛薩埵の利生方便區々にして、彼を是し此を非する覺、應用無邊に候へば、何れを優、何れを劣たりとは難申

羽林ー唐の官名にて我近衛府に當る、此には左近衛中將なる義詮をいふ

處に、將軍竝羽林の兩勢五千餘騎、二條を東へ懸出て、桃井を山上へ又引返させじと、跡を隔てぞ取巻ける。桃井終日の合戰に、入替る勢もなくて、戰疲れたる上、三方の大敵に圍れて、叶じとや思けん、粟田口を東へ山科越に引て行。され共尚東坂本までは引返さで、其夜は關山に陣を取て、大篝を燒てぞ居たりける。

○將軍親子御退失事 附 井原石窟事

將軍都へ立歸給て、桃井合戰に打負ぬれば、今は八幡の御敵共も、大略將軍へぞ馳參らんと、諸人推量を廻して、今はかうと思はれけるに、案に相違して、十五日の夜半許に、京都の勢大半落て、八幡の勢にぞ加ける。こはそも何事ぞ。戰に利あれば、御方の兵彌敵になる事は、よく早尊氏を背く者多かりける。角ては洛中にて再戰を致し難し。暫西國の方へ引退て、中國の勢を催し、東國の者共に牒じ合て、却て敵を攻ばやと、將軍頻に仰あれば、諸人可レ然覺え候と同じて、正月十六日の早旦に、丹波路を西へ落給ふ。昨日は將軍都に立歸て、桃井戰に負しかば、洛中には是を悅び、八幡には聞て悲む。今日は又將軍都を落給て、桃井驅て入替ると聞えしかば、八幡には是

ばさら繪—粗末なる繪

も、力量なき者なれば、力增に逢て、始終は叶はじと覺るぞ。あれ討すな。秋山を射て落せとぞ被下知。究竟の精兵七八人河原面に立渡て、雨の降が如く散々に射る。秋山件の棒を以て、唯中を指て當る矢二十三筋まで打落す。忠實も情ある者也ければ、今は秋山を討んともせず。剰御方より射矢を制して、矢面にこそ塞りけれ。かゝる名人を無代に射殺さんずる事を惜て、制しけるこそやさしけれ。斯て兩方打退て、諸人の目をさましける。されば其比、靈佛靈社の御手向、扇團扇のばさら繪にも、阿保秋山が河原軍とて、書せぬ人はなし。其後合戰始て、桃井が七千餘騎、仁木細川が一萬餘騎と、白河を西へまくり、東へ追靡け、七八度が程懸合たるに、討るゝ者三百人、創を被る者數を不知。兩陣互に戰屈して、控て息を繼處に、兼ての相圖を守て、佐々木判官入道々譽七百餘騎にて、思も寄らぬ中靈山の南より、鬨をどつと作て、桃井が陣の後へ懸出たり。桃井が兵是に驚き、あらけて二手に分て相戰ふ。桃井は西南の敵に破立られて、兵引色に見えける間、兄弟二人態と馬より飛で下り、敷皮の上に著座して、運は天にあり、一足も引事有べからず。唯討死をせよとぞ下知しける。去程に日已に夕陽に及で、戰數刻に成ぬれども、八幡の大勢は曾不攻合、北國の兵氣疲れて、暫東山に引上んとしける

白引の精兵ー矢を番ひて射ず唯口頭にて强弓を誇る兵

ば河中へ投入れ、三尺二寸の豹の皮の尻鞘かけたる金作の小太刀帶副て、唯一騎大勢の中より驅出て、事珍しく耳に立ても承る秋山殿の御詞哉。是は執事の御內に、阿保肥前守忠實と申者にて候。幼稚の昔より、東國に居住して、明暮は山野の獸を追ひ、江河の鱗を漁て業とせし間、張良が一卷の書をも、吳氏孫氏が傳へし所をも、曾て名をだに不ㇾ聞。され共變化時に應じて、敵の爲に氣を發する處は、勇士の己と心に得る道なれば、元弘建武以後三百餘箇度の合戰に、敵を靡け、御方を助け、强きを破り、堅きを碎く事、其數を不ㇾ知。白引の精兵畠水練の言におづる人非じ。忠實が手柄の程試て後、左樣の廣言をば吐給へと、高らかに呼りて、閑々と馬をぞ歩ませたる。兩陣の兵あれ見よとて、軍を止て手を拳る。數萬の見物衆は、戰場とも不ㇾ云、走寄てかたづを呑て是を見る。誠に今日の軍の花は、唯是に不ㇾ如とぞ見えたりける。相近になれば、阿保と秋山と、につこと打笑て、弓手に懸違へ、馬手に開合て、秋山はたと打てば、阿保うけ太刀に成て請流す。阿保持て開てしとと切れば、秋山棒にて打側く。三度合三度別ると見えしかば、秋山は棒を五尺許切折れて、手本僅に殘り、阿保は太刀を鍔本より打折れて、帶添の小太刀計憑たり。武藏守是を見て、忠實は、打物取て手はきゝたれど

白瓦毛なる馬―黄に白の勝ちたる毛色の馬

黄石公子房に授し―黄石公が張良に兵書を授けしことをいふ、子房は張良也

を、八角に削て、兩方に石突入れ、右の小脇に引側て、白瓦毛なる馬の太く逞しきに、白沫かませて、唯一騎河原面に進出て、高聲に申けるは、戰場に臨む人每に、討死を不レ志と云者なし。然共今日の合戰には、光政殊更死を輕じて、日來の廣言を、げにもと人に云れんと存也。其名人に知らるべき身にても候はぬ間、餘にことぐしき樣に候へ共、名字を申にて候也。是は淸和源氏の後胤に、秋山新藏人光政と申者にて候。王氏を出て雖レ不レ遠、已に武略の家に生て、數代唯弓箭を把て、名を高くせん事を存せし間、幼稚の昔より長年の今に至まで、兵法を弄び嗜む事隙なし。但黃石公子房に授し所は、天下の爲にして、匹夫の勇に非ざれば、吾未レ學。鞍馬の奧僧正谷にて、愛宕高雄の天狗共が、九郎判官義經に授し所の兵法に於ては、光政是を不レ殘傳得たる處なり。仁木細川高家の御中に、吾と思はん人々名乘て、是へ御出候へ。花やかなる打物して、見物の衆の睡醒さんと呼づて、勢當を拂て、西頭に馬をぞ控たる。仁木細川武藏守が內に手柄を顯し、名を知れたる兵多しといへ共、如何思けん互に目を賦て、我是に懸合て、勝負をせんと云者もなかりける處に、丹の黨に阿保肥前守忠實と云ける兵、連錢葦毛なる馬に、厚總懸て、唐綾威の鎧、龍頭の兜の緒を縮、四尺六寸の貝鐺の太刀を拔て、鞘を

の前に打出んと、相圖を定て寄せ給ふ。是は桃井東山に陣を取たりと聞ければ、四條より寄る勢に向て、合戰は定て河原にてぞ有んずらん。御方僞て京中へ引退かば、桃井定て勝に乘て進まん歟。其時道譽桃井が陣の後へ蒐出て、不意に戰を致さば、前後の大敵に遮られて、進退度を失はん時、將軍の大勢、北白河へ懸出て、敵の後へ廻る程ならば、桃井猛しと云共、引かではやはか戰ふと、謀を廻す處也。如レ案、中の手大宮にて旗を下して、直に四條河原へ懸出たれば、桃井は東山を後にあて、賀茂川を前に界て、赤旗一揆、扇一揆、鈴附一揆、二千餘騎を三所に控て、射手をば面に進ませ、疊楯二三百帖つき竝て、敵懸らば共に懸り合て、廣みにて勝負を決んと、靜り返て待懸たり、兩陣旗を上て、鬨の聲をば揚たれ共、寄手は搦手の勢の相圖を待て未懸らず。桃井は八幡の勢の攻寄んずる程を待て、態事を延さんとす。互に勇氣を勵す程に、或は五騎十騎馬を懸居懸廻、かけ引自在に當らんと、馬を乘浮るもあり。或は母衣袋より母衣取出して、是を先途の戰と思へる氣色顯れて、最後と出立人もあり。斯る處に桃井が扇一揆の中より、長七尺許なる男の、ひげ黑に血眼なるが、緋威の鎧に、五枚兜の緒を縮、鍬形の間に、紅の扇の月日出したるを不レ殘開て、夕陽に耀かし、樫木の棒の一丈餘に見えたる

窮子の云々—此事は法華經信解品に見ゆ

今比叡—妙法院の邊にて阿彌陀峯の麓也

○將軍上洛事附阿保秋山河原軍事

義詮心細く都を落て、桂川を打渡り、向明神を南へ、打過させ給んとする處に、物集女の前西岡の東西に當て、馬煙夥しく立て、勢の多少は未レ見、旗二三十旒翻て、小松原より懸出たり。義詮馬を控て、是は若八幡より搦手に廻る敵にてや有らんとて、先人を見せに被レ遣たれば、八幡の敵にてはあらで、將軍と武藏守師直、山陽道の勢を驅具し、二萬餘騎を率して、上洛し給ふにてぞ有ける。義詮を始奉て、諸軍勢に至るまで、唯窮子の他國より歸て、父の長者に逢へるが如く、悦合ふ事限なし。さらば軈て取て返して、洛中へ打寄せ、桃井を攻落せと、將軍父子の御勢、都合二萬餘騎を桂川より三手に分て、大手は武藏守を大將として、仁木兵部大輔頼章、舍弟右馬權助義長、細川阿波將監清氏、今川駿河守、五千餘騎四條を東へ押寄る。佐々木佐渡判官入道は、手勢七百餘騎を引分て、東寺の前を東へ打通て、今比叡の邊に控へ、大手の合戰半ならん時、思も寄ぬ方より、敵の後へ懸出んと、旗竿を引側め、笠符を卷隱し、東山へ打上る。將軍と宰相中將殿は、一萬餘騎を一手に合、大宮を上に打通り、二條を東へ、法勝寺

治承の古ー
實は壽永の
事也
天台山ー比
叡山
十一日ー四
日の誤なる
べし

にて候へ。此小勢にて彼大敵にあはん事、千に一も勝事を難ㇾ得覺候。其上將軍已に西國より御上候なれば、今は攝津國邊にも著せ給て候覽。唯京都を無二事故一御開候て、將軍の御勢と一になり、則京都へ寄られ候はゞ、などか思ふ圖に合戰一度せでは候べきと被ㇾ申ければ、義詮卿、義は宜に從ふに不ㇾ如とて、正月十五日の早旦に、西國を差て落給へば、同日の午刻に、桃井都へ入替る。治承の古平家都を落たりしか共、木曾は猶天台山に陣を取て、十一日まで都へ不ㇾ入。是全入洛を非ㇾ不ㇾ急、敵を欺かざる故なり。又は軍勢の狼籍を靜めん爲なりき。武略に長ぜる人は、愼む處加樣にこそ堅かるべけれ。今直常敵の落ぬといへばとて、人に兵糧をもつかはせず、馬に糠をもかはせず、楚忽に都へ入替る事、其要何事ぞや。敵若僞て引退き、却て又寄來事あらば、直常一定打負ぬと云はぬ人こそ無りけれ。又桃井を引者は、敵御方勝負を決すべきならば、爭か敵を欺ざるべき。未落ぬ先にも入洛すべし。まして敵落なば、何しにすこしも擬議すべき。如何にも入洛を急てこそ、日比の所存も達しぬべけれ。若敵僞て引退き、又歸寄る事あらば、京都にて尸を曝したらん事、何か苦かるべき。又軍勢の狼籍は、入洛の遲速に依べからず。其上深き了簡もおはすらんと、申す族も多かりけり。

入道左兵衛督此由を聞て、さらば京都に勢の著ぬ前に、先義詮を攻落せとて、觀應二年正月七日、七千餘騎にて八幡山に陣を取る。桃井右馬權頭直常、其比越中の守護にて在國したりけるが、兼て相圖を定たりければ、同正月八日越中を立て、能登、加賀、越前の勢を相催し、七千餘騎にて夜を日に繼で攻上る。折節雪おびたゞしく降て、馬の足も不ㇾ立ければ、兵を皆馬より下し、橇を懸させ、二萬餘人を前に立て、道を蹈せて過たるに、山の雪氷て如ㇾ鏡なれば、中々馬の蹄を不ㇾ勞して、七里半の山中をば、馬人容易越はてて、比叡山の東坂本にぞ著にける。足利宰相中將義詮は、其比京都に坐しけるが、八幡山比叡坂本に大敵を請て、非ㇾ可㆓油斷㆒、著到を附て勢を見よとて、正月八日より日々に著到を被ㇾ附けり。初日は三萬騎と註したりけるが、翌日は一萬騎に減ず。翌日は二千騎になる。是は如何樣御方の軍勢敵になると覺ゆるぞ。道々に關を居よとて、淀、赤井、今道、關山に關を居たれば、關守共に打連て、我も〳〵と敵に馳著ける程に、同十二日の暮程には、御内外樣の御勢、五百騎に不ㇾ足とぞ註したる。さる程に、十三日の夜より、桃井山上に陣を取ぬと見えて、大篝を燒けば、八幡山にも相圖の篝を燒つゞけたり。是を見て、仁木細川以下宗徒の人々評定有て、合戰は始終の勝こそ肝要

謳歌の說ー德をほめたたへて歸嚮する噂

太平記　卷第二十九

○宮方京攻事

暫時の智謀事成しかば、三條左兵衛督入道慧源と、吉野殿の御合體有て、慧源は大和の越智が許に坐ければ、和田楠を始として、大和、河内、和泉、紀伊國の宮方共、我も我もと三條殿に馳參る。是のみならず洛中邊土の武士共も、面々に參ると聞えしかば、無貳の將軍方にて、楠退治の爲に、石河河原に向城を取て被ㇾ居たりける畠山阿波將監國清も、其勢千餘騎にて馳參る。謳歌の說巷に滿て、南方の勢已に京へ寄すると聞えければ、京都の警固にて坐ける宰相中將義詮朝臣より早馬を立て、備前の福岡に、將軍九州下向の爲とて坐しける所へ、急を被ㇾ告事頻並也。依ㇾ之將軍より飛脚を以て、越後守師泰が、石見の三角城退治せんとて居たりけるを、其國は兎も角もあれ、先京都一大事なれば、夜を日に繼で可二上洛一由をぞ被ㇾ告ける。飛脚の行歸る程、日數を經ければ、師泰が參否の左右を待までもなしとて、將軍急ぎ福岡を立て、二千餘騎にて上洛し給ふ。

温故知新—論語爲政篇に出づ

當れり。然れば唯直義入道が申旨に任て、先御合體あらば、定て君を御位に即進せて、萬機の政を四海に施されん歟。聖德普して、士卒悉歸服し奉らば、其威忽に振て、逆臣等を亡されんに、何の仔細か候べきと、次の才學と覺て、言巧に申されければ、諸卿げにもと同心して、即勅免の宣旨をぞ被下ける。

被二綸言一稱、温レ故知レ新者、明哲之所レ好也。撥レ亂復レ正者、良將之所レ先也。而不レ忘二元弘之舊功一、奉レ歸二皇天之景命一、叡感之至、尤足二褒賞一。早揚二義兵一、可レ運二天下靜謐之策一者、綸旨如レ此。仍執達如レ件。

正平五年十二月十三日　　左京權大夫正雄奉

謹上　足利左兵衛督入道殿

とぞ被レ成ける。是ぞ誠に君臣永く不快の基、兄弟忽向背の初と覺て、淺ましかりし世間なり。

知音ー知己におなじ

何か渡る事をせん。我昔江東の子弟八千人と此川を渡て、秦を傾け、遂に天下に覇として、賞未レ士卒に不レ及處に、又高祖と戰ふ事八箇年、今其子弟一人も還る者無して、我獨江東に歸らば、縱江東の父兄憐て我を王とすとも、我何の面目有てか、是に見ゆる事を得ん。彼縱不レ言共、我獨心に不レ愧哉とて、遂に河を渡し給はざれ共、亭の長が志を感じて、騅と云ける馬の、一日に千里を翔るを、唯今まで乘給たるを下て、亭の長にぞたびたりける。其後歩立に成て、唯三人猶忿て立給へる所へ、赤泉侯騎將として二萬餘騎が眞前に進み、項王を生捕んと馳近附。項王目を瞋し聲を發して、汝何者なれば、我を討んとは近附ぞと忿て、立向給ふに、さしもの赤泉侯其人こそあらめ、心なき馬さへ振ひ戰て、小膝を折てぞ伏たりける。爰に漢の司馬呂馬童が遙に控たりけるを、項王手を擧て招き、汝は吾年來の知音也。我聞、漢我首を以て、千金の報萬戸の邑に購ふと、我今汝が爲に首を與て、朋友の恩を謝べしと云。呂馬童涙を流して、敢て項王を討んとせず。項王、よしやさらば我と吾頸を搔切て、汝に與へんとて、自劔を拔て、己が首を搔落し、左の手に差擧て、立すくみにこそ死給けれ。項王遂に亡て、漢七百の祚を保し事は、陳平張良が謀にて、僞て和睦せし故也。其智謀今又

我言所に非ずやー今日戦に三度打勝て云々と先にわがいひし通りにあらずや

る處に、先一番に漢の將軍淮陰侯、三十萬騎にて押寄たり。項羽二十八騎を後に立て、眞前に懸入て、自敵三百餘騎切て落し、漢大將の首を取て、鋒に貫て、本の陣へ馳返り、山東にして見給へば、二十八騎の兵、八騎討れて二十騎に成にけり。其勢を又三所に控させて、近附く敵を待懸たるに、孔將軍二十萬騎、費將軍五十萬騎にて、東西より押寄たり。項王又大に喚て、山東より馳下、兩陣の敵を四角八方へ懸散し、逃る敵五百餘人を斬て落し、又大將都尉が頭を取、左の手に提て、本の陣へ馳返り、其兵を見給ふに、僅七騎に成にけり。項羽自漢の大將軍三人の首を鋒に貫て指上、七騎の兵に向て、如何に汝等、我言所に非ずやと問給へば、兵皆舌を翻て、誠に大王の御言の如しと感じける。項羽已に五十餘箇所創を被てければ、今は是までぞ、さらば自害をせんとて、烏江の邊に打臨給ふ。爰に烏江の亭の長と云者、舟を一艘漕寄て、此川の向は、項王の御手に屬して、所々の合戰に討死仕りし兵共の故郷にて候。地狹しといへ共、其人數十萬人あり。此舟より外は可渡淺瀬もなく、又橋もなし。漢の兵到る共、何を以てか渡る事を得ん。願は大王急ぎ渡て、命をつぎ、重て大軍を動かして、天下を今一度覆し給へと申ければ、項王大に哈て、天我を亡せり。我如

四面楚歌する—城の四面にて楚の歌を歌ふ、楚人背きて漢に投じ寄手にある也

て、漢と相戰ふ。漢の兵四十餘萬人討れて引退く。是を聞て韓信齊國の兵三十萬騎を率して、壽春より廻て、楚と戰ふ。彭越、彭城の兵二十萬騎を率して、城父を經て、楚の陣へ寄せ、敵の行前を遮て張陣。大司馬周殷九江の兵十萬騎を率して、楚の陣へ押寄せ、水を阻て取籠る。東南西北悉百重千重に取卷たれば、項羽可落方無て、垓下の城にぞ被籠ける。漢の兵是を圍める事數百重、四面皆楚歌するを聞て、項羽今宵を限と思はれければ、美人虞氏に向て、涙を流し詩を作て、悲歌慷慨し給ふ。虞氏悲に不堪、劍を賜て自其刃に貫れて伏ければ、項羽今は浮世に無思事と悅て、夜明ければ、討殘されたる兵、二十八騎を伴て、先四面を圍ぬる漢の兵百萬餘騎を懸破り、烏江と云川の邊に打出給ひ、自涙を抑て、其兵に語て曰、吾兵を起してより以來、八箇年の戰に、自逢事七十餘戰、當る所は必破る、擊つ所は皆服す。未嘗より一度も不敗北、遂に覇として天下を有てり。然共今勢盡力衰て、漢の爲に被亡ぬる事、全非戰罪、唯天我を亡す者也。故に今日の戰に、我必快く三度打勝て、而も漢の大將の首を取、其旗を靡かして、誠に我言處不誤事を、汝等に知すべしとて、二十八騎を四手に分、漢の兵百萬騎を、四方に受て控た

鴆毒—鴆といふ鳥の羽の毒を酒中に入れて飲ましむる也

願は我首を刎て、市朝に被ㇾ曝歟。不ㇾ然鴆毒を賜て死を早せんと請ければ、項王彌瞋て鴆毒を呑せらる。范增鴆を呑て後、未三日を不ㇾ過、血を吐てこそ死にけれ。楚漢相戰て已に八箇年、自相當る事、七十餘度に及ぶまで、天下楚を背といへ共、項羽度ごとに勝に乘し事は、唯楚の兵の猛く勇めるのみに非ず、范增謀を出して、民をはぐくみ、士を勇め、敵の氣を察し、勞せる兵を助け、化を普く施して、人の心を和せし故也。されば范增死を賜し後、諸侯悉楚を負て、漢に屬する者甚多し。漢楚共に滎陽の東に至て、久く相支へたる時に、漢は兵盛に食多して、楚は兵疲れ食絶ぬ。此時漢の陸賈を楚に使して曰、今日より後は、天下を中分して、鴻溝より西をば漢とし、東をば楚とせんと和を請給ふに、項王悅て其約を堅し給ふ。仍て先に生捕て戰の弱き時には、是を烹殺さんとせし漢王の父太公を赦して、漢へぞ送られける。軍勢皆萬歲を呼ふ。斯て楚は東に歸り、漢は西に歸らんとしける時、陳平張良共に漢王に申けるは、漢今天下の大半を有、諸侯皆附隨ふ。楚は兵罷て食盡たり。是天の楚を亡す時也。此時不ㇾ討、唯虎を養て自患を遺す者なるべし。漢王此諫に附て、即諸侯に約し、三百餘萬騎の勢にて、項王を追懸給ふ。項羽僅十萬騎の勢を以て、固陵に返し合

大牢の具―牛羊豕をそなへたる饗應

向ひ、目を瞋し、大音聲を揚て、汝何者なれば、我に向て弓を引んとはするぞと怒て、ちやうとにらむ。其勢に僻易して、さしもの樓煩目敢て物を不レ見、弓をも不レ引得、人馬共に振ひ戰て、漢王の陣へぞ逃入ける。漢王劍を蒙て、瘉るを待程に、其兵皆氣を失しかば、戰毎に楚勝に不レ乘と云事なし。是唯范增が謀より出て、漢王常に圍まれしかば、陳平、張良等如何にもして此范增を討んとぞ謀ける。或時項王の使者、漢王の方に來れり。陳平是に對面して、先酒を勸めんとしけるに、大牢の具を爲て、山海の珍を盡し、旨酒如レ泉湛て、沙金四萬斤、珠玉、綾羅、錦繡以下の重寶を、如レ山積上て、引出物にぞ置たりける。陳平が語る詞毎に、使者敢て不二心得一、默然として答る事無りける時に、陳平詐驚て、吾公を以て范增が使也と思て、密事を語つ。今項王の使なる事を知て、悔るに益なし。是命を傳る者の誤也と云て、樣々に積置ける引出物を皆取返し、大牢の具を取入て、却て飢口にだにも飽ぬべき惡食をぞ具へける。使者歸て此由を項王に語る。項王是より、范增が漢王と密議を謀て返忠をしけるよと疑て、是が權を奪て誅せん事を謀る。范增是を聞、一言も遂に不二陳謝一、天下の事大に定ぬ。君王自是を治め給へ。我已に年八十餘、命の中に君が亡んを見ん事も可レ悲。唯

項羽諸將云云—以下原本誤多し、神田本に據りて改む

いたづがはしく—わづらはしく

梃楚—笞杖

く、秦に入らば民を害し財を貪る事なかれと。項羽數月おくれて、秦に入し後、秦の宮室を燒き、驪山の塚を掘て、其寶玉を私にせり。其罪四。又降れる秦王子嬰を殺して、天下にはびこる。其罪五。詐て秦の子弟を、新安城の坑に埋て殺せる事二十萬。其罪六。項羽諸將を善地に王として、故主を逐討たり。叛逆是より起る。其罪七。懷王を彭城に移して、韓王の地を奪、并せて梁楚に王として、自天下を預り聞く。其罪八。項羽人をして懷王を江南に殺せり。其罪九。此九の罪は天下の指所、道路目を以てにくむ者也。大逆無道の甚しき事、天豈公を誡め刑せざらんや。何ぞいたづがはしく、項羽と獨身にして戰ふ事を致さん。公が力山を拔といへ共、我が義の天に合るには如じ。而らば刑餘の罪人をして、甲兵金革をすて、梃楚を製して、項羽を可二撃殺一と欺て、百萬の士卒、同音に箙を敲てどつと笑ふ。項羽大に怒て、自強弩を引て、漢王を射る。其矢河の面四町餘を射越して、漢王の前に控たる兵の、鎧の草摺より引敷の板の裏表四重をかけず射徹し、高祖の鎧の胸板に、くつまき責てぞ立たりける。漢の兵に樓煩と云けるは、强弓の矢繼早、馬の上の達者にて、三町四町が中の物をば、下針をも射る程の者也けるが、漢王の當の矢を射んとて、矢比過て懸出たりけるを、項羽自戟を持て立

關中―函谷關の中、帝都咸陽の所在地一帯をいふ

殺とぞ申ける。漢王是を聞て、大に咍て云、吾項羽と北面にして、命を懷王に受し時、兄弟たらん事を誓き。然れば吾父は卽汝が父也。今汝父を烹殺さば、幸に我に一杯の羹を分てと欺れければ、項王大に怒て、卽太公を殺さんとしけるを、項伯堅く諫ければ、よしさらば暫とて、太公を殺事をば止めてげり。漢楚久く相支て、未決勝負、丁壯は軍旅に苦み、老弱は轉漕に罷る。或時項羽自甲冑を著し、戈を取、一日に千里を走る騅と云馬に打乘て、唯一騎河の向の岸に控て宣けるは、天下の士卒戰に苦む事已に八箇年、是我と沛公と唯兩人を以ての故也。そゞろに四海の人民を惱さんよりは、我と沛公と獨身にして、雌雄を決すべしと招て、敵陣を睨でぞ立たりける。爰に漢皇帷幕の中より出て、項王をせめて宣けるは、夫項王自義無して、天罰を招く事其罪非一。始項羽と與に命を懷王に受し時、先入て關中を定めたらん者を、王とせんと云き。然を項羽忽に約を背て、我を蜀漢に主たらしむ、其罪一。宋義、懷王の命を受て、卿子冠軍となる處に、項羽猥に其帷幕に入て、自卿子冠軍の首を斬て、懷王我をして是を誅せしめたりと僞て、令を軍中に出す。其罪二。項羽趙を救て戰利有し時、還て懷王に不報、境內の兵を掠て、自關に入る。其罪三。懷王堅く令すら

三匝—三重

ぞ加りける。漢の二年に項王城陽に至て、高祖の兵田榮と戰ふ。田榮が軍破て、降人に出ければ、其老弱婦女に至まで、二十萬人を土の穴に入て、埋て是を殺す。漢王又五十六萬人を卒して、彭城に入る。項羽自精兵三萬人を將て、胡陵にして戰ふ。高祖又打負ければ、楚則漢の兵十餘萬人を生虜て、彭水の淵にぞ沈ける。彭水爲レ之不レ流。高祖二度戰負て、靈壁の東に至る時、其勢纔に三百餘騎也。項王の兵三百萬騎、漢王を圍ぬる事三匝。漢可レ遁方も無りける處に、俄に風吹雨荒して、白日忽に夜よりも尙暗かりければ、高祖數十騎と共に、敵の圍を出て豐沛へ落給ふ。項王是を追て、沛郡へ押寄ければ、高祖の兵共爰に支へ彼に防で、討死する者二十餘人。沛郡の戰にも、又漢王打負給ければ、高祖の父太公、楚の兵に虜れて、項王の前に引出さる。漢王又周呂侯と蕭何が兵を幷せて二十萬餘騎、滎陽に到る。項王勝に乘て八十萬騎、彭城より押寄て相戰ふ。此時漢の戰纔に雖レ有レ利、項王更に物共せず。漢楚互に勢を振て、未重て不レ戰、共に廣武に張レ陣、河を隔てぞ居たりける。或時項王の陣に高き俎を作て、其上に漢王の父太公を置て、高祖に告て云、是沛公が父に非や。沛公今首を延て楚に降らば、太公と汝が命を助ん。沛公若楚に降らずば、急に太公を可レ烹

て帳中に入給へば、張良百餘騎を隨て、覇上に歸りぬ。沛公の軍門に到て、項王の方へ返忠しつる曹無傷を斬て、首を軍門に被懸。浩りし後は、沛公項王互に相見ゆる事なし。天下は唯項羽が成敗に隨て、賞罰共に明ならざりしかば、諸侯萬民諸共に、沛公が功の隱て、天下の主たらざる事をぞ悲ける。其後項羽と沛公と天下を爭ふ氣已に顯れて、國々の兵兩方に屬せしかば、漢楚二に分て、四海の亂無止時。沛公をば、漢の高祖と稱す。其手に屬する兵には、韓信、彭越、蕭何、曹參、陳平、張良、樊噲、周勃、鯨布、盧綰、張耳、王陵、劉賈、酈商、灌嬰、夏侯嬰、傅寬、劉敬、靳強、吳芮、酈食其、董公、紀信、轅生、周苛侯公、隨何、陸賈、魏無知、叔孫通、呂項、呂巨、呂靑、呂安、呂祿以下の呂氏三百餘人、都合其勢三十萬騎、高祖の方にぞ屬しける。楚の項羽は、元來代々將軍の家也ければ、相隨ふ兵八千人あり。其外今馳著ける兵には、櫟陽長史欣、都尉董翳、塞王司馬欣、魏王豹、瑕丘申陽、韓王成、殷王司馬卬、趙王歇、常山王張耳、義帝柱國共敖、遼東韓廣、燕將臧荼、田市、田都、田安、田榮、成安君陳餘、番君將梅鋗、雍王章邯、是は河北の戰破れて後、三十萬騎の勢にて、項羽に降て屬せしかば、項氏十七人、諸侯五十三人、都合其勢三百八十六萬騎、項王の方に

策を進め—馬に策をあてゝ急ぐなり

竪子—わらべ、罵りていふ語なり

レ歸事危に近し。是より急ぎ我陣へ歸らんと思ふが、不レ辭出ん事非レ禮、如何すべきと宣へば、樊噲、大行不レ顧二細謹一、大禮不二必辭讓一、如レ今人は方に爲二刀俎一、我は爲二魚肉一、何ぞ辭することをせんやとて、白璧一雙と、玉の卮一雙とを張良に與て留置き、驪山の下より、間道を經て、龍蹄に策を進め給へば、靳強、紀信、樊噲、夏侯嬰四人、自楯を挾み戈を採て、馬の前後に相隨ふ。其道二十餘里、嶮きを凌ぎ、絶たるを渡て、半時を不レ過、覇上の陣に行到りぬ。初沛公に隨し百餘騎の兵共は、猶項王の陣の前に竝居て、張良未鴻門にあれば、人皆沛公の歸給へるを不レ知。暫有て張良座に返て、謝して曰、沛公醉て杯を酌に不レ堪、退出し給ひ候つるが、臣良をして、謹で足下に獻レ之と被二申置一とて、先白璧一雙を奉て、再拜して王の前にぞ置たりける。項王白璧を受て、誠に天下の重寶也と感悦して、座上に置て自愛し給ふ事無レ類。其後張良又玉斗一雙を捧て、范增が前にぞ置たりける。范增大に忿て、玉斗を地に投、劍を拔て突摧き、項王をはたと睨て、唉豎子不レ足二與謀一、奪二項王之天下一者必沛公なるべし。奈何せん、吾屬今爲レ之虜とならん事。白璧は重寶也といへ共、豈天下に替んやとて、怒る眼に涙を流し、半時ばかりぞ立たりける。項王猶も范增が心を不レ悟、痛く醉

七尾―七頭
彘―豕に同じ

者ぞと問給へば、張良、沛公の兵に樊噲と申者にて候也とぞ答ける。項羽其時に居直て、是天下の勇士也。彼に酒を賜はんとて、一斗を盛る巵を召出して、樊噲が前におき、七尾許なる彘の肩を肴にとつて出されたり。樊噲楯を地に覆、劍を拔て、彘の肩を切て、少も不レ殘嚙食て、巵に酒をたぶ〳〵と受て、三度傾け、巵を閣て申けるは、夫秦王虎狼の心有て、人を殺し民を害する事無二休時一。天下依レ之秦を不レ背と云者なし。爰に沛公と項王と同く義兵を揚、無道の秦を亡して、天下を救はん爲に、義帝の御前にして、血をすゝりて約せし時、先秦を破て咸陽に入らん者を王とせんと云き。然るに今沛公、項王に先立て咸陽に入事數月、然共秋毫も敢て近附る所非ず、宮室を封閉して以て、項王の來給はん事を待。是豈沛公の非二仁義一乎。兵を遣して函谷關を守しめし事は、他の盗人の出入と、非常とに備へん爲也き。其功の高き事如レ此。未封侯の賞非ずして、剰有功の人を誅せんとす。是亡秦の惡を續で、自天の罰を招く者也と、少も不レ憚項王を睨て申せば、項王答ふるに言無して、唯首を低て赤面す。樊噲は加樣に思程云散して、張良が末坐に著。暫有て沛公廁に行眞似して、樊噲を招て出給ふ。潛に樊噲に向て、先に項莊が劍を拔て舞つる志、偏に吾を討んと謀る者也。座久して不

交戟の衛士—武裝の護衛兵

に劍を指かざして、沛公の前に立合たり。項伯彼等が氣色を見て、沛公を討せじと思ければ、我も共に可レ舞とて、同叉劍を拔て立。項莊南に向へば、項伯北に立。范增沛公に近附けば、項伯身を以て立隱す。依レ之樂已に徹んとするまで、沛公を討事不レ能。少し隙ある時に、張良門前に走出て、誰かあると見るに、樊噲つと走寄て、座中の體如何と問ければ、張良、事甚急也。今項莊劍を拔て舞ふ。其意常に沛公に在と答ければ、樊噲此已に喉に迫る也。速に入て沛公と同く命を失はんにはしかじとて、兜の緒を縮め、鐵の楯を挾て、軍門の内へ入らんとす。門の左右に交戟の衛士五百餘人、戈を支へ太刀を拔て、是を入れじとす。樊噲大に忿て、其楯を身に横へ、門の關の木七八本押折て、内へつと走入れば、倒るゝ扉に打倒され、鐵の楯につき倒されて、交戟の衛士五百人、地に伏して皆起あがらず。樊噲遂に軍門に入て、其帷幕を褰て目を瞋し、項王をはたと睨で立けるに、頭の髮上にあがりて、兜の鉢をおひ貫き、獅子のいかり毛の如く卷て、百千萬の星となる。眦逆に裂て、光百錬の鏡に血をそゝぎたるが如く、其長九尺七寸有て、忿れる鬼鬚左右に分れたるが、鎧突して立たる體、如何なる惡鬼羅刹も、是には過じとぞ見えたりける。項王是を見給て、自劍を拔懸て、跪て、汝何

帯たる所の太刀を云々—史記本紀には、擧ニ所レ佩玉玦一以示レ之者三

壽せよ—祝盃をさせよの意

萬死を秦の虎口に遁て、再會を楚の鴻門に遂んとは。而るに今佞人の讒に依て、臣項王と胡越の隔有らん事、豈可レ不レ悲乎と、首を著レ地宣へば、項羽誠に心解たる氣色にて、是沛公の左司馬曹無傷が告知せしに依て、頻に沛公を疑き。不レ然何以てか知事あらんと、忽に證人を顯して、誠に所存なげなる體、心淺くぞ見えたりける。項羽頻に沛公を留て、酒宴に及ぶ。項王と項伯とは東に嚮て坐し、范增は南に嚮たり。沛公は北に嚮て坐し、張良は西に嚮て侍り。范增は兼てより、沛公を討ん事、非ニ今日一ば何をか可レ期と思ければ、項羽を内へ入て、沛公と刺違へん爲に、帯たる所の太刀を挙て、三度まで目加しけれ共、項羽其心を不レ悟、唯默然としてぞ居たりける。范增則座を立て、項莊を呼て申けるは、我爲ニ項王一沛公を討んとすれ共、項王愚にして是を不レ悟。汝早席に歸て、沛公を壽せよ。沛公盃を傾ん時、我與レ汝劔を拔て舞ふ眞似をして、沛公を座中にして殺さん。而らずば、汝が輩遂に沛公が爲に亡されて、項王の天下を奪はれん事は、一年の中を不レ可レ出と、涙を流て申ければ、項莊一議に不レ及、則席に歸て、自酌を取て、沛公を壽す。沛公盃を傾る時、項莊、君王今沛公と飲酒す。軍中樂を不レ爲事久し。請臣等劔を拔て太平の曲を舞んとて、項莊劔を拔て立。范增も諸共

無爲ならんずる云々―何事もなきやうに

て、兄弟の交をなし、婚姻の義を約して、先事の無爲ならんずる樣を謀らんとて、項伯を帷幕の內へ呼給て、先旨酒を奉じ、自壽をなして宣けるは、初我と項王と約を成て、先咸陽に入らん者を王とせんと云き。我項王に先立て咸陽に入事七十餘日、而れ共約を以て、我れ天下に王たらん事を不ㇾ思、關に入て秋毫も敢て近附る處非ず、吏民を籍し、府庫を封じて、項王の來給はん日を待。是世の知る處也。兵を遣して函谷の關を守らせし事は、全く項王を防に非ず、他の盜人の出入と、非常とに備へん爲也き。願は公速に歸て、我が德に不ㇾ倍處を項王に語て、明日の戰を止給へ。我則旦日項王の陣に行て、自無ㇾ罪故を可ㇾ謝と宣ば、項伯則許諾して、馬に策ってぞ歸にける。項伯則項王の陣に行て、具に沛公の謝する處を申けるは、抑沛公先關中を破らざらましかば、項王今咸陽に入て、枕を高し食を安ずる事を得ましや。今天下の大功は併沛公にあり。而るに小人の讒を信じて、有ㇾ功人を討ん事大なる不義也。不ㇾ如沛公と交を深し、功を重じて、天下を鎭めんにはと、理を盡して申ければ、項羽けにもと心服して、顏色快く成にけり。暫あれば沛公百餘騎を隨て、項王に見ゆ。仍禮謝して曰、臣項王と力を勠て秦を攻し時、項王は河北に戰ひ、臣は河南に戰ふ。不ㇾ憶き、

ば、財を貪り美女を愛する心、尋常に超たりき。今咸陽に入て後、財をも不レ貪、美女をも不レ愛。是其志天下にある者也。我人を遣して、竊に彼陣中の體を見するに、旗の文に龍虎を書けり。是天子の氣に非や。速に沛公を不レ討ば、必天下爲二沛公可レ被レ傾と申ければ、項羽げにもと聞ながら、我勢の强大なるを憑て、何程の事か可レ有と、思侮てぞ居たりける。斯る處に、沛公が臣下に、曹無傷と云ける者、潛に項羽の方へ人を遣して、沛公天下に王たらんとする由をぞ告たりける。項羽是を聞て、此上は無レ疑とて、四十萬騎の兵共に命じて、夜明ば則沛公の陣へ寄せ、一人も不レ餘可レ討とぞ下知しける。爰に項羽が季父に、項伯と云ける人、昔より張良と知音也ければ、此事を告知せて落さばやと思ける間、急ぎ沛公の陣へ行向ひ、張良を呼出して、事の體已に急也。今夜急ぎ逃去て、命計を助かれとぞ教訓したりける。張良元來義を重じて、節に臨む時、命を思ふ事塵芥よりも輕ぜし者也ければ、何故か事の急なるに當て、高祖を捨て可二逃去一とて、項伯が云處を沛公に告ぐ。沛公大に驚て、抑我兵を以て項羽と戰ん事、勝負可レ依レ運やと問給へば、張良暫案じて、漢の兵は十萬騎、楚は是四十萬騎也。平野にて戰はんに、漢勝事を難レ得とぞ答ける。沛公、さらば我項伯を呼

て、項羽を入ず。項羽大に怒て、當陽君に二十萬騎の兵を差副、函谷關を打破て、咸陽宮に入にけり。則降れる子嬰皇帝を殺奉て、咸陽宮に火を懸たれば、方三百七十里に作並たる宮殿樓閣、一宇も不レ殘、三月まで火不レ消、驪山の神陵忽に灰塵と成こそ悲しけれ。此神陵と申は、秦始皇帝崩御成し時、はかなくも人間の富貴を冥途まで御身に從へんと思して、樓殿を作營き、山川をかざりなせり。天には金銀を以て月日を十丈に鑄させて懸け、地には江海を形取て銀水を百里に流せり。人魚の油十萬石、銀の御錠に入て、長時に燈を挑たれば、石壁暗しといへ共、青天白日の如也。此中に三公已下の千官六千人、宮門守護の兵一萬人、後宮の美人三千人、樂府の妓女三百人、皆生ながら神陵の土に埋て、苔の下にぞ朽にける。始作レ俑人無レ後乎と、文宣王の誡しも、今こそ思知れたれ。始皇帝如レ此執覺て、樣々の詔を被レ殘神陵なれば、さこそは其妄執も留給らんに、項羽無レ情是を掘崩して、殿閣悉燒掃しかば、九泉の寶玉一度人間に返こそ哀なれ。此時項羽が兵は四十萬騎、新豐の鴻門にあり。沛公が兵十萬騎、咸陽の覇上にあり。其間相去事三十里、沛公項羽に未二相見一。於是范增といへるは、項羽が老臣、項羽に口說て云けるは、沛公沛郡に有し時、其振舞を見しか

千官—異本高官に作る

始作俑云々—孟子梁惠王上篇に見ゆ、俑は木偶なり

文宣王—孔子の謚

レ羊立以爲二楚懷王一とあり

に鉅鹿に至る時、秦の左將軍章邯百萬騎にて相待ける間、項羽自二十萬騎にて河を渡て後、船を沈め、釜甑を破て、廬舍を燒。是は敵大勢にて御方小勢也。一人も生ては不レ返と、心を一にして不レ戰は、千に一も勝事非じと思故に、思切たる心中を、士卒に爲レ令レ知也。於レ是秦の將軍と九たび遇て百たび戰、忽に秦の副將軍蘇角を討て、王離を生虜しかば、討るゝ秦の兵四十餘萬人、章邯重て戰ふ事を不レ得、終に項羽に降て、還て秦をぞ攻たりける。項羽又新安城の戰に打勝て、首を斬事二十萬、凡て項羽が向ふ處、不レ破云事なく、攻る城は不レ落云事無りしか共、至所ごとに美女を愛し、酒に淫し、財を貪り、地を屠しかば、路次に數月の滯有て、未都へは不二攻入一。漢の元年十一月に、函谷關にぞ著にける。沛公は無勢にして、而も道難處を經しか共、民を憐み人を撫する心深して、財をも不レ貪、人をも不レ殺しかば、支て防ぐ城もなく、不レ降云敵もなく、道開けて事安かりしかば、項羽に三月先立て、咸陽宮へ入にけり。而共沛公志天下に有しかば、秦の宮室をも不レ燒、驪山の寶玉をも不レ散、剰降れる秦の子嬰を守護し奉て、天下の約を定めん爲に、還て函谷へ兵を差遣し、項羽を咸陽へ入立じと、關の戸を堅く閉たりける。數月有て項羽咸陽へ入らんとするに、沛公の兵函谷の關を閉

嚙臍無益—悔ゆともかひなし

北畠准后禪閤—親房、禪閤は須らく禪門とあるべき也

孫心—史記に、孫心民間爲レ人牧

らん事を請ふ、是天の與る處也。乘レ時是を不レ誅、後の禍嚙レ臍無レ益。唯速に討手を差遣て、首を禁門の前に可レ被レ曝とこそ存候へと被レ申ける。次に二條關白左大臣殿、暫思案して被レ仰けるは、張良が三略の詞に、推レ惠施レ恩士力日新、戰如二風發一といへり。是已謝レ罪者は忠貞不レ懈、誠以盡レ事、却て無二貳心一故也。されば章邯楚に降て秦忽に破れ、管仲許レ罪齊治る事、尤今の世に可レ爲二指南一。直義入道御方に參る程ならば、君天下を保せ給はん事、萬歲是より可レ始。唯元弘の舊功を不レ被レ捨、官職に復して、被二召使一より外の議は非じとこそ覺え候へと、異議區にこそ被レ申けれ。諫臣兩人の異議、得失互に備ふ、是非難レ分、君も叡慮を被レ傾、末座の諸卿も、言を出さで良久ある處に、北畠准后禪閤喩を引て被レ申けるは、昔秦代已に傾かんとせし時、沛公は沛郡より起り、項羽は楚より起る。六國の諸侯の秦を背く者、彼將に附從しかば、共に其威漸振て、沛公が兵十萬餘騎、漢の濮陽の東に軍だちし、項羽が勢は四十萬騎、定陶を攻て、雍丘の西に至る。沛公、項羽相共に、古の楚王の末孫心と云し人、民間に下て、羊を牧しを取立て、義帝と號し、其御前にて、先咸陽に入て秦を亡したるらん者、必天下に王たるべしと約諾して、東西に分れて攻上る。斯て項羽已

乾臨―天子の照臨

負荊―荊は楚、楚を負ひて罪を受くる意

奉掠天聽―天子を欺き奉る

は、

元弘始、先朝爲逆臣被遷皇居於西海、宸襟被惱候時、雖有應勅命起義兵輩、或爲敵被圍、或戰負屈機、空志處、慧源苟勸尊氏卿、企上洛、應勅決戰、歸天下於一統皇化候事、乾臨定被殘叡感候歟。其後依義貞等讒、無罪罷成勅勘之身、君臣空隔胡越之地、一類悉殘朝敵名候、歎有餘處也。臣罪雖誠重、天恩不咎往、負荊下被免其咎、則蒙勅免綸言、靜四海之逆亂、可戴聖朝之安泰候。此旨内々得御意、可令奏聞給候。恐惶謹言。

十二月九日　沙彌慧源

進上　四條大納言殿

と委細の書狀を捧て、降參の由をぞ被申ける。則諸卿參內して、此事如何可有と、僉議ありけるに、先洞院左大將實世公被申けるは、直義入道が申處、甚以僞れり。相傳譜代の家人、師直師泰が爲に都を被追出、身の措處なき間、聊借天威、己爲達宿意、奉掠天聽者也。二十餘年の間、一人を始進せて、百司千官、悉望鳳闕之雲、空鎩飛鳥之翅事、併直義入道が不依惡逆乎。而今幸に軍門に降

知る所となりしなどいふ
何樣天氣云云—何樣院宣を蒙らではの意
斑鳩宮—聖德太子

達とて、先京都へ人を上せ、院宣を伺申されければ、無二仔細一軈て被レ宣下一、剩不レ望二鎭守府將軍一に被レ補。其詞云、

被二院宣一稱、斑鳩宮之誅二守屋一、朱雀院之戮二將門一、是皆非下捨レ惡持レ善之聖猷上哉。爰退二治凶徒一、欲レ息二父叔兩將之鬱念一、叡感甚不レ少。仍補二鎭守府將軍一、被レ任二左兵衞督一畢。早率二九國二島竝五畿七道之軍勢一、企二上洛一、可レ令レ守二護天下一者、依二院宣一執達如レ件。

觀應元年十月二十五日　　權中納言國俊奉

足利左兵衞督殿

○慧源禪巷南方合體事 附漢楚合戰事

左兵衞督入道、都をば、仁木、細川、高家の一族共に背かれて、浮れ出ぬ。大和、河内、和泉、紀伊國は、皆吉野の王命に從て、今更武家に可レ附二從一共不レ見ければ、澳にも不レ著、磯にも離たる心地して、進退歩を失へり。越智伊賀守、角ては何樣難儀なるべしと覺候。唯吉野殿の御方へ御參候て、先非を改め、後榮を期する御謀を可レ被レ廻とこそ存候へと申ければ。尤此議可レ然とて、軈て專使を以て、吉野殿へ被レ奏二達一ける

隱れたる云云—その蹤跡遂に人の

人に與し奉べき。首を獄門の木に曝し、尸を匹夫の鏃に止め給はん事、三日が内を不レ可レ出。其上將軍御進發の事、已に諸國へ日を定て觸遣しぬ。相圖相違せば、事の煩多かるべし。暫も非レ可ニ逗留一處上とて、十月十三日の早旦に、師直遂に都を立て、將軍を先立奉り、路次の軍勢驅具して、十一月十九日に、備前の福岡に著給ふ。爰にて四國中國の勢を待けれ共、海上は波風荒て船も不レ通、山陰道は雪降積て、馬の蹄も立ざれば馳參る勢不レ多。さては年明てこそ筑紫へは向はめとて、將軍備前の福岡にて、徒に日をぞ送られける。

○自ニ持明院殿一被レ成ニ院宣一事

左兵衛督入道慧源は、師直が西國へ下らんとしける比ほひ、潛に殺し可レ奉企有と聞えしかば、爲レ遁ニ其死一、忍で先大和國へ落て、越智伊賀守を憑まれたりければ、近邊の郷民共、同心に合力して、路々を切塞ぎ、四方に關を居て、誠に貳心なげにぞ見えたりける。後一日有て、石堂右馬助賴房以下、少々志を存る舊好の人々馳參ければ、早隱れたる氣色もなし。其聞え都鄙の間に區也。何樣天氣ならでは、私の本意を難

その方様の人々—直義が家の人をいふ

こと〴〵し—仰山なりとの意

及給ニ都の警固には、宰相中將義詮を殘置奉て、十月十三日征夷大將軍正二位大納言源尊氏卿、執事武藏守師直を召具し、八千餘騎の勢を率し、兵衛佐直冬爲ニ誅罰一とて、先中國へとぞ急ぎ給ける。

○錦小路殿落ニ南方一事

將軍、已に明日西國へ可レ被レ立と聞えける其夜、左兵衛督入道慧源は、石堂右馬助賴房計を召具して、いづち共不レ知落給にけり。是を聞て、世の危を思ふ人、すはや天下の亂出來ぬるは、高家の一類今に滅んとぞさゝやきける。事の樣を知らぬ其方樣の人々女性なんどは、穴淺ましや、こはいかに成ぬる世の中ぞや。御供に參たる人もなし。御馬も皆厩に繫れたり。徒跣にては、何へか一足も落させ給ふべき。是は唯武藏守の計として、今夜忍やかに奉レ殺者也と、聲も不レ惜泣悲む。仁木細川の人々も、執事の屋形に馳集て、錦小路殿落させ給て候事、後の禍不レ遠と覺候へば、暫都に御逗留有て、在所をも能々可レ被レ尋や候らんと被レ申ければ、師直穴こと〴〵し。縱如何なる吉野十津河の奧、鬼海高麗の方へ落給たり共、師直が世にあらん程は、誰か其

二島—壹岐對馬

上樣—尊氏を尊敬していへる語

居し給ふ處に、宅磨別當太郎守直、與力同心して國中を驅催す間、御方に志を通ずる族有といへども、其責に不堪して、悉附從はずと云者なし。然間河尻が勢如雲霞成て、宇都宮三河守が城を圍むに、一日一夜合戰して、討るゝ者百餘人、創を蒙る兵不知數。遂に三河守城を被攻落、未死生の境を不知分。宅磨、河尻彌大勢に成て、鹿子木大炊助を取卷く間、後攻の爲に、小貳が代官宗利近國を相催すといへ共、九國二島の兵共、大半兵衛佐殿に心を通ずる間、催促に從ふ輩多からず、事已に及難儀候。急ぎ御勢を被下べしとぞ申ける。將軍此註進に驚て、さても誰をか討手に可下と、執事武藏守に問給ければ、師直遠國の亂を鎭めんが爲には、末々の御一族、乃至師直なんどこそ可罷下にて候へ共、是はいかにも上樣の自御下候て、御退治なくては叶まじきにて候。其故は九國の者共が、兵衛佐殿に、奉附事は、唯將軍の君達にて御座候へば、内々御志を被通事や候はんと存ずる者にて候也。天下の人、案に相違して、直に御退治の御合戰候はゞ、誰か父子の確執に、天の罰を顧ぬ者候べき。將軍の御旗下にて、師直命を輕ずる程ならば、九國中國悉御敵に與すと云共、何の恐か候べき。唯夜を日に繼で御下候へと、强に勸め申ければ、將軍一議にも不

力攻に攻る ー力づくにて攻むる

て死にけり。其外四十餘人有ける者共は、一防も不レ防、青杉城へ落て行。熊狩しつる兵共は、熊をも不レ追、跡へも不レ歸、散々に成てぞ落行ける。憑切たる鼓崎城を被レ落のみならず、佐和善四郎忽に討れにければ、外二つの城も、皆一日有て落にけり。兵伏レ野飛雁亂レ行と云兵書の詞を知ましかば、熊故に城をば落されじと、世の嘲に成にけり。其後越後守、石見勢を相從て、國中へ打出たるに、攻られては落得じとや思けん、石見國中に、三十二箇所有ける城共、皆聞落して、今は唯三角入道が籠たる三隅一つぞ殘ける。此城山嶮く用心深ければ、縦力攻に攻る事こそ不レ叶共、扱の兵も近國になし、知行の所領も無ければ、何までか怺て城にもたまるべき。唯四方の峯々に向城を取て、二年三年にも攻落せとて、寄手の構密しければ、城中の兵氣たゆみて無レ憑方ぞ覺ける。

○直冬朝臣蜂起事　附將軍御進發事

中國は大略靜謐の體なれ共、九州又蜂起しければ、九月二十九日、肥後國より都へ早馬を立て註進しけるは、兵衛佐直冬、去月十三日當國に下著有て、河尻肥後守幸俊が館に

心きゝ—心利きにて、敏捷なるをいふ

なじかは—いかでか

郎、二十七人をぞすぐりたる。是等は皆一騎當千の兵にて、心きゝ夜討に馴たる者共也とは云ながら、敵千餘人籠て、用心密しき城共を可レ落とは不レ見けり。八月二十五日の宵の間に、えいや聲を出して、先立人を待調へさせ、筒の火を見せて、さがる勢を進ませて、城の後なる自二深山一、這々忍寄て、薄苅萱篠竹なんどを切て、鎧のさね頭、兜の鉢附の板にひしと差て、探竿影草に身を隱し、鼓崎の切岸の下、巖の陰にぞ伏たりける。かるも搔たる臥猪、朽木のうつぼなる荒熊共、人影に驚て、城の前なる篠原を二三十つれてぞ、落たりける。城中の兵共、始は夜討の入よと心得て、櫓々に兵共弦音して、抛續松塀より外へ投出投出、靜返て見えけるが、夜討にては無て、後の山より熊の落て通けるぞ、止よ殿原と呼はりければ、我先に射て取らんと、弓押張靱搔著搔著、三百餘騎の兵共、落行熊の跡を追て、遙なる麓へ下ければ、城に殘る兵纔に五十餘人に成にけり。夜は既に明ぬ。木戸は皆開たり。なじかは少しも可二擬議一、二十七人の者共、打物の鞘を迦して打入。城の本人佐和善四郎竝郎等三人、腹卷取て肩に投懸、城戸口に下合て、一足も不レ引戰けるが、善四郎膝口切れて、犬居に伏せば、郎等三人前に立塞ぎ、暫支て討死す。其間に佐和善四郎は、己が役所に走入、火を懸て腹搔切

さかうて―境ひて

手柄の者―豪のものにおなじ

勢に攻立られて、敵皆城中へ引入れば、寄手皆逆茂木の際まで攻寄て、垣楯かいてぞ居たりける。手合の合戰に打勝て、敵を城へは追籠たれ共、城の構密しく、岸高く切立たれば、可二打入一便もなく、可二攻落一様もなし。唯徒に塀を隔て、垣楯をさかうて、矢軍に日をぞ送ける。或時寄手の三吉一揆の中に、日來より手柄を顯したる兵共三四人寄合て、評定しけるは、城の體を見るに、如レ今攻ば、御方は兵粮につまりて不レ怺共、敵の軍に負て落る事は不レ可レ有。其上備中、備後、安藝、周防の間に、兵衛佐殿に心を通ずる者多しと聞ゆれば、後に敵の出來らんずる事無レ疑。前には數十箇所の城一つも落さで、後には又敵道を塞ぬと聞なば、如何なる樊噲張良ともいへ、片時も不レ可レ怺。いざや事の難儀に成ぬ前に、此城を夜討に落して、敵に氣を失はせ、宰相殿に力を附進せんと申ければ、此議尤可レ然。さらば手柄の者共を集よとて、六千餘騎の兵の中より、世に勝たる剛の者をえり出すに、足立五郎左衛門、子息又五郎、杉田彈正左衛門尉、後藤左衛門藏人種則、同兵庫允泰則、熊井五郎左衛門尉政成、山口新左衛門尉、城所藤五、村上新三郎、同彌二郎、神田八郎、奴可源五、小原平四郎、織田小次郎、井上源四郎、瓜生源左衛門、富田孫四郎、大庭孫三郎、山田又次郎、甕次郎左衛門、那珂彥五

早りのまゝに―心のはやるにまかせて

供御の瀬―宇治川の上流

で、何か渡さましと見るに、深山の雲を分て流出たる河なれば、松柏影を浸て、青山も如レ動、石岩流を徹て、白雪の飜へるに相似たり。案内も知ぬ立河を、早りの儘に渡し懸て、水に溺て亡びなば、猛く共何の益かあらん。日已に晩に及ぬ。夜にいらば水練の者共を數多入て、瀬蹈を能々せさせて後、明日可レ渡と評定有て、馬を控たる處に、森小太郎、高橋九郎左衛門、三百餘騎にて、一陣に進だりけるが申けるは、足利又太郎が治承に宇治河を渡し、柴田橘六が承久に供御の瀬を渡したりしも、何れか瀬蹈をせさせて候し。思ふに是が渡にてあればこそ、渡さん所を防んとて、敵は向に控たるらめ。此河の案内者我に勝たる人不レ可レ有。つゞけや殿原とて、唯二騎眞先に進で渡せば、二人が郎等三百餘騎、三吉の一族二百餘騎、一度に颯と馬を打入て、弓の本弭末弭取違、疋馬に流をせき上て、向の岸へぞ懸上たる。善四郎が兵、暫支て戰けるが、散々に懸立られて、後なる城へ引退く。寄手彌勝に乘て、續て城へ懸入んとす。三の城より木戸を開て、同時に打出て、前後左右より取籠て、散々に射る。森、高橋、三吉が兵百餘人、痛手を負、石弓に被レ打、進兼たるを見て、越後守、三吉討すな。あれつゞけと被二下知一ければ、山口七郎左衛門、赤旗小旗大旗の一揆、千餘騎抜連て懸る。新手の大

の御意より事興て被成御教書に非ずと、人皆推量を廻しければ、後の禍を顧て奉討とする人も無りけり。斯處に太宰少貳頼尚如何思けん、此兵衛佐殿を聟に取て、己が館に奉置ければ、筑紫九國の外も、隨其催促重彼命人多かりけり。是に依て宮方將軍方兵衛佐殿方とて、國々三に分しかば、世中の忩劇彌無休時、唯漢の代傾て後、吳魏蜀の三國鼎の如くに峙て、互に二を亡さんとせし戰國の始に相似たり。

○三角入道謀叛事

爰に石見國住人三角入道、兵衛佐直冬の隨下知、國中を打從へ、庄園を掠領し、逆威を恣にすと聞ければ、事の大に成ぬ前に退治すべしとて、越後守師泰、六月二十日都を立て、路次の軍勢を率し、石見國へ發向す。七月二十七日の暮程に、江河へ打臨み、遙に敵陣を見渡せば、是ぞ聞ゆる佐和善四郎が楯籠たる城よと覺て、青杉、丸屋、鼓崎とて、間四五町を隔たる城三つ、三壺の如く峙て、麓に大河流たり。城より下向たる敵三百餘騎、河より向に控て、こゝを渡せやとぞ招たる。寄手二萬餘騎、皆河端に打莅

太平記　巻第二十八

○義詮朝臣御政務事

貞和六年二月二十七日に改元有て、觀應に移る。去年八月十四日に、武藏守師直、越後守師泰等、將軍の御屋形を打圍て、上杉伊豆守、畠山大藏少輔を攻出し、配所にて死罪に行たりし後、左兵衛督直義卿出家して、隱遁の體に成給しかば、將軍の嫡男宰相中將義詮、同十月二十三日鎌倉より上洛有て、天下の政道を執行ひ給ふ。雖レ然萬事唯師直師泰が計にて有しかば、高家の人々の權勢、恰魯哀公に季桓子が威を振ひ、唐玄宗に楊國忠が驕を究めしに不レ異。

○太宰少貳奉レ聟二直冬一事

右兵衛佐直冬は、去年の九月に備後を落て、河尻肥後守幸俊が許に坐けるを、可レ奉レ討由自二將軍一御敎書を被レ成たりけれ共、是は唯武藏守師直が申沙汰する處也。誠に將軍

魯の哀公―字は蔣、定公の子なり
季桓子―字は斯、魯の大夫平子が子なり

緇素—緇は出家、素は俗なり
兩院—光嚴光明の兩院

不レ及、相國内辨に定り給けり。外辨は三條坊門源大納言家信、高倉宰相廣道、冷泉宰相經隆也。左の侍從は、花山院宰相中將家賢、右の侍從は、菊亭三位中將公眞也。御卽位の大禮は、四海の經營にて、緇素の壯觀可レ比事無れば、遠近踵を繼で群をなす。兩院も御見物の爲に御幸成て、外辨の幄の西南の門外に御車を被レ立。天子諸卿冕服を著し、諸衛諸陣大儀を服す。四神の幡を塀に立て、諸衛鼓を陣に振る。紅旗卷レ風畫龍揚、王幡映レ日文鳳翔、秦阿房宮にも不レ異、吳の姑蘇臺も斯やと覺て、末代と乍レ云、斯る大儀を被ニ執行一事、難レ有かりし樣也。此日如何なる日ぞや、貞和五年十二月二十六日、天子登壇卽位して、數度の大禮事ゆゑなく被レ行しかば、今年は目出度暮にけり。

公賢―原本公資に作る異本に據て改む

求給けるを、年來知識に被レ憑たりける聖、兎角止め教訓して、往生院の道場にて、髪剃落し奉て、亡跡を訪外は、更に事なしとぞ聞えし。加樣に萬成ぬれば、天下の政道、併武家の執事の手に落て、今に亂ぬとぞ見えたりける。

○大嘗會事

去程に年內頓て大禮可レ有と、重て評定せられけり。當年三月七日に可レ行と沙汰有しか共、大儀不ニ事行一乍レ去さのみ延引如何とて、可レ被ニ果遂一にぞ定りける。夫大禮と申は、大內回祿の後は、代々の流例として、大極殿の儀式を被レ移て、太政官廳にて、是を被レ行。內辨は洞院太政大臣公賢公とぞ聞えし。卽位の內辨を、大相國勤仕の事先蹤邂逅なり、或は不快也と、僉議區也しを、勸修寺大納言經顯卿進で被レ申けるは、相國の內辨の先例兩度也、保安久壽の兩主也。保安は誠に凶例とも云つべし、久壽は又佳例なれば、彼先規を爭か可レ被レ嫌。其上今の相國は、時に當る職に達し、世に聞たる才幹なり。されば、君主も義を訪、政道を諮給へば、一人師範共身に當れり。諸家も禮を學、和漢の鑒と仰て、四海の儀刑、人に恥ずと被レ申しかば、皆閉口して是非の沙汰にも

> 些寸延びて―普通のものより少し長きをいふ

居、波羅密の邊に居たる溢者共、太鼓を鳴し鐘を撞て、落人あり打止よと騷動す。上杉畠山是に驚て、一足も前へ落延んと倒れふためきて、足羽渡へ行著たれば、川の橋を引はづして、足羽藤島の者共、川向に楯を一面に衝雙たり。さらば跡へ歸、八木をこそ憑まめと、憂かりし江守へ立歸れば、又淺生水の橋をはねはづして、跡にも敵充滿たり。唯つかれの鳥の、犬と鷹とに攻らるらんも、斯やと思ひしられたり。是までも主の先途を見はてんと、附從たりける若黨十三人、主の自害を勸めん爲、押膚脫で、一度に腹をぞ切たりける。畠山大藏少輔つゞいて腹搔切、其刀を引拔て、上杉伊豆守の前に投遣、御腰刀は、些寸延て見え候。是にて御自害候へと云もはてず、うつぶしに成て倒れにけり。伊豆守其刀を手に取ながら、幾程ならぬ憂世の名殘惜かねて、女房の方をつく〴〵と見て、袖を顏に押あて、唯さめ〴〵と泣居たる計にて、坐に時をぞ移されける。去程に八木光勝が中間共に生捕られて、被刺殺けることそうたてけれ。武士たる人は、平生の振舞は、よしや兎も角もあれ、强見る處に非ず、唯最後の死樣をこそ執する事なるに、蓬くも見え給つる死場哉と、爪彈せぬ人も無りけり。女房は年比日來のなじみ、昨日今日の情の色、いつ忘るべしとも不覺と、泣悲て、其淵瀨に身をも沈めんと、人目の隙を

三葉四葉―古今集の序に、この殿はむべもとみけりさき草の三葉四葉に殿づくりせり

下知しける。光勝元は上杉が下知に隨者也けるが、武藏守に被語て、俄に心變じければ、八月廿四日の夜半許に、伊豆守の配所、江守庄へ行て、昨日の暮程に、高辨定信の大勢にて當國の府に著て候を、何事やらんと內々相尋て候へば、旁を討進せん爲に、下て候なる。加樣にて御座候ては、爭か叶はせ給候べき。今夜急ぎ夜に紛て、落させ給て、越中越後の間に立忍ばせ給て、將軍へ事の仔細を申入させ給候はゞ、師直等は忽に蒙御勘氣、御身の罪は輕成て、などか歸參の御事無るべき。警固の兵共にも、道の程の御怖畏候まじ。唯はや討手の近附候はぬさきに、落させ給ひ候へと、誠に貳心なげに申ければ、出拔とは夢にも知給はず、取物も不取敢、女房少き人々まで、皆引具して上下五十三人、步跣なる有樣にて、加賀の方へぞ被落ける。時しもこそあれ、霰交に降る時雨、面を打が如くにて、僅に細き田面の道、上は氷れる馬さくり、蹈ば深泥膝にあがる。蓑もなく、笠も著ざれば、膚までぬれ徹り、手龜り足寒たるに、男は女の手を引、親は少き子を負て、何を可落著處とも不知、唯跡より討手や懸らんと、怖ろしき儘に落行心中こそ哀なれ。八木光勝兼て近邊に觸廻り、上杉畠山の人々、流人の身として、落て行事あらば、無是非皆討止よと申間、江守、淺生水、八代庄、安

手向山紅葉の錦神のまにまに

淺茅色附野―柿本人麿の歌、矢田の野にあさぢ色つくあらち山みねのあは雪寒くぞあるらむ

蝸牛の角の上云々―白樂天が對酒と題する詩に蝸牛角上爭二何事一石火光中寄二此身一云々

を、辨才天の續給し、竹生島よと望見て、暫法施を奉る。燒ぬ鹽津を過行ば、思ひ越路の秋の風、音は荒血の山越て、淺茅色附野を行ば、末こそしらぬ梓弓、敦賀津にも身を寄て、袖にや浪の懸らん。嚴く守る武士の、矢田野は何、歸山、名をのみ聞る甲斐もなし。治承の亂に籠けん、火打城を見上れば、蝸牛の角の上三千界、石火の光の中一刹那、哀あだなる憂世哉と、今更驚許也。無常の虎の身を責る、上野原を過行ば、今は我ゆゑさわがしき、月の鼠の根をかぶる、壁草のいつまでか、露の命の懸るべき。とても可レ消水の泡の、流留る處とて、江守庄にぞ著にける。當國の守護代細川刑部大輔八木光勝是を請取て、淺ましげなる柴の庵の、しばしも如何栖れんと、見るだに物憂住居なるに、警固を居てぞ置れたりける。痛哉、都にてはさしも氣高かりし薄檜皮の屋形の、三葉四葉に作雙て奇麗なるに、車馬門前に群集し、賓客堂上に充滿して、花やかにこそ住給しに、今は引替たる鄙の長途に、やすらふだにも悲きに、竹の編戸松の垣、時雨も風もたまらねば、袂の乾く隙もなし。されば如何なる宿業にてか、斯る憂目に逢らんと、乍レ我うらめしくて、あるも甲斐なき命なりけるを、猶も師直不足にや思けん、後の禍をも不レ顧、潛に討手を差下し、守護代八木光勝に云合せ、上杉畠山を可レ討とぞ

を見むとは

九廻の思―憂悶の情也司馬遷の書に、腸一日而九廻

王昭君―漢の孝元帝の時の宮女なり

紅葉ぞぬさ―菅公の歌、このたびはぬさも取りあへず

て、自此詩の奥に紙を繼で、六喩般若の眞文を寫して、彼追善にぞ被」擬ける。

○上杉畠山流罪死刑事

去程に上杉伊豆守重能、畠山大藏少輔直宗をば、所領を沒收し、宿所を破却して、共に越前國へ流遣されけり。此人々さりとも死罪に被」行までの事は、よも非じと憑れけるにや、暫の別を悲て、女房少き人々まで、皆伴て下給へ共、馴ぬ旅寢の床の露、おきふし袖をや濡すらん。日來より翫びし事なれば、旅の思を慰めんと、一面の琵琶を馬鞍にかけ、旅館の月に彈じ給へば、王昭君が胡角一聲霜後夢、漢宮萬里月前腸と、胡國の旅を悲しも、斯やと思知れたり。嵐の風に關越て、紅葉ぞぬさと手向山、暮行秋の別まで、身にしられたる哀にて、遁れぬ罪を身の上に、今は大津の東浦、濱の眞砂の數よりも、思へば多き歎哉。絶ぬ思を志賀浦、渚によする小波の、返るを見るも浦山敷、七座神を伏拜み、身の行末を祈ても、都に又も歸べき、事は堅田に引網の、目にもたまらぬ我涙、今津海津を過行ば、湖水の霧に峙て、波間に見えたる小島あり。是なりけり、都良香が古、三千世界は眼前に盡ぬと詠ぜしかば、十二因緣は心裡に空と云下句

強仕の齢―禮記に四十曰二強而仕一とあるより四十歳をいふ

香爐峯の雪―白居易が詩の結句に香爐峯雪撥レ簾看

夢かとぞ思ふ―伊勢物語業平の歌、忘れては夢かとぞおもふおもひきや雪ふみわけて君

未強仕の齢幾程も不レ過に、剃髪染衣の姿に歸し給し事、盛者必衰の理と作レ云、うたてかりける事共なり。斯しかば、天下の事綺し程こそあれ、今は大廈高墻の內に身を置き、輕羅褥茵の上に非レ可レ樂とて、錦小路堀川に幽閉閑疎の御住居、垣に苔むし、軒に松舊ぬるが、茅茨煙に籠て、夜の月朦朧たり。荻花風に戰で、暮の聲蕭疎たり。時遷事去て、人物古に非る事を感じ、蘿窻草屋の底に座來して、經卷を抛つ隙も無りけり。時しもあれ秋暮て、時雨がちなる冬闌ぬ。冷然しさまさる簾外には、香爐峯の雪も浦山敷、身の古はあだし世の、夢かとぞ思ふ思きや、雪蹈分し小野山、今更思ひしられつゝ、問人もがなと思へども、世の聞耳を憚て、事問人もなかりしに、獨清軒玄慧法印師直が許を得て、時々參つゝ、異國本朝の物語共して、慰奉けるが、老病に被レ犯て、不レ參得と申ければ、藥を一包送給ふとて、其裹紙に、

ながらへて問へとぞ思ふ君ならで今は伴ふ人もなき世に、

と有しかば、法印是を見て泣々、

感二君一日恩一、招二我百年魂一。扶レ病坐二床下一、披レ書拭二淚痕一。

と一首の小詩に、九廻の思を盡して奉る。其後無レ程法印身罷にけり。慧源禪巷哀に思

典廐―馬頭の唐名にて此には左馬頭義詮を指していふ

同十月十四日左馬頭鎌倉を立て、同二十二日に入洛し給けり。上洛の體由々敷見物也とて、粟田口四宮河原邊まで、棧敷を打て車を立、貴賤巷をぞ爭ける。師直以下の在京の大名、悉勢多まで參向す。東國の大名も、川越高坂を始として、大略送て上洛す。馬具足奇麗也しかば、誠に耳目を驚す。其美を盡し善を盡すも理哉、將軍の長男にて、直義の政務に替り、天下の權を執らん爲に、上洛ある事なれば、一涯珍らか也。今夜將軍の亭に著給へば、仙洞より勸修寺大納言經顯卿を勅使にて、典廐上洛の事を賀し仰らる。同二十六日、三條坊門高倉、直義朝臣の宿所へ被二移住一、頓て政務執行の沙汰始あり。目出かりし事共なり。

○直義朝臣隱遁事附玄慧法印末期事

去程に、直義は世の交を止、細川兵部大輔顯氏の錦小路堀川の宿所へ被レ移にけり。猶も師直師泰は、斯て始終御憤を被レ止まじければ、身の爲惡かるべしとて、偸に可レ奉レ失由、內々議すと聞えければ、其疑を散ぜん爲に、先世に望なく、御身を捨はてられたる心中を知せんとにや、貞和五年十二月八日、御歲四十二にして、御髮を落し給ける。

しらぬひの筑紫―日本紀に、景行天皇筑紫に下り給ひし時夜暗く御船つくべき便なかりしに忽ち火海上に無數つらなり光りて現はれしとあり、これより筑紫國へかけていふ也

り、富貴榮耀の門を開き、旨酒好會の席を舒べ、樂未ㇾ央しに、夢の間に引替て、心筑紫の落潮の、鳴戸に差て行船は、片帆は雲に遡り、煙水眼に茫々たり。萬里漂泊の愁一葉扁舟の浮思、浪馴衣袖朽て、涙忘るゝ許也。一年父尊氏、京都の軍に利無して、九州へ落給たりしが、無ニ幾程一歸洛の喜に成給し事、遠からぬ佳例也と、人々上には勇め共、行末も如何しらぬひの、筑紫に赴く旅なれば、無ニ爲方一ぞ見えたりける。九月十三夜、名におふ月明にして、旅泊の思も切なりければ、直冬、

梓弓我こそあらめ引連て、人にさへうき月を見せつる。

と詠じ給へば、袖を濡さぬ人はなし。

○左馬頭義詮上洛事

去程に三條殿は、師直師泰が憤猶深きに依て、天下の政務の事不ㇾ及ニ口入一。大樹は元來政務を謙讓し給へば、自關東左馬頭義詮を急ぎ上洛あらせて、直義に不ニ相替一、政道を申附、師直諸事を可ニ申沙汰一に定りにけり。此左馬頭と申すは、千壽王丸と申て、久く關東に居ゑ置れたりしが、今は器にあたるべしとて、權柄の爲に上洛あるとぞ聞えし。

浮雲の富貴ー論語に不義而富且貴於レ我如ニ浮雲一

手垂ー巧手

左兵衛督殿に政道綺はせ奉る事不レ可レ有、上杉畠山をば可レ被ニ遠流一と被レ許ければ、師直喜悦の眉を開き、圍を解て打歸る。次の朝驪妙吉侍者を召捕んと、人を遣しけるに、早先立て逐電しければ、行方も不レ知。財産は方々へ運取り、浮雲の富貴忽に夢のごとく成にけり。

○右兵衛佐直冬鎮西沒落事

斯りし後は、彌師直權威重く成て、三條殿方の人々は、面を低れ眉を顰む。中にも右兵衛佐直冬は、中國の探題にて、備後の鞆に御座けるを、師直近國の地頭御家人に相觸て、討奉れと申遣したりければ、同九月十三日、杉原又四郎二百餘騎にて押寄たり。俄の事なれば、可レ防兵も寡くて、直冬朝臣既に被レ誅給ぬべかりしを、礒部左近將監が若黨散々に防けるが、何れも究竟の手垂にて、志す矢所を不レ違射ける矢に、十六騎に手負せて、十三騎馬より倒に射て落したりければ、杉原少し痿で不ニ懸得一ければ、其間に右兵衛佐殿は、河尻肥後守幸俊が船に乘て、肥後國へぞ被レ落ける。志ある者は、小船に乘て追附奉る。此佐殿は武將の嫡家にて、中國の探題に被レ下て、人皆從靡奉

張本—發頭人

止て、忽に黄泉の下に、汝が運を可レ見と、唯一言の中に、若干の理を盡して被レ仰ければ、師直、いや〳〵是までの仰を可レ承とは不レ存、唯讒臣の申處を御承引候て、無レ故三條殿より、師直が一類亡さんとの御結構にて候間、其身の不レ誤處を申開き、讒者の張本を賜て、後人の惡習を懲さん爲に候とて、旗の手を一同に颯と下させ、楯を一面に進て、兩殿を圍奉り、御左右遲しとぞ責たりける。將軍彌腹を居兼て、累代の家人に被レ圍て、下手人被レ乞、出す例やある。よし〳〵天下の嘲に身を替て、討死せんとて、御小袖と云鎧取て被レ召ければ、堂上堂下に集たる兵、甲の緒をしめ色めき渡て、あはや天下の安否よと肝を冷ける處に、左兵衛督被レ宥申けるは、彼等奢侈の梟惡法に過るに依て、一旦可レ誡沙汰由相計を傳聞き、結句返て狼籍を企る事、當家の瑕瑾、武略の衰微、是に過たる事や候べき。併此禍は直義を恨たる處也。然を輕々敷家僕に對して、防戰の御手を被レ下事、口惜候べし。彼今讒者を指申す上は、師直が申請るに任せ、彼等を被二召出一事、何の痛か候べき。若猶豫の御返答あらんに、師直逆威を振ひ、忠義を忘れば、一家の武運此時輕して、天下の大變親りあるべしと、堅く制し被レ申しかば、將軍も諫言違處なしと思給ければ、師直が任二申請旨一、自レ今後は、

さすが―さうはあるもの〻

長講堂三寶院へ資財雜具を運び、僧俗男女東西に逃迷ふ。内裏も近ければ、軍勢事に觸て狼藉をも可レ致とて、俄に龍駕を被レ促、持明院殿へ行幸なる。攝籙大臣諸家の卿相、周章騷で馳參る。宮中の官女上達部徒歩にて逃ふためけば、八座、七辨、五位、六位、大吏、外記、悉階下庭上に立連、禁中變化の有樣は、目も不レ被レ當事共也。曆應より以來は、天下武家に歸し、世上も少し穩なりしに、去年楠正行亂を起せしか共、討死せしかば、彌無爲の世に成ぬと喜合處に、俄に此亂出來ぬれば、兎にも角にも治やらぬ世の中と、歎かぬ者こそ無りけれ。將軍も左兵衛督も、師直師泰縱押寄と云共、防戰に及ん事、返て恥辱なるべし。兵門前に防がば、御腹召るべしとて、小具足計にて閑り返て御座けり。師直師泰擬勢は是までなれ共、さすが押寄る事はなく、徒に時をぞ移ける。去程に須賀壹岐守を以て、師直が方へ被レ仰けるは、累祖義家朝臣天下の武將たりしより以來、汝が累祖當家累代の家僕として、未嘗て一日も主從の禮儀を不レ亂。而に以二一旦忿一、忘二餘身恩一、穩に不レ演二仔細一、大軍を起して東西に圍を成す。是縱尊氏を賤とす共、天の譴をば不レ可レ遁。心中に憤る事有らば、退て所存を可レ申。但讒者の眞僞に事を寄て、國家を奪んとの企ならば、再往の問答に不レ可レ及、白刃の前に我命を

事常篇に絶たり―事がらの常規を逸したること、尋常ならぬをいふ

備前守秀長、伊勢勘解由左衛門、設樂五郎兵衛尉、宇佐美三河三郎、清久左衛門次郎、富永孫四郎、寺尾新藏人、厚東駿河守、富樫介を始として、多田院御家人、常陸平氏、甲斐源氏、高家の一族は申に不ㇾ及、畿内近國の兵、芳志恩顧の輩、我も／＼と馳寄間、其勢無ㇾ程五萬餘騎、一條大路、今出川、轉法輪、柳辻、出雲路河原に至まで、無ㇾ透間ㇾ打込たる。將軍是に驚かせ給ひ、三條殿へ使を以て被ㇾ仰けるは、師直師泰過分の奢侈身に餘て、忽主從の禮を亂る。末代と乍ㇾ云事常篇に絶たり。此上は如何樣其へ寄る事も可ㇾ有。急ぎ是へ御渡候へ。一所にて安否を定めんと被ㇾ仰ければ、左兵衛督馳集たる兵共を召具して、將軍の御所、近衛東洞院へぞ御座ける。此事の樣を見て、不ㇾ叶とや思けん、初馳集たる兵共、五騎十騎落失て、師直の手にぞ加りける。されば宗徒の御一族、近習の輩、無二貳心一忠を存ずる兵、僅に千騎にも不ㇾ足けり。明れば八月十三日の卯刻に、武藏守師直、子息武藏五郎師夏、雲霞の兵を相率して、法成寺河原に打出て、二手にむづと押分て、將軍の御所の東北を、十重二十重に圍て、三度閧をぞ揚たりける。越後守師泰は、七千餘騎を引分て、西南の小路を立切、搦手にこそ廻けれ。四方より火を懸て、燒攻にすべしと聞えしかば、兵火の餘煙叵ㇾ遁とて、其近邊の卿相雲客の亭、

子
同頼直―源義家九代の孫師義の子
石橋和義―源義家九代の孫吉田三郎義博の子

通、佐々木豊前次郎左衛門尉顯清、里見藏人義宗、勝田能登守助清、狩野下野三郎、苑田美作守、波田野下野守、同因幡守、彌津小次郎、和久四郎左衛門尉、齋藤左衛門大夫利康、飯尾修理進入道、須賀壹岐守清秀、秋山新藏人朝政、島津四郎左衛門尉、是等を宗徒の兵として、都合其勢七千餘騎、轅門を固めて控たり。執事師直の屋形へ馳加る人人には、山名伊豆守時氏、今川五郎入道心省、同駿河守頼貞、吉良左近大夫將監貞經、大島讃岐守盛眞、仁木左京大夫頼章、舍弟越後守義長、同彈正少弼頼勝、桃井修理亮義盛、畠山宮内少輔國頼、細川相摸守清氏、土岐刑部大輔頼康、同明智次郎頼兼、同新藏人頼雄、佐々木佐渡判官秀綱、同四郎左衛門尉秀定、同近江四郎氏綱、佐々木大夫判官氏頼、舍弟四郎左衛門尉直綱、同五郎左衛門尉定詮、同大原判官時親、千葉介貞胤、宇都宮三河入道、武田伊豆前司信氏、小笠原兵庫助政長、逸見八郎信茂、大内民部大輔、結城小太郎、梶原河内守、佐竹掃部助師義、同和泉守、三浦遠江守行連、同駿河次郎左衛門、大友豐前太郎頼時、土肥美濃守高眞、土屋備前守範遠、安保肥前守忠眞、小田伊賀守、田中下總三郎、伴野出羽守長房、木村長門四郎、小幡左衛門尉、曾我左衛門尉、海老名尾張六郎季直、太平出羽守義尙、粟飯原下總守清胤、二階堂山城三郎行元、中條

回天の機―廻天倒日の機にて、勢壯大なる樣子をいふ

吉良滿義―源義家七代の孫貞義の子

石堂賴房―源義家八代の孫義房の

所にて支て給り候へとて、一獻を勸られけるが、此太刀は保昌より傳て、代々身を不レ放守と存候へ共、是を可レ進とて、懷劔と云太刀を、錦の袋より取出して、赤松にこそ引たりけれ。圓心軈領掌し、其夜都を立て、播磨國に馳下、三千餘騎を二手に分て、備前の船坂美作の杉坂二の道を差塞ぎ、義旗雲龍を靡かして、回天の機をぞ露しける。されば直冬大勢にて上らんと被レ議けるが、其支度相違したりけり。

○御所を圍事

去程に洛中には、唯今可レ有二合戰一とて周章立て、貞和五年八月十二日の宵より、數萬騎の兵上下へ馳違ふ。馬の足音草摺の音、鳴休隙も無りけり。先三條殿へ參ける人々には、吉良左京大夫滿義、同上總三郎滿貞、石堂中務大輔賴房、同左馬頭賴直、石橋左衛門佐和義、子息治部大輔宣義、尾張修理大夫高經、子息民部少輔氏經、舍弟左近大夫將監氏賴、荒川三河守詮賴、細川刑部大輔賴春、同兵部大輔顯氏、畠山大藏少輔直宗、上杉伊豆守重能、同左馬助朝房、同彈正少弼朝貞、長井大膳大夫廣秀、和田越前守、高土佐守師秋、千秋三河左衛門大夫惟範、大高伊豫守重成、宍戸安藝守朝重、二階堂美濃守行

世事にたづさはること

者也。政所以下の沙汰、毎事慇懃に沙汰せらるべしとぞ委補せられける。師泰此使に對して、仰畏て候へ共、枝を切て後、根を斷んとての御意にてぞ候覽。何樣罷上候て、御返事をば中入候べしと、事の外なる返事申て、軈て、其日石川の陣をぞ打出ける。甲胄を鎧たる兵三千餘騎にて打立て、持楯一枚楯、人夫七千餘人に持せて、一向合戰の體に出立て、態白晝に京に入る。目を驚す有樣也。師泰執事の宿所に著て、三條殿合戰の企有と聞えければ、八月十一日の宵に、赤松入道圓心と、子息律師則祐、彈正少弼氏範、七百餘騎にて、武藏守の屋形へ行向。師直急ぎ對面有て、三條殿無レ謂師直が一家を亡さんとの御用意、事已に喉に迫候間、將軍へ内々事の由を歎申て候へば、武衞左樣の企に及條、事の體不二穩便一、速に其儀を止て、讒者の罪を緩くすべからず、能々制止を可レ加。若猶不二叙用一して、討手を遣す事あらば、尊氏必師直と一所に成て、安否を共にすべしと被二仰出一候。將軍の御意如レ斯に候へば、今は乍レ恐三條殿の討手に向て、矢一仕らんずるにて候。京都の事は、内々志を通ずる人多く候へば、心安候。尚も唯難儀に覺え候は、左兵衞佐殿備後に被レ坐候へば、一定中國の勢を引て、被レ攻上ぬと覺る計にて候。今夜急ぎ播磨へ御下候て、山陽山陰の兩道を、杉坂船坂の切

に竝居て、中門の唐垣をかけへだて、師直唯一人六間の客殿に坐したり。師直が今の命は、風待程の露よりも危しと見えける處に、殊更此事勝て申沙汰したりける粟飯原下總守清胤、俄に心替して、告知せばやと思ければ、些色代する樣にして、屹と目くばせをしたりければ、師直心早き者なりければ、軈て心得て、かりそめに罷出る體にて、門前より馬に打乘、己が宿所にぞ歸ける。其夜軈て粟飯原齋藤二人、執事の屋形に來て、此間三條殿の御企、上杉畠山の人々の隱謀、兎こそ候つれ、角こそ候つれと語ければ、執事樣々の引手物して、猶も殿中樣の事、內々告承候へとて、齋藤粟飯原を歸けり。師直是より用心嚴くして、一族若黨數萬人、近邊の在家に宿し置き、出仕を止め、虛病してぞ居たりける。去年の春より、越後守師泰は、楠退治の爲に、河內國に下て、石川河原に向城を構て居たりけるを、師直使を遣て、事の由を告たりければ、畠山左京大夫清國、紀伊國の守護にて坐しけるを呼奉て、石川城をふまへさせて、越後守は急ぎ京都へぞ歸上ける。左兵衞督は、師泰が大勢にて上洛する由聞給て、此者が心をとらでは叶まじ。すかさばやと被思ければ、飯尾修理進入道を使にて、武藏守が行事、萬短才庸愚の事ある間、暫世務の綺を止る處也。自今後は、越後守を以て、管領に居せしむる

器用の者―その道の適任者

顚八倒する程に、門外に走出ると思たれば、夢の覺たる心地して、大内の舊跡、大庭の椋木の本に、朦々としてぞ立たりける。四方を見廻たれば、日已に西の山の端に殘て、京へ出る人多ければ、其に伴て、我宿坊にたどり來て、心閑に彼不思議を案ずるに、無レ疑天狗道に行にけり。是は唯非レ可ニ打棄一、且は末代の物語、且は當世の用心にもなれかしと思しかば、我身の刑を不レ顧、委細に書載、熊野の牛王の裏に告文を書添、貞和五年閏六月三日と書附て、傳奏に附て進奏す。誠に怪異の事共也。

○左兵衛督欲レ誅ニ師直一事

斯りし處に、師直師泰等誅罰の事、上杉畠山が讒佞深く、妙吉侍者荐に被レ申ければ、將軍に知せ奉らで、左兵衛督竊に上杉、畠山、大高伊豫守、粟飯原下總守、齋藤五郎左衛門入道五六人に評定有て、内々師直兄弟を被レ誅謀をぞ被レ議ける。大高伊豫守は大力也、宍戸安藝守は、物馴たる剛の者なればとて、彼等二人を組手に定め、若し手に餘る事あらば、討洩さぬ樣に用心せよとて、器用の者共百餘人、物具せさせて竊に是を隱置、師直をぞ被レ召ける。師直は夢にも可ニ思寄一事ならねば、若黨中間は、皆遠侍大庭

微運の君—南朝の天皇を申す

持あつかふ—もてはやす

不レ懸目出かりしに、時代純機宿報の感果ある事なれば、後醍醐院武家を亡し給ふに依て、彌王道衰て、公家悉廢たり。此時を得て、三種の神器は、徒に微運の君に從て、空く邊鄙外土に交り給ふ。是神明吾朝を棄給ひ、王威無二殘所一盡し證據也。是元暦の安德天皇の御時に相同じ。國を受給ふ主に隨給はぬは、國を不レ守驗也。されば神道王法共になき代なれば、上廢れ下驕て、是非を辨事なし。然れば師直師泰が安否、將軍兄弟の通塞も、難レ辨とぞ語ける。雲景重て申けるは、さては早亂惡の世にて、下上に逆ひ、師直師泰我儘にしすまして天下を持つべき歟と問へば、いやさは不レ可レ有。如何に末世濁亂の儀にて、下先勝て上を可レ犯。され共又上を犯す咎難レ遁ければ、下又其咎に可レ伏。其故は將軍兄弟も、可レ奉レ敬一人の君主を輕じ給へば、執事其外家人等も、又武將を輕じ候。是因果の道理也。されば地口天心を呑と云變あれば、如何にも下尅上の謂にて、師直先可レ勝。自レ是天下大に亂て、父子兄弟怨讎を結び、政道聊も有まじければ、世上も無二左右一難レ靜とぞ申ける。雲景、今加様に世間の重鑑を懸て宣つる人は、誰と尋れば、彼老僧こそ、世に人の持あつかふ愛宕山の太郎房にて御座とぞ答ける。尚も天下の安危、國の治亂を問んとする處に、俄に猛火燃來て、座中の客七

佳摸—佳例

寶として、神代より傳る璽、國を理め守るも此神器也。是は以レ傳爲レ詮。然に今の王者、此明器を傳る事無て、位を踐御座事、誠に王位共難レ申。然共さすが三箇の重事を執行せ給へば、天照大神も守らせ給覽と憑敷處もある也。此明器我朝の寶として、神代の始より人皇の今に至まで、取傳御座事、誠に小國也といへ共、三國に超過せる吾朝、神國の不思議は是也。されば此神器無らん代は、月入て後の殘夜の如し。末代のしるし、王法を神道棄給ふ事と知べし。此重器は平家滅亡の時、安德天皇西海に渡奉て、海底に沈られし時、神璽內侍所をば取返し奉しか共、寶劍は遂に沈失ぬ。されば王法、惡王ながら安德天皇の御時までにて、失ひ果ぬる證は是也。其故は、後鳥羽院の始て三種の重器無して、元曆に踐祚有しに、其末流の皇統繼體として、今に御相承の佳摸とは申せ共、思へば彼元曆よりこそ、正しく本朝に武家を被二始置一、則二海內一蔑二君王一奉る事は出來にけれ。されば武運王道に勝し表示には、寶劍は其時までにて失にき。仍武威盛に立て、國家を奪也。然共其盡し後百餘年は、武家我意に任て、天下を司ると云とも、王位も文道も相殘る故に、關東如レ形政道をも理め、君王をも崇め奉る體にて、諸國に總追捕使をば置たれども、諸司要脚の公事正稅、佛神の本主、相傳領には手を

暫なれ共ー此句の下原本に加様の所を以ての七字あれど異本に據て之を除けり

久く御代をば治御座候はぬと問ければ、其又有二仔細一事に候。先朝隨分賢王の行をせんとし給しか共、眞實仁德撫育の叡慮は惣じてなし。繼レ絕興レ廢、神明佛陀を御歸依有樣に見えしか共、憍慢のみ有て、實義不レ御座。され共其程の賢王も、末代には有まじければ、何事にもよき眞似をばすべし。是を以て暫なれ共、其御器用に當り、運の傾く高時、消方の燈前の扇と成せ給て、亡し給ぬ。其理に答て、累代繁榮四海に滿せし先代をば、亡し給しか共、誠に堯舜の功、聖明の德御座ねば、高時に劣る足利に、世をば奪れさせ給ぬ。今持明院殿は、中々執レ權開レ運武家に從せ給て、偏に幼兒の乳母を憑が如く、奴と等しく成て御座程に、依二仁道善惡一還て如レ形安全に御座者也。是も御本意には有ね共、理をも欲心をも打捨て御座さば、末代邪惡の時、中々御運を開せ給ふべき者也。とても王法は平家の末より本朝には盡はてゝ、武運ならでは立まじかりしを、御了知も無て、仁德聖化は昔に不レ及して、國を取らん御欲心計を先とし、本に世を復すべしとて、末世の機分、戎夷の掌に可レ隨御悟無りしかば、後鳥羽院の御謀叛徒に成て、公家の威勢其時より塗炭に墮し也。されば其宸襟を爲レ休、先朝高時を失給しか共、尙公家の代をば取せ給はぬ者也。さても三種の神器を本朝の

下尅上—下なる者の上たる者を凌ぐをいふ意

先代—北條高時をいふ

末世なれば、曾て其外の政道、何事か可レ有。然間惡逆の道こそ替れ、猜みもどき合ふ輩、何れも無二差別一亡びん事無レ疑。喩へば山賊と海賊と寄合て、互に犯科の得失を指合が如し。されば近年武家の世を取事、賴朝卿より以來、高時に至まで、已に十一代、蠻夷の賤しき身を以て、世の主たる事、必本義にはあらね共、世澆季に及ぶ驗に無レ力、時與レ事唯一世の道理に非ず。臣殺レ君、子殺レ父、力を以て可レ爭時到る故に、下尅上の一端にあり。高貴清花も君主一人も、共に力を不レ得、下輩下賤の士、四海を呑む。依レ之天下武家と成也。是必誰爲にも非ず、時代機根相萠て、因果業報の時到る故也。君を遠島へ配し奉り、惡を天下に行し義時を、淺ましと云しか共、宿因のある程は、子孫無窮に光榮せり。是又涯分の政道を行ひ、己を責て德を施しゝかば、國豐に民不レ苦。され共宿報漸く傾く時、天心に背き、佛神捨給ふ時を得て、先朝高時を追伐せらる。是必しも後醍醐院の聖德の至に非ず、自滅の時到る也。世も上代、仁德も今の君主に增り給し後鳥羽院の御時は、上の威も強く下の勢も弱しかども、下勝ち上負ぬ。今末世濁亂の時分なれ共、不レ得二下勝一不二上負一事は、不レ依二貴賤一運の興廢なるべし。是以可二心得給一と語ければ、雲景重て申さく、先代運盡て亡しかば、など先朝

古の有増—以前の豫定

獅子の蟲云—蓮華面經に見ゆ

さてこそ所多きに、村雲と云所に住するなれ。雲は天狗の乘物なるに依ての故也。加樣の事努々人に不可知給。初て此所へ尋來給へば、委細の物語を申也とぞ語ける。雲景不思議の事をも見聞者哉と思て、天下の重事、未來の安否を聞ばやと思て、さて將軍御兄弟執事の間の不和は、何れか道理にて、始終通り候べきと問へば、三條殿と執事の不快は、一兩月を不可過、大なる珍事なるべし。理非の事は是非を難辨。此人々身の難に逢ひ、不肖なる時は、哀世を持たん時は、政道をも能行はんずる者をと思しか共、富貴充滿の後は、古の有増一事も不通。上暗く下諂て、諸事に親疎あれば、神明三寶の冥鑒にも背き、天下貴賤の人望にも違て、我非をば知ず、人を謗り合ふ心あり。唯獅子の蟲の獅子の肉を食が如し。適仁政と思事も、さもあらず、唯人の煩歎のみ也。夫仁とは施惠四海深く憐民云仁。夫政道と云は、治國憐人、善惡親疎を不分撫育するを申也。而るに近日の儀、聊も善政を不聞。欲心熾盛にして、君臣父子の道をも不辨、唯人の財を我有にせんと計の心なれば、不矯餝無云事。佛神能知見し御座せば、我が企る處も不成、依果報淺深聊取世持國者有といへ共、眞實の義に非ず。されば一人として、治世運長久に不持也。君を輕んじ佛神をだにも恐るゝ處なき

當關白殿—藤原良基

桑門の世捨人—僧侶をいふ

狗の業とこそ申候へ。其外には將軍御兄弟、此比執事の故に、御中不快と申候。是若天下の大儀に成候はんずるやらんと、貴賤申候とぞ答ける。其時此山伏申けるは、さる事も有らん、棧敷の顚倒は、總じて天狗の業計にも非ず。故をいかにと云に、當關白殿は、忝も天津兒屋根尊の御末、天子輔佐の臣として無止事上臈にて渡らせ給ふ。梶井宮と申は、今上皇帝の御連枝にて、三塔の貫首、國家護持の棟梁、圓宗顯密の主にて御座す。將軍と申すは、弓矢の長者にて、海内の衞護の人也。而るに此棧敷と申は、橋の勸進に、桑門の世捨人が、興行する處也。見物の者と云は、洛中の地下人、商賣の輩共也。其に日本一州を治め給ふ貴人達、交り雜居し給へば、正八幡大菩薩、春日大明神、山王權現の忿を含ませ給ふに依て、此地を頂き給ふ堅牢地神驚せ給ふ間、其勢に應じて皆崩たる也。此僧も其比京に罷出しか共、村雲の僧に可申事有て立寄しに、時刻移て不見とぞ申ける。雲景、さて今村雲の僧と申て、行德權勢世に聞え候は、如何なる人にて候ぞ。京童部は一向天狗にて御座すと申候は、如何樣の事にて候やらんと問ければ、此僧の曰、其はさる事候。彼僧は殊にさかしき人にて候間、天狗の中より選出して、亂世の媒の爲に遣したる也。世中亂れば、本の住所へ可歸也。

淡路廢帝—淳仁天皇を申す
井上皇后—光仁天皇の皇后を申す

り。或は衣冠正しく、金の笏を持給へる人もあり、或は貴僧高僧の形にて、香染の衣著たる人もあり。雲景恐しながら、廣廂にくゞまり居たるに、御座を二帖布たるに、大なる金の鵄、翅を刷て著座したり。右の傍には、長八尺許なる男の、大弓大矢を横へたるが、畏てぞ候ける。左の一座には、袞龍の御衣に、日月星辰を鮮に織たるを著給へる人、金の笏を持て竝居給ふ。棧敷の體餘に怖しく不思議にて、引導の山伏に、如何なる御座敷候ぞと問へば、山伏答けるは、上座なる金の鵄こそ、崇德院にて渡せ給へ。其傍なる大男こそ爲義入道の八男、八郎冠者爲朝よ。左の座こそ代々の帝王、淡路廢帝、井上皇后、後鳥羽院、後醍醐院、次第の登位を逐て、惡魔王の棟梁と成給ふ。此事なき賢帝達よ。其座の次なる僧綱達こそ、玄昉、眞濟、寛朝、慈慧、頼豪、仁海、尊雲等の高僧達、同大魔王と成て、今爰に集り、天下を亂候べき評定にて有とぞ語ける。雲景恐しながら、不思議の事哉と思つゝ畏居たれば、一座の宿老の山伏、是は何より來給ふ人ぞと問ければ、引導の山伏、しか〴〵とぞ申ける。其時此老僧會釋して、さらば此間京中の事共をば皆見聞給ふらん、何事か侍ると問ければ、雲景殊なる事も候はず、此比は唯四條河原の棧敷の崩て、人多く被打殺候事、昔も今も消る事候はず。唯天

熊野の牛王—熊野より出す牛王の神符也

○雲景未來記事

又此比天下第一の不思議あり。出羽國羽黒と云所に一人の山伏あり。名をば雲景とぞ申ける。希代の目に逢たりとて、熊野の牛王の裏に、告文を書て出したる未來記あり。雲景諸國一見悉有て、過にし春の比より、思立て都に上り、今熊野に居住して、華洛の名跡を巡禮する程に、貞和五年六月二十日の事なるに、天龍寺一見の爲に、西郊にぞ赴ける。官の廳の邊より、年六十許なる山伏一人行連たり。彼雲景に、御身は何へ御座ある人ぞと問ければ、是は諸國一見の者にて候が、公家武家の崇敬あつて、建立ある大伽藍にて候なれば、一見仕候ばやと存じて、天龍寺へ參候也とぞ語ける。天龍寺もさる事なれ共、我等が住む山こそ、日本無雙の靈地にて侍れ。いざや見せ奉らんとて、さそひ行程に、愛宕とかや聞ゆる高峯に至りぬ。誠に佛閣奇麗にして、玉を敷き金を鏤たり。信心肝に銘じ、身の毛竪ち貴く思ければ、斯てもあらまほしく思處に此山伏雲景が袖を控て、是まで參り給たる思出に、祕所共を見せ奉らんとて、本堂の後、座主の坊と覺しき所へ行たれば、是又殊勝の靈地なり。爰に至て見れば、人多く坐し給へ

のゝめき――のゝしろに同じく騒ぐ事也

祇園神幸――祇園祭に六月七日神輿渡御同十四日還御せらる

と蹲踞したる體を見て、彼山伏忍やかに、苦かるまじきぞ。唯それにて見物し給へと申間、長講は樣ぞあるらんと思て、山伏と雙で、將軍の對座に居たれば、種々の獻盃、樣樣の美物の、盃の始まるごとに、將軍殊に此山伏と長講とに色代有て、替る替る始給ふ處に、新座の樂屋より、猿の面を著て、御幣を差擧、橋の高欄を一飛飛ては拍子を蹈み、蹈ては御幣を打振て、誠に輕げに跳出たり。上下の棧敷見物衆是を見て、座席にもたまらず。面白や難ㇾ堪や、我死ぬるや、是助けよと喚叫で感ずる聲、半時許ぞのゝめきける。此時彼山伏長講が耳にさゝやきけるは、餘に人の物狂はしげに見ゆるが憎きに、肝つぶさせて、興を醒させんずるぞ。騒ぎ給ふなと云て、座より立て、或棧敷の柱を、えいやえいやと推と見えけるが、二百餘間の棧敷、皆天狗倒に逢てけり。よそよりは辻風の吹とぞ見えける。誠に今度棧敷の儀、神明御眸を被ㇾ廻けるにや。彼棧敷崩て人多く死ける事は、六月十一日也。其次の日、終日終夜大雨降二車軸一、洪水流二盤石一、昨日の河原の死人、汚穢不淨を洗流し、十四日の祇園神幸の路をば淸ける。天龍八部悉靈神の威を助て、淸淨の法雨を灌ける。難ㇾ有かりし樣也。

釘附にしたる棧敷の倒るゝは、梶井宮の不覺なりけり。

又二條關白殿も、御覽じ給たりと申ければ、

田樂の將棊倒の棧敷には、王ばかりこそ登らざりけれ。是非ニ直事一、如何樣天狗の所行にこそ有らんと思合せて、後能々聞けば、山門西塔院釋迦堂の長講、所用有て下ける道に、山伏一人行合て、唯今四條河原に、希代の見物の候。御覽候へかしと申ければ、長講日已に日中に成候。又用意の棧敷なんど候はで、唯今より其座に臨候共、内へ如何か入候べきと申せば、山伏内へ易く入奉べき樣候。唯我跡に附て被レ歩候へとぞ申ける。長講げにも聞る如くならば、希代の見物なるべし。さらば行て見ばやと思ければ、山伏の跡に附て、三足許歩むと思たれば、不レ覺四條河原に行至りぬ。早中門の口打程に成ぬれば、鼠戸の口も塞て、可レ入方もなし。如何して内へは入候べきとわぶれば、山伏我手に取附せ給へ。飛越て内へ入候はんと申間、實しからずと乍レ思、手に取附たれば、山伏長講を小脇に挾で、三重に構たる棧敷を輕々と飛越て、將軍の御棧敷の中にぞ入にける。長講坐レ席座中の人々を見るに、皆仁木、細川、高、上杉の人々ならでは、交たる人も無ければ、如何此座には居候べき

長講—比叡山西塔釋迦堂の堂守也、姓氏不詳

鼠戸—門側の切戸をいふ

大物の五六―厚さ五寸廣さ六寸の大なる材木をいふ

しもと―笞

跳返ては上たる有樣、誠に此世の者とは不見、忽に山王神託して、此奇瑞を被示かと、感興身にぞ餘ける。されば百餘間の棧敷共、怺兼て座にも不堪、あら面白や難堪やと喚き叫ける間、感聲席に餘りつゝ、且は靜りもやらず。浩る處に、將軍の御棧敷の邊より、嚴しき女房の練貫の褄高く取けるが、扇を以て幕を揚るとぞ見えし。大物の五六にて打附たる棧敷傾立て、あれや〳〵と云程こそあれ、上下二百四十九間、共に將棊倒をするが如く、一度にどうとぞ倒ける。若干の大物共落重ける間、被打殺者其數を不知。斯る紛に物取共、人の太刀刀を奪て逃るもあり、見附て切て留るもあり。或は腰膝を被打折、手足を打切られ、或は己と拔たる太刀長刀に、此彼を突貫れて血にまみれ、或は湧せる茶の湯に身を燒き、喚叫ぶ。唯衆合叫喚の罪人も、斯やとぞ見えたりける。田樂は鬼の面を著ながら、裝束を取て逃る盜人を、赤きしもとを打振て追て走る。人の中間若黨は、主の女房を舁負て逃る者を、打物の鞘をはづして追懸る。返合て切合處もあり、被切て朱に成者もあり。修羅の鬪諍、獄卒の呵責、眼の前に有が如し。梶井宮も御腰を打損ぜさせ給たりと聞えしかば、一首の狂歌を四條河原に立たり。

音取の笛―樂の調子を合する笛

あやゐ笠―狩獵の時などに用ふる藺にて編みたる笠

も夥しく構たり。已に時刻に成しかば、輕軒香車地を爭ひ、輕裘肥馬繋に所なし。幔幕風に飛揚して、薫香天に散滿す。新本の老若、東西に幄を打て、兩方に橋懸を懸たりける。樂屋の幕には纐纈を張、天蓋の幕は金襴なれば、片々と風に散滿して、炎を揚るに不異。舞臺に曲彔繩床を立雙べ、紅緑の氈を展布て、豹虎の皮を懸たれば、見に眼を照れて、心も空に成ぬるに、律雅調冷く、颯聲耳を淸す處に、兩方の樂屋より、中門の口の鼓を鳴し、音取の笛を吹立たれば、匂薫蘭を凝し、粧紅紛を盡したる美麗の童八人、一樣に金襴の水干を著して、東の樂屋より練出たれば、白く淸らかなる法師八人、薄化粧の鐵漿黑にて、色々の花鳥を織盡し、染狂たる水干に、銀の亂紋打たる下濃の袴に下括して、拍子を打、あやゐ笠を傾け、西の樂屋よりきらめき渡て出たるは、誠に由々敷ぞ見えたりける。一の簓は本座の阿古、亂拍子は新座の彥夜叉、刀玉は道一、各神變の堪能なれば、見物耳目を驚す。斯て立合終しかば、日吉山王の示現、利生の新なる猿樂を、肝に染てぞ出したる。斯る處に新座の樂屋より、八九歲の小童に、猿の面をきせ、御幣を差上て、赤地の金襴の打懸に、虎皮の貫を蹴開き、小拍子に懸て、紅緑のそり橋を、斜に蹈で出たりけるが、高欄に飛上り、左へ廻り右へ巡り、

しと、天文博士註說す。又閏六月五日戌刻に、巽方と乾方より、電光耀き出て、兩方の光寄合て如レ戰して、碎け散ては寄合て、風の猛火を吹上るが如く、餘光天地に滿て光る中に、異類異形の者見えて、乾の光退行、巽の光進行て、互の光消失ぬ。此妖怪、如何樣天下穩ならじと申合にけり。

○田樂事 附長講見物事

今年多くの不思議打續く中に、洛中に田樂を翫ぶ事、法に過たり。大樹是を被レ興事又無レ類。されば萬人手足を空にして、朝夕是が爲に婬費す。關東亡びんとて、高時禪門好み翫しが、先代一流斷滅しぬ。よからぬ事なりとぞ申ける。同年六月十一日抖擻の沙門有けるが、四條橋を渡さんとて、新座本座の田樂を合せ、老若に分て、能くらべをぞせさせける。四條河原に桟敷を打つ。希代の見物なるべしとて、貴賤の男女擧る事不レ斜、公家には攝籙大臣家、門跡は當座主梶井二品法親王、武家は大樹是を被レ興しかば、其以下の人々は不レ及レ申、卿相雲客諸家の侍、神社寺堂の神官僧侶に至迄、我不レ劣桟敷を打。五六八九寸の安の郡などを鑄貫て、圍八十三間に、三重四重に組上、物

陰陽寮—天文暦數等をつかさどるところ、中務省に屬す

太平記　巻第二十七

○天下妖怪事 附 清水寺炎上事

貞和五年正月の比より、犯星客星無レ隙現じければ、旁其愼不レ輕、王位の愁、天下の變、兵亂疫癘有べしと、陰陽寮頻に密奏す。是をこそ如何と驚處に、同二月二十六日夜半許に、將軍塚夥しく鳴動して、虚空に兵馬の馳過る音、半時許しければ、京中の貴賤不思議の思をなし、何事のあらんずらんと魂を冷す處に、明る二十七日午刻に、清水坂より俄に失火出來て、清水寺の本堂、阿彌陀堂、樓門、舞臺、鎭守まで、一宇も不レ殘炎滅す。火災は尋常の事なれ共、風不レ吹大なる炎遙に飛去て、嚴重の御祈禱所、一時に燒失する事非二直事一。凡天下の大變ある時は、靈佛靈社の回祿定れる表事也。又同六月三日八幡の御殿、辰刻より酉時まで鳴動す。神鏑聲を添て、王城を差て鳴て行。又六月十日より、太白辰星歲星の三星台て打續きしかば、不レ經二月日一大亂出來して、天子失レ位、大臣受レ災、子殺レ父、臣殺レ君、飢饉疫癘兵革相續、餓孚滿レ巷べ

探題—一地方の事を奉行し訴訟成敗を掌り外寇などの鎭をなす職

に斯と語り申たりけるに、さらば其人是へ具足して御渡候へ。事の樣能々試て、げにもと思處あらば、將軍へも可申達と、始て直冬を左兵衞督の方へぞ被招引ける。是にて一二年過けるまでも、なほ將軍許容の儀無りけるを、紀伊國の宮方共蜂起して、事及難儀ける時、將軍始て父子の號を被許、右兵衞佐に補任して、此直冬を討手の大將にぞ被差遣ける。紀州暫靜謐の體にて、直冬被歸參しより後、早人々是を重じ奉る儀も出來り、時々將軍の御方へも出仕し給しか共、猶座席なんどは、仁木細川の人々と等列にて、さまで賞翫は未無りき。而るを今左兵衞督の計として、西國の探題になし給ければ、いつしか人皆歸服し奉て、附從ふ者多かりける。備後の鞆に坐し給て、中國の成敗を司るに、忠ある者は不望に恩賞を賜り、有咎者は不罰に去其境。自是、多年非をかざりて上を犯しつる師直師泰が惡行、彌隱も無りけり。

一人天下に横行云々―孟子二巻に見ゆ
御幼稚の若御―義詮なり
喝食―禪寺の侍童なり

捨奉らばやと云し言の淺ましさよ。一人天下に横行するをば、武王是を耻しめりとこそ申候。況乎己が身申沙汰する事をも、諛ふ人あれば改て非を理になし、下として上を犯す科、事既に重疊せり。其罪を刑罰せられずば、天下の靜謐何れの時をか期し候べき。早く彼等を討せられて、上杉畠山を執權として、御幼稚の若御に天下を保たせ進せんと思召す御心の候はずやと、言を盡し譬を引て、樣々に被申ければ、左兵衛督倩事の由を聞給て、げにもと覺る心附給にけり。是ぞ早仁和寺の六本杉の梢にて、所々の天狗共が、又天下を亂らんと樣々に計りし事の端よと覺たる。

○直冬西國下向事

先西國靜謐の爲とて、將軍の嫡男宮内大輔直冬を、備前國へ下さる。抑此直冬と申は、古將軍の忍て一夜通ひ給たりし越前局と申女房の腹に出來たりし人とて、始は武藏國東勝寺の喝食なりしを、男に成て京へ上せ奉し人也。此由內々申入るゝ人有しか共、將軍曾て許容し給はざりしかば、獨淸軒玄慧法印が許に所學して、幽なる體にてぞ住佗給ひける。器用事がら、さる體に見え給ければ、玄慧法印事の次を得て、左兵衛督

泉下―黄泉の下なり

り。是を聞て、秦の將軍にて、漢楚と戰ける章邯將軍も、今は誰をか君として秦國をも可守とて、忽に降人に成て、楚の項羽の方へ出ければ、秦代忽に傾て、高祖項羽諸共に、咸陽宮に入にけり。趙高世を奪て二十一日と申に、始皇帝の御孫、子嬰と申しに被殺。子嬰は又楚項羽に被殺給しかば、神陵三月の火、九重の雲を焦し、泉下多少の寶玉、人間の塵と成にけり。さしもいみじかりし秦代、二世に至て亡し事は、唯趙高が侈の心より出來る事にて候き。されば古も今も、人の代を保ち、家を失ふ事は、其内の執事管領の善惡による事にて候。今武藏守越後守が振舞にては、世中靜り得じとこそ覺て候へ。我被官の者の、恩賞をも賜り御恩をも拜領して、少所なる由を歎申せば、何を少所と歎給ふ。其近邊に寺社本所の所領あらば、境を越て知行せよかしと下知す。又罪科有て所帶を被沒收たる人、以緣書執事兄弟に屬し、如何可仕と嘆けば、よし〳〵師直そらしらずして見んずるぞ。縱如何なる御教書也とも、唯押て知行せよと成敗す。又正く承し事の淺ましかりしは、都に王と云人のまし〳〵て、若干の所領をふさげ、內裏院御所と云所の有て、馬より下るむづかしさよ。若王なくて叶まじき道理あらば、以木造るか、以金鑄るかして、生たる院國王をば、何方へも皆流し

剰討手を咸陽宮へ差遣し、扶蘇をば討奉てけり。斯て幼稚に坐する胡亥を二世皇帝と稱して、御位に卽奉り、四海萬機の政、唯趙高が心の儘にぞ行ける。此時天下初て亂て、高祖沛郡より起り、項羽楚より起て、六國の諸侯悉秦を背く。依之白起蒙恬秦の將軍として戰といへ共、秦軍利無して、大將皆討れしかば、秦又章邯を上將軍として、重て百萬騎の勢を差下し、河北の間に戰しむ。百度戰千般遣といへども雌雄未決、天下の亂止時なし。爰に趙高、秦の都咸陽宮に兵の少き時を伺見て、二世皇帝を討奉り、我世を取んと思ければ、先我が威勢の程を爲知、夏毛の鹿に鞍を置て、此馬に召れて御覽候へと、二世皇帝にぞ奉ける。二世皇帝是を見給て、是非馬鹿也と宣ければ、趙高さ候はゞ、宮中の大臣共を召れて、鹿馬の間を御尋候べしとぞ申ける。二世卽百司千官公卿大臣悉召集て、鹿馬の間を問給ふ。人皆旨者にあらざれば、馬に非ずとは見けれども、趙高が威勢に恐て、馬也と申さぬは無りけり。二世皇帝、一度鹿馬の分に迷しかば、趙高大臣は忽に虎狼の心を挾めり。是より趙高、今は我が威勢をおす人は有らじと、兵を宮中に差遣し、二世皇帝を攻奉るに、二世趙高が兵を見て、遁るまじき處を知給ければ、自劒の上に伏て、則御自害有てけ

白起、蒙恬ー郿の人、秦昭王に仕へて武功多く武安君に封ぜらる、蒙恬は秦始皇に仕へて勲功あり、さればともに二世皇帝の時の人にあらず

夏毛の馬ー黄に白星のある毛色の馬

沙丘—長安を距る二千餘里、荊州平鄕縣にあり

に幸成て、龍神を被退治候なば、蓬萊島をなどか尋得ぬ事候べきと申ければ、始皇帝げにもとて、數萬艘の大船を漕雙べ、連弩とて四五百人して引て同時に放つ大弓大矢を、船ごとに持せられたり。是は成祟龍神若海上に現じて出たらば、爲射殺の用意也。始皇帝已に之罘の大江を渡給ふ道すがら、三百萬人の兵共、舷を叩き太鼓を打て、鬨を作る聲止時なし。磯山嵐沖津浪、互に響を參て、天維坤軸諸共に、絕え碎ぬとぞ聞えける。龍神是にや驚き給けん。臥長五百丈許なる鮫大魚と云魚に變じて、浪の上にぞ浮出たる。頭は如獅子遙なる天に伸上り、背は如龍蛇萬頃の浪に横れり。數萬艘の大船四方に漕分れて、同時に連弩を放つに、數百萬の毒の矢にて、鮫大魚の身に射立ければ、此魚忽に被射殺、蒼海萬里の波の色、皆血に成てぞ流ける。始皇帝其夜龍神と自戰ふと夢を見給たりけるが、翌日より重き病を請て、五體暫も無安事、七日の間苦痛逼迫して、遂に沙丘の平臺にして、則崩御成にけり。始皇帝自詔を遺して、御位をば第一の御子扶蘇に讓り給たりけるを、趙高、扶蘇御位に卽給なば、賢人才人皆朝家に被召仕、天下を我心に任する事あるまじと思ければ、始皇帝の御讓を引破て捨、趙高が養君にし奉たる第二の王子胡亥と申けるに、代をば讓給たりと披露して、

鐺―榱の端の飾

丱女―少女

里が中を不レ可レ離とて、此石より四方十里が中に居たる貴賤の男女、一人も不レ殘皆首を被レ刎けるこそ不便なれ。東南には函谷二崤の嶮を峙て、西北には洪河涇渭の深を遶らして、其中に廻三百七十里、高さ三里の山を九重に築上て、口六尺の銅の柱を立、天に鐵の網を張て、前殿四十六殿、後宮三十六宮、千門萬戸とをり開き、麒麟列り鳳凰相對へり。虹の梁金の鐺、日月光を放て、樓閣互に映徹し、玉の砂銀の床、花柳影を浮て、階闥品々に分れたり。其居所を高し、其歡樂を極給ふに就ても、唯有待の御命有レ限事を歎給しかば、如何にもして蓬萊にある不死の藥を求て、千秋萬歲の寶祚を保たんと思給ける處に、徐福文成と申ける道士二人來て、我不死の藥を求る術を知たる由申ければ、帝無レ限悅給て、先彼に大官を授て、大祿を與へ給ふ。軈て彼が申旨に任て、年未十五に不レ過童男丱女六千人を集め、龍頭鷁首の船に載て、蓬萊島をぞ求ける。海漫々として邊なし。雲の浪烟の波最深く、風浩々として不レ閑。月花星彩蒼茫たり。蓬萊は今も古も唯名をのみ聞ける事なれば、天水茫々として求るに所なし。蓬萊を不レ見否や歸らじと云し童男丱女は、徒に船の中にや老ぬらん。徐福文成其僞の顯れて、責の我身に來らんずる事を恐て、是は何樣龍神の成レ祟と覺候。皇帝自海上

三墳—伏羲神農、黄帝の書
五典—少昊顓頊、高辛、唐、虞の書
史書—一般の史書
全經—經書全體にて六經をいふ

始皇帝の叡慮に逆て、さしもの御覺も無りけり。第二の御子胡亥は、寵愛の后の腹にて御座する上、好レ驕悪レ賢悪愛異二于他一して、常に君の傍を離れず、趙高と申ける大臣を執政に被レ附、萬事唯此計にぞ任せられける。彼秦始皇と申は、莊襄王の御子也しが、年十六の始、魏畢萬、趙襄公、韓白宣、齊陳敬仲、楚王、燕王の六國を皆滅して、天下を一にし給へり。諸侯を朝せしめ、四海を保てる事、古今第一の帝にて御座かば、是をぞ始て皇帝とは可レ申とて、始皇とぞ尊號を獻ける。爰に昔洪才博學の儒者共が、五帝三王の迹を追ひ、周公孔子の道を傳て、今の政古に違ぬと毀申事、唯書傳の世にある故也とて、三墳五典史書全經、總て三千七百六十餘卷、一部も天下に不レ殘皆燒捨られけるこそ淺ましけれ。又四海の間に、宮門警固の武士より外は、兵具を不レ可持、一天下の兵共が持處の弓箭兵仗、一も不レ殘集て是を燒捨て、其鐵を以て、長十二丈の金人十二人を鑄させて、湧金門にぞ被レ立ける。加樣の悪行、聖に違ひ天に背けるにや、邯鄲と云所へ、天より災を告る悪星一落て、忽に方十二丈の石となる。面に一句の文字有て、秦代滅て漢代になるべき瑞相をぞ示したりける。始皇是を聞給て、是全く天のする所に非ず、人のなす禍也。さのみ遠き所の者はよも是をせじ。四方十

十刹―十軒の寺にてみな禪寺なり

大衣を沓の鼻云々―侮辱の狀なり

車馬門前に立列、僧俗堂上に群集す。其一日の布施物、一座の引手物などを集めば、如レ山可レ積。唯釋尊出世の其古、王舍城より每日五百の車に、色々の寶を積で、佛に奉り給けるも、是には過じとぞ見えたりける。加樣に萬人崇敬類無りけれ共、師直師泰兄弟は、何條其僧の智慧才學さぞあるらんと欺て、一度も更に不二相看一、剩へ門前を乘打にして、路次に行逢時も、大衣を沓の鼻に蹴さする體にぞ振舞ける。吉侍者是を見て、安からぬ事に思ければ、物語の端事の次には、唯執事兄弟の擧動、穩便ならぬ者哉と云沙汰せられけるを聞て、上杉伊豆守、畠山大藏少輔、すはや究竟の事こそ有けれ。師直師泰を讒し失はんずる事は、此僧にまさる人非じと被レ思ければ、軈て交を深し媚を厚して、樣々讒をぞ構ける。吉侍者も元來惡しと思ふ高家の者共の擧動なれば、觸レ事彼等が所行の有樣、國を亂り政を破る最たりと、被二讒申一事多かりけり。中にも言巧に譬のげにもと覺る事ありけるは、或時首楞嚴經の談義已に畢て、異國本朝の物語に及ける時、吉侍者左兵衞督に向て被レ申けるは、昔秦始皇帝と申ける王に、二人の王子坐けり。兄をば扶蘇弟をば胡亥とぞ申ける。扶蘇は第一の御子にて御座か共、常に始皇帝の御政の治らで、民をも憫まず、仁義を專にし給はぬ事を申されける程に、

法眷—同朋すなはち同門弟をいふ

祖師—達磨大師

五山—天龍寺相國寺建仁寺東福寺萬壽寺

目云事無りけり。爰に無窓國師の法眷に、妙吉侍者と云ける僧是を見て、浦山敷事に思ければ、仁和寺に志一房とて、外法成就の人の有けるに、吒祇尼天の法を習て、三七日行けるに、頓法立に成就して、心に願ふ事の聊も不叶云事なし。是より夢窓和尚も、此僧を以て、一大事に思ふ心附給にければ、左兵衛督の被參たりける時、和尚宣けるは、日夜の參禪、學道の御爲に候へば、如何にも懈る處をこそ勸め申べく候へ共、行路程遠して、往還の御煩其恐候へば、今より後は、是に妙吉侍者と申法眷の僧の候を、參らせ候べし。語錄なんどをも、かひ〴〵敷沙汰し、祖師の心印をも、直に承當し候はんずる事、恐らくは可恥人も候はねば、我に不替常に御相看候て、御法談候べしとて、則妙吉侍者を左兵衛督の方へぞ被遣ける。直義朝臣一度此僧を見奉りしより、信心膽に命じ、渴仰無類ければ、唯西天の祖達磨大師、二度我國に西來して、直指人心の正宗を被示かとぞ思はれける。軈て一條堀川村雲戻橋と云所に、寺を立て宗風を開基するに、左兵衛督日夜の參學朝夕の法談無隙ければ、其趣に隨はん爲に、山門寺門の貫首、宗を改て衣鉢を持ち、五山十刹の長老も、風を顧て吹擧を臨む。況乎卿相雲客の交り近づき給ふ有樣、奉行頭人の諛たる體、語るに言も不可及。

杖を背に負て―史記には肉袒負レ荊至レ門とあり、荊はむちうつ杖なり、これを負ひて行きしなり

忠臣にあらん哉と、理を盡して制しければ、兵皆理に折て、合戰の企を休てけり。廉頗又此由を聞て、默然として大に恥けるに、尙我咎を直に謝せん爲に、杖を背に負て、藺相如が許に行、公が忠貞の誠を聞て、我が確執の心を恥づ。願は公我を此杖にて三百打給へ。是を以て罪を謝せんと請て、庭に立てぞ泣居たりける。藺相如、元來有レ義無レ怨者なりければ、なじかは是を可レ打、廉頗を引て堂上に居ゑ、酒を勸め交を深して返けるこそやさしけれ。されば趙國は秦楚に挾れて、地狹く兵少しといへども、此二人文を行ひ、武を以て專にせしかば、秦にも楚にも不レ被レ傾、國家を持つ事長久也。誠に私を忘て忠を存する人は、加樣にこそ可レ有に、今東夷南蠻は如レ虎窺ひ、西戎北狄は如レ龍見ゆる折節、高、上杉の兩家、指たる恨もなく、又尤むべき所もなきに、權を爭ひ威を猜て、動れば確執に及ばんと、互に伺レ隙事、豈忠臣と云べしや。

○妙吉侍者事　附秦始皇帝事

近來左兵衞督直義朝臣、將軍に代て天下の權を取給し後、專禪の宗旨に傾て、夢窓國師の御弟子と成り、天龍寺を建立して、陞座拈香の招請無レ隙、供佛施僧の財産不レ驚

以て武帝に見ゆ帝幸する所の王夫人卒す少翁方を以て夜鬼を致す王夫人の貌の如し帝帷中より之を望む乃ち拜して文成將軍となし客を以て之を禮す

て不㆓近附㆒。藺相如遂に連城の玉を奪取て、趙國へぞ歸にける。趙王玉を得て悅給ふ事不㆑斜、是より藺相如を賞翫せられて、大祿を與へ高官を授給しかば、位外戚を超祿萬戶に過たり。軈て牛車の宣旨を蒙り、宮門を出入するに、時に王侯貴人も、目を側て皆道を去る。爰に廉頗將軍と申ける趙王の舊臣、代々功を積み忠を重て、我に肩を雙べき者なしと思けるが、忽に藺相如に權を被㆑取、安からぬ事に思ければ、藺相如が參內しける道に、三千餘騎を構て、是を討んとす。藺相如も、勝たる兵千餘騎を召具して、出仕しけるが、遙に廉頗が道にて相待體を見て、戰んともせず、車を飛せ兵を引て、己が館へぞ逃去ける。廉頗が兵是を見て、さればこそ藺相如、勢唯他の力をかる者也。直に戰を決せん事は、廉頗將軍の小指にだにも及ばじと笑欺ける間、藺相如が兵、心憂事に思て、さらば我等廉頗が館へ押寄、合戰の雌雄を決して、彼輩が欺を防がんとぞ望ける。藺相如是を聞て、其兵に向て、淚を流て申けるは、汝等未知乎、兩虎相闘て共に死する時、一狐其弊に乘て是を咀と云譬あり。今廉頗と我とは兩虎也。戰ば必共に死せん。秦國は是一狐也。弊に乘て趙をくらはんに、誰か是を防ん。此理を思ふ故に、我廉頗に戰ん事を不㆑思、一朝の嘲を恥て、兩國の傾ん事を忘れば、豈

思給ながら、さらば汝が意に任すべしとぞ被許ける。藺相如悦で、軈て秦國へ越けるに、兵の一人も不召具、自劒戟を不帯、衣冠正くして車に乗、專使の威儀を調へて、秦王の都へぞ参ける。宮門に入て禮儀をなし、趙王の使に藺相如直に可奏事有て、参たる由を申入ければ、秦王南殿に出御成て、則謁を成し給ふ。藺相如畏て申けるは、先年君王に獻ぜし夜光の玉に、隠れたる瑕の少し候を、斯共知せ進せで、進置候し事、第一の越度にて候。凡玉の瑕をしらで置ぬれば、遂に主の寶に成らぬ事にて候間、趙王臣をして此玉の瑕を君に見せ進せん爲に、参て候也と申ければ、秦王悦で彼玉を取出し、玉盤の上にすゑて、藺相如が前に被置たり。藺相如此玉を取て樓閣の柱に押あて、劒を拔て申けるは、夫君子は食言せず、約の堅き事如金石。抑趙王心あきたらずといへ共、秦王強て十五城を以て此玉に替給き。而るに十五城も不被出、又玉をも不被返、是盗跖が悪にも過、文成が僞にも超たり。此玉全く瑕あるに非ず、唯臣が命を玉と共に碎て、君王の座に血を淋がんと思ふ故に参て候也と忿て、玉と秦王とをはたと睨み、近づく人あらば、忽に玉を切破て、返す刀に腹を切らんと、誠に思切たる眼ざし事がら、敢て可遮留様も無りけり。秦王あきれて言なく、群臣恐

盗跖―秦の大盗なり

文成が僞―資治通鑑に齊人李少翁鬼神の方を

胡越を隔る思ー胡は北に在り越は南に在りて地の相距ること極めて遠し、それより疎遠の思をなすに喩ふ

冑を帶して馳來れり。秦王此兵を麾て、趙王に向て宣けるは、卞和が夜光の玉、世に無類光ありと傳承る。願は此玉を賜て、秦の十五城を其代に獻ぜん。君又玉を出し給はずば、兩國の會盟忽に破て、永く胡越を隔る思をなすべしとぞおどされける。異國の一城と云は、方三百六十里也。其を十五合たらん地は、宛も二三箇國にも及べし。縱又玉を惜て十五城に不替共、今の勢にては無代に奪れぬべしと被思ければ、趙王心ならず十五城に玉を替て、秦王の方へぞ被出ける。秦王是を得て後、十五城に替たりし玉なればとて、連城の玉とぞ名附ける。其後趙王たび〳〵使を立て、十五城を被乞けれ共、秦王忽に約を變て、一城をも不出、玉をも不被返、唯使を欺き禮を輕して、返事にだにも及ばねば、趙王玉を失ふのみならず、天下の嘲甚し。爰に彼藺相如、趙王の御前に參て、願ば君臣に被許ば、我秦王の都に行向て、彼の玉を取返して、君の御憤を休め奉るべしと申ければ、趙王、さる事やあるべき。秦は已に國大に兵多して、我が國の力及がたし。縱兵を引て戰を致す共、爭か此玉を取返事を得んやと宣ければ、藺相如、兵を引力を以て玉を奪はんとには非ず。我秦王を欺て、可取返謀候へば、唯御許容を蒙て、一人罷向べしと申ければ、趙王猶も誠しからず

いらでーい　らだつ、性急に促す

會盟事未レ定、血未レ啜先に、秦王宴を儲て樂を奏し、酒宴終日に及べり。酒酣にして秦王盃を擧給ふ時、秦の兵共醉狂せる眞似をして、座席に進出て、目を瞋し臂を張て、我君今興に和して、盃を傾んとし給ふ。趙王早く瑟を調て壽をなし給へとぞいらで申ける。趙王若辭せば、秦の兵の爲に殺されぬと見ける間、趙王力なく瑟を調べ給ふ。君の傍には必左史右史とて、王の御振舞と言とを註し留る人あり。時に秦の左太史筆を取て、秦趙兩國の會盟に、先有二酒宴一。秦王盃を擧給ふ時、趙王自爲レ壽調レ瑟とぞ書附ける。趙王後記に留ぬる事心憂しと被レ思けれども、すべき態なければ力なし。盃廻て趙王又飲給ける時に、趙王の臣下に、始て召使はれける藺相如と云ける者、秦王の前に進出て、劍を拔き臂をいらゝげ、我王已に秦王の爲に瑟を調ぬ。秦王何ぞ我王の爲に壽を不レ爲べき。秦王若此事辭し給はゞ、臣必君王の座に死すべしと申して、誠に思切たる體をぞ見せたりける。秦王辭するに言無ければ、自立て壽をなし、撃レ瓫舞給ふ。則趙の左太史進出て、其年月の何日の日、秦趙兩國の會盟あり。趙王盃を擧給ふ時、秦王自酌を取て撃レ瓫畢ぬと、委細の記錄を書留て、趙王の恥をぞ洗ける。角て趙王歸らんとし給ける時、秦王傍に隱せる兵二十萬騎、甲

去程に文王崩じ給て、太子成王の御代に成にけり。成王又或時楚山に狩し給けるに、卞和尚先にも懲ず、草庵の内より這出て、二代の君に二の足を切れし故を語て、泣々此石を成王に奉けり。成王則玉磨を召て、是を琢かせらるゝに、其光天地に映徹して、無雙の玉に成にけり。是を行路に懸たるに、車十七輛を照しければ、照車の玉共名附け、是を宮殿にかくるに、夜十二衢を輝かせば、夜光の玉とも名附たり。誠に天上の摩尼珠海底の珊瑚樹も、是には過じとぞ見えし。此玉代々天子の御寶と成て、趙王の代に傳る。趙王是を重じて、趙璧と名を替て、更に身を放ち給はず。學窻に螢を聚ね共、書を照す光不ㇾ暗、輦路に月を不ㇾ得共、路を別つ影明也。此比天下大に亂て、諸侯皆威あるは弱を奪ひ、大なるは小を亡す世に成にけり。彼趙國の傍に、秦王とて威勢の王坐けり。秦王此趙璧の事を傳聞て、如何にもして奪取ばやとぞ被ㇾ巧ける。異國には會盟とて、隣國の王互に國の境に出合て、羊を殺して其血を啜り、天神地祇に誓て法を定め約を堅して、交を結ぶ事あり。此時に隣國に見落されぬれば、當座にも後日にも國を傾けられ、位を奪るゝ事ある間、互に賢才の臣、勇猛の士を具して、才を校べ武を争ふ習也。或時秦王會盟可ㇾ有とて、趙王に觸送る。趙王則日を定て國の境へぞ出合ける。

興の臣二十八人をいふ

太宗の十八學士―唐の太宗館を開き文籍を討論せしめんが爲に選びたる文學の士十八人をいふ

とことはに―永久に

に、光更に無りければ、玉磨是は玉にては候はず、唯尋常の石にて候也とぞ奏しける。武王大に忿て、さては朕を欺ける者也とて、卞和を召出して、其左の足を切て、彼石を背に負せて、楚山にこそ被追放けれ。卞和無罪して此刑に遭へる事を歎て、楚山の中に草庵を結て、此石を乍負、世に玉を知人のなき事をのみ悲て、年月久く泣居たり。其後三年有て、武王隱れ給しが、御子文王の御代に成て、文王又或時楚山に狩をし給ふに、草庵の中に人の泣聲あり。文王怪て泣く故を問給へば、卞和答て申さく、臣昔此山に入て、畑を打し時、一の石を求得たり。是世に無類程の玉なる間、先朝武王に奉たりしを、玉磨見知らずして、唯石にて候と申たりし間、我左の足を被斬進せて、不慮の刑に逢候き。願は此玉を君に獻じて、臣が無罪所を顯し候はんと申ければ、文王大に悅で、此石を又或玉磨にぞ琢かせられける。是も又不見知けるにや、是全く玉にては候はずと奏しければ、文王又大に忿て、卞和が右の足を切せて、楚山の中にぞ被棄ける。卞和兩足を切れて、五體苦を逼しか共、唯二代の君の眼拙き事をのみ悲て、終に百年の身の死を早くせん事を不痛、落る涙の玉までも、血の色にぞ成にける。角て二十餘年を過けるに、卞和尙命强面して、石を乍負、唯とことはに泣居たり。

吹毛の咎―いさゝかのとがなり
八元―堯の高辛氏の八人の才子
八愷―高陽子の八人の才子
十亂―論語に、武王曰、予有二亂臣十人一
漢の三傑―張良、蕭何、韓信
世祖の二十八將―後漢光武帝の中

ん事を望み、功少して忠賞世に越ん事を思しかば、唯師直、師泰が將軍御兄弟の執事として、萬心に任せたる事を猜み、折節に附ては、吹毛の咎を爭て、讒を構る事無二休時一。されども將軍も左兵衛督も、執事兄弟無ては、誰か天下の亂を鎭むる者可レ有と、異二于他一被レ思ければ、少々の咎をば耳にも不二聞入給一、唯佞人讒者の世を亂らん事を悲まる。夫天下を取て、世を治る人には、必賢才輔弼の臣下有て、國の亂を鎭め、君の誤を正す者也。所謂堯の八元、舜の八愷、周の十亂、漢の三傑、世祖の二十八將、太宗の十八學士、皆祿厚く官高しといへ共、諸に有て爭ふ心無りしかば、互に非を諫め國を鎭て、唯天下の無爲ならん事をのみ思へり。是をこそ呼で忠臣とは申に、今、高上杉の兩家中惡くして、動もすれば彼失を差ては其權を奪はんと、心に挾て思へる事、豈忠烈を存する人とせんや。言長して聞に懈ぬべしといへども、暫譬を取て愚なる事を述るに、昔異朝に卞和と申ける賤き者、楚山に畑を打けるが、廻り一尺に餘れる石の磨かば玉に可レ成を求得たり。是私に可レ用物に非ず、誰にか可レ奉と人を待ける處に、楚武王楚山に御狩をし給けるに、卞和此石を奉て、是は世に無レ類程の玉にて候べし。磨かせて御覽候べしとぞ申ける。武王大に悅で、則玉磨を召て是を被レ磨

建溪の風味 ―建溪は唐土の茶の名所なり

二佛の竝座 ―多寶如來と釋迦如來との獅子の半座を分けて坐するをいふ

時も更に不ㇾ絶佛法常住の燈も、威光と共に消はてぬ。又如何なる極惡の者か云出しけん。此邊の塔の九輪は、大略赤銅にてあると覺る、哀是を以て鑵子に鑄たらんに、如何によからんずらんと申けるを、越後守聞て、げにもと思ければ、九輪の寶形一下て。鑵子にぞ鑄させたりける。げにも人の云しに不ㇾ差、膚黛無くして、磨くに光玲々たり。芳甘を酌てたつる時、建溪の風味濃也。東坡先生が人間第一の水と美たりしも、此中よりや出たりけん。上の好む所に、下必隨ふ習なれば、相集る諸國の武士共、是を聞傳て、我劣らじと、塔の九輪を下て、鑵子を鑄させける間、和泉河内の間數百箇所の塔婆共、一基も更に直なるはなく、或は九輪を被ㇾ下、ます形計あるもあり。或は心柱を切れて、九層計殘るもあり。二佛の竝座は、瓔珞を曉の風に漂はせ、五智の如來は烏瑟を夜の雨に潤せり。唯守屋の逆臣二度此世に生て、佛法を亡さんとするにやと、怪き程にぞ見えたりける。

○上杉畠山讒二高家一事 附 廉頗藺相如事

此時上杉伊豆守重能、畠山大藏少輔直宗と云人あり。才短にして官位人よりも高から

打はらず共—過度に強ひてさせずとも
しやつ原—其奴たちの意

せとて、大覺寺殿の御寵愛の童に、吾護殿と云ける大力の兒を語て、無是非萱三位を殺させけるこそ不便なれ。此人聖廟の祠官として、文道の太祖たり。何事の神慮に違て、無實の死刑に逢ぬらん。唯是魏の禰衡が鸚鵡州の土に埋まれし昔の悲に相似たり。又此山庄を造ける時、四條大納言隆蔭卿の青侍、大藏少輔重藤、古見源左衞門と云ける者二人、此地を通けるが、立寄見るに、地を引人夫共の、汗を流し肩を苦しめて、休む隙なく使はれけるを見て、あなかはゆや、さこそ賤夫也とも、是程まで打はらず共あれかしと、慙愧してぞ過行ける。作事奉行しける者の中間是を聞て、何者にて候哉覽、此を通る本所の侍が、浩ける事を申て過候つると語ければ、越後守大に忿て、易き程の事哉。夫を勞らば、しやつ原を使ふべしとて、遙に行過たりけるを呼返して、夫の著たるつゞりを著替させ、立烏帽子を引こませて、さしも熱き夏の日に、鋤を取ては土を搔寄させ、石を掘ては簁にて運ばせ、終日に責使ければ、是を見る人々皆爪彈をして、命は能惜き者哉。恥を見んよりは死ねかしと云はぬ人こそ無りけれ。是等は尙しも小事也。今年石河川原に陣を取て、近邊を管領せし後は、諸寺諸社の所領、一處も本主に不充附、殊更天王寺の常燈料所の庄を押て知行せしかば、七百年より以來、一

枯葉の風｜津の國の難波の春は夢なれや葦の枯葉に風わたるなり

誘引水あらばと｜小町の歌古今集に、わびぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

芊々｜草の茂りたる貌

政大臣の御妹と嫁して、東夷の禮なきに下らせ給ふ、淺ましかりし御事なり。是等は尙も疎也。越後守師泰が惡行を傳聞こそ不思議なれ。東山の枝橋と云所に、山莊を造らんとて、此地の主を誰ぞと問に、北野の長者菅宰相在登卿の領知也と申ければ、軈て使者を立、此所を可賜由を所望しけるに、菅三位使に對面して、枝橋の事御山莊の爲に承候。上は、仔細あるまじきにて候。但當家の父祖代々此地に墳墓を卜て、五輪を立、御經を奉納じたる地にて候へば、彼墓じるしを他所へ移し候はん程は、御待候べしとぞ返事をしたりける。師泰是を聞て、何條其人惜まんずる爲にぞ、左樣の返事をば申らん。唯其墓共皆掘崩して捨よとて、軈て人夫を五六百人遣て、山を崩し木を伐棄て地を曳に、壘々たる五輪の下に、苔に朽たる尸あり。或は芊々たる斷碑の上、雨に消たる名もあり。靑塚忽に破て、白楊已に枯ぬれば、旅魂幽靈何にか吟ふらんと哀也。是を見て如何なるしれ者か仕たりけん、一首の歌を書て、引土の上にぞ立たりける。

無人のしるしの卒都婆掘棄て、墓なかりける家作哉。

越後守此落書を見て、是は何樣菅三位が所行と覺るぞ。當座の口論に事を寄て、刺殺

闕板―屋根板

舒葺―檜の皮を打平めて葺くをいふ

呉牛喘て云云―今の水牛なり、風俗通に水牛江淮の間に生ず故に呉牛といふとあり、この呉牛南地の炎熱をおそれ月を見てこれ日かと疑ひ喘ぐとの故事なり

多かりけり。常の法には、四品以下の平侍武士なんどは、闕板打ぬ舒葺の家にだに居ぬ事にてこそあるに、此師直は、一條今出川に故兵部卿親王の御母堂、民部卿三位殿の住荒し給し古御所を點じて、棟門唐門四方にあけ、釣殿、渡殿、泉殿、棟梁高く造雙て、奇麗の壯觀を逞くせり。泉水には伊勢島雜賀の大石共を集たれば、車輾て軸を摧き、呉牛喘て舌を垂る。樹は月中の桂、仙家の菊、吉野の櫻、尾上の松、露霜染し紅の八入岡の下紅葉、西行法師が古、枯葉の風を詠たりし難波の葦の一村、在原中將の東の旅に露分し宇津山邊の蘿楓、名所々々の風景を、さながら庭に集たり。又月卿雲客の御女などは、世を浮草の寄方無て、誘引水あらばと打佗ぬる折節なれば、せめてはさも如何せん。中も無止事宮腹など、其數を不知、此彼に隱置奉て、毎夜通ふ方多かりしかば、執事の宮廻に、手向を受ぬ神もなしと、京童部なんどが笑種なり。加樣の事多かる中にも、殊更冥加の程も如何と覺てうたてかりしは、二條前關白殿の御妹、深宮の中に被冊、三千の數にもと思召たりしを、師直盜出し奉て、始は少し忍たる樣なりしが、後は早打顯れたる振舞にて、憚る方も無りけり。斯て年月を經しかば、此御腹に男子一人出來て、武藏五郎とぞ申ける。さこそ世の末ならめ。忝も大織冠の御末太

原本五年に作る天正本に據て改む

夜の衣を返せども—古今集小野小町の歌に、いとせめて戀しき時はうばたまの夜の衣をかへしてぞぬる

左衛門正儀計生殘たりと聞えしかば、此次に殘る所なく、皆退治せらるべしとて、高越後守師泰三千餘騎にて、石川河原に向城を取て、互に寄つ被寄つ、合戰の止隙もなし。吉野の主上は、天河の奧賀名生と云所に、僅なる黑木の御所を造て御座あれば、彼唐堯虞舜の古、茅茨不剪、柴椽不削、淳素の風も斯やと思知れて、誠なる方も有ながら、女院皇后は、柴葺庵のあやしきに、軒漏雨を禦ぎかね、御袖の淚ほす隙なく、月卿雲客は、木の下岩の陰に、松葉を葺かけ、苔の莚を片敷て、身を置く宿とし給へば、高峯の嵐吹落て、夜の衣を返せども、露の手枕寒ければ、昔を見する夢もなし。況乎其郎從眷屬たる者は、暮山の薪を拾ては、雪を戴くに膚寒く、幽谷の水を掬ては、月を擔ふに肩やせたり、斯ては一日片時も、有ながらへん心地もなけれ共、さすがに消ぬ露の身の、命あらばと思ふ世に、憑を懸てや殘らん。

○執事兄弟奢侈事

夫富貴に侈り功に驕て、終を不愼は人の尋常皆ある事なれば、武藏守師直今度南方の軍に打勝て後、彌心奢り、擧動思ふ樣に成て、仁義をも不顧、世の嘲哢をも知ぬ事共

に同じ、佛の次に位する號なり
三鈷―鈷は天竺の兵器なり、その兩端の三叉なるをいふ
貞和四年―

の形にて、地より湧出し給たりしを、優婆塞頭を掉て、未來惡世の衆生を濟度せんとならば、加樣の御形にては叶まじき由を被申ければ、則伯耆の大山へ飛去給ぬ。其後大勢忿怒の形を顯し、右の御手には三鈷を握て、臂をいらゝげ、左の御手には、五指を以て、御腰を押へ給ふ。一睨大に忿て魔障降伏の相を示し、兩脚高く低て天地經緯の德を現し給へり。示現の貌、尋常の神に替て、尊像を錦帳の中に鎖されて、其湧出の體を祕せん爲に、役の優婆塞と、天曆の帝と、各手自二尊を作副て、三尊を安置し奉給ふ。惡愛を六十餘州に示して、彼を是し此を非し、賞罰を三千世界に顯して、人を惱し物を利す。惣て神明權迹を垂て七千餘座、利生の新なるを論ずれば、無二亦無三の靈驗也。斯る奇特の社壇佛閣を、一時に燒拂ぬる事、誰か悲を含まざらん。されば主なき宿の花は、唯露に泣ける粧をそへ、荒ぬる庭の松までも、風に吟ずる聲を呑。天の忿何れの處にか歸せん。此惡行身に留らば、師直忽に亡なんと、思はぬ人は無りけり。

○賀名生皇居事

貞和四年正月五日、四條繩手の合戰に、和田楠が一族皆亡て、今は正行が舍弟次郎

にて清行の弟也

薩埵—菩薩

に至給ふに、第一の冥官、一人の倶生神を相副て、此上人に六道を見せ奉る。鐵窟苦所と云所に至て見給ふに、鐵湯中に玉冠を著て、天子の形なる罪人あり、手を擧て上人を招給ふ。如何なる罪人なるらんと怪て、立寄て見給へば、延喜帝にてぞ御座しける。上人御前に跪て、君御在位の間、外には五常を正して仁義を專にし、內には五戒を守て慈悲を先とし御座しかば、如何なる十地等覺の位にも到らせ給ぬらんとこそ存候つるに、何故に斯る地獄には墮させ給候やらんと尋申されければ、帝は御淚を拭はせ給て、吾在位の間、萬機不怠、撫民治世しかば、一事も誤る事無りしに、時平が讒を信じて、無罪菅丞相を流したる故に、此地獄に墮たり。上人今冥途に赴給ふといへ共、非業なれば蘇生すべし。朕上人と師資の契不淺、早娑婆に歸給はゞ、菅丞相の廟を建て、化導利生を專にし給べし。さてぞ朕が此苦患をば可免と、泣泣勅宣有けるを、上人具に承て、堅く領狀申と思へば、中十二日と申に、上人息出給にけり。冥途にて正く勅を承りし事なればとて、則吉野山に廟を建、利生方便を施し給し天神の社壇是也。藏王權現と申は、昔役優婆塞、濟度利生の爲に、金峰山に一千日籠て、生身の薩埵を祈給しに、此金剛藏王、先柔和忍辱の相を顯し、地藏菩薩

淨見原天皇—天武天皇
大友宮—弘文天皇
日藏上人—俗姓は三善

手の宮の御前を過させ給ける時、寮の御馬より下させ給て、御涙の中に、一首かくこそ思召つゞけさせ給ける。

憑かひ無に附ても誓てし、勝手の神の名こそ惜けれ。

異國の昔は、唐玄宗皇帝、楊貴妃故に安祿山に傾られて、蜀の劍閣山に幸なる。我朝の古は、淨見原天皇、大友宮に襲はれて、此吉野山に隱給き。是皆逆臣暫世を亂るといへども、終には聖主大化を施されし先蹤なれば、斯てはよも有はてじと思召准る方は有ながら、貴賤男女周章騷で、こはそも何にか暫の身をも可隱と、泣悲む有樣を御覽ぜらるゝに、叡襟更に無休時。去程に武藏守師直、三萬餘騎を率して吉野山に押寄せ、三度閧聲を揚たれ共、敵なければ音もせず。さらば燒拂へとて、皇居竝卿相雲客の宿所に火を懸たれば、魔風盛に吹懸て、二丈一基の笠鳥居、二丈五尺の金の鳥居、金剛力士の二階の門、北野天神示現の宮、七十二間の廻廊、三十八所の神樂屋、寶藏、竈殿、三尊光を和げて、萬人頭を傾る金剛藏王の社壇まで、一時に灰燼と成はて、煙蒼天に立上る。淺ましかりし有樣也。抑此北野天神の社壇と申は、天慶四年八月朔日に、笙の岩屋の日藏上人頓死し給たりしを、藏王權現左の御手に乗せ奉て、炎魔王宮

○吉野炎上事

去程に楠が館をも燒拂ひ、吉野の君をも可レ奉レ取とて、越後守師泰六千餘騎にて、正月八日和泉の境沛を立て、石川河原に先向城をとる。武藏守師直は、三萬餘騎の勢を率して、同十四日平田を立て、吉野の麓へ押寄る。其勢已に吉野郡に近附ぬと聞えければ、四條中納言隆資卿、急ぎ黑木の御所に參て、昨日正行已に討れ候。又明日師直皇居へ襲來仕由聞え候。當山要害の便稀にして、可レ防兵更に候はず。今夜急ぎ天河の奧賀名生の邊へ御忍候べしと申て、三種の神器を內侍典司に取出させ、寮の御馬を庭前に引立たれば、主上は萬思召分たる方なく、夢路をたどる心地して、黑木御所を立出させ給へば、女院、皇后、准后、內親王、宮々を始進せて、內侍、上童、北政所、月卿雲客、郎吏、從官、諸寮頭、八省輔、僧正、僧都、兒、房官に至まで、取物も不レ取敢、周章騷ぎ倒迷て、習はぬ道の岩根を步み、重なる山の雲を分て、吉野の奧へ迷入る。思へば此山中とても、心を可レ留所ならねども、年久く住馴ぬる上、行末は猶山深き方なれば、さこそは住うからめと思遣に附ても、泪は袖にせき敢ず。主上勝

引合—鎧の右腋の引合目

候こそ、無情覺候へ。返され候へ。見參に入んと、詞を懸ければ、和田新兵衛打笑て、返すに難き事かとて、四尺六寸の太刀の、貝しのぎに血の著たるを、打振て走懸る。忠實一騎合の勝負叶はじとや思けん、馬をかけ開て引返す。忠實留れば正朝又落、落行ば忠實又追懸、追懸れば止り、一里許を過る迄、互不討不被討して、日已に夕陽に及ばんとす。斯る處に青木次郎、長崎彦九郎二騎、箙に矢少し射殘して馳來る。新兵衛を懸のけ〱射ける矢に、草摺の餘引合の下、七筋まで射立られて、新兵衛遂に忠實に首をば取れにけり。惣て今日一日の合戰に、和田楠が兄弟四人、一族二十三人、相從ふ兵百四十三人、命を君臣二代の義に留て、名を古今無雙の功に殘せり。先年奥州の國司顯家卿、安部野にて討れ、武將新田左中將義貞朝臣、越前にて亡し後は、遠國に宮方の城郭少々有といへ共、勢未振はざれば、今更驚くに不足、唯此楠計こそ、都近き切所に威を逞くして、兩度まで大敵を靡かせぬれば、吉野の君も、魚の水を得たる如、叡慮を令悅、京都の敵も、虎の山に靠る恐懼を成つるに、和田楠が一類皆片時に亡びはてぬれば、聖運已に傾ぬ。武德誠に久しかるべしと、思はぬ人も無りけり。

立て—矢のために身すくみて動かれざるなり

切死—敵を切りまくりつゝ死を遂ぐるなり

三十餘人の兵共、矢三筋四筋射立られぬ者も無りければ、今は是までぞ。敵の手に懸るなとて、楠兄弟刺違へ、北枕に伏ければ、自餘の兵三十二人、思々に腹搔切て、上が上に重り伏す。和田新發意如何して紛たりけん。師直が兵の中に交て、武藏守に刺違て死んと近附けるを、此程河内より降參したりける湯淺本宮太郎左衞門と云ける者、是を見知て、和田が後へ立廻り、諸膝切て倒る所を走寄て、頸を搔んとするに、和田新發意朱を灑ぎたる如なる大の眼を見開て、湯淺本宮をちやうど睨む。其眼終に塞ずして、湯淺に首をぞ取られける。大剛の者に睨まれて、湯淺臆してや有けん、其日より病附て、身心惱亂しけるが、仰けば和田が忿たる顏天に見え、俯けば新發意が睨める眼地に見えて、怨靈五體を責しかば、軍散じて七日と申に、湯淺あがき死にぞ死にける。大塚掃部助手負たりけるが、楠猶後に有共しらで、放馬の有けるに打乘て遙に落延たりけるが、和田楠討れたりと聞て、唯一騎馳歸、大勢の中へ懸入て、切死にこそ死にけれ。和田新兵衞正朝は、吉野殿に參て、事の由を申さんとや思けん、唯一人鎧一縮して、步立に成て、太刀を右の脇に引側め、敵の首一つ取て、左の手に提て、東條の方へぞ落行ける。安保肥前守忠實唯一騎馳合て、和田楠の人々皆自害せられて候に、見捨て落られ

○楠正行最期事

去程に師直と楠とが間一町許に成にけり。是ぞ願ふ處の敵よと見澄して、魯陽二度白骨を連て、韓と難を構へ戰ける心も、是には過じと勇悦で、千里を一足に飛で懸らんと、心計は早けれども、今朝の巳刻より申時の終まで、三十餘度の戰に、息絶氣疲るゝのみならず、深手淺手負ぬ者も無りければ、馬武者を追攻て、可討樣ぞ無りける。され共多の敵共、四角八方へ追散て、師直七八十騎にて控たれば、何程の事か可有と思ふ心を力にて、和田、楠、野田、關地良圓、河邊石掬丸、我先々々とぞ進たる。餘に辭理なく懸られて、師直已に引色に見ける處に、九國住人須々木四郎とて、強弓の矢つぎ早、三人張に十三束二伏、百歩に柳の葉を立て、百矢をはづさぬ程の射手の有けるが、人の解捨たる箙尻籠胡簶を掻抱く許取集て、雨の降る如く、矢坪を指てぞ射たりける。一日著暖たる物具なれば、中と當る矢、篦深に立ぬは無りけり。楠次郎眉間ふえのはづれ射られて、拔程の氣力もなし。正行は左右の膝口三所、右の頬さき、左の目尻、篦深に射られて、其矢冬野の霜に伏たるが如く折懸たれば、矢ずくみに立てはたらかず。其外

韓と難を構へ—原本韓構に作る、參考本に據て改む

尻籠—矢壺なり、矢籠とも書く

矢ずくみに

して、内冑にからみたる鬢の髪を押のけ、血眼に成て遥に北の方を見に、輪違の旗一流打立て、清げなる老武者を大將として、七八十騎が程控たり。何樣師直とぞ覺る。いざ懸らんと云處に、和田新兵衛鎧の袖を引へて、暫思樣あり。餘に勇み懸て大事の敵を打漏すな。敵は馬武者也。我等は徒立也。追は敵定て可レ引。ひかば何として敵を可レ打取。事の樣を案ずるに、我等怺で引退く眞似をせば、此敵氣に乘て追懸つと覺るぞ。敵を近々と引寄て、其中に是ぞ師直と思はん敵を、馬の諸膝薙で切居ゑ、落る處にて、細頸打落し、討死せんと思ふは如何にと云ければ、被二打殘一たる五十餘人の兵共、此議可レ然と一同して、楯を後に引かづき、引退く體をぞ見せたりける。師直思慮深き大將にて、敵のたばかつて引處を推して、些も馬を動かさず。高播磨守西なる田中に三百餘騎にて控たるが、是を見て引敵ぞと心得て、一人も餘さじと追懸たり。元來剛なる和田楠が兵なれば、敵の太刀の鋒の鎧の總角、兜の錣二つ三つ打あたる程近附て、一同に喚と喚て、磯打波の岩に當て返るが如く取て返し、火出る程ぞ戰ける。高播磨守が兵共、可二引返一程の隙もなければ、矢庭に討るゝ者五十餘人、散々に切立られて、馬をかけ開て逃けるが、本陣をも馳過て、二十餘町ぞ引たりける。

金物―鎧の裾金物をいふ

に不ㇾ及。其後穆公軍に打負て、大敵に囚はれ、已に討れんとし給し時、馬を殺して食たりし兵共三十餘人、穆公の命に代り戰ける程に、大敵皆散じて、穆公死を逃れ給にけり。されば古も今も、大將たらん人は、皆罰をば輕く行ひ宥め、賞をば厚く與しむ。若昔の穆公馬を惜み給はゞ、大敵の圍を出給はんや。今の師直鎧を不ㇾ與ば、上山命に代らんや。情は人の爲ならずとは、加樣の事をぞ申べき。楠上山を討て、其首を見るに、太く清げなる男也。鎧を見るに、輪違を金物に彫透したり。さては無二仔細一武藏守を討てけり。多年の本意今日已に達しぬ。是を見よや人々とて、此首を中に投上ては請取、請取ては手玉についてぞ悅ける。楠が弟次郎走寄て、如何にやあたら首の損じ候に、先旗の蟬本に著て、敵御方の者共に見候はんと云て、太刀の鋒に指貫、差上て是を見るに、師直には非ず、上山六郎左衞門が首也と申ければ、楠大に腹立して、此首を投て、上山六郎左衞門と見はひが目か、汝は日本一の剛の者哉。我君の御爲に無雙の朝敵也。乍ㇾ去餘に剛に見つるがやさしさに、自餘の首共には混ずまじきぞとて、著たる小袖の片袖を引切て、此首を押裹で、岸の上にぞ指置たる。鼻田彌次郎膝口を被ㇾ射、すくみて立たりけるが、さては師直未討れざりけり。安からぬ者哉。師直何にか有らんと云聲を力に

に異なることなし

いしうも—

能くこその意

高手小手—苟く人を縛りあぐるさまにいふ

奪止んと引合ける時、師直是を聞て馬より飛で下り、若黨をはたと睨で、無云甲斐者の振舞哉。唯今師直が命に代らん人々に、縦千兩萬兩の鎧也共、何か惜かるべきぞ。こゝのけと制して、いしうもめされて候者哉と、却て上山を被感ければ、上山誠にうれしき氣色にて、此詞の情を思入たる其心地、いはねども色に現れたり。されば事の義を不知して、鎧を惜みつる若黨は、軍の難儀なるを見て、先一番に落けれ共、情を感ずる上山は、師直が其命に代て、討死しけるぞ哀なる。加樣の事異國にも其例あり。秦穆公と申す王、六國の諸侯と戰けるに、穆公の軍破て、他國へ落給ふ。敵の追事甚急にして、乘給へる馬疲れにければ、後にさがりたる乘替の馬を待給ふ處に、穆公の舍人共馬をば引て不來して、疲れたる兵共二十餘人、皆高手小手に縛て、軍門の前に引居たり。穆公自ら事の由を問給ふに、舍人答て申樣、召替の御馬を引進り候處に、戰に疲れ食に飢たる兵共二十餘人、此御馬を殺して、皆食て候間、死罪に行ひ候はんが爲に、生虜て參て候とぞ申ける。穆公さしも忿れる氣色なく、死せる者は二度生べからず。縦二度生る共、獸の卑きを以て、人の貴きを失はんや。我れ聞く、飢て馬を食せる人は、必病む事有とて、其兵共に酒を飲せ藥を與て、醫療を加られける上は、敢て罪科

すげなう―ぶあいそに

まさなう―正なくにて、見苦しくの意也

きせなが―大將の著る鎧をいふ、製作常の鎧

後に控けれ。斯る處に土岐周濟房の手の者共は、皆打散され、我身も膝口切れて血にまじり、武藏守の前を引て、すげなう通けるを、師直屹と見て、日來の荒言にも不ㇾ似、まさなうも見え候者哉と、言を懸られて、何か見苦候べき。さらば討死して見せ申さんとて、又馬を引返し、敵の眞中へ蒐入て、終に討死してげり。是を見て雜賀次郎も、蒐入討死す。已に楠と武藏守と、あはひ僅に半町許隔たれば、すはや楠が多年の本望、爰に遂ぬと見たる處に、上山六郎左衛門、師直の前に馳塞り、大音聲を揚て申けるは、八幡殿より以來源家累代の執權として、武功天下に顯れたる高武藏守師直是に有と名乘て、討死しける其間に、師直遙に隔て、楠本意を遂ざりけり。抑多勢の中に、上山一人師直が命に代て、討死しける所存何事ぞと尋れば、唯一言の情を感じて、命を輕くしけるとぞ聞えし。唯今楠此陣へ可ㇾ寄とは不ㇾ思寄、上山閑に物語せんとて、執事の陣へ行ける處に、東西南北騷ぎ色めきて、敵寄たりと打立ける間、上山我屋に歸り物具せん逗留無りければ、師直がきせながの料に、同毛の鎧を二兩まで置たりけるを、上山走寄て唐櫃の緒を引切て、鎧を取て肩に打懸けるを、武藏守が若黨、鎧の袖を控て、是は如何なる御事候ぞ。執事の御きせながにて候者を、案内をも申され候はでと云て、

いらゝげ―いからかして

左衛門、松田備前次郎、宇津木平三、曾我左衛門、多田院御家人を始として、武藏守の前後左右に控たる究竟の兵共七千餘騎、我先に打取らんと、喚叫て蒐出たり。楠是に些も不臆して、暫息繼んと思ふ時は、一度に颯と並居て、鎧の袖をゆり合せ、思樣に射させて、敵近附ば同時にはつと立あがり、鋒を雙て跳蒐る。一番に懸寄ける南次郎左衛門尉、馬の諸膝薙れて落る處に、起しも立ず討れにけり。二番に劣らじと蒐入ける松田次郎左衛門、和田新發意に寄合て、敵を切らんと差うつぶく處を、和田新發意長刀の柄を取延て、松田が冑の鉢をはたとうつ。打れて錣を傾る處に、內冑を突れて、馬より倒に落て討れにけり。此外目の前に切て落さるゝ者五十餘人、小腕打落されて朱になる者二百餘騎、追立々々攻られて、叶はじとや思ひけん、七千餘騎の兵共、開靡て引けるが、淀八幡をも馳過て、京まで逃るも多かりけり。此時若武藏守一足も退く程ならば、逃る大勢に引立られて、洛中までも追著られぬと見けるを、少も漂ふ氣色無して、大音聲を揚て、蓬し返せ。敵は小勢ぞ。師直爰にあり。見捨て京へ逃たらん人、何の面目有てか將軍の御目にも懸べき。運命天にあり。名を惜まんと思はざらんやと、目をいらゝげ齒嚙をして、四方を下知せられけるにこそ、恥ある兵は引留りて、師直の前

虎韜・龍鱗——ともに兵法の名なり

竹葉——もと酒の意、ここは辨當の義なり

章四角八方へ懸立られて、一所へ又も打寄らず。三番に千葉介、宇都宮遠江入道、同三河入道、兩勢并て五百餘騎、東西より相近て、手さきをまくりて、中を破らんとするに、楠敢て破られず。敵虎韜に連て圍めば、虎韜に分れて相當り、龍鱗に結で蒐れば、龍鱗に進で戰ふ。三度合て三度分れたるに、千葉宇都宮が兵若干討れて引返す。此時和田楠が勢百騎討れて、馬に矢の三筋四筋射立られぬは無りければ、馬を蹈放て徒立に成て、とある田の畔に後を差當て、胡籙に差たる竹葉取出して、心閑に兵粮仕ひ、機を助てぞ並居たる。是程に思切たる敵を、取籠て討んとせば、御方の兵若干亡ぬべし。唯後をあけて、おちば落せとて、數萬騎の兵皆一處に打寄て、取巻體をば見せざりけり。されば、楠縱小勢也とも、落ば落べかりけるを、初より今度の軍に、師直が首を取て返り參ぜずは、正行が首を六條河原に曝されぬと被思召候へと、吉野殿にて奏し申たりしかば、其言をや恥たりけん、又運命爰にや盡けん、和田も楠も諸共に、一足も後へは不退、唯師直に寄合て勝負を決せよと、聲々に訇り呼り、閑に歩近附たり。是を見て、細川讃岐守頼春、今川五郎入道、高刑部大輔、高播磨守、南遠江守、同次郎左衞門尉、佐々木六角判官、同黒田判官、土岐周濟房、同明智三郎、荻野尾張守朝忠、長九郎

過去帳―如意輪堂にて決死の人々その名を壁板に記したるをいふ

自餘の敵にはよも目も懸じ。大將武藏守の旗を見てぞ蒐らんずらん。去程ならば少し遣過し、後を塞で討んと議して、其勢三千餘騎を率して、飯盛山の南なる峯に打上て、旗打立控たりけるが、楠が二陣の勢の兩度數刻の戰に、馬疲れ氣屈して、少し猶豫したる處を見澄して、三千餘騎を三手に分て、同時に鬨をどつと作て蒐下す。楠が二陣の勢暫支て戰けるが、敵は大勢也御方は疲たり、馬強なる新手に懸立られて、叶はじとや思けん、大半討れて殘る勢南を差て引て行。元來小勢なる楠が兵、後陣既に破て、殘留る前陣の勢、僅に三百餘騎にも足じと見えたれば、怺じと見る處に、楠帶刀和田新發意未討れずして此中に有ければ、今日の軍に討死せんと思て、過去帳に入たりし連署の兵百四十三人、一所に犇々と打寄て、少しも後陣の破たるをば不顧。唯敵の大將師直は、後にぞ控て有らんと、目に懸てこそ進けれ。武藏守が兵は、御方軍に打勝て、敵しかも小勢なれば、乘機勇進で、是を打取んとて、先一番に細川阿波將監淸氏、五百餘騎にて相當。楠が三百騎の勢些も不滯、相蒐に懸て、面も不振戰ふに、細川が兵五十餘騎討れて、北をさして引退く。二番に仁木左京大夫頼章、七百餘騎にて入替て攻るに、又楠が三百餘騎、轡を雙て眞中に懸入り、火を散して戰ふに、左京大夫頼

と、喚叫で相戰ふに、田野ひらけ平にして、馬の懸引自在なれば、徒立の兵汗馬に被懸惱、白旗一揆の兵三百餘騎、大略討れにければ、縣下野守も、深手五所まで被て、叶はじとや思けん、被討殘たる兵と、師直の陣へ引て去。二番に戰屈したる楠が勢を、弊に乘て討んとて、武田伊豆守七百餘騎にて進だり。楠が二陣の勢千餘騎にて蒐合ひ、二手に颯と分て、一人も餘さじと取籠る。汗馬東西に馳違、追つ返つ旌旗南北に開分れて、卷つ卷られつ互に命を惜まで、七八度まで揉合たるに、武田が七百餘騎殘少なに討るれば、楠が二陣の勢も、大半疵を被て、朱に成てぞ控たる。小旗一揆の衆は、始より四條中納言隆資の僞て控たる見せ勢に對して、飯盛山に打上て、大手の合戰をば徒によそに直下て居たりけるが、楠が二陣の勢の戰疲て、麓に控たるを見て、小旗一揆の中より、長崎彥九郎資宗、松田左近將監重明、舍弟七郎五郎、子息太郎三郎、須々木備中守高行、松田小次郎、河勾左京進入道、高橋新左衞門尉、靑砥左衞門尉、有元新左衞門、廣戶彈正左衞門、舍弟八郎次郎、其弟太郎次郎以下勝れたる兵四十八騎、小松原より懸下て、山を後に當て、敵を麓に直下て、懸合懸合戰ふに、楠が二陣千餘騎僅の敵に被遮、進かねてぞ見えたりける。佐々木佐渡判官入道道譽は、楠が軍の疲足、推量るに

新發意—新に入道したるものゝ稱

犬居—四つ這ひに倒れる

得て、射手を分旗を進て、坂中までおり下て、嶮岨に待て戰んと見繕ふ處に、楠帶刀正行、舍弟正時、和田新兵衞高家、舍弟新發意賢秀、究竟の兵三千餘騎を率して、霞隱より驀地に四條繩手へ押寄せ、先斥候の敵を懸散さば、大將師直に寄合て、などか勝負を決せざらんと、少も擬議せず進だり。縣下野守は、白旗一揆の旗頭にて、遙の峯に控たりけるが、菊水の旗唯一旒、無是非武藏守の陣へ懸入んとするを見て、北の岡より馳下、馬よりひた〳〵と飛下て、唯今敵の驀地に懸入らんとする道の末を、一文字に遮て、東西に颯と立渡り、徒立に成てぞ待懸たる。勇氣尤盛なる楠が勢、僅に徒立なる敵を見て、何故か些もやすらふべき。三手に分たる前陣の勢五百餘騎、閑々と打て蒐る。京勢の中秋山彌次郎、大草三郎左衞門二人、眞前に進で射落さる。居野七郎是を見て、敵に氣を附じと、秋山が伏たる上をつと飛越て、爰をあそばせと、射向の袖を敲て、小跳して進だり。敵東西より差合て、雨の降樣に射る矢に、是も內冑草摺のはづれ二所、篦深に被」射、太刀を倒につき、其矢を拔んとすくみて立たる所を、和田新發意つと蒐寄て、冑の鉢をしたゝかにうつ。打れて犬居に倒れければ、和田が中間走寄て、首搔切て差上たり。是を軍の始として、楠が騎馬の兵五百餘騎と、縣が徒立の兵三百餘人

山を拔く力―項羽の詩に力拔レ山兮氣蓋レ世時不レ利兮騅不レ逝云云

らん。寄ては可レ悪、被レ寄ては可レ有レ便とて、三軍五所に分れ、烏雲の陣をなして、陰に設け陽に備ふ。白旗一揆の衆には、縣下野守を旗頭として、其勢五千餘騎飯盛山に打上て、南の尾崎に控たり。大旗一揆の衆には、河津高橋二人を旗頭とし、其勢三千餘騎、秋篠や外山の峯に打上て、東の尾崎に控たり。武田伊豆守は、千餘騎にて四條縄手の田中に、馬の懸場を前に残て控たり。佐々木佐渡判官入道は、二千餘騎にて、伊駒の南の山に打上り、面に疊楯五百帖突並べ、足輕の射手八百人馬よりおろして、打て上る敵あらば、馬の太腹射させて、猶豫する處あらば、眞倒に懸落さんと、後に馬勢控たり。大將武藏守師直は、二十餘町引殿て、將軍の御旗の下に輪違の旗打立て、前後左右に騎馬の兵二萬餘騎、馬廻に徒立の射手五百人、四方十餘町を相支て、如二稻麻一打圍たり。手分の一揆互に、勇爭て、陣の張樣嚴しければ、項羽が山を拔く力、魯陽が日を返す勢有共、此堅陣に懸入て、可レ戰とは見えざりけり。去程に正月五日の早旦に、先四條中納言隆資卿大將として、和泉紀伊國の野伏二萬餘人引具して、色々の旗を手々に差上、飯盛山にぞ向ひ合ふ。是は大旗小旗兩一揆を麓へおろさで、楠を四條縄手へ寄させん爲の謀也。如レ案大旗小旗の兩一揆、是をたばかり勢とは不レ知、是ぞ寄手なるらんと心

ければ、正行頭を地に著て、兎角の勅答に不レ及、唯是を最期の參内也と思定て退出す。正行、正時、和田新發意、舍弟新兵衞、同紀六左衞門子息二人、野田四郎子息二人、楠將監、西河子息、關地良圓以下、今度の軍に一足も不レ引、一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參て、今度の軍難儀ならば、討死仕べき暇を申て、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書連て、其奥に、

返らじと兼て思へば梓弓、なき數にいる名をぞとゞむる。

と一首の歌を書留め、逆修の爲と覺くて、各髻を切て佛殿に投入、其日吉野を打出て、敵陣へとぞ向ける。

逆修—豫習と同じ、生前に豫め死後の佛事を營むをいふ

○四條繩手合戰事附上山討死事

師直師泰は、淀八幡に越年して、猶諸國の勢を待調て、河内へは可レ向と議しけるが、楠已に逆寄にせん爲に、吉野へ參て暇申し、今日河内の往生院に著ぬと聞えければ、師泰先正月二日淀を立て、二萬餘騎和泉の境浦に陣を取る。師直も翌日三日の朝、八幡を立て、六萬餘騎四條に著く。此儘驅て相近附べけれ共、楠定て難所を前に當てぞ相待

有待の身—
凡夫の身

合戰の場へは伴はで、河内へ歸し、死殘候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に即進せよと申置て死て候。然に正行正時已に壯年に及候ぬ。此度我と手を碎き合戰仕候はずは、且は亡父の申しゝ遺言に違ひ、且は武略の無云甲斐謗に可落覺候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に犯され早世仕事候なば、唯君の御爲には不忠の身と成、父の爲には不孝の子と可成にて候間、今度師直師泰に懸合、身命を盡し合戰仕て、彼等が頭を正行が手に懸て取候歟、正行正時が首を彼等に被取候か、其二の中に戰の雌雄を可決にて候へば、今生にて今一度君の龍顏を奉拜爲に、參内仕て候と申しも敢ず、涙を鎧の袖にかけて、義心其氣色に顯れければ、傳奏未奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞぬらされける。主上則南殿の御簾を高く捲せて、玉顏殊に麗く、諸卒を照臨有て、正行を近く召て、以前兩度の戰に勝つ事を得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮先憤を慰する條、累代の武功、返々も神妙也。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退當度變化應機事は、勇士の心とする處なれば、今度の合戰手を下すべきに非ずといへ共、可進を知て進むは、爲不失時也。可退を見て退は、爲全後也。朕以汝股肱とす。愼で命を可全と被仰出

分事定て、未一日も不レ過に、越後守師泰は、手勢三千餘騎を率して、十二月十四日の早旦に、先淀に著く。是を聞て馳加る人々には、武田甲斐守、逸見孫六入道、長井丹後入道、厚東駿河守、宇都宮三河入道、赤松信濃守、小早河備後守、都合其勢二萬餘騎、淀、羽束師、赤井、大渡の在家に居餘て、堂舍佛閣に充滿たり。同二十五日武藏守手勢七千餘騎を率して、八幡に著く。此手に馳加る人々には、細川阿波將監清氏、仁木左京大夫頼章、今川五郎入道、武田伊豆守、高刑部大輔、同播磨守、南部遠江守、同次郎左衞門尉、千葉介、宇都宮遠江入道、佐々木佐渡判官入道、同六角判官、同黒田判官、長九郎左衞門尉、松田備前三郎、須々木備中守、宇津木平三、曾我左衞門、多田院御家人、源氏二十三人、外樣大名四百三十六人、都合其勢六萬餘騎、八幡、山崎、眞木、葛葉、鹿島、神崎、櫻井、水無瀨に充滿せり。京勢如二雲霞一淀八幡に著ぬと聞えしかば、楠帶刀正行舍弟正時一族打連て、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申けるは、父正成尫弱の身を以て、大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休め進せ候し後、天下無レ程亂て、逆臣西國より攻上り候間、危きを見て命を致す處、兼て思定候ける歟に依て、遂に攝州湊河にして討死仕候了。其時正行十三歳に罷成候しを、

色代―人に禮する、ここは深切に禮をつくせし義なり

太平記　卷第二十六

○正行參吉野事

安部野の合戰は、霜月二十六日の事なれば、渡邊橋よりせき落されて、流るゝ兵五百餘人、無甲斐命を楠に被助て、河より被引上たれ共、秋霜肉を破り、曉の氷膚に結で、可生共不見けるを、楠有情者也ければ、小袖を脫替させて身を暖め、藥を與て疵を令療。如此四五日皆勞て、馬に乘る者には馬を引、物具失へる人には物具をきせて、色代してぞ送ける。されば乍敵其情を感ずる人は、今日より後心を通ぜん事を思ひ、其恩を報ぜんとする人は、軈て彼手に屬して後、四條繩手の合戰に、討死をぞしける。さても今年兩度の合戰に、京勢無下に打負て、畿內多く敵の爲に犯し奪はれ、遠國又蜂起しぬと告ければ、將軍左兵衞督の周章、唯熱湯にて手を濯が如し。今は末々の源氏國々の催勢なんどを向ては、可叶共不覺とて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國中國東山東海二十餘箇國の勢をぞ被向ける。軍勢の手

給けり。落ては誰が爲に命を可惜とて、唯一騎天神松原より引返し、向ふ敵に矢二筋射懸て、腹掻切て死にけり。其外の兵共、親討れ共子は不知、主討死すれ共郎從是を不助、物具を脱棄、弓を杖に突て、夜中に京へ逃上る、見苦しかりし分野也。

引しさる―引き退くなり

守木―子守の背負へる子に腰かけさする木

郎太郎、同四郎次郎、兄弟二騎、犬飼六郎、主從三騎返合せて討れにけり。二陣に控たる土岐周濟房、佐々木六郎左衛門三百餘騎にて、安部野の南に懸出で、暫支て戰けるが、目賀田、馬淵の者共三十八騎、一所にて討れにける間、此陣をも被レ破て、共に天王寺へと引しさる。一陣二陣如レ此なりしかば、濱の手も天王寺の勢も、大河後にあり、兩陣前に破れぬ、敵に橋を引れなば、一人も生て歸る者不レ可レ有、先橋を警固せよとて、渡邊を差て引けるが、大勢の靡立たる習にて、一度も更に不二返得一、行先狹き橋の上を、落とも云ずせき合たり。山名伊豆守は、我身深手を負のみならず、馬の三頭を二太刀切れて、馬は弱りぬ、敵は手繁く追懸る、今は落延じとや被レ思けん、橋爪にて已に腹を切んとせられけるを、河村山城守唯一騎返合て、近附敵二騎切て落し、三騎に手を負て、暫支たりける間に、安田彈正走寄て、如何なる事にて候ぞ。大將の腹切所にては候はぬ者をと云て、己が六尺三寸の太刀を守木に成し、鎧武者を鎧の上に搔負て、橋の上を渡るに、守木の太刀にせき落されて、水に溺るゝ者數を不レ知。播磨國住人小松原刑部左衛門は、主の三河守討れたる事をも不レ知、天神松原まで落延たりけるが、三河守の乘給たりける馬の平頸、二太刀切れて放れたりけるを見て、さては三河守殿は討れ

ひ血を拭ふ程、少し猶豫したる處へ、楠が勢の中より、年の程二十許なる若武者、和田新發意源秀と名乘て、洗皮の鎧に、大太刀小太刀二振帶て、六尺餘の長刀を小脇に挾み、閑々と馬を歩ませて、小歌歌て進たり。其次に一人、是も法師武者の長七尺餘も有らんと覺たるが、阿閉了願と名乘て、唐綾威の鎧に、小太刀帶て、柄の長一丈許に見えたる鑓を、馬の平頸に引副て、少しも不ㇾ擬議ㇾ懸出たり。其勢事がら、尋常の者には非ずと見えながら、跡に續く勢無ければ、あれやと計云て、山名が大勢さしも靜かで控たる中へ、唯二騎つと懸入て、前後左右を突て廻に、小手の迦、臑當の餘、手反の直中、内冑一分もあきたる所をはづさず、矢庭に三十六騎突落して、大將に近附んと目を賦る。三河守是を見て、一騎合の勝負は叶はじやと被ㇾ思けん。以ㇾ大勢ㇾ是を取籠よと、百四五十騎にて、横合に被ㇾ懸たり。楠又是を見て、和田討すな續けやとて、相懸に懸て攻戰ふ。太刀の鐔音天に響き、汗馬の足音地を動す。互に御方を恥しめて、引な進めと云聲に、退兵無りけり。され共大將山名伊豆守已に疵を被り、又入替る御方の勢はなし、可ㇾ叶共覺ざりければ、歩立なる兵共、伊豆守の馬の口を引向て、後陣の御方と一處にならんと、天王寺を差て引退く。楠彌氣に乘て、追懸々々攻ける間、山名三河守、原四

はで引退ぬと覺るぞとて、同二十六日の曉天に、五百餘騎を率し、先住吉の敵を追出さんと、石津の在家に火を懸て、瓜生野の北より押寄たり。山名伊豆守是を見て、敵一方よりよも寄せじ。手を分て相戰へとて、赤松筑前守範貞に、攝津國播磨兩國の勢を差副て、八百餘騎濱の手を防んと、住吉浦の南に陣を取。土岐周濟房、明智兵庫助、佐々木四郎左衞門、其勢三千餘騎にて、安部野の東西兩所に陣を張。搦手の大將細川陸奥守は、手勢の外四國の兵五千餘騎を率して、態と本陣を不レ離、新手に入替ん爲に、天王寺に控たり。大手の大將山名伊豆守、舍弟三河守、原四郎太郎、同四郎次郎、同四郎三郎、千餘騎にて、唯今馬煙を擧て進たる先驅の敵に懸合せんと、瓜生野の東に懸出たり。楠帶刀は敵の馬煙を見て、陣の在所四箇所に有と見てければ、多からぬ我勢を數多に分たば、中々可レ惡とて、本五手に分たりける二千餘騎の勢を、唯一手に集て、瓜生野へ打て懸る。此陣東西南北野遠して、疋馬蹄を勞せしかば、兩陣互に射手を進て鬨の聲を一聲揚る程こそあれ、敵御方六千餘騎、一度に颯と懸合て、思々に相戰。半時許切合て、互に勝鬨を揚、四五町が程兩方へ引分れ、敵御方を見渡せば、兩陣過半滅て、死人戰場に充滿たり。又大將山名伊豆守、切創射疵七所迄負はれたれば、兵前に立隱して、疵を吮

事の賾―賾は幽深難見也とて事の心といふ程の義

去九月十七日、河內國藤井寺の合戰に、細川陸奧守顯氏、無甲斐打負て引退し後、楠帶刀左衞門正行、勢機に乘て、邊境常に侵し奪はるといへ共、年內は寒氣甚して、兵皆指を墮し、手龜る事有ぬべければ、暫とて閣れけるが、さのみ延引せば敵に勢著ぬべしとて、十一月二十三日に軍評定有て、同二十五日山名伊豆守時氏、細川陸奧守顯氏を兩大將にて、六千餘騎を住吉天王寺へ被差下。顯氏は去九月の合戰に、楠帶刀左衞門正行に打負て、天下の人口に落ぬる事、生涯の恥辱也と被思ければ、四國の兵共を召集て、今度の合戰又如先して歸りなば、相構て面々身命を輕じて、以前の恥を洗がるべしと、衆を勇め氣を勵されければ、坂東、坂西、藤、橘、伴の者共、五百騎づつ一揆を結んで、大旗小旗下濃の旗三旒立て、三手に分け、一足も不引可討死と、神水を飮てぞ打立ける。事の賾實に思切たる體哉と、先涼くぞ見たりける。大手の大將山名伊豆守時氏、千餘騎にて住吉に陣をとれば、搦手の大將細川陸奧守顯氏八百餘騎にて、天王寺に陣を取。楠帶刀正行是を聞て、敵に足をためさせて、住吉天王寺兩所に城郭を被構なば、向神向佛引弓放矢恐有ぬべし。不日に押寄て、先住吉の敵を追拂、唯攻にせめ立て、急に追懸る程ならば、天王寺の敵は、戰

揚龜山―姓は揚時、字は中立、明道先生の門に遊び一世の儒宗たり

踏はづして、太子夫人諸共に、海底に落入給てげり。數萬の侍臣周章て、一同にあれやあれやと云聲に、客の夢忽に覺てげり。倩夢中の樂を計れば、遙に天位五十年を經たりといへ共、覺て枕の上の睡を思へば、僅に午炊一黄粱の間を不過けり。客云人間百年の樂も、皆枕頭片時の夢なる事を悟り得て、是より楚國へ不越、忽に身を捨て、世を避る人と成て、遂に名利に繫るゝ心は無りけり。是を揚龜山が謝日月詩に作て云く、

少年力學志須張。得失由來一夢長。試問邯鄲欹枕客。人間幾度熟黄粱。

是を邯鄲午炊の夢とは申也。就中葛葉關は、年來南都の管領の地にて候を、無謂召放れん事、衆徒の嗷訴を招くにて候はずや。綸言再し難しといへ共、過而勿憚改と申事候へば、速に以前の勅裁を被召返、南都の嗷訴事未萌前に、可被止や候らんと、委細に奏し申されければ、上皇もげにもとや思召けん、則院宣を被成返ければ、寳劍をば平野社の神主卜部宿禰兼員に被預、葛葉關所をば、如元又南都へぞ被附ける。

○住吉合戰事

邯鄲の旅亭―沈既濟の枕中記に、道士呂翁神仙の術を得たり邯鄲に遊ぶ道中の邸舍に息ひ少年盧生を見る

六國―韓魏趙齊楚燕

青娥―美人の眉の形容

を貪らん爲に、則楚國へぞ赴ける。路に歩疲て、邯鄲の旅亭に暫休けるを、呂洞賓と云仙術の人、此客の心に願ふ事を暗に悟て、富貴の夢を見する一の枕をぞ借たりける。客此枕に寢て一睡したる夢に、楚國の侯王より、勅使來て客を被召。其禮其贈物甚厚し。客悦で則楚國の侯門に參ずるに、楚王席を近附て、道を計り武を問給ふ。客答ふる度毎に、諸卿皆頭を屈して旨を承ければ、楚王不斜是を貴寵して、將相の位に昇せ給ふ。斯て三十年を經て後、楚王隱れ給ける刻、第一の姫宮を客に妻せ給ければ、從官使令、好衣珍膳、心に不叶と云事なく、不令目悦と云事なし。座上に客常滿、樽中に酒不空。樂身に餘り、遊日を盡して、五十一年と申に、夫人一人の太子を産給ふ。楚王に位を可繼御子なくして、此孫子出來ければ、公卿大臣皆相計て楚國の王に成し奉る。蠻夷率服し、諸侯の來朝する事、唯秦始皇の六國を並せ、漢文慧の九夷を從へしに不異。王子已に三歳に成給ける時、洞庭の波上に、三千餘艘の船を雙べ、數百萬人の好客を集て、三年三月の遊をし給ふ。紫髯の老將は解錦纜、青娥の女御は唱棹歌。彼をさへや大梵高臺の月、喜見城宮の花も、不足見不可翫と、遊戲れ舞歌て、三年三月の歡娯已に終ける時、夫人彼三歳の太子を懷て、舷に立給けるが、

寶鼎を掘出し―事實不詳

河圖を得―易繫辭に河出レ圖洛出レ書

賞にぞ被レ下ける。唯周の代に寶鼎を掘出し、夏の時に河圖を得たりし祥瑞も、是には過じとぞ見えし。此比朝廷に賢才輔佐の臣多しといへ共、君の不義を諫め、政の不善を誡めらるゝは、勸修寺大納言經顯、日野大納言資明二人のみ也。夫兩雄は、必爭ふ習なれば、互に威勢を被レ競けるにや、經顯卿被二申沙汰一たる事をば、資明卿申破らんとし、資明卿の被二執奏一たる事をば、經顯卿支申されけり。爰に伊勢國より寶劍進奏の事、日野大納言被二執奏申一たりと聞えしかば、勸修寺大納言經顯卿、院參して被レ申けるは、寶劍執奏の事、委細の尋承候へば、一向資明が阿黨の所より事起て候なる。佞臣仕レ朝國有二不義政一とは、是にて候也。先思て見候に、素盞烏尊、古簸河上にて斬れし八岐の蛇、元暦の比安德天皇と成て、此寶劍を執て龍宮城へ歸り給ぬ。其より後、君十九代春秋百六十餘年、政盛に德豐なりし時だにも、遂に不二出現一寶劍の、何故に斯る亂世無道の時に當て出來り候べき。若我君の聖德に感じて出現せりと申さば、其よりも先天下の靜謐こそ有べく候へ。若又直義が夢を以て、可レ有二御信用一にて候はば、世間に無二定相一事をば、夢幻と申候はずや。されば聖人に無レ夢とは、是を以て申にて候。昔漢朝にして富貴を願ふ客あり。楚國の君賢才の臣を求給ふ由を聞て、恩爵

龍尾堂―堂は道の誤、大極殿の前の廣庭をいふ

ざらんと、覺る程にぞ祈ける。已に三七日に滿じける夜、鎌倉左兵衛督直義朝臣の見給ける夢こそ不思議なれ。所は大内の神祇官かと覺えたるに、三公九卿百司千官、位に依て列座す。纛の旗を建、幔の座を布て、伶倫樂を奏し、文人詩を獻ず。事の儀式嚴重にして、大禮を被ㇾ行體也。直義朝臣夢心地に、是は何事の有やらんと怪く思て、龍尾堂の傍に徘徊したれば、權大納言經顯卿出來り給へるに、直義朝臣是は何事の大禮を被ㇾ行候やらんと問給へば、伊勢大神宮より、寶劒を進せらるべしとて、中儀節會を被ㇾ行候也とぞ被ㇾ答ける。さては希代の大慶哉と思て、暫見居たる處に、南方より五色の雲一群立出て、中に光明赫奕たる日輪あり。其光の上に寶劒と覺えたる一の劒立たり。梵天、四王、龍神八部、蓋を捧げ列を引て、前後左右に圍遶し給へりと見て、夢は則覺にけり。直義朝臣夙に起て、此夢を語り給に、聞人皆静謐の御夢想也と賀し申さぬは無りけり。其聞洛中に滿て、次第に語傳へければ、卜部宿禰兼員急ぎ夢の記錄を書て、日野大納言殿に進覽す。大納言此夢想の記錄を以て、仙洞に奏聞せらる。事の次第御不審を非ㇾ可ㇾ被ㇾ殘とて、八月十八日の早旦に、諸卿參列して、寶劒を奉請取。翌日是を取進せし圓成阿闍梨、次第を不ㇾ經直任の僧都になされ、河内國葛葉關所を恩

兩上皇—花園院光嚴院

本地三身—本地は佛、三身は法身報身應身なり

但此説の中に、十束劔と名附しは、十束ある故也と聞つるぞ、人の左右なく可レ知事ならずとぞ覺る。其劔取出せとて、南庭に崇給へる春日社より、錦の袋に入たる劔を取出して、尺をさゝせて見給ふに、果して十束有けり。さては無二不審一寶劔と覺。但奏聞の段は、一の奇瑞なくは、叡信不レ可レ立。暫此劔を御邊の許に置て、如何なる不思議も一祈出されよかしと宣へば、兼員、世は澆季に及て、佛神の威德も有て無きが如に成て候へば、如何に祈候とも、誠に天下の人を驚す程の不思議、可二出來一覺候はず。但し今も佛神の威光を顯して人の信心を催すは、夢に過たる事はなきにて候。所詮先此劔を預け給て、三七日が間、幣帛を捧げ、禮奠を調、祈誓を致し候はんずる最中、先は兩上皇、關白殿下、院司の公卿、若くは將軍、左兵衛督なんどの夢に、此劔誠に寶劔也けりと、不審を散ずる程の夢想を被二御覽一候はゞ、御奏聞候へかしと申て、卜部宿禰兼員此劔を賜てぞ歸ける。翌日より、兼員此劔を平野社の神殿に安じ、十二人の社僧に、眞讀の大般若經を讀せ、三十六人の神子に、長時の御神樂を奉らしむるに、殷々たる梵音は、本地三身の高聽にも達し、玲々たる鈴の聲は、垂迹五能の應化をも助くらんとぞ聞えける。其外金銀幣帛の奠、蘋蘩蘊藻の禮、神其神たらば、などか奇瑞もこゝに現ぜ

駿河野—原本武藏野に作る、今川家本に據て改む

蓬華—おのが家の謙稱なり

國に下り給ふ。先伊勢大神宮に參て、事の由を奏し給ひけるに、愼で勿レ懈事と、直に神勅有て、件の劔を下さる。尊劔を賜て、駿河野を過給ける時、賊徒相謀て、廣野に火を放て、尊を燒殺し奉らんとす。燎原焰盛にして、可レ遁方も無りければ、尊劔を拔て打拂ひ給ふに、刄の向ふ方の草木二三里が間、己と薙伏られて、焰忽に賊徒の方に靡きしかば、尊死を遁させ給て、朝敵若干亡にけり。依レ之草薙劔とは申也。此劔未大蛇の尾の中に有し程、簸河上に雲懸りて、天更に不レ晴しかば、天叢雲劔とも名附く。其尺僅に十束なれば、又十束劔とも名附たり。天武天皇の御宇、朱鳥元年に亦被レ召て、內裏に收られしより以來、代々の天子の御寶なればとて、又寶劔とは申也。神璽は天照大神、素盞烏尊と、共爲夫婦ありて、八坂瓊の曲玉をねぶり給しかば、陰陽成生して、正哉吾勝々速日天忍穗耳尊を生給ふ。此玉をば神璽と申也。何れも異說多端也。委細を盡すに不レ遑。蓬華に傳る所の一說、大概是にて候と委細にぞ答申たりける。大納言能々聞給て、唯今何の次としもなきに、御邊を呼候て、三種の神器の樣を委く問つる事は、別の仔細なし。昨日伊勢國より、寶劔と云物を持參したる事ある間、不審を開かん爲に尋申つるに、委細の說、大略日來より誰も存知の前なれば、別に異議なし。

齒多き櫛なり

酒槽に湛て、其上に棚を搔て、姬を置奉り、其影を酒に移してぞ待給ける。夜半過る程に、雨荒風烈く吹過て、大山の動ごとくなる物來る勢あり。電の光に是を見れば、八の頭に各二の角有て、あはひに松柏生茂たり。十六の眼は、日月の光に不レ異、喉の下なる鱗は、夕日を浸せる大洋の波に不レ異。暫は槽の底なる稻田姬の影を望見て、生牲妥に有とや思けん、八千石湛たる酒を、少しも不レ殘飮盡す。盡ぬれば餘所より覓を懸て、數萬石の酒をぞ吞せたる。大蛇忽に飮醉て、惘然としてぞ臥たりける。此時に尊劒を拔て、大蛇を寸々に切給ふ。至レ尾劒の刃少し折て切ず。尊怪みて劒を取直し、尾を立樣に割て見給へば、尾の中に一の劒あり。是所謂天叢雲劒也。尊是を取て、天照大神に奉り給ふ。是は初當我高天原より落したりし劒也と悅給ふ。其後尊出雲國に宮作し給て、稻田姬を妻とし給ふ。

　八雲立出雲八重垣妻籠に、八重垣造る其八重垣を。

是三十一字に定たる歌の始也。其より以來、此劒代々天子の御寶と成て、代十嗣を經たり。時に第十代の帝、崇神天皇の御宇に、是を伊勢大神宮に獻り給ふ。十二代の帝、景行天皇四十年六月に、東夷亂て天下不レ靜、依レ之第二の皇子、日本武尊、東夷征罰の爲に東

歌を歌ひ給ければ、天照大神是にめで給て、岩根手力雄尊に、岩戸を少し開かせて、御顏を差出させ給へば、世界忽に明に成て、鏡に移りける御形永く消ざりけり。此鏡を名附て、八咫鏡とも、又は内侍所とも申也。天照大神岩戸を出させ給て、八百萬神達を遣し、宇多野城に掘立たる千の劍を、皆蹴破て捨給ふ。是よりして千劍破とは申つゞくる也。此時一千の惡神は、小蠅と成て失す。素盞烏尊一人に成て、彼方此方に迷行給ふ程に、出雲國に行給ぬ。海上に浮で流るゝ島あり。此島は天照大神も知せ給べき所ならずとて、尊御手にて撫留て栖給ふ。故に此島をば手摩島とは申也。爰にて遥に見給へば、清地鄕の奥、簸河上に八色の雲あり。尊怪く思て行て見給へば、老翁老婆二人うつくしき小女を中に置て、泣悲む事切也。尊彼泣故を問給へば、翁答て曰、我をば脚摩乳、うばをば手摩乳と申也。此姫は老翁老婆の儲たる孤子也。名をば稻田姫と申也。近比此所に八岐大蛇とて、八の頭ある大蛇、山尾七谷七にはひ渡て候が、夜每人を以て食とし候間、野人村老皆食盡、今日を限の別路の遣方もなき悲さに、泣伏也とぞ語ける。尊哀と思召て、此姫を我にえさせば、此大蛇を退治して、姫が命を可助と宣ふに、老翁悅て、仔細候はじと申ければ、湯津爪櫛を八作て、姫が髻にさし、八醞の酒

小蠅なす—。蠅の群聚する如く邪神の群ることをいへる枕詞なり
六合—東西南北上下

放ち奉る。

かぞいろは何に哀と思ふらん、三年に成ぬ足立ずして。

と讀る歌是也。素盞烏尊は、出雲の大社にて御座す。此尊草木を枯し、禽獸の命を失ひ、諸荒く坐せし間、出雲國へ流し奉る。三神如レ此或は天に上り、或は海に放たれ、或は流し給し間、天照大神此國の主と成給ふ。爰に素盞烏尊吾國を取らんとて、軍を起て、小蠅なす一千の惡神を率して、大和國宇多野に、一千の劔を掘立て、城郭として楯籠り給ふ。天照大神是をよしなき事に思召て、八百萬神達を引具して、葛城の天岩戸に閉籠らせ給ければ、六合内皆常闇に成て、日月の光も見えざりけり。此時に島根見尊是を歎て、香久山の鹿を捕て、肩の骨を拔き、合歡の木を燒て、此事可レ有二如何一と占はせ給ふに、鏡を鑄て岩戸の前にかけ、歌をうたはゞ可レ有二御出一と占に出たり。

香久山の合歡の下に占とけて、肩拔鹿は妻戀なせそ。

と讀る歌は則此意也。さて島根見尊、一千の神達を語ひて、大和國天香久山に庭燎を燒き、一面の鏡を鑄させ給ふ。此鏡は思ふ樣にもなしとて被レ捨ぬ。今の紀州日前宮の神體也。次に鑄給し鏡よかるべしとて、榊の枝に著て、一千の神達を引、調子を調て、神

前尾ニ入ニ兩股間ニ今尾掉何也
養由—弓の名人
羲之—晉の能書家

も不ﾚ殘申さんずるにて候。先天神七代と申は、第一國常立尊、第二國狹槌尊、第三豐斟渟尊、此時天地開け始て、空中に物あり、葦芽の如といへり。其後男神に、泥土瓊尊、大戸之道尊、面足尊。女神に、沙土瓊尊、大戸間邊尊、惶根尊。此時男女の形有といへ共、更に婚合の儀なし。其後伊弉諾伊諾册の男神女神の二神、天浮橋の上にして、此下に豈國なからんやとて、天瓊鉾を差下して、大海を掻捜り給ふ。其鉾の滴、凝て一の島となる、磤馭盧島是也。次に一の洲を産給ふ。此洲餘に小かりし故、淡路洲と名附、吾恥の國と云心なるべし。二神此島に天降り給て、宮造せんとし給ふに、葦原生繁て所も無りしかば、此葦を引捨給ふに、葦を置たる所は山となり、引捨たる跡は河と成。二神夫婦と成て栖給ふといへ共、未陰陽和合の道を不ﾆ知給ﾆ時に、鶺鴒と云鳥の、尾を土に敲けるを見給て、始て嫁ぐ事を習て、憙哉遇ﾆ可美少女ﾆと讀給ふ。是和歌の始なり。斯て四神を生給ふ。日神、月神、蛭子、素盞烏尊是也。日神と申は天照大神、是日天子の垂跡、月神と申は月讀明神也。此御形餘にうつくしく御座し、人間の類にあらざりしかば、二親の御計にて、天に登せ奉る。蛭子と申は、今の西宮大明神にて坐す。生れ給し後、三年迄御足不ﾚ立して、片輪に坐せしかば、磐樟船に乘て、海に

横句―いつはりごと

日本紀の家―歴史家のいへ

畫工牛鬪云云―萬花谷に有レ藏ニ戴嵩牛鬪ー與レ客觀旁有ニ一牧童ー曰牛鬪力在ニ

若伊勢國よりや被レ參て候とぞ問ける。圓成うれしく思て、始よりの有樣を委細に語ければ、我こそ日野大納言殿の所緣にて候へ。此人に屬て被レ經ニ奏聞ー候はん事、最易かるべきにて候とて、軈て圓成を同道し、京に上て、日野前大納言資明卿に屬て、寶劍と祭主が起請とをぞ出たりける。資明卿事の樣を能々聞給て、誠に不思議の神託也。但加樣の事には、如何にも横句謀計有て、傳奏の短才、人の嘲哢となる事多ければ、能能事の實否を尋聞て、諸卿げにもと信を取程の事あらば可ニ奏聞ー。何樣天下靜謐の奇瑞なれば、引出物せよとて、銀劍三振・被物十重圓成にたびて、寶劍をば前栽に崇め給へる春日の神殿にぞ納られける。神代の事をば、如何にも日本紀の家に可ニ存知ー事なれば、委く尋給はんとて、平野社の神主、神祇大副兼員をぞ召れける。大納言兼員に向て宣けるは、抑三種の神器の事、家々に相傳し來る義區也といへ共、資明は未ニ是信ー、畫工鬪牛の尾を誤て、牧童に笑れたる事なれば、御邊被レ申候はん義を正路とすべきにて候。聊以事の次に此事存知度事あり。委く宣說候へとぞ被レ仰ける。兼員畏て申けるは、御前にて加樣の事を申候はんは、唯養由に弓を敎へ、羲之に筆を授けんとするに相似て候へ共、御尋ある事を申さゞらんも、又恐にて候へば、傳る處の義一事

光ありて百歩を照らせり
思ふこと―慈鎮和尚の歌、新古今集に出づ
内侍所璽の御箱―神鏡神璽をいふ

神器あり。縦繼體の天子、位を繼せ給ふといへ共、此三の寶なき時は、君も君たらず、世も世たらず。汝等是を見ずや、承久以後代々の王位輕くして、武家の爲に威を失せ給へる事、偏に寶劍の君の御守と成せ給はで、海底に沈める故也。剰へ今内侍所璽の御箱さへ、外都の塵に埋れて、登極の天子空く九五の位に臨ませ給へり。依之四海彌亂て、一天未靜。爰に百王鎭護の宗廟の神、龍宮に神勅を被下て、元曆の古海底に沈し寶劍を被召出たる者也。すは爰に立て我を見る、あの法師の手に持たるぞ。便宜の傳奏に屬て、此寶劍を内裏へ進すべし。云處不審あらば、是を見よとて圓成に走懸て、手に持たる光物を取て、涙をはら〱と流し、額より汗を流しけるが、暫死入たる體に見えて、物怪は則去にけり。神託不審あるべきに非れば、祭主を始として、見及處の神人等、連署の起請に書て、圓成に與ふ。圓成是を錦の袋に入て懸頸、任託宣先南都へぞ赴ける。春日の社に七日參籠して有けるが、是こそ事の可顯端よと思ふ驗も無りければ、又初瀨へ參て、三日斷食をして籠たるに、京家の人よと覺しくて、拜殿の脇に通夜したる人の有けるが、圓成を呼寄て、今夜の夢に、伊勢國より參て、此三日斷食したる法師の申さんずる事を、傳奏に擧達せよと云示現を蒙て候。御邊は

垢離にかいて—身のけがれを去る爲みそぎするなり

三鈷柄の劔—天竺の兵器なり

明月に當て云々—唐の敬宗の時夜明犀を獻ずる者あり夜

進奏す。其仔細を能々尋ぬれば、伊勢國國崎神戸に、下野阿闍梨圓成と云山法師あり。大神宮へ千日參詣の志有ける間、毎日に潮を垢離にかいて、隔夜詣をしけるが、已に千日に滿ける夜、又垢離をかゝんとて、磯へ行て遙の澳を見るに、一の光物あり。怪く思て、釣する海人に、あれは何物の光たるぞと問ければ、いさとよ何とは不レ知候。此二三日が間、毎夜此光物浪の上に浮で、彼方此方へ流ありき候間、船を漕寄て取らんとし候へば、打失候也とぞ答ける。かれを聞に彌不思議に思て、目も不レ放是を守て、遠渚の海づらを遙々と歩行處に、此光物次第に磯へ寄て、圓成が歩むに隨てぞ流て來ける。さては仔細有と思て立留たれば、光物些少く成て、圓成が足許に來れり。懼しながら立寄て取上たれば、金にも非ず石にも非る物の、三鈷柄の劔なんどの形にて、長さ二尺五六寸なる物にてぞ有ける。是は明月に當て光を含なる犀の角か、不レ然海底に生るなる珊瑚樹の枝かなんど思て、手に提て大神宮へぞ參たりける。爰に年十二三許なる童部一人、俄に物に狂て四五丈飛上々々けるが、「思ふ事など問ふ人のなかるらん、あふげば空に月ぞさやけき」と云歌を、高らかに詠じける間、社人村老數百人集て、如何なる神の託させ給たるぞと問に、物附口走て申けるは、神代より傳て、我國に三種の

なく、ひた〳〵と打乘て、如ニ雲霞一群て控たる敵の中へ懸入て、火を散してぞ戰たる。されども共つゞく御方なければ、大勢の中に被ニ取籠一、村田の一族六騎は一所にて討れにけり。其間に大將も物具堅め、馬に打乘て、相從ふ兵百餘騎、しばし支て戰たり。敵は小勢也。御方は大勢也。縱進で懸合するまではなく共、引退く兵だに無りせば、此軍に京勢惣て負まじかりけるを、四國中國より驅集たる葉武者、前に支へて戰へば、後には捨鞭を打て引ける間、無レ力大將も猛卒も、同樣にぞ落行ける。勝に乘て鬨を作懸作懸追ける間、大將已に天王寺渡部の邊にては危く見えけるを、六角判官舍弟六郎左衞門返合て討れにけり。又赤松信濃守範資、舍弟筑前守三百餘騎、命を名に替て討死せんと、取ては返し〳〵、七八度まで蹈留て戰けるに、奈良崎も主從三騎討れぬ。粟生田小太郎も馬を射られて討れにけり。此等に度々被レ支て、敵さまで不レ追ければ、大將も士卒も危き命を助て、皆京へぞ歸上りにける。

○自ニ伊勢一進ニ寶劍一事　附黃粱夢事

今年、古安德天皇の壇浦にて海底に沈めさせ給し寶劍出來れりとて、伊勢國より

ひた冑の兵
—いづれも
甲冑を帯し
たる兵

思ける。光陰過易ければ、年積て正行已に二十五、今年は殊更父が十三年の遠忌に當りしかば、供佛施僧の作善、如₂所存₁致して、今は命惜とも不₂思けれ₁ば、其勢五百餘騎を率し、時々住吉天王寺邊へ打出々々、中島の在家少々燒拂て、京勢や懸ると待たりける。將軍是を聞給て、楠が勢の分際、思ふにさこそ有らめ。是に邊境を侵奪れて、洛中驚き騷ぐこと天下の嘲哢、武將の恥辱也。急ぎ馳向て退治せよとて、細川陸奥守顯氏を大將にて、宇都宮三河入道、佐々木六角判官、長左衞門、松田次郎左衞門、赤松信濃守範資、舍弟筑前守範貞、村田、奈良崎、坂西、坂東、菅家一族共、都合三千餘騎、河內國へ差下さる。此勢八月十四日の午刻に、藤井寺にぞ著たりける。此陣より楠が館へは、七里を隔たれば、縱急々に寄する共、明日か明後日かの間にぞ寄せんずらんと、京勢油斷して、或は物具を解て休息し、或は馬鞍をおろして休める處に、譽田八幡宮の後なる山陰に、菊水の旗一旒ほの見えて、ひた冑の兵七百餘騎、閑々と馬を步ませて打寄せたり。すはや敵の寄たるは。馬に鞍おけ、物具せよとひしめき色めく處へ、正行眞前に進で、喚て懸入る。大將細川陸奥守、よろひをば肩に懸たれ共、未上帶をもしめ得ず、太刀を帶べき隙もなく見え給ける間、村田の一族六騎、小具足計にて、誰が馬とも

蓬矢の慶賀―禮記に男子生以二桑弧蓬矢六一射二天地四方一

一人所領を賜り、俸祿に預るのみならず、軈て典藥頭にぞ申成されける。猶懐姙誠しからず、月比にならば、如何なる人の產たらん子を、是こそよとて懐き册かれんずらんとて、偏執の族は申合ける處に、六月八日の朝、生產容易して、而も男子にてぞ坐しける。蓬矢の慶賀天下に聞えしかば、源家の御一族、其門葉、國々の大名は、中々不レ及レ申、人と肩をも雙べ、世に名をも知られたる公家武家の人々は、鎧腹卷太刀刀馬車綾羅金銀、我人にまさらんと、引出物を先立て賀し申されける間、賓客堂上に群集し、僧俗門前に立列る。後の禍をば未レ知、哀大果報の少き人やと、云はぬ者こそ無りけれ。

○藤井寺合戰事

楠帶刀正行は、父正成が先年湊川へ下りし時、思樣あれば、今度の合戰に、我は必討死すべし。汝は河內へ歸て、君の如何にも成せ給はんずる御樣を、見はて進せよと申含めしかば、其庭訓を不レ忘、此十餘年我身の長を待、討死せし郎從共の子孫を扶持して、如何にもして父の敵を滅し、君の御憤を休め奉らんと、明暮肺肝を苦しめてぞ

嗣成―仲成の誤なるべし

和氣―和氣淸麻呂三代の後時雨典藥頭に任ぜらる

丹波―後漢の高貴王來朝しその子志努直丹波國に住し坂上の姓を賜り五代の後康賴丹波宿禰の姓を賜る此人醫術神に通ぜり

至まで、いしくも計ひ申たる哉と、一同に皆入興して、幻の如に成にけり。夜明ければ、往來の僧京に出、施藥院師嗣成に此事をこそ語りたりけれ。四五日有て後、足利左兵衞督の北方、相勞る事有て、和氣丹波の兩流の博士、本道外科一代の名醫數十人被招請て、脈を取せらるゝに、或は御勞風より起て候へば、風を治する藥には、牛黄金虎丹、辰沙天麻圓を合て、御療治候べしと申す。或は諸病は氣より起る事にて候へば、氣を收る藥には、兪山人降氣湯、神仙沈麝圓を合て、まゐり候べしと申す。或は此御勞は腹の御病にて候へば、腹病を治する藥には、金鎖正元丹、祕傳玉鎖圓を合て、御療治候べしとぞ申ける。斯る處に施藥院師嗣成少し遲參して、脈を取進せけるが、如何なる病とも不辨。病多しといへ共、束て四種を不出。雖然混散の中に於て、致料簡けれ共、更に何れの病共不見、心中に不審を成處に、天狗共の仁和寺の六本杉にて評定しける事を、屹と思出して、是御懷姙の御脈にて候けり。しかも男子にて御渡候べしとぞさゝやきける。當座に聞ける者共、あら惡の嗣成が追從や。女房の四十に餘て、始て懷姙する事や可有と、口を噤めぬ者は無りけり。去程に月日重、誠に唯ならず成にければ、そゞろなる御勞とて、大藥を合せし醫師は皆面目を失て、嗣成

二條の風帶を垂れたる車也

榻—車に乘降する時の踏臺にて又轅の臺ともするもの

まろかし—まろめたるもの

說教—原本說破に作る、異本に據て改む

下の人々次第に飲流して。さしも興ある景色もなし。良遙に有て、同時にわつと喚く聲しけるが、手を擧て足を引かゞめ、頭より黑烟燃出て、悶絕躃地する事半時許有て、皆火に入る夏の蟲の如にて、燋れ死にこそ死にけれ。穴恐しや、是なめり、天狗道の苦患に、熱鐵のまろかしを、日に三度吞なる事はと思て見居たれば、二時許有て皆生出給へり。爰に峯僧正春雅、苦し氣なる息をついて、さても此世中を如何して又騷動せさすべきと宣へば、忠圓僧正末座より進出て、其こそ最易き事にて候へ。先左兵衞督直義は、他犯戒を持て候間、俗人に於ては、我程禁戒を犯さぬ者なしと思ふ我慢心深く候。是を我等が依所なる大塔宮、直義が内室の腹に、男子と成て生れさせ給ひ候べし。又夢窓の法眷に、妙吉侍者と云僧あり、道行共に不足して、我程の學解の人なしと思へり。此慢心我等が伺處にて候へば、峯僧正御房其心に入替り給て、政道を補佐し、邪法を說教させ給べし。智教上人は、上杉伊豆守重能、畠山大藏少輔が心に依託して、師直師泰を失はんと計はれ候べし。忠圓は、武藏守、越後守が心に入替て、上杉畠山を亡し候べし。依之直義兄弟の中惡く成り、師直主從の禮に背かば、天下に又大なる合戰出來て、暫見物は絕候はじと申せば、大塔宮を始進せて、我慢邪慢の小天狗共に

痛く―甚だしく

四方輿―前後左右に簾を垂れて袖のなき輿なり

香の衣―香染の衣

五緖の車―車の簾の邊と編目の絲を覆ひたる革との間に同じ革にて

り京へ歸りけるが、夕立に逢て、可ニ立寄一方も無りければ、仁和寺の六本杉の木陰にて、雨の晴間を待居たりけるが、斯て日已に暮にければ、行前恐しくて、よしさらば、今夜は御堂の傍にても明せかしと思て、本堂の縁に倚居つゝ、閑に念誦して、心を澄したる處に、夜痛く深て、月清明たるに見れば、愛宕山比叡嶽の方より、四方輿に乘ける者、虛空より來集て、此六本杉の梢にぞ並居たる。座定て後、虛空に引たる幔を、風の颯と吹上たるに、座中の人々を見れば、上座に先帝の御外戚、峯僧正春雅、香の衣に袈裟かけて、眼は如ニ日月一光り渡り、觜長して鳶の如なるが、水精の珠數爪繰て坐し給へり。其次に南都智教上人、淨土寺忠圓僧正、左右に著座し給へり。皆古見奉し形にては有ながら、眼の光尋常に替て、左右の脇より長翅生出たり。往來の僧是を見て、怪しや我天狗道に落ぬるか、將天狗の我眼に遮るかはと、肝心も身にそはで、目もはなたず守居たる程に、又空中より五緖の車の鮮なるに乘て來る客あり。榻を踐で下るを見れば、兵部卿親王の未法體にて御座有し御貌也。先に坐して待奉る天狗共、皆席を去て蹲踞す。暫有て坊官かと覺しき者一人、銀の銚子に金の盃を取副て、御酌に立たり。大塔宮御盃を召れて、左右に屹と禮有て、三度聞召て閣せ給へば、峯僧正以

行く使
進らせける
｜開閉する
一陽分て後
｜一陽一陰
分れて後

らば唯宜在叡慮とぞ勘申たりける。爰に神祇大副卜部宿禰兼豐一人、大に忿て申けるは、如法意勘進して、非觸穢儀、神道は無き物にてこそ候へ。凡一陽分れて後、清濁汚穢を忌慎む事、故是神道の所重也。而るを無觸穢儀、大禮の神事無爲被行、一流の神書を火に入て、出家遁世の身と可罷成と、無所憚申ける。若殿上人など是を聞て、餘に嚴重なる申言哉。少々は存る處有とも殘せかし。四海若無事にして、一事の無違亂大嘗會を被行ば、兼豐が髻は不便の事哉とぞ被笑ける。され共主上も上皇も、此明淸が勘文御心に叶て、げにもと被思召ければ、今年大嘗會を可被行とて、武家へ院宣を被成下。武家之を施行して、國々へ大嘗會米を宛課て、不日に責はたる。近年は天下の兵亂打續て、國弊民苦める處に、君の御位恒に替て、大禮止時無りしかば、人の歎のみ有て、聊も是こそ仁政なれと思ふ事もなし。されば事騷しの大嘗會や、今年は無ても有なんと、世皆唇を翻せり。

○宮方怨靈會六本杉事 附醫師評定事

仙洞の妖怪をこそ、希代の事と聞處に、又仁和寺に一の不思議あり。往來の禪僧嵯峨よ

太平記　巻第二十五

萩原法皇―花園院

軒廊の御占―紫宸殿の西の廊にて御占を行ひ國郡を定めしなり

拔穗の使―卜定せる神田より宗廟に奉るべき稻を刈りに

○持明院殿御即位事 附 仙洞妖怪事

貞和四年十月二十七日、後伏見院御孫、御年十六にて、御讓を受させ給て、同日内裏にて御元服あり。劍璽を被レ渡て後、同二十八日に、萩原法皇の第一の御子、春宮に立せ給ふ。御歳十三にぞ成せ給ける。卜部宿禰兼前、軒廊の御占を奉り、國郡を卜定有て、拔穗の使を丹波國へ下さる。其十月に行事所始有て、已に齋廳場所を作らんとしける時、院の御所に一の不思議あり。二三歳許なる童部の頭を、斑なる犬が嚙て、院の御所の南殿の大床の上にぞ居たりける。平明に御隔子進せける御所侍、箒を以て是を打んとするに、此犬孫廂の方より、御殿の棟木に上て、西に向ひ三聲吠て、かき消樣に失にけり。加樣の妖怪、觸穢に可レ成、今年の大嘗會を可レ被二停止一、且は先例を引、且は法令に任て、可二勘申一由、法家の輩に被二尋下一。皆一年の觸穢にて候べしと、勘申ける中に、前大判事明清が勘狀に、法令の文を引て云、神道は依二王道一所レ用といへり。然

あり其形牛頭に似たるを以て牛頭山ともいへり此山より出づる栴檀殊にかんばしといふ

て、壬生の地藏堂の御戸を開かせて、本尊を奉レ見、忝も六道能化の地藏薩埵の御身、所々爲ニ刑鞭一黧黑、高手小手に禁し其繩、未御衣の上に著たりけるこそ不思議なれ。是を禁め奉りぬる者共三人、發露涕泣して、罪障懺悔するに、猶不レ堪、忽に髻切て入道し、發心修行の身となりにけり。彼は依ニ順縁一今生に助レ命、是は依ニ逆縁一來生の得ニ値遇一事、誠に如來附屬の金言不ニ相違一今世後世能引導す、頼しかりける悲願也。

啓白―經文の小口のみを讀むをいふ

牛頭栴檀―天竺に摩黎山といふ山

寄て、十重二十重に取卷ける時、此高遠唯一人敵の中を打破て、壬生の地藏堂の中へぞ走入たりける。何方にか隱ましと彼方此方を見る處に、寺僧かと覺しき法師一人、堂の中より出たりけるが、此高遠を打見て、左樣の御姿にては叶まじく候。此念珠に其太刀を取代て、持せ給へと云ける間、げにもと思て、此法師の云儘にぞ隨ける。斯りける處に、寄手共四五十人、堂の大庭へ走入て、門々をさして無殘處ぞ搜しける。高遠は長念珠を爪繰て、以大神通方便力勿令墮在諸惡趣と、高らかに啓白してぞ居たりける。寄手の兵共皆見之、誠に參詣の人とや思けん、敢て怪め咎むる者一人もなし。唯佛壇の內天井の上まで打破て搜せと許ぞ罵りける。爰に唯今物切たりと覺しくて、鋒に血の著たる太刀を、袖の下に引側て持たる法師、堂の傍に立たるを見附て、すはや此にこそ落人は有けれとて、抱手三人走寄て、中に舉打倒し、高手小手に禁て、侍所へ渡せば、所司代都筑入道是を請取て、詰牢の中にぞ入たりける。翌日一日有て、守手目も不放、牢の戶も不開して、此囚人くれに失にけり。預人怪み驚て、其跡を見るに、馨香座に留て、恰も牛頭栴檀の薰の如し。是のみならず、此囚人を搦捕し者共の、左右の手、鎧の袖草摺まで、異香に染て、其匂曾て不失と申合ける間、さては如何樣非直事と

將義治を引具し、海上より京へ上て、將軍、左兵衛督、高、上杉の人々を夜討にせんとぞ巧ける。勢少くては叶まじ、廻文を遣して、同意の勢を集よとて、諸國へ此由を觸遣すに、此彼に身を側め形を替て隱居たる宮方の兵千餘人、夜を日に繼でぞ馳參りける。此勢一所に集らば、人に怪めらるべしとて、二百餘騎をば、大將義治に附奉て、東坂本に隱し置き、三百餘騎をば、宇治、醍醐、眞木、葛葉に宿し置き、勝れたる兵三百人をば、京白河に打散し、態と一所には不ㇾ置けり。已に明夜木幡峠に打寄て、將軍、左兵衛督、高、上杉が館へ、四手に分て夜討に可ㇾ寄と、相圖を定たりける前の日、如何して聞えたりけん。時の所司代都筑入道二百餘騎にて、夜討の手引せんとて、究竟の忍共が隱居たる四條壬生宿へ未明に押寄る。楯籠る所の兵共、元來死生不ㇾ知の者共なりければ、家の上へ走上り、矢種のある程射盡して後、皆腹搔破て死にけり。是を聞て、處處に隱居たる與黨の謀叛人共も、皆散々に成ければ、高德が支度相違して、大將義治相共に、信濃國へぞ落行ける。さても此壬生の在家に隱居たる謀叛人共、無㆓被㆑遁處㆒皆討れける中に、武藏國住人に、香勾新左衛門高遠と云ける者唯一人、地藏菩薩の命に替らせ給けるに依て、死を遁けることそ不思議なれ。所司代の勢已に未明に四方より押

三宅三郎―兒島三郎と同じ

食攻―兵糧攻なり

上古にも末代にも難レ有かりし供養也。佛閣供養の有樣は、尤如レ此こそ有べきに、此天龍寺供養の事に就て、山門強に致ニ嗷訴一、遂に勅會の儀を中止めつる事非ニ直事一、如何樣眞俗共に憍慢の心あるに依て、天魔波旬の伺ふ處あるにやと、人皆是を怪みけるが、果して此寺二十餘年の中に、二度まで燒ける事こそ不思議なれ。

○三宅荻野謀叛事附壬生地藏事

其比備前國住人三宅三郎高德は、新田刑部卿義助に屬して、伊豫國へ越たりけるが、義助死去の後、備前國へ立歸り、兒島に隱れ居て、猶も本意を遂せん爲に、上野國に坐ける新田左衞門佐義治を喚奉り、是を大將にて旗を擧んとぞ企ける。此比又丹波國住人、荻野彥六朝忠、將軍を奉レ恨事有と聞えければ、高德潛に使者を通して觸送るに、朝忠悅で許諾す。兩國已に日を定て打立んとしける處に、事忽に漏聞えて、丹波へは山名伊豆守時氏、三千餘騎にて押寄せ、高山寺の麓、四方二三里を塀にぬり籠て、食攻にしける間、朝忠終に戰屈して、降人に成て出にけり。兒島へは備前備中備後三箇國の守護、五千餘騎にて寄ける間、高德爰にては本意を遂る程の合戰叶はじとや思けん、大

伽陁―節をつけて經文を唱ふるなり

伽毗羅會―中天竺の國名、佛の降生せし處なり

を導師に請じ給ふ。行基勅使に向て申させ給けるは、綸命重して辭するに言なしといへ共、如此の御願は、唯冥顯の所歸に可被任にて候へば、供養の當日香花を備へ、唱伽陁自天竺梵僧を奉請、供養をば可被遂行候とぞ計ひ申されける。天子を始進せて、諸卿悉世既及澆季、如何してか百萬里の波濤を隔たる天竺より、俄に導師來て、供養をば可被遂と、大に疑をなしながら、行基の被計申上は、非可及異議とて、明日供養と云迄に、導師をば未被定。已に其日に成ける朝、行基自攝津國難波浦に出給ひ、西に向て香花を供じ、座具を展て禮拜し給ふに、五色の雲天に聳て、一葉の舟浪に浮で、天竺の婆羅門僧正忽然として來給ふ。諸天蓋を捧て、御津の濱松自雪に傾歟と驚き、異香衣を染て、難波津の梅忽に春を得たるかと怪しまる。一時の奇特こゝに顯れて、萬人の信仰不斜。行基菩薩則婆羅門僧正の御手を引て、

伽毗羅會に共に契しかひ有て、文殊の御顏相みつる哉。

と一首の歌を詠じ給へば、婆羅門僧正、

靈山の釋迦の御許に契てし、眞如朽せず相みつる哉。

と詠給ふ。供養の儀則は、中々言を盡すに不遑。天花風に繽紛として、梵音雲に悠揚す。

王舍城―摩訶陀國の城なり昔民の家燒くること七度に及びしも王の宮殿燒けず王道の威德天地に覆ふ事を感じて其城を王舍と名づけたり

井新中納言雅孝卿、大藏卿雅仲、一條二位實豐卿、持明院三位家藤卿、殿上人には、難波中將宗有朝臣、二條中將資將卿、難波中將宗清朝臣、紙屋川中將教季、持明院少將基秀、姉小路侍從基賢、二條少將雅冬、持明院前美作守盛政、諸大夫には、千秋駿河左衛門大夫、星野刑部少輔、左脇左近大夫、金銀珠玉を始として、綾羅錦繡はさて置ぬ、倭漢の間に名をのみ聞て、未日には不レ見珍寶を、持連立て如レ山積上たり。唯是王舍城の昔年、五百の車に珍貨を積て、佛に奉りしも、是には過じとぞ見えし。惣て此兩日の儀を見る者、悉福智の二報を成就して、濟度利生の道を廣せし事、此國師に過たる人は非じとて、改レ宗歸レ法、偏執の心をぞ失ける。さしも違亂に及びし大法會の、無ニ事故一遂て、天子の叡願、武家の歸依、一時に望足ぬと、喜悅の眉をぞ被レ開ける。夫佛を作り堂を立つる善根、誠に勝れたりといへ共、願主聊も憍慢の心を起す時は、法會の違亂出來して、三寶の住持不レ久。されば梁武帝、對ニ達磨一朕建レ寺事一千七百箇所、僧尼を供養する事十萬八千人、有ニ功德一乎と問給ひしに、達磨無功德と答給ふ。是誠に無ニ功德一と云には非ず。叡信の憍慢を破て、無作の大善に令レ歸なり。吾朝の古、聖武天皇東大寺を造立せられ、金銅十六丈の盧舍那佛を安置して、供養を被レ遂しに、行基菩薩

執蓋―蓋を持ちてさしかくる役
執綱―蓋につける綱をとる役
友梅―字は雪村、幻空と號す
蘇合云々―蘇合より狛鉾まで皆樂の名なり

笙龍笛の樂人十八人、新秋、則祐、信秋、成秋、佐秋、季秋、景朝、景茂、景重、榮敦、景宗、景繼、景成、季氏、茂政、重方、重時是等也。國師既に自二山門一進出させ給へば、樂人卷レ幄亂聲を奏する事、時をぞ移しける。聽聞の貴賤、此時に感涙を流しけり。導師は金襴の袈裟鞋著て、莚道に進ませ給へば、二階堂丹後三郎左衞門執蓋、島津常陸前司、佐々木三河守兩人執綱にて、同く歩出たり。左右の伶倫何れも皆幄より起て、參向の儀有て、萬秋樂の破を奏して、舞臺の下に列を引けば、古清衆導師に從て入堂あり。南禪寺の長老智明、建仁寺の友梅、東福寺の一鞏、萬壽寺の友松、眞如寺の良元、安國寺の至孝、臨川寺の志玄、崇福寺の慧聰、清見寺の智琢、」寺當官にて、士昭首座、是等は皆江湖の龍象也。釋尊の十大弟子に擬して、扈從の粧嚴重なり。其後正面の戸牖を閉て、願文の說法數刻也。法會終しかば、伶人本幄に歸て舞あり。左に蘇合、右に古鳥蘇、陵王、荒序、納蘇利、太平樂、狛鉾也。中にも荒序は、當道の深祕にて、容易「雖レ不レ奏レ之、適聖主臨幸の法席也、非レ可二默止一とて、朝榮二荒序を舞しかば、笙は新秋、笛は景朝、大鼓は景茂ぞ仕たる。當道の眉目、天下の壯觀無レ比し事共也。此後國師一瓣の香を拈じて、今上皇帝聖躬萬歲と祝し給へば、御布施の役にて、飛鳥

引倍木―下襲の下に著る袙をいふ

衣、浮紋に淺黃の指貫にて供奉せらる。殿上人には、左中將宗雅朝臣、浮線綾の女郎花の狩衣に、槿を紋にぞ織たりける。薄色の生の衣、藤の丸の指貫也。頭左中辨宗光朝臣、浮線綾の比金襖の狩衣、珍しくぞ見えたりける。右少將教貞朝臣、紫苑唐草を織たる生の青裏、紅の引倍木、はえ〴〵敷ぞ見えし。春宮權大進時光は、浮線綾に秋を經青緯紫の段にして、青く織たる女郎花の生の衣に、藍の指貫也。此後は下北面の輩、中原季教、源康定、同康兼、藤原親有、安部親氏、豐原泰長。御隨身には、秦久文、同久幸、此等也。參會の公卿には、三條帥公季卿、日野中納言資明卿、別當四條中納言隆蔭卿、春宮大夫實夏、左兵衞督直義、何れも皆行粧傍を耀かす。佛殿の北の廊四間を餝て、大紋の疊を重ね布き、其上に氈を被展たり。平敷の御座其北にあり。西の間に、屛風を立隔て、御休所に構へたり。御前に風流の鳥形を被居たり。表大井河景趣、水紅錦を洗て、感興の心をぞ添たりける。是は三寶院僧正賢俊、依武命儲進す。佛殿の裏二間を拵て、御簾を懸、御聽聞所にぞ構へたる。其北に疊を布て、公卿の座にぞ被成たる。佛殿の庭の東西に幄を打て、左右の伶倫十一人、唐裝束にて胡床に坐す。左には光榮、朝榮、行重、葛榮、行繼、則重也。右には、久經、久俊、忠春、久家、久種也。鳳

如木の雜色―如木ゝ雜色と同じく召使也、重言

胡床―床几

指貫―狩袴

良、澁河、畠山、仁木、細川を始として、宗徒の氏族、外様の大名打混に、弓箭兵仗を帶し、思々の馬鞍にて、大宮より西郊まで、無二透間一袖を連て支へたり。薄馬場より、隨兵、帶刀、直垂著、布衣の役人、悉守二次第一列を引。已に寺門に至しかば、佐々木佐渡判官秀綱、撿非違使にて、黑袴著せる走下部、水干直垂金銀を展たる如木の雜色爽に鎧たる若黨三百餘人、胡床敷皮の上に列居して、山門を警固す。其行粧傍を拂て見えたり。尊氏卿直義朝臣、既に參堂有しかば、勅使藤中納言資明卿、院司の高右衞門佐泰成陣參して、卽法會を被レ行。其日は無爲に暮にけり。明れば八月晦日也。今日は又爲二御結緣一、兩上皇御幸なる。昨日には事の體替て、見物の貴賤も閭巷に足を立兼たり。御車惣門に至しかば、牛を懸放して手引也。御牛飼七人、何れも皆持明黨とて、綱取て名譽の上手共也。中にも松一丸は、遣手にて、綾羅を裁ち、金銀を鏤めたり。上皇御簾を揚て、見物の貴賤を叡覽あり。黄練貫の御衣、御直衣、雲立涌、生の織物、薄色の御指貫を召れたり。竹林院大納言公重卿、濃香に牡丹を織たる白裏の狩衣に、薄色の生の衣、洲流に鞆繪の藤の丸、青鈍の生の織物の指貫にて、御車寄に被レ參たり。左宰相中將忠季卿、薄色の織襖の裏無に、蔦を紋にぞ織たりける。女郎花の

御調度の役―弓矢を負ふ役なり
布衣―狩衣

同治部少輔時春、御沓の役。佐々木吉田源左衛門尉秀長、同加地筑前二郎左衛門貞信は、御調度の役。和田越前守宣茂、千秋三河左衛門大夫惟範は、御笠の役。以上八人布衣に上括して列を引。八番には高武藏守師直、上杉彈正少弼朝貞、高越後守師泰、上杉伊豆守重能、大高伊豫守重成、上杉左馬助朝房、布衣に下括して、半靴著て、二騎づつ左右に打並たり。九番には後陣の隨兵、足利尾張左近大夫將監氏頼、千葉新介氏胤、二階堂美濃守行通、同山城三郎左衛門尉行光、佐竹掃部助師義、同和泉守義長、武田甲斐前司盛信、伴野出羽守長房、三浦遠江守行連、土肥美濃守高實、以上十人、戎衣甲冑何れも金玉を磨たり。十番には外様の大名五百餘騎、直垂著にて相隨。土佐四郎、長井修理亮、同丹波左衛門大夫、攝津左近藏人、城丹後守、水谷刑部少輔、二階堂安藝守、同山城守、中條備前守、園田美作權守、町野加賀守、佐々木豐前次郎左衛門尉、結城太田三郎、梶原河内守、大内民部大夫、佐々木能登前司、大平六郎左衛門尉、狩野下野三郎左衛門尉、里見藏人、島津下野守、武田兵庫助、同八郎、安保肥前守、土屋三河守、小幡右衛門尉、疋田三郎左衛門尉、寺岡九郎左衛門尉、田中下總三郎、須賀左衛門尉、赤松美作權守、同次郎左衛門尉、寺尾新藏人、以上三十二人、打混に不㆑守㆓次第㆒打たりける。此後は吉

八葉の車―青蓮花の八葉を描きたる車。

細太刀―眞劍にあらず儀刀なり

東中務丞常顯、佐々木佐渡判官入道が息男四郎左衞門尉秀定、同近江四郎左衞門尉氏綱、大平出羽守義尙、粟飯原下總守淸胤、吉良上總三郎滿貞、高刑部大輔師兼以上十二人、色々の絲毛の鎧に、烏帽子懸して、太く逞き馬に、厚總懸て番たり。三番には帶刀にて、武田伊豆四郎、小笠原七郎、同又三郎、三浦駿河次郎左衞門尉、同越中次郎左衞門尉、二階堂美作次郎左衞門尉、同對島四郎左衞門尉、佐々木佐渡五郎左衞門尉、同佐渡四郎、海老名尾張六郎、平賀四郎、逸見八郎、小笠原太郎次郎、以上十六人、染盡したる色々の直垂に、思々の太刀帶て、二行に歩み連たり。其次に正二位大納言征夷大將軍源朝臣尊氏卿は、八葉の車の鮮なるに、簾を高く揚げ、衣冠正く乘給ける。五番には後陣の帶刀にて、設樂五郎兵衞尉、同六郎、寺岡兵衞五郎、同次郎、逸見又三郎、同源太、小笠原藏人、秋山新藏人、佐々木出羽四郎左衞門尉、同近江治郎左衞門尉、富永四郎左衞門尉、宇佐美三河守、淸久左衞門次郎、森長門四郎、曾我左衞門尉、伊勢勘解由左衞門尉、以上十六人、衣服帶劔如レ先、行列の次第をぞ守ける。其次に參議正三位行兼左兵衞督源朝臣直義、卷纓の老懸に、蒔繪の細太刀帶て、小八葉の車に乘れり。七番には役人にて、南部遠江守宗繼、高播磨守師冬二人は、御劍の役。長井大膳大夫廣秀、

にてこそ其詮も候へ。神輿神木入洛有て、南都北嶺及二嗷訴一者、武家何と申共、靜謐の儀なくば、法會の違亂なるべし。斯て又叡願も徒に成ぬと存候。只速に有二聖斷一、衆徒の鬱訴を被レ宥、其後御心安く法義大會をも被レ行候へかしと、樣々に被レ申しかば、實にも近年四海半は亂て、一日も不レ安居、此上に又南北神訴に及び、衆徒鬱憤して忿らば、以外の珍事なるべしとて、枉二諸事一先院宣を被レ成下、勅願の儀を被二停止一爲二御結緣一、翌日に御幸可レ成被レ仰ければ、山門是に靜りて、神輿忽に御歸座有しかば、陣頭警固の武士も皆馬の腹帶を解て、末寺末社の門戸も參詣の道をぞ開きける。

○天龍寺供養事　附大佛供養事

此上は武家の沙汰として、當日の供養をば執行ひ、翌日に御幸可レ有とて、同八月二十九日、將軍竝左兵衛督路次の行粧を調て、天龍寺へ被二參詣一けり。貴賤岐に充滿て、僧俗彼に成レ群、前代未聞の壯觀也。先一番に時の侍所にて、山名伊豆守時氏、はなやかに鎧たる兵五百餘騎を召具して先行す。其次に隨兵の先陣にて、武田伊豆前司信氏、小笠原兵庫助政長、大友戸次丹後守頼時、伊東大和八郎左衛門尉祐熈、土屋備前守範遠、

楚越同舟―韻府に易略列曰同舟濟胡越何患乎異心也

向以下、一向被停止之、又於御幸者、云當日云翌日、共以被罷其儀、凡又爲令斷絶禪法興行、先被放疎石於遠島、於禪院者不限天龍一寺、洛中洛外大小寺院、悉以破却之、永掃達磨宗之蹤跡、宜開正法輪之弘通。是專釋門之公儀也。尤待貴寺之與同焉。縡已迫喉、不可旋踵。若有許諾者、日吉神輿入洛之時、春日神木同奉勸神行、加之、或勤彼寺供養之奉行、或致著座催促之領掌藤氏月卿雲客等、供養以前悉以被放氏、其上猶押而有出仕之人者、貴寺竝山門放遣寺家社家之神人公人等、臨其家々可致苛法之沙汰之由、不日可被觸送也。此等條々衆議無令停滯。返報不違先規者、南北兩門之和睦、先表當時之大平、自他一揆之始終、欲約將來之長久。論宗旨於公庭則、雖似有兄弟鬩墻之爭、寄至好於佛家則、復須共楚越同舟之志。早成當機不拘之義勢、速聞見義卽勇之歡聲。仍牒送如件。

康永四年八月日

とぞ書たりける。山門既に南都に牒送すと聞えしかば、返牒未送以前にとて、院司の公卿藤氏の雄臣等參列して、被歎申けるは、自古山門の訴訟者、以非爲理事不珍候。其上今度の儀は、旁申處有其謂歟存候。就中行佛事貴僧法事も、天下無爲

第一義天―實相眞如の全體をさしていふ
遐邇―遠近に同じ
暗證之朋黨―上慢の見に落ちて觀解にのみ執著するともがら

延曆寺牒興福寺衙。

早可任先規致同心訴被停止天龍寺供養儀、竝令斷絕禪宗興行仔細狀。

右大道高懸、均戴第一義天之日月、教門廣開、互斟無盡藏海之源流。帝德安寧之基、佛法擁護之要、遐邇戮力、彼此同功。理之所推、其來尚矣。是以對治邪執、掃蕩異見之勤、自古覃今匪懈。扶翼朝家、修整政道之例、貴寺當山合盟、專起先聖明王之叡願、深託尊神靈祇之冥鑑。國之安危、政之要須、莫先於斯。誰處聊爾。爰近年禪法之興行喧天下、暗證之朋黨滿人間。濫觴雖淺、已揚滔天之波瀾。熛火不消、忽起燎原之烟炎。本寺本山之威光、白日空被掩蔽、公家武家之偏信、迷雲遂不開晴。若不加禁遏者、諸宗滅亡無疑。傳聞、先年和州片岡山達磨寺、速被燒拂之、其住持法師被處流刑。貴寺之美談在茲。今般先蹤非遠。而今就天龍寺供養之儀、此間山門及再往之訟。今月十四日院宣云、今度儀非勅命云々。仍休愁訴屬靜謐之處、勅言忽有表裏、供養殊增嚴重。院司公卿以下有限之職掌等、悉以可令參行之由有其聞。朝端之軌則、理豈可然乎。天下之謗議、言以不可歎。吾山已被處無、而失面目。神道元來如在、盡含忿怒。於今者再歸本訴、屢奉驚上聞。所詮就天龍寺供養、院中之御沙汰、公卿之參

まゝが一切諸法也の意

方袍圓頂の身―僧侶の身をいふ

こそ存候へとぞ被レ申ける。諸卿皆此議可レ然と被レ同、其日の議定は終にけり。さらばとて、次日聽て山門の奏狀を武家へ被レ下、可二計申一由被二仰下一しかば、將軍左兵衞督諸共に、山門の奏狀を披見して、是はそも何事ぞ。建レ寺尊レ僧とて、山門の所領をも不レ妨、衆徒の煩にもならず、適公家武家歸二佛法一大善事を修せば、方袍圓頂の身としては、共に可レ悅事にてこそあるに、障礙を成んとする條、返々不思議也。所詮神輿入洛あらば、兵を相遣して可レ防。路次に振棄奉らば、京中にある山法師の土藏を點じ、造替させんに、何の痛か可レ有。非據の嗷訴を被二棄置一可レ被レ遂二嚴重供養一と、奏聞をぞ被レ經ける。武家如レ斯申沙汰する上は、公家何ぞ可レ及二異議一とて、已に事嚴重なりしかば、列參せし大衆、徒に款狀を公庭に被レ棄て、失二面目一登山す。依レ之三千の大衆、憤レ不レ斜。されば可レ及二嗷訴一とて、康永四年八月十六日三社の神輿を中堂へ上奉り、祇園北野の門戸を閉、師子田樂庭上に相列り、神人社司御前に奉仕す。公武の成敗拘る處なれば、山門の安否此時に有と、老若共に驚嘆す。斯ては猶も不レ叶とて、同十七日、劍、白山、豐原、平泉寺、書寫、法花寺、多武峰、內山、日光、太平寺、其外の末寺末社三百七十餘箇所へ觸送り、同十八日四箇の大寺に牒送す。先興福寺へ送る。其牒狀云、

旨にはあらで唯文句の吟味によりて其手段なりとするをいふ

堅石白馬の論―空論をいふ

色卽是空―空卽是色―一切諸法は其實體眞空也、眞空なる實體その

に卽身成佛する事もあるべからず。唯如來の權實の徒に堅石白馬の論となり、祖師の心印、空く叫騷怒張の中に可レ墮。凡宗論の難き事、我曾て聽ぬ。如來滅後一千一百年を經て後、西天に護法淸辨とて、二人の菩薩坐き。護法菩薩は法相宗の元祖にて、有相の義を談じ、淸辨菩薩は三論宗の初祖にて、諸法の無相なる理を宣給ふ。門徒二に分れ、是レ彼非レ此。或時此二菩薩相逢て、空有の法論を致し給ふ事、七日七夜也。共に富樓那の辯舌を假て、智三千界を傾しかば、無心の草木も是を隨喜して、時ならず花を開き、人を恐るゝ鳥獸も、是を感嘆して可レ去處を忘れたり。然れども論義遂に不レ休、法理兩篇に分れしかば、よしや五十六億七千萬歲を經て、慈尊の出世し給はん時、臨二會座一可レ散二此疑一とて、護法菩薩は蒼天の雲を分ち、遙に都率天宮に上り給へば、淸辨菩薩は靑山の岩を擘、修羅窟に入給にけり。其後華嚴の祖師香象、大唐にして此空有の論を聞て、色卽是空なれば、護法の有をも不レ嫌、空卽是色なれば、淸辨の空をも不レ遮と、一宗を會し給けり。上古の菩薩猶以如レ斯、況於二末世比丘一哉。されば宗論の事は、強に無二其詮一候歟。とても近年天下の事、小大となく皆武家の計として、萬叡慮にも不レ任事なれば、唯山門の訴申處、如何可レ有と、武家へ被二尋仰一、就二其返事一聖斷候べきかと

意輪觀音

六宗—律、倶舍、成實、法相、三論、華嚴

金口の相承—天台に金口相承今師相承とて二流あり、金口相承は釋尊豫て附法の次第を說き置きたるを云ふ也

沒滋味の手段—美味を味ふ如き教

唯雲門の陸士龍、日下の荀鳴鶴が相逢時の如也。然れば法相者六宗の長者たるべし。天台者諸宗の最頂也と被二宣下一、共に眉目をぞ開ける。抑天台の血脈は、至二師子尊者一絕たりしを、細々世隔て、唐朝の大師南岳、天台、章安、妙樂、自解佛乘の智を得て、金口の相承を續給ふ、奇特也といへども、禪宗は是を髣髴也と難じ申。又禪の立る所は、釋尊大梵王の請を受て、於二忉利天一法を說給ひし時、一枝の花を拈じ給ひしに、會中大比丘衆無二知事一。爰摩訶迦葉一人破顏微笑して、拈花瞬目の妙旨を、以レ心傳レ心たり。此事大梵天王問佛決疑經に被レ說たり。然るを宋朝の舒王翰林學士たりし時、祕して官庫に收し後、此經失たりと申條、他宗の證據に不レ足と、天台は禪を難じ申て、邪法と今も訴へ候上は、加樣の不審をも、此次に散度こそ候へ。唯禪與二天台一被二召合一、宗論を被レ致候へかしとぞ被レ申ける。此三議是非區に分れ、得失互に備れり。上衆の趣何れにか可レ被レ同と、閉口屈旨たる處に、二條關白殿申させ給けるは、八宗派分れて、末流道異也といへども、共に是獅子吼無畏の說に非と云事なし。然るに何れを取何れを可レ捨。縱宗論を致す共、天台は唯受一人の口決、禪家は沒滋味の手段、辨レ理談レ玄とも、誰か辨レ之誰か會レ之。世澆季なれば、如二摩騰一虛空に立人もあらじ、慈慧大師の樣

瓔珞細㲲の衣―きらびやかなる衣

紫磨黄金―黄金の精なるもの

唐居敷―門の下に敷きつめたる唐風の石疊をいふ

千手―千手觀音

如意輪―如

佛性言不成佛者、有情も不可成佛。有情の成佛は依具理佛性故也と難じ給ひしかば、仲算無言默止給けるが、重て答て曰、草木成佛無仔細、非情までもあるまじ、先自身成佛の證を顯し給はずは、以何散疑と宣ひしかば、此時慈慧僧正言を不出、且が程默坐し給ふとぞ見えし。香染の法服忽に瓔珞細㲲の衣と成て、肉身忽に變じて、紫磨黄金の膚となり、赫奕たる大光明十方に遍照す。されば南庭の冬木俄に花を開て、恰春二三月の東風に繽紛たるに不異。列座の三公九卿も、不知不替即身、至華藏世界之土、妙雲如來の下に來かとぞ覺ける。爰に仲算少し欺ける氣色にて、揚如意敲席云、止々不須說、我法妙難思と誦じ給ふ。此時慈慧僧正の大光明忽消て、本の姿に成給ひにけり。是を見て藤氏一家の卿相雲客は、我氏寺の法相宗こそ勝れたれと、我慢の心を起して、退出し給ける處に、門外に繫たる牛、舌を低て涎を唐居敷に殘せるを見給へば、慥に一首の歌にてぞ有ける。

草も木も佛になると聞時は、情有身のたのもしき哉。

是則草木成佛の證歌也。春日大明神の示給ひけるにや、何れを勝劣とも難定。理哉、仲算は千手の化身、慈慧は如意輪の變化也。されば智辨善說何れもなじかは可劣、

權者—佛菩薩の權に人と現れたるもの、卽ち常人にあらざるをいふ

旒纊—冠のたれと耳あてと

し給ふに、鴨河の水漲出、逆浪浸岸茫々たり。牛童扣轅如何と立たる處に、水牛一頭自水中游出て、車の前にぞ喘ぎける。僧正此牛に車を懸替て、水中を遣とぞ被仰ける。牛童隨命水牛に車を懸け、一鞭を當たれば、飛が如く走出て、車の轅をも不濡、浪の上三十餘町を游あがり、内裏の陽明門の前にて、水牛は掻消樣に失にけり。兩方の不思議奇特、皆權者とは乍云、類少き事共也。去程に清涼殿に獅子の座を布て、問者講師東西に相對す。天子は南面にして、玉扆に旒纊を挑げさせ給へば、臣下は北面にして、階下に冠冕を低る。法席既に定て、僧正は草木成佛の義を宣給へば、仲算は五性各別の理を立て難じて曰、非情草木、雖具理佛性、無行佛性。無行佛性、何有成佛義。但有文證者暫可除疑と宣しかば、慈慧僧正則圓覺經の文を引て、地獄天宮皆爲淨土、有性無性齊成佛道と誦し給ふ。仲算此文に被詰て、暫閉口し給處に、法相擁護の春日大明神、高座の上に化現坐て、幽なる御聲にて、此文點を讀替て敎させ給けるは、地獄天宮皆爲淨土、有性無性齊成佛道と。慈慧僧正重て難じて曰、此文點全法文の心に不叶。一草一木各一因果、山河大地同一佛性の故に、講答旣に許具理佛性。若乍具理佛性、遂無成佛時、以何曰佛性耶。若又雖具

させ給て、五體を投レ地、禮を成し給へば、皇后元妃卿相雲客、悉信仰の首を地に著て、隨喜の涙を袖に餘す。斯りしかば確執せし道士共も、飜レ邪、信心銘レ肝つゝ、三千七百餘人卽時に出家して、摩騰の弟子にぞ成にける。此日頓て白馬寺を建て、佛法を弘通せしかば、同時に寺を造事、支那四百州の中に、一千七百三箇所なり。自レ是漢土の佛法は弘りて、遺教于レ今流布せり。又我朝には村上天皇の御宇、應和元年に、天台法相の碩德を召て宗論有しに、山門よりは横川慈慧僧正、南都よりは松室貞松房仲算已講ぞ被レ參ける。豫參の日に成しかば、仲算旣に南都を出て上洛し給けるに、折節木津河の水出て、舟も橋もなければ、如何せんと河の邊に輿を舁居させて、案じ煩ひ給たる處に、怪氣なる老翁一人現じて、何事に此河の邊に徘ひ給ぞと問ければ、仲算、宗論の爲に召れて參內仕るが、洪水に河を渡り兼て、水の干落る程を待也とぞ答へ給ける。老翁笑て、水は深し、智は淺し、潛鱗水禽にだにも不レ及、以レ何可レ致ニ宗論一と耻しめける間、仲算實もと思て、十二人の力者に、唯水中を舁通せとぞ下知し給ける。輿舁さらばとて、水中を舁て通るに、さしも夥しき洪水左右に颰と分れて、大河俄に陸地となる。供奉の大衆悉足をも不レ濡渡けり。慈慧僧正も、比叡山西坂下松の邊に車を儲させて、下洛

鯨桓審—鯨のわだかまり居る淵　玉扆—玉座の意、扆は屛風也

曰、古五帝三皇の天下に爲レ王より以來、以二儒教一仁義を治め、以二道德一淳朴に歸し給ふ。而るに今摩騰法師等、釋氏の敎を傳て、佛骨の貴き事を說。內聖外王の儀に背き、有德無爲の道に違へり。早く彼法師を流罪して、大素の風に令レ復給べしとぞ申ける。依レ之、さらば道士と法師とを召合て、其威德の勝劣を可レ被二御覽一とて、禁闕の東門に壇を高く築て、豫參の日をぞ被レ定ける。既に其日に成しかば、道士三千七百人、胡床を列て西に向ひ坐す。沙門摩騰法師は、草座を布て東に向ひ坐したりけり。其後道士等何樣の事を以て、勝負を可レ決候やと申せば、唯上レ天入レ地擘レ山握レ月術を可レ致とぞ被二宣下一ける。道士等是を聞て大に悅び、我等が朝夕爲レ業所なれば、此術不レ難とて、玉晨君を禮し、炷二芝荻一呑レ氣、向二鯨桓審一昇レ天すれども不レ被レ上、入レ地すれども不レ被レ入。まして擘レ山すれども山不レ裂、握レ月すれども月不レ下。種々の仙術皆佛力に被レ壓不二爲得一しかば、萬人拍レ手笑レ之。道士低レ面失レ機處に、摩騰法師、瑠璃の寶瓶に佛舍利を入て、左右の手に捧て、虛空百餘丈が上に飛上てぞ立たりける。上に著所なく、下に蹈所なし。佛舍利より放二光明一、一天四海を照す。其光金帳の裏、玉扆の上まで耀きしかば、天子諸侯卿大夫百寮萬民、悉金色の光に映ぜしかば、天子自玉扆を下

六師外道―富闌那迦葉、末迦黎拘賖黎、刪闍夜毘羅胝、阿耆多翅舎欽婆羅、迦羅鳩駄迦旃延、尼犍陀若提子

頭の上より火出て炎天にあがり、四牙劔よりも利にして、眼日月を懸たるが如し。人皆怖れ倒て、魂を消處に、舎利弗默然として座し給たるに、多聞天王身には金色の鎧を著し、手に降伏の鉾をつきて出現し給ふに此鬼神怖畏して忽に迯去ぬ。其後猛火俄に燃出、炎盛に外道が身に懸りければ、外道が門人悉く舎利弗の前に倒伏て、五體を地に投禮をなし、願は尊者慈悲の心を起して、哀愍し給へと、己が罪をぞ謝し申ける。此時舎利弗慈悲忍辱の意を發し、身を百千に化し、十八變を現じて、還て大座に著給ふ。見聞の貴賤、悉宿福開發し、隨喜感動す。六師外道が徒、一時に皆出家して、正法宗に歸服す。是より須達長者願望を遂て、祇園精舎を建しかば、嚴淨の宮殿、微妙の淨刹、一生補處の菩薩、聖衆此中に來至し給へば、人天大會悉渴仰の頭を傾ける。又異朝に後漢の顯宗皇帝、永平十四年八月十六日の夜、如日輪光明を帶たる沙門一人、帝の御前に來て、空中に立たりと御夢に被御覽、夙に起て群臣を召て、御夢を問給に、臣傅毅奏曰、天竺に大聖釋尊とて、獨の佛出世し給ふ。其教法此國に流布して、萬人彼化導に可預御瑞夢也と合せ申たりしが、果して摩騰竺法蘭佛舎利并四十二章經を渡す。帝尊崇し給事無類。爰に莊老の道を貴で、虚無自然の理を專にする道士共、列訴して

利弗定より起て、衣服を整へ、尼師壇を左の肩に著、歩む事如二獅子王一來り給ふ。此時不レ覺外道共五體を地に著て伏ける。座定て後、外道が弟子勞度差禁庭に歩出で、虚空に向ひ目を眠り、口に文を咒したるに、百圍に餘る大木俄に生出て、花散二春風一葉醉二秋霜一、見人奇特の思をなす。後に舍利弗口をすぼめて、息を出し給ふに、其息旋て嵐風となり、此木を根より吹拔て地に倒ぬ。勞度差又空に向て咒するに、周圍三百里にみえたる池水俄に湧出して、四面皆七寶の靈池となる。舍利弗又目を揚て、遙に天を見給へば、一頭六牙の白象空中より下る。一牙の上に各七寶の蓮花を生じ、一々の花の上に、各七人の玉女あり。此象舌を延て、一口に彼池水を呑盡す。外道又虚空に向て、且く咒したるに、三の大山出現して、上に百餘丈の樹木あり。其花雲を凝し、其菓玉を連たり。舍利弗爰に手を揚て、空中を招き給ふに、一人の金剛力士、以レ杵此山を如二微塵一打碎く。又外道如レ先咒するに、十頭の大龍雲より下て、雨を降雷を振ふ。舍利弗又頭を擧て空中を見給ふに、一の金翅鳥飛來、此大龍を割食。外道又咒するに、肥壯多力の鐵牛一頭出來て、地を跑て吼忿る。舍利弗一音を出して、咄々と叱し給ふに、奮迅の鐵獅子走出て、此牛を食殺す。外道又座を起て咒するに、長十丈餘の一鬼神を現ぜり。

八十頃—六尺を一歩とし百歩を一畝とし百畝を一頃とす

食言—虚言の意、尚書曰、朕不レ食レ言

園八十頃の地に布滿て、太子に是を奉る。祇陀太子是を見給て、吾言戲也。汝大願を發して、精舍を建ん爲に此地を乞。何の故にか我是を可レ惜。早此金を以て、造工の資に可レ成被レ仰ければ、長者掉レ首曰、國を可レ保太子たる人は、假にも不二妄語一。臣又苟不レ可レ食レ言、何ぞ此金を可二返給一とて、黄金を地に棄ければ、此上は無レ力とて、金を收取て地を被レ與。長者大に悦で、軈て此精舍を立んと欲る處に、六師外道、波斯匿王に參て申けるは、祇陀太子爲二瞿曇沙門一、須達に祇陀園を與て精舍を建んとし給。此國の弊民の煩のみに非ず、世を失ひ國を保給ふまじき事の瑞也。速に是を停給へとぞ訴へける。波斯匿王外道の申處も有二其謂一、長者の願力も難二棄案一じ煩ひ給て、さらば佛弟子と外道とを召合せ、神力を施させ、勝負に附て事を可レ定と被二宣下一しかば、長者是を聞て、佛弟子の通力、我足の上の一毛にも、外道は不レ及とぞ欺給ひける。されぱとて豫參の日を定め、通力の勝劣を可レ有二御覽一被二宣下一。既其日に成しかば、金鼓を打て見聞の衆を集め給ふ。舍衞國の三億悉集、重レ膝連レ座、斯る處に六師外道が門人、如二雲霞一早參じて著座したるに、舍利弗は寂場樹下に禪坐して、定より不レ出給。外道が門徒、さればこそ舍利弗我師の威德に臆して、退復し給ふと笑欺ける處に、舍

賢愚因縁經―一部十三卷あり、宋の惠覺威德の共譯なり

する百千の僧俗、飲食衣服一として乏しき事なし。雖然如來の正法を究たる僧なし。佛法忽に滅なんとす。故に毎朝嗟傷すと、是其證也。如何に寺を被造共、人の煩歎のみ有ては其益なかるべし。朝廷の衰微歎て有餘。是を見て山門頻に禁廷に訴ふ。言之者無咎、聞之者足以誡乎。然らば山門の訴申處有其謂歟とこそ存候へと、無憚處ぞ被申ける。此兩議相分れて、是非何れにかあると、諸卿傾心辨旨かねたれば、滿座鳴を靜たり。良有て三條源大納言通冬卿被申けるは、以前の議は、唯天地各別の異論にて、可道行とも不存。縱山門申處雖事多、肝要は單正法與邪法の論也。然らば禪僧與聖道召合、宗論候へかしとこそ存候へ。さらでは難事行こそ候へ。凡宗論の事は、三國の間先例多く候者を。朝參の餘暇に、賢愚因緣經を開見候しに、彼祇園精舍の始を尋れば、舍衛國の大臣、須達長者、此國に一の精舍を建、佛を安置し奉らん爲に、舍利弗と共に、遍く聚落園林を廻て見給ふに、波斯匿王の太子遊戲經行し給ふ祇陀園に勝たる處なしとて、長者、太子に此地を乞奉る。祇陀太子、吾逍遙優遊の地也、容易汝に難與。但此地に布餘れる程の金を以て、可買取とぞ戲れ給ける。長者此言誠ぞと心得て、軈て數箇の倉庫を開き、黃金を大象に負せ、祇陀

人我無相―眞實本有無作の妙理より立て見れば自といふ者も他といふ事もなし

諸有所得―大般若經曰諸有情類具二斷常見一住二有所得一難レ可二調伏一

練若―寺

凡有レ心人は、信レ物化物を見じと可レ思。其故は戒行も缺、内證も不レ明ば、所得の施物罪業に非と云事なし。又道學の者に三機あり。上機は人我無相なれば、心に懸る事なし。中機は一念浮べ共、人我無理を觀ずる故に、二念と相續で無二思事一。下機は無相の理までは辨ぜね共、慙愧懺悔の心有て、諸人を不レ惱、慈悲の心あり。此外に應レ墮二地獄一者有べしと見えたり。人の生涯を失はん事を不レ顧、他の難非を顯す、此等也。凡寺を被レ建事も、人法繁昌して、僧法相對せば、眞俗道備て、尤可レ然。寶堂莊嚴に事を寄、奇麗嚴淨を雖レ好、僧衆無二慈悲一不正直にして、法を持し人を謗して、徒に明し暮さば、佛法興隆とは申難かるべし。智識とは、身命を不レ惜、隨逐給仕して、諸有所得の心を離て、清淨を修すべきに、今禪の體を見るに、禁裡仙洞は松門茅屋の如なれば、禪家には玉樓金殿を瑩、卿相雲客は木食草衣なれば、禪僧は珍膳妙衣に飽り。祖師の行儀如レ此ならんや。昔摩羯陀國の城中に、一人の僧あり。毎朝東に向ては、快悦して禮拜し、北に向ては嗟嘆して涙を流す。人怪みて其謂を問に、答て云、東には山中に乘戒倶に急なる僧、樹下石上に坐して、已に證を得て年久し。佛法繁昌す。故に是を禮す。北には城中に練若あり。數十の堂塔甍を雙べ、佛像經卷金銀を鏤たり。此に住

大耆舊―老年者

沙彌、喝食―ともに小僧をいふ

君子耻云々―論語憲問篇にあり

に不」限、百王の理亂、四海の安危、自」古至」今、山門是を耳外に不」處、所謂治承の往代に、平相國清盛公、天下の權を執て、此平安城を福原の卑濕に移せし時も、山門獨捧奏狀、終に遷都の議を申止畢ぬ。是等は皆山門の大事に非ずといへども、佛法與王法以相比故被裁許者也。抑禪宗の摸樣とする處は、宋朝の行儀、貴ぶ處は祖師の行迹也。然に今の禪僧之心操法則、皆是に相違せり。其故は宋朝には、西蕃の帝師とて、魔訶迦羅天の法を修して、朝家の護持を致す眞言師あり。彼れ上天の下一人の上たるべき依」有」約、如何なる大刹の長老、大耆舊の人も、路次に行逢時は、膝をかゞめて地に跪き、朝廷に參會する時は、伸」手沓を取致」禮といへり。我朝には不」然、無行短才なれども、禪僧とだに云つれば、法務大僧正門主貫頂の座に均からん事を思へり。唯今父母の養育を出たる沙彌喝食も、兄を超父を越んと志あり。是先仁義禮智信の法にはづる。曾て宋朝に無」例、我朝に始れり。言は語錄に似て、其宗旨を說時は、超佛越祖の手段有といへども、向」利他之權貴に媚る時は、檀那に諂ひ、富人に不」下と云事なし。身には錺五色、食には盡八珍、財產を投て住持を望み、寄進と號して、寄沙汰有樣、誠に法滅の至と見えたり。君子耻其言過其行と云へり。是豈知」耻云乎。

に、吾本來茲土傳レ法救二迷情一一花開五葉結レ果自然成

天子武を諱とし云々—天子の名が武なる故すべて武の字を忌みて他の同音字に改むる習慣をいふ

知識—明僧

んや。是奸濫謀訴也。豈足二許容一哉。其上天子武を諱とし給ふ時は、世の人不レ謂二武名一。況乎此夢窓は、三代の國師として、四海の知識たり。山門縱ひ訴を横すとも、義を知り禮を存せば、過言を止て可レ仰二天裁一。漫に疎石法師を遠島へ遣し、天龍寺を犬神人に仰て、可二破却一と申條、奇怪至極也。罪科不レ輕。此時若措二刑者、向後の嗷訴不レ可レ絕。早三門跡に被二相尋一、衆徒の張本を召出し、斷罪流刑にも可レ被レ行とこそ存候へと、誡に無二餘儀一被レ申けり。此議げにもと覺る處に、日野大納言資明卿被レ申けるは、山門聊嗷訴に似て候へ共、退て加二愚案一、一義有と存候。其故は日本開闢は、自二天台山一起り、王城の鎭護は、以二延曆寺一專とす。故に亂政行レ朝日は、山門是を諫申し、邪法世に興る時は、衆徒是を退る例、其來尙矣。先後宇多院御宇に、横岳大應國師、嘉元寺を被レ造時、山門依二訴申一其議を被レ止畢。又以往に、土御門院御宇、元久三年に、沙門源空專修念佛敷演の時、山門訴申て是を退治す。後堀河院御宇嘉祿三年、尙專修の餘殃を誡て、法然上人の墳墓を令二破却一。又後鳥羽院御宇建久年中は、榮西能忍等禪宗を洛中に弘めし時、南都北嶺共に起て及二嗷訴一。建仁寺建立に至て、遮那止觀の兩宗を被レ置上、開山以二別儀一可レ爲二末寺一由、依レ被二申請一、被レ免二許候き。總て、佛法の一事

踰墻之人—孟子卷六に鑽二穴隙一相窺踰レ墻相從則父母國人皆賤レ之

執鞭之士—論語述而篇の朱註に執鞭賤者之事

何篇哉—何のいはれぞや

四花—天台四教の法門をいふ

五葉爲叢林—祖庭事苑

淳朴、四花敷二台嶺一、痛乎、時及二澆薄一、五葉爲二叢林一。正法邪法興廢粲然而可レ覩レ之。倩看二佛法滅盡經文一、曰我滅盡期、五濁惡世、魔作二沙門一、壞二亂吾道一、但貪二財物一、積集不レ散。誠哉斯言、今疎石是也。望請天裁急斷二葛藤一、於二天龍寺一者須レ令下削二勅願之號一、停中止勅會之儀上、流二刑疎石一、徹中却彼寺上。若然者法性常住之燈長挑、而耀二後五百歲之闇一、皇化照耀之日自暖、而麗二春一三月之天一。不レ耐二懇歎之至一矣。衆徒等誠惶誠恐謹言。

康永四年七月日、延曆寺三千大衆法師等上

とぞ書たりける。奏狀內覽に被レ下て後、諸卿參列して此事可レ有二如何一と僉議あり。去共大儀なれば、滿座閉口の處に、坊城大納言經顯卿進で被レ申けるは、先就二山門申詞一案二事情一、和漢の例を引て、此宗を好む世は、必不レ亡云事なしと申條、愚案短才の第一也。其故は、異國に此宗を尊崇せし始を云ば、梁武帝對二達磨一、聞二無功德話一、大同寺に禪坐し給しより以來、唐代二百八十年、宋朝三百十七年、皆寶祚長久にして、國家安靜也。我朝には武臣相摸守此宗に傾て、九代累葉を榮たり。而に幼帝の時に至て、大宋は蒙古に被レ奪、本朝には元弘の初に當て、高時一家を亡せし事は、全非二禪法歸依咎一、唯政を亂り驕を究し故也。何必しも治まりし世を捨て、亡びし時をのみ取

含沙―蟲の名
蒙窓向壁―達磨の九年面壁の修行をいふ
緘石爲金―荀子曰宋之愚人得燕石而藏之以爲寶周客聞而觀焉掩口笑曰與瓦甓不殊
八宗―律、倶舍、成實、法相、三論、眞言、天台、華嚴

今如疎石法師行跡者、食杜蠹害、射人含沙也。亡國之先兆、大敎之陵夷、莫甚於此。何以道諸。纔川其端、暗巢西來之宗旨、漫破東漸之佛法。守之者蒙向壁信之者、緘石爲金、其愚心皆如斯矣。加旃、移皇居之遺基、爲人處之栖界、何不傷哉。三朝禮儀之明堂云損、爲野干爭尸之地、八宗論談之梵席永絕、替鬼神暢舌之聲。笑問彼行藏何所似。譬猶調達萃衆賢而落邪路、提婆貪供而開利門鳴呼人家漸爲寺、古賢悲而戒之、矧於皇居哉。聞說岩栖磵飲大忘人世、道人之幽趣也。疎石獨背之。山櫛藻梲、自安居所、俗士之奢侈也。疎石尚過之。韜光掩門、何異踰墻之人。垂手入鄽、宛同執鞭之士。天下言之嗽口、山上聞之洗耳處、剩令儼臨幸之粧、將刷供養之儀、因玆三千學侶忽爲雷同、一紙表奏、累奏驚天聽於是有勅答云、天龍寺供養事、非嚴重勅願寺供養、准據當寺、奉爲後醍醐天皇御菩提被建立訖。而追善御佛事、武家申行之間、爲御聽聞、密々可有臨幸歟之由、所有其沙汰也。山門訴申何篇哉云云。就綸宣訪往事、捨元務末、非明王之至德。輕正重邪、豈佛意所歸乎。而今九院荒廢、而舊苔疎補、使露之隙、五堂回祿而作木末運成風之斧。吾君何闕天子本命之道場、被興犢牛前身之伽界偉哉、世作

犬神人―祇園の召使の者

破却―以下十一字異本に據て之を補ふ

比叡山也、致鎭守於帝城。自爾以來釋氏化導之正宗、天子本命之道場、偏在眞言止觀之繁興、被專聖代明時之尊崇者也。爰頃年、禪法之興行喧於世、如無顯密弘通。亡國之先兆、法滅之表事、誰人不思之、吾山殊驚嘆也。訪例於異國、宋朝幼帝尊崇禪宗、奪世於蒙古。引證於吾朝、武臣相州貴重此法、傾家於當今。覆轍不遠、後車盍誡。而今天龍寺供養之儀、既整勅願之軌則、可及臨幸之壯觀云云。事如風聞者、奉驚天聽、遠流疎石法師、而於天龍寺、以犬神人可令破却之由、可奏聞公家觸訴武家。裁許若及猶豫者、早頂戴七社之神輿、可奉振九重之帝闕と僉議しければ、三千の大衆一同に皆尤とぞ同じける。同七月三日谷々の宿老捧款狀陳參す。其奏狀に云、

延暦寺三千大衆法師等、誠恐誠惶謹言。

請特蒙天裁因准先例、忽被停廢疎石法師邪法、追放其身於遠島、至天龍寺者、止勅供養儀則、恢弘顯密兩宗教迹、彌致國家護持精祈狀。

右謹考案内、直蹈諸宗之最頂、快護百王之聖躬、唯天台顯密之法而已。仰之彌高、誰攀一實圓頓之月。鑽之彌堅、曷折四曼相卽之花。是以累代之德化、忝比叡運於當山。諸刹之興基、多寄稱號於末寺。若夫順則不妨、建仁之儀在前。逆則不得、嘉元之例在後。

煙嶂—嶂は山の形の屛風を立てたる如きをいふ

慧崇、韋偃—ともに支那の畫工なり

三門跡—圓融院、青蓮院、妙法院

士應化の普明閣、塵々和光の靈庇廟、天心浸秋曹源池、金鱗焦尾三級岩、眞珠琢額龍門亭、捧三壺龜頂塔、雲半間の萬松洞、不言開笑拈花嶺、無聲聞音絶唱渓、上銀漢渡月橋、此十景の其上に、石を集ては煙嶂の色を假り、樹を栽ては風濤の聲を移す。慧崇が煙雨の圖、韋偃が山水の景にも、未得風流也。康永四年に成風の功終て、此寺五山第二の列に至りしかば、總じては公家の勅願寺、別しては武家の祈禱所とて、一千人の僧衆をぞ被置ける。

○依山門嗷訴公卿僉議事

同八月に上皇臨幸成て、供養を可被遂とて、國々の大名共を被召、代々の任例其役を被仰合。凡天下の鼓騷洛中の壯觀と聞えしかば、例の山門の大衆忿をなし、夜々の蜂起、谷々の雷動無休時。あはや天魔の障礙、法會の違亂出來ぬるとぞみえし。三門跡是を爲靜御登山あるを、若大衆共御坊へ押寄て、不日に追下し奉り、頓て三塔會合して、大講堂の大庭にて僉議しける。其詞に云、夫王道之盛衰者、依佛法之邪正、國家之安全者、在山門之護持。所謂桓武皇帝建平安城也、契將來於吾山傳教大師開

讃岐院—崇德院

隱岐院—後鳥羽天皇

宋朝—當に元朝とあるべき也

憤深して、國土に災を下し、禍を被成候と存候。去六月二十四日の夜夢に、吉野の上皇鳳輦に召て、龜山の行宮に入御坐と見て候しが、幾程無て仙去候。又其後時々金龍に駕して、大井河の畔に逍遙し御座す。西郊の靈跡は、檀林皇后の舊記に任せ、有謂由區々に候。哀可然伽藍一所御建立候て、彼御菩提を弔ひ進せられ候はゞ、天下などか鎭らで候べき。菅原の聖廟に贈爵を奉り、宇治の惡左府に官位を贈り、讃岐院隱岐院に尊號を謚し奉り、仙宮を帝都に遷進られしかば、怨靈皆靜て、却て鎭護の神と成せ給候し者をと被申しかば、將軍も左兵衞督も、此議尤とぞ被甘心ける。されば頓て夢窻國師を開山として、一寺を可被建立とて、龜山殿の舊跡を點じ、安藝周防を料國に被寄、天龍寺をぞ被作ける。此爲に宋朝へ寶を被渡しかば、賣買其利を得て百倍せり。又遠國の材木をとれば、運載の船更に煩もなく、自順風を得たれば、誠に天龍八部も、是を隨喜し、諸天善神も、彼を納受し給ふかとぞ見えし。されば佛殿、法堂、庫裏、僧堂、山門、總門、鐘樓、方丈、浴室、輪藏、雲居庵、七十餘宇の寮舍、八十四間の廊下まで、不日の經營事成て、奇麗の粧を交へたり。此開山國師天性水石に心を寄せ、浮萍の跡を爲事給しかば、傍水依山十境の景趣を被作たり。所謂大

かば土牛を作り追儺といふ事はじまりき、大寒日の夜半に陰陽師これを門口に立つるなり

そゞろなるばさら―むだなおごり

左兵衛督―直義

是等は皆代々の聖主賢君の受レ天奉レ地、鎭レ世治レ國樞機なれば、一度も不レ可ニ斷絶一事なれ共、近年は依ニ天下鬪亂一一事も不レ被レ行。されば佛法も、神道も、朝儀も、節會も、なき世と成けるこそ淺ましけれ。政道一事も無きに依て、天も災を下す事を不レ知。斯けれ共、道を知者無れば、天下の罪を身に歸して、己を責る心の無りけるこそうたてけれ。されば疾疫飢饉年々に有て、蒸民の苦とぞ成にける。

○天龍寺建立事

武家の輩如レ此諸國を押領する事も、軍用を支ん爲ならば、せめては無レ力折節なれば、心をやる方も有べきに、そゞろなるばさらに耽て、身には五色を餝り、食には八珍を盡し、茶の會酒宴に、若干の費を入、傾城田樂に、無量の財を與へしかば、國費え人疲て、飢饉疾癘盗賊兵亂止時なし。是全く天の災を降すに非ず、唯國の政無に依者也。然を愚にして道を知人無りしかば、天下の罪を身に歸して、己を責る心を辨へざりけるにや。夢窓國師左兵衛督に被レ申けるは、近年天下の樣を見候に、人力を以て、爭か天災を可レ除候。何樣是は吉野の先帝崩御の時、樣々の惡相を現じ御座候けると、其神靈御

栗、柿、さゝげ

釋奠―孔子ならびに顏回などの十哲を祭ること

國祭―賀茂の本祭をいふ

土牛の童子―昔疫癘盛にして百姓多く失せし

朔日の告朔、廣瀬龍田祭に可ㇾ向。五位の定、女官の補任帳、二日は最勝寺の八講、七夕の乞巧奠、八日の文殊會、十四日は盂蘭盆、十九日は尊勝寺の八講、二十八日は相撲節會。八月には、上の丁の釋奠、明る日内論議、四日は北野祭、十一日は官の定考、十五日は八幡放生會、十六日は駒引、仁王會季御讀經あり。九月には、九日重陽の宴、十一日は伊勢の例幣、祈年、月次、神嘗、新嘗、大忌、風神、十五日は東寺の灌頂、鎭花、三枝、相嘗、鎭魂、道饗祭あり。十月には、掃部寮夏の御座を徹して、冬の御座を供ず。兵庫寮鼓吹の聲を發し、刑部省年終斷罪の文を進る。亥日三度の猪子、五日は弓場始、十日は興福寺の維摩會、競馬の負方の獻物、大歌始あり。十一月には、朔日に内膳司忌火の御飯を供じ、中務省御暦を奏す。神祇官の御贖、齋院の御神樂、山科、平野、春日、森本、梅宮、大原野祭、新嘗會、賀茂臨時祭あり。十二月には、自二朔日一同十八日まで、内膳司忌火の御飯を供ず。御體の御占、陰陽寮來年の御忌を勘祿して、内侍に是を進る。荷前の使、御佛名、大寒の日、土牛の童子を立、晦日に宮内省御藥を奏す。大祓、御髪上、金吾四隊に列て、院々の燒燈不ㇾ異二白日一、沈香火底に坐して吹ㇾ笙と云ぬる追儺の節會は今夜也。委細に是を註さば、車に載とも不ㇾ可ㇾ盡。唯大綱を申計也。

日には御巫御贖を奉る。院の尊勝陀羅尼。二月には、上の丁日釋奠、上の中日春日祭、翌日率川祭、上の卯日大原野祭、京官の除目、祈年の祭、三省考選の目錄、列見の位祿、季の御讀經、仁王會を被レ行。三月には三日の御節供、御燈、曲水の宴、七日は藥師寺の最勝會、石淸水の臨時祭、東大寺の華嚴會授戒、同日花鎭祭あり。四月には、朔日の視告朔、同日掃部寮、冬の御座を徹して、夏の御座を供す。主水司始て水を獻り、兵衛府御扇を進る。山科、平野、松尾、森本、當麻、當宗、梅宮、大神祭、廣瀨、立田祭あり。五日は中務省妃夫人嬪女御の夏の衣服の文を申す。同日准陰の位記、七日は擬階の奏也。八日は灌佛、十日は女官の春夏の時の飾物の文を奏す。內の弓場の埒、齋內親王の御禊、中の申日國祭、關白の賀茂詣、中の酉日賀茂祭、男女の被馬、下の子日吉田宮祭、東大寺の授戒の使、駒牽、神衣、三枝祭あり。五月には、三日六衛府、菖蒲並花を獻る。四日は走馬の結番並毛色を奏す。五日は端午祭、樂人御節供、競馬、日吉祭、最勝講を被レ行。六月には、內膳司忘火の御飯を供す。中務省曆を奏す。造酒司の醴酒、神祇官の御體の御占、月次、神今食、道饗、鎭火祭、神祇官の荒世の御贖を奏す。東西の文部祓の刀を奏す。十五日は祇園祭、晦日の節折、大祓。七月には、

の井を點して去年より蓋しておきたるを立春の日汲みて奉る、これをきこしめせば年中の邪氣を除くといふ

・視告朔—百宮の行事上日を記したるを月每に天子の御覽ぜらるゝをいふ

七種の御粥—白穀、大豆、小豆、粟

○朝儀年中行事事

暦應改元の比より、兵革且く靜り、天下雖レ屬ニ無爲一、京中の貴賤は尙窮困の愁に嬰れり。其故は國衙庄園も、本所の知行ならず、正稅官物も、運送の煩有て、公家は逐レ日狼戾せしかば、朝儀悉廢絕して、政道さながら塗炭に墮にけり。夫天子は必萬機の政を行ひ、四海を治給ふ者也。其年中行事と申は、先正月には、平旦に天地四方拜、屠蘇白散、群臣の朝賀、小朝拜、七曜の御曆、腹赤の御贄、氷樣、式兵二省內外官の補任帳を進る。立春の日は、主水司立春の水を獻る。子日の若菜、卯日の御杖、視告朔の禮、中春兩宮の御拜賀、五日は東寺の國忌、敍位の議白、七日は兵部省御弓の奏、同日白馬節會、八日は大極殿の御齋會、同日眞言院の御修法、太元の法、諸寺の修正、女敍位、十一日は外官の除目、十四日は殿上の內論議、十五日は七種の御粥、宮內省の御薪、十六日は踏歌節會、秋冬の馬料、諸司の大粮、射禮、賭弓、年給の帳、神祇官の御麻、晦

狼戾―衰微の意

氷樣―去年納置きたる氷の厚薄寸法などを元日節會の序に奏聞する事也

立春の水―御生氣の方

懸もはづさぬ—車を牛よりはづさぬ意

布引—ひきもきらず群集すること

一族にてやあるらん、院をだに散々に射進らするを、増て吾等こゝを下では惡かりぬべしと周章騒ぎ、懸もはづさぬ車より飛下ける程に、車は怒に先へ行馳るに、軸に當て立烏帽子を打落し、髻放ちたる青陪從、片手にては髻をとらへ、片手には笏を取直し、騎馬の客の前に跪き、いかに〲と色代しけるは、前代未聞の曲事なり。其日は殊更聖廟の御縁日にて、參詣の貴賤、布引也けるが、是を見て、けしからずの爲體哉、路頭の禮は、弘安の格式に被定置たり。其にも雲客武士に對せば、自車おり髻を放せとはなき物をとて、笑はぬ者も無りけり。

の旨き義

毛沓―深く脛まではく沓。騎射の時用ふ

未變異は無りけりとて、皆人恐怖して、直義の政道をぞ感じける。頃日の習俗、華夏變じて戎國の民と成ぬれば、人皆院國王と云事をも不ㇾ知けるにや、土岐頼遠こそ御幸に參會て、狼藉したりとて、被ㇾ斬進せたれと申ければ、道を過る田舍人共是を聞て、抑院にだに馬より下んには、將軍に參會ては、土を可ㇾ這かとぞ欺きける。さればをかしき事共、淺ましき中にも多かりけり。爰に如何なる雲客にてか有けん、破れたる簾より見れば、年四十餘なりけるが、眉作り鐵漿附て、立烏帽子引かづき著たる人の、轅はげたる破車を、打てども行ぬ疲牛に懸て、北野の方へぞ通りける。今程洛中には武士共充滿して、時を得る人其數を不ㇾ知。誰とは不ㇾ見、太く逞しき馬共に、思々の鞍置て、唐笠に毛沓はき、色々の小袖ぬぎさげて、酒あたゝめ、たき殘したる紅葉の枝、手每に折かざし、早歌交の雜談して、馬上二三十騎、大内野の芝生の花、露と共に蹴散かし、傍を拂て步ませたり。主人と覺しき馬上の客、此車を見附て、すはや是こそ件の院と云くせ者よ。頼遠などだにもかゝる恐しき者に乘會して、生涯を失ふ。まして我等が樣の者、いかにと咎られては叶まじ。いざや下んとて、一度にさつと自ㇾ馬下、頬かぶりはづし、笠ぬぎ、頭を地に著てぞ畏りける。車に乘たる雲客は、又是を見て穴淺まし哉。若是は土岐が

いしかり―俗においしいといふことにて、味

國へぞ被ㇾ流ける。土岐頼遠は、彌罪科遁るゝ所無りければ、美濃國に楯籠て、謀反を起さんと相議して、便宜の知音一族共を招寄と聞えしかば、急ぎ討手を差下し、可ㇾ被二退治一とて、先甥の刑部大輔頼康を始として、宗徒の一族共に、御教書を被二成下一しかば、頼遠謀反も不二事行一、角ては如何と思案して、潛に都へ上、夢窓國師をぞ憑ける。夢窓は此比天下の大善知識にて、公家武家崇敬類無りしかば、さりともと被二憑仰一しか共、左兵衛督、是程の大逆を緩く閣かば、向後の積習たるべし。然れ共御口入叵二默止一ければ、無二力其身をば被ㇾ誅て、子孫の安堵を可ㇾ全と返事被ㇾ申、頼遠をば侍所細川陸奥守顯氏に被ㇾ渡て、六條河原にて終に被ㇾ刎首けり。其弟に周濟房とて有をも、既に可ㇾ被ㇾ切と評定有けるが、其時の人數にては無りける由、證據分明也ければ、死刑の罪を免れて、軈て本國へぞ下りける。夢窓和尚の武家に出て、さりともと口入し給し事、不ㇾ叶しを、欺く者や仕たりけん、狂歌を一首天龍寺の脇壁の上にぞ書たりける。

いしかりしときは夢窓にくらはれて、周濟計ぞ皿に殘れる。

此頼遠は當代殊更大敵を靡け、忠節を致しかば、其賞翫も人に勝れ、其恩祿も異ㇾ他けるを、今浩る行跡に依て、重て吹擧をも不ㇾ被ㇾ用、忽に其身を失ひぬる事、天地日月

の軸より輪へ出したる木なり

袞衣—袞龍の衣、天子の禮服

五刑—上古は墨劓剕宮大辟をいひ後世は笞杖徒流死をいふ

車裂—釋名云、車裂肢體分散也

び坐しける。公重卿も進む涙を押へて、此比の中夏の儀、蠻夷僭上無禮の至極、不ㇾ及二是非一候。然れ共日月未天に懸らば、照鑒何の疑か候べきと被ㇾ奏ければ、上皇些叡慮を慰ませ御座す。されば其事よ。聞や如何に五條の天神は、御出を聞て、寶殿より下り、御幸の道に畏り、宇佐八幡は、勅使の度毎に、威儀を刷て、勅答を被ㇾ申とこそ聞け。さこそ武臣の無禮の代と謂からに、かゝる狼籍を目前見つる事よ。今は末代亂惡の習俗にて、衞護の神もましまさぬかとこそ覺れと、被二仰出一て、袞衣の御袖を御顏に押當させ御座せば、公重卿も涙の中にかき昏て、牛童少々尋出して、泣々還御成にけり。其比は直義朝臣、尊氏卿の政務に代て、天下の權柄を執給ひしかば、此事を傳へ承て、異朝にも未此類を不ㇾ聞、増て本朝に於ては、曾耳目にて不ㇾ觸不思議也。其罪を論ずるに、三族に行ても尚不ㇾ足、五刑に下ても何ぞ當らん。直に彼輩を召出して、車裂にやする、醢にやすべきと、大に驚嘆申されけり。頼遠も行春も角ては事悪かりなんと思ければ、皆己が本國へぞ逃下ける。此上はとて、軈て討手を差下し、可ㇾ被二退治一評定一決したりければ、下野判官は不ㇾ叶とや思けん、頸を延て上洛し、無ㇾ咎由を様樣陳じ申ける間、事の次第、委細に糺明有て、行春をば罪の輕に依て死罪を被ㇾ宥、讃岐

召次—取次なする近侍の小臣

三十輻—老子の註に、古者車三十輻法二日數一也、輻は、車

辻にて、御幸にぞ參合ける。召次御前に走散て、何者ぞ狼藉也。下候へとぞ訇ける。下野判官行春は、是を聞て御幸也けりと心得て、自レ馬飛下傍に畏る。土岐彈正少弼頼遠は、御幸も不レ知けるにや、此比時を得て世をも不レ恐、心の儘に行跡ければ、馬をかけ居て、此比洛中にて頼遠などを下すべき者は覺ぬ者を、おりよと云は如何なる馬鹿者ぞ。一々に奴原蟇目負せてくれよと訇りければ、前驅御隨身馳散て、聲々に、如何なる田舍人なれば、加樣に狼藉をば行跡ぞ。院の御幸にて有ぞと呼りければ、頼遠醉狂の氣や萌しけん、是を聞て、からくと打笑ひ、何院と云か、犬と云か、犬ならば射て落さんと云儘に、御車を眞中に取籠て、馬を懸寄せ、追物射にこそ射たりけれ。竹林院の中納言公重卿、御後に被レ打けるが、衞府の太刀を拔馳寄、懸る淺ましき狼藉こそなけれ、御車をとく懸破て、仕れと被二下知一けれ共、牛の鞦を被レ切て、軛も折れ、牛童共も散散に成行き、供奉の卿相雲客も、皆打落されて、御車に當る矢をだに、防ぎ進らする人もなし。下簾皆撥落され、三十輻も少々折にければ、御車は路頭に顚倒す。淺ましと云も疎也。上皇は唯御夢の心地坐て、何とも思召分たる方も無りけるを、竹林院中納言公重卿、御前に參られたりければ、上皇、如何に公重かと計にて、軈て御淚に咽

中夏―帝都
三台―三公
五門―五攝家
泰山府君―陰陽師の祭る十二神の一
爪牙之臣将―文選に爪

去程に諸國の宮方力衰て、天下武德に歸し、中夏靜るに似たれ共、佛神三寶をも不レ敬、三台五門の所領をも不レ渡、政道さながら塗炭に墮ぬれば、世中如何と申合へり。吉野の先帝崩御の後、樣々の事共申しゝが、車輪の如なる光物、都を指て夜々飛度り、種々の惡相共を現じける間、不思議哉と申に合て、疾疫家々に滿て、貴賤苦む事甚し。是をこそ珍事哉と申に、同二月五日の暮程より、直義朝臣俄に邪氣に被レ侵、身心惱亂して五體逼迫しければ、諸寺の貴僧高僧に仰て、御祈不レ斜。陰陽寮、鬼見、泰山府君を祭て、財寶を燒盡し、藥醫典藥倉公華陀が術を究て、療治すれ共不レ痊、病日々に重て、今はさてと見えしかば、京中の貴賤驚き合て、此人如何にも成給なば、唯小松大臣重盛の早世して、平家の運命忽盡しに似たるべしと思よりて、彌天下の政道は徒事なるべしと、歎ぬ者も無りけり。持明院上皇此由を聞召、殊に歎き思召しかば、潛に勅使を被レ立て、八幡宮に一紙の御願書を被レ籠て、樣々の御立願あり。其詞云、

敬白　祈願事

右神靈之著二明德一也、安レ民理レ國爲レ本。王者之施二政化一也、賞レ功貴レ賢爲レ先。爰左兵衞督源直義朝臣者、匪三啻爪牙之良將一、已爲二股肱之賢弼一。四海之安危、偏嬰二此人之力一。

啓白の鐘ー佛陀に祈願する時鳴らす鐘

三毒ー貪欲瞋恚、愚痴

上にて、啓白の鐘打鳴しける時より、俄に天掻曇て、雲上に車を轟かし、馬を馳違る聲無休時。矢さきの甲冑を徹す音は、雨の下よりも茂く、劔戟を交る光は、耀く星に不異。聞人見者推並て、肝を冷して恐合へり。此闘の聲休て、天も晴にしかば、盛長が狂亂本復して、正成が魂魄曾て夢にも不来成にけり。さても大般若經眞讀の功力に依、敵軍に威を添んとせし楠正成が亡靈靜まりにければ、脇屋刑部卿義助、大館左馬助を始として、土居得能に至るまで、或は被誅或は腹切て、如無成にけり。誠哉天竺の班足王は、仁王經の功徳に係て、千王を害する事を休め、吾朝の楠正成は、大般若講讃の結縁に依て、三毒を免るゝ事を得たりき。誠に鎮護國家の經王、利益人民の要法也。其後此刀をば、天下の靈劔なればとて、委細の註進を副て、上覽に備しかば、左兵衛督直義朝臣是を見給て、事實ならば、末世の奇特何事か可如之とて、上を作直して、小竹作と同く賞翫せられけるとかや。沙に埋れて、年久く断劔の如なりし此刀、盛長が註進に依て、凌天の光を耀す、不思議なりし事共也。

○就直義病惱上皇御願書事

目もあやに―あざやかに

陰陽師―卜筮方鑑の事を司どるもの

眞讀―轉讀に對して全部通讀することをいふ

後向きける。是を見人あつと咆て、同時にぞ皆倒臥ける。加樣の化物は、蟇目の聲に恐るなりとて、毎夜番衆を居て、宿直蟇目を射させければ、虚空にどつと笑聲、毎度に天を響しけり。さらば陰陽師に門を封ぜさせよとて、符を書せて、門々に押せば、目にも見えぬ者來て、符を取て棄ける間、角ては如何すべきと思煩ける處に、彦七が緣者に禪僧の有けるが來て申けるは、抑今現ずる所の惡靈共は、皆修羅の眷屬たり。是を靜めん謀を案ずるに、大般若經を讀に不レ可レ如。其故は帝釋と修羅と、須彌の中央にて合戰を致す時、帝釋軍に勝てば、修羅小身を現じて藕絲の孔の裏に隱れ、修羅又勝時は、須彌の頂に坐して、手に日月を握り、足に大海を蹈。加之三十三天の上に攻上て、帝釋の居所を追落し、欲界の衆生を悉く我有に成さんとする時、諸天善神、善法堂に集て、般若を講じ給ふ。此時虚空より輪寶下て、劍戟を雨し、修羅の輩を寸寸に割切ると見えたり。されば須彌の三十三天を領し給ふ帝釋だにも、我叶ぬ所には、法威を以て魔王を降伏し給ふぞかし。況乎薄地の凡夫をや。不レ借二法力一難レ得二退治一と申ければ、此議誠に可レ然とて、俄に僧衆を請じて、眞讀の大般若を日夜六部迄ぞ讀たりける。誠に依二般若講讀力一、修羅威を失ひけるにや。五月三日の暮程に、導師高座の

鞠の懸—蹴鞠の場

大なる土器の破るゝ音して、微塵に碎けにけり。其後手をのけて是を見れば、曝たる死人の首、眉間の半ばより碎てぞ殘りける。盛長大息を突て、且し心を靜めて、腰を探て見れば、早此化物に刀を取れ、鞘計ぞ殘にける。是を見て盛長我已に疫鬼に魂を被奪、今は如何に猛く思ふ共叶まじ。我命の事は物の數ならず、將軍の御運如何と歎て、色を變じ淚を流して、わな／＼と戰ひければ、聞者見人悉身毛竪てぞ候ける。角て夜少し深て、有明の月中門に差入たるに、簾を高く捲上て、庭を見出したれば、空より毬の如なる物光て、叢の中へぞ落たりける。何やらんと走出て見れば、先に盛長に推碎かれたりつる首の、半殘たるに、件の刀自拔て、柄口まで突貫てぞ落たりける。不思議なりと云も疎也。軈て此首を取て火に拋入たれば、跳出けるを、金鐵にて燒碎いてぞ棄たりける。事靜りて後、盛長今は化物よも不來と覺る。其故は楠が相伴ふ者七人と云しが、我に來事已に七度也。是迄にてこそあらめと申ければ、諸人誠にさも覺ゆと同ずるを聞て、虛空にしはがれ聲にて、よも七人には限候はじと哈て謂ければ、こは如何にと驚て、諸人空を見上たれば、庭なる鞠の懸に、眉太に作、鐵漿黑なる女の首、面四五尺も有らんと覺たるが、亂髮を振上て、口もおやに打笑て、はづかしやとて、

遠侍—武家の邸にて中門の傍なる廊の如き處

蜘のいに—いは線なり蜘網をいふ

虚空を指てぞ騰りける。警固の者共、梯を差て軒の上に登て見れば、一の牛の頭あり。是は何様楠が乗たる牛か、不然ば其魂魄の宿れる者歟とて、此牛の頭を中門の柱に結著て置たれば、終夜鳴はためきて動ける間、打砕て即水底にぞ沈めける。其次の夜も月陰風悪して、怪しき氣色に見えければ、警固の者共大勢遠侍に並居て、終夜睡らじと、碁雙六を打てぞ遊びける。夜半過る程に、上下百餘人有ける警固の者共、同時にあつと云けるが、皆酒に醉る者の如く成て、頭を低て睡り居たり。其座中に禪僧一人眠らで有けるが、燈の影より見れば、大なる寺蜘蛛一つ天井より下て、寢入たる人の上を這廻て、又天井へぞ騰りける。其後盛長俄に驚て、心得たりと云儘に、人と引組だる體に見えて、上が下にぞ返しける。叶はぬ詮にや成けん、よれや者共と呼ければ、傍に臥たる者共、起上らんとするに、或は柱に髻を結著られ、或は人の手を我足に結合せられて、唯網に懸れる魚の如く也。此禪僧餘の不思議さに、走立て見れば、さしも強力の者ども、僅なる蜘のいに手足を被繋て、更にはたらき得ざりけり。されども盛長化物をば取て押へたるぞ、火を持てよれと申ければ、警固の者共兎角して起あがり、蠟燭を炷て見に、盛長が押へたる膝を持擧んと蠢動ける。諸人手に手を重て、逃さじと壓程に、

云ーわづかでも眼に曇があるとちらちらするの意

六天の魔王共が來て云ふ共、此刀をば進ずまじきにて候。然らば例の手の裏を返すが如なる綸旨賜ても無詮。早々面々御歸候へ。此刀をば將軍へ進候はんずるぞと云捨て、盛長は内へ入にけり。正成大に咍て、此國縱陸地に連りたり共、道をば輒く通すまじ。増て海上を通るには、遣事努々有まじき者をと、同音にどつと笑つゝ、西を指てぞ飛去にける。其後より盛長物狂敷成て、山を走り水を潜る事無休時。太刀を拔き矢を放つ事間無りける間、一族共相集て、盛長を一間なる所に押籠て、弓箭兵仗を帶して、警固の體にてぞ居たりける。或夜又雨風一頻通て、電の影頻なりければ、すはや例の楠こそ來れと怪む處に、如案盛長が寢たる枕の障子を、かばと蹈破て、數十人打入音しけり。警固の者共起周章て、太刀長刀の鞘を外して、夜討入たりと心得て、敵は何にかあると見れ共、更になし。こは如何にと思ふ處に、自天井熊の手の如なる毛生て長き手を指下して、盛長が髻を取て中に引提け、破風の口より出んとす。盛長中にさげられながら、件の刀を拔て、化物の眞唯中を三刀刺たりければ、被刺て些弱りたる體に見えければ、むずと引組で、破風より廣廂の軒の上にころび落、取て推附け、重て七刀までぞ刺たりける。化物急所を被刺てや有けん、脇の下より鞠の勢なる物ふつと拔出て、

欲界の六天—四天王天、忉利天、夜摩天、都率天、樂變化天、自在天

一翳在眼云

姿にて御座ぬると問へば、正成某も最期の悪念に被引て、罪障深かりしかば、今千頭王鬼と成て、七頭の牛に乘れり。不審あらば其有樣を見せんとて、續松を十四五同時にはつと振擧たる、其光に附て虚空を遙に向上たれば、一村立たる雲の中に、十二人の鬼共、玉の御輿を舁捧たり。其次には兵部卿親王、八龍に車を懸て、扈從し給ふ。新田左中將義貞は、三千餘騎にて前陣に進み、九郎大夫判官義經は、混胄數百騎にて、後陣に支らる。其跡に能登守教經、三百餘艘の兵船を、雲の浪に推浮べ給へば、平馬助忠政赤旗一旒差擧て、是も後陣に控たり。又虚空遙に引さがりて、楠正成湊川にて合戰の時見しに些も不違、紺地錦の鎧直垂に、黒絲の鎧著て、頭の七ある牛にぞ乘たりける。此外保元平治に討れし者共、治承養和の爭に滅し源平兩家の輩、近比元弘建武に亡びし兵共、人に知れ名を顯す程の者、皆甲冑を帶し、弓箭を携へて、虚空十里許が間に、無透間ぞ見えたりける。此有樣唯盛長が幻にのみ見えて、他人の目には見えざりけり。盛長左右を顧て、あれをば見ぬかと云はんとすれば、忽に風に從ふ雲の如、漸々として消失にけり。唯楠が物云ふ聲計ぞ殘ける。盛長是程の不思議を見つれ共、其心猶も不動、一翳在眼空花亂墜すといへり。千變百怪何ぞ驚くに足ん。縱如何なる第

六道四生—地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上を六道といひ、胎生、卵生、濕生、化生を四生といふ

摩醯首羅王—色界第十八天の主の名

黒雲一村立覆へり。雲中に聲有て、如何に大森殿は是に御座ぬるか、先度被仰し劔を、急ぎ進せられ候へとて、綸旨を被成て候間、勅使に正成又罷向て候はと云ければ、彦七聞も不敢、庭へ立出て、今夜は定て來給ぬらんと存じて、宵より奉待てこそ候へ。初は何共なき、天狗化物などの化して候事ぞと存せし間、委細の問答にも及候はざりき。今慥に綸旨を帶したるぞと承候へば、さては仔細なき楠殿にて御座候けりと、信を取てこそ候へ。事長々しき樣に候へ共、不審の事共を尋ぬるにて候。先相伴ふ人數多有げに見え候は、誰人にて御渡候ぞ。御邊は六道四生の間、如何なる所に生ておはしますぞと問ければ、其時正成庭前なる鞠の懸の柳の梢に、近々と降て申けるは、正成が相伴ふ人々には、先後醍醐天皇、兵部卿親王、新田左中將義貞、平馬助忠政、九郎大夫判官義經、能登守教經、正成を加へて七人也。其外泛々の輩、計るに不遑とぞ語ける。盛長重て申けるは、さて抑先帝は何に御座候ぞ。又相隨奉る人々、如何なる姿にて御座ぞと問へば、正成答て云、先朝は元來摩醯首羅王の所變にて御座すれば、今還て欲界の六天に御座あり。相隨奉る人々は、悉修羅の眷族と成て、或時は天帝と戰、或時は人間に下て、瞋恚強盛の人の心に入替る。さて御邊は如何なる

二三番―天正本南部本等式三番に作る

えける。盛長是にも曾て不レ臆、刀の柄を碎よと拳て申けるは、さては先度美女に化て、我を誑さんとせしも、御邊達の所行也けるや。御邊存日の時より、常に申通せし事なれば、如何なる重寶なり共、御用と承らんに、非レ可レ奉レ惜。但此刀をくれよ。將軍の世を亡さんと承つる、其こそえ進すまじけれ。身雖二不肖一、盛長將軍の御方に參じ、無二貳心一者と知れ進せし間、恩賞厚く蒙て、一家の豐なる事日比に過たり。されば此猿樂をして遊ぶ事も、偏に武恩の餘慶也。凡勇士の本意唯心を不レ變を以て爲レ義。されば縱身を寸々に割れ、骨を一々に被レ碎共、此刀をば進すまじく候。早御歸候へとて、虛空をはたと睨で立たりければ、正成以外忿れる言にて、何共いへ遂には取ん者をと訇て、本の如く光渡り、海上遙に飛去にけり。見物の貴賤是を見て、唯今天へ引あげられて騰る歟と、肝魂も身に添ねば、子は親を呼び、親は子の手を引て、四角八方へ逃去ける間、又今夜の猿樂も、二三番にて休にけり。其後四五日を經て、雨一通降過て、風冷く吹騷ぎ、電時々しければ、盛長今夜何樣件の化物來ぬと覺ゆ。遮て待ばやと思ふ也とて、中門に布皮敷て、鎧一縮し、二所籐の大弓に、中指數多拔散し、鼻膏引て、化物遲とぞ待懸たる。如レ案夜半過る程に、さしも無レ隈つる中空の月俄にかき曇て、

大千界―大千世界

江豚と云魚―南越志云江豚似レ猪居ニ水中一

れぬ者也ければ、些も不レ臆、人死して再歸る事なし。定て其魂魄の靈鬼と成たるにてぞ有らん。其はよし何にてもあれ、楠殿は何事の用有て、今此に現じて盛長をば呼給ぞと問へば、楠申けるは、正成存命の間、樣々の謀を廻して、相摸入道の一家を傾て、先帝の宸襟を休め進せ、天下一統に歸して、聖主の萬歲を仰處に、尊氏卿直義朝臣、忽に虎狼の心を挾み、遂に君を傾奉る。依レ之忠臣義士、尸を戰場に曝す輩悉く修羅の眷屬に成て、瞋恚を含む心無レ止時一。正成彼と共に天下を覆さんと謀に、貪瞋癡の三毒を表して、必三劍を可レ用。我等大勢忿怒の惡眼を開て、刹那に大千界を見るに、願ふ處の劍、適我朝の內に三あり。其一は日吉大宮に有しを、法味に替て申賜りぬ。今一は尊氏の許に有しを、寵愛の童に入代て乞取ぬ。今一は御邊の唯今腰に指たる刀也。不レ知哉、此刀は元曆の古平家壇の浦にて亡し時、惡七兵衞景清が海に落したりしを、江豚と云魚が呑て、讃岐の宇多津の澳にて死ぬ。海底に沈で已に百餘年を經て後、漁父の網に被レ引て、御邊の許へ傳へたる刀也。所詮此刀をだに、我等が物と持ならば、尊氏の代を奪はん事、掌の內なるべし。急ぎ進せよと、先帝の勅定にて、正成罷向て候也。早く賜らんと云もはてぬに、雷東西に鳴渡て、唯今落懸るかとぞ聞

何ぞと人のとひし時露とこたへてけなましものを

細馬—よき馬

て額を隱し、振分髮の中より、五寸許なる犢の角、鱗をかづきて生出たり。其重き事大磐石にて推が如し。彥七屹と驚て、打棄んとする處に、此化物熊の如なる手にて、彥七が髮を摑で、虛空に騰らんとす。彥七元來したゝかなる者なれば、むずと引組で深田の中へ轉落て、盛長化物組留たり。よれや者共と呼りける聲に附て、跡にさがりたる者共、太刀長刀の鞘を放し、走寄て是を見れば、化物は書消す樣に失にけり。彥七は若黨中間共に引起されたれ共、忙然として人心地もなければ、是直事に非ずとて、其夜の猿樂は止にけり。さればとて是程まで習したる猿樂を、さて可レ有に非ずとて、又吉日を定め、堂の前に舞臺をしき、棧敷を打竝たれば、見物の輩群をなせり。猿樂已に半也ける時、遙なる海上に、裝束の唐笠程なる光物、二三百出來たり。海人の繩燒漁火か、鵜船に燃す篝火歟と見れば、其にはあらで、一村立たる黑雲の中に、玉の輿を舁連ね、懼しげなる鬼形の者共、前後左右に連りたり。其跡に色々に甲たる兵百騎許、細馬に轡を嚙せて供奉したり。近く成しより其貌は不レ見。黑雲の中に電光時々して、唯今猿樂する舞臺の上に差覆たる森の梢にぞ止りける。見物衆みな肝を冷す處に、雲の中より高聲に、大森彥七殿に可レ申事有て、楠正成參じて候也とぞ呼りける。彥七加樣の事に、曾恐

—表白裏青なる五重の衣

羅綺にだも云々—楊貴妃が華清宮の温泉を出でし姿のなよなよとしたる形容、長恨歌に見ゆ

白玉か云々—伊勢物語に、白玉か

たり。彦七是を見て、不レ覺斯る田舍などに加樣の女房の有べしとは、何よりか來るらん、又如何なる棧敷へか行らんと見居たれば、此女房彦七に立向て、路芝の露拂べき人もなし、可レ行方をも誰に問はましとて、打しをれたる有樣、如何なる荒夷なりとも、心を不レ懸云事非じと覺ければ、彦七あやしんで、如何なる宿の妻にてか有らんに、善惡も不レ知わざは、如何と乍レ思、無二云許一わりなき姿に引れて、心ならず此方こそ道にて候へ。御棧敷など候はずは、適用意の棧敷候、御入候へかしと云ければ、女些打笑て、うれしや候、さらば御棧敷へ參り候はんと云て、跡に附てぞ步ける。羅綺にだも不レ勝姿、誠に物痛しく、未だ一足も土をば不レ踏人よと覺えて、行難たる有樣を見て、彦七不レ怺、餘に露も深く候へば、あれまで負進せ候はんとて、前に跪たれば、女房些も不レ辭、便なう如何と云ながら、軈て後にぞ靠ける。白玉か何ぞと問し古も、角やと思知られつゝ、嵐のつてに散花の袖に懸るよりも輕やかに、梅花の匂なつかしく、蹈足もたどたどしく、心も空にうかれつゝ、半町許步けるが、山陰の月些暗かりける處にて、さしも嚴しかりつる此女房、俄に長八尺許なる鬼と成て、二の眼に朱を解て、鏡の面に洒けるが如く、上下齒くひ違て、口脇耳の根まで廣く割、眉は漆にて百入塗たる如にし

暦應三年—原本五年に作るは誤也

柳裏の五衣

太平記　巻第二十三

○大森彦七事

暦應三年の春の比、自伊豫國飛脚到來して、不思議の註進あり。其故を委く尋れば、當國の住人大森彦七盛長と云者あり。其心飽まで不敵にして、力尋常の人に勝たり。誠に血氣の勇者と謂つべし。去建武三年五月に、將軍自九州攻上り給し時、新田義貞兵庫湊河にて支へ、合戰の有し時、此大森の一族共、細川卿律師定禪に隨て、手痛く軍をし、楠正成に腹を切せし者也。されば其勳功異他とて、數箇所の恩賞を賜てけり。此悅に誇て、一族共、樣々の遊宴を盡し活計しけるが、猿樂は是遐齡延年の方なればとて、御堂の庭に棧敷を打て、舞臺を布、種々の風流を盡さんとす。近鄉の貴賤是を聞て、群集する事夥し。彦七も其猿樂の衆也ければ、樣々の裝束共、下人に持せて、樂屋へ行けるが、山頰の細道を直樣に通るに、年の程十七八許なる女房の、赤き袴に、柳裏の五衣著て、鬢深く鍛たるが、指出たる山の端の月に映じて、唯一人たゞずみ

隱岐島—伊豫の越智郡なる沖島にて隱岐國にはあらず

其夜の夜半許に、今張浦にぞ著たりける。自此船に乘て、隱岐島へ落ばやと志し、船やあると見るに、敵の乘棄て、水主計殘れる船數多あり。是こそ我物よと悅て、甲著ながら浪の上五町許を游ぎて、ある船に岸破と飛乘る。水主梶取驚て、是は抑何者ぞと咎めければ、さな云そ。是は宮方の落人篠塚と云者ぞ。急ぎ此船を出して、我を隱岐島へ送と云て、二十餘人してくり立ける碇を、易々と引上げ、十四五尋ありける檣を、輕輕と推立て、屋形の内に高枕して、齁鼾かきてぞ臥たりける。水主梶取ども是を見て、あな夥し、凡夫の態にはあらじと恐怖して、則順風に帆を懸て、隱岐島へ送て後、暇を請てぞ歸にける。昔も今も勇士多しといへ共、かゝる事をば不聞とて、篠塚を譽ぬ者こそ無りけれ。

さは無て―さうではなくて

小歌にて―歌を小聲に口ずさみながら

樣に人々自害しける其中に、篠塚伊賀守一人は、大手の一二の木戸無㆑殘押開て、唯一人ぞ立たりける。降人に出る歟と見れば、さは無て、紺絲の甲に、鍬形打たる冑の緒を縮め、四尺三寸有ける太刀に、八尺餘の金撮棒脇に挾て、大音揚て申けるは、外にては定て名をも聞つらん、今近附て我をしれ。畠山庄司次郎重忠に六代の孫、武藏國に生長て、新田殿に一人當千と憑れたりし篠塚伊賀守爰にあり。討て勳功に預れと呼て、百騎許控たる敵の中へ、些も擬議せず走り懸る。其勢事柄勇鋭たるのみならず、兼て聞えし大力なれば、誰かは是を可㆓遮止㆒。百餘騎の勢、東西へ颯と引退て、中を開てぞ通しける。篠塚馬にも不㆑乘、弓矢をも持ず、而も唯一人なれば、何程の事か可㆑有。唯近附事無て、遠矢に射殺せ。返合せば懸惱して討とて、藤、橘、伴の者ども、二百餘騎跡に附て追懸る。篠塚些も不㆑騷、小歌にて閑々と落行けるを、敵あますなとて追懸れば、立止て、嗚呼御邊達、痛く近附て、首に中違すなとあざ笑て、件の金棒を打振ければ、蜘の子を散すが如く、颯とは逃げ、又村立て跡に集り、鏃を汰へて射れば、某が甲には、傍のへろ〳〵矢はよも立候はじ、すは此を射よとて、後を差向てぞ休みける。されども名譽の者なれば、一人なり共若や打止ると、追懸たる敵二百餘騎に、六里の道を被㆑送て、

千餘騎が眞中を懸破て、備後を差て引て行。いかめしかりし振舞也。

○大館左馬助討死事附篠塚勇力事

斯りしかば、大將細川頼春は、合戰事散じて、御方の手負死人を註さるゝに、七百人に餘れりといへ共、宗徒の敵二百餘人討れにければ、人皆氣を擧げ勇をなせり。さらば軈て大館左馬助が籠たる世田城へ寄よとて、八月二十四日早旦に、世田の後なる山へ打上て、城を遙に直下、一萬餘騎を七手に分て、城の四邊に打寄、先己が陣々をぞ構へたる。對陣已に取巻せければ、四方より攻寄て、持楯をかづき寄、亂杭逆茂木を引のけて、夜晝三十日迄ぞ攻たりける。城の内には宗徒の軍をもしつべき兵と憑れし岡部出羽守が一族四十餘人、皆日比澳にて自害しぬ。其外の勇士共は、千町原の戰に討死しぬ。力盡食乏く、可レ防樣も無りければ、九月三日の曉、大館左馬助主從十七騎、一の木戸口へ打出て、塀に著たる敵五百餘人を、遙なる麓へ追下し、一度に腹を切て、枕を並てぞ伏たりける。防矢射ける兵共是を見て、今は何をか可レ期とて、或は敵に引組で刺違るもあり、或は己が役所に火を懸て、猛火の底に死するもあり、目も當られぬ有樣也。加

二千餘騎—天正本千餘騎に作る

射違る程こそ有けれ、皆弓矢をば抛し棄、打物に成て叫喚で、眞黑にぞ懸たりける。細川刑部大輔馬廻に、藤一族五百餘騎にて控たるが、兼ての謀也ければ、左右へ颯と分れて控たり。此中に大將有と思も不レ寄、三百騎の者共是をば目にも懸ず、裏へつと懸拔て、二陣の敵に打て懸る。此陣には三木坂西坂東の兵共相集て、七百餘騎冑の錣を傾て、馬を立納め、閑り返て控たりけるが、勇猛強力の兵共に懸散されて、南なる山の峯へ颯と引て上りけるが、是もはか〴〵しき敵は無りけりとて、三陣の敵に打て懸る。是には詫間、香西、橘家、小笠原一族共二千餘騎にて控たり。是にぞ大將は御座らんと見澄して、中を颯と懸破て、取て返し、引組では刺違へ、落重ては首を取る。一足も不レ引戰けるに、宮方の兵三百餘騎、忽に蹄の下に討死して、僅十七騎にぞ成たりける。其十七騎と申は、先大將金谷經氏、河野備前守通郷、得能彈正、日吉大藏左衞門、杉原與一、富田六郎、武市與三左衞門、土居備中守、淺海六郎等也。彼等は一騎當千の兵なれば、自敵に當る事十餘箇度、陣を破る事六箇度也といへ共、未痛手をも負ず、又疲たる體も無りけり。一所に馬を打寄て、馬も物具も見知ねば、大將何とも知がたし。差る事もなき國勢共に逢て討死せんよりは、いざや打破て落んとて、十七騎の人々は、又馬の鼻を引返し、七

日―酉巳丑酉巳丑と正月より次第に十二月までに當つるなり

あひの鞭を打て―弓射る間に鞭をあつること

日を吉日に取て、大勢の敵に向ける心の中、樊噲も周勃も、未レ得振舞也。あはれ唯勇士の義を存する志の程、やさしくも哀なる事はあらじとて、是を聞ける者は、皆鎧の袖をぞぬらしける。去程に細川刑部大輔七千餘騎を率して、敵已に打出るなれば、心よく懸合の合戰を可レ致とて、千町が原へ打出て、敵の陣を見渡せば、渺々たる野原に、中黑の旌一旒幽に風に飛揚して、僅に勢の程三百騎許ぞ控へたる。細川刑部大輔是を見給て、當國の敵是程の小勢なるべしとは思はぬに、餘に無勢に見ければ、一定究竟の者共を勝て、大勢の中を懸破、賴春に近づかば、組で勝負を決せん爲にてぞあるらん。然者思切たる小勢を一息に討んとせば、手に餘て討れぬ事有べし。唯敵破らんとせば彼レ破て、然も跡を塞げ、轡を竝て懸らば、僞て引退て、敵の馬の足を疲らかせ。打物に成て一騎合に懸ば、あひの鞭を打て推もぢりに射て落せ。敵疲ぬと見ば、新手を替て取籠よ。餘に近附て敵に組るな。引とも御方を見放すな。敵の小勢に御方を合すれば、一騎に十騎を對しつべし。飽まで敵を悩して、弊に乘て一揉揉たらんに、などか是等を可レ不レ討と、委細に手段を成敗して、旗の眞前に露れて、閑々とぞ進まれたる。金谷修理大夫是を見て、すはや敵は懸ると見えたるはとて、些も見繕ふ處もなく、相懸にむずと攻て、矢一つ

大可島―西源院本大炊島に作る

十死一生の

する。城中折節無勢也ければ、三十餘人有ける者共、且く戰て皆討死しければ、宮方の士卒是に機を擧て、大可島を詰城に拵へ、鞆の浦に充滿して、武島や小豆島の御方を待處に、備後、備中、安藝、周防四箇國の將軍の勢、三千餘騎にて押寄たり。宮方は大可島を後に當て、東西の宿へ船を漕寄て、打ては上り、打ては上り、新手を入替て戰たり。將軍方は小松寺を陣に取て、濱面へ騎馬の兵を出し、懸合々々揉合たり。互に戰屈して、十餘日を經ける處に、伊豫の土肥が城被攻落、細川刑部大輔賴春は、大館左馬助氏明の被籠たる世田城へ懸ると聞えければ、土居得能以下の者共、同く死ば我國にてこそ尸を曝さめとて、大可島を打棄て、伊豫國へ引返す。敗軍の士卒相集て、二千餘騎有ける其中より、日來手柄露し名を被知たる兵を三百餘騎勝り出して、懸合の合戰に勝負を決せんと云。是は細川刑部大輔目に餘る程の大勢也と聞て、中々何ともなき取集勢を對揚して合戰をせば、臆病武者に引立られて、御方の負をする事有べし。唯一騎當千の兵を勝て、敵の大勢を懸破り、大將細川刑部大輔と引組で刺違へんとの謀也。さらば敵の國中へ入らぬ先に打立とて、金谷修理大夫經氏を大將として、勝たる兵三百騎皆一樣に曼荼羅を書て、綵に懸て、兎ても生ては歸るまじき軍なればとて、十死一生の

天下の人口云々—世の人の笑草にはならじの意

渡中に帆を突て、扣レ舷鬨を作る。潮に追ひ風に隨て推合々々相戰ひける。其中に大舘左馬助氏明が執事岡部出羽守が乘たる船十七艘、備後の宮下野守兼信左右に別て漕並べたる船四十餘艘が中へ分入て、敵の船に乘遷々々、皆引組で海中へ飛入けるこそ、いかめしかりし行跡なれ。備後、安藝、周防の舟は、皆大船なれば、艫舳に櫓を高く搔て指下して散々に射る。伊豫、土佐の舟は、皆小舟なれば逆櫓を立て、縱橫に相當る。兩方の兵、よしや死して海底の魚腹に葬らるゝ共、逃て天下の人口には落じ者をと、互に機を進め一引も不レ引、終日戰ひ暮しける處に、海上俄に風來て、宮方の船をば悉く西を差て吹もどす。寄手の舟をば悉く伊豫の地へ吹送る。夜に入て風少靜まりければ、宮方の兵共、是程に運のきかぬ時なれば、如何に思ふ共不レ可レ叶、唯元の方へ漕返べき歟と申けるを、大將金谷修理大夫、運を計り勝つ事を求る時こそ、身を全して功をなさんとは思へ。唯一人憑たる大將軍脇屋義助は病に被レ侵失給ぬる上は、今は可レ爲方なき微運の我等が、生てあらば如何許の事か可レ有。命を限の戰して、弓矢の義を專にする計なるべし。されば運の通塞も軍の吉凶も非レ可レ謂處、いざや今夜備後の鞆へ推寄て、其城を追落して、中國の勢著かば、西國を攻隨へんとて、其夜の夜半許に、備後の鞆へ押寄

孔明が死せる―原本に此句無し異本に依て之を補ふ

○義助朝臣病死事附鞆軍事

斯る處に、同五月四日、國府に被ㇾ坐たる脇屋刑部卿義助俄に病を受て、身心惱亂し給ひけるが、僅に七日過て、終に無ㇾ敢成給にけり。相從ふ官軍共、始皇沙丘に崩じて、漢楚機に乘事を悲み、孔明籌筆驛に死して、吳魏便を得し事を愁しが如く、五更に燈消て破窻の雨に向ひ、中流に船を失て一瓢の浪に漂ふらんも角やと覺えて、此事外に聞えなば、敵に氣を得られつべしとて、偸に葬禮を致して、隱悲不ㇾ聲といへ共、さすが隱無りしかば、四國の大將軍にて、尊氏の被ㇾ置たる細河刑部大輔賴春、此事を聞て、時をば且くも不ㇾ可ㇾ失。是司馬仲達が孔明が死せる弊に乘て蜀を亡せし謀なりとて、伊豫、讃岐、阿波、淡路の勢七千餘騎を率して、先伊豫の境なる河江城へ押寄て、土肥三郎左衞門を攻らる。義助に從附たりし多年恩顧の兵共、土居、得能、合田、二宮、日吉多田、三木、羽床、三宅、武市の者共、金谷修理大夫經氏を大將にて、兵船五百餘艘にて、土肥が後攻の爲に海上に推浮ぶ。是を聞て、備後の鞆、尾の道に船汰して、土肥が城へ寄んとしける備後、安藝、周防、長門の勢大船千餘艘にて推出す。兩陣の兵船共、

まへる三鈷忽ち雲に入りわが朝の紀州高野山に止れりと弘法大師の行状記に詳なり

りしかば、様々の酒肴引出物を盡して、三百餘艘の船を汰へ、備前の兒島へ送奉る。此には佐々木薩摩守信胤、梶原三郎、自二去年一宮方に成て、島の内には交る人もなし。されば大船數多汰へて、四月二十三日、伊豫國今張浦に送著奉る。大館左馬助氏明は、先帝自二山門一京へ御出有し時、供奉仕て有しが、如何思けん、降人になり、且くは將軍に屬して居たりけるが、先帝偸に牢御所を御出有て、吉野に御座有と聞て、軈て馳參たりしかば、君御感有て、伊豫國の守護に被レ補しかば、自二去年春一當國に居住してあり。又四條大納言隆資、子息少將有資は、此國の國司にて、自二去々年一在國せらる。土居、得能、土肥、河田、武市、日吉の者共、多年の宮方にして、讃岐の敵を支へ、西は土佐の畑を境て居たりければ、大將下向に彌勢を得て、龍の水を得、虎の山に靠が如し。其威漸近國に振ひしかば、四國は不レ及レ申、備前、備後、安藝、周防乃至九國の方までも、又大事出來ぬと云はぬ者こそ無りけれ。されば當國の内にも、將軍方の城僅に十餘箇所有けるも、未敵も向はぬ先に、皆聞落してんげれば、今は四國悉一統して、何事か可レ有と憑敷思あへり。

千佛の座—過去の莊嚴劫の千佛現在にも賢劫の千佛出現し給ふと三千佛名經に見ゆ

無漏—漏は煩惱妄想をいふ、佛法三昧に入りて之を除きて一點のけがれなきを無漏といふ

飛行の三鈷—明州の津にて投げた

次ならでは早晩か參詣の志をも遂げ、當來値遇の緣をも可レ結と被レ思ければ、先高野山に詣て、三日逗留し、院々谷々拜み廻るに、聞しより尙貴くて、八葉の峰空にそびえて、千佛の座雲に捧げたり。無漏の扉苔閉て、三會の曉に月を期す。或は說法衆會の場もあり。或は念佛三昧の砌もあり。飛行の三鈷地に墮、驗に生たる一株の松、囘祿の餘煙風に去て、軒を焦せる御影堂、香煙窻を出て、心細鈴の聲、霧に籠て物冷し。此は昔瀧口入道が住たりし庵室の跡とて尋れば、舊き板間に苔むして、荒ても漏ぬ夜の月、彼は古西行法師が結置し柴の庵の名殘とて立寄れば、拂ぬ庭に花散て、踏に跡なき朝の雪、樣々の靈場所々の幽閑を見給にぞ、遁ぬべくは角てこそあらまほしくと宣し維盛卿の心の中、實もと被レ思知レたる。且くも斯る靈地に逗留して、猶も憂身の汚を濯度思はれけれ共、軍旅に赴給ふ事なれば不レ協して、高野より紀伊の路に懸り、千里の濱を打過て、田邊宿に逗留し、渡海の舟を汰へ給に、熊野の新宮別當湛譽、湯淺入道定佛、山本判官東四郎、西四郎以下の熊野人共、馬物具弓矢太刀長刀兵糧等に至まで、我不レ劣と奉りける間、行路の資卓散也。角て順風に成にければ、熊野人共兵船三百餘艘汰立て、淡路の武島へ送奉る。此には安間、志宇知、小笠原の一族共、元來宮方にて城を構て居た

自科―みづから犯せるとが

ば、此女房の住しあたりなる局に有ける女の童を捕て、責問ければ、其女房は通方多かりしかば、何とも指ては知がたし。近來は飽浦三郎左衛門とかや云者にこそ、分て志深く、人目も憚らぬ樣に承候しかと語りければ、土佐守彌腹を据兼て、軈て飽浦が宿所へ推寄て討んと謀りけるを聞て、自科依レ難レ遁、身を隱しかね、多年粉骨の忠功を棄て、宮方の旗をば擧ける也。

折得ても心許すな山櫻、さそふ嵐に散もこそすれ。

と歌に詠たりしは、人の心の花なりけりと、今更思知ても、淺ましかりし事共也。

○義助豫州下向事

去程に、四國の通路開ぬとて、脇屋刑部卿義助は、曆應三年四月一日勅命を蒙て、四國西國の大將を承て、下向とぞ聞えし。年來相從ふ兵、其數多しといへ共、越前美濃の合戰に討負し時、大將の行末を不レ知して山林に隱忍び、或は危難を遁て境を隔てしかば、吉野へ馳來る兵五百騎にも不レ足けり。され共四國中國に心を通ずる官軍多く有しかば、今一日も可レ急とて、未明に吉野を打立て、紀伊の路に懸り被レ通けるに、加樣の

逢坂の關―拾遺集大貳高遠の歌、逢坂の關の岩かどふみならし山たちいづるきりはらの駒

木綿附鳥―鷄なり

られぬ。土佐守無レ限うれしくて、道に少しも不レ跡、軈て伊勢路に赴けり。まだ夜を籠て逢坂の、關の岩かど蹈鳴し、木綿附鳥に被レ送て、水の上なる粟津野の、露分行けばにほの海、流の末の河となる、勢多の橋を打渡れば、衣手の田上河の朝風に、比良の峯わたし吹來て、輿の簾を吹揚たり。出絹の中を見入たれば、年の程八十許なる古尼の、額には皺のみよりて、口には齒一もなきが、腰二重に曲てぞ乘たりける。土佐守驚て、是は何樣古狸か古狐かの化たるにてぞ有らん。鼻をふすべよ。蟇目にて射て見よと申ければ、尼泣々、是は化者にても候はず、菊亭殿へ年來參通者にて候を、御妻の局へ被レ召て、加樣にて京に住わびんよりは、我が下る田舍へ行て、且くも慰めかしと被レ仰候し間、さそふ水もがなと思ふ憂身にて候へば、うれしき事に思て、昨日御局へ參て候へば、被レ留進せて、妻戸に輿を寄たりしに、それに乘れと仰候しかば、何心もなく乘たる計にて候ぞと申ける。土佐守、さては此の女房に出拔れたる者也。彼御所に打入て、奪取ずは下るまじき者をとて、尼をば勢多の橋爪に打捨て、空輿を舁返して、又京へぞ上りける。元來思慮なき土佐守、菊亭殿に推寄て、四方の門を差籠て、無二殘所一捜しける。御所中の人々、こは如何なる事ぞとて、上下周章騷事無レ限。如何に求れ共なけれ

ながら思わかでぞ有渡りける。さはありながら、おぼろげにては、人の近附べきにもあらぬ宮中の深栖なるに、如何して心を懸し玉垂の、間求得たる便にか有けん、今の世に肩を雙る人もなき高土佐守に通馴て、人しれず思結れたる下紐の、せきとめがたき中なれば、初の程こそ忍けれ、後は早山田に懸るひたぶるに、打ひたゝけて、あやにくなる里居にのみまかでければ、宮仕も常には疎なる事のみ有て、主の左のおほいまうちぎみも、かく共しらせ給しかば、むづかしの人目を中の關守や、よひ〳〵ごとの深過るをまたず共あれかしなど被レ許、まかで出ける時もあり。かゝりし程に、此土佐守に元相馴て、子共數多儲たる鎌倉の女房の有けり。是は元來田舍人也ければ、物妬はしたなく、心猛々敷て、彼源氏の雨夜の物語に、頭中將の指をくひ切たりし有樣共多かりけり。されども子共の親なれば、けしからずの有樣哉とは乍レ思、いなと云べき方も無て、年を送ける處に、土佐守伊勢國の守護に成て下向しけるが、二人の女房を皆具足して下らんとて、元の女房をば先くだしぬ。御妻を同樣にと待しか共、今日よ明日よとて、少しうるさげなる氣色に見えしかば、土佐守猶も思の色增て、伴行かでは叶まじきとて、三日まで逗留して、兎角云恨ける程に、さらばとて、夜半許に輿さし寄せ、几帳指隱して扶乘

云―古今集讀人不知の歌、大ぬさの引手數多になりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ

ひたたけて―あらはになりて

主の左の―當に主の右のに作るべし

雨夜の物語―源氏物語帚木の巻にあり

小豆島—讃岐の大串岬の北にあり

引手數多云

○佐々木信胤成二宮方一事

かゝる處に、伊豫國より專使馳來て、急ぎ可レ然大將を一人撰て被レ下、御方に對して忠戰を可レ致之由を奏聞したりしかば、脇屋刑部卿義助朝臣を可レ被レ下公議定けり。されば共下向の道、海上も陸地も皆敵陣也。如何して可レ下と、僉議不レ一ける處に、備前國住人佐々木飽浦三郎左衞門尉信胤、早馬を打て、去月二十三日小豆島に押渡り、義兵を舉る處に、國中の忠ある輩馳加て、逆徒少々打從へ、京都運送の船路を差塞で候也。急ぎ近日大將御下向有べしとぞ告たりける。諸卿是を聞て、大將進發の道開て、天運機を得たる時至りぬと悅給事限なし。抑此信胤と申は、去建武の亂の始に、細川卿律師定禪に與力して、備前備中の兩國を平げ、將軍の爲に忠功有しかば、武恩に飽て、恨を可レ含事も無りしに、依レ何今俄に宮方に成ぞと、事の根元を尋ぬれば、此比天下に禍をなす例の傾城故とぞ申ける。其比菊亭殿に、御妻とて、眉目貌無類、其品賤からで、なまめきたる女房ありけり。しかあれ共、元來心輕く思定たる方もなければ、何となく引手數多のうき網の、目もはづかなる其喩も猶事過て、寄瀬何にかと、我

孟明視—百里奚が子　西乞術、白乙丙—ともに蹇叔が子

皆由レ將出。臨レ敵決レ戰、無レ有二二心一。若レ此則無レ天二於上一無レ地二於下一、無レ敵二前一、於無レ君二於後一。是故智者爲レ之謀、勇者爲レ之鬬。氣勵二青雲一疾若二馳鶩一。兵不レ接レ刃而敵降服。戰勝二於外一、功立二於内一。史遷士賞、百姓懽悦。將無二咎殃一。是故風雨時節、五穀豐熟、社稷安寧也といへり。古より今に至まで、將を重んずる事、如レ此にてこそ、敵を亡し國を治る道は候事なれ。去程に此間北國の有樣を傳承るに、大將の擧狀を不レ帶共、士卒直に訴る事あれば、軈て勅裁を被レ下、僅に山中を伺ひ、以二伺候勞一軍用を支らる。北國の所領共を望む人あれば、不二事問一被レ成二聖斷一。依レ之大將威輕、士卒心恣にして、義助遂に百戰の利を失へり。是全戰の罪に非ず、唯上の御沙汰の違處に出たり。君黍も是を思召知るに依て、今其賞を被レ重者也。秦將孟明視、西乞術、白乙丙、鄭國の軍に打負て歸たりしを、秦穆公素服郊迎して、我不レ用二百里奚蹇叔言一辱しめられたり。三子は何の罪かある。其專心毋レ懈と云て、三人の官祿を復せしにて候はずや。何ぞ古の維盛を入道相國賞せしに同せん哉と被レ申しかば、さしも大才の實世卿、言なくしてぞ被二退出一けり。

太公望答曰云々—六韜龍韜立將篇に出づ

從て、士卒と共に懸よといへば進み、返せといへば止る。聚散應變、進退當度。是全く孫氏が美人を殺す事を以て兵法とはせず、唯大將の命を士卒の重んずべき處を、人にしらしめん爲也。吳王も最愛の美人を三人まで失つる事は悲けれ共、孫氏が教たる謀誠に當りと被思ければ、遂に孫氏を以て、多くの敵國を亡されてけり。されば周の武王、殷の紂王を伐ん爲に、大將を立ん事を太公望に問給ふ。太公望答曰、凡國有難、君避正殿、召將而詔之曰、社稷安危、一在將軍、願將軍帥師應之。將既受命、乃命太史卜。齋三日、之太廟鑽靈龜、卜吉日以授斧鉞。君入廟門、西面而立、將入廟門、北面而立。君親操鉞持首、授將其柄曰、從此上至天者、將軍制之。復操斧持柄、授將其刄曰、從此下至淵者、將軍制之。見其虛則進、見其實則止。勿以三軍爲衆而輕敵。勿以受命爲重而必死。勿以身貴而賤人。勿以獨見而違衆。勿以辯說爲必然。士未坐勿坐。士未食勿食。寒暑必同。如此則士衆必盡死力。將已受命拜而報君曰、臣聞、國不可以從外治、軍不可以從中禦。二心不可以事君、疑志不可以應敵。臣既受命、專斧鉞之威。臣不敢生還。願君亦垂一言之命於臣。君不許臣、臣不敢將。君許之乃辭而行。軍中之事不聞君命、

以管窺天—莊子秋水篇に、用レ管闚レ天用レ錐指レ地不ニ亦小一乎

聞途說塗—論語陽貨篇に、道聽而塗說德之棄也

七雄—秦魏趙韓齊楚燕

夫以不教之民云々—論語子路篇に見ゆ

全彼が戰の拙に非ず、唯聖運時未レ到、又勅裁の將の威を輕くせられしに依て也。高才に對して、加樣の事を申せば、以レ管窺レ天聞レ途說レ塗風情にて候へ共、唯其一端を申すべし。昔周の末、戰國の時に當て、七雄の諸侯相爭ひ、互に國を奪はんと謀し時、吳王闔閭孫氏と云ける勇士を大將として、敵國を伐ん事を謀る。時に孫氏吳王闔閭に向て申けるは、夫以ニ不レ教之民ニ戰しむる事、是を棄よといへり。若敵國を伐しめんとならば、先宮中にあらゆる所の美人を集て、兵の前に立て、陣を張り戈を持しめて後、我其命を司らむ。一日の中に、三度戰の術を教へんに、命に隨ふ事を得ば、敵國を滅さん事、立に得つべしとぞ申ける。吳王則孫氏が任ニ申請旨一、宮中の美人三千人を南庭に出して、皆兵の前陣に立らる。時に孫氏甲冑を帶し戈を取て、鼓うたば進んで刄を交へよ。鐘をうたば退て二陣の兵に讓れ。敵ひかば急に北るを追へ。敵返さば堪て弱を凌げ。命を背かば我汝等を斬んと、馬を馳てぞ習はしける。三千の美人君の命に依て戰を習はす戰場へ出たれども、窈窕たる婉嫋羅綺にだもたへざる體なれば、戈をだにも擡得ざれば、まして刄を交るまでもなし。あきれたる體にて、打笑ぬる計也。孫氏是を忿て、殊更吳王闔閭が最愛の美人三人を、忽に斬てぞ捨たりける。是を見、自餘の美人相

刑部大輔頼康に攻落されて、郎等七十三人を召具し、微服潜行して、熱田大宮司が城尾張國波津崎へ落させ給て、十餘日逗留して、敗軍の兵を集させ給て、伊勢、伊賀を經て、吉野殿へぞ被ㇾ參ける。卽參内し、龍顏に奉ㇾ謁しかば、君玉顏殊に麗しく照して前席此五六年が間の北征の忠功異ㇾ他由を感じ被ㇾ仰て、更に敗北の無念なる事をば不ㇾ被二仰出一、其命無ㇾ恙して、今此に來る事、君臣水魚の忠德再可ㇾ露故也と、御淚を浮させ御座て被二仰下一。次日臨時の宣下有て、一級を被ㇾ加。加之當參の一族竝に相從へる兵共に至るまで、或は恩賞を賜、或は官位を進られしければ、面目人に超てぞ見たりける。其時分殿上の上口に、諸卿被二參候一たりけるが、物語の次に、洞院右大將實世、未左衛門督にて坐しが、被二欺申一けるは、抑義助越前の合戰に打負て美濃國へ落ぬ、其國をさへ又被二追落一て、身の置處なき儘に當山に參たるを、君御賞翫有て、官祿を進ませらるゝ事、返々も不二心得一。是唯治承の昔、權佐三位中將維盛が東國の討手に下て、鳥の羽音に驚て逃上たりしを、祖父淸盛入道が計として、一級を進ませしに不ㇾ異とぞ被ㇾ笑ける。四條中納言隆資卿、つく〴〵と是を聞給ひけるが、退て被ㇾ申けるは、今度の儀、叡慮の赴く處、其理に當るかとこそ存候へ。其故は、義助北國の軍に失ㇾ利候し事は、

レ勇也不二膚撓一不二目逃一

君不見哉云云ー淮南子曰、堯時十日並出草木燋枯、堯命レ羿仰射二中九烏一皆死墮二羽翼一

騎は被レ討九人は痛手負たりけり。其中に殊更憑たる大夫房快舜、七所まで痛手負たりしが、其日の暮程にぞ死にける。畑も臑當の外、小手の餘、切られぬ所ぞ無りける。少少の小疵をば、物の數とも不レ思けるに、障子の板の外より、肩先へ射籠られたりける白羽の矢一筋、何と脫けれ共、鏃更に不レ脫けるが、三日の間苦痛身を責て、終に吠死にこそ失にけれ。凡此畑は、惡逆無道にして、罪障を不レ恐のみならず、無用なるに僧法師を殺し、佛閣社壇を燒壞ち、修善の心は露許もなく、作二惡業一事如レ山重しかば、勇士智謀の其藝有しか共、遂に天の爲にや被レ罰けん、流矢に被レ侵て死にけるこそ無慙なれ。君不レ見哉羿控レ弓、天に懸る九の日を射て落し、奡盪レ船無レ水陸地を遣しか共、或は其臣寒浞に被レ殺、あるひは夏后小康に被レ討て、皆死名を遺せり。されば開元の宰相宋開府が、幼君の爲に武を黷し、其邊功を不レ立しも、無二智慮一忠臣と可レ謂と、思合せける許也。畑已に討れし後は、北國の宮方氣を撓して、頭を差出す者も無りけり。

○義助被レ參二吉野一事竝隆資物語事

爰に脇屋刑部卿義助は、去九月十八日美濃の根尾城に立籠しか共、土岐彈正少弼頼遠、

かきりめ又しきりめの略、袖草摺に筋違にきりめを立て色を替へて威したるもの

其膚不撓云云—孟子公孫丑上篇に北宮黝之養

を、草摺長に著下て、同毛の五枚冑に鍬形打て緒を縮、熊野打の頬當に、大立揚の臑當を、脇楯の下まで引籠て、四尺三寸の太刀に、三尺六寸の長刀茎短に拏り、一引兩に三䌨の笠符、馬の三頭に吹懸させ、鹽津黑とて、五尺三寸有ける馬に、鎖の鐙懸させて、不劣兵十六人、前後左右に相隨へ、畑將軍此にあり、尾張守は何に坐すぞと呼て、大勢の中へ懸入、追廻し懸亂し、八方を拂て四維に遮りしかば、萬卒忽に散じて、皆馬の足をぞ立兼たる。是を見て、尾張守高經、鹿草兵庫助、旗の下に扣て、無云甲斐者共哉、敵縦鬼神也とも、あれ程の小勢を見て、引事や有べき。唯馬の足を立寄て、魚鱗に扣て、兵を虎韜になして取籠、一人も不漏討留よやと、透間も無ぞ被下知ける。懸しかば三千餘騎の兵共、大將の諫言に力を得て、十六騎の敵を眞中におつ取籠、餘さじとこそ揉だりけれ。大敵雖叵欺、畑が乘たる馬は、項羽が騅にも不劣程の駿足也しかば、鐙の鼻に充落され、蹄の下にころぶをば、首を取ては馳通り、取て返しては颯と破る。相從ふ兵も、皆似るを友とする事なれば、目に當る敵をば斬て不落云事なし。其膚不撓其目不逃勇氣に、三軍敢て當難く見えしかば、尾張守の兵三千餘騎、東西南北に散亂して、河より向へ引退く。軍散じて後、畑帷幕の内に打歸て、其兵を集るに、五

はたらかす—うごかす
輪寶の山云云—人壽八萬歲の昔轉輪王世に出現するや七寶自ら至る七寶の中に輪寶あり其德用によりて山川も倶に平等となれりといふ
數目—しめ

例の惡八郎八九尺許なる大木を脇にはさみ、五六十人しても、押はたらかしがたき大磐石を、轉懸たれば、其石に當る有樣、輪寶の山を崩し、磊石の卵を壓すに不ㇾ異。是に利を得て、左右に激し、八方に拂、破ては返し、歸ては進み、散々に切廻りける間、或は討れ或は創を被る者不ㇾ知二其數一。乍ㇾ去其後は彌寄手攻上る者も無て、唯山を阻川を境て、向陣を遠く取のきたれば、中々兎角もすべき樣無し。かゝりし程に、畑つく〴〵と思案して、此儘にては叶ふまじ。珍しき戰今一度して、敵を散すか、散さるゝか、二の間に天運を見んと思ければ、我城には大將一井兵部少輔に、兵十一人を附て殘留め、又我身は宗徒の者十六人を引具して、十月二十一日の夜半に、豐原の北に當たる伊地山に打上て、中黑の旗一旒打立て、寄手遲しとぞ待たりける。尾張守高經是を聞て、鷹巢城より勢を分て、此へ打出たるとは不ㇾ思寄、豐原平泉寺の衆徒宮方と引合て旌を擧たりと心得て、些も足をためさせじと、同二十二日の卯刻に、三千餘騎にてぞ押寄られける。寄手初の程は敵の多少を量兼て、無二左右一不ㇾ進けるが、小勢也けりと見て、些も無二恐慮一、我前にとぞ進たりける。畑六郎左衛門、敵外に控たる程は、態と有共被ㇾ知ざりけるが、敵已に一二町に攻寄せたりける時、金胴の上に火威の鎧の敷目に拵たる

秀句―地口、座興にいふ滑稽なる文句

はぬ者ぞ無りける。爰に寄手の中に、上木九郎家光と云けるは、元は新田左中將の侍也けるが、心を翻して敵となり、攻口に候けるが、數百石の兵糧を通じて、畑に内通すと云聞有しかば、如何なる者か爲たりけん、大將尾張守高經の陣の前に、畑を討んと思はゞ、先上木を伐てと云秀句を書て、高札をぞ立たりける。是より大將も上木に心を被レ置、傍輩も是に隔心ある體に見ける間、上木口惜事に思て、二月二十七日の早旦に、己が一族二百餘人、俄に物具ひし〳〵と堅め、大竹をひしいで、楯の面に當、かづき連てぞ攻たりける。自餘の寄手是を見て、城の案内知たる上木が、俄に攻るは、何様可レ落様ぞ有らん。上木一人が高名になせそとて、三十餘箇所の向城の兵共七千人、取物も不二取敢一、岩根を傳ひ、木の根に取附て、さしも嶮しき鷹巣城の坂十八町を一息に攻上り、切岸の下にぞ著たりける。され共城には鳴を靜て、事の様を見よとて、靜まり返て有けるが、已に鹿垣程近く成ける時、畑六郎、所大夫房快舜、悪八郎、鶴澤源藏人、長尾新左衛門、兒玉五郎左衛門五人の者共、思々の物具に、太刀長刀の鋒を汰へ、聲々に名乘て、喚て切てぞ出たりける。誠に人なしと油斷して、そゞろに進み近づきたる前懸の寄手百餘人、是に驚散て、互の助を得んと、一所へひしひしと寄たる處を、

扆―絳を質となし斧を畫ける屏風、天子の諸侯に對する時、立ち負ひて南面せるもの

軍戰に無レ利、討るゝ者三十萬人、地を被レ奪事七千餘里、國危く士辱められて、諸侯皆彼に降ん事を乞。爰に周王是を愁て扆を安じ給はず。折節御前に犬の候けるに、魚肉を與、汝若有レ心、戎國に下て、竊に戎王を嚙殺して、世の亂を靜めよ。然らば汝に三千の宮女を一人下て夫婦となし、戎國の王たらしめんと、戲て被レ仰たりけるを、此犬勅命を聞て立て三聲吠けるが、則萬里の路を過て、戎國に下て、偸に戎王の寢所へ忍入て、忽に戎王を嚙殺し、其首を咆へて、周王の御前にぞ參ける。等閑に戲て勅定ありし事なれ共、綸言難レ改とて、后宮を一人此犬に被レ下て爲二夫婦一、戎國を其賞にぞ被レ行ける。后三千の列に勝れ、一人の寵厚かりし其恩情を棄て、勅命なれば無レ力、彼犬に伴て、泣々戎國へ下て、年久住給しかば、一人の男子を生り。其形頭は犬にして、身は人に不レ替。子孫相續て、戎國を保ちける間、依レ之彼國を犬戎國とぞ申ける。以レ彼思レ之、此犬獅子が行をも、珍しからずとぞ申ける。されば此犬城中に忍入て、機嫌を計ける間、三十七箇所に城を拵へ分て、逆茂木を引塀を塗たる向城共、毎夜一二被レ打落、物具を捨て馬を失ひ、恥をかく事多ければ、敵の強きをば不レ顧、御方に笑れん事を恥て、偸に兵糧を入、忍々酒肴を送て、可レ然は我城を夜討になせそと、畑を語

馮夷―河神なり

驪龍頷下の珠―止觀に明月神珠在二九重淵内驪龍頷下一驪龍は黒色無角の雌龍なり

鈌唇―上唇のかけたる所謂みつくちなり

業として年久く有しかば、馬に乘て惡所岩石を落す事、恰も神變を得るが如し。唯造父が御を取て千里に不レ疲しも、是には不レ過とぞ覺たる。水練に又馮夷が道を得たれば、驪龍頷下の珠をも自可レ奪。弓は養由が跡を追しかば、弦を鳴して、遙なる樹頭の栖猿をも落しつべし。謀巧にして人を眠、氣健にして心不レ撓しかば、戰場に臨むごとに敵を靡け堅に當る事、樊噲周勃が不レ得道をも得たり。されば物は以レ類聚る習なれば、彼が甥に所大夫房快舜とて、少しも不レ劣惡僧あり。又中間に惡八郎とて、鈌唇なる大力あり。又犬獅子と名を附たる不思議の犬一匹有けり。此三人の者共、闇にだになれば、或は帽子兜に、鏁を著て、足輕に出立時もあり。或は大鎧に七物持時もあり。樣々質を替て、敵の向城に忍入、先件の犬を先立て、城の用心の樣を伺ふに、敵の用心密て難レ伺隙時は、此犬一吠吠て走出、敵の寢入、夜廻も止時は、走出て主に向て、尾を振て告ける間、三人共に此犬を案内者にて、塀をのり越、城の中へ打入て、叫喚で縱横無礙に切て廻りける間、數千の敵軍驚騷て、城を被レ落ぬは無りけり。夫れ犬は以レ守禦レ養レ人といへり。誠に無レ心禽獸も、報恩酬德の心有にや、斯る事は、先言にも聞ける事あり。昔周の世衰へんとせし時、戎國亂て王化に不レ隨。兵を遣して是を雖レ攻、官

太平記　巻第二十二

○畑六郎左衛門事

去程に、京都の討手大勢にて攻下しかば、杣山城も被レ落、越前、加賀、能登、越中、若狭五箇國の間に、宮方の城一所も無りけるに、畑六郎左衛門時能、僅に二十七人籠たりける鷹巣城計ぞ相残たりける。一井兵部少輔氏政は、去年杣山城より、平泉寺へ越て、衆徒を語ひ、旗を擧んと被レ議けるが、國中宮方弱して、與力する衆徒も無りければ、是も同く鷹巣城へぞ引籠りける。時能が勇力、氏政が機分、小勢なりとて閣きなば、何樣天下の大事に可レ成とて、足利尾張守高經、高上野介師重、兩大將として、北陸道七箇國の勢七千餘騎を率して、鷹巣城の四邊を千百重に被レ圍、三十餘箇所の向城をぞ取たりける。彼畑六郎左衛門と申は、武藏國住人にて有けるが、歳十六の時より好二相撲一取けるが、坂東八箇國に、更に勝者無りけり。腕の力筋太して、股の村肉厚ければ、彼薩摩の氏長も、角やと覺て夥し。其後信濃國に移住して、生涯山野江海の獵漁を

死云々、石崇は季倫の字也

石季倫云々｜胡曾詩云、晉石崇致レ富好色不量有ニ別館ニ在ニ河陽金谷ニ時趙王倫專レ權崇有レ妾云ニ綠珠ニ美而艷善吹レ笛孫秀使ニ人求レ之(中略)倫使者到レ門崇謂ニ綠珠ニ云我今爲レ爾得レ罪綠珠泣云當レ致ニ死於君前ニ因自投ニ于樓下ニ而

甲斐なき命生て、是迄參て候と云もはてず、腹かき切て馬の前にぞ伏たりける。判官是をきゝ、時の間も離れがたき妻子を失はれて、命生ても何かせん。安からぬ物哉。七生迄師直が敵と成て、思知せんずる物をと忿て、馬の上にて腹を切、倒に落て死にけり。三十餘騎有つる若黨共をば、城になるべき所を見よとて、此彼へ遣し、木村源三一人附從て有けるが、馬より飛でおり、判官が首を取て、鎧直垂に裹み、遙の深田の泥中に埋て後、腹かき切、腸繰出し、判官の首の切口を隱し、上に打重て抱附てぞ死たりける。後に伊豆守の兵共、木村が足の泥に汚たるをしるべにて、深田の中より、高貞が空き首を求出して、師直が方へぞ送りける。是を見聞人毎に、さしも忠有て咎無りつる鹽冶判官、一朝に讒言せられて、百年の命を失つる事の哀さよ。唯晉の石季倫が綠珠が故に亡されて、金谷の花と散はてしも、かくやと云ぬ人はなし。それより師直惡行積て、無程亡失にけり。利レ人者天必福レ之、賊レ人者天必禍レ之と云る事、眞なる哉と覺たり。

打物―太刀刀などの類

はたらかざりければ、道に乗捨歩跣にて相從ふ。右ては本道を落得じとや思けん、御著宿より道を替て、小鹽山へぞ懸ける。山名續て追ければ、鹽冶が郎等三人返合て、松の一村茂りたるを木楯に取て、指攻引攻散々に射る。面に前む敵六騎射て落し、矢種も盡ければ、打物に成て切合てぞ死にける。此より高貞落延て、追手の馬共皆疲にければ、今は道にて追附事叶まじとて、山陽道の追手は、心閑にぞ下ける。三月晦日に鹽冶出雲國に下著しぬれば、四月一日に追手の大將、山名伊豆守時氏、子息右衛門佐師氏、三百餘騎にて、同國屋杉の庄に著給ふ。則國中に相觸て、高貞が叛逆露顯の間、誅罰せん爲に下向する所也。是を討て出したらん輩に於ては、非職凡下を云ず、恩賞を申與ふべき由を披露す。聞之他人は云に不及、親類骨肉迄も、欲心に年來の好を忘ければ、自國他國の兵共、道を塞ぎ前を要て、此に待彼に來討んとす。高貞一日も身を隱すべき所無ければ、佐々布山に取上て、一軍せんと馬を早めて行ける處に、丹波路より落ける若黨中間一人走附て、是は誰が爲に御命をば惜まれて、城に楯籠らんとは思召候や。御臺御供申候つる人々は、播磨の陰山と申所にて、敵に追附れて候つる間、御臺をも公達をも、皆刺殺し進せて、一人も殘らず腹を切て死で候也。是を告申さん爲に

つまり―ゆきあたり

路次―途中

賀久河迄は、十六里の道を一夜に打て、夜もはやほの〴〵と明ければ、遠方人の袖見ゆる、河瀬の霧の絶間より、向の方を見渡しければ、旅人とは覺ぬ騎馬の客三十騎許、馬の足しどろに聞えて、我先にと馬を早めて行人あり。すはや是こそ鹽冶よと見ければ、右衞門佐、川縁に馬を懸居て、あの馬を早められ候人々は、鹽冶殿と見奉るは僻目か。將軍を敵に思ひ、我等を追手に受て、何までか落られぬべき。踏留て尋常に討死して、此長河の流に名を殘され候へかしと、言を懸られて、判官が舍弟鹽冶六郎、若黨共に向て申けるは、某は此にて先討死すべし。御邊達は細路のつまりつまりに防矢射て、廷尉を落し奉れ。一度に討死する事有べからずと、無らん跡の事までも、委く是を相謀て、主從七騎引返す。右衞門佐の兵十二騎、一度に河へ打入て、轡を雙て渡せば、鹽冶が舍弟七騎向の岸に鏃をそろへ、散々に射る。右衞門佐が胄の吹返し、射向の袖に矢三筋受て、岸の上へ颯と懸上れば、鹽冶六郎拔合て、懸違々々時移る程こそ切合たれ。小林左京亮、鹽冶に切て落されて、已に討れんと見えければ、右衞門佐馳塞て、當の敵を切て落す。殘六騎の者共、思々に討死しければ、其首を路次に切懸て、時刻を移さず追て行。此間に鹽冶、又五十町許落延たりけれ共、郎等共が乘たる馬疲て、更に

此方へ打歸せ給へ—異本この次に「一大事を仰せられたる事にて候へば、委く申候はんと招きける」とあり

豆州—山名伊豆守

候。此方へ打歸せ給へ。山名我身は馬より下、若黨を四五騎歸して、何事ぞあれ聞急ぎ馳歸れとぞ下知しける。五騎の兵共誠ぞと心得て、使の前にて馬より飛おり、何事にて候やらんと問へば、此者莞爾と打笑、誠には執事の使にては候はず。是は鹽冶殿の御内の者にて候が、判官殿の落られ候けるを知候はで、作をも不ㇾ仕候。此にて主の御爲に命を捨て、冥途にて此様を語り申べきにて候と、云もあへず拔合、時移る迄ぞ切合ける。三人に手負せ、我身も二太刀切られければ、是迄とや思けん、鹽冶が郎等は腹かき破て死にけり。此者に出しぬかれ、時刻移りければ、落人は遙に延ぬらんとて、彌馬を早め追懸ける。京より湊河までは、十八里の道を二時許に打て、餘に馬疲ければ、今日とても近附事有がたし。一夜馬の足を休てこそ追はめとて、山名伊豆守湊河にぞとゞまりける。其時生年十四歳に成ける子息右衞門佐、氣早なる若者共を呼拔て宣けるは、北る敵は跡を恐て、夜を日に繼で逃て下る。我等は馬勞て徒に明るを待。加樣にては此敵を追攻て討つと云事不ㇾ可ㇾ有。馬強からん人々は我に同じ給へ、豆州には知せ奉らで、今夜此敵を追攻て、道にて討留めんと云もはてず、馬引寄て乘給へば、小林以下の侍共十二騎、我も〳〵と同じて、夜中に追てぞ馳行ける。湊河より

の柄を垣にあて、諸共に鐔本迄貫れて、抱附てぞ死にける。自餘の輩二十二人、今は心安しと悦て、髪を亂し大袒に成て、敵近附ば走懸々々、火を散してぞ切合たる。とても遁まじき命也。さのみ罪を造ては何かせんとは思ながら、爰にて敵を暫も支たらば、判官少も落延る事もやと、鹽冶爰にあり、高貞此にあり、首取て師直に見せぬかと、名乘懸々々、二時許ぞ戰たる。今は矢種も射盡しぬ。切創負はぬ者も無りければ、家の戸口に火を懸て、猛火の中に走り入、二十二人の者共は、思々に腹切て、燒こがれてぞ失にける。燒はてゝ後一堆の灰を拂のけて、是を見れば、女房は燒野の雉の雛を翅にかくして、燒死たる如にて、未胎内にある子の、刄のさきに懸られながら、半は腹より出て、血と灰と塗たり。又腹かき切て多く重り伏たる死人の下に、少き子を抱て、一つ太刀に貫れたる兵あり。是ぞ何樣鹽冶判官にてぞあるらん。され共燒損じたる首なれば、取て歸るに及ばずとて、桃井も大平も、是より京へぞ歸り上りける。

さて山陽道を追て下りける山名伊豆守が若黨共、山崎財寺の前を打過ける處に、跡より執事の御文にて候、暫御逗留候へ、可申事有とぞ呼りける。何事やらんと馬を控たれば、此者三町許隔りて、餘につよく走て候程に、息絶てそれまでも參り得ず

空き人―なきがら

に、しをれわびたる女房の、通夜の涙に沈んで、さらず共我と消ぬと見ゆる氣色なるが、膝の傍に二人の子をかき寄て、是や如何にせんとあきれ迷へる有様を見るに、さしも猛く勇める者共なれ共、落る涙に目も昏て、唯惘然としてぞ居たりける。去程に追手の兵共、ま近く取巻て、此事の起は何事ぞ。縦鹽冶判官を討たりとも、其女房をとり奉らでは、執事の御所存に叶べからず。相構て其旨を存知せよと下知しけるを聞て、八幡六郎は、判官が次男の三歳に成が、母に抱き附たるを抱て、あたりなる辻堂に、修行者の有けるに、此少人汝が弟子にして、出雲へ下し進せて、御命を助進せよ、必ず所領一所の主になすべしと云て、小袖一重副てぞとらせける。修行者かひぐしく請取て、仔細候はじと申ければ、八幡六郎無限悦て、元の小家に立歸り、我は矢種の有ん程は、防矢射んずるぞ。御邊達は内へ參て、女性少人を刺殺し進せて、家に火を懸て腹を切れと申ければ、鹽冶が一族に、山城守宗村と申ける者内へ走入り、持たる太刀を取直して、雪よりも清く花よりも妙なる女房の、胸の下をつきさくに、紅の血を淋ぎ、つと突とほせば、あつと云聲幽に聞えて、薄衣の下に伏給ふ。五つになる少人、太刀の影に驚て、わつと泣て、母御なうとて、空き人に取附たるを、山城守心強かき抱き、太刀

しつらひ――よそほひ、支度なり

黨にきせたりける物具取て肩に打懸、馬の上にて高紐かけ、門前より懸足を出して、父子主從七騎、播磨路にかゝり、揉にもみてぞ追たりける。直常も大平も宿所へは歸らず、中間を一人歸して、乘替の馬物具をば路へ追附けよと下知して、丹波路を追てぞ下りける。道に行合人に怪げなる人や通りつると問へば、小鷹少々すゑたりつる殿原達十四五騎が程、女房をば輿に乘せて、忙しげに通りつる。其間は二三里は過候ぬらんとぞ答へける。さては幾程も延じ。おくれ馳の勢共を待つれんとて、其夜は波々伯部の宿に、暫逗留し給へば、子息左衞門佐、小林民部丞、同左京亮以下の侍共、取物も取あへず二百五十餘騎、落人の跡を問々、夜晝の境もなく追懸たり。鹽冶が若黨共も、追手定て今は懸るらん。一足もと急ぎけれ共、女性少人を具足したれば、兎角のしつらひに滯て、播磨の陰山にては早追附れにけり。鹽冶が郎等共、今は落得じと思ければ、輿をば道の傍なる小家に舁入させて、向敵に立向、おしはだぬぎ散々に射る。追手の兵共、物具したる者は少かりければ、懸寄ては射落し、拔てかゝれば射すゑられて、矢場に死せる者十一人、手負者は數を知ず。右ても追手は次第に勢重る、矢種も已に盡ければ、先女性をさなき子共を刺殺して、腹を切らんとて、家の内へ走り入て見れば、あてやか

器用―その事に適任なる者

出る様に見せて、寺戸より山崎へ引違、播磨路よりぞ落行ける。身に近き郎等二十餘人をば、女房子共に附て、物詣する人の體に見せて、半時許引別れ、丹波路よりぞ落しける。此比人の心子は親に敵し、弟は兄を失はんとする習なれは、鹽冶判官が舍弟四郎左衞門、急ぎ武藏守が許へ行て、高貞が企の樣有の儘にぞ告たりける。師直聞レ之、此事長僉議して、此女房取はづしつる事の安からずさよと思ければ、急ぎ將軍へ參て、高貞が隱謀の事、さしも急に御沙汰候べしと申候つるを、聞召候はで、此曉西國を指て逃下候けんなる。若出雲伯耆に下著して、一族を促て城に楯籠る程ならば、ゆゝしき御大事にて有べう候也と申ければ、げにもと驚騷れて、誰をか追手に下すべきとて、其器用をぞ選れける。當座に有ける人々、我をや追手にさゝれんとかたづを飲で、機を攻たる氣色を見給て、此者共が中には、高貞を追攻て、討べき者なしと思はれければ、山名伊豆守時氏と、桃井播磨守直常、大平出雲守とを呼寄て、高貞唯今西國を指て逃下り候なる。いづく迄も追攻て打留られ候へと宣ければ、兩人共に一議にも及す、畏て領掌す。時氏はかゝる事共知ず、出仕の裝束にて參られたりけるが、宿所へ歸り、武具を帶し勢を率せば、時刻遷て追つく事を得がたしと思ひけるにや。武藏守が若

巫女廟の花―朗詠に巫女廟花紅似レ粉、昭君村柳翠二於眉一

懸狩―賭狩也

び入ぬ。二間なる所に身を側めて、垣の隙より闚へば、唯今此女房湯より上けると覺て、紅梅の色ことなるに、氷の如なる練貫の小袖の、しを〱とあるをかい取て、ぬれ髮の行へながくかゝりたるを、袖の下にたきすさめる虛だきの煙、匂許に殘て、其人は何にか有るらんと、心たどたどしく成ぬれば、巫女廟の花は夢の中に殘り、昭君村の柳は雨の外に疎なる心地して、師直物怪の附たる樣に、わな〱と戰ひ居たり。さのみ程へば、主の歸る事もこそとあやなくて、侍從師直が袖を引て、半蔀の外迄出たれば、師直緣の上に平伏て、如何に引立れ共起上らず。あやしや此儘にて絕や入んずらんと覺て、兎角して歸したれば、今は一向戀の病に臥沈み、物狂しき事をのみ、寢ても寤ても云なんど聞えければ、侍從如何なる目にか逢んずらんと恐しく覺て、其行末知べき人もなき片田舍へ逃下にけり。此より後は指南する人もなし。師直如何せんと歎きけるが、すべき樣有と案出して、鹽冶隱謀の企有由を、樣々に讒を運し、將軍左兵衛督にぞ申ける。鹽冶此事を聞ければ、とても遁るまじき我命也。さらば本國に逃下て、旗を揚、一族を促て、師直が爲に命を捨んとぞたくみける。高貞三月二十七日の曉、貳心有まじき若黨三十餘人、狩裝束に出立せ、小鷹手每にするゑて、蓮臺野西山邊へ懸狩の爲に

三途—火途
血途、刀途

さなきだにおもきが上の小夜衣、我妻ならぬ妻な重ぞ。

と云歌の心を以て、人目計を憚候物ぞとこそ覺て候へと、歌の心を釋しければ、師直大に悦て、嗚呼御邊は弓箭の道のみならず、歌道にさへ無雙の達者也けり。いで引出物せんとて、金作の團鞘の太刀一振、手づから取出して、藥師寺にこそ引れけれ。兼好が不祥、公義が高運、榮枯一時に地を易たり。師直此返事を聞しより、いつとなく侍從を呼て、君の御大事に逢てこそ、捨んと思つる命を、詮なき人の妻故に、空く成んずる事の悲さよ。今はのきはにもなるならば、必侍從殿をつれ進て、死出の山三途の河をば越んずるぞと、或時は目を瞋て云ひおどし、或時は又顏を低て云恨ける程に、侍從局も、はや持あつかひて、さらば師直に此女房の湯より上て、唯顏ならんを見せてうとませばやと思て、暫御待候へ。見ぬにも非ず、見もせぬ御心あては、申をも人の憑ぬ事にて候へば、よそながら先其樣を見せ進せ候はんとぞ慰めける。師直聞之より獨ゑみして、今日か明日かと待居たる處に、北臺の方に中居する女童に、兼て約束したりければ、侍從の局の方へ來て、今夜こそあれの御留守にて、御臺は御湯ひかせ給ひ候とぞ告たりける。侍從右と師直に申せば、頓て侍從をしるべにて、鹽冶が館へ忍

取り入ろ、取り入れざれば男更に加へて千束を限とすといふ古歌、思ひかれ今日たてそむる錦木の千束もまたで逢ふよしもがな

懐に入、歸り參て候ぬと語りければ、師直大に氣を損じて、いやく物の用に立ぬ物は手書也けり。今日より其兼好法師、是へよすべからずとぞ忿ける。かゝる處に藥師寺次郎左衞門公義、所用の事有て、ふと差出たり。師直傍へ招て、爰に文をやれ共取ても見ず、けしからぬ程に氣色つれなき女房の有けるをば、いかゞすべきと打笑ければ、公義人皆岩木ならねば、如何なる女房も、慕に靡ぬ者や候べき。今一度御文を遣されて、御覽候へとて、師直に代て文を書けるが、中々言はなくて、

返すさへ手や觸けんと思ふにぞ、我文ながら打も置れず。

押返して、媒此文を持て行たるに、女房いかゞ思けん、歌を見て顏打あかめ、袖に入て立けるを、媒さては便あしからずと、袖を引へて、さて御返事はいかにと申ければ、重が上の小夜衣と計云捨て、内へ紛入ぬ。暫あれば、使急歸て、かくこそ候つれと語に、師直うれしげに打案じて、軈藥師寺を呼寄せ、此女房の返事に、重が上の小夜衣と云捨て立れけると媒の申は、衣小袖を調て送れとにや、其事ならば如何なる裝束なり共、したてんずるにいと易かるべし。是は何と云心ぞと問れければ、公義、いや是はさやうの心にては候はず。新古今の十戒の歌に、

安濃浦に引網―伊勢の海やあこぎが浦に引網のたび重なればあらはれにけり

錦木の云々―一尺ばかりの木を色どれるもの、昔陸奥の俗に男の女に逢はんとする時是を其門に立つ、女あはんと思へば

ば、聞しばかりにて、さて有べき事なれ共、かゝる事の侍るをば、如何が御計候べき。露許のかごとに人の心をも慰られば、公達の御爲に行末たのもしく、又憑方なき我等迄も、立よる方無ては候はじ。さのみ度重ならばこそ、安濃浦に引網の、人目に餘る憚も候はめ。篠の小ざさの一節も、露かゝる事有共、誰か思寄り候べきと、樣樣かきくどき聞ゆれ共、北臺は事の外なる事哉と計打わびて、少も云寄べき言葉もなし。さても錦木の千束を重し夷心の奧をも、憐と思しる事もやと、日頃に經廻て、我にうきめを見せ、深き淵河に沈ませて、憐と計後の御情はあり共、よしや何かせん。唯日比參仕へし故宮の御名殘と思召ん甲斐には、責て一言の御返事をなり共承候へと、兎角云恨ければ、北臺もはや氣色打しをれ、いでや物わびしく、かくとな聞えそ。哀なる方に心引れば、高志濱のあだ浪に、うき名の立事もこそあれと、かこち顏也。侍從歸て角こそと語りければ、武藏守いとど心を空に成て、度重らばなさけによわることもこそあれ。文をやりて見ばやとて、兼好と云ける能書の遁世者を呼寄て、紅葉重の薄樣の、取手もくゆる許にこがれたるに、言を盡してぞ聞えける。返事遲しと待處に、使歸り來て、御文をば手に取ながら、あけてだに見給はず、庭に捨られたるを、人目にかけじと

雲の鹽冶判官に、先帝より下されて、賤き田舍の御栖にのみ、御身を捨はてさせ給ぬれば、唯王昭君が胡國の夷に嫁しけるも、かくこそと覺て、奉レ見も悲くこそ侍りつれとぞ語ける。武藏守いとゞうれしげに聞蕩れて、御物語の餘に面白く覺るに、先引出物申さんとて、色有る小袖十重に、沈の枕を取副て、侍從の局が前にぞ置れたる。侍從俄に德附たる心ちしながら、あらけしからずの今の引出物やと思て、立かねたるに、武藏守近く居寄て、詮なき御物語故に、師直が違例はやがてなほりたる心地しながら、又あらぬ病の附たる身に成て候ぞや。さりとては平に憑申候はん。此女房如何にもして、我に御媒候てたばせ給へ。さる程ならば所領なりとも、又は家の中の財寶なり共、御所望に隨て、可レ進とぞ語ける。侍從の局は、思寄ぬ事哉。唯獨のみおはする人にてもなし。何としてかく共申出べきぞと思ながら、事の外に叶ふまじき由をいはゞ、命をも失はれ、思の外の目にもや合んずらんと、恐しければ、申てこそ見候はめとて、先づ歸りぬ。二三日は、とやせまし角と云ましと案じ居たる處に、例ならず武藏守が許より、樣々の酒肴なんど送り、御左右遲とぞ責たりける。侍從は辭するに言無して、彼女房の方に行向ひ、忍やかに、かやうの事は、申出に附て、心の程も推量られ進せぬべけれ

遍照僧正の歌―古今集に名にめでて折れるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人に語るな

笙の岩屋―吉野の奥にあり、行人の籠り居る處

に思の牡丹を始として、色々様々の花共を取々に馨られしに、梅は匂ふかくて、枝たをやかならず。櫻は色ことなれ共、其香もなし。柳は風を留る緑の絲、露の玉ぬく枝異なれ共、匂もなく花もなし。梅が香を櫻の色に移して、柳の枝にさかせたらんこそ、げにも此貌には譬へめとて、遂に花のたとへの數にも入せ給はざりし上は、申も中々疎なる事にてこそと云戯て、障子を引立て内へ入んとするを、師直目もなく打笑て、暫しと袖をひかへて、其宮はいづくに御座候ぞ。御年は何程に成せ給ふぞと問けるに、侍從立留て、近比は田舍人の妻と成せ給ぬれば、御貌も雲の上の昔には替り給、御年も盛過させ給ぬらんと思やり進て有しに、一日物詣の歸さに參て奉見しが、古の春待遠に有し若木の花よりも猶色深く匂有て、在明の月の限なく指入たるに、南向の御簾を高くかゝげさせて、琵琶をかきならし給へば、はら〳〵とこぼれかゝりたる鬢のはづれより、ほのかに見えたる眉の匂、芙蓉の眸、丹花の唇、如何なる笙の岩屋の聖なりとも、心迷はであらじと、目もあやに覺てこそ候しか。うらめしの結の神の御計や、いかなる女院御息所とも奉見か、さらずは、今程天下の權を取る、さる人の妻ともなし奉らで、聲は塔の鳩の鳴様にて、御副臥もさこそそこは〳〵しく鄙閑たるらんと覺る出

えも何も未だ十分ならぬ公卿をいふ

玉顏寂寞涙闌干ー長恨歌にあり、心に思へど聲には出さず涙を流すさま

て、あな善惡無の御心あて候や、事の樣を推量候に、昔の菖蒲の前は、さまで美人にては無りけるとこそ覺て候へ。楊貴妃は一たび笑ば、六宮に顏色無と申候。縦千人萬人の女房を竝べ居て置れたり共、菖蒲の前誠に世に勝れたらば、賴政是を引かね候べしや。是程の女房にだに、國の十箇國許をば換ても何か惜からんと仰候はゞ、先帝の御外戚早田宮の御女弘徽殿の西臺なんどを御覽ぜられては、日本國、唐土、天竺にも易させ給はんずるや。此御方はよく世に類なきみめ貌にて、御渡りありと思召知候へ。いつぞや雲の上人、花待かねし春の日のつれ〴〵に、禁裏仙洞の美夫人、九嬪更衣達を、花の譬にせられ候しに、桐壺の御事は、あてやかにうちあらはれたる御氣色を奉レ見たる事なければ、譬て申さんもあやなかるべけれ共、雲井の外目も異なれば、明やらぬ外山の花どやと可レ申。梨壺の御事は、いつも伏沈み給へる御氣色物がなしく、烽火の昔も理にこそ御覽ぜらるらめと、君の御心も空に知れしかば、玉顏寂寞として、涙闌干たりと喩へし、雨の中の梨壺と名におふ御樣なるべし。或は月もうつろふ本あらの小萩、波も色ある井手の山吹、或は遍照僧正の、我落にきと人に語るなと戯し、嵯峨野の秋の女郎花、光源氏の大將の、白くさけるは花と名を問し、黃昏時の夕顏の花、見る

淺香沼の菖蒲—陸奥の淺香の沼の花かつみかつみる人に戀ひ渡るらん、かつみは菖蒲也

なま上達部—なりあがりの公卿にて世のおぼ

りけり。更衣打笑て、水のまさらば淺香沼さへまぎるゝ事もこそあれと申されければ、頼政、

五月雨に澤邊の眞薦水越て、何れ菖蒲と引ぞ煩ふ。

とぞ詠たりける。時に近衞關白殿餘の感に堪かねて、自ら立て菖蒲の前の袖を引、是こそ汝が宿の妻よとて、頼政にこそ下されけれ。頼政鵺を射て、弓箭の名を揚たるのみならず、一首の歌の御感に依て、年月戀忍つる菖蒲の前を賜つる、數寄の程こそ面目なれと、眞都三重の甲を上ば、覺一初重の乙に收て、歌ひすましたりければ、師直も枕をおしのけ、耳をそばだて聞に、簾中庭上諸共に聲を上てぞ感じける。平家はてゝ後、居殘たる若黨遁世者共、さても頼政が鵺を射たる勸賞に、傾城を賜たるは面目なれ共、所領か御引出物かを賜たらんずるには、莫大の劣哉と申ければ、武藏守聞もあへず、御邊達は無下に不當なる事を云物哉。師直は菖蒲程の傾城には、國の十箇國許、所領の二三十箇所也共、換てこそ賜らめとぞ恥しめける。かゝる處に、元は公家のなま上達部に仕て、盛なりし御代を見たりし女房、今は時と共に衰て、身の寄邊無まゝに、此武藏守が許へ常に立寄ける侍從と申女房、垣越に聞て、後の障子を引あけて、無限打笑

あやめも知ぬ―古今集讀人しらず、郭公鳴くやさつきのあやめ草あやめも知らぬ戀もするかな

慰めん爲に、毎日酒肴を調て、道々の能者共を召集て、其藝能を盡させて、座中の興をぞ促しける。或時月深夜閑て、荻の葉を渡る風身に入たる心地しける折節、眞都と覺一検校と、二人づれ平家を歌けるに、近衞院の御時、紫宸殿の上に、鵺と云怪鳥飛來て、夜々鳴けるを、源三位頼政勅を承て、射て落したりければ、上皇限なく叡感有て、紅の御衣を當座に肩に懸らる。此勸賞に、官位も闕國も猶充に不㆑足。誠やらん頼政は、藤壺の菖蒲に心を懸て、堪ぬ思に伏沈むなる。今夜の勸賞には、此菖蒲を下さるべし。但し此女を頼政音にのみ聞て、未目には見ざんなれば、同樣なる女房をあまた出して、引煩はゞ、あやめも知ぬ戀をする哉と、笑んずるぞと仰られて、後宮三千人の侍女の中より、花を猜み、月を妬む程の女房達を、十二人同樣に装束せさせて、中々ほのかなる氣色もなく、金紗の羅の中にこそ置れけれ。さて頼政を清涼殿の孫廂へ召れ、更衣を勅使にて、今夜の抽賞には、淺香沼の菖蒲を下さるべし。其手は緩とも、自ら引て我宿の妻と成とぞ仰下されける。頼政勅に隨て、清涼殿の大床に手打懸て候けるが、何れも齡二八許なる女房の、みめ貌繪に書共、筆も難㆑及程なるが、金翠の粧を餝り、桃顏の媚を含で並居たれば、頼政心彌迷ひ目うつろひて、何れを菖蒲と可㆑引心地も無

○鹽冶判官讒死事

北國の宮方頻に起て、尾張守黑丸城を落されぬと聞えければ、京都以外に周章して、援兵を下さるべしと評定あり。則四方の大將を定て、其國々へ勢をぞ添られける。高上野介師治は、大手の大將として、加賀、能登、越中の勢を率し、加賀國を經て宮腰より向はる。土岐彈正少弼頼遠は、搦手の大將として、美濃尾張の勢を率し、穴間郡上を經て、大野郡へ向はる。佐々木三郎判官氏頼は、江州の勢を率して、木目峠を打越て、敦賀津より向はる。鹽冶判官高貞は、船路の大將として、出雲伯耆の勢を率して、兵船三百艘を調へ、三方の寄手の相近附んとする比、津々浦々より上て、敵の後を襲、陣のあはひを隔て、戰を機變の間に致すべしと、合圖を堅く定らる。陸地三方の大將已に京を立て、分國の軍勢を催しければ、鹽冶も我國へ下て、其用意を致さんとしける最中に、不慮の事出來て、高貞忽に武藏守師直が爲に討れにけり。其宿意何事ぞと尋れば、高貞多年相馴たりける女房を、師直に思懸られて、無謂討れけるとぞ聞えし。其比師直ちと違例の事有て、且出仕をもせで居たりける間、重恩の家人共、是を

午角―互に優劣なきをいふ
後攻―後詰なり、先陣に代るべく後に詰める軍勢

方に屬して、黑丸城に在けるが、大將尾張守高經の前に來て申けるは、此城は先年新田殿の攻られしに、不思議の御運に依て、打勝せ給しに御習候て、猶仔細あらじと思召候はんには、疎なる御計にて候べし。其故は先年此所へ向候し敵共、皆東國西國の兵にて、不知案内に候し間、深田に馬を馳こみ、堀溝に陷て、遂に名將流矢の鏑に懸り候き。今は御方に候つる者共が、多く敵に成て候間、寄手も城の案内は能存知候。其上畑六郎左衞門と申て、日本一の大力の剛者、命を此城に向て止めんと思定て向候なる。恐くは今時の御方に、誰か是と午角の合戰をし候べき。後攻もなき平城に、名將の小勢にて御籠候て、命を失はせ給はん事、口惜かるべき御計にて候。唯今夜の中に加賀國へ引退せ給て、京都の御勢下向の時、力を合せ兵を集て、却て敵を御退治候はんに、何の仔細か候べきとぞ申ける。細川出羽守、鹿草兵庫助、淺倉、齋藤等に至まで、皆此議に同じければ、尾張守高經、五の城に火を懸て、其光を松明に成て、夜の間に加賀國富樫が城へ落給ふ。畑が謀を以て、義助黑丸城を落してこそ、義貞の討れ給し會稽の恥をば雪ける。

牒せられし文通ありし意

敵を平げ、他國に打越べき由を、大將義助の方より牒せられければ、七月二日に、畑六郎左衛門三百餘騎にて、湊城を出て、金津、長崎、河合、河口、あるゆる所の敵の城十二箇所を打落て、首を斬事八百餘人、女童三歳の嬰兒迄、のこさず是を刺殺す。同五日に由良越前守光氏、五百餘騎にて、西方寺城より出て、和田、江守、波羅密、深町、安居の庄内に、敵の嚴く構へたる六箇所の城を二日に攻落し、則御方の勢を入替て、六箇所の城を守らしむ。同五日堀口兵部大輔氏政、五百餘騎にて、居山城より出て、香下、鶴澤、穴間、河北、十一箇所の城を五日が中に攻落して、降人千餘人を引率し、河合庄へ出合る。惣大將脇屋刑部卿義助は、禰津、風間、瓜生、川島、宇都宮、江戸、波多野が勢三千餘騎の將として、國府より三手に分て、織田、田中、荒神峯、安居渡城十七箇所を、三日三夜に攻落して、其城の大將七人虜り、士卒五百餘人を誅して、河合庄へ打出らる。同十六日四方の官軍一所に相集て、六千餘騎三方より黒丸を相夾て、未戰、河合孫五郎種經、降人に成て畑に屬す。其勢を率して、夜半に足羽の乾なる小山の上に打上て、終夜城の四邊を打廻り、關を作り遠矢を射懸て、後陣の大勢集らば、一番に城に攻入んと、勢を見せて待明す。爰に上木平九郎家光は、元は新田左中將の兵にて有しが、近來將軍

冢宰—宰相などいふ程の義

中陰—人の死後四十九日の間をいふ

上、君崩じ給たる後、百官冢宰に任て、三年政を聞召れぬ事なれば、萬機悉く北畠大納言の計として、洞院左衛門佐實世、四條中納言隆資卿、二人専諸事を被執奏。同十二月先北國にある脇屋刑部卿義助朝臣の方へ綸旨を被成。先帝御遺勅異于他、上は、不替故義貞之例、官軍恩賞以下の事相計て、可經奏聞之由被宣下。其外筑紫の西征將軍宮、遠江井伊城に御座ある妙法院、奥州新國司顯信卿の方へも、任舊主遺勅、殊に可被致忠戰之由、綸旨をぞ下されける。義助は義貞討れし後、勢微也といへども、所々の城郭に軍勢を籠置、さまでは敵に挟められざりければ、何まで斯ても有べきぞ。城々の勢を一に合て、黒丸城に楯籠られたる尾張守高經を攻落さばやと評定有ける處に、先帝崩御の御事を承て惘然たる事、暗夜に燈を失へるが如し。さは有ながら、御遺勅他に異なる宣旨の忝さに、忠義彌心肝に銘じければ、如何にもして一戰に利を得、南方祇候の人々の機をも扶ばやと、御國忌の御中陰の過を遲とぞ相待ける。此兩三年越前の城三十箇所相交て、合戰の止日なし。中にも湊城とて、北陸道七箇國の勢共が終に攻落さゞりし城は、義助の若黨畑六郎左衛門時能が、僅二十三人にて籠たりし平城也。南帝御卽位の初、天運圖に膺る時なるべし。諸卒同城を出て、一所に集り、當國の朝

伶倫—樂人

悠紀主基—大嘗會の時に天神地祇を祭る殿の名

御時、樣々の大禮有べし。先新帝受禪の日、三種神器を被傳て、御卽位の儀式あり。其明年の三月に、卜部宿禰陰陽博士、軒廊にして國郡を卜定す。則行事所始ありて、百司千官次第の神事を執行る。同年の十月に、東の河原に幸成て、御禊あり。又神泉苑の北に、齋廳所を作て、舊主一日拔穗を御覽ぜらる。龍尾堂を立られ、壇上にして御行水有て、回立殿を建、新帝大嘗宮に行幸あり。其日殊に堂上の伶倫、正始の曲を調て、一たび雅音を奏すれば、堂下の舞人、小忌の衣を袒て、五たび袖を翻す、是を五節の淵醉と云。其後大嘗宮に行幸成て、大牲の祭を行る程に、悠紀主基風俗の歌を唱て、帝德を稱し、童女八乙女稻舂の歌を歌て、神饌を獻る。是皆代々の儲君、御位を天に繼せ給ふ時の例なれば、三載數度の大禮、一も缺ては有べからずといへども、洛外山中の皇居、事可周備にあらざれば、如形三種神器を拜せられたる計にて、新帝位に卽せ給。

○任遺勅被成綸旨事　附義助攻落黑丸城事

同十一月五日、南朝の群臣相議して、先帝に尊號を獻る。御在位の間、風教多は延喜の聖代を被追しかば、尤其寄有とて、後醍醐天皇と諡し奉る。新帝幼主にて御座有る

擧げて相となす

造次にも―かりそめの場合にも

楠帶刀―正行なり

は、筑紫に菊池、松浦鬼八郎、草野、山鹿、土肥、赤星、四國には土居、得能、江田、羽床、淡路に阿間、志宇知、安藝に有井、石見には三角入道、合四郎、出雲伯耆に長年が一族共、備後には櫻山、備前に今木、大富、和田、兒島、播磨に吉川、河内に和田、楠、橋本、福塚、大和に三輪の西阿、眞木の寶珠丸、紀伊國に湯淺、山本、井遠三郎、加藤太郎、遠江には井伊介、美濃に根尾入道、尾張に熱田大宮司、越前には小國、池、風間、禰津越中守、太田信濃守、山徒には南岸の圓宗院、此外泛々の輩は數に不レ遑。皆義心金石の如にして、一度も變ぜぬ者共也。身不肖に候へども、宗信右て候はん程は、當山に於て、又何の御怖畏か候べき。何樣先御遺勅に任て、繼體の君を御位に即進せ、國々へ綸旨を成下れ候へかしと申ければ、諸卿皆げにもと思れける處に、又楠帶刀、和田和泉守二千餘騎にて馳參り、皇居を守護し奉て、誠に他事なき體に見えければ、人々皆退散の思を翻て、山中は無爲に成にけり。

○南帝受禪事

同十月三日大神宮に奉幣使を下され、第七の宮天子の位に即せ給ふ。夫繼體君登極の

南山の歌―琴操に、甯戚牛に車下に飯せしめ牛角を叩いて歌ひて曰く、南山粲粲白石爛爛、中有ニ鯉魚一長尺有半、生不ㇾ逢ニ堯與ㇾ舜一、短布單衣纔至ㇾ骭、從ㇾ昏飯ㇾ牛至ニ夜半一、長夜漫漫何時旦。齊の桓公之を聞き

望を達せぬ事は非じと、人皆憑をなしけるが、君の崩御なりぬるを見進て、今は御裳濯河の流の末も絶はて、筑波山の陰に寄人も無て、天下皆魔魅の掌握に落る世に成んずらめと、あぢきなく覺えければ、多年附纏進らせし卿相雲客、或は東海の波を蹈で、仲連が跡を尋ね、或は南山の歌を唱て、甯戚が行を學んと、思々に身の隱家をぞ求給ける。爰に吉野執行吉水法印宗信、潛に此形勢を傳聞て、急ぎ參内して申けるは、先帝崩御の刻被ㇾ遺ニ遺勅一、第七の宮を御位に卽進せ、朝敵追罰の御本意を可ㇾ被ㇾ遂と、諸卿親綸言を含せ給し事也。未日を經ざるに、退散隱遁の御企有と承及候こそ心えがたく存候へ。異國の例を以、我朝の今を計ひ候に、文王草昧の主として、武王周の業を起し、高祖崩じ給て後、孝景漢の世を保候はずや。今一人萬歲を早し給ふとも、舊勞の輩其功を捨て、敵に降んと思者は有べからず。就ㇾ中世の危を見て、彌命を輕ぜん官軍を數ふるに、先上野國に新田左中將義貞の次男左兵衛佐義興、武藏國に其家嫡左少將義宗、越前國に脇屋刑部卿義助、同子息左衛門佐義治、此外江田、大館、里見、鳥山、田中、羽河、山名、桃井、額田、一井、金谷、堤、青龍寺、青襲、小守澤の一族都合四百餘人、國々に隱謀し、所々に楯籠る。造次にも忠戰を不ㇾ計と云事なし。他家の輩に

北辰—北斗星、論語に北辰居ニ其所一而衆星共レ之とあり、天子の位をいふ

後は、第七の宮を天子の位に卽奉て、賢士忠臣事を圖り、義貞義助が忠功を賞して、子孫不義の行なくば、股肱の臣として天下を鎭べし。思レ之故に、玉骨は縱南山の苔に埋るとも、魂魄は常に北闕の天を望んと思ふ。若命を背義を輕ぜば、君も繼體の君に非ず、臣も忠烈の臣に非じと、委細に綸言を遺されて、左の御手に法華經の五卷を持せ給、右の御手には御劍を按て、八月十六日の丑刻に、遂に崩御成にけり。悲哉北辰位高して、百官星の如に列と雖も、九泉の旅の路には、供奉仕る臣一人もなし。奈何せん、南山地僻にして、萬卒雲の如に集といへ共、無常の敵の來をば、禦止る兵更になし。唯中流に船を覆て、一壺の浪に漂ひ、暗夜に燈消て、五更の雨に向が如し。葬禮の御事、兼て遺勅有しかば、御終焉の御形を改めず、棺槨を厚し、御座を正して、吉野山の麓、藏王堂の艮なる林の奥に、圓丘を高く築て、北向に奉レ葬。寂寞たる空山の裏、鳥啼日已暮ぬ。土墳數尺の草、一徑涙盡て愁未レ盡。舊臣后妃泣々鼎湖の雲を瞻望して、恨を天邊の月に添へ、覇陵の風に夙夜して、別を夢裏の花に慕ふ、哀なりし御事也。天下久く亂に向ふ事は、末法の風俗なれば、暫言に不レ足。延喜天曆より以來、先帝程の聖主神武の君は未おはしまさゞりしかば、何と無共、聖德一たび開て、拜趨忠功の

延元三年―天正本四年に作る、諸本を按ずるに可なるが如し

晏駕―天子の崩御をいふ

三明の覺路―一は過去、二は未來、三は現在十方のすべての事を明知す

○先帝崩御事

南朝の年號延元三年八月九日より、吉野の主上御不豫の御事有けるが、次第に重らせ給ふ。醫王善逝の誓約も、祈に其驗なく、耆婆扁鵲が靈藥も、施すに其驗おはしまさず。玉體日々に消て、晏駕の期遠からじと見え給ければ、大塔忠雲僧正、御枕に近附奉て、涙を押へ申されけるは、神路山の花再び開る春を待、石淸水の流遂に澄べき時あらば、さりとも佛神三寶も捨進せらるゝ事は、よも候はじとこそ存候つるに、御脈已に替せ給て候由、典藥頭驚申候へば、今は偏に十善の天位を捨て、三明の覺路に赴せ給ふべき御事をのみ、思召被定候べし。さても最後の一念に依て、三界に生を引くと、經文に說れて候へば、萬歲の後の御事、萬叡慮に懸り候はん事をば、悉く仰置れ候て、後生善所の望をのみ、叡心に懸られ候べしと申されたりければ、主上苦げなる御息を吐せ給て、妻子珍寶及王位臨命終時不隨者、是如來の金言にして、平生朕が心に有し事なれば、秦穆公が三良を埋み、始皇帝の寶玉を隨へし事、一も朕が心に取す。唯生々世世の妄念共なるべきは、朝敵を悉亡して、四海を令泰平と思計也。朕卽早世の

說に大地の厚さ一百六十萬由旬ありといふ其最下地の稱

曼荼羅ー輪圓具足して缺けたる事なきをいふ

ば、煙の上に或は鬼形なる者火を諸堂に吹かけ、或は天狗の形なる者、松明を振上て、塔の重々に火を附けるが、金堂の棟木の落るを見て、一同に手を拍どつと笑て、愛宕、大嶽、金峯山を指て去と見えて、暫あれば花頂山の五重の塔、醍醐寺の七重の塔、同時に燒ける事こそ不思議なれ。院は二條河原まで御幸成て、法滅の煙に御胸を焦され、將軍は西門の前に馬を控られて、回祿の災に世を危めり。抑此寺と申は、四海の泰平を祈て、殊に百王の安全を得せしめん爲に、白河院御建立有し靈地也。されば堂舍の構、善盡し美盡せり。本尊の錺は金を鏤め玉を琢く。中にも八角九重の塔婆は、横竪共に八十四丈にして、重々に金剛九會の曼荼羅を安置せらる。其奇麗崔嵬なることは、三國無雙の鴈塔也。此塔婆始て造出されし時、天竺の無熱池、震旦の昆明池、我朝の難波浦に、其影明に寫て見えける事こそ奇特なれ。かゝる靈德不思議の御願所、片時に燒滅する事、偏に此寺計の荒廢には有べからず。唯今より後彌天下不靜して、佛法も王法も有て無が如にならん。公家も武家も共に衰微すべき前相を、兼て呈す物也と、歎ぬ人は無りけり。

其弟四郎左衛門は、大和内郡にて野伏共に殺れぬ。嫡孫近江判官秀詮、舍弟次郎左衛門二人は、攝津國神崎の合戰の時、南方の敵に誅せられにけり。司馬の家なれば、本意とは申ながら、是等は皆醫王山王の冥見に懸られし故にてぞ有らんと、見聞の人舌を彈して、懼れ思はぬ者は無りけり。

○法勝寺塔炎上事

康永元年三月廿日に、岡崎の在家より、俄に失火出來て、軈て燒靜りけるが、纔なる細煙一つ、遙に十餘町を飛去て、法勝寺の塔の五重の上に落留る。暫が程は燈籠の火の如にて、消もせず燃もせで見えけるが、寺中の僧達身を揉て、周章迷けれ共、上べき梯もなく、打消べき便も無れば、唯徒に虛をのみ見上て、手を撥てぞ立れたりける。さる程に此細煙乾たる檜皮に燒附て、黑煙天を焦て燒上る。猛火雲を卷て翻る色は、悲想天の上までも上り、九輪の地に響て落る聲は、金輪際の底迄も聞やすらんと夥し。飆風頻に吹て、餘煙四方に覆ければ、金堂、講堂、阿彌陀堂、鐘樓、經藏、惣社宮、八足の南大門、八十六間の迴廊、一時の程に燒失て、灰燼忽地に滿り。燒ける最中外より見れ

悲想天―欲界の六欲天を打過て色界に十八の天あり其上に無色界の四空所とて四天あり其最上の極の天なり

金輪際―佛

五刑―笞、杖、徒、流、死、
西光―俗名 師光
西景―俗名 成景

停廢し、末寺末社の門戸を閉て祭禮を打止。山門の安否、天下の大事、此時にありとぞ見えたりける。武家もさすが山門の嗷訴難ニ默止一覺ければ、道譽が事死罪一等を減じて、遠流に可レ被ニ處斷一と奏聞しければ、則院宣を成れ、山門を宥らる。前々ならば、衆徒の嗷訴は是には惣て休るまじかりしか共、折節にこそよれ、五刑の其一を以て、山門に理を附らるゝ上は、神訴眉目を開けるに似たりと、宿老是を宥て、四月十二日に、三社の神輿を御歸座成し奉て、同二十五日道譽秀綱が配所の事定て、上總國山邊郡へ流さる。道譽近江の國分寺迄、若黨三百餘騎打送の爲にとて、前後に相從ふ。其輩悉猿皮を靫にかけ、猿皮の腰當をして、手毎に鶯籠を持せ、道々に酒肴を設て、宿々に傾城を弄ぶ。事の體尋常の流人には替り、美々敷ぞ見えたりける。是も唯公家の成敗を輕忽し、山門の鬱陶を嘲哢したる行跡也。聞ずや、古より山門の訴訟を負たる人は、十年を過ざるに、皆其身を滅すといひ習せり。治承には新大納言成親卿、西光、西景、康和には後二條關白、其外泛々の輩は不レ可ニ勝計一されば是も如何有んずらんと、智ある人は眼を注て怪み見けるが、果して文和三年の六月十三日に、持明院新帝、山名左京大夫時氏に被レ襲、江州へ臨幸成ける時、道譽が嫡子源三判官秀綱、堅田にて山法師に討る。

源三判官—秀綱なり

斷罪—斬罪

塔頭、瑞光庵同時に皆燒上る。門主は御行法の最中にて、持佛堂に御座有けるが、御心早く後の小門より徒跣にて、光堂の中へ迯入せ給ふ。御弟子の若宮は、常の御所に御座有けるが、板敷の下へ迯入せ給ひけるを、道譽が子息源三判官走懸て打擲し奉る。其外出世坊官兒侍法師共、方々へ迯散ぬ。夜中の事なれば、閧聲京白河に響き渡りつゝ、兵火四方に吹覆。在京の武士共、こは何事ぞと遽騷で、上下に馳違ふ、事の由を聞定て後に馳歸りける人毎に、あなあさましや、前代未聞の惡行哉。山門の嗷訴今に有なんと云ぬ人こそ無りけれ。山門の衆徒此事を聞て、古より今に至まで、喧嘩不慮に出來る事多しといへども、未門主貫頂の御所を燒拂ひ、出世坊官を面縛する程の事を聞ず。早道譽秀綱を賜て、死罪に可ㇾ行由を公家へ奏聞し、武家に觸れ訴ふ。此門主と申も、正き仙院の連枝にて御座有れば、道譽が行跡無念の事に憤り思召て、あはれ斷罪流刑にも行せばやと思召けれ共、公家の御計としては、難ㇾ叶折節なれば、無ㇾ力武家へ被ㇾ仰處に、將軍も左兵衛督も飽まで道譽を被ㇾ贔屓ける間、山門は理訴も疲し、款狀徒に積り、道譽は法禁を輕じて、奢侈彌恣にす。依ㇾ之、嗷議の若輩大宮八王子の神輿を中堂へ上奉て、鳳闕へ入れ奉れと僉議す。則諸院諸堂の講筵を打停め、御願を

霜葉紅―杜牧が詩に停レ車坐愛楓林晩、霜葉紅二於二月花一

○佐渡判官入道流刑事

此比殊に時を得て、榮耀人の目を驚しける佐々木佐渡判官入道道譽が一族若黨共、例のばさらに風流を盡して、西郊東山の小鷹狩して歸りけるが、妙法院の御前を打過るとて、跡にさがりたる下部共に、南庭の紅葉の枝をぞ折せける。折節門主御簾の内よりも、暮なんとする秋の氣色を御覽ぜられて、霜葉紅二於二月花一と、風詠閑吟して、興ぜさせ給ひけるが、色殊なる紅葉の下枝を、不得心なる下部共が、引折りけるを御覽ぜられて、人やある、あれ制せよと仰られける間、坊官一人庭に立出て、誰なれば御所中の紅葉をば、さやうに折ぞと制しけれ共、敢て不二承引一、結局御所とは何ぞ。かたはらいたの言やなんど嘲哢して、彌尙大なる枝をぞ引折ける。折節御門徒の山法師、あまた宿直して候けるが、惡い奴原が狼藉哉とて、持たる紅葉の枝を奪取、散々に打擲して門より外へ追出す。道譽聞レ之、如何なる門主にてもおはせよ、此比道譽が内の者に向て、左樣の事ふるまはん者は覺ぬ物をと忿て、自ら三百餘騎の勢を率し、妙法院の御所へ押寄て、則火をぞ懸たりける。折節風烈く吹て、餘煙十方に覆ければ、建仁寺の輪藏開山塔竝

三家―閑院花山院中院の三家也

五門の曲阜―五攝家、近衛九條二條一條鷹司をいふ

納言宰相なんど―此句以下二十一字、見ても以下十九字異本に據りて補へり。

九霄の雲を望で、唯時の變有ん事を待計也。天下の危かりし時だにも、世の譏をも不レ知、侈を究め欲を恣にせし大家の氏族、高上杉の黨類なれば、能なく藝なくして、亂階不次の賞に與り、例に非ず法に非して、警衞判斷の職を司る。初の程こそ朝敵の名を憚て、每事天慮を仰ぎ中體にて有しが、今は天下唯武德に歸して、公家有て何の用にか立べきとて、月卿雲客諸司恪勤の所領は云に及ず、竹園椒房禁裏仙洞の御領までも、武家の人押領しける間、曲水重陽の宴も絕はて、白馬踏歌の節會も行れず、如レ形儀計也。禁闕仙洞さびかへり、參仕拜趨の人も無りけり。況や朝廷の政、武家の計に任て有しかば、三家の台輔も、奉行頭人の前に媚を成し、五門の曲阜も、執事侍所の邊に賄ふ。されば納言宰相なんどの言を聞ても、心得がたの疊字やと欺き、廷尉北面路次に行合たるを見ても、あはや例の長袖垂たる魚板烏帽子よといひ、聲を學び指を差て輕慢しける間、公家の人々、いつしか云も習はぬ坂東聲をつかひ、著もなれぬ折烏帽子に額を顯して、武家の人に紛んとしけれ共、立振舞る體さすがになまめいて、額附の跡以外にさがりたれば、公家にも不レ附、武家にも不レ似、唯都鄙に步を失し人の如し。

太平記下巻

巻第二十一

○天下時勢粧事

暦應元年の末に、四夷八蠻悉く王化を助て、大軍同時に起しかば、今ははや聖運啓ぬと見えけるに、北畠顯家卿、新田義貞、共に流矢の爲に命を隕し、剰へ奥州下向の諸卒、渡海の難風に放れて、行方知ずと聞えしかば、世間さてとや思けん、結城上野入道が子息大藏少輔も、父が遺言を背て、降人に出ぬ。芳賀兵衛入道禪可も、主の宇都宮入道が子息加賀壽丸を取籠て、將軍方に屬し、主從の禮儀を亂り、己が威勢を恣にす。此時新田の氏族尚殘て城々に楯籠り、竹園の連枝時を待て國々に御座有といへ共、猛虎の檻に籠り、窮鳥の翅を鎩れたるが如に成ぬれば、涙眼空く百歩の威を闔、悲心遠く

大藏少輔―親朝をいふ

渡二四國一事……五三八
可レ立二大將一事　附漢楚立二義帝一事……五四〇
尾張左衛門佐遁世事……五四二
身子聲聞一角仙人志賀寺上人事……五四三
畠山入道道誓謀叛事　附楊國忠事……五四八

卷第三十八

慧星客星事　附湖水乾事……五六一
諸國宮方蜂起事　附備前軍事……五六二
九州探題下向事　附李將軍陣中禁レ女事……五六九
菊池大友軍事……五七一
畠山兄弟修禪寺城楯籠事　附遊佐入道事……五七三
細川相摸守討死事　附西長尾軍事……五七六
和田楠與二箕浦次郎左衛門一軍事……五八三
大元軍事……五八七

卷第三十九

大内介降參事……五九七
山名京兆被レ參二御方一事……五九九
仁木京兆降參事……六〇〇
芳賀兵衛入道軍事……六〇〇
神木入洛事　附洛中變異事……六〇八
諸大名讒二道朝一事　附道譽大原野花會事……六一一
神木御歸座事……六一七
高麗人來朝事……六一九
自二大元一攻二日本一事……六二一
神功皇后攻二新羅一給事……六二六
光嚴院禪定法皇行脚御事……六二九
法皇御葬禮事……六三五

卷第四十

中殿御會事……六三九
左馬頭基氏逝去事……六四七
南禪寺與二三井寺一確執事……六四七
最勝講之時及二闘諍一事……六四八
將軍薨逝事……六五〇
細川右馬頭自二東國一上洛事……六五一

公家武家榮枯易レ地事…………四〇四
將軍御逝去事…………四〇六
新待賢門院　附梶井宮御隱事…………四〇八
崇德院御事…………四〇九
菊池合戰事…………四一〇
新田左兵衛佐義興自害事…………四一七

卷　第三十四

宰相中將殿賜二將軍宣旨一事…………四二一
畠山道誓上洛事…………四三二
和田楠軍評定事　附諸卿分散事…………四三五
新將軍南方進發事　附軍勢狼藉事…………四三七
紀州龍門山軍事…………四四一
二度紀伊國軍事　附住吉楠折事…………四四四
銀嵩軍事　附曹娥精衛事…………四四八
龍泉寺軍事…………四五三
平石城軍事　附和田夜討事…………四五五
吉野御廟神靈事　附諸國軍勢、
還二京都一事…………四五九

卷　第三十五

新將軍歸洛事　附擬レ討二仁木義長一事…………四六三
京勢重南方發向事　附仁木沒落事…………四六五
南方蜂起事　附畠山關東下向事…………四七一
北野通夜物語事　附青砥左衛門事…………四七四
尾張小河東池田事…………四九七

卷　第三十六

仁木京兆參二南方一事　附太神宮御
託宣事…………五〇一
大地震竝夏雪事…………五〇五
天王寺造營事　附京都御祈禱事…………五〇七
山名伊豆守落二美作城一事　附菊池軍事…………五一〇
秀詮兄弟討死事…………五一四
清氏叛逆事　附相摸守子息元服事…………五一七
頓宮心替事　附畠山道誓事…………五二五

卷　第三十七

清氏正儀寄レ京事…………五三一
新將軍京落事…………五三二
南方官軍落レ都事…………五三六
持明院新帝自二江州一還幸事　附相州

松岡城周章事……二七四
師直師泰出家事　附藥師寺遁世事……二七七
師冬自害事　附諏訪五郎事……二八〇
師直以下被ㇾ誅事　附仁義血氣勇者事　二八二

卷　第三十

將軍御兄弟和睦事　附天狗勢汰事……二八九
高倉殿京都退去事　附殷紂王事……二九一
直義追罰宣旨事　附鴨社鳴動事……二九七
薩埵山合戰事……二九八
慧源禪門逝去事……三〇四
吉野殿與二相公羽林一御和睦事
　附住吉松折事……三〇五
相公江州落事……三一二
持明院殿吉野遷幸事　附梶井宮事……三一三

卷　第三十一

新田起二義兵一事……三一九
武藏野合戰事……三二五
鎌倉合戰事……三三一
笛吹峠軍事……三三四
八幡合戰事　附官軍夜討事……三三九
南帝八幡御退失事……三四六

卷　第三十二

茨宮御位事……三五一
無二劔璽一御即位無ㇾ例事　附院御所
　炎上事……三五二
山名右衞門佐爲ㇾ敵事　附武藏將監
　自害事……三五四
主上義詮沒落事　附佐々木秀綱討死事三六一
山名伊豆守時氏京落事……三六四
直冬與二吉野殿一合體事　附天竺震旦
　物語事……三六五
直冬上洛事　附鬼丸鬼切事……三七三
神南合戰事……三七九

卷　第三十三

京軍事……三九一
八幡御託宣事……三九八
三上皇自二吉野一御出事……四〇〇
飢人投ㇾ身事……四〇一

卷第二十六

正行參二吉野一事……一四五
四條繩手合戰事　附上山討死事……一四八
楠正行最期事……一五九
吉野炎上事……一六二
賀名生皇居事……一六五
執事兄弟奢侈事……一六六
上杉畠山讒二高家一事　附廉頗藺相如事……一七〇
妙吉侍者事　附秦始皇帝事……一七八
直冬西國下向事……一八六

卷第二十七

天下妖怪事　附清水寺炎上事……一八九
田樂事　附長講見物事……一九〇
雲景未來記事……一九五
左兵衛督欲レ誅二師直一事……二〇三
御所を圍事……二〇六
右兵衛佐直冬鎭西沒落事……二一一
左馬頭義詮上洛事……二一二
直義朝臣隱遁事　附玄慧法印末期事……二一三
上杉畠山流罪死刑事……二一五
大嘗會事……二一九

卷第二十八

義詮朝臣御政務事……二二一
太宰少貳奉レ聟二直冬一事……二二一
三角入道謀叛事……二二三
直冬朝臣蜂起事　附將軍御進發事……二二六
錦小路殿落二南方一事……二二八
自二持明院殿一被レ成二院宣一事……二二九
慧源禪巷南方合體事　附漢楚合戰事……二三〇

卷第二十九

宮方京攻事……二五一
將軍上洛事　附阿保秋山河原軍事……二五四
將軍親子御退失事　附井原石窟事……二五九
越後守自二石見一引返事……二六二
光明寺合戰事　附師直怪異事……二六五
小清水合戰事　附瑞夢事……二六八

太平記下卷目錄

卷第二十一

天下時勢粧事……一
佐渡判官入道流刑事……三
法勝寺塔炎上事……六
先帝崩御事……八
南帝受禪事……一一
任遺勅被成綸旨事　附義助攻落黑丸城事……一二
鹽冶判官讒死事……一六

卷第二十二

畑六郞左衞門事……三五
義助被參芳野事竝隆資物語事……四一
佐々木信胤成宮方事……四六
義助豫州下向事……四九
義助朝臣病死事　附鞆軍事……五二
大館左馬助討死事　附篠塚勇力事……五七

卷第二十三

大森彥七事……六一
就直義病惱上皇御願書事……七二
土岐賴遠參合御幸致狼藉事　附雲客下車事……七五

卷第二十四

朝儀年中行事事……八一
天龍寺建立事……八四
依山門嗷訴公卿僉議事……八六
天龍寺供養事　附大佛供養事……一〇六
三宅荻野謀叛事　附壬生地藏事……一一四

卷第二十五

持明院殿御卽位事　附仙洞妖怪事……一一九
宮方怨靈會六本杉事　附醫師評定事……一二〇
藤井寺合戰事……一二四
自伊勢進寶劔事　附黃粱夢事……一二六
住吉合戰事……一三九

PL
710
T3
1912
v. 2

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

LIBRARY
AUG 4 - 1970
UNIVERSITY OF TORONTO

太平記

下巻

PL
790
T3
1912
v.2

Taiheiki
Taiheiki

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

有朋堂文庫